

仙台市文化財調査報告書第323集

若林城跡

—第5次発掘調査報告書—

2008年3月

仙台市教育委員会

若林城跡－第5次発掘調査報告書－ 正誤表

頁	行	誤	正
写真図版目次	1頁目右・4行	遺溝	遺構
	6頁目右・3行		
	6頁目右・5行	図版	写真図版
	6頁目右・8行		
	6頁目右・10行		
21	28行	グライ化するのの	グライ化するものの
26	9行	偏平亜円錐	円錐
58	6行	角切	隅切
232	2行	ナデ調整とコビキ痕	ナデ調整
243	4行	瓦頭部	瓦当部
266	5段目	15.1号瓦・礫集石遺溝	15.1号瓦・礫集石遺構

仙台市文化財調査報告書第323集

若林城跡

—第5次発掘調査報告書—

2008年3月

仙台市教育委員会



若林城跡全景（南西から）



若林城の遺構群（東から）



若林城跡出土の滴水瓦



出土した瓦の文様

序 文

若林城は現在の仙台市発展の基礎を築いた仙台藩祖 伊達政宗公が仙台城築城の後に造営し、晩年を過ごした城です。「若林」の名は政宗が名付けたとされ、その名は区名にもなっていることから、市民にとっては特別な遺跡と言えるでしょう。しかし城跡はその特殊な立地から、かつての城がどのようなものであったかを明らかにするのは容易ではなく、またその遺構は後世の施設建設などにより既に失われたと考えられていました。

そのような中、矯正施設の老朽化と収容者の急増という全国的な流れにより、平成16年に宮城刑務所の全体改築計画が持ち上がりました。若林城の遺構を初めて発見した第4次調査に続いて実施した今回の調査では、複数の建物跡や石敷遺構が確認され、これらが城の表御殿の一部と判明するに至りました。江戸初期の城の御殿建物をこれほどまとまって発見した例は全国的にみてもほとんど無く、晩年の政宗の生活のみならず、近世城郭研究上においても大なる成果があがつたといえます。この成果を受け、仙台市教育委員会は宮城刑務所をはじめ、法務省、文化庁、宮城県教育委員会と遺構の保存を前提とした協議を重ねました。その結果、建物の基礎構造の変更により、若林城の遺構は壊されること無く保存される事となり、今後実施される調査でも同様の方法により将来にわたり遺構の保存が図られることが確認されました。

仙台市民のみならず、国民の伊達政宗への関心は高く、本市としましては当面の目標として、若林城跡を仙台城跡と同様に国史跡の指定を目指し努力する所存です。今後の調査ではさらなる城の性格解明と共に、現地説明会の開催や様々な場での遺跡の紹介など、より多くの市民の皆様に興味を持っていただけるような活動も行っていきたいと考えております。そのためにも本報告書が研究者のみならず市民の皆様にも幅広く活用されることで、文化財保護活動と新たな郷土の理解への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査ならびに報告書の刊行に際し、ご協力を賜りました宮城刑務所をはじめ多くの方々や、遺構の保存にご尽力いただきました法務省、文化庁、仙台矯正管区、宮城県教育委員会に対し、深く感謝申し上げる次第です。

平成20年3月

仙台市教育委員会
教育長 荒井 崇

例　　言

1. 本書は平成17年度に実施した宮城刑務所全体改築計画に伴う若林城跡第5次発掘調査の成果を記録した調査報告書である。第5次調査においては平成16年度に実施した第4次調査区の一部も含まれており、本書の内容は既に刊行している『若林城跡 第4次発掘調査報告書』の内容に優先するものである。
2. 発掘調査の成果は既に報道発表など各種刊行物などに公表されているが、本書の内容がこれら全てに優先するものである。
3. 本書を作成した平成19年度には、同時に第8次調査も行なわれており、本書では第8次調査で得た新たな知見も加えている。
4. 発掘調査は仙台市教育委員会の指導監督のもと、株式会社バスコが実施した。
5. 出土遺物の整理作業や各種資料の作成、本書の作成作業は仙台市文化財課調査係 佐藤淳の指導監督のもと、株式会社バスコ 佐藤好司・後藤太一・播磨大輔・岩瀬菜穂が行った。
6. 本書の編集は佐藤淳・佐藤好司が行い、本書の執筆は下記のとおり分担した。

佐藤淳	第1章1節、第2章3・4節、第3章2節(2)・(3)、第7章、第8章
佐藤好司	第1章2節、第2章1・2節、第3章1・2(1)・3節、第4章、第5章1節～4節、第7章1・2節、第8章
後藤太一	第3章3節、第5章5節、第7章3節
高梨雅幸	第7章3節(1)
7. 陶磁器ほかについては仙台市博物館（現在は仙台市文化財課）佐藤洋氏に実見していただきご教示を得た。また越前窯の陶器については福井県陶芸館 田中照久氏に実見していただきご教示を得た。
8. プラント・オパールおよび花粉分析の自然科学分析については株式会社 古環境研究所に委託した。
9. 発掘調査および報告書作成に際し、次の方々と機関から多くなご指導・ご協力をいただいた。記して感謝する。
(敬称略・順不同・所属は当時)
山崎秀保 坂井秀弥（文化庁記念物課）、加藤道男 真山 恒 後藤秀一 佐藤則之 佐藤憲幸（宮城県文化財保護課）、大橋広好 飯瀬康一 今泉隆雄 須藤 隆（東北大学）、平川 新（東北大学東北アジア研究センター）、藤沢 敦 柴田恵子 高木暢亮（東北大学埋蔵文化財調査センター）、千葉正樹（東北大学図書館）、岡田清一（東北福祉大学）、斎藤銳雄（宮城県農業短期大学）、西 和夫（神奈川大学）、千田嘉博（奈良大学）、北垣應一郎（奈良県立橿原考古学研究所）、佐藤 洋 高橋あけみ 菅野正道 斎藤 潤（仙台市博物館）、田中則和（仙台市宮沢遺跡保管館）、鈴木裕子（株式会社四門）、佐藤 巧（東北大学名誉教授）、鈴木 啓（福島県考古学会）、福尾正彦（宮内庁書陵部）、田中照久（福井県陶芸館）、新野一浩（瑞巖寺宝物館）、法務省仙台矯正管区、宮城刑務所、宮内庁書陵部、宮城県図書館、東北大大学、瑞巖寺、財団法人斎藤報恩会、仙台市博物館、株式会社イビソク
10. 発掘調査や報告書作成時の図面・写真・出土遺物などの資料や諸記録は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

- 第3図は平成14年6月1日国土地理院発行の5万分の1地形図「仙台」を、第6・7・8・150図は法務省大臣官房施設課作成の「宮城刑務所敷地調査平面図」(500分の1)を、第4図は仙台市都市計画基本図(平成10年)をそれぞれ修正して使用した。
- 土層注記に記載した土色は農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』1999年版に基づいた。
- 調査の際の平面座標基準は世界測地系平面直角座標第X系に準拠し、標高値はT.P. (東京湾平均海面) を用いた。
- 本書に使用した遺構図版縮尺は、遺構全体配置図が1:100・1:200・1:300、個別遺構平面図・断面図が1:30・1:60、壁面断面図が1:25としている。また図版方位は遺構全体図および建物跡などの全体図については、若林城の軸方位のN-11°-Wに合わせており、その他のものについては座標北に合わせている。
- 本書に使用した遺物図版縮尺は、瓦が1:5、土器類・陶磁器類・金属製品・石製品が1:3、石器が1:2、銅錢が1:1を原則としている。

6. 遺 構

- ・遺構名については以下の略号を使用し、後に続く番号は遺構種別毎の連番とした。これに伴い第4次調査1区検出の遺構については、今回新たに遺構番号を振り直している。
S A : 墓跡 S B : 硫石建物跡 S K : 土坑 S D : 溝跡 P : ピット 小溝群：小溝状遺構群
集石：集石遺構
- ・土層名については基本層位をローマ数字、遺構内堆積層位をアラビア数字で表記し、細分層についてはその後にアルファベットの小文字を付し区別した。また掘り込んでいない礎石跡については、検出プランや搅乱等による断面により記録し、これを平面図上に記載している。
- ・本書で表記する「1間」は、江戸時代初期に使用されていたと考えられる6尺5寸(=197cm)を基準値とした。

7. 遺 物

- ・遺物の登録は種別ごとに行い、掲載した遺物には以下の略号を使用している。

- A : 繩文上器 B : 弥生土器 C : 土師器(ロクロ不使用) E : 須恵器 F : 軒丸瓦・丸瓦
G : 軒平瓦・平瓦 H : その他の瓦 I : 陶 器 J : 磁 器 K : 石器・石製品 N : 金属製品
S : 墓 輪 X : 土師質土器・その他の遺物
- ・遺物の法量で(カッコ)で示した数値は推定復元値、「-」は計測不能を示している。

8. 遺構・遺物図版に使用したトーンは下記を表現している。



燒　面



燒土ブロック



炭化物



石 数 範 囲



柱・板材痕跡



煤付着範囲

目 次

巻頭写真図版

序 文

例 言

凡 例

目 次

挿図目次

表 目 次

写真図版目次

第1章はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査要項	2
第2章若林城跡の概要	3
第1節 遺跡の地理的環境	3
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	3
第3節 若林城の概要	7
第4節 これまでの調査	13
第3章調査の方法と経過	15
第1節 調査の方法	15
第2節 調査と保存に至る経過	17
(1) 調査の経過	17
(2) 保存に至る経過と保存方法	18
(3) 普及啓発活動	19
第3節 資料整理の方法	20
第4章基本層序	21
第5章検出遺構と出土遺物	23
第1節 III層上面の遺構と遺物	23
(1) 土 坑	23
(2) 集石遺構	25
(3) 瓦・礫集積遺構	29
第2節 IV層上面の遺構と遺物	31
1 若林城期の遺構	31
(1) 碸石建物跡	31
(2) 溝 跡	115
(3) 墓 跡	115
(4) 石敷遺構	116

(5) ピット	123
2 その他の遺構	124
(1) 小溝状遺構群	124
(2) 溝 跡	131
(3) 土 坑	143
(4) 集石遺構	158
(5) ピット	165
第3節 VI層上面の遺構	167
(1) 溝 跡	167
(2) 土 坑	167
第4節 近代の遺構	170
(1) 刑務所関連遺構	170
第5節 基本層出土の遺物	173
第6章 自然科学分析	197
第1節 植物珪酸体（プラント・オパール）分析	197
第2節 花粉分析	201
第7章 考 察	206
第1節 若林城の遺構について	206
(1) 碓石建物跡の配置について	206
(2) 1号砲石建物跡について	208
(3) 2号砲石建物跡について	214
(4) 3号砲石建物跡について	217
(5) 4号砲石建物跡について	220
(6) 建物に関わる溝跡について	221
(7) 建物群の年代と性格について	223
第2節 若林城廃城後の遺構	225
(1) 小溝状遺構群について	225
(2) 1号溝跡について	226
第3節 若林城跡出土の遺物について	227
(1) 瓦の検討	227
(2) 陶磁器・土師質土器の検討	249
第8章 まとめ	256
参考・引用文献	258
写真図版	263

挿図目次

第 1 図 若林城跡の位置	3	第 37 図 6 号溝跡 2 区	55
第 2 図 遺跡周辺の地形分類図	4	第 38 図 6 号溝跡出土遺物 (1)	56
第 3 図 周辺の遺跡	5	第 39 図 6 号溝跡出土遺物 (2)	57
第 4 図 若林城跡周辺の遺跡	6	第 40 図 1 号石組造構	58
第 5 図 若林城関連絵図	12	第 41 図 1 号石組造構出土遺物	59
第 6 図 これまでの調査区位置図	14	第 42 図 1 号礎石建物跡 遺物出土状況	60
第 7 図 第 5 次調査区配置図	14	第 43 図 七 坑	61
第 8 図 グリッド設定図 (全体)	16	第 44 図 上坑出土遺物	62
第 9 図 グリッド設定図 (第 5 次調査区)	16	第 45 図 19 号溝跡	62
第 10 図 造構保存断面模式図	19	第 46 図 2 号礎石建物跡	65・66
第 11 図 基本層位柱状図	22	第 47 図 2 号礎石建物跡 磐石跡 (1)	67
第 12 図 基本層位模式図	22	第 48 図 磐石跡 50 出土遺物	68
第 13 図 Ⅲ 層造構配置図	24	第 49 図 2 号礎石建物跡 磐石跡 (2)	70
第 14 図 土 坑	25	第 50 図 2 号礎石建物跡 磐石跡 (3)	72
第 15 図 7 号土坑出土遺物	25	第 51 図 2 号礎石建物跡 磐石跡 (4)	74
第 16 図 7 号集石造構出土遺物	26	第 52 図 2 号礎石建物跡 磐石跡 (5)	76
第 17 図 集石造構 (1)	27	第 53 図 2 号礎石建物跡 磐石跡 (6)	78
第 18 図 集石造構 (2)	28	第 54 国 7 号溝跡	80
第 19 国 瓦・礎集積造構	29	第 55 国 7 号溝跡出土遺物 (1)	81
第 20 国 瓦・礎集積造構出土遺物	30	第 56 国 7 号溝跡出土遺物 (2)	82
第 21 国 Ⅳ 層若林城期造構配置図	33・34	第 57 国 7 号溝跡出土遺物 (3)	83
第 22 国 1 号礎石建物跡	35・36	第 58 国 7 号溝跡出土遺物 (4)	84
第 23 国 1 号礎石建物跡 磐石跡 (1)	38	第 59 国 7 号溝跡出土遺物 (5)	85
第 24 国 1 号礎石建物跡 磐石跡 5 出土遺物	39	第 60 国 7 号溝跡出土遺物 (6)	86
第 25 国 1 号礎石建物跡 磐石跡 (2)	40	第 61 国 7 号溝跡出土遺物 (7)	87
第 26 国 1 号礎石建物跡 磐石跡 (3)	42	第 62 国 9 号溝跡	88
第 27 国 1 号礎石建物跡 磐石跡 (4)	44	第 63 国 2 号礎石建物跡 遺物出土状況	89
第 28 国 4 号溝跡 1 区周辺	46	第 64 国 3 号礎石建物跡・3 号石敷造構	91・92
第 29 国 4 号溝跡出土遺物 (1)	47	第 65 国 3 号礎石建物跡 磐石跡 (1)	94
第 30 国 4 号溝跡出土遺物 (2)	48	第 66 国 3 号礎石建物跡 磐石跡 (2)	96
第 31 国 4 号溝跡出土遺物 (3)	49	第 67 国 3 号礎石建物跡 磐石跡 22 出土遺物	97
第 32 国 4 号溝跡出土遺物 (4)	50	第 68 国 3 号礎石建物跡 磐石跡 (3)	98
第 33 国 5 号溝跡	51	第 69 国 3 号礎石建物跡 磐石跡 (4)	100
第 34 国 5 号溝跡出土遺物 (1)	52	第 70 国 3 号礎石建物跡 磐石跡 (5)	102
第 35 国 5 号溝跡出土遺物 (2)	53	第 71 国 8 号溝跡	104
第 36 国 6 号溝跡 1 区	54	第 72 国 8 号溝跡出土遺物	105

第73図	9号溝跡 1区	105
第74図	10号溝跡 1区(1)	106
第75図	10号溝跡 1区(2)	107
第76図	10号溝跡出土遺物(1)	108
第77図	10号溝跡出土遺物(2)	109
第78図	10号溝跡出土遺物(3)	110
第79図	3号礎石建物跡 遺物出土状況	111
第80図	4号礎石建物跡・5号石敷造構	112
第81図	4号礎石建物跡 磐石跡	113
第82図	14号溝跡	114
第83図	13・20号溝跡	115
第84図	1号堀跡	115
第85図	1号石敷造構 全体	116
第86図	1号石敷造構 北東部分	117
第87図	1号石敷造構 側溝	118
第88図	2・4号石敷造構	119
第89図	2号石敷造構	120
第90図	3・4号石敷造構	122
第91図	P6	123
第92図	P6出土遺物	123
第93図	小溝状造構群1群	124
第94図	IV層造構配図(若林城跡造構を除く)	125・126
第95図	小溝状造構群1・2群	127・128
第96図	小溝状造構群2群	129
第97図	小溝状造構群2群出土遺物	130
第98図	1a・2・3号溝跡(1)	131
第99図	1b号溝跡	132
第100図	1a・2・3号溝跡(2)	133・134
第101図	1号溝跡出土遺物(1)	136
第102図	1号溝跡出土遺物(2)	137
第103図	1号溝跡出土遺物(3)	138
第104図	2号溝跡出土遺物	138
第105図	11号溝跡	139・140
第106図	溝跡	142
第107図	溝跡出土遺物	142
第108図	土坑(1)	145
第109図	土坑(2)	147
第110図	土坑(3)	150
第111図	土坑(4)	153
第112図	上坑(5)	156
第113図	土坑出土遺物	157
第114図	集石造構(1)	159
第115図	集石造構(2)	160
第116図	集石造構(3)	162
第117図	集石造構(4)	164
第118図	集石造構出土遺物	165
第119図	ピット	165
第120図	206号土坑	167
第121図	VI層造構配置図	168
第122図	26号溝跡(搅乱内検出)	169
第123図	206号土坑出土遺物	170
第124図	近代の造構配置図	171
第125図	煉瓦積暗渠	172
第126図	近代の造構出土遺物	172
第127図	Ⅲ層中遺物出土状況(瓦を除く)	174
第128図	基本層I・II層出土遺物	175
第129図	基本層Ⅲ層出土遺物(1)	176
第130図	基本層Ⅲ層出土遺物(2)	177
第131図	基本層Ⅲ層出土遺物(3)	178
第132図	基本層Ⅲ層出土遺物(4)	179
第133図	基本層Ⅲ層出土遺物(5)	180
第134図	基本層Ⅲ層出土遺物(6)	181
第135図	基本層Ⅲ層出土遺物(7)	182
第136図	搅乱出土遺物(1)	184
第137図	搅乱出土遺物(2)	185
第138図	搅乱出土遺物(3)	186
第139図	搅乱出土遺物(4)	187
第140図	搅乱出土遺物(5)	188
第141図	搅乱出土遺物(6)	189
第142図	搅乱出土遺物(7)	190
第143図	搅乱出土遺物(8)	191
第144図	搅乱出土遺物(9)	192
第145図	土壤分析サンプル採取位置	197
第146図	植物珪酸体分析結果	199
第147図	若林城跡の植物珪酸体(プラント・オ・パール)	200
第148図	花粉ダイアグラム	203
第149図	若林城跡の花粉・胞子	204
第150図	若林城建物位置図	206

第151図	第5次調査Ⅳ遺構配置図	207
第152図	1号礎石建物跡全体図（6尺5寸方眼入り）	209
第153図	『御二之丸御指図』	210
第154図	1号礎石建物跡と仙台城二の丸大台所との比較	211
第155図	『背山公造制城郭木穿之略図』	212
第156図	『御本丸大御大所百歩一之図』	212
第157図	瑞巖寺庫裏	213
第158図	2号礎石建物跡全体図（6尺5寸方眼入り）	215
第159図	2号礎石建物跡模式図	216
第160図	3号礎石建物跡全体図（6尺5寸方眼入り）	218
第161図	3号礎石建物と仙台城二の丸焼火之間との比較	219
第162図	4号礎石建物跡全体図（6尺5寸方眼入り）	221
第163図	4号礎石建物跡模式図	221
第164図	溝の構造分類模式図	222
第165図	溝の構造分類	223
第166図	若林城跡遺構配置模式図	225
第167図	瓦計測部位模式図	229
第168図	瓦分類集成図（1）	229
第169図	瓦分類集成図（2）	230
第170図	瓦分類集成図（3）	231
第171図	瓦の法量分布	236
第172図	瓦の出土割合	237
第173図	Ⅲ層中出土瓦の重量分布図（1）	238
第174図	Ⅲ層中出土瓦の重量分布図（2）	239
第175図	溝跡別による出土割合	240
第176図	瓦の種別による出土割合	241
第177図	軒平瓦の瓦当文様	242
第178図	軒平瓦・棟止瓦の瓦当文様	242
第179図	滴水瓦の瓦当文様	243
第180図	刻印分類模式図	244
第181図	刻印集成図（1）	245
第182図	刻印集成図（2）	246
第183図	刻印集成図（3）	247
第184図	刻印集成図（4）	248
第185図	刻印集成図（5）	249
第186図	種類別比率（17世紀前半）	250
第187図	陶器の產地別比率	250
第188図	磁器の產地別比率	251
第189図	17世紀前半から後半の陶磁器集成図	252
第190図	18世紀から19世紀の陶磁器集成図	253
第191図	土師質土器皿の底径分布	254
第192図	17世紀前半土師質土器集成図	254

表 目 次

第 1 表	若林城関連年表	8
第 2 表	第4次調査1区遺構名称対応表	17
第 3 表	若林城跡関係の主な普及啓発活動	20
第 4 表	IV層上面検出ピット一覧表	166
第 5 表	IV層上面検出土坑・ピット一覧表（未剥削）	166
第 6 表	出土遺物集計表 瓦（1）	193
第 7 表	出土遺物集計表 瓦（2）	194
第 8 表	出土遺物集計表 瓦（3）	195
第 9 表	出土遺物集計表 瓦以外（1）	195
第 10 表	出土遺物集計表 瓦以外（2）	196
第 11 表	植物珪酸体分析結果	199
第 12 表	花粉分析結果	203
第 13 表	礎石跡法量表	209
第 14 表	礎石跡法量表	215
第 15 表	礎石跡法量表	218
第 16 表	礎石跡法量表	221
第 17 表	瓦分類表	228
第 18 表	遺構数量表	256

写真図版目次

卷頭写真図版	
若林城跡全景（南西から）	12. 11号集石遺構検出状況（北から）
若林城の遺構群（東から）	13. 13号集石遺構検出状況（西から）
卷頭写真図版	14. 14号集石遺構検出状況（東から）
若林城跡出土の滴水瓦	15. 1号瓦・礫集積遺溝検出状況（南東から）
出土した瓦の文様	写真図版5 267
写真図版1 263	1. IV層上面南半部遺構検出全景（上が北）
1. 若林城跡全景（昭和20年米軍撮影）	写真図版6 268
2. 若林城跡全景（昭和22年米軍撮影）	1. IV層上面北半部遺構検出状況（南から）
3. 若林城跡全景（昭和28年撮影・西から）	2. IV層上面北半部遺構検出状況（西から）
4. 若林城跡全景（昭和59年撮影・東から）	写真図版7 269
5. 若林城跡周辺（昭和22年米軍撮影）	1. SB1 検出全景（上が北）
写真図版2 264	2. SB1 検出全景（北から）
1. 宮城集治監（宮内庁所蔵・西から）	写真図版8 270
2. 宮城集治監（宮内庁所蔵・東から）	1. SB1 磐石跡10検出状況（南から）
写真図版3 265	2. SB1 磐石跡10抜取り痕掘削状況（南から）
1. 城南側の土塁と堀跡（昭和30年頃・仙台市戦災復興記念館所蔵・南東から）	3. SB1 磐石跡10根固め状況（南から）
2. 城南側の土塁と堀跡（西から）	4. SB1 磐石跡18検出状況（西から）
3. 城東側の門跡と土橋跡（南東から）	5. SB1 磐石跡18根固め状況（東から）
4. 城西側の門跡と内折形土塁（南東から）	6. SB1 磐石跡18根固め下部状況（東から）
5. 国指定天然記念物「朝鮮ウメ」（臥竜梅）	7. SB1 磐石跡19検出状況（東から）
6. 現在の六郷堀（北から）	8. SB1 磐石跡19根固め状況（東から）
7. 調査前状況（北東から）	写真図版9 271
写真図版4 266	1. SB1 磐石跡19根固め下部直出土状況（東から）
1. SK1 挖り込み状況（北から）	2. SB1 磐石跡19根固め下部状況（東から）
2. SK1 断面状況（西から）	3. SB1 磐石跡20検出状況（東から）
3. SK2 挖り込み状況（南から）	4. SB1 磐石跡20断面状況（西から）
4. SK5 挖り込み状況（南から）	5. SB1 磐石跡20根固め断面状況（西から）
5. SK6 挖り込み状況（南から）	6. SB1 磐石跡20根固め下部状況（東から）
6. 1号集石遺構検出状況（東から）	7. SB1 磐石跡28検出状況（東から）
7. 2号集石遺構検出状況（東から）	8. SB1 磐石跡28根固め状況（東から）
8. 7号集石遺構検出状況（南から）	写真図版10 272
9. 7号集石遺構断面状況（東から）	1. SB1 磐石跡1 検出状況（北から）
10. 10号集石遺構検出状況（西から）	2. SB1 磐石跡3 検出状況（南から）
11. 10号集石遺構断面状況（東から）	3. SB1 磐石跡5 検出状況（南から）

6. SB 1 碓石跡 8 検出状況 (南から)	8. 1号石組造構掘り方底面状況 (西から)
7. SB 1 碓石跡 9 検出状況 (南から)	写真図版 1 4 276
8. SB 1 碓石跡 11 検出状況 (南から)	1. SK203 堀り込み状況 (南東から)
9. SB 1 碓石跡 12 検出状況 (南から)	2. SK204 断面状況 (南から)
10. SB 1 碓石跡 13 検出状況 (南西から)	3. SK204 焼面状況 (南から)
11. SB 1 碓石跡 14 検出状況 (南から)	4. SK204 堀り方状況 (南から)
12. SB 1 碓石跡 15 検出状況 (南から)	5. SK205 焼面状況 (南から)
13. SB 1 碓石跡 16 検出状況 (南から)	6. SK205 断面状況 (南から)
14. SB 1 碓石跡 17 検出状況 (南から)	7. SD19 堀り込み状況 (東から)
15. SB 1 碓石跡 21 検出状況 (北から)	8. SD19 内ピット断面状況 (南から)
写真図版 1 1 273	写真図版 1 5 277
1. SB 1 碓石跡 22 検出状況 (南東から)	1. SB 2 検出全景 (上が北)
2. SB 1 碓石跡 23 検出状況 (南から)	2. SB 2 検出全景 (南から)
3. SB 1 碓石跡 24 検出状況 (南から)	写真図版 1 6 278
4. SB 1 碓石跡 25 検出状況 (南から)	1. SB 2 碓石跡 8 堀り込み状況 (南から)
5. SB 1 碓石跡 27 検出状況 (南から)	2. SB 2 碓石跡 12 検出状況 (南から)
6. SB 1 碓石跡 29 検出状況 (南から)	3. SB 2 碓石跡 12 断面状況 (南から)
7. SB 1 碓石跡 31 検出状況 (南から)	4. SB 2 碓石跡 19 検出状況 (北から)
8. SB 1 碓石跡 32 検出状況 (南西から)	5. SB 2 碓石跡 27 検出状況 (西から)
9. SB 1 碓石跡 33 検出状況 (南西から)	6. SB 2 碓石跡 27 根固め状況 (南西から)
10. SB 1 西辺玄関部検出状況 (西から)	7. SB 2 碓石跡 50 検出状況 (北から)
11. SB 1 西辺玄関部検出状況 (南から)	8. SB 2 碓石跡 50 根固め状況 (西から)
写真図版 1 2 274	写真図版 1 7 279
1. SD 4a 1 区底面状況 (東から)	1. SB 2 碓石跡 1 検出状況 (南から)
2. SD 4a 1 区断面状況 (北から)	2. SB 2 碓石跡 2 検出状況 (北から)
3. SD 4a 3 区検出状況 (北から)	3. SB 2 碓石跡 3 検出状況 (南から)
4. SD 4a 3 区断面状況 (南から)	4. SB 2 碓石跡 4 検出状況 (南から)
5. SD 5 2 区瓦出土状況 (南西から)	5. SB 2 碓石跡 5 検出状況 (南から)
6. SD 5 1 区断面状況 (西から)	6. SB 2 碓石跡 6 検出状況 (南から)
7. SD 6 1 区瓦配置状況 (東から)	7. SB 2 碓石跡 7 検出状況 (北から)
8. SD 6 1 区堀り込み状況 (北から)	8. SB 2 碓石跡 9 検出状況 (南から)
写真図版 1 3 275	9. SB 2 碓石跡 10 検出状況 (南から)
1. SD 6 2 区検出状況 (西から)	10. SB 2 碓石跡 11 検出状況 (南から)
2. SD 6 2 区鋼板断面状況 (西から)	11. SB 2 碓石跡 14 検出状況 (西から)
3. SD 6 2 区堀り込み状況 (西から)	12. SB 2 碓石跡 15 検出状況 (南から)
4. 1号石組造構検出状況 (西から)	13. SB 2 碓石跡 16 検出状況 (南から)
5. 1号石組造構掘り込み状況 (北から)	14. SB 2 碓石跡 17 検出状況 (南から)
6. 1号石組造構西側状況 (南から)	15. SB 2 碓石跡 18 検出状況 (南から)
7. 1号石組造構東側底面・壁面状況 (北西から)	写真図版 1 8 280

1. SB 2 磐石跡22検出状況（南から）	8. SD 7 3区底面状況（北から）
2. SB 2 磐石跡23検出状況（南から）	写真図版 2 1 283
3. SB 2 磐石跡24検出状況（南から）	1. SB 3 検出全景（上が北）
4. SB 2 磐石跡25検出状況（南から）	2. SB 2・3 検出全景（南東から）
5. SB 2 磐石跡26検出状況（南から）	写真図版 2 2 284
6. SB 2 磐石跡28検出状況（南から）	1. SB 3 磐石跡3 検出状況（南から）
7. SB 2 磐石跡29検出状況（南から）	2. SB 3 磐石跡3 根固め状況（南から）
8. SB 2 磐石跡30検出状況（南から）	3. SB 3 磐石跡3 断面状況（南から）
9. SB 2 磐石跡31検出状況（南から）	4. SB 3 磐石跡5 挖り込み状況（東から）
10. SB 2 磐石跡32検出状況（南から）	5. SB 3 磐石跡14断面状況（東から）
11. SB 2 磐石跡33検出状況（南から）	6. SB 3 磐石跡14根固め状況（東から）
12. SB 2 磐石跡34検出状況（南から）	7. SB 3 磐石跡14掘り方状況（南から）
13. SB 2 磐石跡35検出状況（西から）	8. SB 3 磐石跡20掘り込み状況（南から）
14. SB 2 磐石跡36検出状況（南から）	写真図版 2 3 285
15. SB 2 磐石跡37検出状況（南から）	1. SB 3 磐石跡1 検出状況（南から）
写真図版 1 9 281	2. SB 3 磐石跡2 検出状況（南から）
1. SB 2 磐石跡38検出状況（南西から）	3. SB 3 磐石跡4 検出状況（南から）
2. SB 2 磐石跡39検出状況（南から）	4. SB 3 磐石跡6 検出状況（南から）
3. SB 2 磐石跡40検出状況（南から）	5. SB 3 磐石跡7 検出状況（南から）
4. SB 2 磐石跡41検出状況（南から）	6. SB 3 磐石跡8 検出状況（西から）
5. SB 2 磐石跡42検出状況（南から）	7. SB 3 磐石跡9 検出状況（南から）
6. SB 2 磐石跡43検出状況（南から）	8. SB 3 磐石跡10 検出状況（南から）
7. SB 2 磐石跡44検出状況（東から）	9. SB 3 磐石跡11 検出状況（南から）
8. SB 2 磐石跡45検出状況（南から）	10. SB 3 磐石跡12 検出状況（東から）
9. SB 2 磐石跡46検出状況（南から）	11. SB 3 磐石跡13 検出状況（北から）
10. SB 2 磐石跡47検出状況（北から）	12. SB 3 磐石跡15 検出状況（南から）
11. SB 2 磐石跡48検出状況（北から）	13. SB 3 磐石跡16 検出状況（南から）
12. SB 2 磐石跡49検出状況（北から）	14. SB 3 磐石跡17 検出状況（南から）
13. SB 2 磐石跡51検出状況（南から）	15. SB 3 磐石跡18 検出状況（南西から）
14. SB 2 磐石跡52検出状況（南から）	写真図版 2 4 286
15. SB 2 磐石跡53検出状況（西から）	1. SB 3 磐石跡19 検出状況（南から）
写真図版 2 0 282	2. SB 3 磐石跡22 検出状況（南から）
1. SD 7 1区底面状況（西から）	3. SB 3 磐石跡22 検出状況（南から）
2. SD 7 1区北東隅掘り込み状況（北西から）	4. SB 3 磐石跡22銅製品(N11) 出土状況（東から）
3. SD 7 東辺分岐部検出状況（西から）	5. SB 3 磐石跡23 検出状況（南から）
4. SD 7 東辺南端部検出状況（北西から）	6. SB 3 磐石跡24 検出状況（北から）
5. SD 7 2区瓦出土状況（西から）	7. SB 3 磐石跡25 検出状況（南から）
6. SD 7 2区底面状況（北から）	8. SB 3 磐石跡26 検出状況（南から）
7. SD 7・8 2区底面状況（北西から）	9. SB 3 磐石跡27 検出状況（南から）

10. SB 3 碓石跡28検出状況（南から）	5. SB 4 碓石跡 5 検出状況（南から）
11. SB 3 碓石跡29検出状況（南から）	6. SB 4 碓石跡 6 検出状況（南から）
12. SB 3 碓石跡30検出状況（南から）	7. SB 4 碓石跡 7 検出状況（南から）
13. SB 3 碓石跡31検出状況（南から）	8. SB 4 碓石跡 8 検出状況（南から）
14. SB 3 碓石跡32検出状況（南から）	9. SB 4 碓石跡 9 検出状況（南から）
15. SB 3 碓石跡33検出状況（南から）	10. SD14北西隅検出状況（南西から）
写真図版 2 5 287	11. SD14南東隅検出状況（南西から）
1. SB 3 碓石跡34検出状況（南から）	写真図版 2 9 291
2. SB 3 碓石跡35検出状況（南から）	1. SD13検出状況（南から）
3. SB 3 碓石跡36検出状況（南から）	2. SA 1 掘り込み状況（東から）
4. SB 3 碓石跡37検出状況（東から）	3. P6 底面柱痕跡検出状況（西から）
5. SB 3 碓石跡38検出状況（南から）	4. P6 底面礫検出状況（西から）
6. SB 3 碓石跡39検出状況（南から）	5. 1号石敷遺構検出全景（南西から）
7. SB 3 碓石跡40検出状況（南から）	写真図版 3 0 292
8. SB 3 碓石跡41検出状況（南西から）	1. 1号石敷遺構南東隅部検出状況（南西から）
9. SB 3 碓石跡42検出状況（南西から）	2. 1号石敷遺構断面状況（東から）
10. SB 3 碓石跡43検出状況（南西から）	3. 1号石敷遺構・SD 4 2区断面状況（東から）
11. SB 3 碓石跡44検出状況（南西から）	4. 2号石敷遺構検出全景（西から）
12. SB 3 碓石跡45検出状況（南西から）	5. 2号石敷遺構東側検出状況（東から）
13. SB 3 碓石跡46検出状況（北西から）	6. 3号石敷遺構検出全景（南東から）
14. SB 3 碓石跡47検出状況（北から）	7. 3号石敷遺構検出状況（北東から）
15. SB 3 碓石跡48検出状況（北から）	8. 3号石敷遺構西壁際検出状況（南東から）
写真図版 2 6 288	写真図版 3 1 293
1. SD 8 1区検出状況（東から）	1. 4号石敷遺構西側検出状況（北西から）
2. SD 8 1区底面状況（東から）	2. 4号石敷遺構東側検出状況（南西から）
3. SD 8 1区断面状況（東から）	3. 5号石敷遺構検出状況（南西から）
4. SD 8 2区滴水瓦（G 5）出土状況（南西から）	4. 小溝状遺構群1群全景（南から）
5. SD 8 2区瓦出土状況（北西から）	5. 小溝状遺構群2群中央全景（西から）
6. SD10 1区瓦出土状況（南西から）	写真図版 3 2 294
7. SD10 1区南側底面礫状況（北西から）	1. 小溝状遺構群2群北側全景（西から）
8. SD10・11 1区掘り込み状況（北から）	2. 小溝状遺構群2群西端部状況（南から）
写真図版 2 7 289	3. 小溝状遺構群1-4断面状況（南から）
1. SB 4 検出全景（上が北）	4. 小溝状遺構群2-15断面状況（西から）
2. SB 4 検出全景（南から）	5. 小溝状遺構群2-3層(X58)出土状況（南東から）
写真図版 2 8 290	6. 小溝状遺構群2-3銅錢(N2-5)出土状況（南から）
1. SB 4 碓石跡1検出状況（南から）	7. SD 1 検出状況（西から）
2. SB 4 碓石跡2検出状況（南から）	8. SD 1a 掘り込み状況（西から）
3. SB 4 碓石跡3検出状況（南から）	写真図版 3 3 295
4. SB 4 碓石跡4検出状況（南から）	1. SD 1a Aベルト断面状況（西から）

2. SD 1a 東端部礫崩落状況（南東から）	11. SK69掘り込み状況（東から）
3. SD 1a 底面状況（東から）	12. SK70掘り込み状況（南から）
4. SD 1a 裏込め礫状況（北東から）	13. SK71掘り込み状況（東から）
5. SD 1b 底面検出状況（東から）	14. SK72掘り込み状況（西から）
6. SD 1b 底面状況（東から）	15. SK75掘り込み状況（南から）
7. SD 1b 底面落ち込み断面状況（東から）	写真図版 3 7 299
8. SD 1b 底面落ち込み（東から）	1. SK78掘り込み状況（西から）
写真図版 3 4 296	2. SK83掘り込み状況（北から）
1. SD 1b 底面落ち込み掘り方状況（南東から）	3. SK91掘り込み状況（東から）
2. SD 2a・b 検出状況（北西から）	4. 18号集石遺構検出状況（西から）
3. SD 2a・b 断面状況（西から）	5. 18号集石遺構掘り込み状況（東から）
4. SD 3・9 掘り込み状況（東から）	6. 20号集石遺構掘り込み状況（南から）
5. SD 3 ピット列（北から）	7. 21号集石遺構検出状況（南西から）
6. SD10大型礫検出状況（西から）	8. 23号集石遺構検出状況（南から）
7. SD12掘り込み状況（北西から）	9. 24号集石遺構掘り込み状況（東から）
8. SD16礫検出状況（南から）	10. 25号集石遺構掘り込み状況（東から）
写真図版 3 5 297	11. 26号集石遺構掘り込み状況（東から）
1. SD18掘り込み状況（西から）	12. 27号集石遺構掘り込み状況（東から）
2. SD21掘り込み状況（西から）	13. 28号集石遺構検出状況（東から）
3. SK 9 掘り込み状況（西から）	14. 29号集石遺構検出状況（東から）
4. SK18掘り込み状況（南から）	15. 31号集石遺構掘り込み状況（南から）
5. SK19掘り込み状況（南から）	写真図版 3 8 300
6. SK12掘り込み状況（南から）	1. 33号集石遺構掘り込み状況（東から）
7. SK22掘り込み状況（南から）	2. 34号集石遺構掘り込み状況（東から）
8. SK23掘り込み状況（南から）	3. 37号集石遺構検出状況（西から）
9. SK25・26掘り込み状況（北から）	4. SD26掘り込み状況（南西から）
10. SK27掘り込み状況（南から）	5. SD26断面状況（南東から）
11. SK28掘り込み状況（南から）	6. SK206遺物出土状況（北から）
写真図版 3 6 298	7. SK206掘り込み状況（北から）
1. SK31掘り込み状況（南から）	8. 六角塔基礎（北東から）
2. SK35掘り込み状況（南東から）	9. 六角塔基礎断面状況（西から）
3. SK38掘り込み状況（東から）	写真図版 3 9 301
4. SK42掘り込み状況（東から）	1. 煉瓦積暗渠断面状況（南東から）
5. SK51礫検出状況（東から）	2. 通路状遺構（南東から）
6. SK51掘り込み状況（東から）	3. 作業風景（北から）
7. SK53・54掘り込み状況（東から）	4. 不織布敷き込み状況（北東から）
8. SK58掘り込み状況（東から）	5. 川砂による埋め戻し状況（北東から）
9. SK62・63掘り込み状況（東から）	6. 埋め戻し完了状況（南西から）
10. SK64掘り込み状況（東から）	7. 鉄板敷設状況（北西から）

8. 基礎鉄筋組み状況（北西から）	写真図版 5.8	320
写真図版 4.0	陶器・磁器（明治～昭和）、土師質土器	
瓦（1）	図版 5.9	321
写真図版 4.1	土師質土器	
瓦（2）	図版 6.0	322
写真図版 4.2	土師質土器・縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器	
瓦（3）	・瓦	
写真図版 4.3	図版 6.1	323
瓦（4）	土製品・埴輪・石器・金属製品	
写真図版 4.4	図版 6.2	324
瓦（5）	金属製品・ガラス製品・煉瓦	
写真図版 4.5		
瓦（6）		
写真図版 4.6		
瓦（7）		
写真図版 4.7		
瓦（8）		
写真図版 4.8		
瓦（9）		
写真図版 4.9		
瓦（10）		
写真図版 5.0		
瓦（11）		
写真図版 5.1		
瓦（12）		
写真図版 5.2		
瓦（13）		
写真図版 5.3		
瓦（14）		
写真図版 5.4		
瓦（15）		
写真図版 5.5		
陶器・磁器（17世紀前半）		
写真図版 5.6		
陶器・磁器・瓦質土器（17世紀後半・18世紀）		
写真図版 5.7		
陶器・磁器（幕末・明治～昭和）		

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

平成16年3月2日付で宮城刑務所より同所の全体改築工事に伴う埋蔵文化財についての取扱いに関する協議書が提出された。計画では建築総面積が21,198m²という大規模なもので、これを5期の年次計画によりころがし方式により順次建て替えて行くというものであった。これに対し当教育委員会は当該地が若林城の中心部分全域であることから、建物の建設箇所において事前に確認調査を実施し、その結果について後日協議し、建設と調査のあり方を決定するという対応をとることとなった。

確認調査は同年4月21日から26日までの実働4日間実施した。合計16箇所、面積205m²の試掘調査区を城内の広範囲にわたる建設予定範囲内に設定したが、既存建物や施設が多く、主に空闊地においての調査となった。また埋設物や植木などの関係から調査予定面積を十分に確保できない状況であった。調査ではほぼ全城に後世の盛土層が確認され、かつての刑務所施設による攪乱が著しい箇所もあった。しかし数箇所の調査区の下層には時期不明の整地層や溝跡・落ち込みなどの遺構らしきものが検出され、何かしら若林城に関連する遺構の存在も想定された。

この試掘結果を受け、当教育委員会と宮城刑務所が協議した結果、平成16年度内に実施する本調査は西半部に位置する第1期工事分の処遇管理棟と炊場棟の2棟を対象とすることとなった。調査は各々で遺構が確認された箇所を中心に150m²の計300m²の小規模な調査区を設定し、9月6日から第4次調査として開始することとなった。但し過去の調査例からみて、調査では近世のみならず古墳時代や平安時代の遺構が検出される可能性もあったことから、その状況によっては再度協議の上、調査区の拡張や期間の延長などがあり得る旨を予め刑務所側に提示し了解を得た。なお第4次調査は業務委託として株式会社バスコが担当した。

第4次調査では処遇管理棟部を1区、炊場棟部2区として掘り始めたところ、明治11年の宮城集治監設置時に建設された倉庫（八角塔）の基礎をなす近代の整地層下において、1区では大型建物の基礎である複数の礎石跡、2区では礎石跡と建物周囲を巡る雨落ち溝とみられる石組みの溝跡が確認された。さらにこれらの広がりを確認するために新たに設置した3箇所の試掘区においても礎石跡や石敷遺構・石列遺構などが確認されたことで、ここに若林城の遺構が初めて確認されるに至った。当教育委員会ではこの調査で確認した建物群やそれを取り巻く諸施設の残存状態が良好で、かつ広範囲に広がることも想定されることから、資料的価値判断から再度宮城刑務所側に、遺構に関する取扱いについての協議書を提出した。その内容は、最初に建設が予定されている処遇管理棟部の未調査部分の調査の必要性に加え、遺構の保全の必要が認められた場合の建物配置および基礎設計の変更に関する協議の必要性、さらに次に建設予定の炊場棟部についても処遇管理棟部と同様の対応を求めるものであった。

この結果、平成17年度に再度処遇管理棟部全体を対象とした事前調査を実施し、遺構の状況をあらためて広域で確認した上で若林城の遺構に対する取扱いを検討することが話し合われた。これを受け、第4次調査では当初の予定期間を2週間延長し、2区において近代の整地層および近世の畑耕作上の除去は行ったが、若林城に関わるとみられる検出遺構は礎石跡の一部を掘り込んだ以外は確認のみに止め、調査区を一旦埋め戻し、11月5日に終了した。

第5次調査もまた業務委託として調査を実施し、株式会社バスコが担当することとなった。計画では調査対象面積が約2,000m²と広く、石を多用した遺構群が想定されることに加え、近世の畑遺構の存在も予想されたことから、調査は野外調査のみとし、報告書作成に関わる作業は次年度以降に実施することとした。

第2節 調査要項

遺跡名 若林城跡（C-511）
所在地 宮城県仙台市若林区古城二丁目3-1
委託業務名 若林城跡第5次発掘調査業務
調査主体 仙台市教育委員会
調査担当 仙台市教育委員会文化財調査係 主任：佐藤 淳
株式会社バスコ 東日本事業部 技術部 文化財技術課
主任調査員 佐藤好司（野外調査・基礎整理作業・本整理作業）
調査員 小柳太一（野外調査 8月24日まで）
小柳リラコ（野外調査 9月30日まで）
柳田 信（野外調査 8月22日から10月7日まで）
横山太郎（野外調査 10月3日から）
碓井三子（野外調査 10月11日から）
後藤太一（本整理作業）
調査補助員 佐々木勝（野外調査・基礎整理作業）
酒井 中（野外調査 8月4日から9月2日まで）
計測員 插間大輔（野外調査・基礎整理作業・本整理作業）
古岡達也（野外調査・基礎整理作業）
仲野利典（野外調査・基礎整理作業 10月19日から）
計測補助員 齋澤哲也（野外調査・基礎整理作業）
寺林一樹（野外調査・基礎整理作業 10月19日から）
小野啓志（野外調査・基礎整理作業 10月28日から）
岩渕菜穂（本整理作業）
調査期間 野外調査 平成17年5月23日～平成18年1月31日
基礎整理作業 平成18年2月1日～2月28日
本整理作業 平成19年5月7日～平成20年3月14日
調査面積 対象面積2,208m² 調査面積1,990m²
野外調査・基礎整理作業参加者（平成17年度）
青山諒子 赤間文章 阿部勝夫 阿部金吉 阿部信哉 安達正雄 井口裕司 石田弘義 石原伸二 伊藤庸高
上村透介 梅津和弘 遠藤光昭 大滝安雄 大山要治 岡田見衣 小国和男 菊池清喜 日下伸夫 工藤雅己
熊谷勝夫 小林幸治 小林常雄 斎藤貞二 嶋崎潔 坂本 明 佐藤勝志 佐藤香代子 佐藤太一 鈴木啓次
鈴木重明 櫻井國広 高橋和稔 武田隆志 生江伸介 畠山未津留 早坂寛巳 平野 登 姫野達彦 古市彰靖
村上裕司 山内 昌 山中量・吉田邦男 吉田春雄（以上野外調査）
青山諒子 阿部 淳 石上清隆 遠藤まゆみ 坂井善行 佐藤香代子 鈴木 修 武石真理子 館きぬえ子
畠山未津留 山中敏行（以上基礎整理作業）
本整理作業参加者（平成19年度）
石橋卓也 笹野千代子 澤田洋子 佐藤悦代 杉山加代子 高梨雅幸 田口一男 松岡水帆子 山川和子
寺田洋子 千葉香織 平野康子

第2章 若林城跡の概要

第1節 遺跡の地理的環境

若林城跡はJR仙台駅の南東約3kmの若林区古城に所在する。遺跡の規模は東西約420m、南北約350m、土堀内側の面積は約55,000m²、堀を含めると約128,000m²と広大な面積をもっている。城内の標高は13m前後である。現状は宮城刑務所となっているが、周囲にある土塁や堀跡は比較的良好に残っている。遺跡の周辺は名取川の支流である広瀬川の左岸に発達した自然堤防と、東側の海岸線に沿って発達した浜堤列の後背湿地となっている。城跡はこの自然堤防上を中心立地しているが、周辺は市街地化が進み、旧地形を窺い知ることが困難になっている。城跡周辺では西方の広瀬川より取水した六郷堀や七郷堀などの灌漑用水路が東流し、特に六郷堀は一旦城の堀内を通りながら、東側では分岐を重ね仙台市東部の水田地帯を潤している。東側や北側に位置する南小泉遺跡や養種園遺跡では、埋没河川の存在が明らかとなっており、南側においては、時期は不明なもの河川跡が確認されている。また城内での第2次調査においても河川跡の一部とみられるプランが報告されており、城跡を含む付近一帯には広瀬川に沿うような形で北西から南東方向に流下した埋没河川が多数存在するものとみられる。若林城はこれら埋没河川に挟まれた自然堤防を中心に造営され、六郷堀や七郷堀はこれらの旧河川跡を利用する形で開削されたと考えられている。



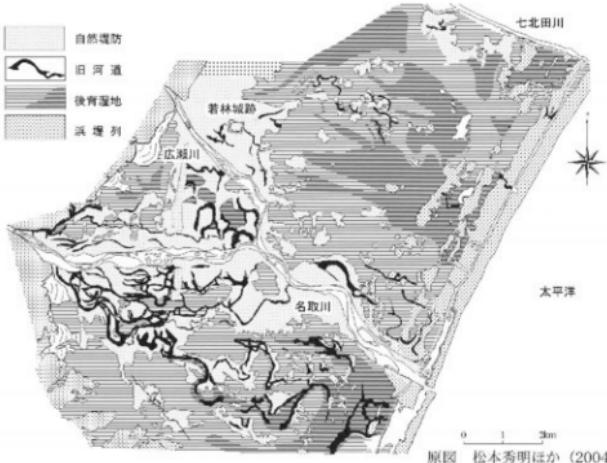
第1図 若林城跡の位置

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

若林城跡周辺は古くから市街化が進んだこともあり、現在確認できる遺跡数は多くはない。しかし周辺には市内有数の規模を誇り、縄文時代から近世にかけての複合遺跡である南小泉遺跡や国指定史跡である遠見塚古墳や陸奥国分寺・国分尼寺などが存在している。

縄文時代 これまで縄文時代の遺構は確認されていないが、南小泉遺跡で晚期の遺物包含層が確認されているほか、養種園遺跡・保春院前遺跡も含め、中期から晚期の土器が數か所で出土している。なお東側の海岸部に近い高田B遺跡では後期中葉の竪穴式住居跡が確認されている。

弥生時代 南小泉遺跡において合口土器棺をはじめ、中期の土器や石器が多く出土している。住居跡は確認され



第2図 遺跡周辺の地形分類図

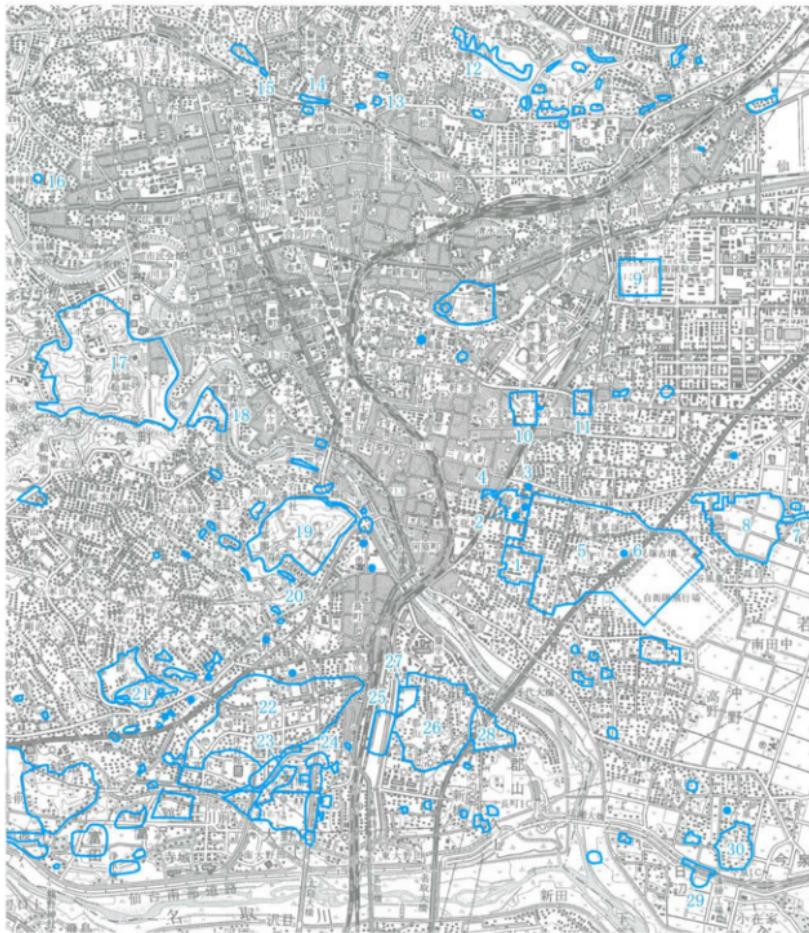
ていないものの、墓域の存在から周辺に集落が存在する可能性がある。該期の土器棺墓は養種園遺跡においても確認されている。また中在家南遺跡・高田B遺跡では中期を中心とする集落・墓域・水田などが検出されており、隣接する河川跡からは多量の木製品や骨角製品が検出されている。

古墳時代 周辺では遠見塚古墳・法領塚古墳・猫塚古墳などが現在もみられるが、市街化に伴い消失したものが多く存在すると思われる。遠見塚古墳は主軸長110mの前方後円墳で、東北地方有数の規模を誇る。前期後業の築造で、畿内との関係が強かった当地方の首長の墳墓と考えられる。中在家南遺跡においては前期の方形周溝墓が4基検出されている。若林城内でも確認された円墳は直径22mで、円筒埴輪を伴った中期後業～後期初頭のものと考えられる。法領塚古墳は直径32mの大型円墳で、両袖式胴張型横穴式石室をもち、直刀・櫛・銅鏡・琥珀玉などの豊富な副葬品が出土しており、後期末葉～終末期にかけての築造である。集落遺跡については前期の構造は少なく、南小泉遺跡において僅かな竪穴住居跡や河川跡が確認されているのみであるが、中期には住居跡などの数も増加する傾向にある。高田B遺跡や中在家南遺跡からは河川跡から前期～後期にかけての農具や建築部材など多量の木製品が出土しており、周囲には集落の存在が想定される。

飛鳥時代 遺跡の南東側の広瀬川右岸において郡山遺跡が造営される。Ⅰ期官衙は7世紀中葉～7世紀末、Ⅱ期官衙は7世紀末～8世紀初頭にかけてのものである。特にⅡ期官衙は多賀城移設前の陸奥国府と考えられており、陸奥国経営の中核として機能していた。Ⅱ期官衙には郡山廃寺が伴っている。Ⅰ期官衙以前には内部を大溝で区画した集落跡が確認されており、関東系の土器を伴うことから関東からの移住者の存在が指摘されている。また南小泉遺跡においても該期の集落が確認されている。

奈良時代 陸奥国府は多賀城に移設されるものの、8世紀中頃には城跡の北方に陸奥国分寺や国分尼寺が造営されるなど、城跡周辺は依然として当地方の中心的地域であったと考えられる。集落は主に広瀬川南側の郡山遺跡・長町駅東遺跡・西台畠遺跡などで展開するが、南小泉遺跡や養種園遺跡・保春院前遺跡などでも住居跡が確認されており、主軸方向や規模など一定の規格のもと造られた計画集落として成立した可能性が考えられている。

平安時代 集落跡は南小泉遺跡や保春院前遺跡において散発的に確認されている。城内においてもこの時期の住居



No.	道跡名	種別	年代	No.	道跡名	種別	年代
1	若林城跡	城館・円墳・集落跡・埋蔵	古墳～近世	16	大崎八幡神社	神社	近世
2	養椿園遺跡	居館・集落跡	弥生・古墳・中世・近世	17	仙台城跡	城郭	中世・近世
3	法領保古塚	円墳	古墳（終末期）	18	越後伊達家墓所	墓所	近世
4	保春院前遺跡	集落跡	奈良～近世	19	度々崎城跡	城跡	中世
5	南小泉遺跡	城館・集落跡	古墳（前期）	20	度々崎横穴墓群	横穴墓	古墳（終末期）
6	通見塚古墳	前方後円墳	弥生・古墳	21	三利峯遺跡	集落跡	绳文・古代
7	中在家所遺跡	集落跡・河川跡	古代	22	御山遺跡	水田跡ほか	旧石器～近世
8	仙台東北条里跡	条里跡	中世	23	六反田遺跡	集落跡	绳文～中世
9	南日指跡	城館	古代・中世	24	元野遺跡	集落跡・水田跡	弥生～近世
10	鶴鳴国分寺跡	寺院	古代	25	長町駅東遺跡	集落跡・水田跡	绳文～中世
11	鶴鳴国分寺尼寺跡	寺院	古代	26	郡山遺跡	官衙跡・集落跡・水田跡	绳文～古代
12	与兵衛沼遺跡	生產跡	古代・近世	27	西ヶ原遺跡	集落跡・櫛形墓	绳文～古代
13	東宮宮	神社	近世	28	北山城跡	城郭	中世
14	村添来室跡	生產跡	近世	29	高田日道跡	集落・建筑物・水田跡・河川跡	绳文～近世
15	荒巻村漆器跡	生產跡	古代・近世	30	今泉遺跡	集落跡・城郭跡	绳文～近世

第3図 周辺の遺跡

跡がこれまで6軒確認されており、城跡を含む北東側一帯に集落が展開していたと考えられる。また南小泉遺跡第21次調査においては畠の痕跡である小溝状遺構群が検出されているほか、城内での第6次調査でも平安時代かそれ以前とみられる畠跡が確認されており、集落と生産域との関係を考える上で貴重である。

鎌倉～室町時代 南小泉遺跡では12世紀後半には初現的な屋敷が出現しており、13世紀に入ると方形に堀を巡らせた大小規模の居館が点在するようになる。これらは領主層やその家臣らの屋敷とみられ、律令の支配形態からの変化が見て取れる。また、養種園遺跡においては該期の集落の一部や土坑墓からなる墓域が確認されている。

戦国時代 この地域は国分氏の所領するところとなるが、南小泉遺跡にみられた中世の居館群に代わり、養種園遺跡周辺において大規模な堀や掘立柱建物群からなる新たな居住地が展開する。特筆されるのは鍛冶炉や鍛冶工房などの遺構をはじめ、坩堝・取鍋・羽口・鉄滓・鍛造剥片などの遺物が多く出土しており、坩堝・取鍋の中には金・銀・銅などの付着したものも見受けられことから、こ

こに金属加工を行った工人集団の存在が考えられる。国分氏は天正15年（1587）に滅亡し、この地は伊達氏の領有するところとなる。

江戸時代 慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いの際、岩出山城を本拠としていた伊達政宗は広瀬川の南の北目城に入り、会津の上杉景勝と対峙している。関ヶ原の後、慶長7年（1602）5月には仙台城が一応の完成をみており、寛永5年（1628）に完成した若林城とその城下は、仙台城下と共に仙台の大きな二つの核となったと言われている。その後若林城は廃城となり「古城」と呼ばれるようになったが、養種園遺跡内には、二代藩主忠宗により「御仮屋」が造営され、元禄5年（1692）には四代藩主綱村により「小泉屋敷」が造営された。さらには宝曆年間（1751～1764）に六代藩主宗村により小泉屋敷が再興され、この地域は近世を通して伊達家や仙台藩と深いかかわりを持つこととなる。養種園遺跡ではこれら「御仮屋」や「小泉屋敷」に関わる堀跡、池跡などの遺構が数多く検出されている。

明治時代以降 明治11年（1878）に城跡は中央監獄設立地として警視庁に買い上げられ、翌明治12年（1879）、西南戦争国事犯の収容を目的として宮城集治監が設置され、フランス式の六角放射監舎房（六角塔）が建築された。明治19年（1886）には土星上に作られた木柵囲が煉瓦塀に改修されるなど、諸施設の整備が順次進められ、明治36年（1903）に宮城監獄と名称を改め、大正11年（1922）には宮城刑務所となった。シンボル的建造物であった六角塔は昭和40年代に解体された。小泉屋敷の跡地は明治33年（1900）に伊達家により農業振興のための施設「養種園」として開設された。その後、宮城県、再び伊達家と經營管理が移るが、昭和19年（1944）には仙台市の管理となり長く農業振興に寄与したが、平成元年（1989）に閉園した。



第4図 若林城跡周辺の遺跡

第3節 若林城の概要

【若林城の構造】

若林城は東西に長い長方形を基本に四方に張出しを持った典型的な近世平城である。城の南北軸線は東に約10°傾いており、現在の周辺の道路や町並もまた城同様の方向をみせている。堀跡を含む城の規模は東西420m、南北350m、城内での規模は東西250m、南北200mと、一つの中心郭としては広大な面積を有しており、これは仙台城本丸や若林城廃絶後に造営される二の丸の規模に匹敵している。

外郭線は全て十星で、全体に土塁法面は外側に比べ内側がやや急な傾斜である。現況で石垣は全く確認できないものの、かつては門周辺などの一部に築かれていたことも十分考えられる。現存する土塁の高さは5m程度で、基底幅は約25mである。現在の土塁頂部は昭和53年の宮城県沖地震で倒壊した棟瓦屋根に代わり設置されたコンクリート塊が立つが、この設置時に大きく削平され、上幅が広くなっている。またかつての城門にあたる現在の三つの門周辺は大きく改変されているとみられるが、それ以外の部分はほぼ往時の姿を留めているものとみられる。

周囲の堀は昭和20年代以降の府庁や官舎建設に伴い、北及び西側が完全に埋め立てられたが、南側や東側部分は25m程度の幅があり、約1mの盛みを残す程度で、遺存状態は良好である。政宗の重臣である伊達成央が記した『政宗記』には、土塁の高さが二丈（約6m）余り、堀幅が30間（約60m）とあるが、現在確認できる堀幅とは相違している。また『伊達秘鑑』には堀に水を満えたとあるほか、寛保元年（1741）の『獅山公治家記録』には水不足の際は南側と北側の堀の水を用水とするとあり、城を巡る堀は造営当初から水堀で、廃城後もその形状を止めているものとみられる。

張出しは星線の北西隅部、西辺南端部、東辺北端部の隅に加え南辺中央部の4か所に配置されている。これらの場所に橋台などの特徴的な造構は確認できず、土塁の屈曲のみで構成されたものであるが、その存在はこの城が防御的性格をも兼ね備えていたことを示すものといえる。張出しの規模は南西隅部がやや小さい他は長辺側の法尻幅が90mの規模を持っている。

城の門は南辺を除く三方のほぼ中央に設置されていた。現在は土塁が幅十数m程度途切れていますが、かつての門を思わせるような遺構は見当たらない。但し西側から城内に入ると正面には鉤型に折れる内折形十星が配置され、城の北側に誘導される。桥形土塁は高さ2mと低いものだが、出入り口近くであり、後世に大きく改変されている可能性が大きい。かつては北側や東側にも同様の土塁があったことが廃城後に描かれた幾つかの絵図により確認できるが、これらは集治監設置時に撤去されたとみられる。さらに絵図では西側の桥形土塁がひとくわ大きく描かれているものがある。政宗の側近による『木村宇宙衛門覚書』には、大手は西であったとしており、この事から、若林城の大手口は仙台城や奥州街道と対応する西側にあり、西面する二つの張出しは防御上、城の正面を意識した配慮と推察される。

城内への入城路は現在東側が土橋状の通路となっているが、これが本来の姿かは不明である。しかし近年、大手側の外で実施した試掘調査で堀は確認できず、土橋であったことが判明している。

現在、城西側の広瀬川から取水した水を東の平野部へ流す六郷堀が城北側を東流している。六郷堀は削削時期が不明であるが、寛文9年（1669）の城下絵図が初見で、若林城造営前の慶長年間に遡る可能性もある導水堀である。絵図が描かれた当事、六郷堀の水は城の堀に流されると共にその一部は城内にも水路として引きしたと考えられ、集治監設置に伴い城内の水路は廃されたとみられる。『伊達便覧志』には広瀬川の水を堀にそぞぎ、守りを固めたとしている。このように六郷堀は若林城の造営や後にこの地に置かれた各種施設と共に姿を変えるなど、密接な関係を持っていたことが想定される。

[若林城造営前夜]

17世紀後半にまとめられた『仙台古城書上』には、若林城が造営される以前、小泉村には二つの城が存在したとしている。両者は平城で、一方は東西40間、南北38間で、城主は国分能登守である。もう一方は東西58間、南北38間で、城主は堀江伊勢や国分盛重が居住していたとされるが、双方とも南北朝時代以降、この地域で勢力を拡大したとされる国分氏に関わる城とされている。室町時代から戦国時代にかけて伊達氏の勢力が県内の名取・宮城郡地域に及ぶようになると、国分氏は次第に伊達氏の勢力化に組み込まれ、この後、天正年間に起こった内紛により国分氏は滅亡し、国分領は伊達氏の直接的な支配を受けることとなる。その際、伊達政宗は「国分」に使者を派遣しており、この地に国分氏の拠点的な城が存在していたと考えられている。しかし書上にみえる二つの城がこれらの城に該当するかは定かでなく、時代は下るが、元禄・享保年間（1688～1736）に書かれたとされる『東奥老士夜話』によれば、若林城はかつてこの地にあった城跡に築かれたとしているが、これもまた確証を得ない。

若林城に隣接する南小泉遺跡では、これまでの調査で周囲に堀を巡らした城跡や館跡が複数発見されている。しかしこれらは推定される存続年代や規模には様々な違いがあり、現時点ではこれらの城館跡を国分氏に関わる城に比定するのは難しい現状にある。

平成3年に調査を開始した美種園遺跡では、若林区文化センター建設予定地と都市計画道路「南小泉茂庭線」建設予定地において、15世紀末から17世紀初めにかけての複数の掘立柱建物跡やそれらを区画する溝跡が確認されている。これらは若林城造営以前の造構であるにもかかわらず、城および城下の軸線方向とほぼ一致する方向性を

西暦	年号	若林城・城下関連のできごと	仙台藩の主なできごと・開港特権など
若林城造営前半	(天文開拓)	国分氏の小泉城とその城下が存在【仙台故古城書】・東奥老士夜話】	
1593	文禄2		政宗、文禄の役で山陣
1602	慶長7		仙台城がほぼ完成する
1615	元和元年		八坂夏の陣に参陣する
1625	寛永2	政宗、若林に向く【喜山公治家記録】	忠宗が初めて国入りする
	寛永4	若林城の萬葉の高府の造営許りが下る【仙台故古城書】	政宗、花房屋敷より江戸参勤に山立
若林城期	寛永5	政宗、白日目宗祇に若林城とその城下菅鍬の権限下する【伊達家文書】	
1628	寛永6	若林城の百畳桶において英会船が解される【喜山公治家記録】	
1629	寛永8	若林城の丸に萬葉に掛するが解される【喜山公治家記録】	江戸城の石垣普請を令じられる
1631	寛永8	若林城が完成し、祝の儀が催される【喜山公治家記録】	
1624～1636	寛永年間	若林城の百畳桶において英会船が解される【喜山公治家記録】	
1636	寛永13	若林城に岩舟城の取り扱いを以て、戸戸で死する【喜山公治家記録】	江戸城の外番普請を令じられる
1638	寛永15	若林城にあった御物蔵の火災で丸と年度の接地面を焼失する	
1639	寛永16	仙台城二の丸建物に作り、若林城建物の部を移築する【喜山公治家記録・喜川家定記】	寛永年間で「喜川之丸御指図」が作成される
	寛永17	若林城奉行が掌が解される【喜山公治家記録】	
若林城後	寛永17	忠宗、即若林城下の北に「御飯屋」を造営する【対内風上記】(奥種園遺跡)	寛永の総理地が開墾される
1658	承保2	万治以前	奥州仙台城松炭(正保松炭)が作成される
1671	寛文11	忠宗、即若林城下の北に「御飯屋」を造営する【喜山公治家記録】	
1673	寛宝元	她御前にあった御物蔵で爆発があり、御物蔵を若林に移す【仙台鹿の子】	忠宗死ぬ、嗣宗三代薄子となる
1680	寛宝8	御物蔵、即若林城下にあった東北へいく【喜山公治家記録】	伊達騒動(徳文事件)がおこる
1687	寛宝4	延宝2の爆発で人足8人が死む、秋田震1,600戸余りが失われる【喜山公治家記録】	
1692	元禄5	羽衣屋、当地に別居(小林屋敷)を造営する【喜山公治家記録】	
1711	寛保元	北側の船を用水のため整備する【喜山公治家記録】	
1742	寛保2	若林城が再び城下に組み込まれる【原貴氏耳説】	
1748	寛延元	村村、若林城に立に寄り、米穀のものでなしを受ける【喜山公治家記録】	
(1751～1771) (元禄～明和)	明和元		
1768	明和元		
判務所開基	1787	明和11	西南戦争因襲の収容のため監獄の建設に着手する(宇六角塔の建設)
	1789	明和12	宮城城郭が設置される
	1922	大正11	宮城監獄を官城刑務所とする
	1965～1973	昭和40～48	六角塔の解体

第1表 若林城関連年表

持っており、のことから現在まで残る若林城の町割りは戦国期にこの地にあったとされる国分氏の城や城下の地割を踏襲したことによるものと考えもある。出土遺物には陶磁器のほか、金を溶解した坩埚などもあり、かつての国分城下には金加工に携わった人々もいたことが考えられている。平成10年から調査した義種園跡の街路西部の調査では、室町時代後半とみられる3棟の掘立柱建物跡と幅3mの防衛的な堀跡に加えて鍛冶炉跡や墓跡などが確認された。またその西側の保育院前遺跡からは鉄鍋の鋳型とみられるものも出土しており、当時の生産活動の一端を窺うことができると共に、国分氏にかかる城下が想定されることになった。

慶長7年（1602）に仙台城はおおよそその完成をみたが、その立地が政宗の常の生活の場としては不便だったからか、仙台城近くの「花壇屋敷」や「下屋敷」に度々出かけている。政宗は日常生活以外にもここで養心や政務を執るなど、両屋敷は政宗の私的な場に加え、仙台城本丸がもつ機能を一部有する補完的施設との指摘がある。現在の仙台市博物館建設に伴う三の丸の調査においては16世紀初め頃の庭園や茶室とみられる遺構が確認されており、これが「下屋敷」と推定されている。

寛永3年（1626）、政宗は外様大名としては最高位の権中納言に昇進すると同時に二代忠宗も右近衛権少将となり、幕藩体制における一大名として扱われるようになる。政宗が生前に藩主の座を忠宗に譲ることは無かったが、大御所的地位となりながらも依然政務の中心を担っていたものとされている。しかし肉者が仙台城本丸を居所とするには手狭であったとみられ、政宗は新たな居所を求めるようになった。そのためか、前年の寛永2年（1625）に政宗は若林の地に出かけており、これが新たな居城造営の下見とも言われている。この地は古くは北に国分寺や国分尼寺が建立され、中世には幹線道路である東街道が通り、城館や町場が形成されるなど当地方の文化・交通の要衝であったことが新たな城下を造る下地にもなったと考えられている。

【若林城の造営】

寛永4年（1627）2月、幕府より政宗に宛て、新たな屋敷の造営（「仙台屋敷構」）を許可する老中奉書（『土井利勝外三名連署奉書』）が出された。これが「若林城」の普請許可である。元和の一国一城令のもと、幕府に対しては「屋敷」と称したが、藩内の文書や絵図には「若林城」や「御城」などと記され、政宗自身もこの屋敷を造営当初から「城」と称していたことがわかる。当時、領内に城にも匹敵する新たな「屋敷」を築くことに対し、幕府は「心之儘可有普請」とし、政宗の思うように造ってもよいとの寛大な対応に、当時の政宗の地位の高さを窺うことができる。

それから間もない同年5月、政宗が普請にあたっての指示内容を記した『若林普請覚』には、「御山里石かき仕候事」、「同所南西で仕候事」、「南之丸へ御入水とり申事」など、若林城に関する普請内容が見られる。また一方では橋を架けることや水運関係の施設を整備することなど、城下における交通や流通網の整備に重点を置いていることが見て取れる。さらに当時越路にあった覚範寺まで水道を造るとあることも若林城との関係を連想させる。

また普請中、大雨で城北側の土居が破損した際には葦の敷き方や調達方法、領内からの人足の集め方など、政宗は藩主としては異例ともいえる詳細な指示を自ら出している。（『政宗君記録引証記』）

そして普請開始から1年半した寛永5年（1628）11月に政宗は完成した若林城に入り、移徒の儀を催している。（『貞山公治家記録』）以後、政宗は若林城を国元にいる際の日常の居所とし、仙台城には公的な儀式の際に赴く程度であった。これは忠宗が江戸参勤で仙台を留守にする際も変わらず、政宗が江戸参勤の際には若林城から出立している。

若林城に関しては当時の城内を表した絵図の類は一切残っておらず、幾つかの文献によりその様子を知るのみである。『若林普請覚』にある若林城内に関する記述を見てみると、「山里」は城の中でも奥側にある庭園を伴った私的な空間とみられ、性格は不明であるがそこに「石垣」が築かれていたことや、鍛錬場所である「的場」があったことが窺える。「山里」南西の「どて」は現在ある土塁なのか、あるいは全く別の施設を指すかは不明である。さら

に「南之丸」に水を引き入れたとあるが、そこには曲輪ともとれる広い空間や庭園の存在も推定される。「御城門前あく水おとし樋」については、城門前の排水に関する施設についてのこととみられ、城の立地や堀との関係から考えると、普請にあたっては水の引き方や処理が大きな問題の一つであったと考えられる。また『東奥老人夜話』には、城の東南角には「矢倉」があり、北に庭園に伴う「築山」があったとしているが、現況では確認できない。現在残る城跡はその規模の大きさから一重の上屋と堀に囲まれた単一の郭との認識が強いが、『若林普請覚』の記載も含め、以上の名称をもった城の施設が全て現在の城跡内に限っての様子であったかは不明である。

政宗は寛永間に茶会や能などを催している。幕府役人を費応したとされる「西曲輪」はこれまで仙台城内の施設と考えられてきたが、最近の資料調査によりこの曲輪は若林城の外曲輪的な一角であったと考えられている（注1）。『政宗記』には「若林の西曲輪」で能を催したとあり、また『木村宇右衛門覚書』には、政宗が「にしくるわ」という出丸（=曲輪）に屋敷を構えたとあるが、この場所が城のどこにあったかは現時点では不明である。さらに18世紀中頃の『節翁古譜』には、四代藩主綱村により若林城の北に造られた伊達家の別荘である国分小泉屋敷は若林城の「出曲輪」にあるとし、若林城が本来どのような規模や構造をもった城であるかなど問題は尽きない。

現在、城内の東側には政宗が文禄の役（1593）で渡済した際に持ち帰ったとされる朝鮮梅（臥竜梅、国指定天然記念物）が毎年花を咲かせている。梅は廃城後の絵図にもほぼ現在の位置に描かれており、この特別な樹木が植えられた場所は城内の庭園の中でも特別な所であったと推定される。

城の造営とともに周辺には新たな侍屋敷や町屋敷が割り出され、仙台城下と双方に屋敷を構える家臣も多かったとされる。『仙台鹿の子』には城下の範囲を、「東南は野を限り、西は土樋東駒込沙門堂通町切、北は三百人町切なり」とあり、おそらく東は遠見塚古墳付近までの東西に長い範囲とされる。現在この範囲の町並みは概ね城跡の軸線方向と一致している。記録には「米町」や「綿布町」の町名も見え、仙台城下とは別に「若林町奉行」も置かれていた。（『石母田家文書』）

寛永13年（1636）12月に藩政の基本となる領内検地帳を収めた「若林」の御帳歳が火災にあったとされる。（『義山公治家記録』）具体的な位置は定かでないが、御帳歳の存在はこの城が単に隠居屋敷的な私的なものではなく、行政政としての性格を有していたこと裏付けるものといえる。

【若林城の廃城】

寛永13年4月、政宗は参勤で江戸に向かう際、城の南西に杉を植え、堀一重を残し城は廃するよう命じ、同年5月に江戸でこの世を去った。若林城の廃城はこの城があくまでも仙台城の機能を補完するもので、かつ政宗晩年の私的な性格を有する城郭であったゆえとの見方もできるが、その背景には政宗亡き後、藩主となった忠宗が手狭になつた仙台城本丸に代わる新たな藩庁として、若林城の果たしてきた機能そのものを取り込む形で二の丸造営に着手したことにも現れているといえる。

城内の建物の一部は寛永15年（1638）に造営が開始された仙台城二の丸の殿舎として順次移築された。寛永15年12月に焼火間、虎間、納戸、茶道部屋、鋪間、上台所、風呂屋、大台所、小姓間、御用間、脇部屋、鷹部屋、算用屋と、数多くの建物が上棟されている。以上の建物は二の丸での呼称だが、これらはみな若林城の建物であったとしており、（『義山公治家記録』）このことから若林城には複数かつ大規模な殿舎が建ち並んでいたことがわかる。これ以後も御座間、書院、広間など殿舎の中でも主要な建物の上棟が続くが、これらの建物については若林城から移築したものは不明である。完成後あまり時を経ない時期の二の丸御殿群の状況を描いた『御二之丸御指図』には、若林城から移築したとされる焼火間、虎間、上台所、大台所などの建物が描かれている。また若林城の建物は仙台城下の寺院や家臣屋敷などにも移築したとされる。片平丁にあった重臣の茂庭家の屋敷門や、幕府役人や他藩の大名などの宿泊にあたつ大町外人屋の御用を務めた泉屋庄右衛門の屋敷は、若林城の門や黒書院を拝領し移築したものという証據があるほか、（『茂庭家記録』・『仙府明石屋資料』）記録には無いが、新寺の松音寺山門や政宗の城

廟瑞鳳殿の御供所もまた城の書院を移築したものとされている。移築に際しては「若林御家撥方」や「古材木受取渡方」という役職の者が関わったとされている。

廃城と共に若林城下も解体されていく。城近くの侍屋敷は焼され、西側の町人町や足輕町は仙台城下に組み入れられることで仙台城下の南東側は大きく広がったが、城周辺を含む東側一体は田畠になっていった。

【若林城のその後】

貞享4年（1687）の『背山公治家記録』に「若林」にあった塩硝蔵（＝火薬庫）が爆発し多くの鉄砲薬が消失すると共に、人足8人が死亡した記録がみられるが、これは城の外で起きた出来事とみられる。これに対し、延宝8年（1680）の同資料には「若林薬園」に四代藩主綱村が出かけたとの記録がある。これは「薬園」の初見で、薬園は藩の管理下にあった施設の岡面をまとめた「御修復帳」にも描かれていることから、廃城から40年後にはこの地が藩営の薬園となっていたことが窺える。

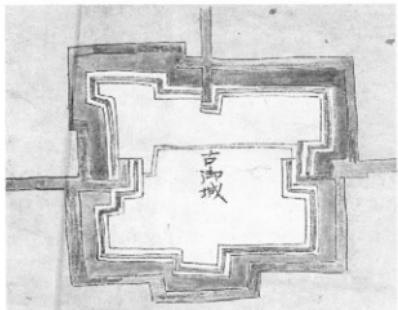
若林城を描いた絵図の類は幾つか残されているが、それらは全て廃城後の姿を描いたものであり、かつての城内にどのような建物が存在し、あるいは城の外側の状況がどうなっていたかなど不明な点が多い。若林城を描いた中で最も古いとされる『仙台城下絵図』（宝暦7～明和3年=1757～1766）には「古御城」とあり、城の詳細まで記録したものではないが、張出しを伴った外郭の形狀は現在とほぼ同じである。城内には広瀬川から導水した六郷堀が通り、東口より城外に出ている。天明6～寛政元年（1786～1789）の城下絵図には南西隅部張出しの形状に違いがあるが、これは以前の絵図を書きした際の誤りとみられ、後の改修によるものでは無いと考えられる。城下絵図においては最も古い『奥州仙台城絵図』（正保絵図）以降、若林城跡の範囲まで記載されることなかったが、寛保2年（1742）に「古城」が小泉村分から仙台城下に組み込まれてからはその姿が描かれるようになる。

城下絵図以外にも城自体を描いた絵図が複数存在している。『御修復帳』の「若林御薬園」や「若林古御城」は、堀や土塁などが規格化された描かれ方で、やはり南西隅部の形狀が現況と異なっているが、現在はみられない堀や水路と土壘の配置関係などがわかる貴重な資料である（注2）。城内をみると北西側には薬園を管理したとみられる東西に長い建物が1棟あるほか、城内を横断する通路や引き込まれた六郷堀の一部がみられる。西口から入った堀は舟形土壘の下を通ったのち北側に折れ、建物付近には幾つかの小橋が架けられている。堀の幅などは明らかでないが、現在の六郷堀から推測して幅の広い堀だったと考えられる。また土壘上部には堀を巡らせていたことがわかる。南側中央には雲形の不整形プランが描かれ、通路が取り付いている。このプランはその形状や位置からみて大規模な「池」だった可能性があり、絵図の通り薬園に伴う施設であることも否定できないが、おそらくは若林城造営時に庭園に造られた施設の可能性が高い。池の西側には中島とみられるものや、東端には排水路らしきものも描かれている。池跡は東西が100m程度と推定されるその規模の大きさから、廃城の際にも埋められることなく、近世を通してその形状を留めていたものと考えられる。平成16年度の試掘調査ではこの地区で植物遺体を含む水性堆積土壌を確認しているほか、平成17年度末の確認調査では池東端らしき法面を広範囲に確認している。

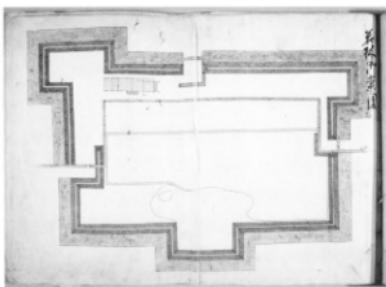
『古御城絵図』（年代不明）もまた薬園時代の様子を描いた絵図とみられる。外郭の基本形や構造は先と同様であるが、3か所にある内舟形土壘の形狀や規模に違いがみられる。しかしこれもまた改修等に起因するものではないとみられる。建物は規模や部屋の配置が多少異なり、加えて西口や建物周辺に堀や井戸、杉や竹による生垣がみられ、中央には杉や檜を植えていたことが確認できる。『御修復帳』図に描かれた池とみられるものは無く、この時代にはすでに機能していなかったと推測される。また城の西口部分には「大手前」の記載がある。

その他の文献には、堀の水が農業用水に使用されるのに伴い、堀を改修したことや、藩主や役人が薬園を訪れたことなどがみられる。また城内に入らないよう触れた立札を上手に立てたなどもあり、城にかつての姿は無く、完全に歴史の表舞台から消え去ってしまったようである。

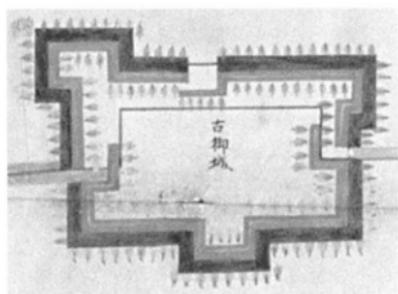
明治12年（1879）、城跡に西南戦争国事犯の収容を目的として宮城集治監が設置される。ほぼこの時期に撮影さ



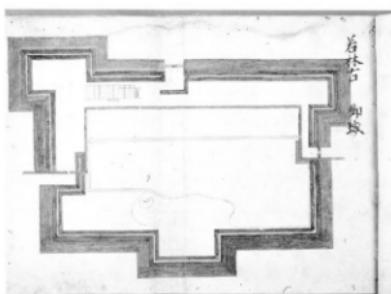
『仙台城下絵図』部分（宝暦～明和）
(財) 齋藤報恩会所蔵



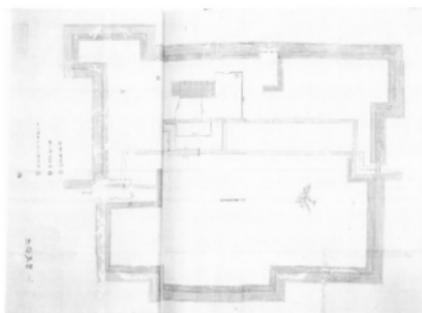
「若林御菜園」『御修覆帳』(宝暦～安永)
東北大学大学院工学研究科都市・
建築学専攻空間文化史学分野所蔵



『仙台城下絵図』部分（天明～寛政）
仙台市博物館所蔵



「若林古御城」『御修覆帳』(文化～文政)
宮城県図書館所蔵



『古御城絵図』
宮城県図書館所蔵

第5図 若林城関連絵図

れた写真（写真図版2）には、現在よりやや高かったとみられる土壘上に木柵が設置され、西側の堀がまだ埋められていない状況や六郷堀を流すため桥形土壘の下に埋設された管が見て取れる（注3）。しかし若林城はこれ以降、現在に至るまで外界と完全に隔絶された空間となる。

（注1）仙台市博物館の菅野正道氏による。（『仙台市史 特別編7 城館』に掲載している）

（注2）『御修復帳』所収の「若林御築園」（東北大学所蔵）は宝暦から安永頃、「若林古 御城」（宮城県図書館所蔵）は文化・文政頃のものとされている。

（注3）宮内省所蔵で、現在のところ若林城跡を撮影した最も古い写真である。

第4節 これまでの調査

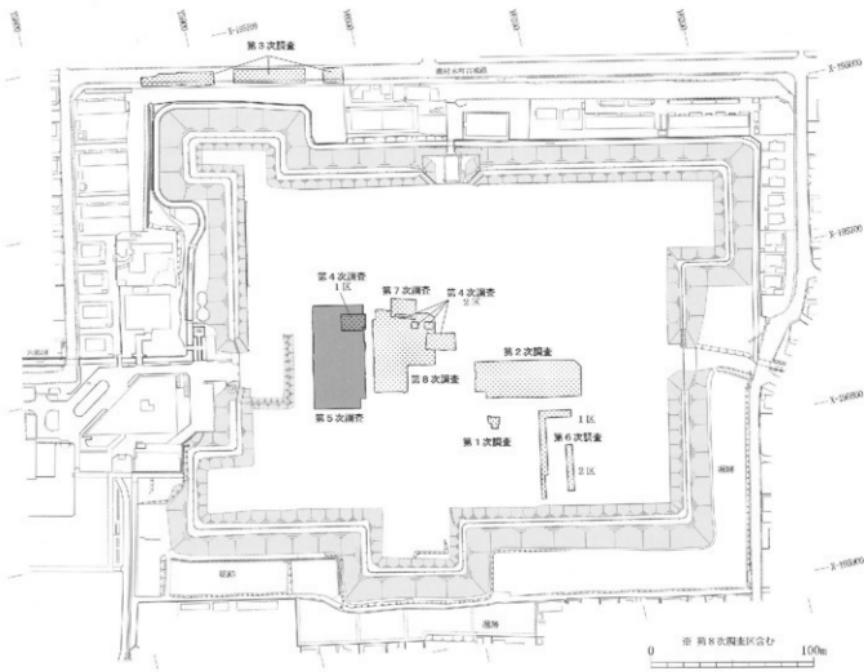
若林城跡の調査は第4次調査を含め、これまでに4回実施されている。

昭和59年に宮城県教育委員会と合同で実施した第1次調査は講堂建設に伴う事前調査である。調査地は城内の南東部に位置し、調査面積は43m²と狭かったが、検出遺構には掘立柱建物跡1棟のほか、柱穴の可能性のあるピット群があり、これらの時期は中世から近世初めで、若林城に関わる遺構群の可能性も指摘された。

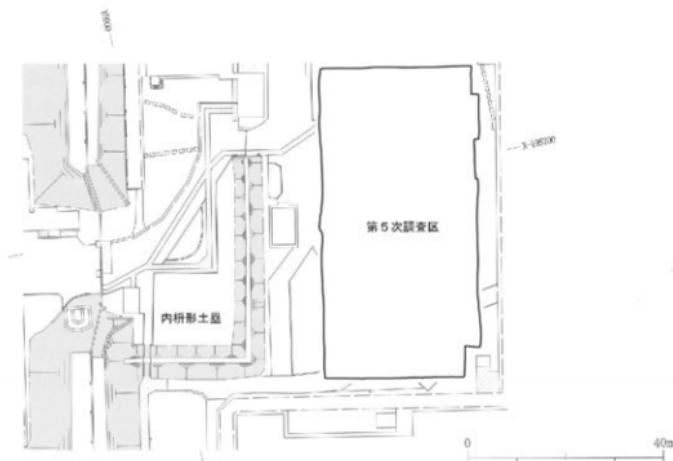
第2次調査は第1次調査区の北側に位置し、職業訓練棟建設に伴う事前調査として昭和60年に宮城県教育委員会と合同で調査を実施した。調査面積は1,423m²である。遺構面はこの地域に広くみられる中小河川起源の自然堆積層上面の1面で、人為的な整地層や耕作土層などは確認できなかった。検出遺構には5世紀後半から6世紀初めの円墳1基、平安時代の竪穴住居跡4軒のほか、同時期とみられる竪穴遺構や土坑、河川跡などがある。古墳は円筒埴輪を伴うもので、若林城跡周辺ではこれまで、同様の時期の古墳は確認されていない。また竪穴住居跡については城の外側北東部で実施された市計画街路建設に伴う南小泉遺跡第22次において平安時代の竪穴住居跡が12軒検出されており、城内の住居跡もこれらと一連のまとまりの中で捉えられるものと考えられる。近世の遺構としては1基の円形土坑から丸瓦、平瓦、駿斗瓦などの近世瓦が出土したことから、この遺構が唯一若林城に関係した遺構と推定された。また基本層からは連珠三巴文の軒丸瓦や17世紀初頭の志野の範が出土している。しかしながら調査区内での擾乱状況から、城の遺構のはほとんどは後世の刑務所施設の度重なる改変により既に失われていることが示唆された。

第3次調査は城の北側にある都市計画道路「南木材町・古城線」の拡幅工事に伴う事前調査で、本調査は平成11年に実施した。調査地は若林城北西隅に配置された土壘と堀による「張出し」の北側に位置し、調査面積は370m²である。調査では全域において城北辺の堀跡北岸を確認したほか、東端部では堀線に沿い南側に折れる屈曲部を確認した。このことから堀が若林城廃城後に描かれた幾つかの絵図にみられる堀の形状とはほぼ一致することがわかった。しかしながら調査区の制約から堀自体の形態は不明で、また調査区が堀の深部にあたっていないため、出土した遺物は19世紀を中心とした瀬戸美濃産や大垣和馬産の陶磁器や、一括で廃棄された下駄や板材などの木製品のほか、近現代の遺物がほとんどであった。若林城の北辺堀については明治11年に宮城集治監が設置された以降、近代を通じどのような状態にあったかは定かでないが、昭和20年代に刑務所官舎の建設に伴いほとんどが埋められ、最終的には昭和40年代の六角塔の解体に伴う廃材処理等により完全に埋め立てられた。

なお、第5次調査は平成17年度に実施されたが、報告書作成ならびに刊行は平成19年度事業となった。したがって本報告書作成作業開始時には平成17年度の仮設職業訓練棟建設に伴う第6次調査と平成18年度の国庫補助による第7次調査は既に終了しており、平成19年3月には両調査の発掘調査報告書も刊行済である。また平成19年実施の炊場棟建設に伴う第8次発掘調査も終了していることから、その成果の一部を本報告に反映させていることを予め述べておく。



第6図 これまでの調査区位置図



第7図 第5次調査区配置図

第3章 調査の方法と経過

第1節 調査の方法

今回の調査は宮城刑務所全体改築計画の第1期工事地区を対象として実施したもので、若林城跡に関連する調査としては第5次調査にあたる。調査区は城の大手口と想定される西側出入り口内にある内枠形土塁の東隣に位置しており、平成16年度に実施した第4次調査の1区部分を含んでいる。調査区は建築予定建物の範囲となる東西約31m×南北約64mの範囲を調査区として設定した。

調査は第4次調査の成果をもとに、現表土層から近代の整地層であるⅡ層までをバックホーにより除去したところ、昭和40年代に解体された旧監舎房（通称 六角塔）の布掘状の基礎が広範囲に確認され、また後世の擾乱による造構面の破壊が著しかったものの、ほぼ全域において畑耕作土であるⅢ層を確認することができた。調査はまず擾乱を掘削除去した後にⅢ層上面での造構検出作業を行い、僅かではあるが土坑や集石造構を検出することができた。後に1号石敷造構となる部分では、耕作による攪拌を受けたものの、Ⅲ層面の確認段階より小礫の分布が密に確認された。続いてⅢ層を人力により除去したところ、全域において若林城の整地層であるⅣ層が確認された。なおⅢ層掘削途中には多くの瓦片を含む近世の遺物が出土しており、これらを取り上げながらの掘削作業となった。

Ⅳ層上面での造構検出の結果、溝跡や土坑・ピットやⅢ層の畑耕作土に関連すると思われる小溝状造構群などと共に、礎石跡や溝跡からなる建物跡が複数検出された。さらには建物跡周囲に広く石敷造構も検出された。調査はまず近世の石組水路である1号溝跡から行い、集石造構、土坑、小溝状造構群など、若林城に直接関わらないと考えられる造構の掘り込みを順次行ったが、城の造構と重複関係の無いものについては掘り込んでいないものもある。

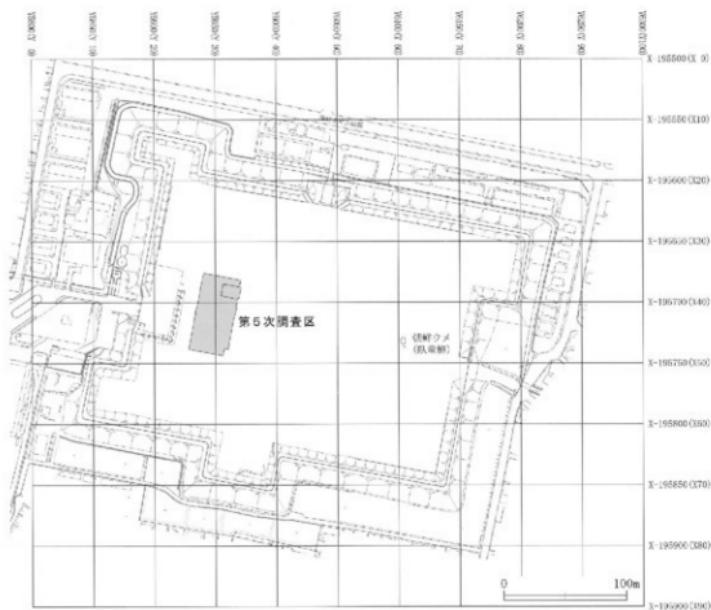
これらの造構の状況からその重要性が議論され、造構の保存に向けた協議も継続して行われるようになると、調査は当初の造構の全面掘削から、造構の確認とその時期の確定や構造の解明に主眼を置いた調査へと大きく方針が変更される可能性が出てきた。そのため調査においては全ての造構の掘り込みは行わず、若林城造構の大部分を占める礎石跡については、搅乱等を利用して断面記録や確認段階での礎石状況の図化を行ったほかに、全体の残存状態の良好な幾つかのものについては掘り込みを行い、その構造を記録した。また溝跡についても各辺に掘り込み箇所を設定し、限定的な掘り込みを行った。

通常の造構写真の撮影に加え、造構確認の終了段階にはラジコンヘリによる空中からの撮影を行い、同時にビデオ撮影も行った。調査の最後には造構を養生した後、砂による埋め戻しを行い、全工程を終了した。

記録図面作成の基準は、あらかじめ調査区周辺に世界測地系平面直角座標第X系に準拠した基準点を設置し、自動追尾型トータルステーション（APL-1 株式会社トブコン）を用いたCG平板システム（MAPCAD11 株式会社バスク）によりデータを取得し、CADソフト（AUTOCAD®2004 オートデスク株式会社）を用いて編集作業を行なった。また土層図は手測実測の手法をとり、礎石跡、石敷造構、溝跡、集石造構などの石材の確認状況や、遺物出土状況は状況に応じ、單写真やステレオ写真による写真測量を併用した図化作業を行った。なおデータの取得方法や図面データのレイヤーコード、図面表記の方法などは仙台市の仕様にしたがった。

調査区のグリッド標記は、今後の城内の調査を鑑み、若林城跡全体に世界測地系平面直角座標第X系に基づき5mの方眼グリッドを設定した。グリッドは若林城の北西隅を基点とし、東西方向をY軸、南北方向をX軸とし、Y軸は西から東にむかひY1、Y2、Y3…、X軸は北から南にむかひX1、X2、X3…とし、これらのラインの交点名により同時に南北側グリッド名を表記している。

出土した遺物は基本層や擾乱出土のものは原則としてグリッドごとに取り上げ、造構内出土品については個別層位により取り上げた。また陶磁器や金属製品などの遺物については個別に位置を記録し取り上げを行っている。



第8図 グリッド設定図（全体）



第9図 グリッド設定図（第5次調査区）

第5次調査区は第4次調査区1区と重複するため、改めて造構の検出を行うと共に造構名称についても新たに振り直しを行った。礎石跡や小溝状造構など、新たな認識のもとに造構種別を変更したものは改め、第4次調査において造構と認識されたものの今回確認できなかったものについては除去した。

第4次調査名	検出層	第5次調査名	第4次調査名	検出層	第5次調査名
SK-1	IV層上・地	小溝跡 2 - 4	P10	Ⅳ層上・地	1号壁と埴物跡 2
SK-2	IV層上・地	1号壁と埴物跡不詳	P11	Ⅳ層上・地	P14
SK-3	IV層上・地	小溝跡 2 - 4	P12	Ⅳ層上・地	P15
SK-4	IV層上・地	SK-3	P16	Ⅳ層上・地	2号壁と埴物跡不詳 5
SK-5	IV層上・地	小溝跡 2 - 3	P17	IV層上・地	1号壁と埴物跡 6 3
SK-6	-	-	P18	Ⅳ層上・地	1号壁と埴物跡 6 1
SK-7	-	-	P19	-	-
SK-8	-	-	P20	-	-
SK-9	IV層上・地	小溝跡 2 - 4	P21	-	-
P-1	Ⅲ層とⅣ層	古代擾乱	P22	-	-
P-2	Ⅲ層とⅣ層	古代擾乱	P23	Ⅳ層上・地	SK-205
P-3	Ⅲ層とⅣ層	古代擾乱	P24	-	-
P-4	IV層上・地	1号壁と埴物跡 6 6	P25	Ⅳ層上・地	P16
P-5	Ⅲ層とⅣ層	古代擾乱	P26	-	-
P-6	IV層上・地	1号壁と埴物跡不詳 26	P27	Ⅳ層上・地	P17
P-7	IV層上・地	P13	P28	Ⅳ層上・地	1号壁と埴物跡 6 7
P-8	Ⅲ層とⅣ層	SK-5	P29	Ⅳ層上・地	古代擾乱
P-9	IV層上・地	1号壁と埴物跡 6 4	-	-	-

第2表 第4次調査1区造構名称対応表

第2節 調査と保存に至る経過

(1) 調査の経過

発掘調査は平成17年5月23日から平成18年1月31日の実働165日に及んだ。以下に調査の経過を記述する。

5月 23日から現地作業を開始したが、25日までは一部に残存していたコンクリート基礎などの構造物の撤去立会いと並行し、調査事務所・現地休憩棟設置などの諸準備を行った。26日から表土掘削を開始し、第4次調査の成果に基づき、近代の整地層であるⅡ層までをバックホーにより除去し、排土は場外搬出した。27日からは一部の作業員を入れ、表土掘削の完了した地区よりシート養生作業を行った。

6月 1日からⅢ層面と調査区壁面の整備を行った。大型の搅乱はバックホー、小型の搅乱は人力により適宜掘削を行なながら、順次造構検査作業を行った。24日には表土掘削が終了し、調査区北西部の広範囲に小礫が散乱する状況が確認され、これが広範囲に広がる石敷造構となるものと思われた。

7月 搅乱の掘削及び造構検査作業を行った。11日から15日にはⅢ層上面での造構検出写真撮影を随時行った。19日から1号溝跡の掘削を開始し、石組み溝と判明した。また土坑や集石造構についても随時凹化作業を行ないながら掘削を行った。25日からは現場作業と平行して基礎整理作業員による出土遺物の水洗作業も開始した。

8月 3日から調査区西南隅よりⅢ層の除去作業を開始した。5日には1号溝跡の石材検出状況の写真測量を行った。8日からは礎石跡が検出されるようになり、礎石建物群の存在が序々に明らかになってきた。11日から17日は盆体のため休工とした。18日から作業を再開し、Ⅲ層の除去作業を継続した。礎石跡や雨落ち溝跡とみられる溝跡が確認されると共に、これらを切る形で小溝状造構群が全体に確認され、Ⅲ層が耕作により形成された層であることが判明した。

9月 22日にⅢ層の掘削およびIV層上面での造構検査作業を終了し、この時点で礎石建物跡4棟、石敷造構5か所等の若林城の諸施設を確認した。28~29日にかけてIV層上面の造構検査状況写真撮影を行った。30日からは小溝状造構群の掘削を開始し、その方向から2時期に大別された。

10月 3日、6日に仙台市史編さん委員、12日には宮城県文化財保護課の視察を受けた。13日には小溝状造構群の調査を完了し、全景写真撮影を行なった。また重複関係から若林城の造構より新しいとみられる造構については記録をとりながら順次掘削を進めた。これらの造構掘削と平行して礎石跡や雨落ち溝跡、石敷造構などの若林城期

の遺構について詳細な検出作業を行なった。10月以降は視察者が相次ぐようになった。

11月 2日から1号溝跡の古段階の調査を開始し、新段階同様に石組溝であることが判明した。19日には全国で初となる矯正施設内での遺跡調査成果報道発表会を実施し、同日午後にはラジコンヘリによるIV層面での全景写真撮影を行なった。30日からは1号建物内の焼面を持つ土坑の掘削を行い、これが建物に付随する施設と考えられた。

12月 6日に仙台市文化財保護審議会の視察を受けた。遺構の保存も視野に入れ、同日より若林城期の遺構である礎石跡や雨落溝跡などの部分的な掘削を開始した。掘り込みはなるべく擾乱等を利用し、断面の観察を行なったほか、残存の良好な数基の礎石跡や地区を確定した溝跡については手順を踏んだ調査を行なった。この結果、礎石跡や溝跡の構造は地点により異なるが、建物やその周辺施設は基本的に改築や増築等の変更を受けていない状況にあることが確認された。10日には文化庁記念物課 板井主任調査官の視察を受け、13日には東北大大学 佐藤巧名監督教授の現場指導により、1号建物跡の構造が仙台城二の丸の大台所と酷似する指摘を受けた。また26日には奈良大学 千田泰博准教授の視察を受け、多くの方々から遺構ならびに遺跡に対する高い評価をいただいた。

1月 5日から作業を再開し、遺構の掘り込みと記録作成を継続した。そして当初予定した掘り込み作業が完了した16日から、遺構養生用として不織布を敷き込んだ上に川砂により埋戻し作業を行った。26日には文化庁 山崎秀保記念物課長の視察を受け、31日には埋戻した砂の上をシートで覆い、全ての野外作業を終了した。

(2) 保存に至る経過と保存方法

仙台市教育委員会は第5次調査の成果を受け、平成17年10月25日付で宮城刑務所に遺構の保存を求める意見を付した中間報告書を提出すると共に、宮城県教育委員会に報告した。これを受け、宮城刑務所は遺構の取扱いに関する協議依頼を仙台市教育委員会に提出し、これを宮城県教育委員会に進呈し、保存に関する協議が開始された。

平成17年10月25日、初めて中間報告を行うという形で、当課と宮城刑務所ならびに仙台矯正管区との間で話し合いが持たれた。ここでは当初の計画であった遺構の破壊を前提とした記録保存による調査ではなく、あくまでも遺構の保存を希望するという仙台市の基本方針が示された。これに対し宮城刑務所側は施設の老朽化と収容者の増加により処遇管理棟を早急に建てが必要があることがあらためて示された。

第1回目の協議は平成17年11月2日に宮城県教育委員会を交えて行われた。あくまで保存を主張する仙台市と宮城県の文化財側に対し、来年早々の工事開始を目指す刑務所側の意見は平行線のままであったが、この中では刑務所側から、建設した建物内部や周辺地区に遺構のレプリカを作ることや、文化財側から、何かしら別な基礎構造に変更することにより、地下遺構を損わないようにする方法の有無などの意見も出された。協議は今後、宮城刑務所側が法務省との打合せを持ち、また当課も教育委員会全体での意見を再度まとめて終了した。

第2回目は11月22に行われた。文化財側としては永久構造物に相当する建物の基礎変更による保存はあくまでも最後の手段であり、まずは工事計画を見直し、建設場所を城内あるいは全く別の場所に求めるという考えが出された。これに対し刑務所側からは城外に建設するのは現時点では論外であり、また城内の別の場所を考えるにしても今後計画しているすべての建物配置に影響が出ることに加え、新たな発掘調査の必要性もあることで期間的にも到底無理との意見が出された。その後刑務所側から一つの案として建物底面に耐圧板を敷き、べた基礎として建物荷重を分散させるという基礎構造の変更案が提示された。しかし文化財側としては建物下部となる遺構は原則的に全ての遺構を掘り上げる事前調査の対象となり、またそのような状況下にある遺構は保存した状況には無いとの意見が出され、依然として両者の話は平行線のままであった。協議の最後には翌月に来れる文化庁記念物課 板井主任調査官の意見を受けた上で次の協議を行うことが確認され、また刑務所側は基礎構造の変更を想定したデータの再計算をすると約束となった。

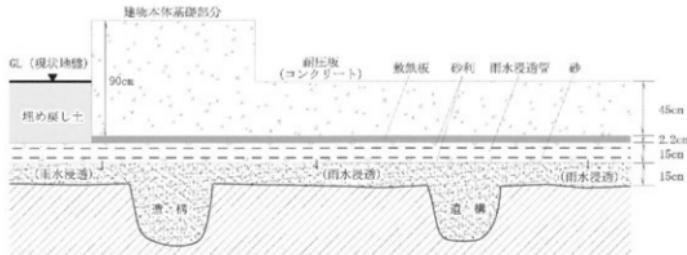
12月10日の板井主任調査官来館の際は、発見遺構に加え、刑務所施設の視察の後、宮城県文化財保護課と当課

との話し合いを持った。調査官からは今回の調査で発見した遺構群のみならず若林城跡における土塁や堀跡などの遺存状況は高く評価でき、国の史跡に相当するものとの話をいただいた。また保存方法においては遺構の破壊は認められず、あくまでも現位置での遺構保存を求めていくべきとの意見を受けた。

この後、1月の文化庁記念物課と法務省矯正局との話し合いや、1月26日の文化庁記念物課長の視察を経て、今後、若林城跡の史跡指定を図るため、長期的な展望のもと施設を他所に移転することを前提として、処遇管理棟については原案の位置を変更することは極めて困難なため、原位置において盛土による保存措置を執ることが両者で確認された。この基本方針を受け、平成18年2月14日に行われた第3回目の協議では今後の建設に伴う工程や建物下となる遺構の活用などの具体的な協議が行われた。

そして平成18年3月31日付で、文化庁、法務省、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会の四者により「若林城跡の取扱いについて」の合意が成された。その内容は先の基本方針に加え、今後の施設建設にあたっては建物面積全体を対象とした発掘調査により配置計画をその都度再検討することや、可能な限り早期に若林城跡の史跡指定に向けた取り組みを行うこととしている。

1月の基本方針を受け、調査地は埋め戻されることとなった。作業はまず遺構面の養生として厚さ1.6と3mmの不織布を石敷遺構や礎石跡などの疊部分を中心に敷いた後、攪乱部分も含め砂を厚さ15cmで敷き均し、これをもつて一連の調査を全て終了している。3月からは処遇管理棟の建設に伴う工事が開始された。初めに砂をローラーで転圧した後、全面に15cmの厚さで碎石を敷き均した。この中には建物外部から通じる径70mmのナイロン製の透水管を暗渠として3m間隔で埋設し、建物外部で降った雨が建物基礎内部に入ることで遺構面周辺土中の水分を保持している。また碎石層上面には基礎全面に厚さ22mmの鉄板を敷くことで、将来予想される建物解体に伴う遺構破壊の危険性に対処することとした。建物基礎は鉄板上に厚さ45cm（建物の側と内部の梁部分は90cm）のコンクリートを打設し、これを耐圧板として直接基礎とすることで建物全体が荷重を受ける構造とし、遺構に及ぼす影響を極力少なくしている。また埋め戻しに先立ち、建物周辺の6か所において工事に伴う遺構面の沈下の有無を確認するための耐圧試験を実施している。



第10図 遺構保存断面模式図

(3) 普及啓発活動

平成17年度の第5次調査から今日に至るまで、若林城跡の調査成果を公表する機会として、一般市民を対象とした説明会や展示会に加え、各種刊行物などによる普及啓発活動を行っている。中でも報道機関を対象とした発表会は第5次、第8次調査で実施しており、また市民を対象として実施した第8次調査の現地説明会においては、参加者数の制限はあったが、矯正施設内での初の試みとして実施され、多数の応募があった。発表会・展示会では「宮城県遺跡調査成果発表会」をはじめ、当課主催の文化財展による公開、さらには平成18年度の文化庁主催の「発掘された日本列島2006」に出展することで、若林城跡を全国的に紹介している。

種類	年 度	月 日	内 容	主催など	場所など
若道早農会 ・若林城跡会	17	11/19	第5次創生事業研究会	仙台市教委企画会	若林城跡
	19	11/1	男女次回調査企画会議	仙台市教育委員会	若林城跡
	19	11/7	第8次調査現地説明会	仙台市教委企画会	若林城跡
講演・講話	18	11/9	地域が宿す歴史課題～些細城辺り～	若林城中央公民センター	若林区中央戸田センター
	18	1/29	若林城跡 若林城跡	仙台市	東吾町内会
	19	5/19	若林城一発見！歴史の城～	地底の森ミュージアム	喜武町新保子駅
	19	9/28	幕末時代の若林城	仙台城ガイドボランティア会	片平市民センター
	19	1/28	神奈を守護する八本松の歴史今	八木町市民センター	八木町山崎センター
発表会・展示会	17	12/18	宮城県遺跡調査成果発表会	宮城県考古学会	東七北支那博物館
	17	3/27～3/27	実城の世界調査会「日本」編	仙台市教委企画会	仙台市戸川二丁目
	17	3/27～3/27	第4回「文化財と癒やされた仙台」	仙台市教委企画会	東北農大グリーンシップワード
	18	4/20～4/25	発掘された日本E台2006	文化庁	全国7か所を通じ
	18	10/17～10/29	第45回「身に寄る歴史と語り始めた遺跡たち」	仙台市教委企画会	仙台市博物館
	19	11/7～11/25	東北沿岸開拓調査報告会「あれこれ」	若林城中央公民センター	若林区中央公民センター
	19	4/20～6/17	介護展 老健館～一風家の城～	地底の森ミュージアム	喜武町新保子駅
	19	11/3	講下屋	法務省	宮城県警察
	19	12/16	青砥川跡調査試験発表会	宮城県考古学会	仙台市博物館
	19	1/1～1/20	宮城の防衛調査セミナー	宮城県考古学会	宮城県立図書館
資料物	17	9月	「年報第1回」(平成16年度分)	仙台市教委企画会	(仙台市文化財調査企画会第26集)
	17	2月	「文化財せんぐい'98号」	仙台市教委企画会	
	18	4月	「日本歴史 206号」	日本歴史学会	
	19	5月	「宮城考古学 第8号」	宮城県考古学会	
	18	9月	「年報第2回」(平成17年度分)	仙台市教委企画会	(仙台市文化財調査企画会第20集)
	18	10月	「説きう始めた歴史たち」	仙台市教委企画会	(仙台市文化財パンフレット第12号)
	19	11月	「年報第3回」(平成18年度分)	仙台市教委企画会	(仙台市文化財調査企画会第21集)
	19	2月	「文化財せんぐい'99号」	仙台市教委企画会	
	20	5月	「宮城考古学 第10号」	宮城県考古学会	
	その他	10/29	新宿若林城跡調査企画会	仙台市教委企画会	仙台駅前・若林城跡

第3表 若林城跡関係の主な普及啓発活動

第3節 資料整理の方法

出土品の整理作業は発掘調査を実施した2005年度に遺物水洗・注記作業までの基礎整理作業を行い、2007年度には一部の注記作業、遺物の分類・接合・復元作業、実測作業、遺物写真撮影、遺構図編集、および報告書作成作業を実施した。

出土した遺物は、縄文土器・弥生土器・土師器・陶器・磁器・埴輪・石器・石製品・瓦・煉瓦・金属製品・ガラス製品など多岐にわたり遺物収納用コンテナに140箱あった。遺物は遺物番号順に台帳を作成し管理を行った。遺物洗浄は豚毛ブラシにより破損棄損のないよう注意を行い、十分自然乾燥したのち遺物番号毎にポリエチレン袋に入れ遺構毎にコンテナに収納した。水洗段階において陶磁器類など分離できるものについては種別毎に分類し仮収納した。水洗後、純土器・弥生土器・土師器などの脆弱な遺物はバインダー溶液浸透による強化処理を行った。注記は白色ポスター色を用い、遺跡名（C511）、調査次数（5次）、遺物番号、遺構名、細部、土層名、取り上げ番号の内容を記入した。陶磁器などの微細遺物については遺跡名と遺物番号のみの注記にとどめた。遺物の分類は、種別ごとに分類後、細分類を行い、数量・重量を各遺構・層位ごとに集計した。且の分類に当たっては、若林城跡第6次・7次調査及び仙台城本丸跡1次調査の分類を元に新たに基準を設けた。分類後、種別ごとに接合を行った。接合は原則としてセルロース系接着剤（セメダインC）を用い、強化の必要な遺物についてはエボキシ系接着剤（セメダインスパー）を補助的に用いた。復元・補強には復元用素材（エレホン）を使用し骨材としてブライトンを用いた。復元可能な遺物については展示などの活用を考慮し復元を行い、補強が必要な遺物には補強を行った。遺物のうち約9割は瓦で、原則として1/4以上残存しているものについては登録を行い、その中から実測遺物を選別し実測図を作成した。また、刻印の認められる破片は、拓本・写真での記録とした。土器・陶磁器類

は破片資料が多いため、1/4以下の資料であっても、実測図を作成した。実測図の作成には、3次元磁気測定装置（PADRAS M3D 株式会社パスコ）によりデータを取得し、CADソフト（AUTOCAD®2004 オートデスク株式会社）を用い、編集・図化作業を行った。陶磁器類、金属製品の実測にはデジタル写真図化作業を併用した。遺物トレスは、ベクタードローイングソフト（Illustrator CS アドビシステムズ株式会社）を用いベクターデータ化し、既刊の報告書に準じた縮小率で報告書図版作成を行った。遺物の写真撮影は、35mmカメラ（白黒フィルム）、35mmデジタルカメラを用い、人工光源を使用して撮影を行った。特に瓦の撮影にあたっては成形・調整技法が観察できるよう光源を調整して撮影を行った。撮影は35mmモノクロームフィルムを使用した。デジタルデータは600万画素JPEG形式で保存し、写真図版作成には画像劣化を考慮し、TIFF形式に変換したものを使用した。

遺構図は2005年度に作成した図面データを基にし、報告書図版に必要な図面の校正・編集を行った。図面編集はCADソフトを用いて行い、最終的なデータの納品を踏まえ汎用CADデータ形式であるDXFファイルに格納できるようにし、個別遺構図・出土状況図については各層ごとに、遺構種別ごとにデータを細分化し管理できるようにした。また2005年度に写真測量を行った礎石建物跡74基・石組遺構1基・石敷遺構4箇所については解析図化機により図化作業を実施し、他の遺構図データ同様にCADソフトを用いて編集・合成作業を行った。遺構図版は上記のデータをベクタードローイングソフトに持込み、データ変換、縮尺変更、線号付与、テキスト類の入力を行い報告書製版データを作成した。

報告書はワープロソフトや表計算ソフトなどを用い原稿、表などの作成を行い、DTPソフト（InDesign CS アドビシステムズ株式会社）上でレイアウトを行い入稿原稿の作成をおこなった。

第4章 基本層序

調査地での基本層位はⅠ層からⅥ層までの大別6層を確認しており、Ⅱ層が3層に、Ⅲ層が2層に、Ⅳ層が多くの層にそれぞれ細分される。Ⅰ層～Ⅳ層までは原則として第4次調査時の層序を踏襲したが、細分した層は対応関係には無く、今向新たに設定したものである。またⅣ層より下層も新たに設定したもので、第5次調査のⅦ層は第4次調査のⅤ層に対応する。

Ⅰ層：現在の表土層である。（現代）

Ⅱ層：a～cに細分される。明治以降の整地層で、六角塔建設の際の盛土層ともなっており、含有ブロックにより細分している。Ⅱb層は石炭ガラを多量に含む層で特徴的である。（近代～現代）

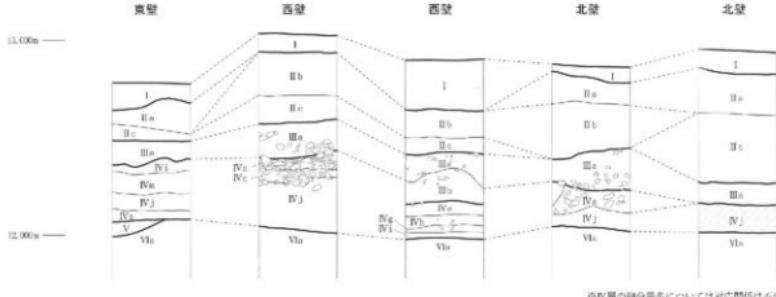
Ⅲ層：a・bに細分される。Ⅲa層は調査区内に広く普遍的に存在する層で、煉瓦片や瓦などの近代の遺物を全く含まないことから、若林城廃城以降の畑耕作土と考えられる層である。部分的にグライ化するの、ブロック土の混入が少なく比較的均質で、円礫や近世の瓦片などを多く含んでいる。Ⅲb層は主に3号石敷遺構上において確認した層で、Ⅳ層成因と考えられる人為的な堆積土であり、石敷遺構上を直接被覆している。層厚は20cm程度である。（近世・若林城期以降）

Ⅳ層：若林城造営の際の基盤となる整地層であり、含有するブロックや土質により細分しているが、加えて敷かれた場所による違いもあり、時期差を示すものではない。基本的にはⅦ層成因と考えられる黄褐色ブロック土をベースにしているが、黒色シルト、黄褐色砂質土、灰色粘土を多量に含んでいる場所もみられる。層厚は15～30cmであるが、一部ではそれ以上の厚さをもつ地区もみられる。（近世初め・若林城期）

Ⅴ層：暗褐色シルトで、整地層下のⅥ層面で確認した溝跡の最上部にのみ残存しており、若林城造営以前に形成された表土層の可能性が考えられる。状況からみてⅣ層による整地時にはⅤ層は一口すき取られ、

この一部を用いて整地層が敷き均されたとみられる。(近世・若林城期以前)

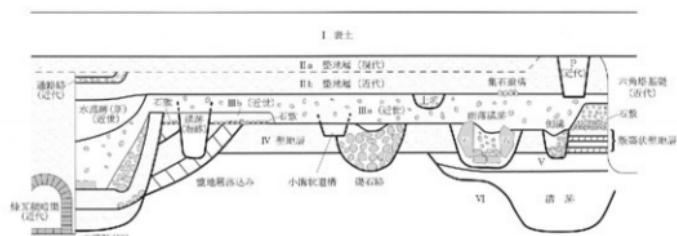
VI層：本調査地における洪水起源の堆積層で、a～eに細分される。調査区内のほとんどの場所ではVI層の直上にIV層がみられる。



各層の分層番号については対応箇所は不明

I	107R3/1 黒褐色	シルト	塊状土	IV1	107R2/2 黒褐色	シルト	表面色シルトを含む ライ化し焦土風化(近世標準地盤)
IIa	107R5/4 にぶい黄褐色	シルト	表面色ブロックを主体、塊状化当む(近世標準地盤)	IV2	107R4/4 オーブン焼け	シルト	表面色ブロックを含む(近世標準地盤)
IIb	107R1/1 黒色	シルト	6次ガラが多く、塊状・塊状化を含む(近世標準地盤)	IV3	107R4/6 黄褐色	シルト	表面色シルトを主体(近世標準地盤)
IIc	107R1/4 暗色	シルト	6次ガラ多く、塊状・塊状化を含む(近世標準地盤)	IV4	107R2/3 砂褐色	シルト	表面色シルトを主体(近世標準地盤)
IId	107R1/4 暗色	シルト	6次ガラ多く、塊状・塊状化を含む(近世標準地盤)	IV5	107R4/4 にぶい黄褐色	シルト	表面色ブロックを含む(近世標準地盤)
IIe	107R5/5 暗色	砂質土	砂質土(近世標準地盤)	IV6	107R2/2 黑褐色	シルト	表面色シルトを主体(近世標準地盤)
IIIa	107R3/2 黑色	シルト	表面色シルトを主体(近世標準地盤)	IV7	107R4/4 にぶい黄褐色	シルト	表面色シルトを含む(近世標準地盤)
IIIb	107R4/5 黑色	砂質土	砂質土(近世標準地盤)	IV8	107R2/4 黑褐色	シルト	表面色シルトを含む(近世標準地盤)
IVa	石質土	砂質土	塊質化(近世標準地盤)	IV9	107R4/4 黄褐色	シルト	表面色シルトを含む(近世標準地盤)
IVb	107R4/4 暗色	シルト	表面色ブロックを主体、砂質土を含む	IV10	107R4/4 黄褐色	シルト	表面色シルトを含む(近世標準地盤)
IVc	4/黑	砂	砂の盛り土や中空板、表面には淡黄色土を含む	IV11	107R4/2 緑灰黃褐色	シルト	表面色ブロックを主体、ライ化(近世標準地盤)
IVd	4/黒	砂	砂の盛り土や中空板、表面には淡黄色土を含む	IV12	107R4/4 黄褐色	シルト	表面色ブロックを多量含む(近世標準地盤)
IVe	石質土	砂	砂の盛り土とすると約100mmの大の「段」を含む	IV13	107R4/4 黄褐色	シルト	表面色ブロックを含む(近世標準地盤)
IVf	石質土	砂質土	砂質土(近世標準地盤)	IV14	2.83R2/2 黑褐色	砂質土	表面色ブロックを含む(近世標準地盤)
IVg	107R4/4 暗色	砂質土	砂質土(近世標準地盤)	IV15	107R2/2 深黒褐色	シルト	表面色ブロックを含む(近世標準地盤)
IVh	107R3/2 黑炭化褐色	シルト	全体にグライ化する(近世標準地盤)	V	107R2/4 砂褐色	シルト	砂の盛り土や中空板、表面には淡黄色土を含む
IVi	107R4/6 黄褐色	シルト	表面色シルトを多量含む(近世標準地盤)	VI	107R4/4 黄褐色	シルト	表面色シルトを含む(近世標準地盤)
IVj	107R4/6 黄褐色	砂質土	砂質土(近世標準地盤)	VII	107R4/4 にぶい黄褐色	砂質土	表面色シルトを含む(近世標準地盤)
IVk	107R4/4 黄褐色	シルト	表面色シルトを含む(近世標準地盤)	VIII	107R4/4 にぶい黄褐色	シルト	表面色シルトを含む(近世標準地盤)

第11図 基本層位柱状図



第12図 基本層位模式図

第5章 検出遺構と出土遺物

第1節 Ⅲ層上面の遺構と遺物

調査区は宮城刑務所旧監合房棟である六角塔が建築されていた位置にあたることから、六角塔の基礎をはじめとする刑務所関連施設や木根などにより遺構面は大きく搅乱を受けている。調査ではこれらの搅乱を掘削除去した後にⅢ層上面での遺構検出を行ったところ、僅かながら土坑、集石遺構、瓦・縁石遺構を確認した。Ⅲ層上面においては調査区中央から北東部について全体にわたりグライ化が進んでおり、遺構の検出は難しい状況にあった。また調査区北西部の広い範囲に小礫の分布が認められた地区は、後にⅠ号石敷遺構として若林城の遺構として認識されたが、当初はⅢ層上面において礫が巻き上げられた状態で確認されたことから、Ⅲ層上面に樹わる遺構の可能性も考慮し調査を行っている。なおⅢ層掘削段階で確認した集石遺構やⅣ層検出の小溝状遺構や一部の集石遺構・上坑・ピットについては、本来Ⅲ層に関連する近世遺構として取り扱うべきであるが、ここでは検出状況に即し、Ⅳ層検出遺構として後に記載している。

(1) 土 坑

Ⅲ層上面では8基を確認したが、散在的でまとまりを持つものではなく、性格も不明である。堆積上の違いから、Ⅲ層に類似するもの（SK1、SK3～5）と異なるもの（SK2）に分類される。

1号土坑

Y32、X48・49グリッドで検出し、SD1より新しいが、東側は調査区外にかかり全体は不明である。形状は不整円形で、規模は南北径3.1m、東西径1.9m以上、深さは西側が0.5m、東側が0.43mとやや東側が深い。底面は比較的平坦である。堆積土は2層に分層されるが、いずれもブロック土を含み、SD1を構築している円礫や瓦片を多数含んでいる。出土遺物は丸瓦、輪廻いがある。

2号土坑

Y33、X45グリッドで検出し、他遺構との重複は無い。形状は長方形で、規模は長軸0.78m、短軸0.46m、深さ0.14mで、主軸方向はN-59°-Eである。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は2層に分層されるが、1層中には炭化物粒を含んでいる。出土遺物は面戸瓦がある。

3号土坑

Y29、X42グリッドで検出し、他遺構との重複関係は無いが、2号集石遺構に近接する。形状はやや偏平な円形で、規模は径0.48m、深さ0.12mである。底面は平坦であるが東へ向かい傾斜する。堆積土は2層に分層され、径2～5cm程の円礫を含む。出土遺物は無い。

4号土坑

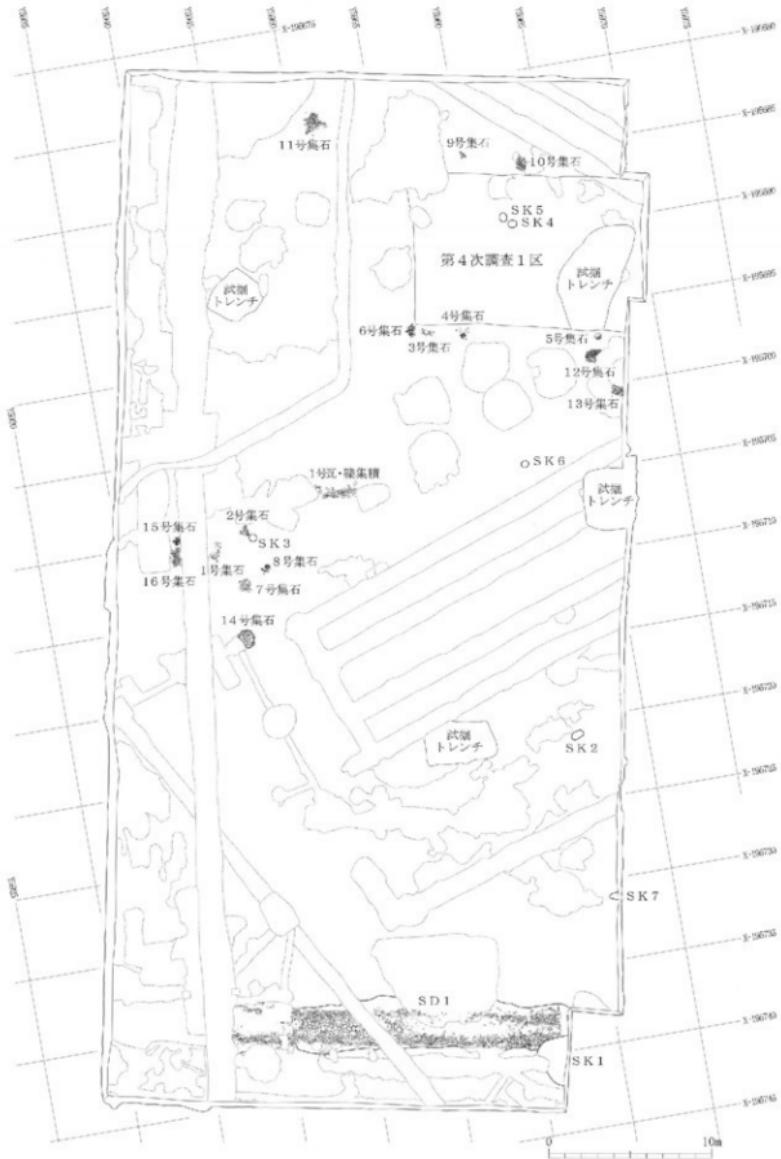
Y33、X38グリッドで検出し、他遺構との重複関係は無い。形状はやや偏平な円形で、径0.54m、深さ0.6mである。底面は掘鉢状で立ち上がりは緩やかである。堆積土は單一層でⅢ層に類似する。出土遺物は無い。

5号土坑

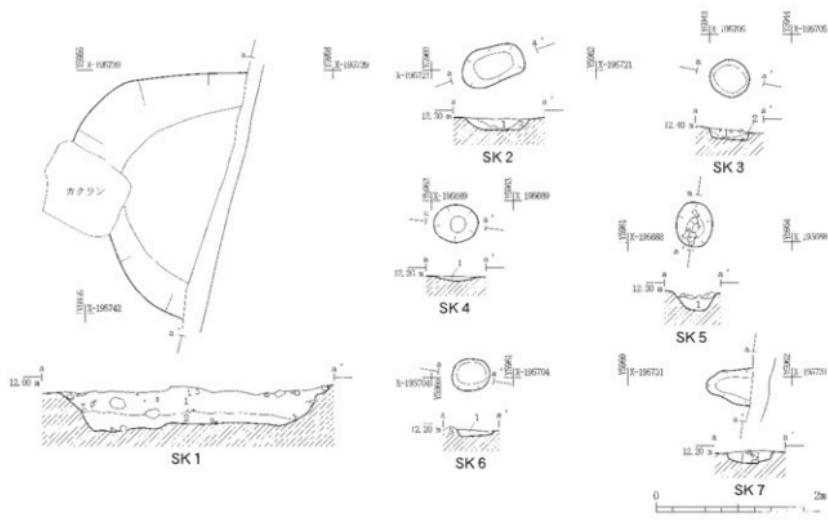
Y33、X38グリッドで検出し、他遺構との重複関係は無い。第4次調査でP8として半裁調査を行なったが、今回残り部分の掘り込みを行った。形状は梢円形で、規模は長軸0.55m、短軸0.45m、深さ0.22m、主軸方向はN-4°-Eである。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土はブロック土を含む單一層であるが、上位に径5～10cmの円礫が同一レベルで7点まとめてみられる。

6号土坑

Y33、X41グリッドで検出し、他遺構との重複関係は無い。形状は不整円形で、規模は長軸0.45m、短軸0.4m、深



第13図 III層構造配置図

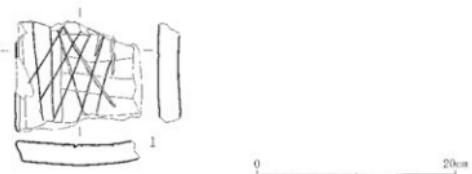


第14図 土坑

さ0.1m、主軸方向はN-80°-Eである。底面は平坦であるが西に向かい緩やかに傾斜する。堆積土はブロック土を若干含む單一層である。出土遺物は無い。

7号土坑

Y33、X47グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。形状は不整形であるが、東側は調査区外にかかるため全体形状は不明である。規模は長軸0.56m以上、短軸0.46m、深さ0.16m、主軸方向はN-90°-Eである。堆積土は單一層で1~10cm程の円錐を含む。出土遺物は平瓦、熨斗瓦、面戸瓦が7点ある。II19は熨斗瓦で、凹面には分割線とは別に、ヘラ状の工具による交差する線刻が11条認められる。



調査番号	地點番号	緯度	経度	高さ (m)	重さ (kg)	種類	分類
1	II19	北緯36°	東経140°	-	-	2.1	0.36 地盤洗削分、小石、ナガ、(2面)ナダ・父糞を含む割跡11本あり

第15図 7号土抗出土遺物

(2) 集石遺構

III層上面において16基を確認した。拳大程度の礫を含むものが主体であり、近世の瓦片を含むものもある。掘り

込みはほとんど持たないか浅いものが多く、遺物跡の礫石跡構造とは明らかに異なっている。配列上の規則性は無いが、やまとまりをもって存在する傾向にある。その一部は畑の耕作時に障害となった礫や瓦片を集積廻したのである可能性がある。

1号集石遺構

Y29、X42グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。長軸1.34m、短軸0.72mの不整形の範囲に径1~9cmの円礫がみられ、中心部にやや大型、周間に小型の円礫が分布する傾向が認められる。掘り込み等は認められない。出土遺物は無い。

2号集石遺構

Y29、X41-42グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。径0.7mの不整円形の範囲に径1~10cmの偏平亜円礫が比較的の密集して分布しており、中心となるのは径4~8cmの礫である。掘り込み等は認められない。出土遺物は無い。

3号集石遺構

Y32、X39-40グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。長軸0.8m、短軸0.4mの不整形の範囲に径1~12cmの円礫が散在分布する。中心となるのは径8cm程の円礫である。掘り込み等は認められない。出土遺物は無い。

4号集石遺構

Y32、X40グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。長軸0.88m、短軸0.64mの不整円形の範囲に径1~9cmの円礫が分布する。主に南側に径7cm程の円礫が集中する傾向にある。掘り込み等は認められない。出土遺物は無い。

5号集石遺構

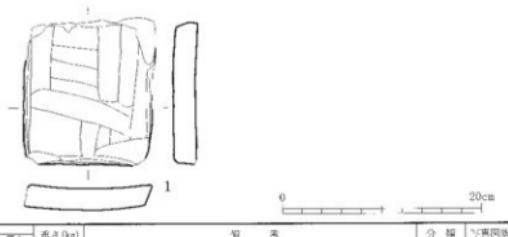
Y34、X40グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。径0.48mの円形の範囲に径1~6cmの円礫が分布する。円礫は南側に帶状に集中する傾向にある。掘り込み等は認められない。出土遺物は無い。

6号集石遺構

Y31、X39グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。長軸0.88m、短軸0.65mの不整形の範囲に径1~16cmの円礫が密集して分布している。特に北側においては8~15cmの拳大程度の礫が集中している。掘り込み等は認められない。出土遺物は無い。

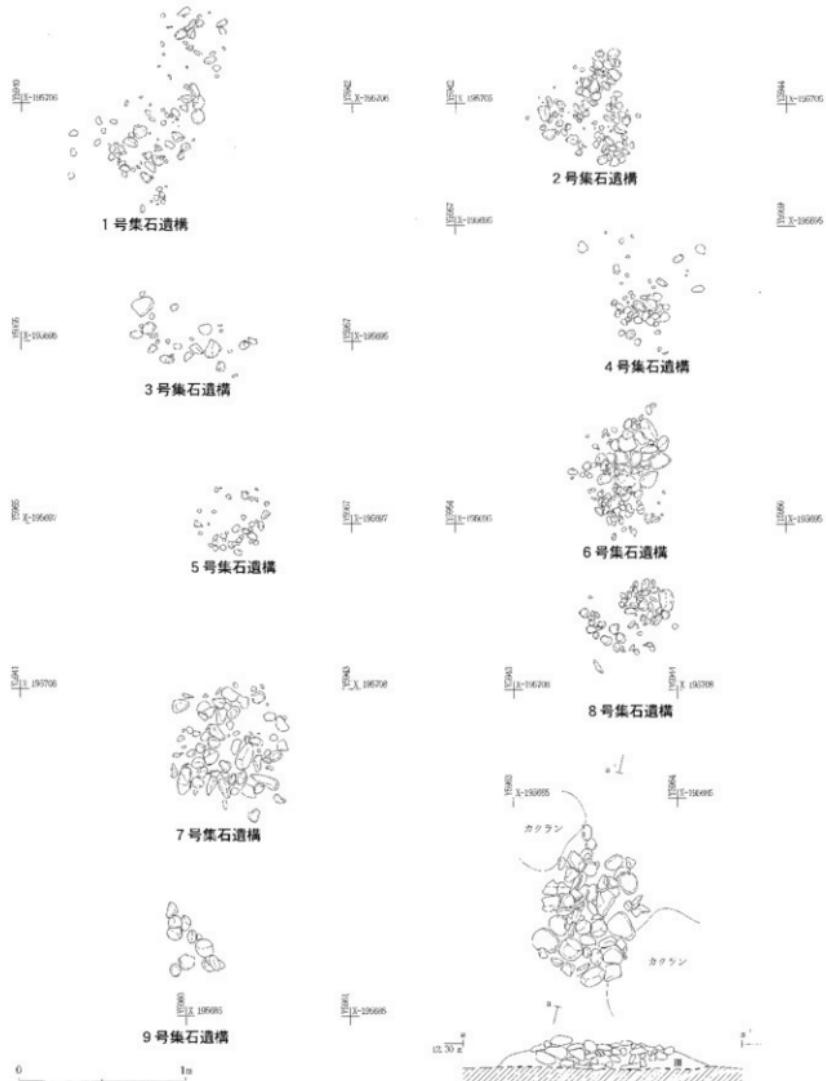
7号集石遺構

Y29、X42グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。長軸0.9m、短軸0.8mの不整円形の範囲に径1~18cmの円礫と瓦片(63点)が20cm程の厚みで密集している。なお本遺構の下層部のIV層上面よりSK8が検出されたが、土坑の掘込み範囲と集石の分布範囲に違いがあるため、本遺構との関連は不明である。掘り込み等は認められない。出土遺物は軒丸瓦、丸瓦、熨斗瓦、輪違い、面戸瓦などが出土している。H20は熨斗瓦である。



記載番号	基盤番号	相・期	測量・断定	平面	断面	高さ(cm)	重さ(kg)	留・名	分類	考察回数
1	320	墳丘瓦	1号集石	-	(11.8)	2.2	6.64	焼成後少剥離、内面：ナゲ・鋸歯、底面：ナゲ	H20	40-2

第16図 7号集石遺構出土遺物



番号	場所	平均	標準偏差	特徴		発見	上位	上色	土性	特徴
				石種	被覆					
1号集石	-	-	-	砾10~90mmの円錐を含む	-	-	-	-	-	砾10~160mmの円錐を含む
2号集石	-	-	-	砾10~100mmの円錐を含む	-	-	-	-	-	砾10~160mmの円錐を含む
3号集石	-	-	-	砾10~120mmの円錐を含む	-	-	-	-	-	砾10~160mmの円錐を含む
4号集石	-	-	-	砾10~90mmの円錐を含む	-	-	-	-	-	砾40~100mmの円錐を含む
5号集石	-	-	-	砾10~60mmの円錐を含む	-	-	-	-	-	砾20~180mmの円錐を含む

第17図 集石遺構(1)

8号集石遺構

Y29、X42グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。長軸0.52m、短軸0.26mの不整形の範囲に径1～13cmの円礫がまとまって分布している。掘り込み等は認められない。出土遺物は無い。

9号集石遺構

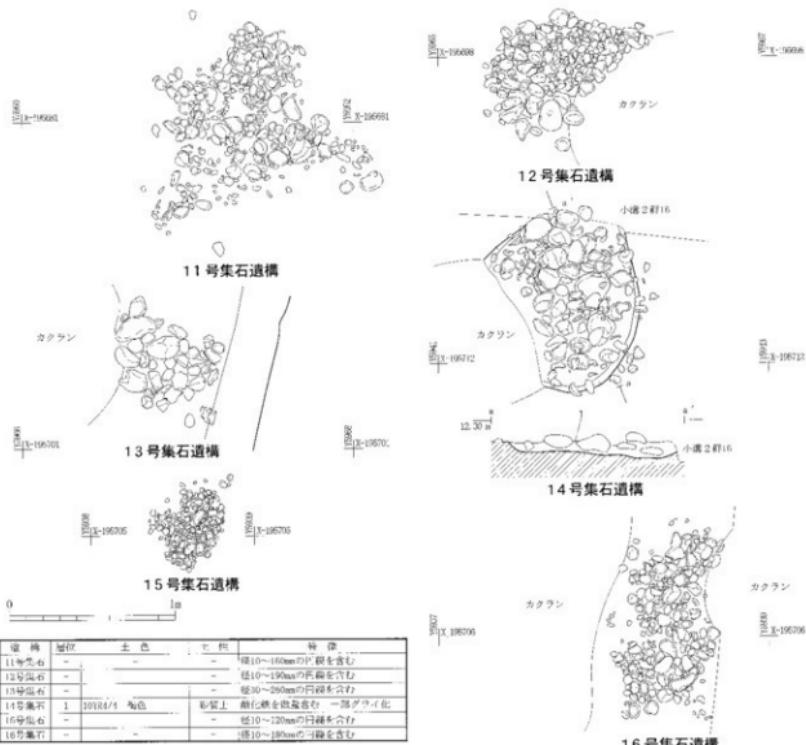
Y32・33、X42グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。長軸0.66m、短軸0.52mの不整長方形の範囲に径4～10cmの円礫が列状に分布している。中心となるのは10cm前後の円礫である。掘り込み等は認められない。出土遺物は無い。

10号集石遺構

Y32・33、X42グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。長軸1m、短軸0.72mの楕円形の範囲に径3～18cmの円礫と瓦片（51点）が密集して分布している。北西および南東部は搅乱を受けている。断割った結果、Ⅲ層中に食い込む状況で凹レンズ状に円礫が確認されたことから、本来は土坑状の掘り込みを持つ可能性が考えられたが、周辺部のⅢ層がグライ化による浸潤が著しく、プランとして把握することができなかった。出土遺物は丸瓦、軒平瓦、平瓦、熨斗瓦、面戸瓦、隅切瓦などが出土している。

11号集石遺構

Y31、X37グリッドの1号石敷遺構上で検出し、同遺構より新しい。長軸1.52m、短軸1.44mの不整形の範囲に径



第18図 集石遺構（2）

1～16cmの円礫が密集して分布している。中心となるのは径8cm程の円礫である。掘り込み等は認められない。出土遺物は無い。

12号集石遺構

Y34、X40グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。長軸1m以上、短軸0.86mの楕円形と推定される範囲に径1～19cmの円礫が極めて密集して分布している。東部は搅乱を受けて失われているため範囲は不明瞭である。中心となるのは径5～8cm程の円礫で、周囲の礫はやや大きめである。掘り込み等は認められない。出土遺物は無い。

13号集石遺構

Y34、X41グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。長軸0.9m以上、短軸0.6mの楕円形の範囲に径3～26cmの円礫と瓦片（32点）が分布している。西側は搅乱により失われ、東側は調査区外に延びるとみられる。掘り込み等は認められない。出土遺物は軒丸瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦などが出土している。

14号集石遺構

Y29、X43グリッドで検出し、小溝群2-16より新しい。長軸1.12m、短軸0.72m以上、深さ0.1mの不整円形の掘り込みの中に、径6～19cmの円礫と瓦片（20点）が密集して分布している。礫は掘り込み底面に密着するものは無く、2～3cm程浮く状況で、礫間に褐色砂質土が介在している。南西側は搅乱により一部失われている。出土遺物は丸瓦、平瓦、輪違いなどが出土している。

15号集石遺構

Y28、X41-42グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。長軸0.66m、短軸0.46mの不整円形の範囲に径1～12cmの円礫が密集して分布している。掘り込み等は認められない。出土遺物は無い。

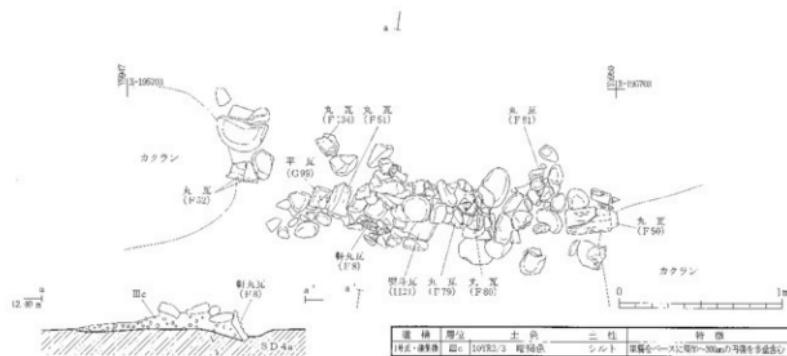
16号集石遺構

Y28、X42グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。長軸1.28m、短軸0.72mの不整形の範囲に径1～18cmの円礫が密集して分布している。東側と西側は搅乱を受けている。掘り込み等は認められない。出土遺物は無い。

（3）瓦・礫集積遺構

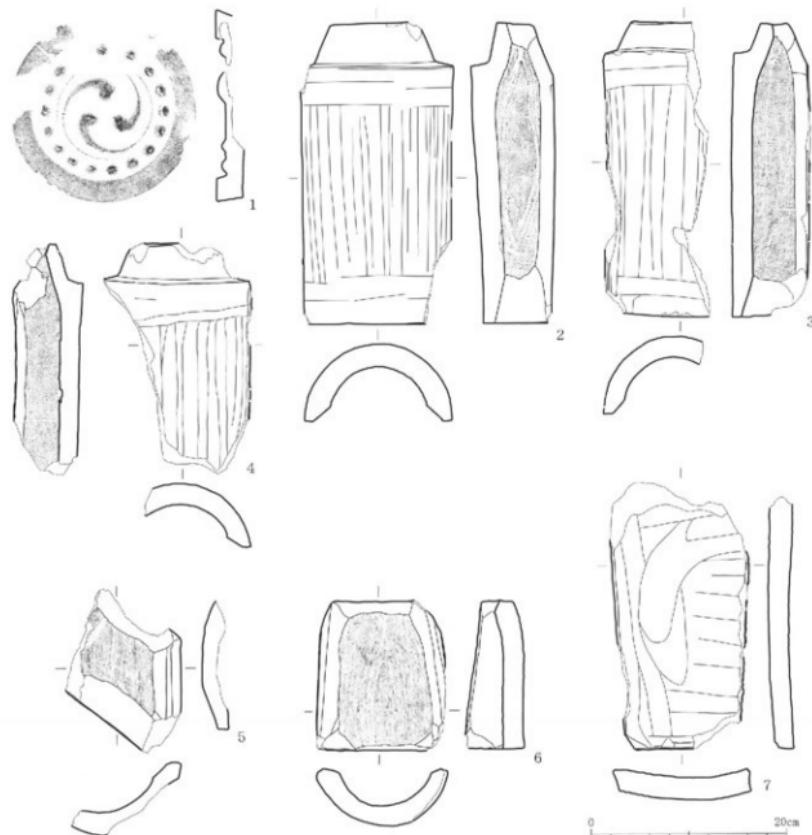
1号瓦・礫集積遺構

Y30、X41グリッドで検出し、他遺構との重複関係はない。1号石敷遺構南辺に沿って瓦と礫の集積が東西の長さ2.5m以上、南北幅0.8mの帯状の範囲に分布する。東側及び西側は搅乱により失われており、本来はより長かった可能性がある。集積は径2～30cmの円礫と瓦片（144点）をⅢ層上面に寄せ集めたような状態で確認しており、円



第19図 瓦・礫集積遺構

標は15cm前後の比較的大型の礫が目立つ。造構の性格としては他の集石造構同様、畑の耕作の障害となった砾や瓦を集積廃棄したもののが考えられる。出土遺物は軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、隅切瓦などがあり、比較的形状を残したもののがみられた。



国宝番号	登録番号	種類	造構・断面	高さ	幅	厚さ	重さ(kg)	備考	分類	等級
1	精	瓦	1号瓦・縦 瓦(三文瓦)	19.1	04.5	2.7	0.66	瓦当部:円乳突・私文款17・珠押1.5cm	瓦	40-3
国宝番号 登録番号 種類 造構・断面 高さ 幅 厚さ 重さ(kg) 備考 分類 等級										
2	F50	丸瓦	1号瓦・縦	32.1	16.6	2.3	6.6	内面:ナガ・凹面:コビ奇筋・布目	瓦	50-1
3	F52	丸瓦	1号瓦・縦	30.2	—	2.2	6.1	内面:ナガ・凹面:布目	瓦	40-5
4	F51	丸瓦	1号瓦・縦	—	2.1	7.1	0.90	内面:ナガ・凹面:コビ奇筋・布目	瓦	40-6
国宝番号 登録番号 種類 造構・断面 高さ 幅 厚さ 重さ(kg) 備考 分類 等級										
5	H90	軒丸瓦	1号瓦・縦	—	2.3	7.6	0.39	凸面:ナガ・凹面:コビ奇筋・ツブ・調査後、四端切削(約60°)	瓦	40-2
国宝番号 登録番号 種類 造構・断面 高さ 幅 厚さ 重さ(kg) 備考 分類 等級										
6	H71	軒平瓦	1号瓦・縦	15.4	(9.3)	0.9	0.76	内面:ナガ・凹面:コビ奇筋・布目	瓦	40-8
国宝番号 登録番号 種類 造構・断面 高さ 幅 厚さ 重さ(kg) 備考 分類 等級										
7	H21	軒4瓦	1号瓦・縦	—	—	—	2.2	内成形分岐・凸面:ナガ・凹面:ナガ	瓦	40-6

第20図 瓦・礫集積造構出土遺物

第2節 IV層上面の遺構と遺物

IV層は若林城造営時に伴う整地層であり、今回の調査区のみならず、城内の広範囲に確認している。IV層は基本的には基盤層であるVI層上面に直接載っており、若林城造営時に存在していたとみられる旧表土層は確認されていない。このことから、整地作業を行うにあたっては、当時の表土層に加え、その下層に存在していた可能性のある近世以前の形成層をVI層レベルまで削った後に、各々の土壤を混合した形で再び敷き均していることが考えられる。そして盛土下のVI層面で確認したSD26最上層の黒色土（V層）が旧表土層などに相当する可能性がある。

IV層は現状で15~30cmの厚さを確認しているが、後世、III層に觸れる畑耕作により上半部が削平・改變されていることを考慮すると、本来はかなり厚く敷かれたものであったと推定される。IV層整地土はVI層を基本とし、加えて現状では確認できない暗褐色や黒褐色土がブロック状に混入したもので、各土壤の質や混入度合いにより細分している。しかしこれは主として同一作業内における積み方や土質の違いによるものであり、整地作業における段階や時期差などを示すものではないと考えられる。またIV層は場所により敷き方に差異があり、殆どの場所では人為的なブロック層として認識できるが、1号石敷遺構下などでは粘質土と砂質土を版築状に交互に敷いた箇所なども認められる。このことから整地段階にはすでに整地上に構築する施設を考慮した條地が行われていたものと考えられる。

IV層上面で検出した遺構は、礎石建物跡4棟、建物に觸れる雨落ち溝跡など8条、石組遺構1基、石敷遺構5か所、堀跡1基、溝跡16条、小溝状遺構2群、土坑198基、ピット33基、集石遺構26基がある。このうち若林城に直接觸れる遺構と考えられるのは、礎石建物跡、雨落ち溝跡、石組遺構、石敷遺構、堀跡で、他には建物内での施設などとみられるSK203・204・205、P6などがある。またここで溝跡としているものの中にも、堀跡の可能性のあるものも一部含まれている。しかしこれらを除く殆どの土坑、ピット、集石遺構については廃城後の畑耕作に觸れたものが多いと考えられる。

1 若林城期の遺構

（1）礎石建物跡

1号礎石建物跡

【配置と形状】調査区の北東側で検出した東西方の礎石建物跡で、SB2の北側、1号石敷遺構の東側に位置する。この建物に関しては、第4次調査時の1区において東西方向に並ぶ7基の礎石跡を確認したこと、当初はこの礎石跡を建物南辺とした北側に展開する建物を想定したが、今回の調査で反対に南側に展開する建物であることが判明した。

建物西辺の南北柱筋を南側へ延長するとSB2と3との中間ラインにあたり、両建物の西辺、東辺柱列からは1間（6尺5寸=197cm）の位置にある。また南側に隣接するSB4とは柱位置が半間違っている。建物南辺から各建物北辺柱列までの距離は、SB2まで7間、SB3まで4間半、SB4まで3間となり、建物相互は強い規格性をもって配置されていることがわかる。

建物東辺は調査区外となるが、東側での第8次調査において建物東辺が確認されたことで、東西棟建物であることが判明している。西辺の中央には2基の礎石跡により西側へ張り出した部分があり、これは西面する玄関部分と考えられる。礎石跡は建物の北・西・南辺に加え、各柱筋に合う形で建物内部にも幾つか配置されているが、数は少なく、各礎石跡の規模も異なり、2・3号建物のような総じた配置にはならない。

建物の周囲には北辺溝（SD5）、西辺溝（SD4a）、南辺溝（SD6）が巡っている。SD4は西辺のみならず玄関部の張出しに沿ってコの字形に巡るほか、建物の北および南側では隣接する1号石敷遺構の側溝も兼ねる形でさらに北側や西側に延びている。また西辺溝は玄間に沿って巡る溝の他に、玄関部の張出した2基の礎石跡に切ら

れる形で建物本体に沿って配置された溝跡（SD 4 b）を確認している。さらにSD 6の西側には溝構造と異なり、石組を伴った石組造構が配置されている。

【規模】確認した建物規模は、南北が15.7m（7間）、東西が13.7m（7間）以上であるが、第8次調査の結果、東西規模が23.6m（12間）であることが判明している。玄関部分は西側に約2m（1間）突出している。柱間寸法は北辺と南辺が各2m程度の1間に對し、西辺玄関部の間口は3.0m（1間半=10尺）、その南北両側が各2.1m（7尺）とやや広くなるなど、北・南辺と建物妻側にあたる西辺との柱間寸法に違いが認められる。これは西側中央に10尺幅の玄闇を取付ける事により、その北側と南側の各3間分を均等に割つことによる結果とみられる。ちなみに第8次調査で確認した東辺側柱は8間で、柱間は6尺5寸となり、当時の1間が6尺5寸であることを裏付けることとなった。建物内部にある礎石跡は南北の並びを建物西辺の柱位置に合わせることで配置されており、中でも西辺から東側に5間、北および南辺から各2間中央に寄つた位置にある2基は大型で特徴的な存在である。

建物の各側柱列と周辺溝との距離は、北辺SD 5までが1.6m程度、西辺SD 4までが1.45~1.6mと、おむね5尺から5尺5寸となるが、南辺のSD 6までは東側が1.6m程度であるのに対し、石組造構を挟んだ西側では1.4mと明らかに狭くなっている。この事が何によるかは不明である。また玄関部西側での距離は1.10mと他より極端に狭くなっている。

【礎石跡】建物を構成する礎石跡は側柱部で21基、玄関部で2基、建物内部で9基の合計32基を確認した。側柱は搅乱により北西角についてのみ確認できなかった。礎石跡はこのうち10・18・19・20・28の5基の掘り込みを行った。また第4次調査においては、北辺にあたる礎石跡2・4・6・25・26の掘り込みを行っている。

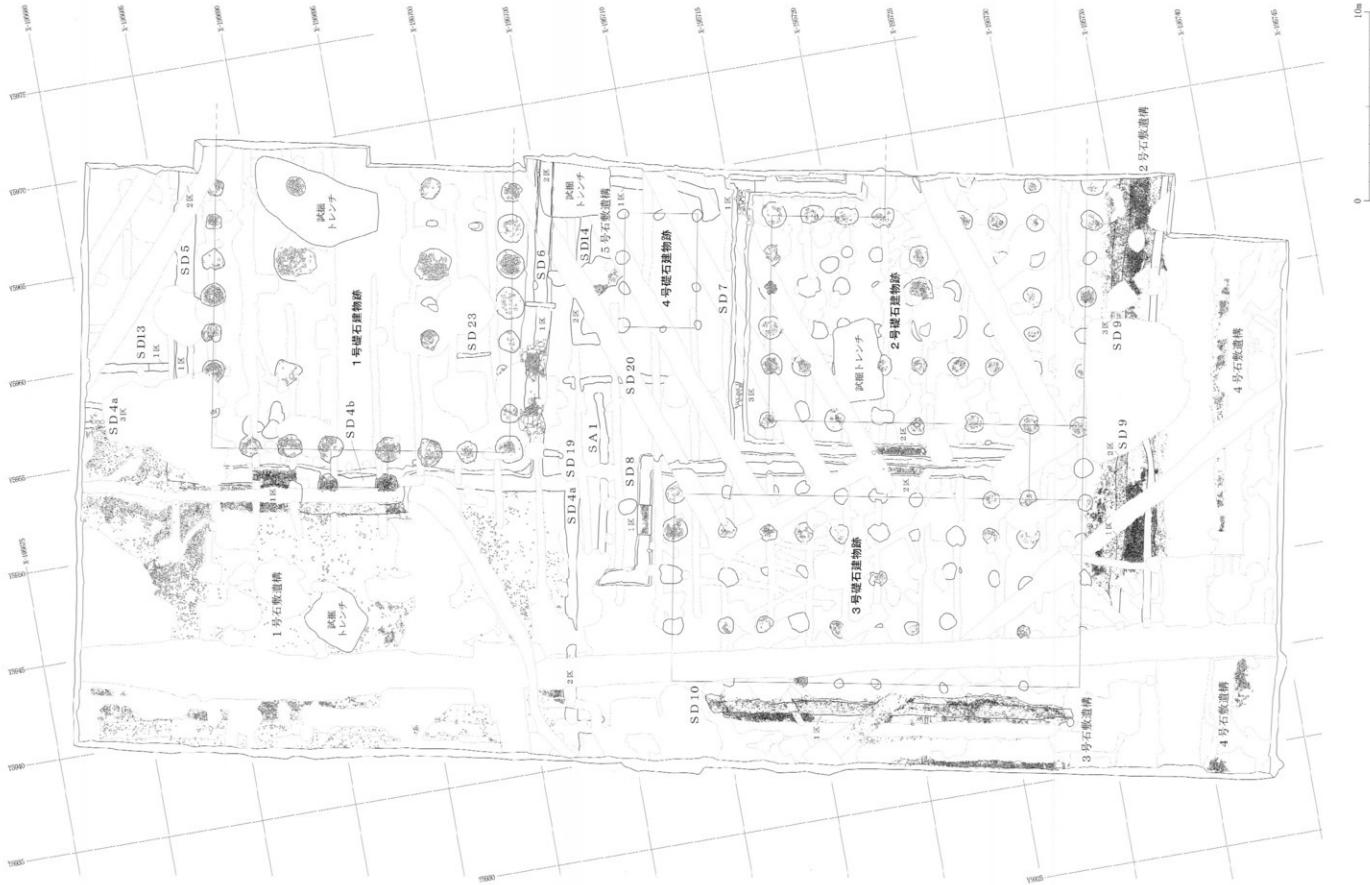
柱を据えた礎石本体は1石も残存しておらず、礎石跡の多くにはプラン中央に礎石を抜取つた痕跡の抜取り穴が確認できる。抜取り穴は不整円形で、中にはⅢ層に類似した層が堆積し、瓦片が含まれている例が多く認められる。このことから、礎石跡にみられる状況は、城の廃絶時には建物の解体と共に、礎石も取り外され、同時に廃棄された瓦が残された窪みに流入したものであることが推定された。抜取り穴については、下部に根固め部分が存在し、ブロック土を含まないことを特徴としているが、中には根固めの状況により判別の難しいものもみられる。

また調査区内は後世の搅乱により多くの城の造構が破壊されており、礎石跡内の根固めすら失われているものも多数ある。礎石跡のプランを平面でみると、掘り方内の外側には掘り方埋土として黄褐色や黒色のブロック土を詰めた層があり、その内側には根固めとして、径1~25cm程の円礫を詰めた構造となっている。掘り方埋土は詰めたブロックの形状がそのまま残るもの以外に、それらが中心方向から横に強い力を受け、固く締めた互層（縫合）が根固め周囲をリング状に巡るものが多數確認されている。これは礎石跡を構築する際、根固石を入れる前に入念な突き固める作業を行なうことによるものと推定され、これもまた根固め同様に柱の沈下を防止するための作業とみられる。また根固めには大小の円礫のみならず、径が概端に小さな砾や砂が入れられており、さらに根固め上面に薄く土を敷いたものも確認されており、これらもまた同様の効果を得るために地業と考えられる。礎石跡の掘り方は殆どのが幅2mのV字型まで掘り込まれている。

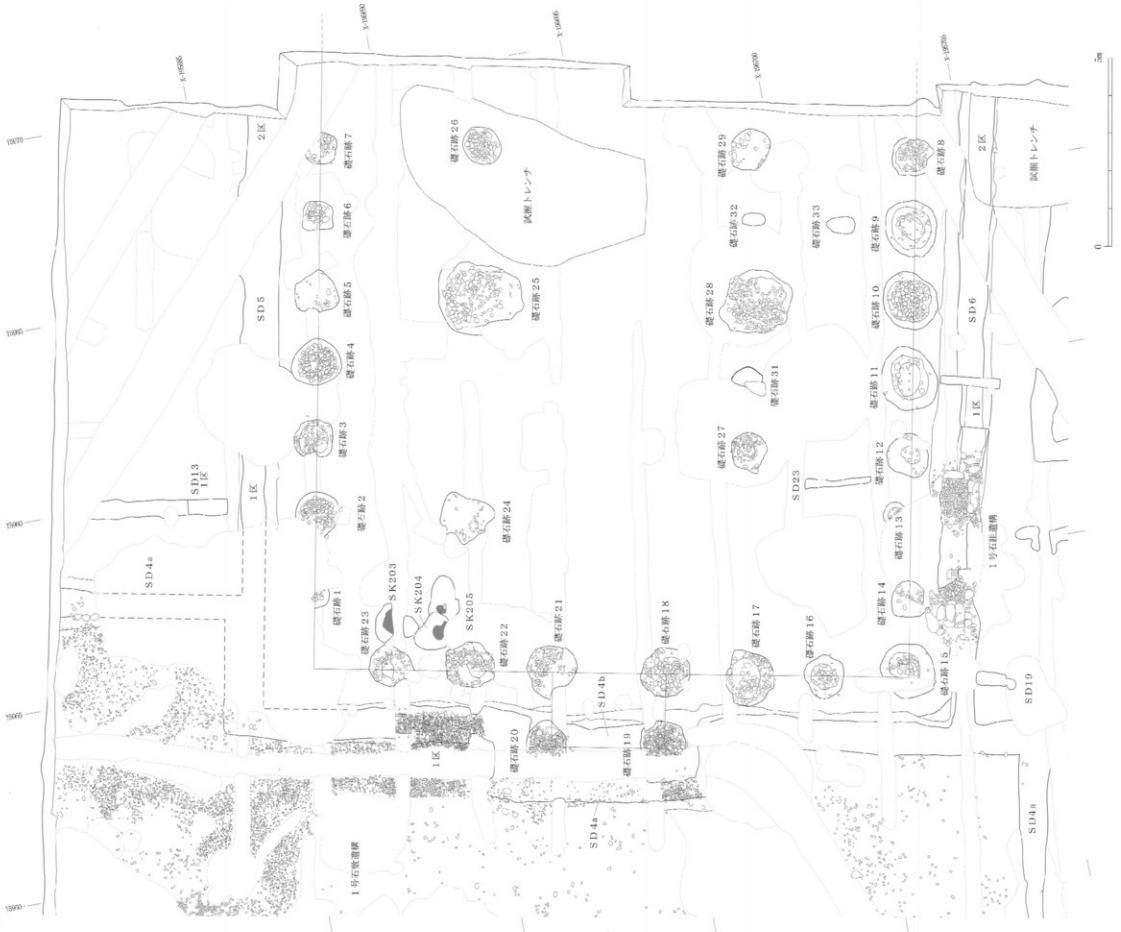
SB 1の礎石跡は他の建物と比較して規模が大きく、床下の束柱か何かしら補助的な柱とみられる小規模な礎石跡31・32・33を除くと、径は1.0~1.5mで、1.3m程のものが中心となる。また礎石跡25・28は建物中心に位置し、径が2m以上、深さ0.5m以上と際立つて大型のものであることから、かつて存在した礎石にはかなりの荷重がかかったものと推定される。さらに2・3号建物と比較して側柱の規模や構造に大きな差は無いのも大きな特徴といえる。（※礎石跡30は欠番）

礎石跡10

建物南辺の礎石跡で、掘り込み調査を行なっている。他造構との重複関係は無い。形状は円形で、掘り方径は東西1.5m、南北1.4mで、根固め径は1.1m程、根固め上面までの深さは0.8mである。円礫の大きさは大振りなもの



第21図 IV層若林坂期構造配置図



のが目立ち、径が1～21cmのものを使用している。掘り込みは根固石上面で止めており、根固めの厚さや掘り方の状況は不明である。検出段階ではやや西側に寄って径0.68m程の不整形のプランがあり、Ⅲ層に類似する層が認められたことから、礎石の抜取り痕とみられる。抜取り痕内の埋土を除去すると、黄褐色ブロック土を主体とする厚さ5～6cm程の極めて締まった層が確認されたが、これは礎石を安定させるために根固石との間に詰められたものへの可能性がある。掘り方埋土は黄褐色と黒色ブロック土との混合土で、固く締まっている。

礎石跡18

建物西辺の玄関部主屋側にある礎石跡である。掘り込み調査を行っている。小溝群2～6より古く、擾乱により南側の一部が失われている。形状は円形で、根固め径は1.3m、根固め上面までの深さは0.1m程である。検出段階で径0.7m程の不整形円形のプランを検出したが、Ⅲ層に類似する層が認められたことから、礎石の抜取り痕とみられる。根固めは径1～18cm程の円礫を使用しているが、掘り込みは根固め上面で止めており、根固めの厚さは不明である。根固めの上面には部分的に固く締まった黄褐色ブロック土が認められ、根固石と礎石の間に詰めたものの可能性がある。掘り方プランについては整地層と区別することが難しく確認できなかったが、根固めプランとほぼ一致するものとみられる。

礎石跡19

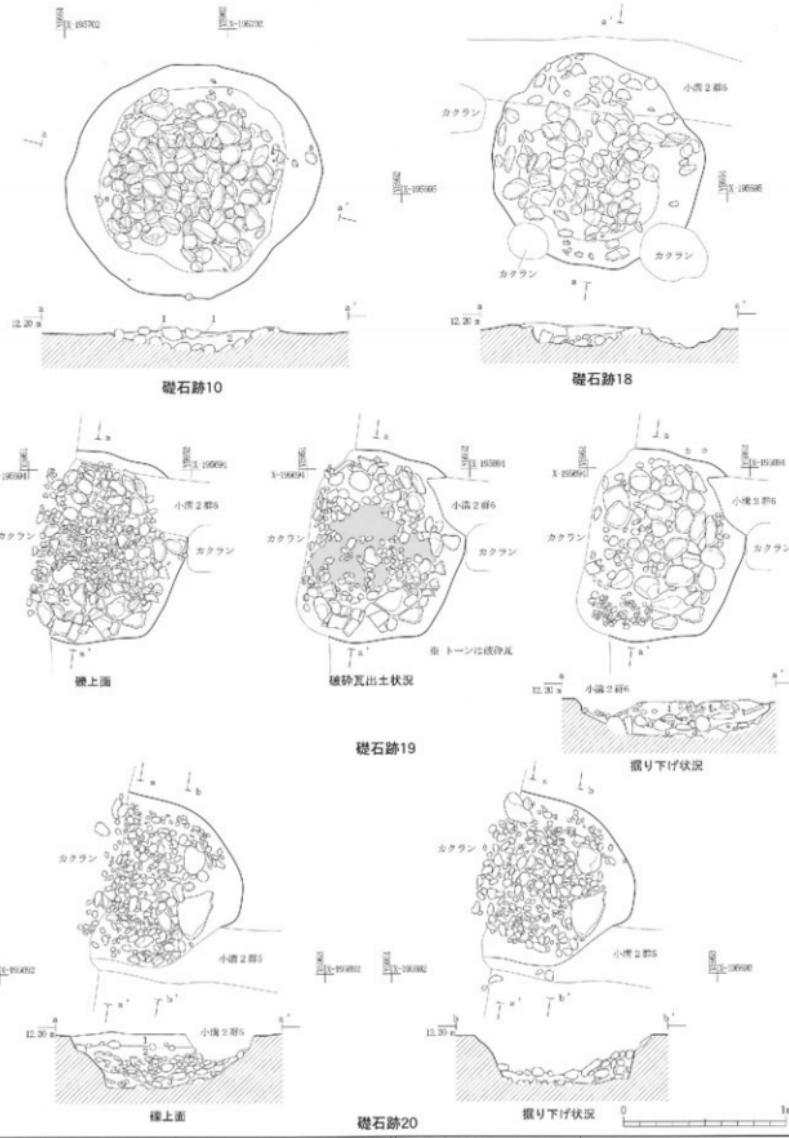
西側玄関張出し部の礎石跡で、掘り込み調査を行っている。礎石跡20と対になり玄関部を構成している。小溝群2～6より古く、擾乱により西側が失われている。またSD4bを切るように検出している。当初は1号石敷造構が耕作により攪拌されることで確認できなかったが、SD4aが礎石跡19・20の西側に張り出すことにより建物西側に取付き、玄関部分の礎石跡となることが明らかとなった。礎石跡は円形で、根固め径は1.2m、根固め上面までの深さは0.1m、底面の礫までの深さは0.2mである。検出段階では中央に径0.4m程の不整形のプランがあり、礎石の抜取り痕とみられる。掘り方プランは石敷造構の礫が周辺に散乱し、明確な線引きはできなかったが、根固め周囲にはあまり穂を含まない輪郭が認められ、根固めプランより多少大きいものとみられる。抜取り痕内の埋土を掘り込むと、径1～3cm程の小円礫が多数確認され、礎石はこの上部に据えられたものとみられる。さらに小円礫の下部には破碎された多量の瓦片が確認され、特に下半のものは小片と灰黄褐色粘質土とを混ざせさせていたものが厚さ5cm程で散かれていた。これを全て取り除くと径5～25cm程のさらに大型の円礫が敷き詰められていた。大型の円礫は掘り方内に土を敷いた上面に貼り付けられるように敷き並べられている。間に破碎した瓦片を敷き均し、上に大小の穂を分けて詰めた構造はほかの礎石跡にはみられないもので、礎石跡位置の特殊性による構造と考えられる。出土遺物は丸瓦、軒平瓦、平瓦、輪違いなど374点がある。

礎石跡20

西側玄関張出し部の礎石跡で、掘り込み調査を行っている。礎石跡19と対になり玄関部を構成している。礎石跡19同様、SD4bを切るように確認している。形状は円形で、根固め径は1m、根固め上面までの深さは0.14m、底面の礫までの深さは0.3mである。検出段階で中央に径0.8m程の円形のプランがあり、礎石の抜取り痕とみられる。掘り方プランは礎石跡同様、根固めプランよりやや大きいとみられる。礎石の抜取り痕内の埋土を掘り込むと、径1～10cm程の円礫が密に確認された。主体となるのは5cm前後の小円礫でありこの面が礎石の表面になるとみられる。礎石跡19のような破碎した瓦片はみられなかったが、この小円礫と共に瓦片が含まれていた。底面近くには5～10cm程度のやや大きめの円礫が敷き詰められ、側面には径20～30cm程の大型の円礫が幾つか並べられていた。出土遺物は丸瓦、平瓦など64点、越前焼甕1点、上師質土器皿16点がある。

礎石跡28

建物内部の大型の礎石跡で、掘り込み調査を行っている。大型の擾乱内において検出したため上面が完全に失われており、本来の規模は不明である。形状は不整形であるが本来は円形とみられる。他の礎石跡に比べ平面規模や



第23図 1号基礎建物跡 確石跡（1）

深さが大型なのが特徴で、深い擾乱底面においても残存していた。やはり大型の礎石跡である25の3間北側に位置し、柱筋を合わせている。残存する形状は南北にやや長い楕円形で、掘り方径は南北1.9m、東西1.66m、根固め径は南北1.45m、東西1.3m程である。根固めには2~18cm程の円礎を詰めており、中心となるのは15cm前後のやや大きな円礎であるが、原位置を保っている礎と乱された礎を徹密に判別することは難しい。擾乱を利用して断面確認を行なったところ、掘り方底面から壁面にかけて厚さ10cm程の黄褐色ブロック土を貼り、その上部に径10~15cm程の円礎を密に敷き詰め、さらに上部に多少大きめの円礎を詰めていることがわかった。

礎石跡 1

建物北辺の礎石跡で、小溝群2-2より古い。擾乱のため掘り方南側と根固石が僅かに残存しているのみであり、規模は不明である。根固めは1~10cm程の円礎が確認でき、その多くは径10cm程の礎である。

礎石跡 3

建物北辺の礎石跡で、小溝群2-2より古い。擾乱により東側が失われているため形状は不整形で、掘り方径は1.3m、根固め径は0.78mである。根固めには径1~12cm程の円礎を密に詰めており、中心となる礎は径10cm程で、礎間にには径1~5cm程の小円礎が詰められている。掘り方埋土はブロック土が固く締まるもので、根固石と同じような大きさの円礎も少量含んでいる。

礎石跡 5

建物北辺の礎石跡で、小溝群2-2より古い。擾乱により東側が失われているため形状は不整形で、掘り方径は1.3mである。掘り方部分のみ確認しているが、中心部には径1~15cm程の円礎が散在し確認できるブロック土のやや少ない範囲がある。掘り方埋土はブロック土を含み、固く締まっている。出土遺物は煙管などがある。

-		-		-		-		-	
		G 1		0		10cm			
測量番号	測量番号	標 高	基 準	測定・算定	算定	寸 法(cm)	算定	高さ(cm)	算定
I	K12	海抜水	海抜	SL1 磨 5	1.6	-	0.8	2	61-10

第24図 1号礎石建物跡 磚石跡5出土遺物

礎石跡 7

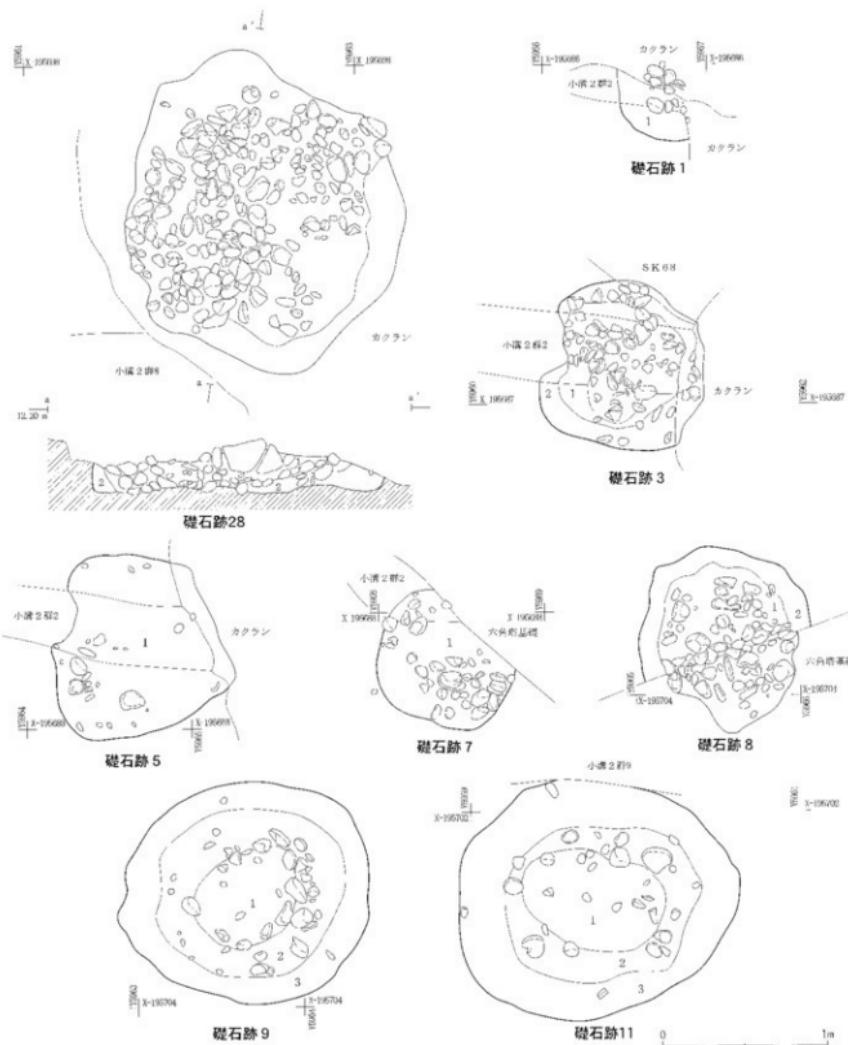
建物北辺の礎石跡で、小溝群2-2より古く、六角塔基礎により東側が失われている。形状は円形で、掘り方径は0.8m程である。根固めは径1~12cm程の円礎を詰めているが、10cm程のものが中心である。中央部に抜取り痕の可能性のある円礎の分布が薄い範囲が認められる。掘り方埋土は黄褐色ブロック土を含み、固く締まっている。

礎石跡 8

建物南辺の礎石跡で、六角塔基礎により南側の上部が失われている。形状は円形で、掘り方径は1.1m、根固め径は0.8mである。根固めは径1~12cm程の円礎を密に詰めており、径10cm程のものが中心である。擾乱により断面観察を行なったが、根固めの厚さは0.2m以上あり、掘り方はVI層面に達している。掘り方埋土は黄褐色と黒色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっていることから、十分に突き固めた後に根固行を入れたものとみられる。

礎石跡 9

建物南辺の礎石跡で、他遺構との重複関係は無い。形状はやや不整円形で、掘り方径は東西1.5m、南北1.29m、根固め径は東西1.1m、南北1mである。中央部には径0.7m程の不整円形のプランがあり、礎石の抜取り痕とみられる。根固めは径1~17cm程の円礎を含んでいる。根固石は東側でやや列上に確認した以外は散在し、礎間にには黄褐色ブロック土を含んでいる。掘り方埋土は黄褐色と黒色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。



地図	部位	土色	上作	特徴	地図	部位	土色	上作	特徴	
基礎跡28	1	10Y3/3 暗褐色	シルト	表面に断続するが黄褐色を含む(凹面)	基礎跡68	2	10Y8/6-4	二に分い複数色	シルト	角尖、暗褐色ブロックを多量含む(裏引)
	2	10Y4/4 暗褐色	シルト	表面は陰合せ(生垣)		1	10Y7/1-4	褐色	シルト	暗褐色砂利、赤鉄鉱を含む(裏引)
基礎跡1	1	10Y4/4 暗褐色	シルト	褐色暗斜面、微斜面及び凸面(複数面)	基礎跡9	2	10Y8/6-1	水灰色	シルト	褐色、半透明ブロック、凹面を多量含む(裏引)
	2	10Y4/5 褐色	シルト	褐色暗斜面、微斜面及び凸面(複数面)		2	10Y8/6-4	二に分い複数色	シルト	褐色、暗褐色ブロックを多量含む(裏引)
基礎跡3	1	10Y4/5 暗褐色	シルト	褐色暗斜面、微斜面及び凸面(複数面)		1	10Y8/6-6	茶褐色	シルト	暗褐色砂利ブロック、暗褐色ブロック(裏引)
	2	10Y4/5 暗褐色	シルト	褐色暗斜面、微斜面及び凸面(複数面)	基礎跡11	2	10Y3/3-1	褐色	シルト	褐色、暗褐色ブロック、凹面を多量含む(裏引)
基礎跡7	1	10Y4/4 暗褐色	シルト	表面は斜面、灰化物を含む(裏引)		3	10Y8/6-4	二に分い複数色	シルト	褐色、暗褐色ブロックを多量含む(裏引)
基礎跡5	1	10Y4/4 刻印	シルト	表面は斜面、灰化物を含む(裏引)						
基礎跡11	1	10Y4/4 暗褐色	シルト	表面は斜面、灰化物を含む(裏引)						

第25図 1号基礎建物跡 基礎跡（2）

礎石跡11

建物南辺の礎石跡で、他遺構との重複関係は無い。搅乱により東側の一部が失われている。形状は不整円形で、掘り方径は東西1.2m、南北1.1mである。検出面での根固石の密度は低く、範囲も不明瞭である。中央部には径0.48m程の不整円形のプランがあり、径10cm前後の円礫を僅かに含み、礎石の抜取り痕とみられる。掘り方埋土は黄褐色と黒色ブロック土を多く含み、固く締まっている。

礎石跡12

建物南辺の礎石跡で、小溝群2-9、SK141より古い。形状は不整円形で、掘り方径は東西1.7m、南北1.49m、根固め径は東西1.19m、南北0.95mである。中央部に径0.86m程の不整円形のプランがあり、礎石の抜取り痕とみられる。根固めは径1~18cm程の円礫を含んでいる。根固石は散在し、隙間には黄褐色ブロック土を含んでいる。掘り方埋土は黄褐色と黒色ブロック土を多く含み、固く締まっている。

礎石跡13

建物南辺の礎石跡で、搅乱により大半が失われており、北側の一部を僅かに検出したにすぎない。小溝群2-9より古い。形状は円形で、規模は不明である。中央部は径2~10cm程の円礫を比較的密に含んでおり、根固め部分とみられる。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土を多く含み、固く締まっている。

礎石跡14

建物南辺の礎石跡で、搅乱により東半の上部が失われているが、搅乱底面において残存している。南側には1号石組遺構が近接して存在するが、相互の掘り方に重複関係はない。形状は不整円形で、掘り方径は南北0.98mである。検出面では円礫は殆ど確認できず、黄褐色ブロック土を含むプランとして検出したが、搅乱底面においては径1~8cm程の円礫がみられたことから根固めとなるとみられる。掘り方は搅乱底面よりも更に0.2m以上掘り込まれている。

礎石跡15

建物南西角の礎石跡で、SD21より古い。周辺の整地層の削平が著しく、根固石が露出した状況で検出した。形状は不整円形で、掘り方径は1.41m、根固め径は南北0.82m、東西0.7m程である。根固めの中央部は径0.41m程の不整円形に石の隙間が多い箇所や瓦片を含む範囲があり、礎石の抜取り痕となる可能性がある。根固めは径1~20cm程の円礫を多く含み、径10cm程のものが多い。根固石は掘り方のラインに沿って立つ箇所があり、壁に貼り付けるように詰めているものもある。掘り方埋土は黄褐色と黒色ブロック土を多く含み、固く締まっている。

礎石跡16

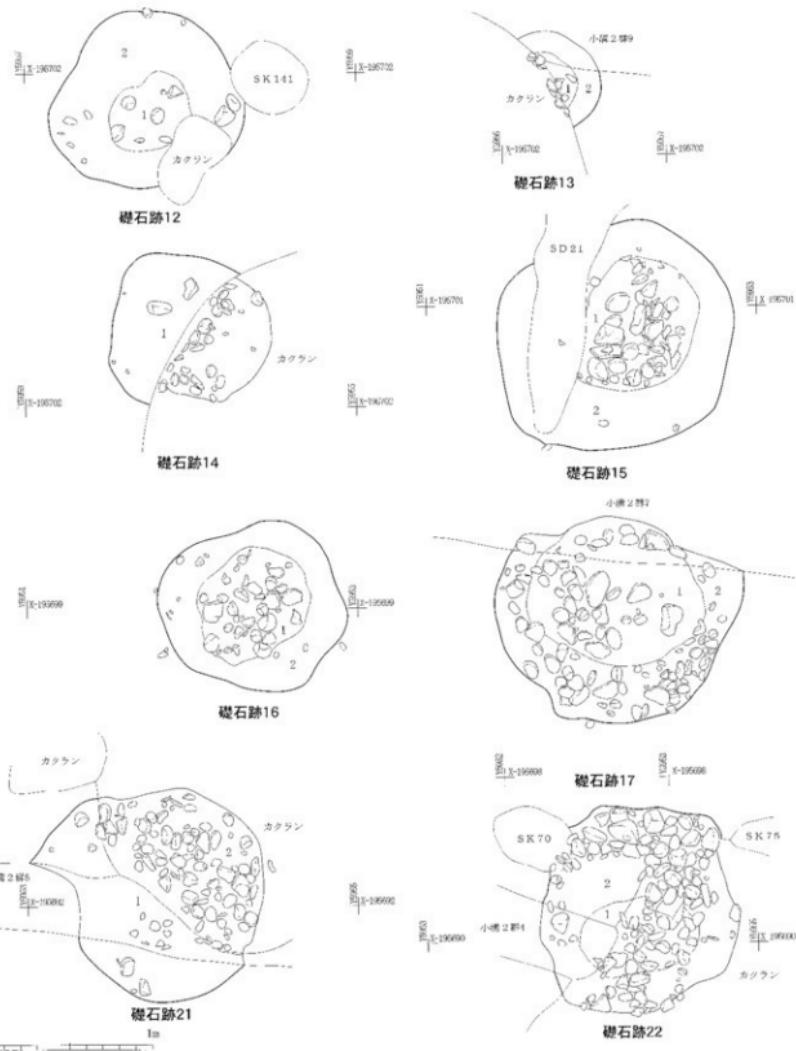
建物西辺の礎石跡で、他遺構との重複関係は無い。形状は不整円形で、掘り方径は東西1.1m、南北1.02m、根固め径は東西0.69m、南北0.7mである。根固めは径1~12cm程の円礫を密に詰めており、径10cm程のものが多い。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土を多く含み、固く締まっている。

礎石跡17

建物西辺の礎石跡で、小溝群2-7より古い。形状は比較的整った円形で、掘り方径は1.5mである。根固めはほぼ掘り方と同範囲で確認され、径1.4m程の範囲に径1~16cm程の円礫を密に詰めており、径10cm程のものが多い。中央部にある礎石の抜取り痕とみられる東西1.1m程、南北0.8m程の不整円形プラン内には、径1~20cm程の円礫を含んでいる。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土を多く含み、固く締まっている。

礎石跡21

建物西辺の玄関部主屋側にある礎石跡である。小溝群2-5より古く、搅乱により北側上面が失われている。掘り込みが深いため搅乱底面においても残存している。形状は小溝や搅乱と重複していることから不整形であるが、本来は円形とみられる。掘り方径は1.4mである。検出面では殆ど確認できなかったが、搅乱底面において根固め



第26図 1号礎石建物跡 磚石跡（3）

石碑	層位	上色	下性	特徴	石碑	層位	上色	下色	特徴
礎石跡12	1 100m/4 黄褐色	シルト	黄褐色地に、炭化植物を含む（粘り力有）	礎石跡16	2 100m/4 にがい青青色	シルト	青色、薄名灰黒色で、炭化植物を含む（盛り力有）		
	2 100m/4 にがい黄褐色	シルト	黄褐色地に、炭化植物を含む（盛り力有）		1 100m/4 にがい青青色	シルト	青色、薄名灰黒色、炭化植物を含む（盛り力有）		
礎石跡13	1 100m/4 棕色	シルト	黄褐色地の、炭化植物を含む（盛り力有）	礎石跡17	2 100m/4 棕灰色	シルト	褐色、粗粒地、炭化植物を含む（盛り力有）		
	2 100m/4 にがい共帶色	シルト	褐色地の、炭化植物を含む（盛り力有）		1 100m/5 青青色	シルト	青色、粗粒地、炭化植物を含む（盛り力有）		
礎石跡14	1 100m/4 黄褐色	シルト	黄褐色地の、炭化植物を含む（盛り力有）	礎石跡21	2 100m/5 棕灰色	シルト	褐色、粗粒地、炭化植物を含む（盛り力有）		
	2 100m/4 淡灰色	シルト	黄褐色地の、炭化植物を含む（盛り力有）		1 100m/4 にがい青青色	シルト	青色、粗粒地、炭化植物を含む（盛り力有）		
礎石跡15	1 100m/4 黄褐色	シルト	黄褐色地の、炭化植物を含む（盛り力有）	礎石跡22	2 100m/4 淡灰色	シルト	褐色、粗粒地、炭化植物を含む（盛り力有）		
	2 100m/4 にがい黄褐色	シルト	黄褐色地の、炭化植物を含む（盛り力有）		1 100m/5 青青色	シルト	青色、粗粒地、炭化植物を含む（盛り力有）		
礎石跡16	1 100m/4				2 100m/5 淡灰色	シルト	褐色、粗粒地、炭化植物を含む（盛り力有）		
礎石跡21	1 100m/4 黄褐色	シルト	黄褐色地の、炭化植物を含む（盛り力有）						
	2 100m/4 黄褐色	シルト	黄褐色地の、炭化植物を含む（盛り力有）						
礎石跡22	1 100m/4 黄褐色	シルト	黄褐色地の、炭化植物を含む（盛り力有）						
	2 100m/4 黄褐色	シルト	黄褐色地の、炭化植物を含む（盛り力有）						

を確認した。根固めは径1~16cm程の円礫を密に詰めており、径8~10cm程のものが多い。掘り方埋土は黄褐色ブロック土を多く含み、固く締まっている。

礎石跡22

建物西辺の礎石跡で、小溝群2-4、SK70・75より古い。搅乱により東半部上面が失われているが、掘り込みが深いため搅乱底面でも残存している。形状は不整円形で、掘り方径は1.3m、根固めはほぼ掘り方と同範囲で確認されている。径1~22cm程の円礫を密に詰めており、径15cm程のものが多い。中央部には東西0.7m、南北0.32m程の不整円形のプランを検出したが、堆積土は炭化物粒を含み、Ⅲ層に類似していることから礎石の抜取り痕とみられる。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土を多く含み、固く締まっている。

礎石跡23

建物西辺の礎石跡で、小溝群2-7、SK74より古い。搅乱により南側の一部が失われている。礎石跡は小溝と重複することから不整形であるが、本来は比較的整った円形になるものとみられる。掘り方径は1.1m、根固め径は0.9mである。中央部に径0.3m程の不整円形の落ち込みがあり、礎石の抜取り痕になるものとみられる。根固めは径1~13cm程の円礫を比較的密に詰めており、径10cm前後のものが多い。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土を多く含み、固く締まっている。

礎石跡24

建物内部の礎石跡で、小溝群2-4より古い。搅乱により北側が一部失われている。形状は不整円形で、掘り方径は1.3m程である。検出面がグライ化していたこともありプランは不明瞭である。検出面では根固めは散在して分布する状況で確認されている。根固めには1~12cm程の円礫を使用しており、径10cm前後のものが多い。掘り方埋土は固く締まっているものの、ブロック状のものはみられない。

礎石跡25

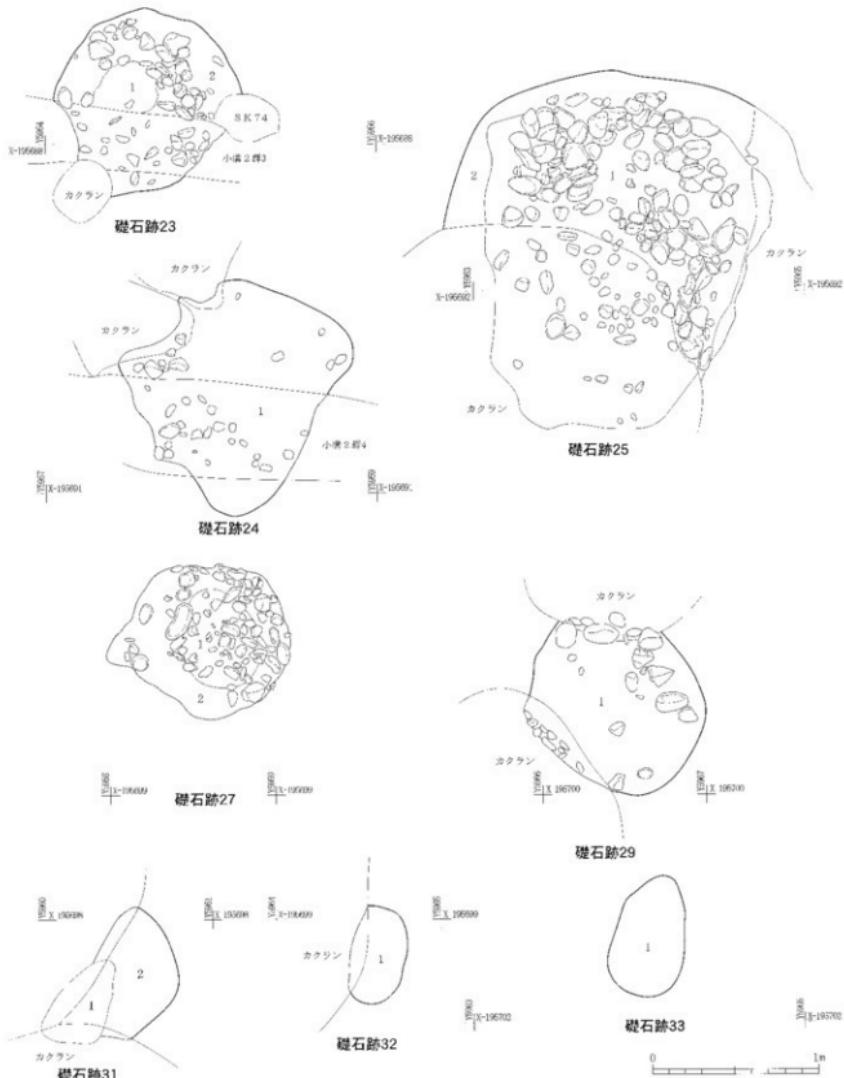
建物内部の大型の礎石跡で、搅乱内において検出したもので、南側の大半は上面が失われているが掘り込みも深いため搅乱底面において残存していた。礎石跡28と対になるものである。検出部分での掘り方径は南北1.7m、東西1.5mで、形状は南北にやや長い楕円形である。掘り方ラインの内側には一定幅をもって根固めラインがみられる。搅乱を利用して断面の確認を行なったところ、構造は掘り方内に厚さ10cm程の黄褐色ブロック土を貼り、径10cm程度の円礫を密に敷き詰めた上部にやや大きめの円礫を詰めていることがわかった。しかし搅乱の影響が著しく、根固め上面の状況や礎石の抜取り痕などは不明である。礎石跡25は第4次調査ではSK1として取り扱ったものである。

礎石跡27

建物内部の礎石跡で、SK137より古い。搅乱内において検出したもので、上面が失われている。形状は削平のため不整形であるが、本来は比較的整った円形で、規模も現状より大きかったとみられる。掘り方径は0.95m、根固め径は0.5m程である。根固めは径1~20cm程の円礫を密に詰めており、径10cm前後のものが多く、礎間にはブロック土が詰められている。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土を多く含み、固く締まっている。掘り方内にも径1~12cm程の根固めとみられる円礫がいくつか確認されたが、これは上部が削平を受けているため、根固めの底面付近の一部が残存していたことによるものと考えられる。

礎石跡29

建物内部の礎石跡で、搅乱により北側および南側が一部失われている。形状は不整円形で、掘り方径は1.1m程である。検出面みると根固めの円礫はまばらであるが、搅乱断面でみると密に詰めた状態が確認できる。根固めは径2~20cm程の円礫を使用しており、径15cm前後のものが多い。掘り方埋土は固く締まっており、暗褐色ブロック土を多く含んでいる。



第27図 1号基礎建物跡 基礎跡(4)

遺構	層位	土色	土性	特徴	遺構	層位	土色	土性	特徴
基礎跡23	1 1074/4 塩色	シルト	赤褐色色鉛灰、無化物鉛灰+シルト	(鉛灰を含む) 砂灰、壁面有り	基礎跡27	2 1073/1 深灰色	シルト	暗赤・褐色色/ロック、内側を多量含む(黒鉛の)	砂灰、壁面有り
	2 1074/4 塩色	シルト	シルト	砂灰、壁面有り	基礎跡29	1 1073/1 深灰色	シルト	暗赤色色鉛灰、無化物鉛灰、壁面多量含む(黒鉛)	砂灰、壁面有り
基礎跡24	1 1074/4 塩色	シルト	赤褐色色鉛灰、無化物鉛灰(黒鉛の)	砂灰、壁面有り	基礎跡31	1 1073/2 に近い深灰色	シルト	暗赤色色鉛灰、無化物鉛灰、壁面多量含む(黒鉛)	砂灰、壁面有り
	2 1074/4 塩色	シルト	シルト	砂灰、壁面有り	基礎跡32	1 1073/3 に近い深褐色	シルト	暗褐色色鉛灰、無化物鉛灰を含む(黒鉛)	砂灰、壁面有り
基礎跡25	1 1074/4 塩色	シルト	赤褐色色鉛灰、無化物鉛灰(黒鉛の)	砂灰、壁面有り	基礎跡33	1 1073/3 に近い深褐色	シルト	暗褐色色鉛灰、無化物鉛灰を含む(黒鉛)	砂灰、壁面有り
	2 1074/4 に近い黄褐色	シルト	シルト	砂灰、壁面有り	基礎跡34	1 1074/2 に近い黄褐色	シルト	暗褐色色鉛灰、無化物鉛灰を含む(黒鉛)	砂灰、壁面有り
基礎跡27	1 1074/4 塩色	シルト	暗褐色色鉛灰、無化物鉛灰(黒鉛の)	砂灰、壁面有り					

礎石跡31

建物内部の小型の礎石跡とみられ、他遺構との重複関係は無い。搅乱により西側および南側が一部失われているため形状は不整形で、規模も不明である。礎石の抜取り痕の可能性もある褐色土範囲を確認しており、外側の掘り方埋上とみられるプランには黄褐色と黒色ブロック土を多く含み、固く締まっている。礎石跡32・33同様に根固石は一切確認できず、他の礎石跡と異なった構造といえる。

礎石跡32

建物内部の小型の礎石跡とみられ、他遺構との重複関係は無い。搅乱により西側が一部失われている。形状は南北に長い楕円形で、掘り方とみられるプランの径は南北0.6m、東西0.35m程度である。掘り方のみの確認で、埋土には黄褐色砂質ブロック土と黒色ブロック土を含み、固く締まっている。根固石は一切確認されなかった。

礎石跡33

建物内部の小型の礎石跡とみられ、他遺構との重複関係は無い。形状は南北に長い楕円形で、掘り方とみられるプランの径は南北0.75m、東西は不明である。掘り方埋上には黄褐色砂質土と黒色ブロック土を多く含み、固く締まっている。根固石は一切確認されなかった。

【講　跡】 挖り込みは、SD 4 aがSB 1 西辺北側と石敷遺構南辺西側、SD 5がSB 1 北辺中央、SD 6が中央と東端でを行い、断面調査はSD 4 bで行った。各溝はSB 1 の周囲を巡ることから、雨落ち溝として機能したことが考えられるが、第8次調査の成果から、SD 6はその構造の特殊性や幅の広さ、さらに他の溝と接続しながら配置されることで、水路的な性格も併せ持っていたと考えられている。またSD 4 aはSB 1 西側妻側の雨落ち溝となると共に、1号石敷遺構の周囲に巡らした側溝としての性格も有している。各溝跡の構造や幅は場所により様々で、この違いは溝の主たる性格を示しているものと考えられる。

4号溝跡

SD 4はSB 1 の主に西辺に位置し、同時に1号石敷遺構の南・東側の側溝とした溝跡で、西側玄関の張出しに沿わず、建物本体の西辺際に確認した古い溝跡をSD 4 bとし、それ以外を4 aとした。以下ではSD 4 b以外の部分をSD 4 として記述する。

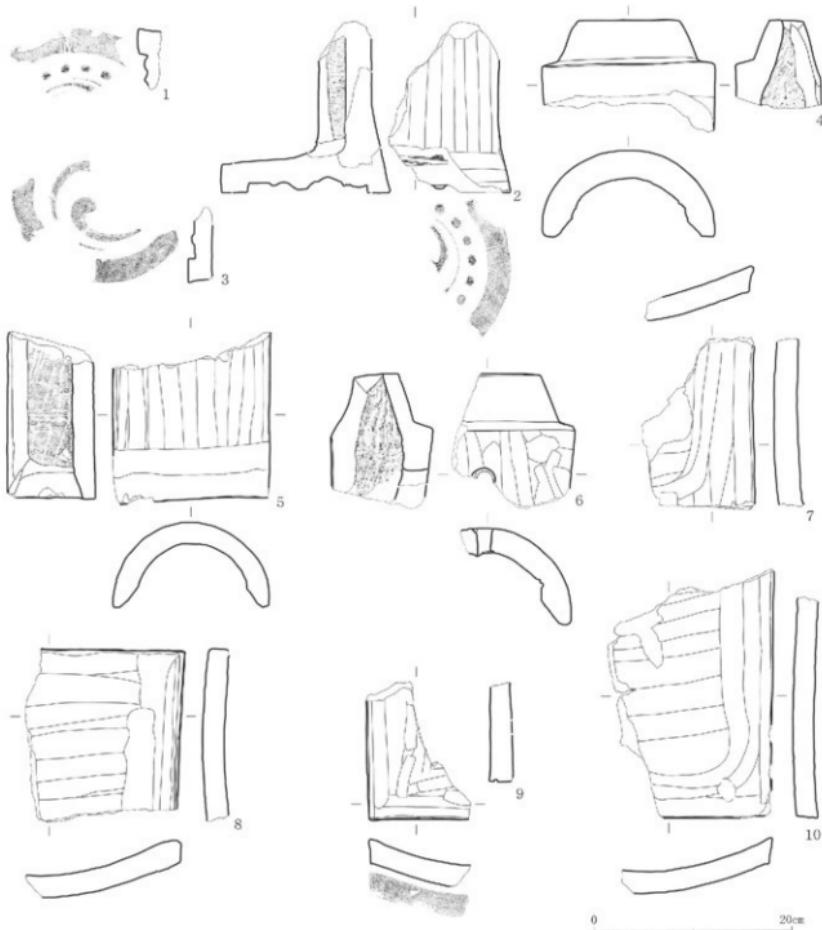
SD 4は北西角が搅乱により大きく失われている以外も六角塔基礎などにより壊される箇所が多い。建物西辺側での確認長は21.8mである。玄関北側で掘り込んだ1区の状況をみると、幅1.2m程の溝掘り方内の底面および壁面に黄褐色シルト土で埋め戻した後に、1号石敷遺構に見られるると同様の径1～3cm程の小円礫を溝底面から西壁面全体に敷き詰めている。底面は比較的平坦で、壁面は底面から急に立ち上がり、途中から緩やかになっている。建物側の東壁中位には偏平の円礫が一段並べているが、それより上部に小礫は敷かれていない。またこの並べられた円礫が本来1段のみだったのかは明らかでない。壁面上半部の緩やかな傾斜はそのまま西側の石敷遺構へとつなぎ、溝と石敷遺構は一体的な構造をもっていたとみられるが、溝内の小礫の一部は石敷からの流入とみられる。溝の開口部幅は1.05m程と掘り方幅より多少狭い程度で、中位の段より下部の幅は0.5m程、深さは深い場所で0.5mである。溝西側の掘り方ラインは石敷が載ることにより不明である。

玄関部が張出した西辺をみると、確認のみであるが溝幅は0.5～0.6mと狭く、これは上部の屋根の構造に合わせた規模や構造と理解できる。

建物から離れた調査区北壁近くでは、幅1.35mと広めの掘り方に幅0.5mと狭い開口部が確認され、西側の石敷側壁面には径20cm程の円礫が3個並んでいる。断面をみると、溝本体の掘り込みは浅く、掘り方内に予め貼った埋土も浅いことがわかる。また1号石敷の南辺側溝部分では、溝幅は0.5m程で、掘り方を伴うかは不明である。溝の深さは0.45mで、溝内には流入した小礫が多量に含まれている。以上のように連続する同じ溝跡でも、建物に面する場所と石敷の側溝を形成する場所とではその構造に大きな違いがあることがわかる。



第28図 4号溝跡 1区周辺



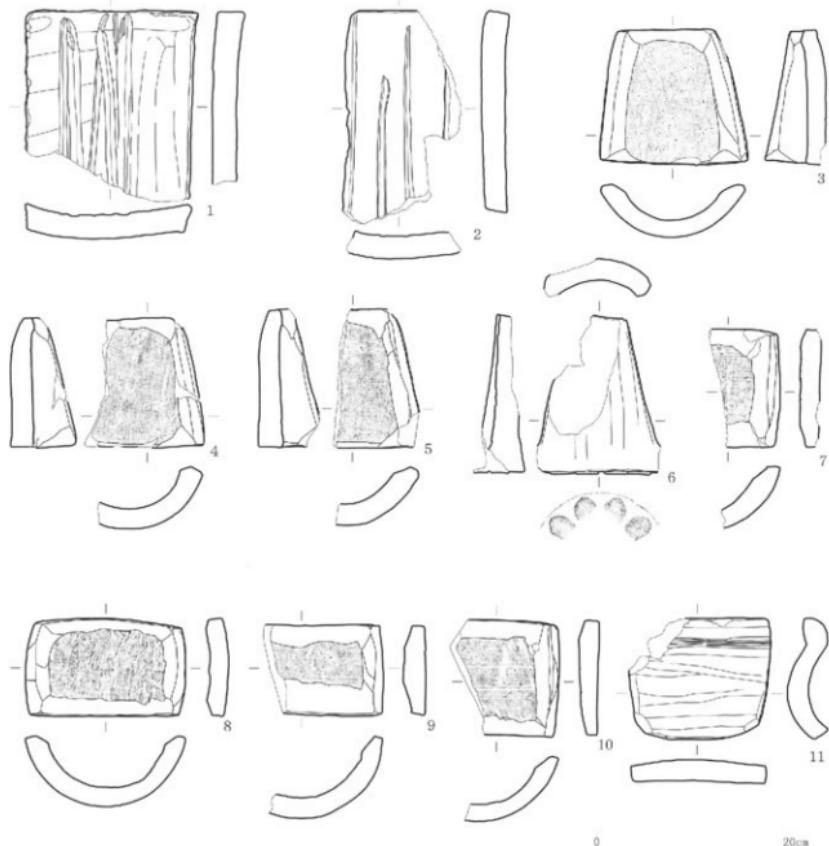
試験番号	縦横番号	種類	造形・部位	文様	大きさ(cm)	幅 高さ 内径 外径 内深さ 外深さ	重さ(kg)	備考	分類	参考図版
1	F1	折丸瓦	SD4	丸瓦二門瓦	-	2.5 3.9 3.9 3.9	0.20	瓦面: 巴たき・輪郭: 4cm(1号瓦・縁と接合)	A	40-10
2	F2	折丸瓦	SD4	丸瓦三門瓦	-	(16.9) (12.9) 9.9	0.91	瓦面: 巴たき・縁付: 1.5cm, 瓦面 ナデ・底面: コビナガ・輪郭	A	40-11
3	F18	折丸瓦	SD4	三出瓦	-	-	3.5 3.7 3.33	瓦面: 巴たき	B	40-12
4	F26	瓦瓦	SD4	-	(7.4) 2.9 6.8	6.1 9.68	凸面: ナデ・凹面: コビナガ・輪郭	C	40-13	
5	F27	瓦瓦	SD4	-	18.8 2.2 8.7	- 1.13 9.9	凸面: ナデ・凹面: コビナガ・輪郭	-	40-14	
6	F28	瓦瓦	SD4	-	- 3.4 9.9	4.9 9.69	凸面: ナデ・凹面: コビナガ・輪郭: 轮郭: 轮郭: 轮空あり	C	40-15	
7	G3	有耳瓦	SD4	不明	-	-	0.36	凸面: ナデ・縁付: 瓦面: ナデ・瓦当部周縁	C	40-16

第29図 4号溝跡出土遺物（1）



出所番号	分類番号	種類	説明・部位	直徑	底径	高さ (mm)	厚さ	重さ (kg)	備考	分類	参考図版
1	249	平底	S34	22.5	-	-	2.6	1.89	凸面；ナデ・窓跡、凹面；ナデ・指揮痕	1	41-1
2	254	平底	S34	-	-	-	2.1	0.68	凸面；ナデ・窓跡、凹面；ナデ	1	41-2
3	551	平底	S34	-	-	-	2.1	1.15	凸面；ナデ、凹面；ナデ	1	41-6
4	540	平底	S34	-	-	-	2.2	0.85	凸面；ナデ・窓跡、凹面；ナデ・刻印；C字形 縁8mm	1	41-7
5	518	平底	S34	-	-	-	2.6	0.95	凸面；ナデ・窓跡、凹面；ナデ	1	41-9
6	547	平底	S34	-	-	-	2.0	1.02	凸面；ナデ・窓跡、凹面；ナデ・施用痕分割されると	1	41-8
7	541	平底	S34	-	-	-	2.6	0.49	凸面；ナデ・窓跡、凹面；ナデ・刻印；三角形(底く内側へしある)縁8mm	1	41-19
8	553	平底	S34	-	-	-	2.2	0.35	凸面；ナデ・窓跡、凹面；ナデ・刻印；C字形 縁8mm	1	41-11
9	516	平底	S34	-	-	-	2.3	0.45	凸面；ナデ・窓跡、凹面；ナデ・刻印；三角形 縁1.2cm	1	41-12
10	550	平底	S34	-	-	-	2.1	0.21	凸面；窓跡、凹面；ナデ・刻印；天蓋石 縁1.2cm	1	41-13
11	5258	平底(焼切)	S34	-	-	2.5	-	0.21	凸面；ナデ・窓跡、凹面；ナデ・施用痕；焼成前分割痕割りケズ有	2	41-14

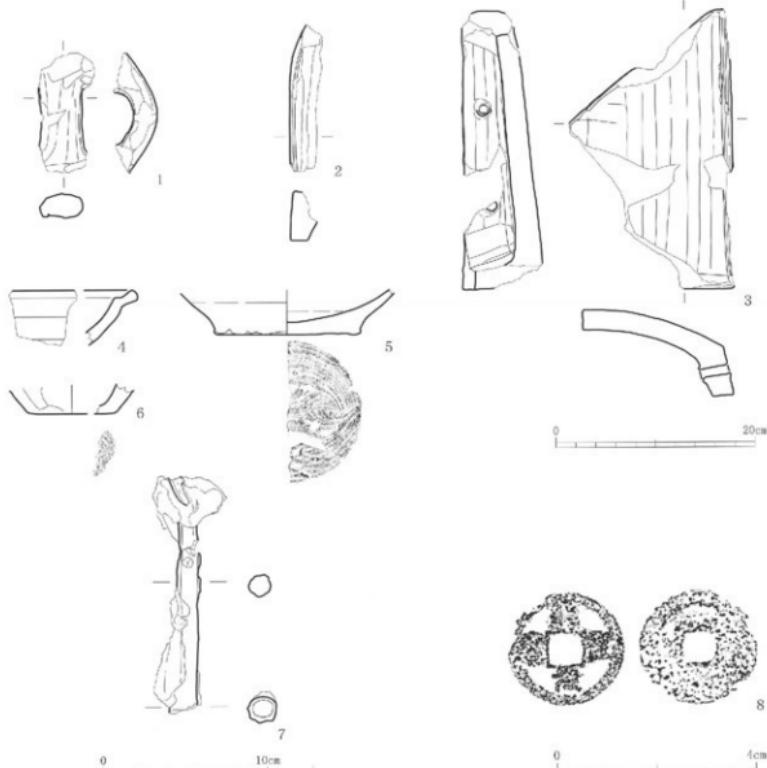
第30図 4号溝跡出土遺物（2）



出土地番号	鉢形番号	種類	遺構・部位	大きさ(cm)	基盤	底面	壁面	重さ(kg)	備考	分類	写真図版
1	15	堅手瓦	SD4	—	17.2	—	±2.5	1.13	楕円前分別・側面ケリ。底面：ナゲ、側面：ナゲ。底広の無理味あり	1②	41-15
2	34	堅手瓦	SD4	—	—	—	2.3	0.73	凸面：ナゲ、凹面：ナゲ、底面：ナゲ。軸に鉛錠跡あり	1	41-16
3	137	凹窓瓦	SD4	13.9	14.9	19.9	(6.0)	0.82	凸面：ナゲ、凹面：コビキ窓、舟目	2	41-17
4	126	凹窓瓦	SD4	13.4	—	—	6.5	0.49	凸面：ナゲ、凹面：コビキ窓、舟目	2	41-18
5	126	凹窓瓦	SD4	14.3	—	(6.5)	0.35	凸面：ナゲ、凹面：コビキ窓、舟目	2	41-19	
6	E168	堅手瓦	SD4	16.4	—	—	0.3	0.46	凸面：ナゲ、底面：ナゲ、非赤土	3	41-20
出土地番号	鉢形番号	種類	遺構・部位	大きさ(cm)	基盤	底面	壁面	重さ(kg)	備考	分類	写真図版
7	B86	堅手瓦	SD4	12.2	—	2.0	—	0.27	凸面：ナゲ、凹面：コビキ窓	1	41-21
8	H91	堅手瓦	SD4	16.1	16.0	2.9	7.2	0.84	凸面：ナゲ、凹面：舟目	1	41-22
9	H88	堅手瓦	SD4	9.4	—	2.2	8.5	0.35	凸面：ナゲ、凹面：コビキ窓	1	41-23
10	H87	堅手瓦	SD4	11.8	—	1.8	6.7	0.37	凸面：ナゲ、凹面：コビキ窓	1	41-24
11	H90	堅手瓦	SD4	12.4	16.0	2.1	3.0	0.47	凸面：ナゲ、ケヅリ、凹面：ナゲ	3	41-25

第31図 4号溝跡出土遺物（3）

当初、SD 4はSB 1の西辺において建物本体に沿って直線的に確認されていたが、後に玄関を構成する礎石跡19・20がSD 4を切り、同時に両礎石跡の西側に鉤形に曲がる新たな溝跡(SD 4a)の存在が確認された。SD 4bは礎石跡19と20の間に幅0.6m以上、深さ0.1m程の浅い溝を掘った後、黄褐色ブロック土のみで完全に埋め戻されており、溝内に礎などは殆ど含んでいない。以上のことから、SD 4bについては、SB 1が当初玄関部を持たない構造であったことに伴い建物周囲に配置された溝跡で、後の玄関部の追加に伴い埋められ、他の溝部分も新たに造り替えた可能性も否定できないが、SD 4bの構造が素掘りで、石敷や石列など伴わない簡易なものである



図版番号	地點番号	種類	造形・部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	分類	写真回数
1	E123	瓦瓦	SD4	-	-	-	0.15	筒窓部分、外面：ナデ	41-26	
2	E124	瓦瓦	SD4	-	-	-	0.21	筒窓外、外面：ナデ、内面：ナデ	41-27	
3	E137	手取の瓦	SD4	29.6	-	2.3	1.28	内面：ナデ、外面：ナデ 006・唐土と漆合	42-4	
図版番号	地點番号	種類	造形・部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	分類	写真回数
4	E1	柱頭	柱頭・部位	1.15	0.65	0.15	0.05	ITC前込	写真回数	50-19
5	E4	柱頭・基	柱頭	5.0	-	0.3	-	ITC前込 ロクロ彫刻、表面朱漆り		50-19
6	E3	柱頭・基	柱頭	5.0	-	0.3	-	ITC前込 ロクロ彫刻、表面朱漆り(裏面下端に複数のケズリ)		60-17
図版番号	地點番号	種類	造形・部位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	分類	写真回数
7	N20	熱製品	不明	SD4	-	1.6	2.0	93		61-20
8	N1	熱製品	鐵	SD4	2.5	0.6	1.0	3	望塵云寶(筆者)	62-1

第32図 4号溝跡出土物(4)

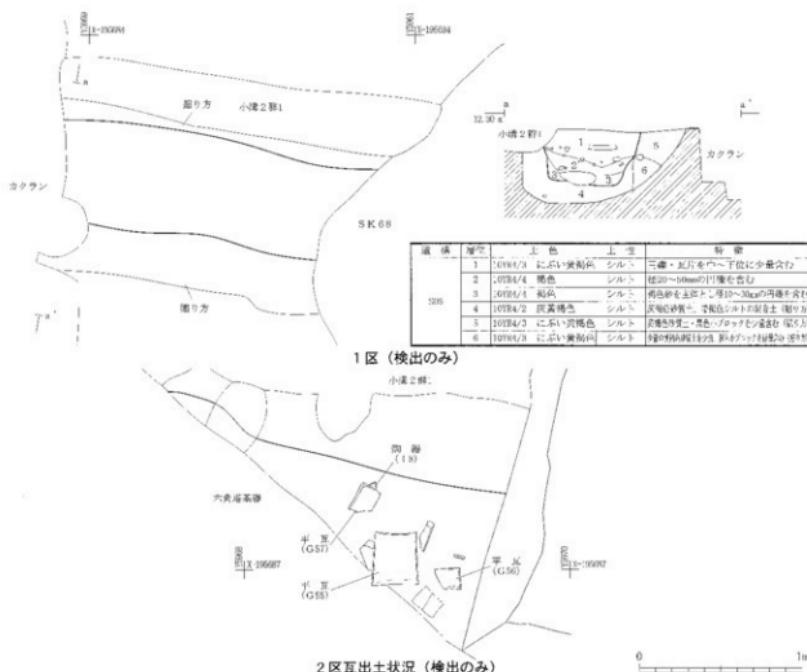
ことから、何らかの意図をもって掘られた基礎構造である可能性が高いといえる。

出土遺物は、軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、面戸瓦、隅切瓦、菊丸瓦、鬼瓦など瓦片が573点のほか、陶器14点、土師質土器皿13点、焼塙壺1点、土師器3点、銅錢1点、鉄製品3点がある。陶器のうち3点は越前燒甕の破片である。F 1・2は軒丸瓦の瓦当部で、瓦当文様は珠文三巴文（左巻き）である。F 25~27は丸瓦で、F 26の尻側には釘穴が認められる。G 3は軒平瓦で、瓦当面の剥落部分にはヘラ状工具による切れ込みが認められる。G 37~41・46~51・53・54は平瓦で、G 49の長さは32.5cmである。G 49を除いてはいずれも破片で、全体の長さ、幅は不明である。また、G 38・40・41・46・50・53の小口面には刺印が認められる。G 208は隅切瓦で切断面は粗い削りで調整される。H 4・5は熨斗瓦で、凹面にはヘラ状の工具による幅広の線刻が数条認められる。H 35~37は輪違いで、いずれも尻部が丸く窄まる形状である。H 86~88・90・91は面戸瓦で、H 90を除き丸瓦を輪切りにしたような形状である。H 91は全体形の判る唯一の資料で、長さ10.1cm、幅16.0cm、高さ7.2cmである。II 90は、基部に引掛け部分を持ついわゆる蟹面戸に近い形をしており、他のものと形状が全く異なるが、面戸瓦としての使用が考えられる。II 108は菊丸瓦の瓦当部である。H 123・124は鬼瓦で、H 123は鬼瓦の龍頭部分とみられる。II 124は海津型の破片である。II 137は箱型斗瓦とみられ隅切である。

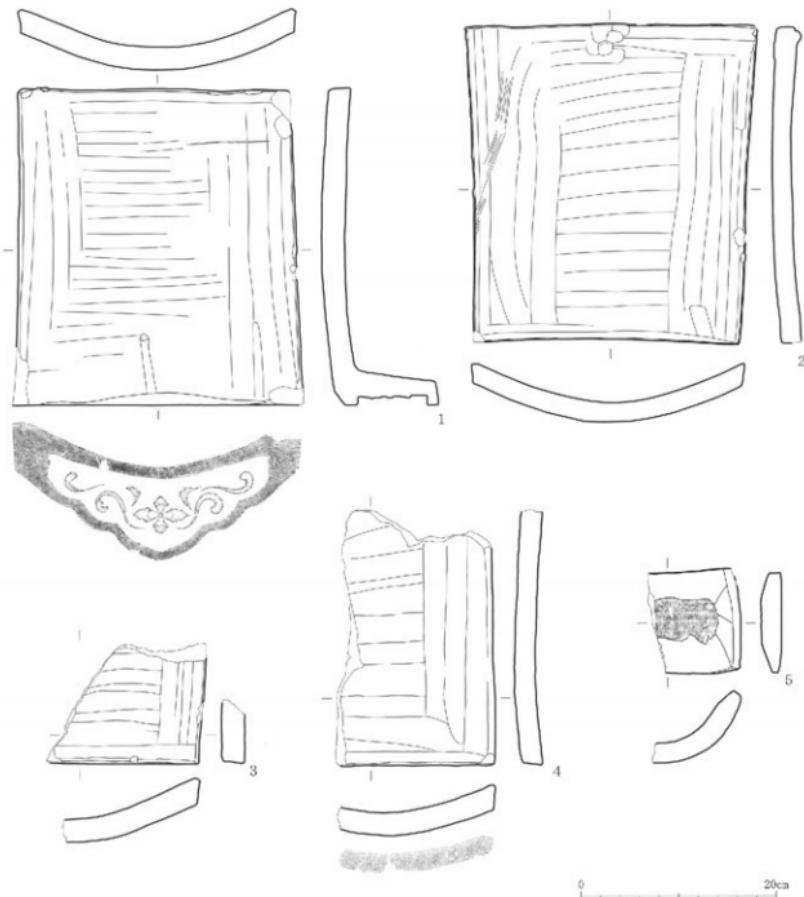
X 3は上師質土器焼塙壺の底部、X 4は上師質土器皿の底部で、ロクロ成形、底部回転糸切りである。N 1は銅錢で「紹聖元寶」である。N 20は筒状の不明鉄製品である。

5号溝跡

北辺となるもので、小溝群2-1、SK 68より古く、六角塔基礎などの擾乱で部分的に失われている。SD 5



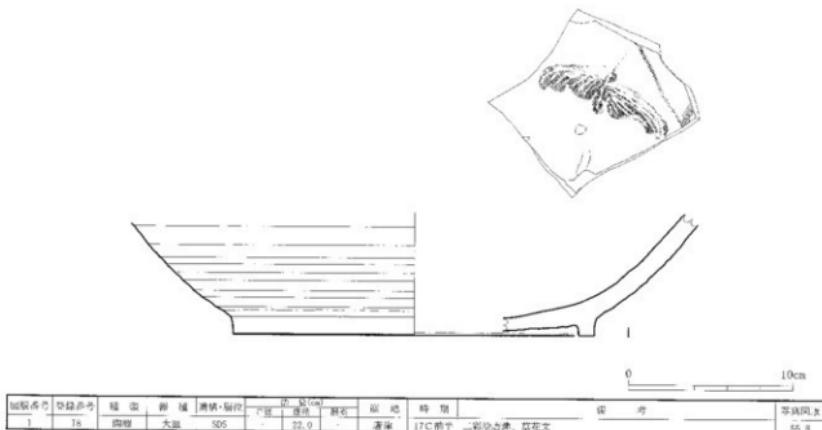
第33図 5号溝跡



区段番号	発掘番号	種類	遺物・部位	長さ(cm)	幅 奥行 高さ 厚さ 重さ(kg)	備考	分類	写真番號
1	04	石平瓦	花唐文	35.7 (26.7)	9.6 22.1 7.3 4.32	泥水瓦、凸面：ナデ・難沙、凹面：ナデ	2A	42-2
2	055	平瓦	道溝・端枠	32.7 (26.9) (27.0)	2.6 3.22	凸面：ナデ・難沙、凹面：ナデ	1	42-3
3	056	平瓦	道溝・端枠	-	9.4 0.41	凸面：ナデ・難沙、凹面：ナデ	1	42-5
4	058	平瓦	道溝・端枠	-	- 1.32	凸面：ナデ・難沙、凹面：ナデ B03：内に土牛の跡み、径20cm	1	42-4
区段番号	発掘番号	種類	遺物・部位	長さ(cm)	幅 奥行 高さ 厚さ 重さ(kg)	備考	分類	写真番號
5	092	正戸瓦	SD5	19.8	2.0 7.3 0.31	凸面、ナデ、凹面：ヨピキ瓦、右目	1	42-6

第34図 5号溝跡出土遺物（1）

は西側のSD4との接続部分を境にして溝幅が異なるとみられることや、当初、1号石敷造構の側溝をSD4と呼称したことから、それから外れる東部分をSD5としている。溝の西端は擾乱により大きく失われており、SD4との接続部構造は不明である。確認長は21.6mで、確認のみであるが、幅1m程の掘り方をもち、溝開口部は0.6m



第35図 5号溝跡出土遺物（2）

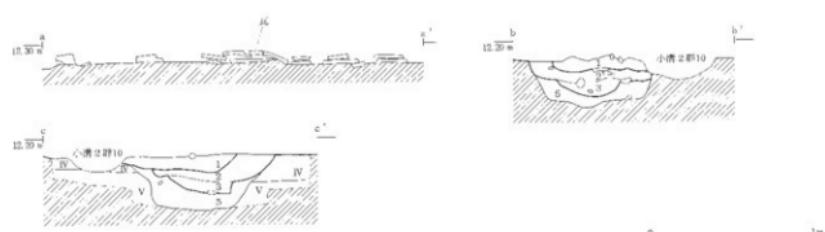
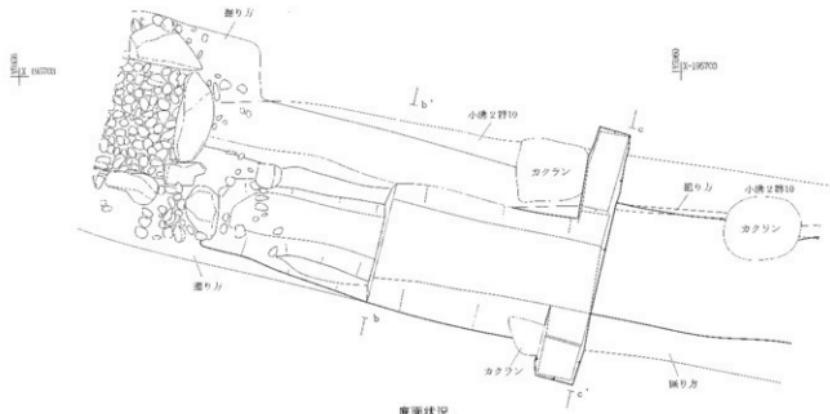
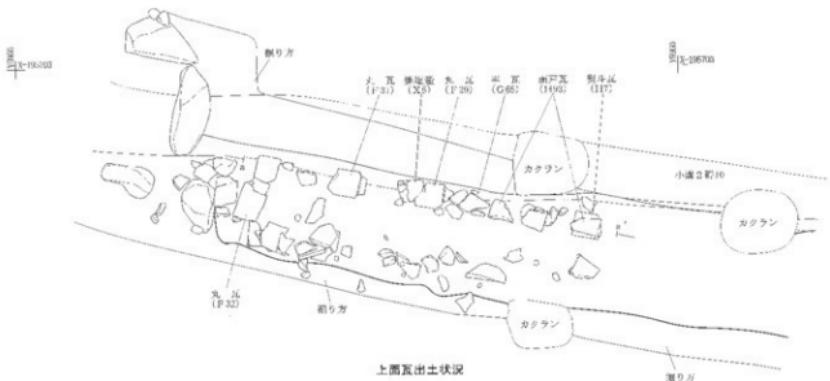
程と推定される。しかしこれらのラインは東側では不明瞭となる。搅乱断面からみると、深さ0.45mの掘り方の底面には厚さ0.15m、壁面には厚さ0.4mの黄褐色ブロック土を厚く貼りつけ溝底面や壁面としている。溝の底面には幅20cm程の偏平円錐がみられるが、全体での状況かは明らかでなく、また堆積土内に径1~3cm程の小円錐が認められたが、これもまた敷かれたものかは不明瞭である。SD 5を切るSK64を掘削した場所の観察でも底面に小礫などは確認されず、SD 5は特別な構造を持たない溝の可能性がある。

出土遺物は、丸瓦、軒平瓦、平瓦、面戸瓦など瓦片43点、陶器1点がある。G 4は完形の滴水瓦で、瓦当文様は花菱文である。長さ32.7cm、高さ9.6cm、広端幅29.7cmで、平瓦部分の大きさはG55とほぼ同じである。G55・56・58は平瓦で、全体の大きさの判るG55は、長さ32.5cm、広端幅29.9cm、狭端幅27.1cmである。H92は面戸瓦である。I 8は二彩唐津の大皿で草花文。

6号溝跡

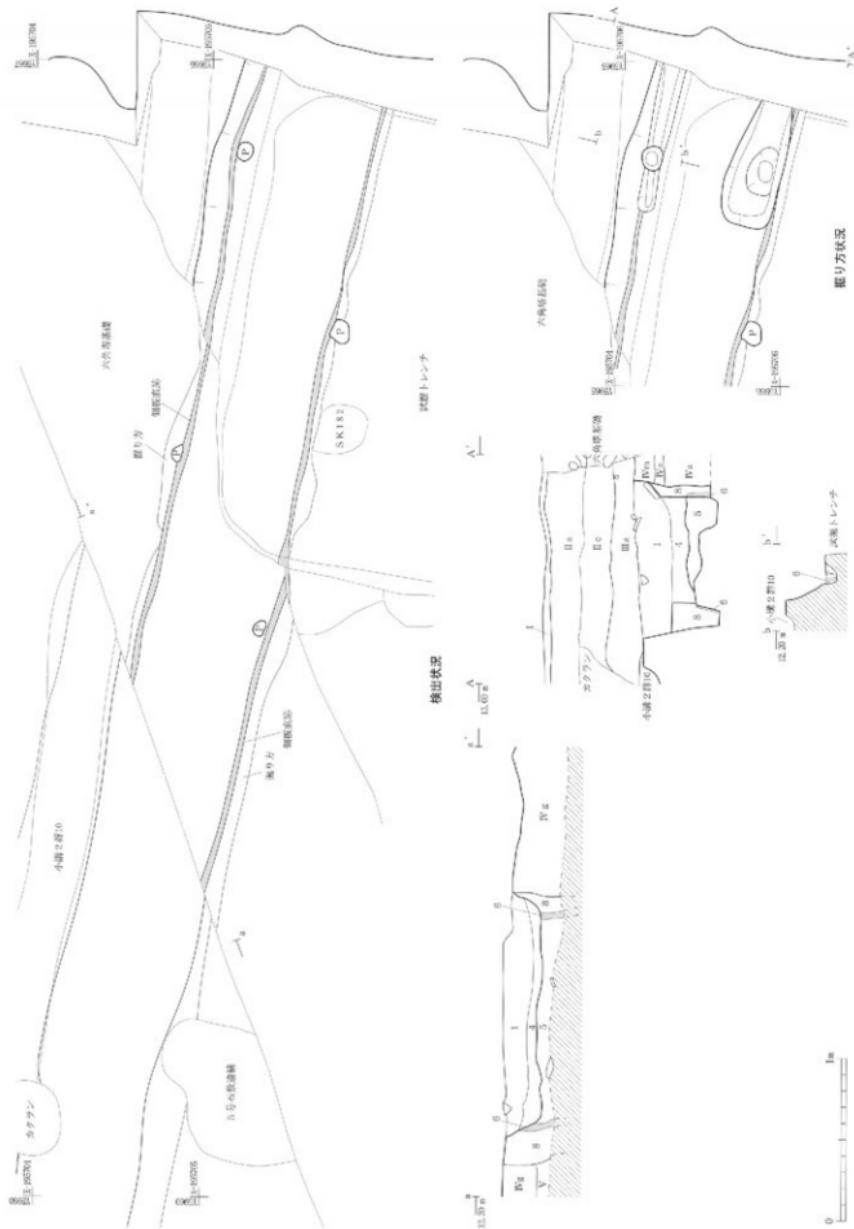
南辺溝となるもので、六角塔基礎や試掘トレンチなどで部分的に失われている。西端部はSD 4と接続しており、西側には主軸を逸れて1号石組造構が溝間に構築されている。確認長は17.1mで東側は調査区外に延びていく。石組造構より東側の状況をみると、最も広いところで幅1.3mの掘り方をもち、溝の開口部は0.7m程とみられる。掘り込みは3か所で行い、西側から1区、2区としている。

1区は1号石組造構の東側の接合部にあたる。この部分は溝跡の検出段階から丸瓦を主体とする瓦片が溝方向に沿って2列に並ぶ状況が確認されており、瓦は溝埋土の途中段階で黄褐色ブロック土で敷き均した後に意図的に列状に置いたものとみられる。これらの瓦を取り外し、ブロック土を除去すると、溝本来の堆積土とみられる暗褐色シルトが確認された。第8次調査では、SD 6の東側延長部分において、溝の底面を嵩上げし、改修している状況が確認されており、今回の掘り込み部分についても、同様の改修が行なわれた可能性も考えられる。なお1区では2区で確認した側板の存在は確認できなかったが、石組造構近くでは板材や礫を使用していない溝の可能性もある。底面には掘り方埋土として15cm程度の厚さで黄褐色と灰色ブロックの混合土が敷かれている。1号石組造構との接続部については、石組が露出していたため掘り下げを行わなかったが、際には割石が1石据えられており、溝は同じ深さや幅で石組造構と接続していない可能性もあるが、上部が削平を受けているため、詳細は不明である。



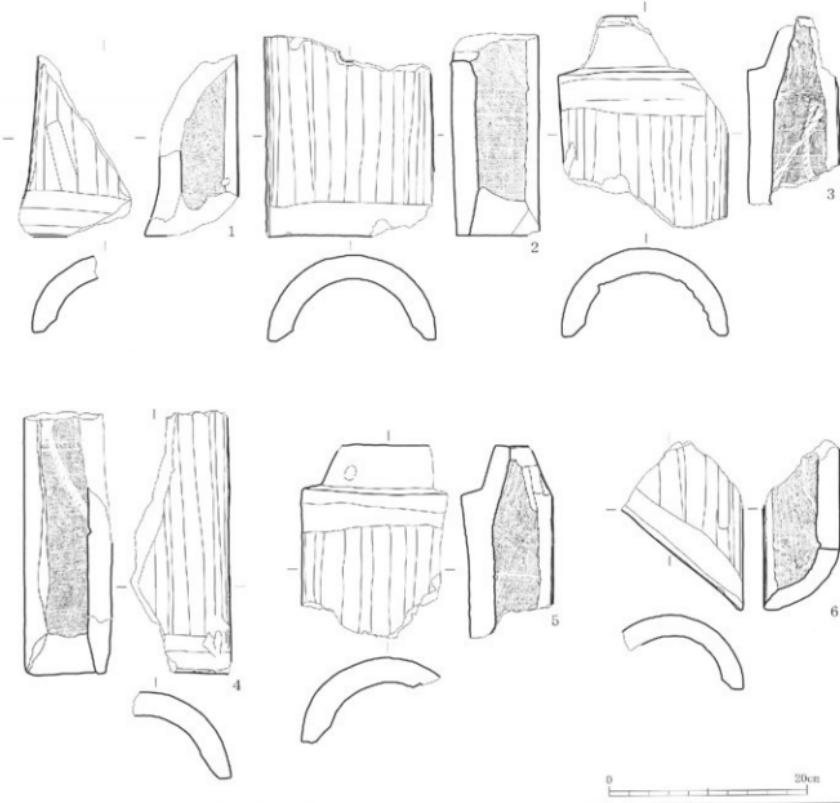
第 6	層位	上 層	土 性	特 徴	底 面			
					層位	土 性	土 じ	特 徴
E6	1	10Y3/1	褐色	シルト 黄褐色シルト質・自向鉢を含む	5	10Y3/3 にぼい黄褐色	シルト	灰色シルトフロカ・黄色アラカセ色
	2	10W4/4	褐色	シルト 黄褐色シルト質・ブロックを多量含む	6	10Y3/2 細泥炭	砂質土	砂質土砂を多量含む (原生痕跡)
	3	10R3/2	黒褐色	シルト 高褐色シルト質・透かし10cmの出物跡を含む	7	10Y4/4 褐色	シルト	黄褐色土砂を多量含む (原生痕跡)
	4	10W4/6	にぼい黄褐色	粉質土 透かし下の褐色地を含む、炭化物質を含む	8	10Y3/2 黒褐色	シルト	黒褐色シルトフロカ・黄色アラカセ色

第36図 6号溝跡 1区



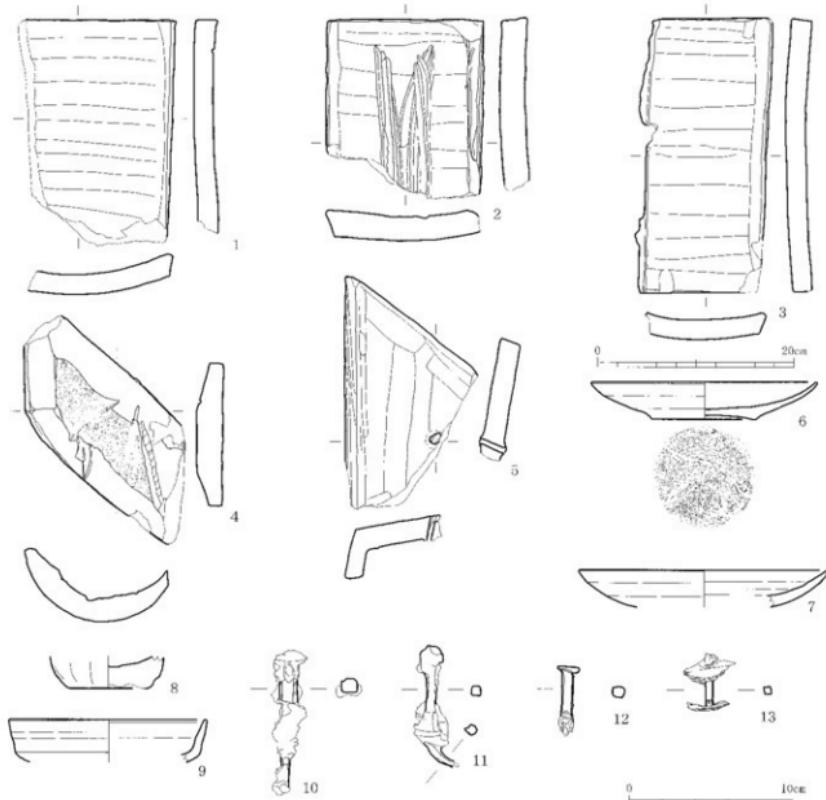
第37図 6号溝跡 2区

2区は調査区東壁に接する調査区で、六角塔基礎や試掘トレンチにより上部が削平されていた場所を利用した。検出段階からSD6の掘り方と溝埋土との間には幅2~3cm程の暗褐色砂質土の帯状プランが2条確認されており、これを溝の側壁構造に関連するものと想定して掘り込んだところ、壁にあてた側板の痕跡であることが判明した。さらに両側2列の側板痕跡に接し、径4~5cm程のピットが痕跡の内側と外側交互に確認されたが、これは側板を固定した杭の痕跡と考えられる。SD6の2区での構造は、幅1.3m程の掘り方内の両側板部分を溝状に掘り下げ、ここに厚さ2~3cm程の側板を直立させながら掘り方との間を黄褐色ブロック土で充填し、さらには溝内の底面にも厚さ10cm程にブロック土を敷き均しておる、この結果、溝の開口幅は0.7m程となっていることがわかった。溝内の堆積土は上下2層に分層され、下層は粗砂を多く含んだ暗褐色土で、溝機能時の堆積土とみられ、上層は廃絶似



区段番号	壁跡区分	種類	発見・断面	丈	横幅(cm)	高さ(cm)	底面形状	周囲縁	埋込深	重さ(kg)	備考	分類	写真回数
1	Ⅱ	軽瓦瓦	SD6	不規	-	-	-	-	-	9.56	△面:ナゲ、四面:コピキ面、布目・ナゲ	-	42.7
2	F32	丸瓦	SD6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	42.8
3	F28	丸瓦	SD6	-	-	2.5	8.7	6.2	1.30	-	△面:ナゲ、三面:コピキ面、布目・圓片面	1	42.9
4	F29	丸瓦	SD6	-	-	2.5	8.9	-	1.94	-	△面:ナゲ、三面:コピキ面、布目・圓片面	-	42.9
5	F31	丸瓦	SD6	-	-	2.5	8.7	4.6	1.29	-	△面:ナゲ・強頭筋、四面:コピキ面、布目	1	42.11
6	F36	丸瓦(調査)	SD6	-	-	2.2	-	-	9.18	-	△面:ナゲ、四面:コピキ面(左目)・強筋面、四面(右目)	3	43.0

第38図 6号溝跡出土遺物（1）



遺物番号	性質番号	種類	地質・層位	出土地	高さ	幅	厚さ	重さ(kg)	備考	分類	参考文献
1	007	瓦片	SDE	-	-	-	2.0	1.10	白面：ナマ・織歩、黒面：ナマ	1	43-2
2	H7	骨工具	SDE	-	15.7	-	2.6	1.97	焼成後分別、右側：ナマ、左側：ナマ・織歩あり	1①	43-3
3	18	鳥の骨	SDE	28.2	-	(1.6)	2.0	1.11	焼成後分別、右側：ナマ・織歩、左側：ナマ	1②	43-4
4	193	瓦片(瓦)	SDE	-	(16.2)	4.6	7.5	0.86	白面：ナマ、黒面：ロビキ瓦、瓦質・焼成度：西周初期(約300)	2	43-5
5	H105	その他	SDE	-	-	2.1	-	0.77	白面：ナマ、黒面：ナマ・割穴あり、対穴径0.5cm	1③	43-6
6	16	土器裏手	SDE	-	(18.6)	(6.4)	2.3	在耕	17C初め ロクロ調査、出土品観察(1号古墳構築と併合)	29-16	
7	X9	土器裏手	SDE	-	(15.2)	-	-	在耕	17C初め ロクロ調査(1号古墳構築と併合)	58-9	
8	X5	土器裏手	SDE	-	-	4.9	-	17C初め ロクロ調査、外側剥離下地に鉛生のケイリ	69-15		
9	E1	瓦片	SDE	-	-	-	-	ロクロナマ	-	60-25	
10	N22	骨 細	骨 細	遺構・層位	上層	骨質	骨質	重さ(g)	備考	参考文献	
11	Y23	骨製品	骨	SDE	9.0	1.6	1.2	25	-	61-15	
12	Z25	骨製品	骨	SDE	7.7	0.6	0.5	12	-	61-16	
13	Z21	骨製品	骨	SDE	4.4	0.8	0.7	6	-	61-17	
					-	0.5	0.3	4	木質付着	-	61-18

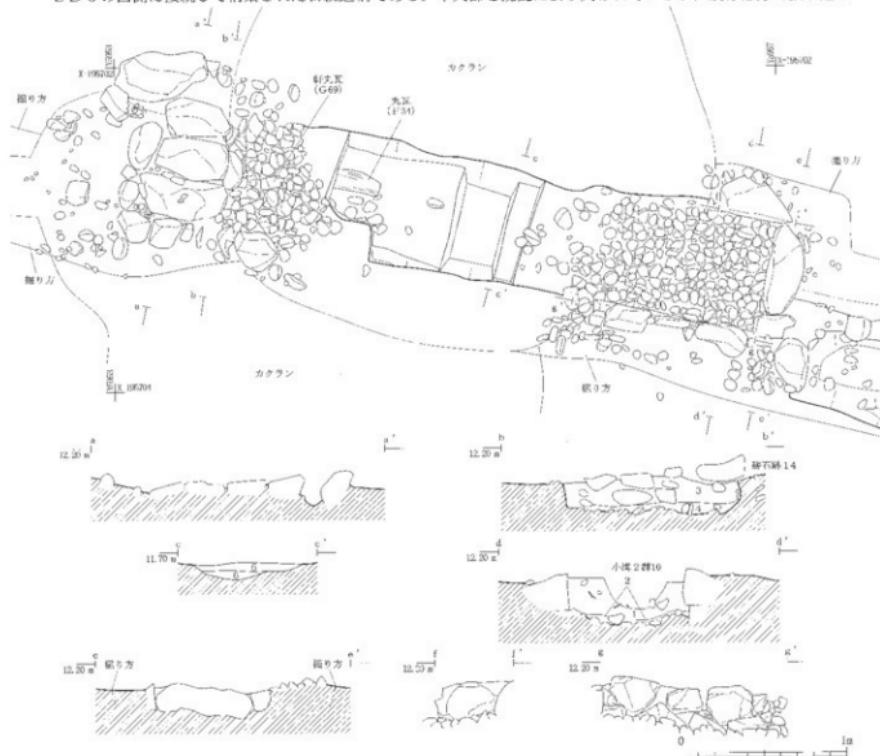
第39図 6号溝跡出土遺物（2）

降の堆積土とみられ、瓦片や鉄釘を含んでいる。ただし第8次調査から、下層の土壌については途中の溝改修時に埋め戻され、その上面を新たな溝として使用している可能性もある。

出土遺物は上面に敷き並べられた瓦を中心、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、面戸瓦、隅切瓦など381点、瓦質土器1点、土師質土器皿30点、焼塗壺3点、土師器9点、須恵器2点、ガラス製品1点、鉄製品31点がある。F 3は軒丸瓦で、瓦当部分は剥落している。F 28~32は丸瓦でF 28の凹面には棒状工具による押圧痕が認められる。F 30は角切の丸瓦で、約50度の角度で切断されている。G 67は平瓦である。H 7・8は熨斗瓦で焼成後に分割線で分割される。H 7の凹面にはヘラ状の工具による幅広の線刻が数条認められる。H 93は隅切の面戸瓦で、丸瓦の両端部を約50度の角度で切断した形状である。凹面は両端部を面取りされる。H 105は箱熨斗瓦とみられ開切、E 1は須恵器で壺蓋の口縁である。X 5は土師質土器焼塗壺の底部である。X 6・9は土師質土器皿である。X 6の口径は13.6cmで、底部は回転糸切りである。N 21~23・25は釘である。

1号石組遺構

S D 6の西側に接続して構築された石組遺構である。中央部を搅乱により失われているが、残存部分で掘り込み



遺構	場所	土色	土性	特徴	層	厚さ	土色	土性	特徴
1号石組	1 10/20/7	黒褐色	砂質土	径1~20mmの成形物を多量含む	1号石組	4 10/9/1/L	褐色	シルト	無機色相を含む
	2 10/9/1/2	灰褐色	砂質土	合体に影響		5 2.5%4/2	褐色質土	シルト	無機色相+アーリーホリゾン
	3 10/9/3	暗褐色	シルト	黄褐色斑・半ブロック・角柱状を含む		6 2.5%4/6	オリーブ褐色	シルト	無機色相シルトブロックを多量含む(6.0%)

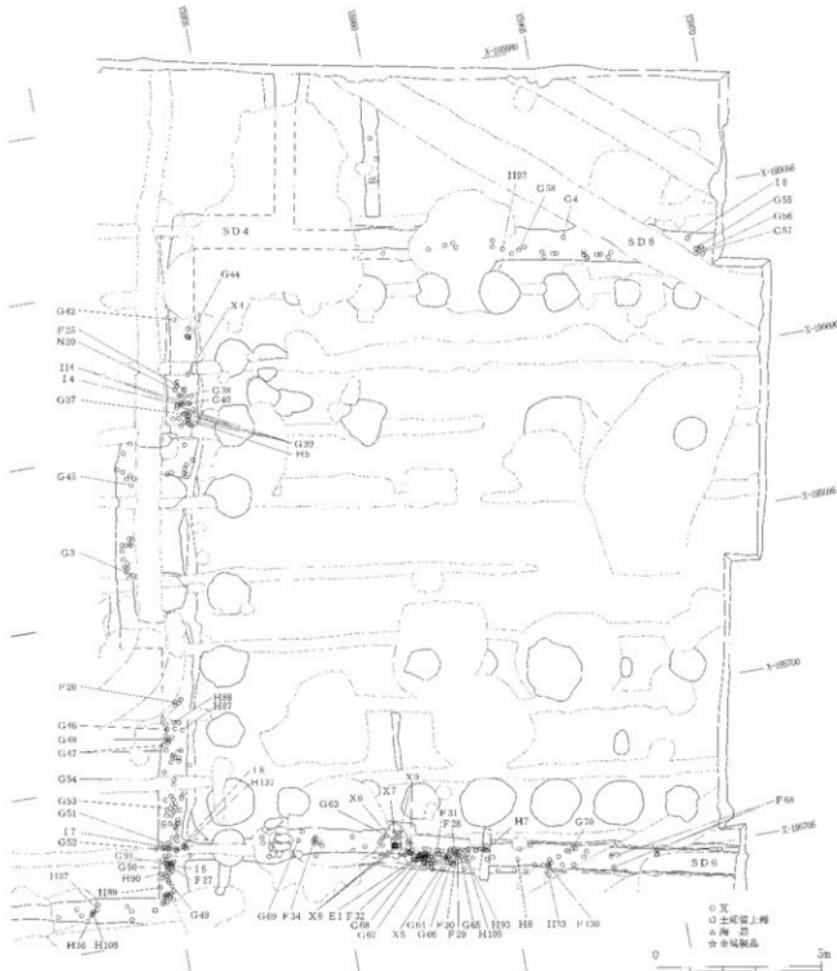
第40図 1号石組遺構

第41図 1号石組遺構出土遺物

調査している。石組の内寸は、東西の長軸3.3m、南北の短軸0.7m程の長方形である。石組の東西軸線はSD 6の軸線より建物側に0.5m程寄っているが、両造構の掘り方南辺ラインは一体のもので、同時に構築されたものとみられる。石組は中央の搅乱東側においては2段程度が残存しており、上面が平坦な安山岩質の角礫を積み上げた状況で確認されたが、後の削平状況から上部にはさらに段数を重ねていたものとみられる。底面からの残存高は0.3m程度である。

南辺東端の側石は1段目の積行の間に2段目をのせた落し積みのような積み方をとり、南面で10石、北側面で1石が残存していた。中央の搅乱掘削時には同種の石材が多くみられた。東面は長さ56cmの大型の角礫を長手面が面となるよう据えられ、その南側の角部には角礫が1石据えられていた。西側には西側と南側を囲むように一部角礫が並んでおり、これが側石になるとみられる。その内側には厚みをもった板状の角礫が4石南北に並んで検出され、内側の小口面を捕えるよう打ち欠かれていた。これらの石材の性格は不明である。石材下部には遺構内の堆積土が混入していた。底面には径5cm程の円礫を隙間なく敷き詰めている。これらの円礫により側石面の下縁を見ることはできない。石敷の下面に丸瓦が1点東西に軸を揃えて置かれていたが、これに関連するような排水施設などは確認されておらず、性格は不明である。石組内の堆積土1層には炭化物粒が極めて多く含まれていた。石組を含む掘り方の規模は東西4.5m、南北1.4m程度とみられるが、特に西側は搅乱により掘り方ラインが不明瞭である。掘り方は底面の一部を断ち割ったのみで不明な点が多いが、底面は緩やかに傾んでいる。掘り方埋土には黄褐色ブロック土を主体としたものに加え、径1~10cm程の円礫も含まれている。

遺物は、丸瓦、平瓦、輪邊いなどが52点、土師質土器皿58点、土師器3点、鉄製品2点、ガラス製品1点がある。F34は丸瓦で、長さ31.6cm、幅16.1cm、高さ7.5cm、玉縁の長さ4cmで、中央部に釘穴がある。G63は平瓦で、全体の長さは33.8cmである。X7・8は土師質土器皿である。N24は釘である。



第42図 1号從石建物跡 遺物出土状況

[その他の施設] 建物内部および外側で礎石建物に付属するとみられる施設を確認している。建物内部においては礎石跡22・23の東側に近接して焼土坑が3基（SK203・204・205）確認された。これらは重複関係をもち、SK205、SK203、SK204の順に構築されている。また礎石跡12・27の間の西側にSD23、建物外側ではSD19を検出している。

203号土坑

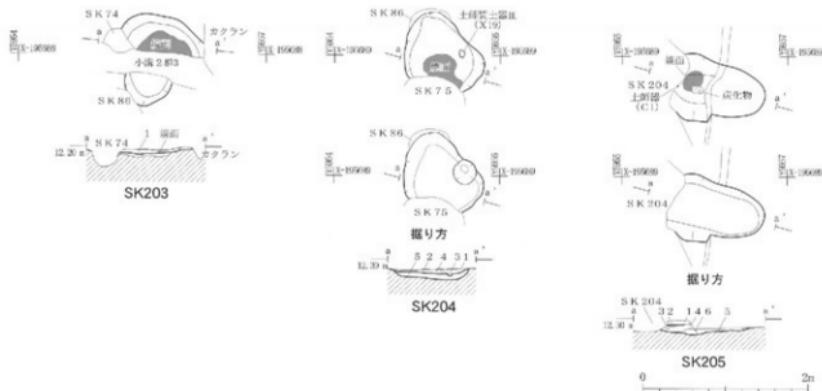
礎石跡23の東側に近接する焼土坑で、小溝群2-3、SK74・86・204より古い。擾乱により東側の一部が失われている。形状は不整円形で、長軸1.12m、短軸1m、深さ0.1m程で、主軸方向はN-12°-Eである。掘り方は検出できず、整地層上面に焼面が形成されている。焼面は土坑中央部に径0.6m程の範囲でみられ、極めて固く締まっている。堆積土には炭化物粒や焼土粒が含まれている。出土遺物は土師質土器皿38、土師器1点がある。

204号土坑

SK205の東側で検出した焼土坑で、礎石跡22・23の間に位置する。SK203より新しく、SK75・86より古い。擾乱により南側が一部失われている。形状は不整円形で、長軸0.5m、短軸0.2m以上、深さは0.1mで、主軸方向はN-20°-Eである。掘り方をもち、底面を0.08m程埋め戻した上面に焼面が形成されている。焼面は土坑中央からやや南に寄り、形状は径0.5m程の不整円形で、厚さは1cm程である。出土遺物は焼面とほぼ同レベルで土師質土器皿103点、土師器高环脚部1点、鉄釘4点がある。

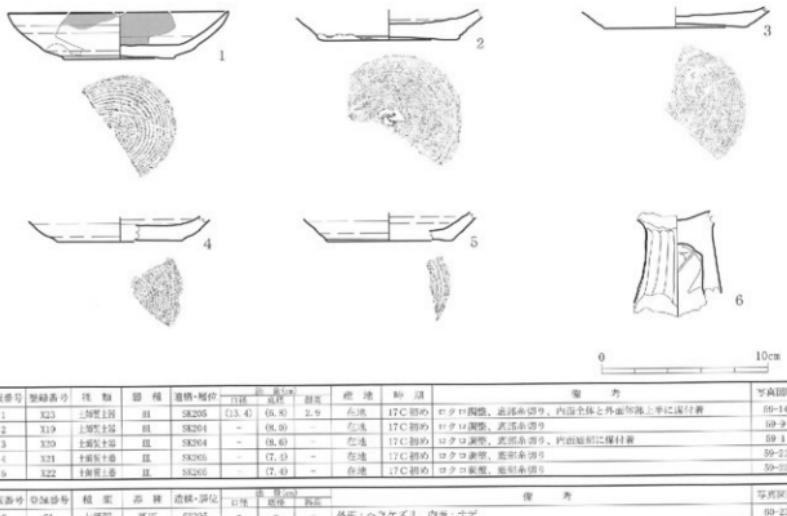
205号土坑

礎石跡22・24の間で検出した焼土坑で、SK204より古い。東側は第4次調査区1区の西側調査区境にあたり、上面が削平されている。形状は不整椭円形で、確認長は1.1m、短軸0.82m以上、深さは0.15mで、主軸方向はN-74°-Wである。掘り方をもち、底面を0.1m程埋め戻した上面に焼面が形成されている。焼面は径0.25m程の不整椭円形で、厚さは2cm程である。焼面に接して大きさが15cm程の炭化物ブロックを検出している。出土遺物は陶器1点、土師質土器皿53点、土師器2点、鉄釘1点がある。



施設	場所	土色	土性	特徴	施設	場所	土色	土性	特徴
SK203	1 10YEV/4 暗褐色	シルト	砂-1-2mの付近を含む。砂2-3mの付近を含む。		SK205	1 10Y3/3 緑褐色	シルト	焼-1-2mの付近を含む。	
	他所 10YEV/3 暗褐色	シルト	西壁側熱のため赤色がかる。	2 8YR4/5 赤褐色	シルト	被熱熱のため赤色がかる。(施設)			
SK204	1 10YEV/4 暗褐色	シルト	砂-1-2mの付近を含む。砂2-3mの付近を含む。	3 8YR4/5 赤褐色	シルト	焼-1-2mの付近を含む。			
	2 10YR2/3 暗褐色	シルト	砂-1-2mの付近を含む。砂2-3mの付近を含む。	4 10TR4/4 暗色	シルト	生-1-2mの付近を含む。砂-1-2mの付近を含む。			
SK205	3 10YR2/2 暗褐色	シルト	泥上-ブロックを含む。	5 10TR3/2 暗褐色	シルト	泥上-泥下-2-3mの付近を含む。			
	4 10YR3/3 深-5-7 黄褐色	シルト	上部が鍛錬熱で赤る。(焼面)	6 10YR3/4 深-5-7 黄褐色	シルト	(鍛り方)			
	5 10YR3/4 深褐色	シルト	炭化物粒、砂-1-2mの付近を含む。(鍛り方)						

第43図 土坑



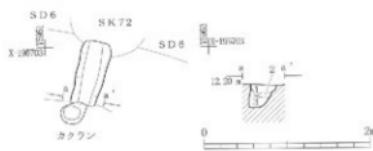
第44図 土坑出土遺物

19号溝跡

南辺溝であるSD 6から直交して南側に延びる溝である。SK72より古く、擾乱により南側が失われている。SD 6との接続部分はSK72により不明瞭である。確認長は1m程で、掘り込み調査を行ったところ、底面は擂鉢状に緩やかに立ち上がり、幅0.35m、深さ0.1m程となった。南側の擾乱内でピット状の落ち込みがみられたが、柱痕跡は確認されない。溝・ピット共に堆積土にはブロック土を多く含み、人為的堆積とみられる。SD 19の方向は建物西辺の柱筋と一致することから、建物南西角に取付き、南側に延びる棚などの施設となる可能性もある。出土遺物は丸瓦などの瓦片が2点、上質土器皿4点がある。

23号溝跡

礎石跡12・27を結ぶラインの西側に南北に走る溝跡で、北側を小溝群2-8、南側を小溝群2-9により切られ、これらより古い。堆積土にはブロック土が多く混入し、人為的に埋め戻されたと認められ、建物の方向と一致している。掘り込み調査を行っていないため底面状況などは明らかでないが、建物内部に存在した溝や空間を仕切った施設の基礎など、何かしら建物に関連するもの可能性がある。



実 緒	層位	土 色	上 性	特 徴
SD 19	19H14	褐色	シルト	炭化物を散在含む
	19H15	黄褐色	シルト	褐色土を散在含む
	19H16	褐色	シルト	表面の表面土ブロックを多量含む

第45図 19号溝跡

2号礎石建物跡

【配置と形状】調査区の南東側で検出した鉤形（L字形）となる礎石建物跡で、SB4の南側、SB3の東側に近接して位置する。南側には2号石敷造構がある。SB3とは建物南辺の柱筋を備えており、建物東西の柱筋もSB3と完全に備えて配置されている。またSB4とも南北の柱筋を備えている。建物西辺からSB3東辺までの距離は約4m（2間）で、北辺からSB4南辺まで4m程度である。

建物東側は調査区外となるが、北及び東側への建物の延びはほぼ同様の10.8m程度の幅があり、第8次調査の結果、建物規模は東西棟部分が長く、これらが建物内での空間を広くとれる主たる場所であったと推定される。礎石跡はSB1とは異なり建物内部に総柱状に配置されるのが特徴で、その一部は東柱的なものとみられることから、建物全体が疊や板による床敷きであったと考えられる。建物中心部の柱間は概ね1間となっているが、西および南端での柱間は1間半と広くなり、ここにも構造上の大きな特徴をあげることができる。SB2が床敷きの建物であることを考えると、建物の外縁にあるこの部分は、部屋の周りに配置された縁通り（廊下）の可能性がある。第8次調査では、南側の縁通りがそのまま1間半幅で建物東端まで通ることに加え、東端の状況から推察して、今回確認した建物の北側張出し棟の北端や東端部も1間幅の狭い縁通りが存在していた可能性もある。また建物南西角より西へ2.3mの位置に礎石跡が1基あるが、ここはSB3とのほぼ中間であり、建物の南端にはこれら両建物をつなないだ幅1間半の渡り廊下が存在したと考えられる。

建物の周囲には全周して溝が巡っている。調査では建物西辺から北辺に折れ、さらに北張出し棟の東辺溝となるものをSD7とし、SB3と共に用いられる南辺溝をSD9とした。建物西辺のSD7の南端部分は擾乱により不明瞭であるが、この上に通したとみられる渡り廊下の北側で止まると推定され、SD9には接続していない。またSD7の北東角の南側には東側へ分岐して延びる溝跡がある。

【規模】今回確認した建物規模は、北側張出し部の東西が10.8m（5間）、南北が16.8m（8間）で、建物南側では東西12.8m分を確認したが、第8次調査から、建物全体での東西規模は23.6m程度（6尺5寸で12間相当）となり、SB1同様に大型の建物になることが判明している。縁通りと推定される西及び南端部を除いた場所での柱間は6尺5寸を基準として造られていると推定されるが、縁通り幅については礎石跡のみからの計測の限界から、2.88（9尺5寸）～3.03m（10尺）の幅となり、一定の数値をみない。また北側張出し棟の北端や東端については、現状で大きく6尺5寸を越えるものではなく、数値的に縁通りの存在を裏付けることはできない。SB3に面する西辺の南半部分には柱間3間分を二つ割りにして大きく幅をとった部分があるほか、礎石跡9と54は方眼上にはのらない配置をみせる。

建物の各側柱列と周辺溝との距離は、北と東側では1.6m程度（5尺5寸）であるが、西側では僅かに狭く、1.5m程度（5尺）となる。また南側のSD9では1.75～2.0mの間隔で確認しているが、この地区は2号石敷造構の影響で構造確認が難しく、特定の数値をみない。これらの幅の違いは、軒先の出のみならず、建物周囲に取付く縁などの施設の有無などにも関係している可能性もある。

【礎石跡】礎石跡は側柱部で22基、建物内部で32基の合計54基を確認した。その他にも擾乱等により失われたとみられる礎石跡が6基程度あるが、これらについては当初から存在していたかどうかの検討も必要である。礎石跡規模は総じて側柱部や南や西辺より1間半内側の柱列のものが大きく、一部を除き、建物内部のものが小さく根固め構造も簡易な傾向にあると言える。これは内部の礎石跡の幾つかは束柱であることを示しているものとみられる。また西側柱列の礎石跡7・18、南側柱列の礎石跡49・51・53は1間おきにあるものだが、側柱でありながら、根固めや掘り方埋土の状況が簡単な構造と言え、ここに建物の一つの特徴を指摘することができる。礎石跡は27・50の2基について掘り込みを行い、礎石跡8・12・19の3基は断面のみの調査である。

礎石自体はSB1同様に確認できず、抜取り穴がみられるものが多いことから、礎石は全て抜き取られたものと

みられる。また掘り方埋土もブロック土やそれらが縦状に確認できるものが多く、SB 1 同様の基礎地盤や構造を確認できる。擾乱を受けないものをみると、形状は円形で、掘り方径が0.7~1.7m程と幅があるが、中心となるのは1m程のもので、SB 1 と比較してやや小型となっている。礎石跡27は西側に擾乱を受けているが、他の礎石跡に比べて大型で深く、礎石の抜き取り穴も深い窪みを有している。礎石跡の掘り方は殆どものがⅥ層まで掘り込まれている。また礎石跡9は南北方向、54は両方向に柱筋が半間程度進んだ位置にあり、これらが建物内部の部屋割りや付属設備などの配置に関係している可能性もある。

礎石跡8

建物内部の礎石跡で、33号集石遺構、小溝群2-17より古い。南半分は六角塔基礎により上部が失われているが、底面が僅かに残存する。形状は比較的整った円形で、掘り方径は1.15m、深さは0.3m程、根固め径は0.8mである。根固めは径1~15cm程の円礫が詰められ、径10cm前後のものが多い。礎間には径1~4cm程の小円礫が詰められている。掘り方は途中で段を持つ構造で、中心の深くなる下段部は径0.7mで周辺掘り方より0.2m程深くなり、根固石が詰められ、また上段部には固く締まった褐色土が詰められている。

礎石跡12

建物西側の礎石跡で、小溝群2-18より古い。南半分は六角塔基礎により上部が失われているが、底面は僅かに残存する。形状は整った円形で、掘り方径は1.15m、深さは0.21m、根固め径は0.75mである。検出面では根固石が殆ど確認できなかったが、断面観察で径1~15cm程の円礫を詰め、10cm前後のものが多いことがわかった。礎間には径1~3cm程の小円礫を多く含んでいる。掘り方埋土は固く締まった黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の瓦層となっている。また擾乱底面でのプランは不整形に窪んでいるが、これは礎石にかかる荷重により根固めが掘り方底面から沈下している可能性もある。

礎石跡19

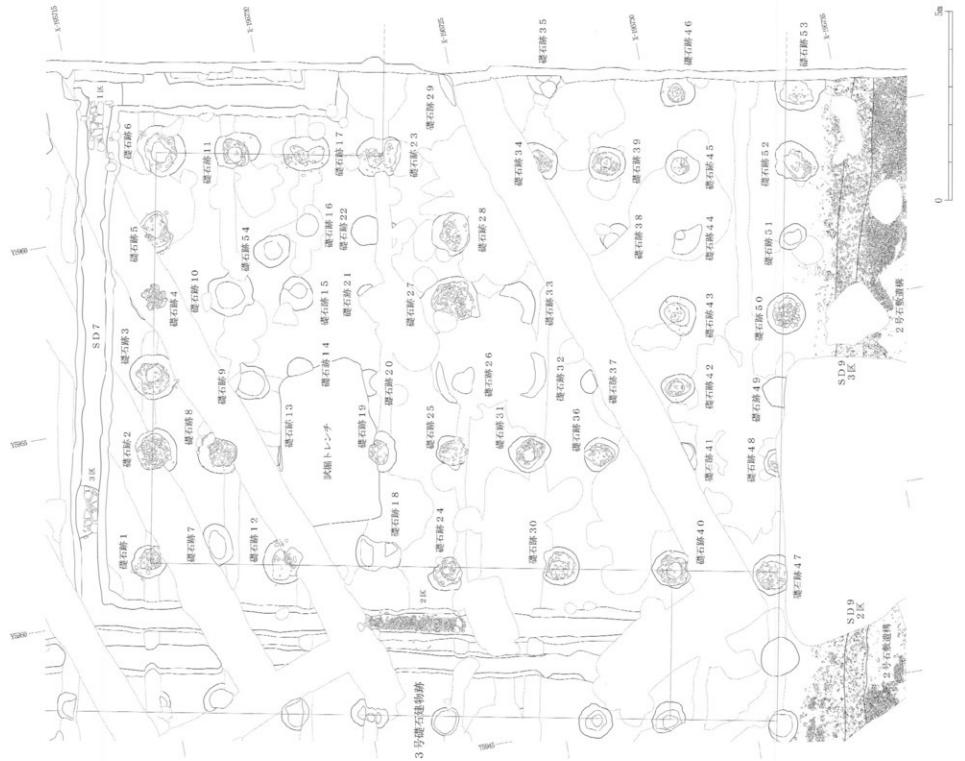
建物内部の礎石跡で、小溝群2-19より古い。北半分は試掘トレンチにより上部が失われているが、底面は僅かに残存する。形状は整った円形とみられ、掘り方径は1.03m、深さは0.2m、根固め径は0.65mである。根固めは径1~16cm程の円礫を密に詰めており、10cm前後のものが多い。根固め中央には径0.3m、深さ0.08m程の円形のプランがあり、礎の少なさから礎石の抜取り痕とみられる。掘り方は途中で段を持つ構造で、中心は径0.3m程の円形に深くなり根固石が詰められ、周囲は浅く、固く締まった褐色と暗褐色ブロック土がリング状の瓦層となっている。

礎石跡27

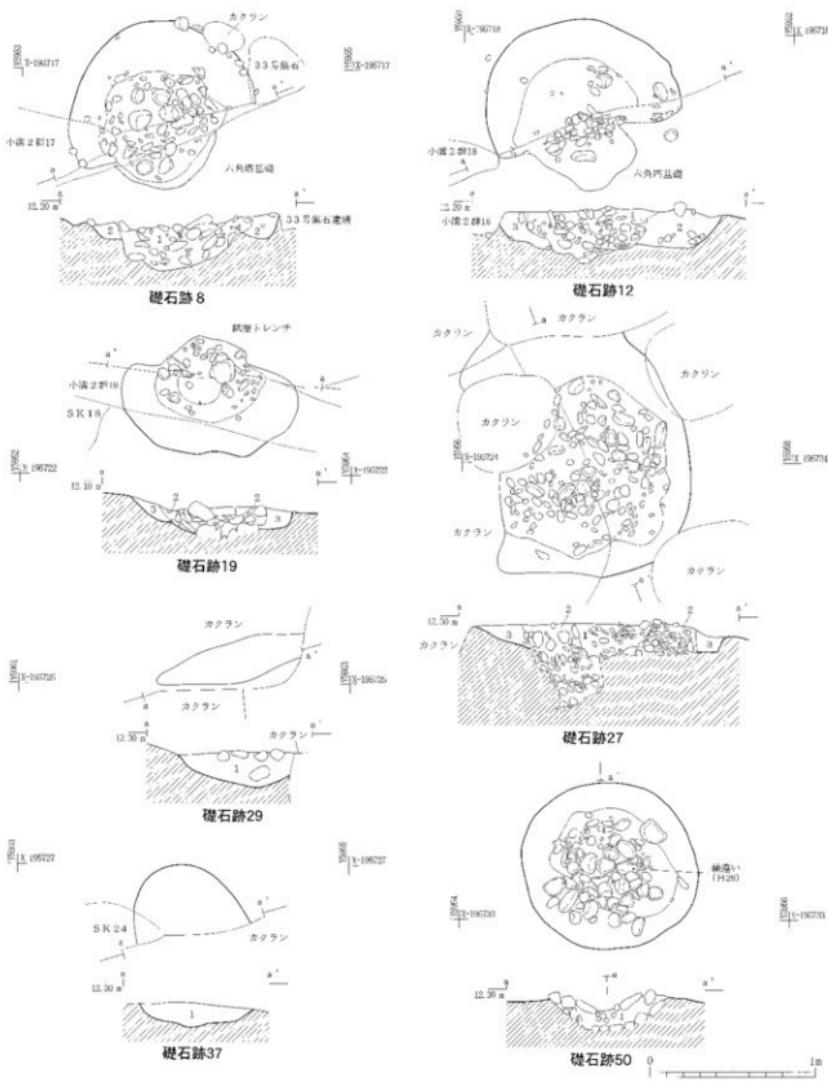
建物内部の礎石跡で、掘り込み調査を行っている。擾乱により西側が一部失われている。礎石跡周辺のⅣ層は周辺より0.08m程高くなってしまい、耕作の深度が浅かったためとみられる。形状は不整楕円形で、掘り方径は南北1.7m、東西1.4m程で、深さも0.5m以上あり、根固め径は1.1m、深さは0.5m以上と、SB 2 の礎石跡では最も規模が大きい。建物のほぼ中央にあることから、荷重のかかる柱部分であった可能性もある。根固めは径1~16cm程の円礫を詰めており、10cm前後のものが多い。礎間には径1~5cm程の小円礫を密に詰めており、特に下部は小円礫が主体となる。根固石中央には礎石の抜取り痕とみられる径0.5m、深さ0.2m程の掘り込みの急な不整円形プランがある。掘り方底面には固く締まった黄褐色ブロック土が数かかれている。

礎石跡37

建物内部の礎石跡で、SK 24より古い。形状は上部が若干削平を受けているため楕円形となっている。掘り方径は0.66m、深さは0.2mである。根固めは確認できなかった。掘り方埋土は褐色土と暗褐色ブロック土を主体とし、固く締まっている。



第46図 2号機石造跡



第47図 2号基礎建物跡 基礎跡(1)

基盤	層位	土 色	土 特	特 標	基盤	層位	土 色	土 特	特 標
基礎跡8	1	10YR4/6	褐色	砂質土 海褐色ブロックを含む(相間)	基礎跡12	1	10YR4/4	褐色	シルト 海褐色ブロックを少量含む(相間)
	2	10YR4/4	褐色	シルト 海褐色ブロックを少量含む(相間)		2	10YR4/4	褐色	シルト 海褐色土(相間)、砂質土を含む(相間)
基礎跡12	1	10YR4/4	褐色	シルト 海褐色土(相間)、砂質土を含む(相間)	基礎跡27	3	10YR4/4	褐色	シルト 海褐色土(相間)、砂質土を含む(相間)
	2	10YR4/4	褐色	砂質土 海褐色ブロックを少量含む(相間)		4	10YR4/4	褐色	シルト 海褐色土(相間)、砂質土を含む(相間)
基礎跡19	1	10YR4/4	褐色	シルト 海褐色土(相間)、砂質土を含む(相間)	基礎跡29	1	10YR4/6	褐色	シルト 海褐色土(相間)、砂質土を含む(相間)
	2	10YR4/6	褐色	砂質土 海褐色ブロックを含む(相間)		2	10YR4/6	褐色	シルト 海褐色土(相間)、砂質土を含む(相間)
基礎跡22	1	10YR4/4	褐色	シルト 海褐色土(相間)	基礎跡37	1	10YR4/6	褐色	シルト 海褐色土(相間)、砂質土を含む(相間)
	2	10YR4/6	褐色	砂質土 海褐色ブロックを含む(相間)		2	10YR4/4	褐色	シルト 海褐色土(相間)、砂質土を含む(相間)
基礎跡27	1	10YR4/4	褐色	シルト 海褐色土(相間)	基礎跡50	0			
	2	10YR4/6	褐色	砂質土 海褐色ブロックを含む(相間)					

礎石跡50

建物南辺の礎石跡で、掘り込み調査を行った。他遺構との重複関係は無い。形状は整った円形で、掘り方径は1.05m、根固め径は0.7mである。検出面では根固石は殆ど確認できなかったが、断面観察で径2~15cm程の円礫を詰め、10cm前後の礫が多いことがわかった。掘り込みは根固め上面で止めていたため、根固めの厚さや掘り方の状況は不明である。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。根固め中央部には径0.4m、深さ0.1m程の不整円形の落ち込み中にⅢ層類似の層が入っており、礎石の抜取り痕とみられる。出土遺物は抜取り痕から輪塗いが1点ある。

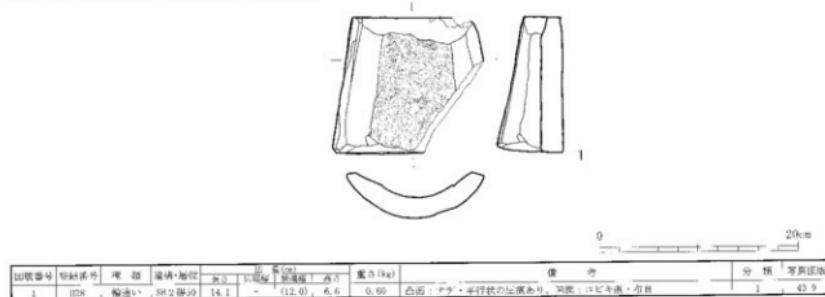


図48図 磂石跡50出土遺物

礎石跡 1

建物北西角の礎石跡で、小溝群2~16より古い。六角塔基礎により南側が僅かに失われている。形状は不整円形で、掘り方径は0.84m、根固め径は0.5m前後である。根固めは径1~10cm程の円礫を比較的密に詰めており、10cm前後のものが多い。根固め中央には径0.3m、深さ0.08m程の礎石の抜取り痕とみられる円形プランがある。掘り方は途中で段を持つ構造で、中央は径0.3m程の円形に一段深くなり、根固めが詰められている。周辺の上段部の掘り方埋土には褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡 2

建物北辺の礎石跡で、小溝群2~16より古い。六角塔基礎により北側上部が失われているが、底面は残存している。形状は円形で、掘り方径は1.2m、根固め径は0.9mである。根固めは径2~15cm程の円礫を密に詰めており、10cm前後のものが多い。礫間にには径1~2cm程の小円礫が含まれている。掘り方埋土は暗褐色ブロック土を主とし、黄褐色砂質土や径2~8cm程の円礫を含み、固く締まっている。

礎石跡 3

建物北辺の礎石跡で、小溝群2~16より古い。六角塔基礎により南側が僅かに失われている。形状は比較的整った円形で、掘り方径は1.2m、根固め径は0.8m程である。根固めは径1~8cm程の円礫を詰めているが疎らで、やや小振りな礫により構成される。礫間にには小礫のみならず暗褐色ブロック土や黄褐色砂質土を詰めている。根固め中央には径0.4m程の円形のプランがあり、礎石の抜取り痕とみられる。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡 4

建物北辺の礎石跡で、六角塔基礎により上部が完全に失われており、根固め底面部分の検出である。北側で僅かに掘り方縁辺を検出していることから、掘り方径は1mを超えるものとみられる。形状は不整形で、根固め径は0.6m程である。根固めは径2~10cm程の円礫を密に詰めており、8cm前後のものが多く、やや小振りである。掘り方

埋土は褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡 5

建物北辺の礎石跡で、六角塔基礎や搅乱により北側や上部の大半が失われているため形状は不整円形で、掘り方径は1m程、根固め径は0.8m程である。根固めは径1～10cm程の円礫を詰めており、8cm前後のものが多く、やや小振りである。礎間には径1～2cm程の小円礫と黄褐色砂質土を詰めている。根固め東寄りには径0.5m程の不整円形のプランがあり、礎石の抜取り痕とみられる。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡 6

建物北東角の礎石跡で、小溝群2-16より古い。搅乱により西側と東側が僅かに失われている。形状は比較的整った円形で、掘り方径は1.35m、根固め径は1mでやや大型の礎石跡である。根固めは径1～8cm程の円礫を詰めているが疎らで、8cm前後のものが多く、小振りである。礎間には暗褐色ブロック土、黄褐色砂質土を詰めている。根固め中央には径0.4m程の円形のプランがあり、礎石の抜取り痕とみられる。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。出土遺物は抜取り痕から平瓦が1点ある。

礎石跡 7

建物西辺の礎石跡で、小溝群2-17より古い。六角塔基礎により北側が失われており、西辺の柱筋よりやや東側に寄った位置で確認した。形状は不整梢円形で、掘り方径は1.1m程、根固め径は0.76m程である。根固めは径2～10cm程の円礫を詰めており、8cm前後のものが多く、やや小振りである。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土が多く含まれ、固く締まっている。

礎石跡 9

建物内部の礎石跡で、小溝群2-17より古い。搅乱により上部の一部が失われている。礎石跡14のある南側に寄った位置で検出してお、礎石跡8と10の柱筋上にはのっていない。形状は不整円形で、掘り方径は0.87m程、根固め径は0.66m程である。搅乱の断面でみると、根固めには径2～8cm程の円礫が確認できるが検出面では疎らであり、礎間には黄褐色砂質土が多く混入している。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡 10

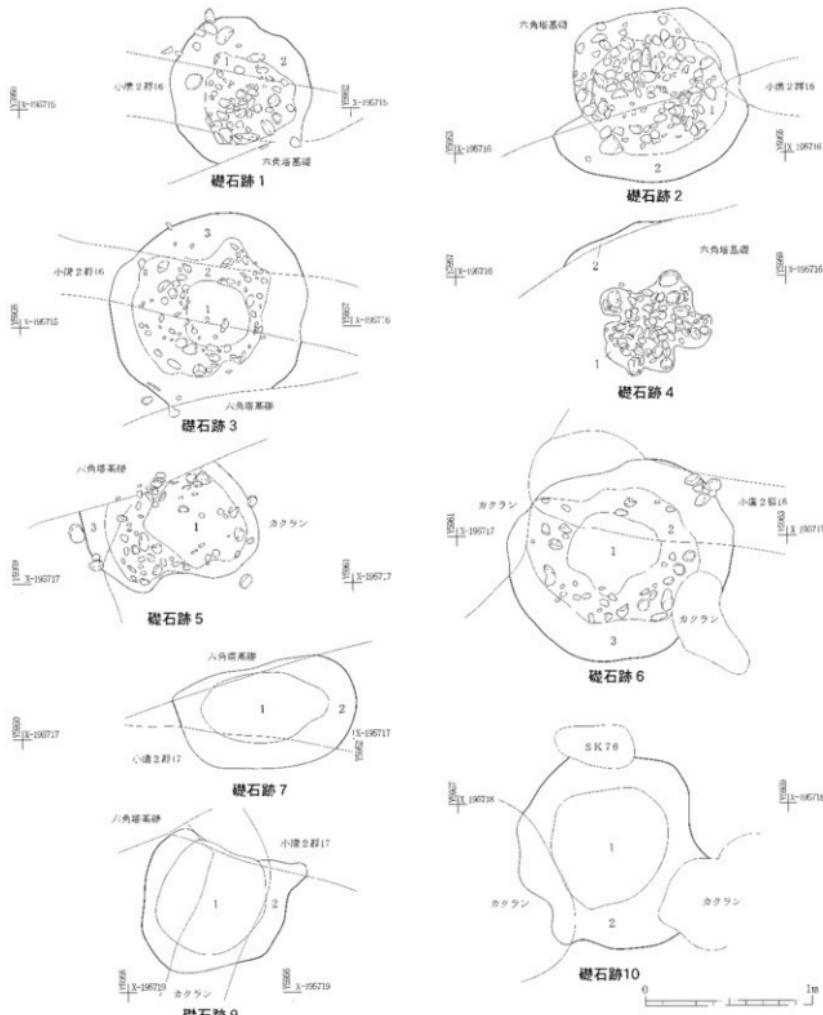
建物内部の礎石跡で、SK76より古い。搅乱により西側と東側が僅かに失われている。形状は不整円形で、掘り方径は1.1m、根固め径は0.75mである。根固めは径2～12cm程の円礫を詰めているが疎らで、掘り方内にも礫を含んでいる。中央西寄りには径25cm程の大型の円礫が一部露出しているが、礎石ではないものとみられる。礎間に暗褐色ブロック土や黄褐色砂質土を詰めている。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡 11

建物東辺の礎石跡で、小溝群2-16より古い。溝状の搅乱により東側から西側にかけて上部が失われている。形状は不整円形で、掘り方径は1.2m、根固め径は0.6m程である。根固めは径1～12cm程の円礫を比較的密に詰めしており、8cm前後のものが多く、やや小振りである。礎間には暗褐色ブロック土、黄褐色砂質土を詰めている。根固め中央には径0.4m程の不整円形のプランがあり、Ⅲ層類似層が堆積することから礎石の抜取り痕とみられる。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。出土遺物は抜取り痕より平瓦1点、輪違いが2点ある。

礎石跡 13

建物内部の礎石跡で、掘り方北縁部が僅かに確認されたのみで、形状・規模等は明らかではない。掘り方埋土は



層 横	層位	土 色	土 性	特 徴	層 横	層位	土 色	土 性	特 徴
壁下跡1	1	10YR4/4	褐色	シルト 網状とブロックを含む、貝壳は主に多角形で、埋め物の 内側が青白、表面がオカリナイト質で、表面に凹凸がある	壁下跡5	3	10YR4/6	褐色	シルト 網状とブロックを含む、貝壳は主に多角形で、埋め物の 内側が青白、表面がオカリナイト質で、表面に凹凸がある
	2	10YR4/6	褐色	シルト 内側が青白、表面がオカリナイト質で、表面に凹凸がある		1	10YR4/4	褐色	シルト 表面がブリッケ、表面が青白、貝壳は主に多角形で、表面に凹凸がある
壁右跡2	1	10YR4/4	褐色	シルト 網状とブロックを含む、貝壳は主に多角形で、埋め物の 内側が青白、表面がオカリナイト質で、表面に凹凸がある	壁右跡6	2	10YR4/1	褐色	シルト 表面がブリッケ、表面が青白、貝壳は主に多角形で、表面に凹凸がある
	2	10YR4/4	褐色	シルト 内側が青白、表面がオカリナイト質で、表面に凹凸がある		3	10YR4/6	褐色	シルト 表面がブリッケ、表面が青白、貝壳は主に多角形で、表面に凹凸がある
壁右跡3	1	10YR4/4	褐色	シルト 網状とブロックを含む、貝壳は主に多角形で、表面に凹凸がある	壁右跡7	1	10YR4/4	褐色	シルト 表面がブリッケ、表面が青白、貝壳は主に多角形で、表面に凹凸がある
	2	10YR4/6	褐色	シルト 内側が青白、表面がオカリナイト質で、表面に凹凸がある		2	10YR4/6	褐色	シルト 表面がブリッケ、表面が青白、貝壳は主に多角形で、表面に凹凸がある
壁右跡4	1	10YR4/4	褐色	シルト 網状とブロックを含む、貝壳は主に多角形で、表面に凹凸がある	壁右跡8	1	10YR4/4	褐色	シルト 表面がブリッケ、表面が青白、貝壳は主に多角形で、表面に凹凸がある
	2	10YR4/4	褐色	シルト 内側が青白、表面がオカリナイト質で、表面に凹凸がある		2	10YR4/6	褐色	シルト 表面がブリッケ、表面が青白、貝壳は主に多角形で、表面に凹凸がある
壁右跡5	1	10YR4/4	褐色	シルト 網状とブロックを含む、貝壳は主に多角形で、表面に凹凸がある	壁右跡9	1	10YR4/1	褐色	シルト 表面がブリッケ、表面が青白、貝壳は主に多角形で、表面に凹凸がある
	2	10YR4/4	褐色	シルト 内側が青白、表面がオカリナイト質で、表面に凹凸がある		2	10YR4/6	褐色	シルト 表面がブリッケ、表面が青白、貝壳は主に多角形で、表面に凹凸がある
壁右跡6	1	10YR4/4	褐色	シルト 網状とブロックを含む、貝壳は主に多角形で、表面に凹凸がある	壁右跡10	1	10YR4/1	褐色	シルト 表面がブリッケ、表面が青白、貝壳は主に多角形で、表面に凹凸がある
	2	10YR4/4	褐色	シルト 内側が青白、表面がオカリナイト質で、表面に凹凸がある		2	10YR4/6	褐色	シルト 表面がブリッケ、表面が青白、貝壳は主に多角形で、表面に凹凸がある

第49図 2号磁石建物跡 磁石跡(2)

褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡14

建物内部の礎石跡で、試掘トレンチにより西側が失われている。形状は不整円形で、掘り方径は0.7mである。掘り方埋土は黄褐色ブロック土と褐色ブロック土を主体としており、固く締まっている。上部が削平されているとはいえない。根固石もみられず、規模も小型であることから、他の礎石跡と構造的な違いを持っていた可能性もある。

礎石跡15

建物内部の礎石跡で、北側および中央部が擾乱を受けている。中央部の擾乱の底面に根固石が一部露出している。形状は不整円形で、掘り方径は0.8m程度である。根固めは径2~10cm程度の円礫を詰めているが、礎間に暗褐色ブロック土、黄褐色砂質土を詰めている。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土を主体とし、固く締まっている。

礎石跡16

建物内部の礎石跡で、小溝群2-18より古い。擾乱により上部が失われており、僅かに掘り方底面を検出したに過ぎない。形状は円形で、掘り方径は0.6mである。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土が詰められ、固く締まっている。

礎石跡17

建物東辺の礎石跡で、小溝群2-18より古い。擾乱により北側および南側の一部が失われている。形状は不整梢円形で、掘り方径は東西0.9m、南北1.2mである。中央部には礎石の抜取り痕とみられる径0.8m程度の不整円形のプランがあり、中には瓦片が混入していた。根固めは径2~10cm程度の円礫が散在する状態である。掘り方埋土は暗褐色ブロック土と黄褐色砂質土を詰めており、固く締まっている。出土遺物は抜取り痕より平瓦8点、輪違い1点がある。

礎石跡18

建物西辺の礎石跡で、小溝群2-19、SK18・19より古い。形状は不整梢円形で、掘り方径は1.2mである。中央部に径0.9m程度の不整梢円形のプランがあり、礎石の抜取り痕とみられる。根固めは径5cm程度の円礫が若干確認されたのみである。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡20

建物内部の礎石跡で、北側を試掘トレンチ、南側を擾乱により失われ、全体形は明らかでない。形状は不整形で、掘り方径は0.7mである。掘り方埋土は暗褐色と黄褐色ブロックが詰められており、固く締まっている。礎石跡14同様に根固石は検出できず、規模も小振りである。

礎石跡21

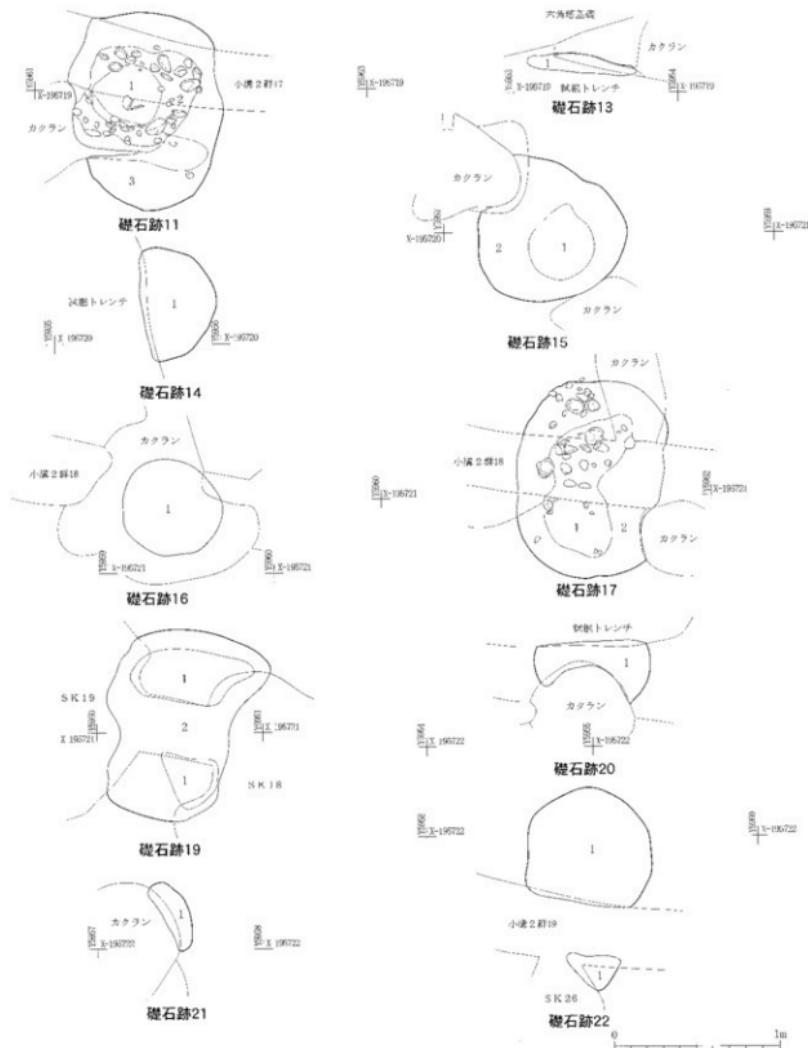
建物内部の礎石跡で、擾乱を受けており、掘り方東縁部が僅かに確認されたのみで形状や規模は明らかではない。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土が詰められており、固く締まっている。

礎石跡22

建物内部の礎石跡で、小溝群2-19、SK26より古い。形状は不整梢円形で、掘り方径は1.2mである。掘り方は小溝底面では確認されず、深さ0.08m程度と極めて浅い。根固めも径2~3cm程度の小円礫が僅かに認められる程度である。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土が詰められ、固く締まっている。

礎石跡23

建物北東入角の礎石跡で、小溝群2-19より古い。擾乱により北側と南側及び中央部の一部が失われている。形状は不整円形で、掘り方径は1.1mである。南側に寄って径0.6m程度の不整梢円形のプランがあり、礎石の抜取り痕とみられる。根固めは径2~14cm程度の円礫が多く確認されており、礎間に径1~3cm程度の小円礫が詰められている。掘り方埋土は暗褐色ブロック土と黄褐色砂質土がリング状の互層となり、固く締まっている。



施 構	位 置	上 面	土 性	特 徴	施 構	位 置	上 面	土 性	特 徴
礎石跡11	1 107H/3 棕色	シルト	薄褐色ブロック・表面きずなし・小溝217(埋蔵)		塹下部17	1 107H/4 棕色	シルト	薄褐色ブロックと小石・瓦を含む土・塹下部	
	2 107H/4 棕色	シルト	褐色ブロック・表面きずなし・塹下部250(埋蔵)			2 107H/4 棕色	シルト	褐色ブロックと瓦・瓦を含む土・塹下部	
	3 107H/5 棕色	シルト	褐色ブロック・表面きずなし・塹下部250(埋蔵)		塹下部18	1 107H/4 棕色	シルト	褐色ブロックと瓦・瓦を含む土・塹下部	
礎石跡14	1 107H/4 棕色	シルト	褐色ブロック・表面きずなし・塹下部250(埋蔵)			2 107H/5 棕色	シルト	褐色ブロックと瓦・瓦を含む土・塹下部	
礎石跡15	1 107H/5 棕色	シルト	褐色ブロック・表面きずなし・塹下部250(埋蔵)		塹下部19	1 107H/4 棕色	シルト	褐色生・褐色生ブロックを多量含む(埋り土)	
礎石跡16	1 107H/5 棕色	シルト	褐色ブロック・表面きずなし・塹下部250(埋蔵)		SK 18	1 107H/4 棕色	シルト	褐色生・褐色生ブロックを多量含む(埋り土)	
礎石跡17	1 107H/4 棕色	シルト	褐色ブロック・表面きずなし・塹下部250(埋蔵)		SK 19	1 107H/4 棕色	シルト	褐色生・褐色生ブロックを多量含む(埋り土)	
礎石跡18	1 107H/4 棕色	シルト	褐色ブロック・表面きずなし・塹下部250(埋蔵)		SK 20	1 107H/4 棕色	シルト	褐色生・褐色生ブロックを多量含む(埋り土)	
礎石跡19	1 107H/4 棕色	シルト	褐色ブロック・表面きずなし・塹下部250(埋蔵)		SK 21	1 107H/4 棕色	シルト	褐色生・褐色生ブロックを多量含む(埋り土)	
礎石跡21	1 107H/4 棕色	シルト	褐色ブロック・表面きずなし・塹下部250(埋蔵)		SK 22	1 107H/4 棕色	シルト	褐色生・褐色生ブロックを多量含む(埋り土)	
礎石跡22	1 107H/4 棕色	シルト	褐色ブロック・表面きずなし・塹下部250(埋蔵)						

第50図 2号磁石建物跡 磁石跡（3）

礎石跡24

述物西辺の礎石跡で、小溝群2-20より古い。北側の上面が失われ、形状は不整円形で、掘り方径は1.2mである。中央部に径0.9m程の不整円形のプランがあり、Ⅲ層類似層が堆積することから礎石の抜取り痕とみられる。この中央部には径20cm程のやや人振りな偏平疊が確認されたが礎石ではないとみられる。根固めは径1~11cm程の円疊が比較的密に詰められている。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡25

建物内部の礎石跡で、小溝群2-20より古い。搅乱により東側および西側の一部が失われている。形状は不整円形で、掘り方径は0.96mである。中央部に径0.65m程の不整楕円形のプランがあり、礎石の抜取り痕とみられる。抜取り痕内には根固石が一部露出しており、径1~10cm程の円疊が確認されている。疊間には黄褐色砂質土が詰められている。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。出土遺物は抜取り痕より平瓦がある。

礎石跡26

建物内部の礎石跡で、搅乱を受けており、掘り方東縁部および底部が僅かに確認されたのみである。掘り方径は1.2m程と推定される。底部は搅乱内にあるため、根固めも殆ど失われているが、径2~30cm程の円疊が確認されている。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡28

建物内部の礎石跡で、小溝群2-20、31・32号集石遺構より古い。搅乱により東側が一部失われている。形状は不整円形で、掘り方径は1.2mである。中央部に径0.9m程の不整円形のプランがあり、礎石の抜取り痕とみられる。抜取り痕内には径1~30cm程の円疊が密集して詰められており、根固石が露出しているものとみられる。10cm前後の疊が多い。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土が詰められており、固く締まっている。

礎石跡30

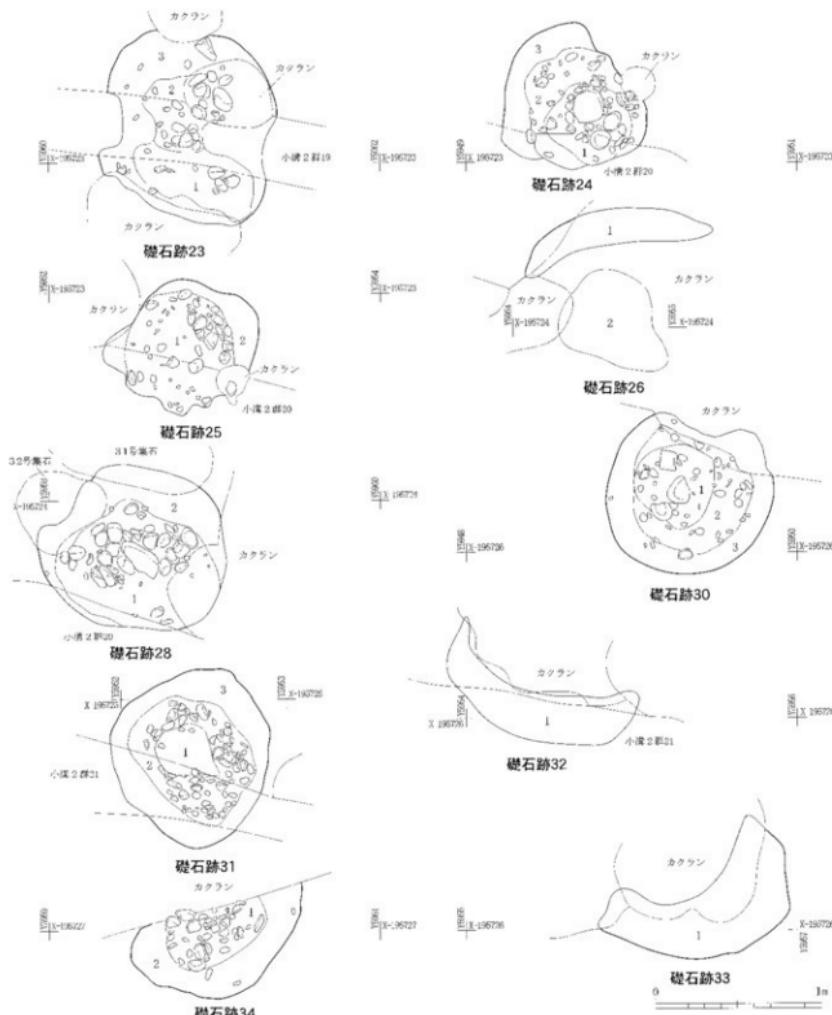
建物西辺の礎石跡で、搅乱により北側が失われている。北側の礎石跡24と南側の40との柱間は各3m弱の1間半の位置にあり、同じ西辺北側の配置状況とは異なっている。形状は搅乱部を除けば比較的整った円形である。掘り方径は1m、根固め径は0.7mである。中央部やや西寄りに径0.5m程の不整円形のプランがあり、Ⅲ層類似層が堆積することから礎石の抜取り痕とみられる。抜取り痕内には瓦片が含まれている。この中央部には径20cm程のやや大振りな偏平疊が確認されたが、礎石ではないとみられる。根固めは径1~11cm程の円疊が比較的密に詰められている。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。出土遺物は抜取り痕より徒斗瓦1点、輪窓瓦1点、不明瓦1点がある。

礎石跡31

建物内部の礎石跡で、小溝群2-21より古い。形状は不整円形で、掘り方径は1.1m、根固め径は0.8mである。中央部に径0.3m程の不整円形のプランがあり、Ⅲ層類似層が堆積することから礎石の抜取り痕とみられる。根固めは径1~10cm程の円疊が密に詰められており、径8cm程のものが多い。疊間には径1~2cm程の小円疊が詰められている。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡32

建物内部の礎石跡で、小溝群2-21より古い。搅乱により大半が失われており、掘り方南縁部が僅かに確認されたのみで、形状や規模は明らかでない。掘り方径は1.2m程とみられる。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土を含み、固く締まっている。



第51図 2号礎建物跡 磚石跡(4)

礎石跡33

建物内部の礎石跡で、小溝群2-21より古い。搅乱により大半が失われており、掘り方南縁部が僅かに確認されたのみで、形状や規模は明らかでない。掘り方径は1.3m程になるとみられる。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土を含み、固く縮まっている。

礎石跡34

建物内部の礎石跡で、搅乱により北側が失われている。形状は不整円形で、掘り方径は1.1m、根固め径は0.6mである。根固めは径1~11cm程の円礫が密に詰められており、径8cm程のものが多い。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く縮まっている。

礎石跡35

建物内部の礎石跡で、調査区東壁にかかっている。SK43・176より古い。搅乱により上部が失われ、根固めの大部分は確認できない。形状は不整円形で、掘り方径は0.9m、根固め径は0.4mである。根固めは径1~10cm程の円礫が比較的密に詰められており、径8cm程のものが多い。隙間に黄褐色ブロック土が詰められている。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く縮まっている。

礎石跡36

建物内部の礎石跡で、搅乱により南側が失われている。形状は不整円形で、掘り方径は0.9m、中央部に根固め径とはほぼ同じ大きさの不整円形プランがあり、Ⅲ層類似層が堆積することから礎石の抜取り痕とみられる。抜取り痕は他に比べて大きく、抜取りの際には広めの穴を掘っているものとみられ、根固めプランは殆ど確認できなかつた。抜取り痕中には根固めに使用されたとみられる径1~10cm程の円礫が多く含まれている。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く縮まっている。

礎石跡38

建物内部の礎石跡で、SK177より古い。搅乱により西側半分と北側の一部が失われている。形状は不整円形で、掘り方径は0.75m、根固め径は0.6mと小規模である。根固めは殆ど確認されず、黄褐色ブロック土が詰められているのみであった。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土を主体としており、固く縮まっている。

礎石跡39

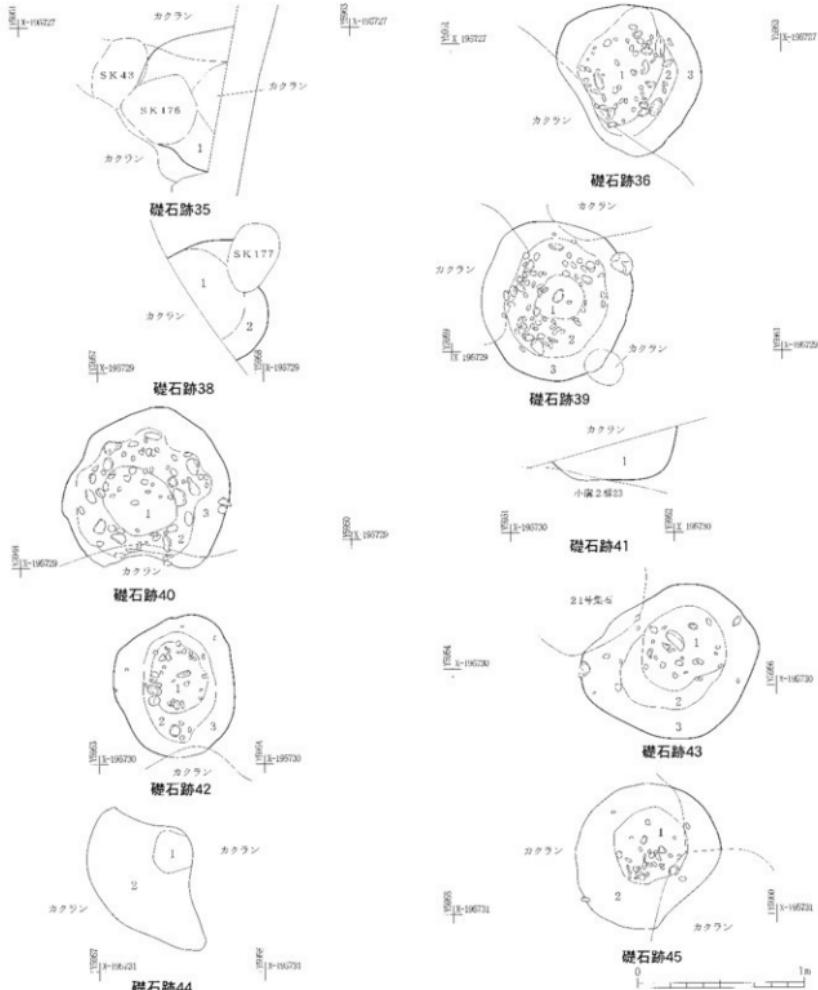
建物内部の礎石跡で、搅乱により上面が一部失われているものの、残存は良好である。形状は比較的整った円形で、掘り方径は1m、根固め径は0.72mである。中央部に径0.28m程の不整円形のプランがあり、Ⅲ層類似層が含まれることから礎石の抜取り痕とみられる。根固めは径1~10cm程の円礫が比較的密に詰められており、径8cm程のものが多い。隙間に黄褐色砂質土が詰められている。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く縮まっている。

礎石跡40

建物西辺の礎石跡で、SB3へとつながる渡り廊下部分際にある礎石跡である。搅乱により南側が一部失われるが、比較的の残存は良好である。形状は円形で、掘り方径は1m、根固め径は0.8mである。中央部に径0.4m程の不整円形のプランがあり、Ⅲ層類似層が含まれることから礎石の抜取り痕とみられる。根固めは径1~11cm程の円礫が比較的密に詰められており、径8cm程のものが多い。隙間に黄褐色砂質土が詰められている。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く縮まっている。出土遺物は抜取り痕から丸瓦2点、平瓦2点がある。

礎石跡41

建物内部の礎石跡で、小溝群2-23より古い。搅乱により北側の大半が失われている。掘り方南縁部が僅かに確認されたのみで、形状は不整円形とみられ、掘り方径は0.9m程になるとみられる。根固め石とみられる径8cm程



床・床 層位	土・色	上性	特徴	通標 層位	土・色	土・性	特徴
礎石跡35	1 10784/6 暗色	シルト	堅密な土質、褐色にモザイク状に斑点化(刷毛)	礎石跡41	1 10784/4 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
	2 10784/4 褐色	シルト	堅密なフリット土質、褐色を呈するが、刷毛で		2 10784/4 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
礎石跡36	1 10784/4 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)	礎石跡42	1 10784/6 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
	2 10784/6 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)		2 10784/6 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
礎石跡38	1 10784/4 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)	礎石跡43	1 10784/4 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
	2 10784/6 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)		2 10784/4 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
礎石跡39	1 10784/6 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)	礎石跡44	1 10784/6 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
	2 10784/6 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)		2 10784/6 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
礎石跡40	1 10784/4 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)	礎石跡45	1 10784/4 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
	2 10784/6 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)		2 10784/6 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
礎石跡42	1 10784/4 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)		0 10784/6 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
	2 10784/6 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)		1 10784/6 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
礎石跡43	1 10784/4 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)		2 10784/6 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
	2 10784/6 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)		1 10784/4 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
礎石跡44	1 10784/4 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)		2 10784/6 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
	2 10784/6 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)		1 10784/6 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
礎石跡45	1 10784/4 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)		2 10784/6 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
	2 10784/6 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)		0 10784/6 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
礎石跡46	1 10784/4 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)		1 10784/6 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
	2 10784/6 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)		2 10784/6 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
礎石跡47	1 10784/4 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)		1 10784/6 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)
	2 10784/6 暗色	シルト	堅密なフリット、褐色地に二重の斜面剥離(刷毛)		2 10784/6 暗色	シルト	堅密なブリッケ、赤褐色を呈し、当面はアリ(洗い)

第52図 2号礎石建物跡 磚石跡 (5)

の円礫が2点確認されている。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土を含み、固く締まっている。

礎石跡42

建物内部の礎石跡で、搅乱により南側の上面が一部失われている。形状は不整梢円形で、掘り方径は0.86m、根固め径は0.66mである。中央部に径0.4m程の不整梢円形のプランがあり、Ⅲ層類似層が含まれることから礎石の抜取り痕とみられる。抜取り痕内には径1～6cm程の円礫と瓦片が認められる。根固めは径1～8cm程の円礫が散在的に確認されており、礎間には暗褐色ブロック土、黄褐色砂質土が詰められている。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡43

建物内部の礎石跡で、21号集石遺構より古い。形状は不整円形で、掘り方径は1.1m、根固め径は0.68mである。中央部や北寄りに径0.54m程の不整円形のプランがあり、Ⅲ層類似層が含まれることから礎石の抜取り痕とみられる。抜取り痕内には径1～14cm程の根固石に使用されたとみられる礎が多く含まれている。検出面では根固石は殆ど確認されず、黄褐色ブロック土が詰められている。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡44

建物内部の礎石跡で、搅乱により上面が大きく失われており、南東部が残存するに過ぎない。形状は不整形であるが、本来は比較的整った円形とみられる。掘り方径は1m、根固め径は0.26mである。根固めは底面に近い部分とみられ、径3～5cm程の円礫と、礎間には黄褐色砂質土が詰められている。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡45

建物内部の礎石跡で、搅乱により上面の大半が失われるものの、形状は比較的整った円形で、掘り方径は0.92m、根固め径は0.45mである。根固めは径1～6cm程の円礫が詰められ、礎間には黄褐色砂質土が詰められている。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡46

建物内部の礎石跡で、S K 7より古い。掘り方の東側は一部調査区外となっている。形状は不整円形で、掘り方径は0.9m、根固め径は0.72mである。根固めは径2～12cm程の円礫が詰められ、礎間には黄褐色砂質土が詰められている。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡47

建物南西角の礎石跡で、S B 3へとつながる渡り廊下部分際にある礎石跡である。搅乱により北および南側が一部失われたため、形状は不整円形で、掘り方径は1m、根固め径は0.75mである。根固めは径1～12cm程の円礫がやや疊らに含まれておらず、径10cm程のものが多い。礎間には黄褐色ブロック土が詰められている。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡48

建物南辺の礎石跡で、搅乱により南半分と北側が一部失われている。形状は残存部が比較的整った円形で、掘り方径は0.7m、根固め径は0.5mである。根固めは径1～10cm程の円礫が詰められ、径10cm程のものが多い。礎間には黄褐色砂質土が詰められている。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

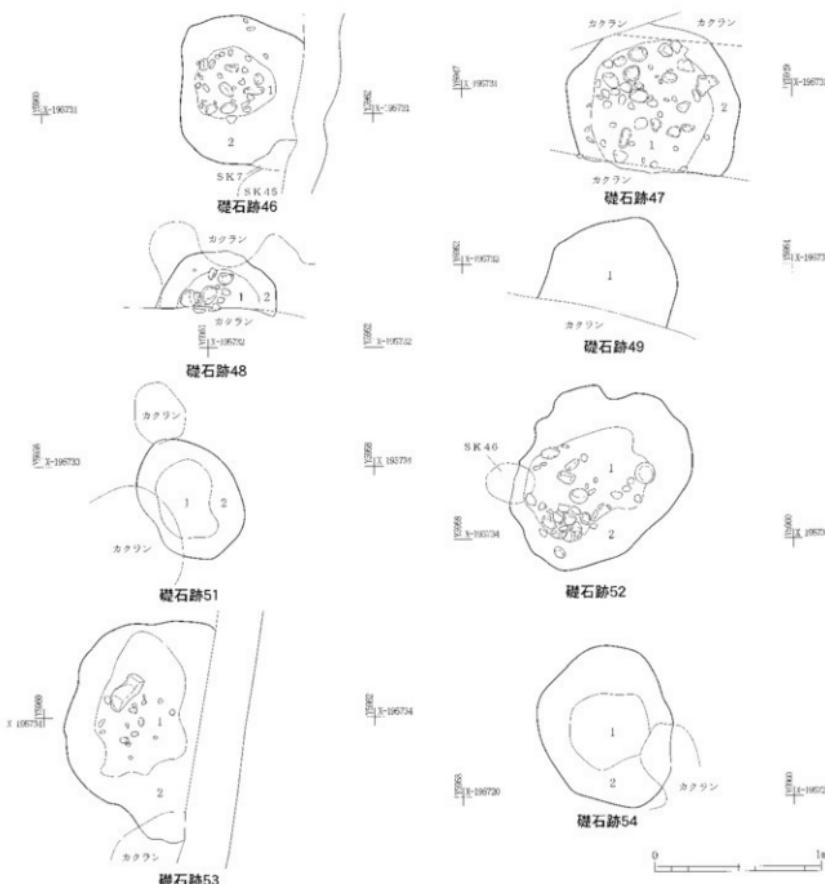
礎石跡49

建物南辺の礎石跡で、搅乱により南半分が失われている。形状は不整円形で、掘り方径は0.8m程である。検出段階では根固石は全く認められず、搅乱断面においても確認できなかった。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック上

を多く含み、固く締まっている。

礎石跡51

建物南辺の礎石跡で、搅乱により北側と南側の上部が一部失われている。形状は不規格円形で、掘り方径は0.8m、根固め径は0.4mである。根固めは径5cm程の円礫を僅かに検出したのみであり、礎間に黄褐色砂質土が詰められている。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土を多く含み、固く締まっている。



第53図 2号礎石建物跡 紋石跡(6)

礎石跡52

建物南辺の礎石跡で、SK46より古い。搅乱により上部が一部失われている。形状は不整円形で、掘り方径は1.2m、根固め径は0.7m程である。根固めは径2～11cm程の円礫が詰められており、検出面においては疎らであるが、搅乱底面では密集した状態でみられる。径10cm程のものが多い。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡53

跡物南辺の礎石跡で、搅乱により南側が一部失われている。東側は調査区外に延びている。形状は不整円形で、掘り方径は1.32m、根固め径は0.85mである。根固めは径1～6cm程の円礫が疎らに確認されているが、径26cm程の角礫が1点みられる。疎間に黄褐色ブロック土が詰められている。掘り方埋土は褐色と暗褐色ブロック土を多く含み、固く締まっている。

礎石跡54

建物内部の礎石跡で、搅乱により南側が一部失われている。礎石跡15と16の間で北側に半周ずれて検査しており、建物構造に関連した配置と推定される。形状は不整円形で、掘り方径は1m、根固め径は0.4mである。根固めは径2～10cm程の円礫が詰められており、径10cm程のものが多い。掘り方埋土は黄褐色砂質土と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

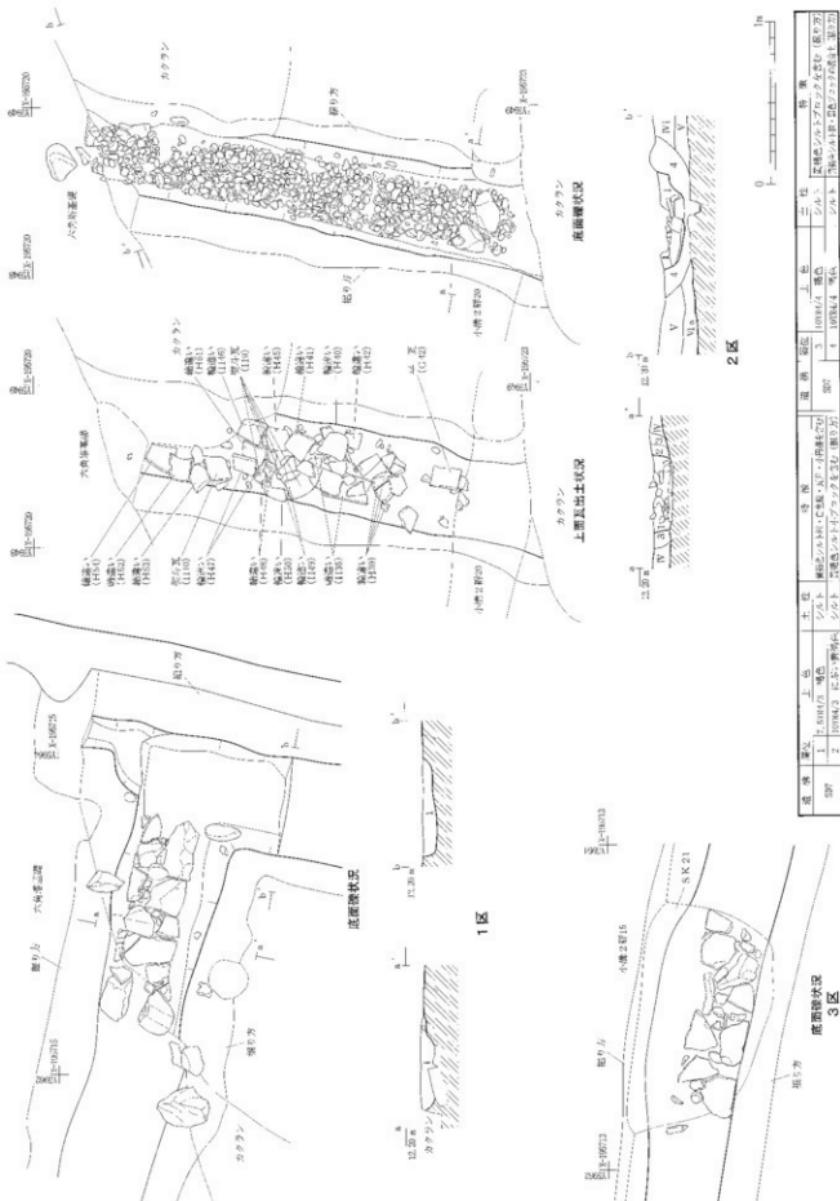
【講 跡】掘り込みは、SD7がSB2西辺中央と北辺西側、北東角で行い、断面調査はSD9の搅乱部分で行なった。2つの溝は全てSB2の周囲を巡ることで建物の雨落ち溝として機能したことが考えられるが、SB1同様にSD9は2号石敷遺構の側溝としての機能も併せ持っていたと考えられている。SD7は全体を通して同様の構造を持っており、雨落ち溝としての機能に特化したものであったとみられる。またSD9はSB2の南東側で水路状の溝跡に接続すると推定されている。

7号溝跡

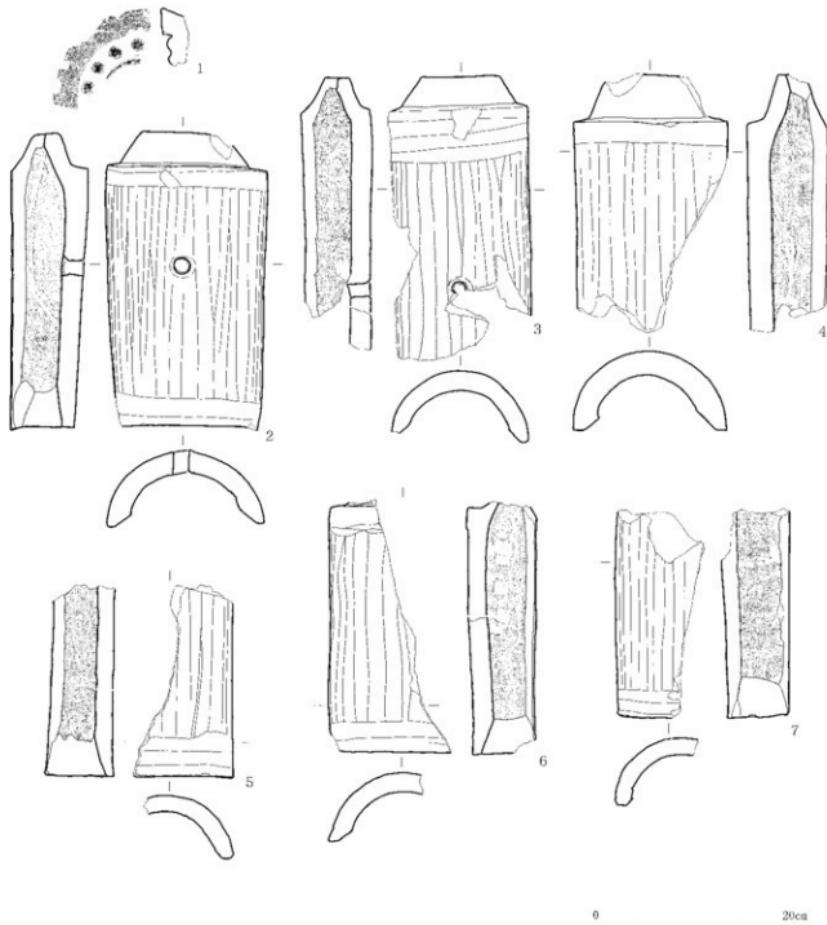
建物の東辺から北辺を経て西辺にかけて周囲を巡るもので、小溝群2や多くの上坑・ピットより古い。六角塔基礎などにより部分的に失われている。西辺においてはSB3東辺溝のSD8と並走するが、南端部ではSD9に接続する様子は無い。また北東角には長さ0.4m、幅0.4m程北側に延びる溝の突出部分が認められる。溝は全体に幅0.8～1.2mの掘り方のプランが認められ、その内側にみられる溝の開口部とみられるプランの幅は0.5～0.6m程で一定しているが、跡物北東の入角より東へ延びる溝部分は0.9mとやや広がっている。

掘り込みは2か所で行い、北東角を1区、西辺中央部を2区とした。また北辺西側においてSK22を掘り込んだところ、土坑底面より角礫を用いた底面の石敷構造が確認されたため、ここを3区とした。1区では掘り方幅が1.1m、溝幅0.6m、深さ0.1mで、底面に安山岩質の割石が概ね2列に敷き詰められている状況が確認された。2区で確認したような割石上の小円礫は全く認められなかった。敷石の外側縁は直線になるよう個々の辺を彫えている。側石は確認できず、それを抜き取った痕跡も明らかではなく、本來側石は存在しなかった可能性がある。北東角の内側には偏平の円礫1石が直立する形で据えられていた。また角部のすぐ東辺側では底面に敷石は検出されず、抜取られたかあるいは本来無かったかは不明である。北東角の突出部分には底面に敷石などの構造は確認されず、溝本体も幅が狭くなり、北側を搅乱で壊されている。

2区では、掘り方幅が0.8mの内側に幅0.5mの溝が構築されている。構造は1区同様に、底面に安山岩の割石を敷いた上部に径5cm程の小円礫を敷き詰めるもので、円礫の厚さは3cm程あり、敷石面までの深さは0.1m程である。1区同様に側石や抜取り痕が認められないことから、溝内は小円礫により溝底面のみならず、壁面までも円礫で覆った構造とも推定され、本来は浅い溝であった可能性がある。堆積上からは狭い範囲にまとまって、輪違いを中心とする瓦が多数出土しており、SB2にはこれらの瓦が葺かれていた可能性がある。

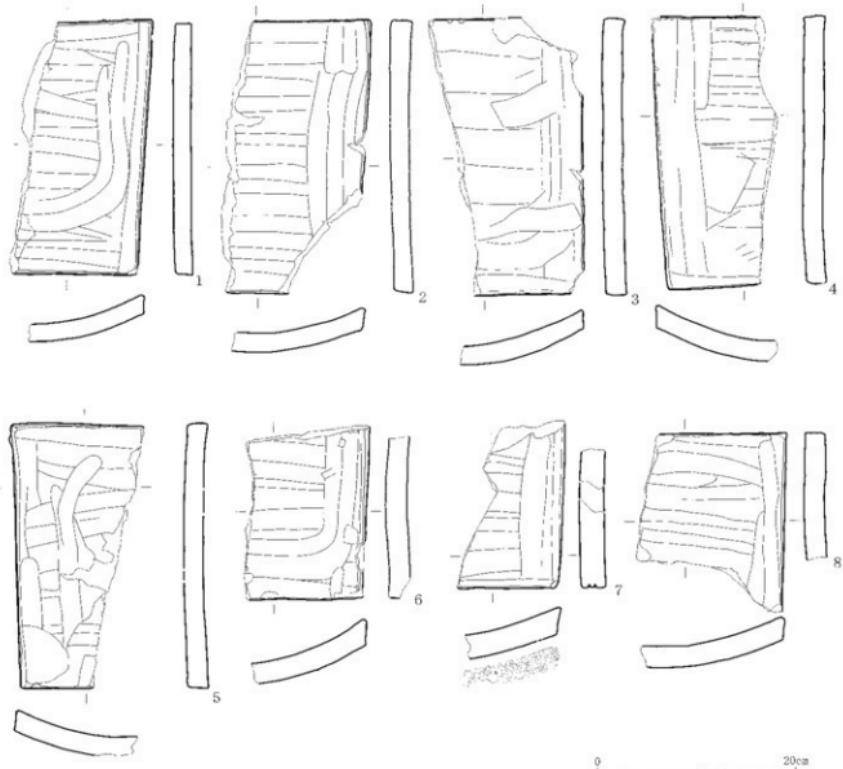


第54図 7号溝跡



遺跡番号	施設名	種類	遺構・層位	大きさ	大きさ(cm)			重さ(kg)	調査	分類	等質基準
					幅	奥行き	高さ				
1	F4	手矢瓦	1 S07	块大三七瓦	-	-	-	2.5 (0.5)	0.17	瓦器述: 色石塗・鉢径1.5cm	A 43-10
2	P36	丸瓦	S07	30.7	16.3	2.3	7.6	3.3	2.08	凸面: ナラ、凹面: ロビキ(1・2)、丸口、焼成痕、射穴あり	1 43-12
3	P37	丸瓦	S07	-	-	2.0	7.3	3.1	1.24	凸面: ナラ、凹面: ロビキ(2)、丸口、射穴あり	1 43-11
4	P36	丸瓦	S07	-	2.1	8.1	4.6	1.44	凸面: ナラ、凹面: ロビキ(1・2)、丸口	1 43-13	
5	P38	丸瓦	S07	-	1.6	6.4	-	0.50	凸面: ナラ、凹面: ロビキ(1・2)、丸口	- 44-1	
6	P39	丸瓦	S07	-	2.0	7.0	-	0.85	凸面: ナラ、凹面: ロビキ(1・2)、神使工具に上の凹痕	1 44-2	
7	P40	丸瓦	S07	-	-	1.7	6.8	0.64	凸面: ナラ、凹面: ロビキ(1・2)、神使工具に上の凹痕	- 44-3	

第55図 7号溝跡出土遺物（1）



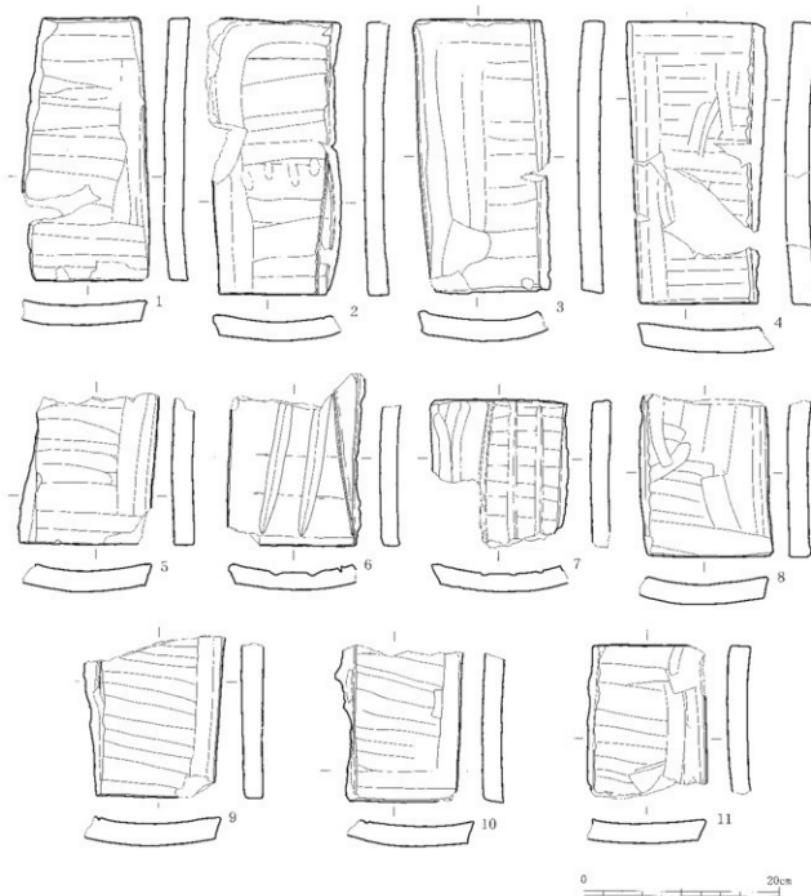
0 20cm

回収番号・区分番号	種類	遺物・断片	測定・測定				測定	分類	参考文献
			長さ	幅	高さ	厚さ			
1 G78	平瓦	S97	26.3	-	-	1.8	1.61	凸面:ナガ・断跡、凹面:ナガ・他成形部	1 44-1
2 G77	平瓦	S97	28.0	-	-	1.9	0.99	凸面:ナガ・凹面:ナガ・他成形部	1 44-5
3 G74	平瓦	S97	(29.0)	-	-	2.0	1.15	凸面:ナガ・同裏:ナガ	1 44-6
4 G73	平瓦	S97	28.1	-	-	2.1	1.7	凸面:ナガ・縫合・凹面:ナガ	1 44-7
5 G76	平瓦	S97	27.5	-	-	2.1	0.86	凸面:ナガ・縫合・凹面:ナガ	1 44-8
6 G77	平瓦	S97	-	-	-	2.2	0.76	凸面:ナガ・断跡、凹面:ナガ・特徴直	1 44-9
7 G78	平瓦	S97	-	-	-	2.5	0.62	凸面:ナガ・縫合、凹面:ナガ・鋸歯	1 44-10
8 G80	平瓦	S97	-	-	-	2.1	0.74	凸面:ナガ・縫合、凹面:ナガ・他成形部	1 44-11

第56図 7号溝跡出土遺物（2）

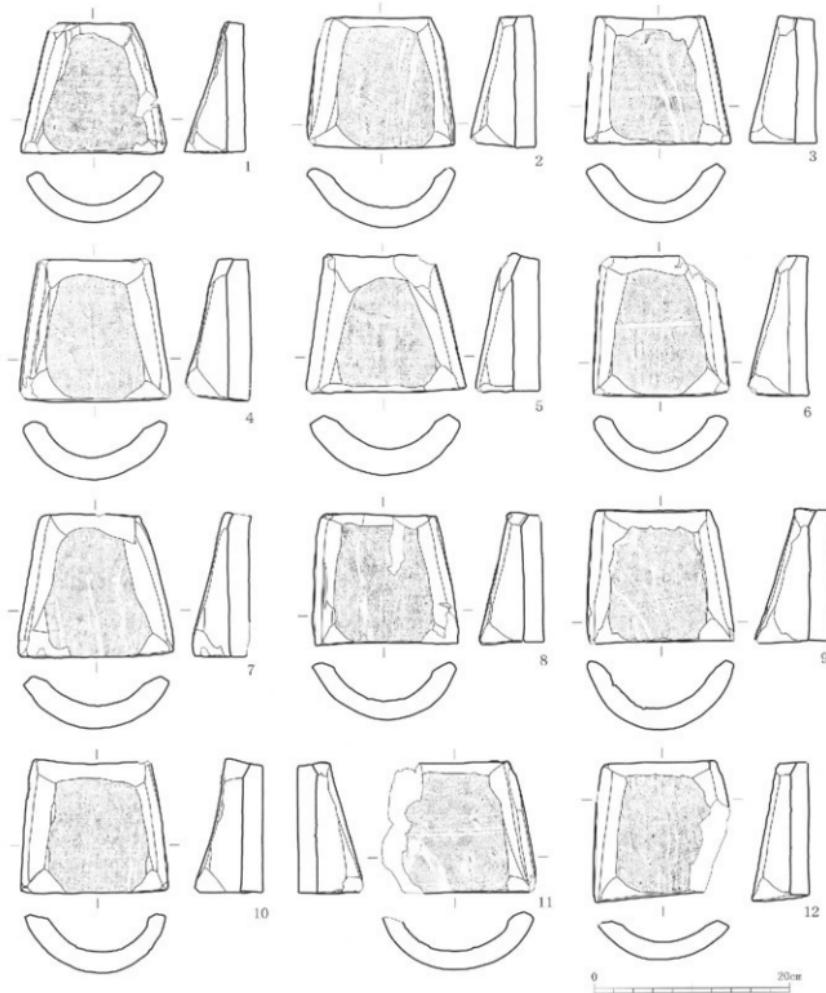
3区では1区同様に安山岩質の割石が2列に敷き詰められた状況で確認されたが、2区で検出した敷石上の小円礫は全く検出できず、円礫の有無がどのような理由によるのか不明な点が多い。しかし各区の堆積土の状況からみて、1区と3区の溝内には当初から円礫は敷かれていたものとみられ、その状況は第8次調査で確認した溝でも言える傾向である。

出土遺物は、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違いなどの瓦片が440点、陶器8点、土師質土器皿44点、土師器1点、須恵器1点、鉄製品7点がある。F4は軒丸瓦の瓦当部で、瓦当文様は珠文三巴文（左巻き）である。F35～40は丸瓦で全体の大きさがわかるG35は、長さ30.7cm、幅16.3cm、高さ7.6cm、玉縁の長さ3.3cmで、中央部に



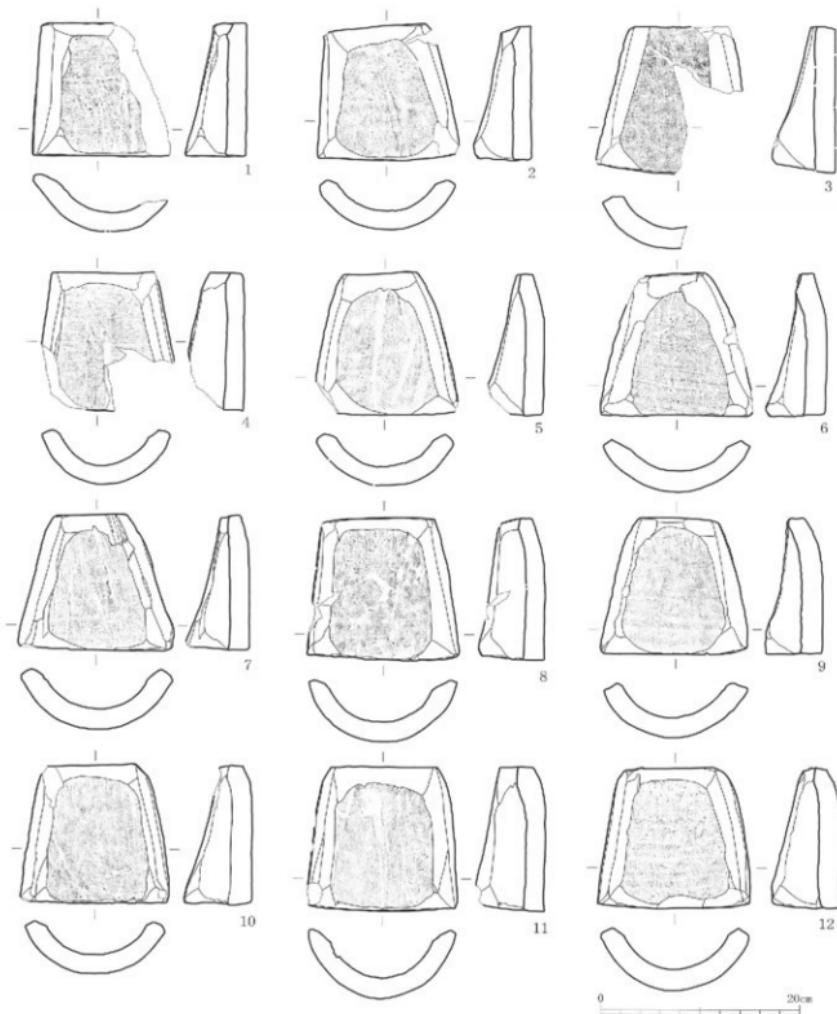
編號番号	生地番号	種類	遺物・部位	高さ	幅	厚さ	重さ(g)	備考	分類	予算価額
1	1247	腰から	SDF	27.0	—	2.0	9.97	焼成後分割、内面:ナゲ・鋸歯、切妻:ナゲ(五層と合せ)	1①	44-12
2	614	腰から	SDF	28.3	—	(11.0)	1.9	1.11 焼成後分割、凸面:ナゲ・鋸歬・ナゲ・凹面:ナゲ・凹凸・分割線あり	1①	44-12
3	H16	腰から	SDF	28.2	12.3	(10.9)	2.2	1.21 焼成後分割、凸面:ナゲ・鋸歬・凹面:ナゲ・分割線	1⑤	44-12
4	1B	腰から	SDF	29.0	14.0	11.9	2.3	1.17 焼成後分割、凸面:ナゲ・鋸歬・凹面:ナゲ・分割線	1①	44-5
5	H10	腰から	SDF	—	—	—	—	焼成後分割、凸面:ナゲ・鋸歬・凹面:ナゲ・分割線あり	1②	44-16
6	H13	腰から	SDF	—	—	—	—	焼成後分割、凸面:ナゲ・鋸歬・凹面:ナゲ・分割線あり	1③	44-16
7	H17	腰から	SDF	—	13.7	—	1.6	0.58 焼成後分割、凸面:ナゲ・鋸歬・凹面:ナゲ・縦断:ナゲ・横断:ナゲ・分割線あり	1④	44-12
8	H12	腰から	SDF	—	(13.6)	—	1.6	0.49 焼成後分割、凸面:ナゲ・鋸歬・凹面:ナゲ・縦断:ナゲ・横断:ナゲ・分割線あり	1③	44-18
9	F15	腰から	SDF	—	(12.0)	2.2	0.41	焼成後分割、凸面:ナゲ・鋸歬・凹面:ナゲ・縦断:ナゲ・分割線あり	1①	45-2
10	M17	腰から	SDF	—	(11.1)	(10.5)	2.0	0.58 焼成後分割、凸面:ナゲ・鋸歬・凹面:ナゲ・縦断:ナゲ・横断:ナゲ・分割線あり	1①	45-3
11	318	腰から	SDF	—	—	(11.0)	2.0	0.56 焼成後分割、凸面:ナゲ・鋸歬・凹面:ナゲ・縦断:ナゲ・分割線あり	1②	45-4

第57図 7号溝跡出土遺物（3）



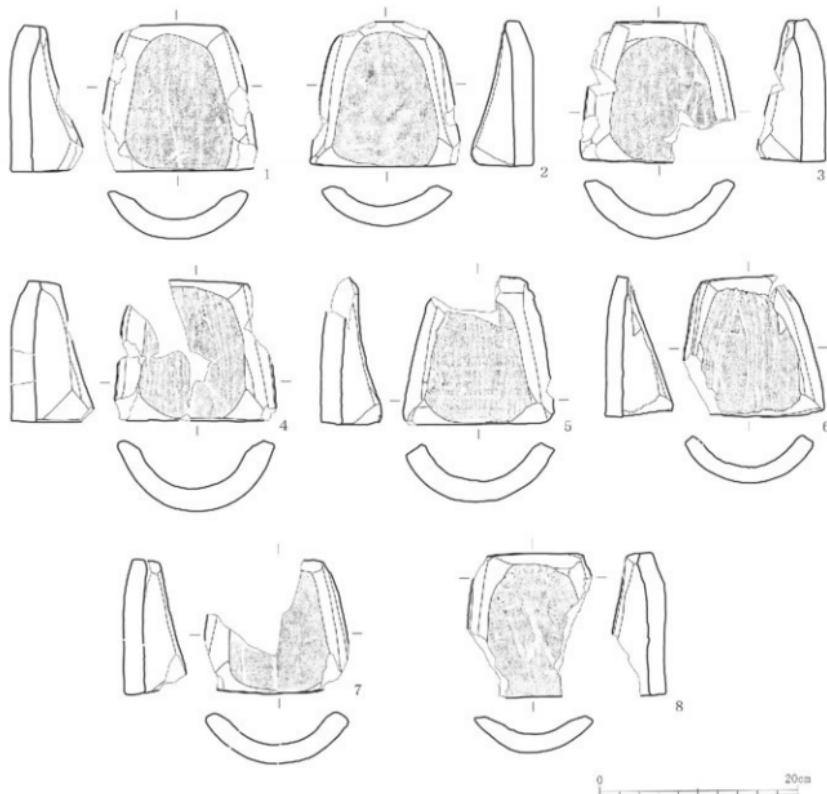
国宝番号	登録番号	種類	直高・幅・厚さ	重さ(g)	病名	分類	写真回数
1	国宝58	輪造5	SDT 15.0 (16.0) 16.0 8.2	0.56	凸面：ナゲ、ヨビキ板、凹面：ニビキ板、布目	1	05-9
2	国宝51	輪造5	SDT 15.5 (16.0) 16.2 8.6	0.48	凸面：ナゲ、凹面：ヨビキ板、布目	1	05-9
3	国宝51	輪造5	SDT 15.1 14.8 11.1	0.58	凸面：ナゲ、凹面：ヨビキ板、布目	1	05-7
4	国宝59	輪造5	SDT 14.7 (15.0) 15.6 6.0	0.78	凸面：ナゲ、凹面：ヨビキ板、布目-隠平付	1	05-9
5	国宝51	輪造5	SDT 14.5 16.2 (15.0) 6.5	0.52	凸面：ナゲ、凹面：ヨビキ板、布目	1	05-9
6	国宝55	輪造5	SDT 14.4 13.7 — 6.2	0.60	凸面：ナゲ、凹面：ヨビキ板、布目	1	05-10
7	国宝54	輪造5	SDT 16.7 15.8 9.9 (5.7)	0.72	凸面：ナゲ、ヨビキ板、ヘラカ板底、山面：ヨビキ板、布目	1	05-11
8	国宝58	輪造5	SDT 15.5 (14.5) 11.3 6.5	0.62	凸面：ナゲ、凹面：ヨビキ板、布目（日輪と接合）	1	05-12
9	国宝59	輪造5	SDT 15.7 15.7 11.6 7.6	0.72	凸面：ナゲ、凹面：ヨビキ板、布目	1	05-13
10	国宝60	輪造5	SDT 15.8 11.9 11.4 7.6	0.71	凸面：ナゲ、凹面：ヨビキ板、布目	1	05-14
11	国宝52	輪造5	SDT 15.5 — — 6.6	0.69	凸面：ナゲ、凹面：ヨビキ板、布目-隠紅面	1	05-15
12	国宝55	輪造5	SDT 14.1 — — 11.1	0.57	凸面：ナゲ、凹面：ヨビキ板、布目	1	05-16

第58図 7号溝跡出土遺物(4)



出土地番号	型名番号	種類	曲輪・部分	長さ	幅(最狭部)	厚さ	重さ(g)	備考	分類	写真図版
1	146	輪削り	SOT	13.7	-	0.2	0.49	凸面：ナデ、凹面：ヨビキ裂・布目	1	45-17
2	147	輪削り	SOT	14.0	(11.1)	19.0	5.8	凸面：ナデ、凹面：ヨビキ裂・布目	1	45-18
3	148	輪削り	SOT	15.1	-	(9.0)	6.3	凸面：ナデ、凹面：ヨビキ裂・布目	1	45-19
4	147	輪削り	SOT	14.2	-	10.2	-	凸面：ナデ、凹面：ヨビキ裂・布目 《小縫立縫口と接合》	1	45-20
5	146	輪削り	SOT	14.7	-	7.4	(6.6)	凸面：ナデ、凹面：ヨビキ裂・布目	2	45-21
6	163	輪削り	SOT	14.6	15.0	(6.5)	5.9	凸面：ナデ、凹面：ヨビキ裂・布目	2	45-22
7	155	輪削り	SOT	14.1	(15.4)	7.4	6.1	凸面：ナデ、凹面：ヨビキ裂・布目	2	45-23
8	156	輪削り	SOT	14.7	15.3	(11.1)	6.6	凸面：ナデ、凹面：ヨビキ裂・布目	2	45-24
9	157	輪削り	SOT	14.1	(14.7)	7.9	5.8	凸面：ナデ、凹面：ヨビキ裂・布目	2	45-25
10	162	輪削り	SOT	14.3	(14.4)	9.0	6.8	凸面：ナデ、凹面：ヨビキ裂・布目・ナデ	2	45-26
11	155	輪削り	SOT	14.8	(14.7)	10.4	-	凸面：ナデ、凹面：ヨビキ裂・布目	2	45-27
12	167	輪削り	SOT	14.4	15.2	9.1	6.0	凸面：ナデ、凹面：ヨビキ裂・布目・ナデ	2	45-28

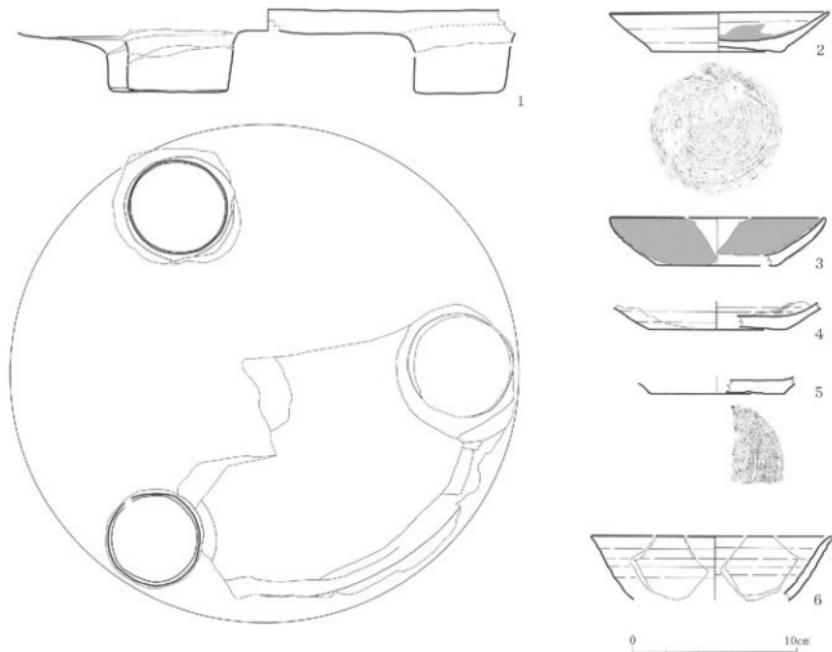
第59図 7号溝跡出土遺物（5）



測定番号	登録番号	種類	直鉢・扁鉢	直鉢部			重さ(g)	備考	分類	算出面積
				最大	平均	標準偏差				
1	E29	焼通い	SDT	15.1	-	(10.0)	0.71	西面:ナデ、南面:ヨビキ直・南口	2	46-5
2	E40	焼通い	SDT	15.9	(14.0)	-	0.1	西面:ナデ、南面:ヨビキ直・南口	2	46-6
3	E61	焼通い	SDT	14.9	-	-	0.7	西面:ナデ、南面:ヨビキ直・南口 (裏面と板合)	2	46-7
4	E14	焼通い	SDT	14.1	(16.0)	-	0.53	西面:ナデ、南面:ヨビキ直・南口 (小標2付添と接合)	2	46-8
5	E48	焼通い	SDT	(15.2)	(13.5)	-	6.1	北面:ナデ、南面:ヨビキ直・南口	2	46-9
6	E65	焼通い	SDT	14.6	-	(8.0)	6.8	北面:ナデ、南面:ヨビキ直・南口	2	46-10
7	E53	焼通い	SDT	(15.5)	-	(6.2)	0.38	北面:ナデ、南面:ヨビキ直	2	46-11
8	E64	焼通い	SDT	14.8	-	(8.7)	0.43	北面:ナデ、南面:ヨビキ直・南口・ナデ	2	46-12

第60図 7号溝跡出土遺物(6)

釘穴がある。F37は頸側に釘穴が認められる。F39の凹面には棒状工具による押圧痕が認められる。G72~78・80は平瓦で全体の長さのわかるものは6点あり、長さは26.3cm~28.5cmである。G75の小口面には刻印が認められる。G77・78・80には焼成時の破損が認められる。H9~18・247は熨斗瓦で焼成後分割である。全体の長さのわかるものは4点で、長さ27.0cm~29.0cmである。H11・12の凹面にはヘラ状の工具による幅広の線刻が数条認められる。H38~68は輪違いで、実測できたもの31点のうち、尻部が直線的に窄まる形状のものが13点、丸く窄まる形状のものが18点である。E2は須恵器で环の口縁である。I9は風炉の底部で、X10~13は土師質土器皿



国际番号	変種番号	種	形	種	遺構・特徴	径 (cm)	高さ (cm)	底	跡	跡	備考	写真図版
1	19	瓦器	楕円	SDF	(30.0)	—	—	17C前半	突出・深4.5、内面：ナメ、3脚、脚高 3.3cm 脚径 6.0cm	—	—	56-29
2	X12	七輪瓦十輪 瓦	楕円	SDF	13.5	8.1	2.5	在地	17C初め コクヨ遺跡、底部を切り、内面底部下半に煤付着	—	—	58-9
3	X12	七輪瓦十輪 瓦	楕円	SDF	(13.2)	(8.4)	3.0	在地	17C初め コクヨ遺跡、内外面全体に煤付着	—	—	58-7
4	X10	七輪瓦 瓦	楕円	SDF	(8.3)	—	—	在地	17C初め コクヨ遺跡、内面底部に煤付着	—	—	59-3
5	X11	七輪瓦 瓦	楕円	SDF	(8.1)	—	—	在地	17C初め セキロ遺跡、底部を切り、内外面割口に煤付着	—	—	59-6

国際番号	区分番号	種	形	種	遺構・特徴	径 (cm)	高さ (cm)	底	跡	考	写真図版
6	E2	瓦器20	片	SDF	(14.0)	—	—	コクヨ遺跡	—	—	60-25

第61図 7号溝跡出土遺物（7）

である。灯明皿として使用されていたもので、内面に二次被熱が認められ、煤が付着している。X12は全体にダル状の煤が付着している。X13の口径は13.5cmである。

9号溝跡

建物南辺に沿って東西に走る溝で、大型の搅乱により断面調査を行ったところ、掘り方幅0.75m、溝幅0.3m、深さ0.2mであることが確認された。石敷造構に敷かれていた円礫が堆積土内に多数流入している。ここでは確認できなかったが、他の搅乱断面では底面に安山岩質の割石が散かれるのが確認されており、本来はSD7と同様の構造であったとみられる。敷石上面の小円礫については明らかでない。出土遺物は、平瓦、瓦斗瓦、輪違いなどの瓦片43点、棟瓦1点がある。

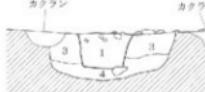


a
12.50 m

b
12.50 m

b'
12.50 m

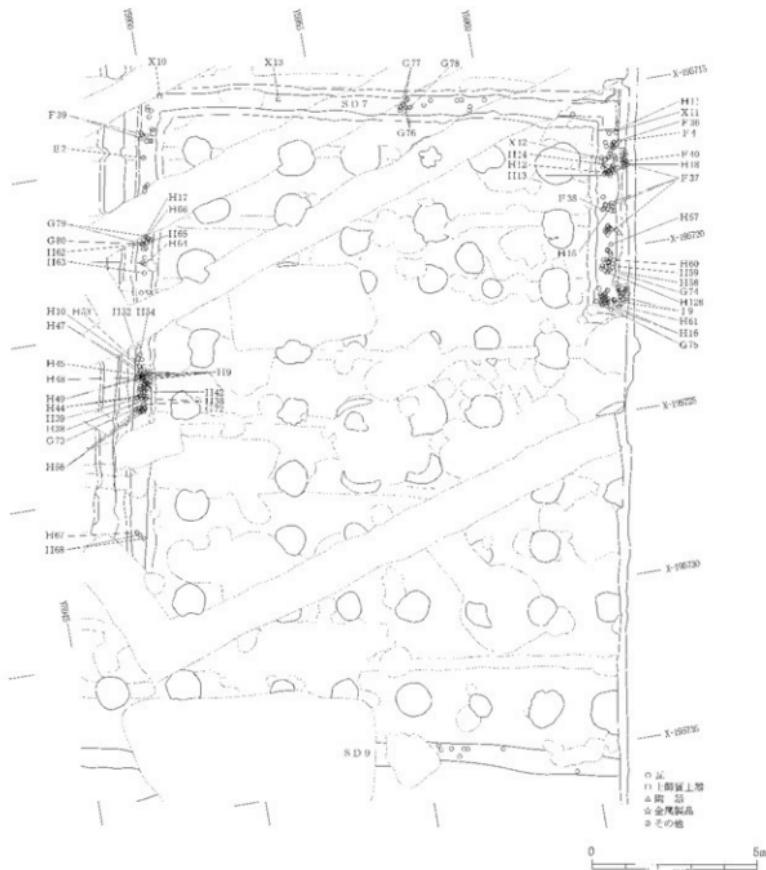
b'
12.50 m



0 1m

面積	標位	土色	土性	特徴	面積	標位	土色	土性	特徴
SD9	1	10TBS/1	にぶい・黄褐色	シルト	SD9	3	10TBS/2	にぶい・黄褐色	シルト
	2	10TBS/3	にぶい・黄褐色	シルト		4	10TBS/1	にぶい・黄褐色	シルト

第62図 9号溝跡



第63図 2号磁石建物跡 遺物出土状況

3号磁石建物跡

【配置と形状】調査区の南西側で検出した南北方向の磁石建物跡で、建物全体を確認した。S B 2の西側に近接して位置し、北側には1号石敷造構、南側には2号石敷造構、西側には3号石敷造構が建物を囲むように配置されている。S B 2とは建物南辺を接しており、東西の柱筋も完全に接しているが、S B 2より北側に2間分張出している。

磁石跡の配置状況はS B 2同様に縦柱状となるが、その一部は束柱的なものとみられることから、建物全体が畳や板などの床敷きであったと推定される。この建物についてもまたS B 2同様に、西および南端、さらに北端での柱間が3m程度の1間半と広くなるのが大きな特徴である。S B 3が全体に床を伴った建物であることを考慮すると、

建物外縁にあたるこれらの部分もまた部屋の周りに配置された縁通りと考えられる。また東端の柱間は1間と狭いが、このような建物の性格上、この部分も縁通りになり、建物を全周していた可能性もある。建物の東辺南端からはS B 2と渡り廊下で繋がっていたと考えられる。

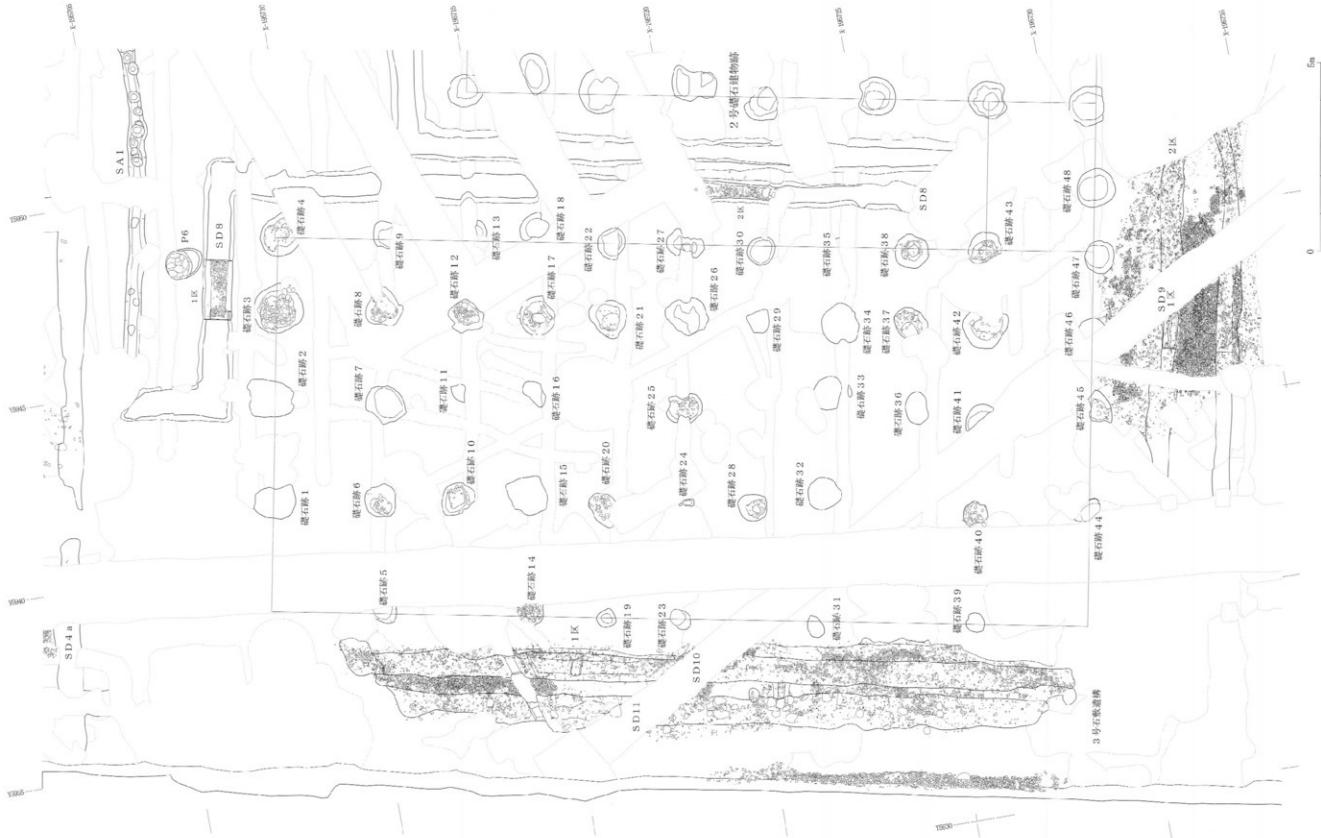
建物の周囲にはほぼ全周して溝が巡っているが、溝相互の接続部分については不明瞭な点が多い。東辺のSD 8はS B 2の西辺溝であるSD 7と並行して配置され、北端では建物に沿って西に折れ、北辺溝となりながら建物中央でさらに北側へ折れている。1号石敷道構の南辺側溝となるSD 4との接続関係は攪乱により不明である。また南端では並行するSD 7同様に渡り廊下の北側で止まるとみられる。建物の北西外側にはSD 8の屈曲によりできた空間が存在するが、ここに礎石跡など、建物を構成する造構は確認できなかった。しかし建物西辺の幾つかの礎石跡の例からみて、この場所に掘り込みが浅く、既に失われた礎石跡などが存在していたことも否定できない。西辺のSD 10は南端が攪乱により大きく失われており、北端は建物の北西角手前で僅かに建物側に折れ、それより北側へは延びていない。このことから、S B 3が城の大手側に位置することにより建物への入り口の存在が想定された場合、建物の構造上、西面に設けられた可能性が高く、この北端に存在していた可能性もある。南辺溝のSD 9はS B 2と共有し、一直線に配置されており、西端でSD 10と接続すると考えられる。

【規模】確認した建物規模は、東西9.9m（4間）、南北21.8m（10間）の南北に長い建物である。建物東辺とS B 2西辺との距離は約4m（2間）でかなり近接している。南北の柱間は北と南端の縁通り部分が2.9mから3.0mの1間半程度で配置されるのに対し、部屋部分と推定される間にに入る8間分は6尺5寸で揃っている。東西側は5間相当の幅をもつが、西端が3m程度で1間半の縁通りに対し、東端が2m程度の1間となり、間にある部屋部分の2間は、建物東西幅の半分程度である5mを二分した8尺程度となる。この柱間は他の建物にはみられず、建物の建設にあたっては、東西幅を予め決めた上で、内部の配置を決めている可能性がある。

建物の各側柱列と周辺溝との距離は、SD 8東辺では1.4m程度と狭く、SD 7との間隔は約1.0m（半間）程度しかないことから、二つの建物の軒はかなり近接していたことがわかる。北辺では1.6mと多少広い傾向があるが、これもあくまで礎石が無く、基軸となる建物辺の不明瞭さや掘り込み調査の限界から、厳密なものではない。西辺のSD 10ではさらに狭く1.3~1.4mとなるが、この部分については建物西側柱列の構造から推定される上層構造の違いに起因している可能性もある。また南辺のSD 9との距離はS B 2側同様に1.75~2.0mあり、検出状況による距離の違いがあるにせよ、周辺を巡る溝の中では最も幅をもった配置といえる。

【礎石跡】礎石跡は側柱部で23基、建物内部で23基の合計46基を確認した。北西角や南西角と西辺・内部の一部は攪乱により失われている。礎石跡規模はS B 1や2とは異なり、全体に側柱部分が大きい傾向にあるわけではないが、北側柱の一部についてはやや大型で根固石の詰め方も丁寧といえる。東や南側柱では内部のものと比較しても大型ではなく、根固石の入れ方も多い。この事はある程度は礎石跡当初の規模を示しているとみられるが、南側や東側柱列においては、後世の削平度合いにも影響されている可能性もある。ただし西側柱については礎石跡14以外は全て小規模で、単なるピット状のものとして確認したものである。この地区が特に大きく攪乱を受けている状況は認められないことから、西側柱については当初より小規模で、簡易な構造であった可能性が高く、その中では礎石跡14は他とは異なる性格を担ったものと推定される。礎石跡は3と5の2基について掘り込みを行い、礎石跡14・20の2基は断面のみの調査である。

礎石自体は全く確認できず、他の建物同様に全て抜き取られたと考えられる。掘り方埋土はブロック土やそれらが縞状に確認できるものが多い。攪乱を受けていないものをみると、形状は円形で、掘り方径が0.6~2.2m、中心となるのは1.3m程度でS B 2とほぼ同じ規模をもっている。礎石跡相互の並びを大きく違えるものは無く、整然と配置されるが、建物内部の中央柱筋において2基が確認できなかったのは、攪乱に加え、建物構造による可能性もある。



第64図 3号石建物跡・3号石敷通横

礎石跡 3

建物北辺の礎石跡で、小溝群2-13より古い。搅乱により南側が一部失われている。形状は比較的整った円形で、掘り方径は1.2m、根固め径は1m程度である。根固めは径2~16cm程の円礫が密に詰められており、径10cm程のものが多い。検出段階においては中央部西寄りに径0.7m、深さ0.1mの礎石の抜取り痕が認められた。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡 5

建物西辺の礎石跡で、SK46より古い。搅乱により東側半分が失われている。形状は不整円形で、掘り方径は0.66mである。掘り方土上に2~5cm程の円礫が確認され、根固石とみられるが疎らである。掘り方埋土は黄褐色土を主体とし締まっている。建物西辺列にある礎石跡は全て、他の礎石跡と規模や構造面で異なっており、これは上部構造の違いによるものとみられる。

礎石跡 14

建物西辺の礎石跡で、周囲は搅乱により失われ、南縁部および北辺部が僅かに残存するのみである。形状は円形とみられ、掘り方径は0.7mで、根固めは径1~14cm程の円礫が掘り方内に密に詰められており、径10cm程のものが多い。縫間には黄褐色砂質土が詰められている。検出段階において中央部に径0.4m、深さ0.04mの不整円形の礎石の抜取り痕が認められた。掘り方埋土を入れず、根固石を底面に直接設置するといった、他の礎石跡にはみられない構造である。

礎石跡 20

建物内部の礎石跡で、小溝群2-18より古い。搅乱により南側の大半が失われている。形状は不整梢円形で、掘り方径は0.96m、根固め径は0.56m程である。根固めは径1~14cm程の円礫が密に詰められており、径10cm程のものが多い。中央部には径0.6m程、深さ0.2m程の礎石の抜取り痕が認められた。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡 1

建物北辺の礎石跡で、小溝群2-13、SK8より古い。形状は不整円形で、掘り方のみの残存とみられる。掘り方径は1.1mである。根固石とみられる径3~8cm程の円礫が僅かに確認されており、掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土を詰めている。後の削平による影響は多少あるとみられるが、建物の北辺側柱として、平面規模に対し構造面で他の礎石跡とは異なっている。

礎石跡 2

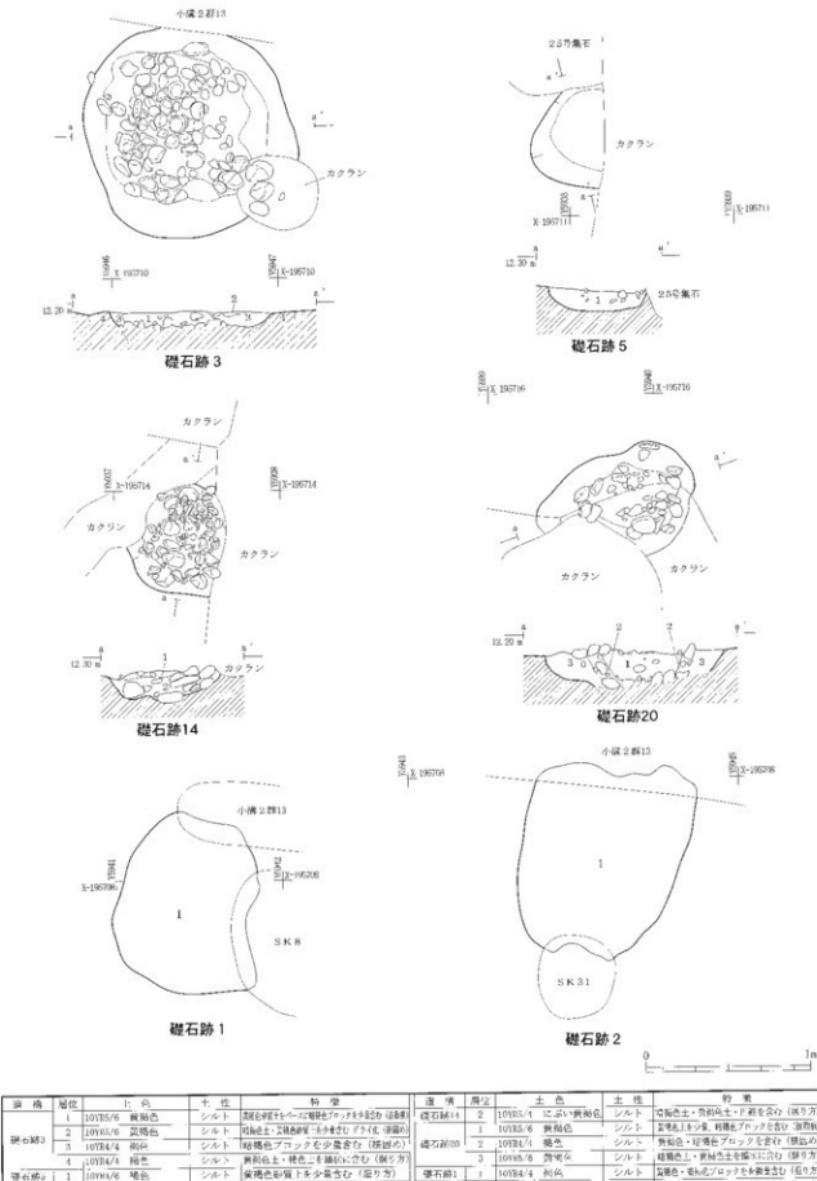
建物北辺の礎石跡で、小溝群2-13、SK13より古い。形状は不整梢円形で、礎石跡1同様に掘り方のみの残存とみられる。掘り方径は東西1.25m、南北1mである。検出段階では根固石などは殆ど確認されない。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土を含んでいる。

礎石跡 4

建物北東角の礎石跡で、六角塔基礎により南側が一部失われている。形状は不整梢円形で、掘り方径は1m、根固め径は0.7m程である。根固めには径2~10cm程の円礫が疎らに散乱している程度で、径8cm程のものが多い。縫間には暗褐色ブロック土や黄褐色砂質土が詰められている。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡 6

建物内部の礎石跡で、小溝群2-15より古い。形状は不整梢円形で、掘り方径は0.8m、根固め径は0.58mである。根固めは不整円形で、掘り方の西側に寄っており、径1~10cm程の円礫と、縫間には黄褐色砂質土を詰めている。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。



第65図 3号礎石建物跡 磎石跡 (1)

礎石跡7

建物内部の礎石跡で、小溝群1-1・2-18より古い。形状は不整梢円形で、掘り方径は1.06m、根固め径は0.82m程である。根固めは小溝底面において僅かに検出しており、径3~10cm程の円礫が含まれる。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡8

建物内部の礎石跡で、SK164より古い。六角塔基礎により上面が失われている。形状は不整円形で、掘り方径は1m、根固め径は0.7m程である。根固めは小溝底面で検出しており、掘り方の西側に寄っている。根固めには径2~11cm程の円礫を詰め、礫間には黄褐色ブロック土を詰めている。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡9

建物東辺の礎石跡で、小溝群2-15より古い。搅乱により南半分が失われている。形状は不整梢円形で、掘り方径は0.7m、根固め径は0.5mである。根固めは小溝底面で僅かに検出しており、径3~10cmの円礫が含まれている。礫間には黄褐色砂質土を詰めている。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡10

建物内部の礎石跡で、小溝群2-16より古い。搅乱により西側が一部失われている。形状は不整円形で、掘り方径は0.9m、根固め径は0.5m程である。中央部には径0.4m程の不整円形プランがあり、Ⅲ層に類似する層が堆積していることから礎石の抜取り痕とみられる。根固めは径10~16cm程の比較的大振りな円礫を周囲および底面に敷き並べており、その上に径2~6cm程の小円礫を詰めている。小円礫間に黄褐色ブロック土、掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層になり、固く締まっている。

礎石跡11

建物内部の礎石跡で、小溝群1-2・2-16より古い。小溝による削平のため、掘り方北側の1/4程を検出したのみで、形状や規模は不明である。小溝底面で根固石に使用されたとみられる円礫を僅かに確認している。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土を含み、固く締まっている。

礎石跡12

建物内部の礎石跡で、小溝群2-16、SK34より古い。六角塔基礎により東半分の上面が失われているため形状は不整円形で、掘り方径は0.92m、根固め径は0.7mである。根固めは径1~16cmの円礫が詰められており、径6cm程のものが多いが比較的大振りな石材も含まれている。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡13

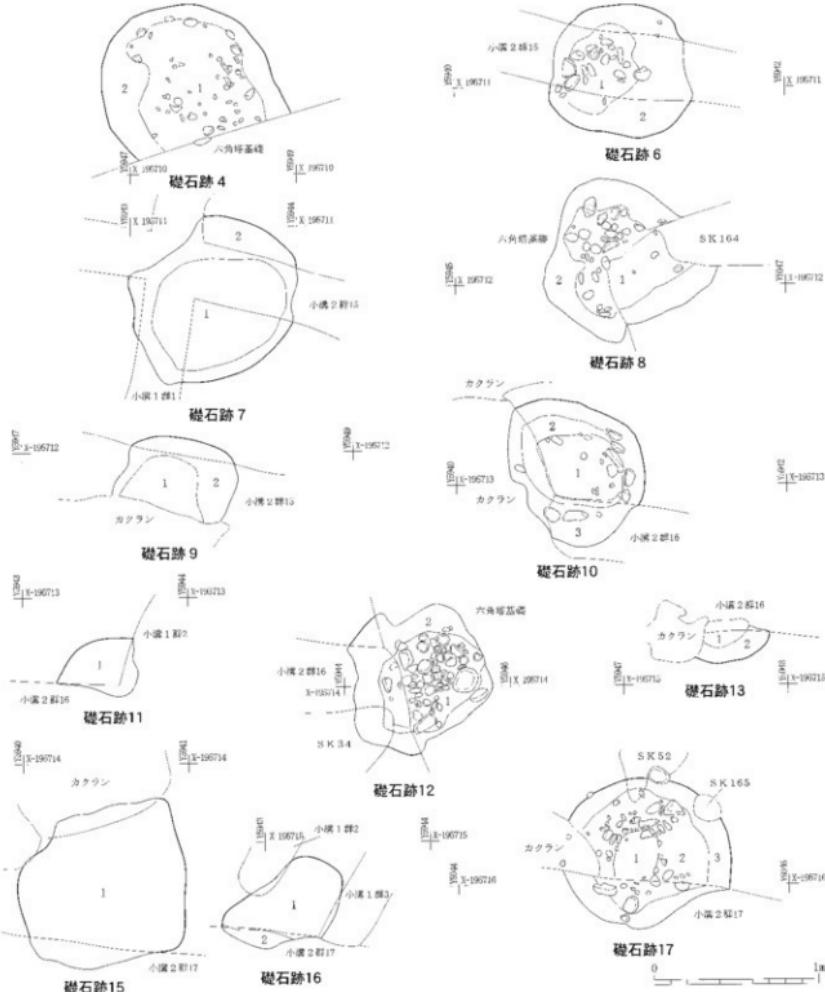
建物東辺の礎石跡で、小溝群2-16より古い。小溝や搅乱により北側大半が失われ形状は不明であるが、規模は小振りであったものとみられる。根固めは小溝底面において径8cm程の円礫が1点確認されたのみである。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土が詰められている。

礎石跡15

建物内部の礎石跡で、小溝群2-17より古い。搅乱により北側が一部失われているため形状は不整円形で、掘り方径は1.2mである。根固めは径1~10cm程の円礫が少量含まれている。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土を含み、固く締まっている。

礎石跡16

建物内部の礎石跡で、小溝群1-2・3・2-17より古い。形状は不整円形で、掘り方径は0.8mである。小溝底



第66図 3号石建物跡 確石跡（2）

施 稿	座 席	土 色	土 性	特 徴	通 稿	座 席	土 色	土 性	特 徴
確石跡1	1	10YR4/4	褐色	シルト	確石跡3	3	10YR4/4	褐色	シルト
	2	10YR4/4	褐色	シルト		1	10YR4/4	褐色	シルト
確石跡6	1	10YR4/4	褐色	シルト	確石跡11	1	10YR4/4	褐色	シルト
	2	10YR4/4	褐色	シルト		2	10YR4/4	褐色	シルト
確石跡7	1	10YR4/4	褐色	シルト	確石跡12	1	10YR4/4	褐色	シルト
	2	10YR4/4	褐色	シルト		2	10YR4/4	褐色	シルト
確石跡8	1	10YR4/4	褐色	シルト	確石跡13	1	10YR4/4	褐色	シルト
	2	10YR4/4	褐色	シルト		2	10YR4/4	褐色	シルト
確石跡9	1	10YR4/4	褐色	シルト	確石跡14	1	10YR4/4	褐色	シルト
	2	10YR4/4	褐色	シルト		2	10YR4/4	褐色	シルト
確石跡10	1	10YR4/4	褐色	シルト	確石跡15	1	10YR4/4	褐色	シルト
	2	10YR4/4	褐色	シルト		2	10YR4/4	褐色	シルト
確石跡11	1	10YR4/4	褐色	シルト	確石跡16	1	10YR4/4	褐色	シルト
	2	10YR4/4	褐色	シルト		2	10YR4/4	褐色	シルト
確石跡12	1	10YR4/4	褐色	シルト	確石跡17	1	10YR4/4	褐色	シルト
	2	10YR4/4	褐色	シルト		2	10YR4/4	褐色	シルト
確石跡13	1	10YR4/4	褐色	シルト	確石跡18	1	10YR4/4	褐色	シルト
	2	10YR4/4	褐色	シルト		2	10YR4/4	褐色	シルト
確石跡14	1	10YR4/4	褐色	シルト	確石跡19	1	10YR4/4	褐色	シルト
	2	10YR4/4	褐色	シルト		2	10YR4/4	褐色	シルト
確石跡15	1	10YR4/4	褐色	シルト	確石跡20	1	10YR4/4	褐色	シルト
	2	10YR4/4	褐色	シルト		2	10YR4/4	褐色	シルト

面で根固めとみられる径10cm程の円礫が僅かに確認されている。

礎石跡17

建物内部の礎石跡で、小溝群2-17、SK52・165より古い。搅乱により北側および西側が一部失われている。形状は不整円形で、掘り方径は0.8mである。根固めは主に径10~12cm程の大振りな円礫を周辺および下面に敷き並べ、その上に径1~8cm程の円礫を詰めている。中央部には径0.3m程の礎石の抜取り痕を検出している。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土を含み、固く締まっている。出土遺物は抜取り痕から瓦片が1点ある。

礎石跡18

建物東辺の礎石跡で、小溝群2-17より古い。六角塔基礎により西半分が失われているため形状は不整円形で、掘り方径は0.84m、根固め径は0.54mである。根固めは径3~5cmの円礫を疎らに含んでいるが、黄褐色ブロック土が主体となる。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡19

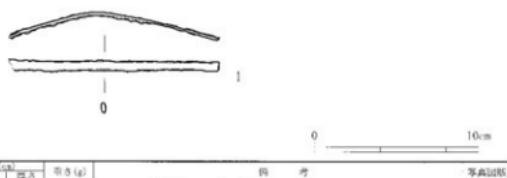
建物西辺の礎石跡で、他造構との重複関係は無い。Ⅲ層の畑耕作により底面近くまで失われている可能性もあるが、形状は不整円形である。掘り方径は0.47m、根固め径は0.3mである。根固めは検出段階では径7~10cm程の円礫が4点確認されるのみで、黄褐色ブロック土が詰められている。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土が詰められ、固く締まっている。

礎石跡21

建物内部の礎石跡で、小溝群2-18、SK39より古い。形状は不整円形で、掘り方径は1m、根固め径は0.6mである。根固めは径1~10cmの円礫が疎らに含まれており、礎間にには暗褐色や黄褐色ブロック土が詰められている。中央部西寄りには径0.5m程の礎石の抜取り痕が認められる。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡22

建物東辺の礎石跡で、小溝群2-18より古い。搅乱により東側の一部が失われている。形状は不整円形で、掘り方径は0.82mである。中央部には径0.7m程の不整円形のプランがあり、Ⅲ層に類似することから礎石の抜取り痕とみられる。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土が詰められ、固く締まっている。出土遺物は抜取り痕から棒状の銅製金具(N11)がある。



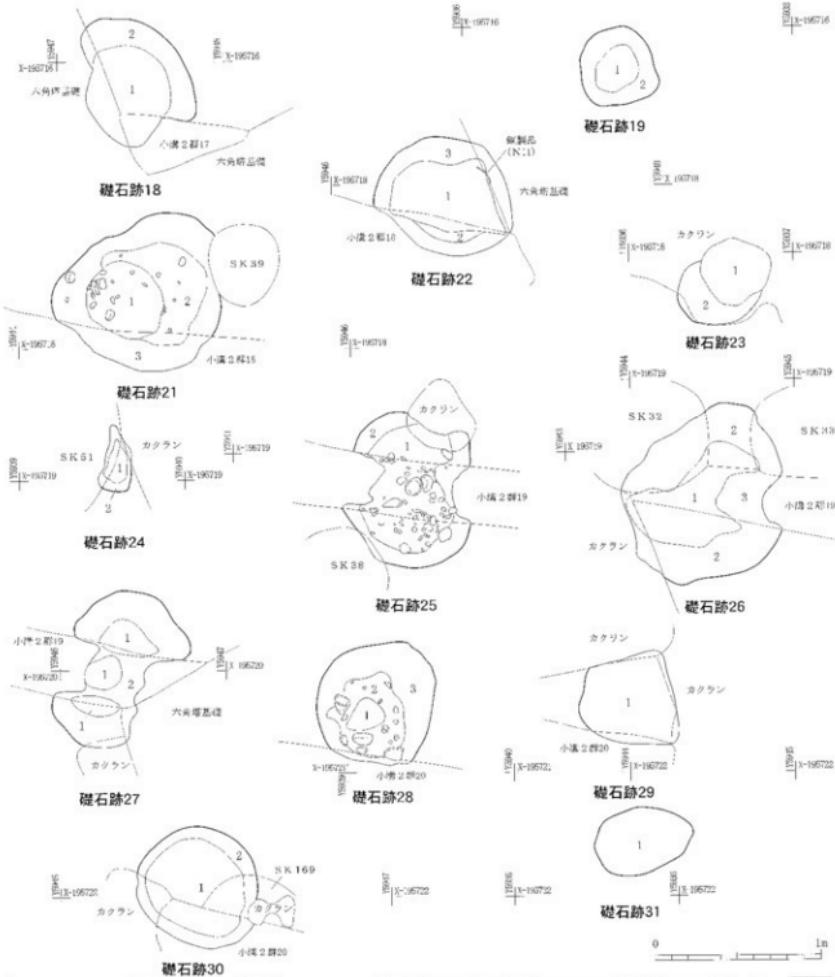
第67図 3号礎石建物跡 磚石跡22出土遺物

礎石跡23

建物西辺の礎石跡で、搅乱により上部が失われている。形状は不整円形で、掘り方径は0.5mである。掘り方の北側に張り出す径0.4m程の不整円形プランは礎石の抜取り痕とみられる。根固めとみられる礎は全く検出できなかった。

礎石跡24

建物内部の礎石跡で、SK51より古い。搅乱により大半が失われ、南辺の一部が残存するのみであるため規模や



遺構	位置	土色	土性	時	遺構	位置	土色	土性	時
礎石跡18	1	10YR4/4	褐色	シルト	1	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
	2	10YR4/4	褐色	シルト	2	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
礎石跡19	1	10YR4/4	褐色	シルト	1	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
	2	10YR4/4	褐色	シルト	2	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
礎石跡20	1	10YR4/4	褐色	シルト	1	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
	2	10YR4/4	褐色	シルト	2	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
礎石跡21	1	10YR4/4	褐色	シルト	1	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
	2	10YR4/4	褐色	シルト	2	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
礎石跡22	1	10YR4/4	褐色	シルト	1	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
	2	10YR4/4	褐色	シルト	2	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
礎石跡23	1	10YR4/4	褐色	シルト	1	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
	2	10YR4/4	褐色	シルト	2	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
礎石跡24	1	10YR4/4	褐色	シルト	1	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
	2	10YR4/4	褐色	シルト	2	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
礎石跡25	1	10YR4/4	褐色	シルト	1	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
	2	10YR4/4	褐色	シルト	2	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
礎石跡26	1	10YR4/4	褐色	シルト	1	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
	2	10YR4/4	褐色	シルト	2	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
礎石跡27	1	10YR4/4	褐色	シルト	1	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
	2	10YR4/4	褐色	シルト	2	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
礎石跡28	1	10YR4/4	褐色	シルト	1	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
	2	10YR4/4	褐色	シルト	2	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
礎石跡29	1	10YR4/4	褐色	シルト	1	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
	2	10YR4/4	褐色	シルト	2	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
礎石跡30	1	10YR4/4	褐色	シルト	1	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
	2	10YR4/4	褐色	シルト	2	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
礎石跡31	1	10YR4/4	褐色	シルト	1	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6
	2	10YR4/4	褐色	シルト	2	10YR4/4	褐色	シルト	1967.6

第68図 3号礎石建物跡 磐石跡 (3)

形状は不明である。中央部には礎石の抜取り痕とみられるⅢ層類似層を含む不整形プランが確認できる。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土を詰めている。

礎石跡25

建物内部の礎石跡で、小溝群2-19、SK38より古い。擾乱により北側が一部失われているため形状は不整円形で、掘り方径は南北0.96m、東西0.7mである。根固め径は南北0.8m、東西0.54mである。根固めは主に径1~12cm程の円礫を比較的密に詰めており、径6~8cm程のものが多い。礎間には黄褐色砂質土や小円礫が詰められ、掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土を詰めており、固く締まっている。

礎石跡26

建物内部の礎石跡で、小溝群2-19、SK32・33より古い。擾乱により西側の一部が失われている。形状は不整円形で、掘り方径は1.1m、根固め径は0.79mである。根固めは径2~8cm程のやや小振りな円礫を疎らに検出しており、礎間は黄褐色ブロック土が詰められている。掘り方は黄褐色と暗褐色ブロック土が主体となり、径3~8cm程の小円礫も詰めている。

礎石跡27

建物東辺の礎石跡で、小溝群2-19より古い。六角塔基礎により東側が一部失われているため形状は不整円形で、掘り方径は0.98m、根固め径は0.62mである。根固めは主に径10cm程の円礫を僅かに含むのみで、黄褐色ブロック土が詰められている。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土を詰めており、固く締まっている。

礎石跡28

建物内部の礎石跡で、小溝群2-20より古い。形状は不整円形で、掘り方径は0.69m、根固め径は0.46mである。中央部には0.23m程の礎石の抜取り痕を検出している。根固めは径1~12cm程の円礫を含んでおり、礎間には小円礫と黄褐色砂質土を詰めている。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土を詰めており、固く締まっている。

礎石跡29

建物内部の礎石跡で、小溝群2-20より古い。擾乱により北側及び東側が失われているため形状は不整円形で、掘り方径は0.58mである。根固めは擾乱底面に径10cm前後の円礫が僅かに確認される程度である。掘り方埋土は黄褐色ブロック土を多く詰めている。

礎石跡30

建物東辺の礎石跡で、小溝群2-20、SK169より古い。擾乱により西側の一部が失われている。形状は比較的整った円形で、掘り方径は0.78mである。中央部に径0.6m程の礎石の抜取り痕を検出している。根固めは径5cm程のやや小振りな円礫が礎石の抜取り痕内に僅かに確認される程度であり、掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡31

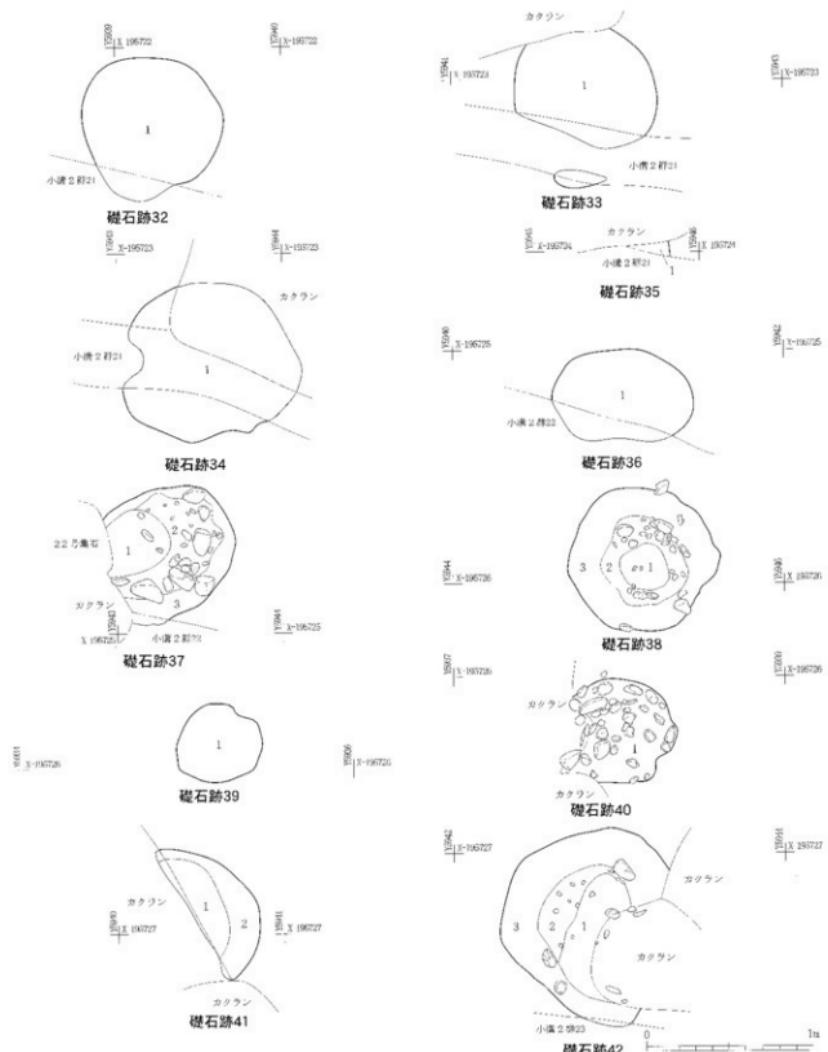
建物西辺の礎石跡で、他遺構との重複関係は無い。Ⅲ層の畑耕作により上部が失われており、形状は不整円形である。掘り方径は東西0.6m、南北0.4mで、検査段階では径3~5cm程の小円礫を僅かに含む。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土を含んでいる。

礎石跡32

建物内部の礎石跡で、南北の柱筋上に並ぶとみられるが、やや東側に寄っている。小溝群2-21より古い。検出面が全体にグライ化し、プランが不明瞭なため、根固めとみられる礫の分布範囲を礎石跡として捉えている。平面形は不整円形で、掘り方径は0.8mである。根固めは径5cm程のやや小振りな円礫が疎らに確認される程度である。

礎石跡33

建物内部の礎石跡で、小溝群2-21より古い。擾乱により北側の一部が失われている。礎石跡32同様、プラン



遺構	層位	計画	土性	特徴	層位	土性	土性	特徴			
礫石跡32	1	106Y1/1	赤褐色	シルト	グライ化(張り力)	2	107R4/4	褐色	シルト	泥質セメント化(張り力)	2-4割強(褐色)
礫石跡32	1	106Y1/1	赤褐色	シルト	グライ化(張り力)	3	107R4/4	褐色	シルト	泥質セメント化(張り力)	3割弱(褐色)
礫石跡33	1	106Y4/1	褐色	シルト	褐色色ブロックを多少含む(張り力)	4	107R4/4	褐色	シルト	泥質セメント化(張り力)	4割弱(褐色)
礫石跡34	1	106Y4/1	褐色	シルト	褐色色ブロックを多少含む(張り力)	5	107R4/4	褐色	シルト	泥質セメント化(張り力)	5割強(褐色)
礫石跡35	1	106Y4/1	褐色	シルト	褐色色ブロックを多少含む(張り力)	6	107R4/4	褐色	シルト	泥質セメント化(張り力)	6割強(褐色)
礫石跡36	1	106Y4/1	褐色	シルト	褐色色ブロックを多少含む(張り力)	7	107R4/4	褐色	シルト	泥質セメント化(張り力)	7割強(褐色)
礫石跡37	1	106Y4/1	褐色	シルト	褐色色ブロックを多少含む(張り力)	8	107R4/4	褐色	シルト	泥質セメント化(張り力)	8割強(褐色)
礫石跡38	1	106Y4/1	褐色	シルト	褐色色ブロックを多少含む(張り力)	9	107R4/4	褐色	シルト	泥質セメント化(張り力)	9割強(褐色)
礫石跡39	1	106Y4/1	褐色	シルト	褐色色ブロックを多少含む(張り力)	10	107R4/4	褐色	シルト	泥質セメント化(張り力)	10割強(褐色)
礫石跡40	1	106Y4/1	褐色	シルト	褐色色ブロックを多少含む(張り力)	11	107R4/4	褐色	シルト	泥質セメント化(張り力)	11割強(褐色)
礫石跡41	1	106Y4/1	褐色	シルト	褐色色ブロックを多少含む(張り力)	12	107R4/4	褐色	シルト	泥質セメント化(張り力)	12割強(褐色)
礫石跡42	1	106Y4/1	褐色	シルト	褐色色土・粘土化(張り力)	13	107R4/4	褐色	シルト	泥質セメント化(張り力)	13割強(褐色)
礫石跡43	1	106Y4/1	褐色	シルト	褐色色土・粘土化(張り力)	14	107R4/4	褐色	シルト	泥質セメント化(張り力)	14割強(褐色)

第69図 3号礫石建物跡 磕石跡(4)

が不明瞭なため、根固めとみられる礎の分布範囲を礎石跡として捉えている。平面形は不整円形で、掘り方径は1m程である。根固めは径3~5cm程の小振りな円礎が疎らに確認される程度である。

礎石跡34

建物内部の礎石跡で、小溝群2-21より古い。攪乱により北側の一部が失われている。形状は不整円形で、掘り方径は0.93mである。小溝内において径8cm程の円礎が僅かに確認される程度であり、振り方埋土は暗褐色ブロック土を含んでいる。

礎石跡35

建物東辺の礎石跡で、小溝群2-21より古い。攪乱と小溝により振り方東辺が僅かに残存するのみで、規模・形状などは不明である。

礎石跡36

建物内部の礎石跡で、小溝群2-22より古い。形状は不整楕円形で、掘り方径は東西0.85m、南北0.55mである。根固めの礎は1彳も確認できず、礎を使用しない簡易な構造の可能性も考えられる。振り方埋土は暗褐色ブロック土を含んでいる。

礎石跡37

建物内部の礎石跡で、小溝群2-22、22号集石より古い。攪乱により南側が一部失われている。形状は不整円形で、掘り方径は0.75m、根固め径は0.6mである。根固めは径1~20cm程の円礎を多く含み、大振りの礎を周縁に配置し、中央部には小振りな円礎を詰めている。中央部東寄りには径0.35m程の礎石の抜取り痕が確認されている。振り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土を詰めており、固く締まっている。

礎石跡38

建物東辺の礎石跡で、他遺構との重複関係は無い。形状は比較的整った円形である。掘り方径は0.9m、根固め径は0.52mで、根固め径に比べ振り方径が大きいが、これは残存状況の悪さに起因している可能性もある。根固めは径2~12cm程の円礎を比較的密に詰め、礎間には黄褐色砂質土を詰めている。中央部には径0.28m程の礎石の抜取り痕が検出されている。振り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。出土遺物は抜取り痕中から平瓦1点がある。

礎石跡39

建物西辺の礎石跡で、Ⅲ層の畑耕作により上部が失われており、形状は不整円形である。掘り方径は0.5mで、中央部の径0.3m程の範囲に根固石とみられる径2~8cm程の円礎がまとまって検出された。振り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土を詰めており、固く締まっている。

礎石跡40

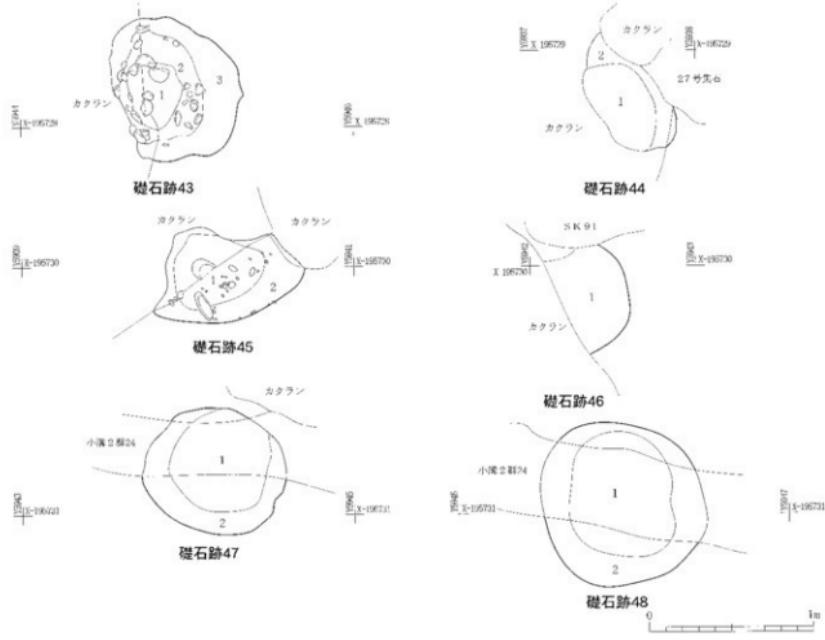
建物内部の礎石跡で、他遺構との重複関係は無い。攪乱により西側及び南側は一部失われている。形状は不整円形で明瞭ではない。振り方あるいは根固め径は0.65mで、径2~18cm程の円礎を密に詰めているが、周縁部に大振りの円礎を貼り付けている。10cm程の礎が多く、礎間には黄褐色砂質土を詰めている。

礎石跡41

建物内部の礎石跡で、他遺構との重複関係は無い。攪乱により西側が大きく失われているが、形状は比較的整った円形である。掘り方径は0.93m、根固め径は0.7mである。根固めは径3cm程の小円礎が疎らに確認される程度で、黄褐色ブロック土が貼られている。振り方埋土は黄褐色ブロック土を主体に暗褐色ブロック土を詰めており、固く締まっている。

礎石跡42

建物内部の礎石跡で、小溝群2-23より古い。攪乱により東側が失われている。形状は不整円形である。振り方



第70図 3号礎石建物跡 磨石跡(5)

径は1.2m、深さ0.3m程、根固め径は0.6mである。S B 3においては比較的大型の磨石跡である。根固めは径1~15cm程の円礫を詰めており、搅乱の断面では、大振りの円礫を側面や底面に貼り付け、その上に小円礫をのせる構造である。礫間には黄褐色砂質土を詰めている。中央部には径0.7m程の磨石の抜取り痕が検出されている。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡43

建物東辺の磨石跡で、他造構との重複関係は無い。搅乱により西側の一部及び上部が失われている。形状は不整形円形で、掘り方径は0.85m、深さ0.3m程、根固め径は0.68m、深さ0.2mである。根固めは径1~12cm程の円礫を詰めているが、搅乱の断面から、大振りの円礫を底面と側面に貼り付け、その上部に小円礫をのせる構造となっている。礫間には黄褐色砂質土を詰めている。中央部には径0.4m程の磨石の抜取り痕が検出されている。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡44

建物南辺の磨石跡で、27号集石造構より古い。搅乱断面において僅かに検出しておらず、形状は不整形である。規模は不明で、掘り方及び根固めの一部を検出した。根固めは径1~12cm程の円礫を詰めており、大振りの円礫を壁

面に貼り付け、その上に小円礫と黄褐色砂質土を詰めている。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡45

建物南辺の礎石跡で、他遺構との重複関係は無い。擾乱により大半が失われ、南側の一部が残存するに過ぎない。規模は不明で、掘り方および根固めの一部を検出した。根固めは径1~10cm程の円礫を含み、底面付近と上面に大振りの円礫を敷き、礎間は小円礫や黄褐色砂質土を詰めている。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土がリング状の互層となり、固く締まっている。

礎石跡46

建物南辺の礎石跡で、SK91より古い。擾乱により西側が失われている。平面形は不整円形である。規模は不明で、掘り方を検出している。径3~8cm程の根固石とみられる円礫を僅かに検出しており、掘り方埋土にはブロック土を殆ど含まない。

礎石跡47

建物南東角の礎石跡で、小溝群2-24より古い。2号石敷造構が南縁部に及んでいる。形状は比較的整った円形である。掘り方径は0.85m、根固め径は0.6mで、根固めには径2~8cm程の円礫が僅かにみられる。礎間には黄褐色砂質土を詰めている。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土を互層に詰め、固く締まっている。

礎石跡48

S B 2との間にあり、連結する渡り廊下とみられる南辺側の礎石跡で、小溝群2-24より古い。S B 3の礎石跡47側に多少寄っている。形状は比較的整った円形である。掘り方径は1m、根固め径は0.75mで、根固めは径2~10cm程の円礫を含み、径3cm程の小円礫が主体である。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色ブロック土を互層に詰め、固く締まっている。

【溝 跡】掘り込みは、SD 8がSB 3北辺中央と東辺南側、SD 10がSB 3西辺中央で行なった。2つの溝は全てSB 2の周囲を巡ることで建物の雨落ち溝として機能したことが考えられるが、SD 9は2号石敷造構の側溝、SD 10は3号石敷造構の側溝としての機能も併せ持っていたと考えられている。またSD 8は北辺と東辺での構造に違いがみられ、この東辺溝は並行して走るSD 7と構造は類似するが幅などに違いがみられる。SD 8北辺溝が北側に折れる部分については、SB 3の構造に関係するが、SD 4と接続し、排水を意図したもの可能性もある。

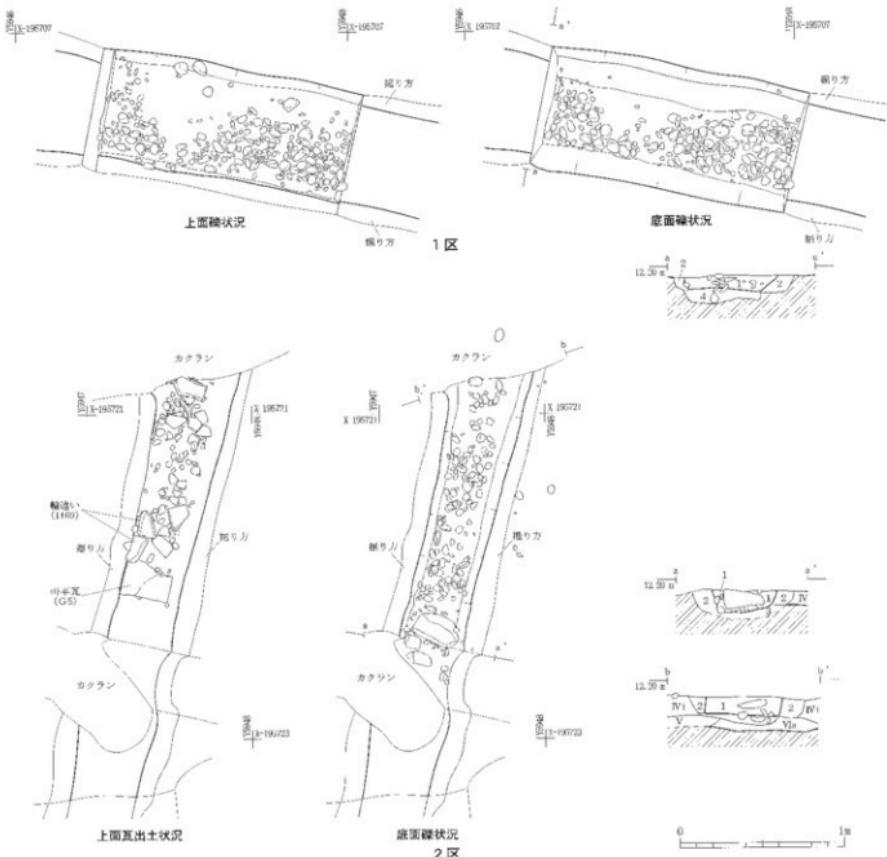
8号溝跡

建物東辺から北辺にかけて巡るもので、小溝2群や多くの土坑・ピットより古い。六角塔基礎などにより部分的に失われている。東辺においてはSB 2の西辺溝SD 7と並走し、南端部は擾乱により失われており、SD 7同様に詳細は不明である。北辺部は北方向に鉤方に屈曲し石敷側溝であるSD 4に接続するとみられる。溝には全体に幅0.6~0.9mの掘り方プランがみられるが、東辺より北辺側の幅が広い傾向がある。

掘り込み調査は2か所で行い、北辺中央を1区、東辺南半を2区とした。1区での掘り方幅は0.78m、溝幅は0.6mで、溝底までの深さは0.1m程である。北側の掘り方埋土と溝堆積土の区別が難しく、掘り方部分まで掘削している。底面には径2~8cm程の小円礫が比較的多く敷き詰められていた。側石やその抜取り痕などは認められず、小礫下には割石による敷石は確認されなかった。断面でみると礫下の底面は平坦で、掘り方埋土には黄褐色ブロック土を敷き均している。溝堆積土を少し掘り下げた時点で流入上と混じる形で底面の礫よりさらに小さな礫が散乱する状況が確認されたが、これもまた底面礫の上半部分である可能性がある。

出土遺物は上面より平瓦や輪違い等の瓦片が出土した。

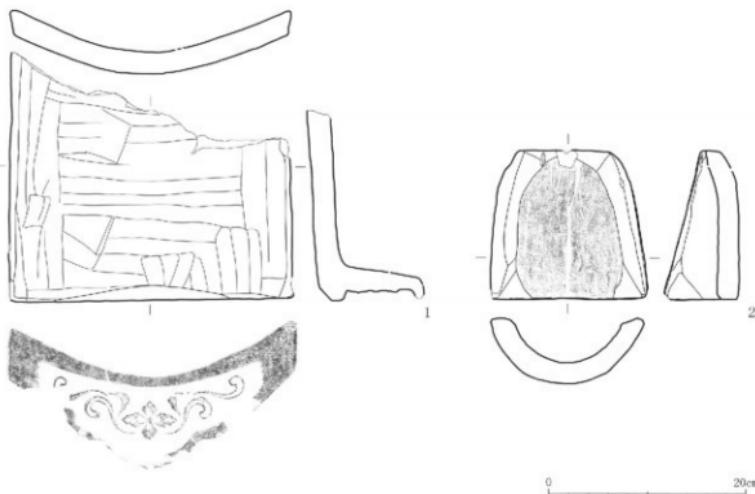
2区での溝は掘り方幅0.6m、溝幅0.35m、敷石までの深さ0.1mで、1区同様に底面に径2~6cm程の小円礫を敷き詰めている。円礫の厚さは最も厚い箇所で6cm程もある。やはり側石の痕跡や抜取り痕が認められないこと



第71図 8号溝跡

から、本来、側石などは無く、溝内全体に小円礫を詰めていたとみられる。2区南側の溝中央底面に安山岩の割石が1石置かれていたが、これ以外に底面に割石が散かれる状況は確認できない。また1区・2区を通し、掘り方埋土は底面側と壁面側とでは入れる上を多少違えている傾向がある。

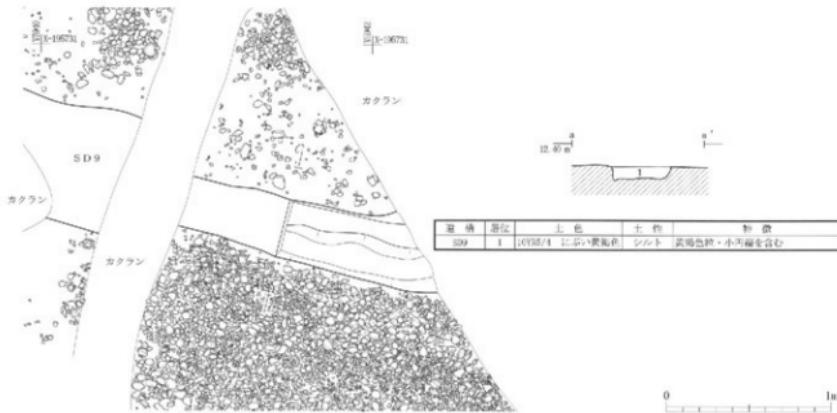
出土遺物は、丸瓦、軒平瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違いなど瓦片64点、陶器2点、鉄製品1点がある。G5は滴水瓦である。瓦当文様は花菱文で、瓦当部の幅は28.7cm、高さ9.4cmで、瓦当面の大きさはSD5で出土したG4とはほぼ同じである。H69は輪違いで尻部が丸く窄まる形状である。



第72図 8号溝跡出土遺物

9号溝跡

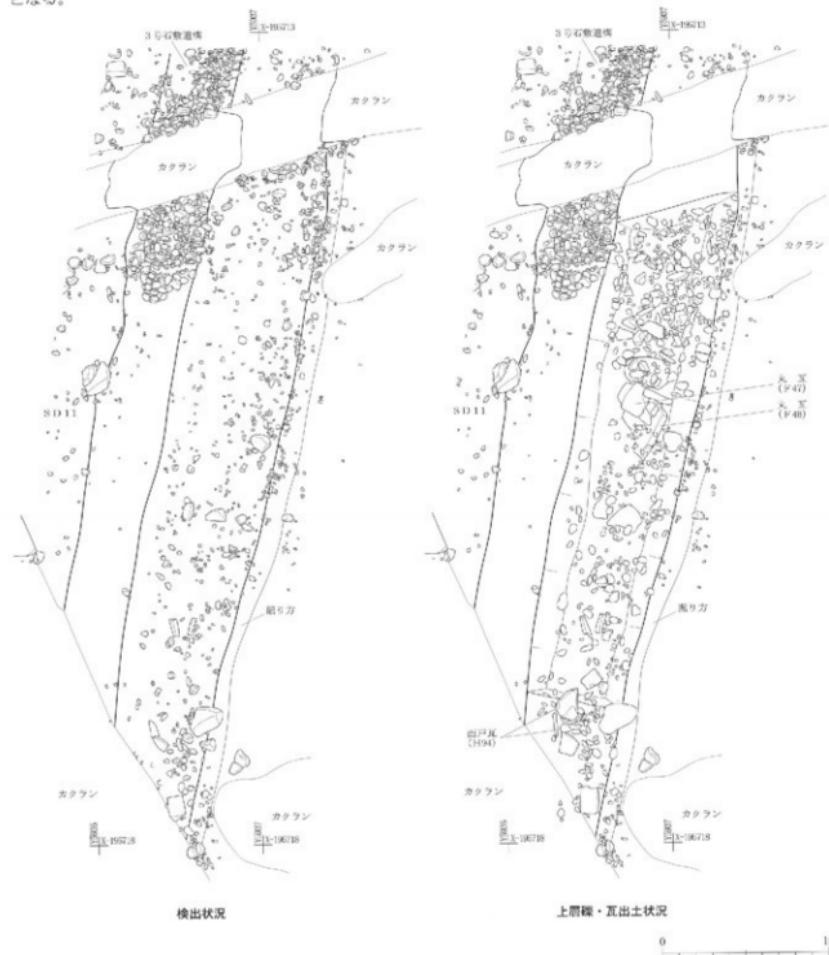
建物南辺に沿って東西に走る溝で、東側ではS B 2と溝を共有している。溝幅は0.4m、深さ0.1mが確認されたが、2号石敷造構の石敷きが上部にのり、掘り方プランは確認できなかった。堆積土中には石敷きから崩落した円礫が多数認められる。溝底面には小円礫敷きや敷石は認められず、個々だけの状況なのか、あるいはS B 2側とは異なる構造となるのかは不明である。



第73図 9号溝跡 1区

10号溝跡

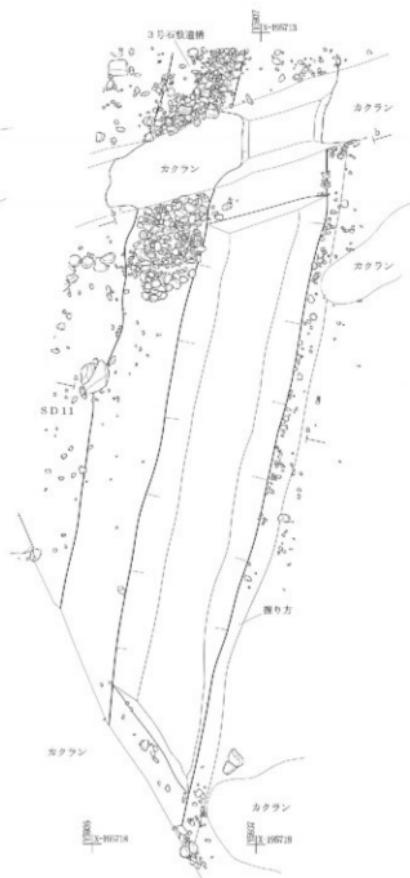
建物西辺に沿って南北東西に走る溝で、中央部において掘り込み調査を行った。掘り方幅0.85m、溝幅0.7m、深さ0.3mである。3号石敷に接しているため、堆積土中には石敷から崩落した小円礫に混じって瓦片が多く認められた。東側の掘り方ラインは明瞭に検出されたが、西側については石敷の残存状態が良好なことから敷石下となり検出できなかった。溝底面付近には径5~8cm程の小円礫が多く確認され、これらを敷いていたものとみられる。礫下には割石による敷石はみられず、厚さ3cm程のブロック土を敷き均した後に小円礫を敷き詰めたものとみられる。SD 8や9と比較して深い溝であるにも関わらず、側石やその抜取り痕などは確認できず、壁面の構造が問題となる。



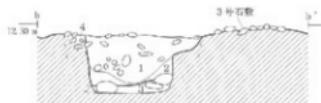
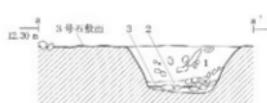
第74図 10号溝跡 1区 (1)



底面様状況

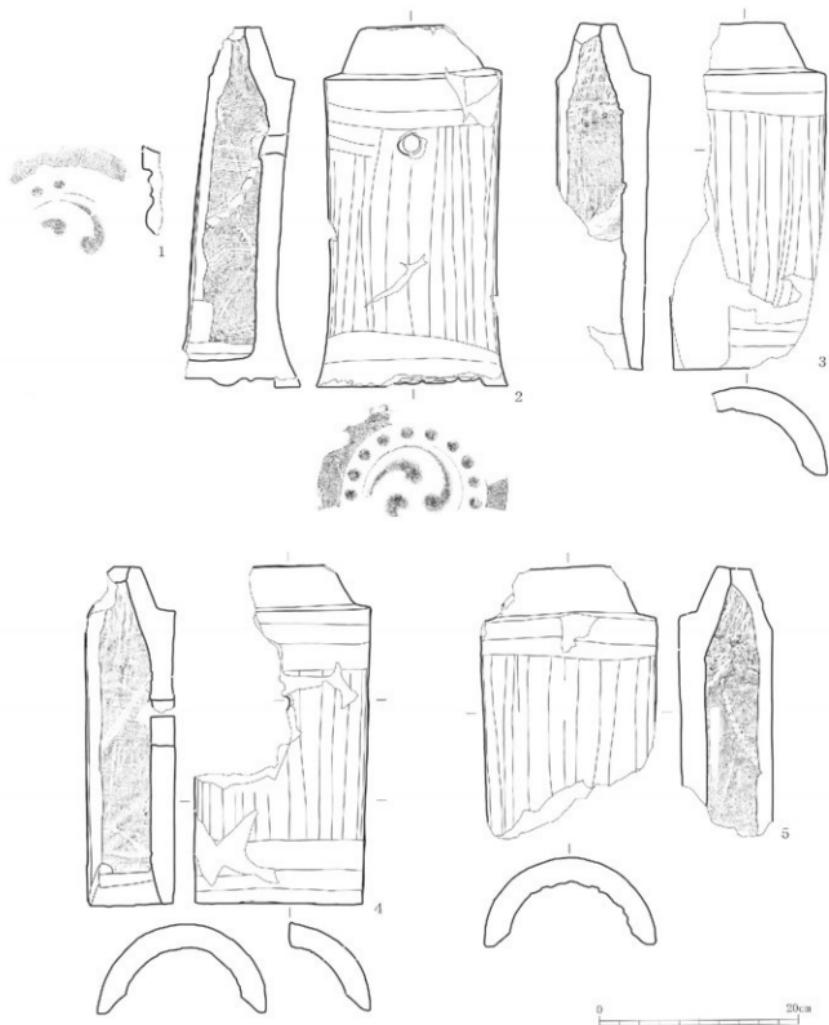


完掘状況



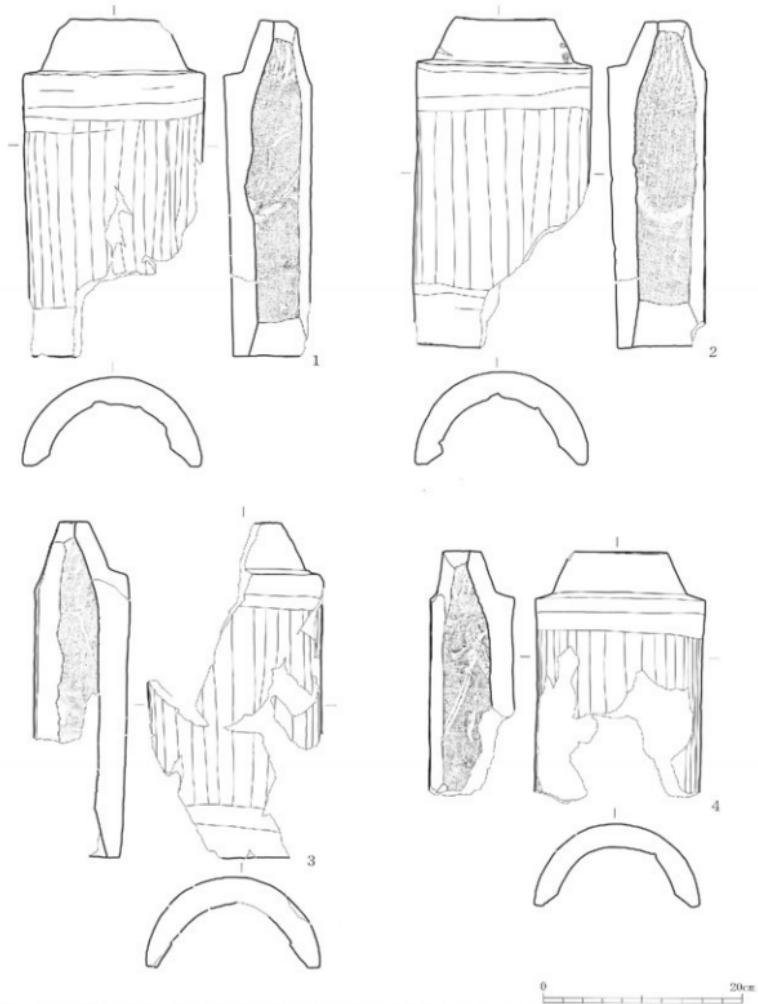
道 横	局位	上 イ	土 性	特 徴	道 横	局位	上 イ	土 物	特 徴
SD10	1 : 0Y24/4 黄色	砂質土	砂20~30mmの円粒を含む		SD10	3 : 10Y5/3 にほい黃褐色	シルト	アラビカゴヨウサカの小枝葉を含む(第13)	
	2 : 0Y35/6 黄褐色	砂質土	砂20~30mmの円粒を含む		4 : 10Y4/3 にほい黃褐色	シルト	暗褐色ゾロッタ・塊を含む(第13)		

第75図 10号溝跡 1区 (2)



試験番号	標記番号	種類	造形・焼成	文様	高さ(cm)	寸法(cm)			重さ(kg)	備考	分類	写真番号	
						径厚	外径	底径					
1	F15	軽丸瓦	SD19	唐文二巴文	-	(19.0)	(14.0)	2.5	0.9	0.37	瓦当面: 唐文若、内面: 1.4cm(直角と腰合)	A	46-15
2	F16	軽丸瓦	SD19	唐文二巴文	37.2	19.1	13.8	2.3	1.0	3.86	1.3倍セラミック7.6倍、内面: 古風子母口、表面: 2.4倍手造法	IA	46-16
3	F40	丸瓦	SD16	-	35.5	-	2.6	9.1	1.60	凸面: ナデ、凹面: コビキ彫、布リ・継合部	1	47-1	
4	F41	丸瓦	SD16	-	34.6	(17.4)	2.4	9.1	(5.0)	2.03	凸面: ナデ、凹面: コビキ彫、継合部、刺穴あり	1	47-2
5	F42	丸瓦	SD10	-	17.0	2.5	9.1	4.8	1.99	凸面: ナデ、凹面: コビキ彫、布目、移動工具による压痕	1	47-3	

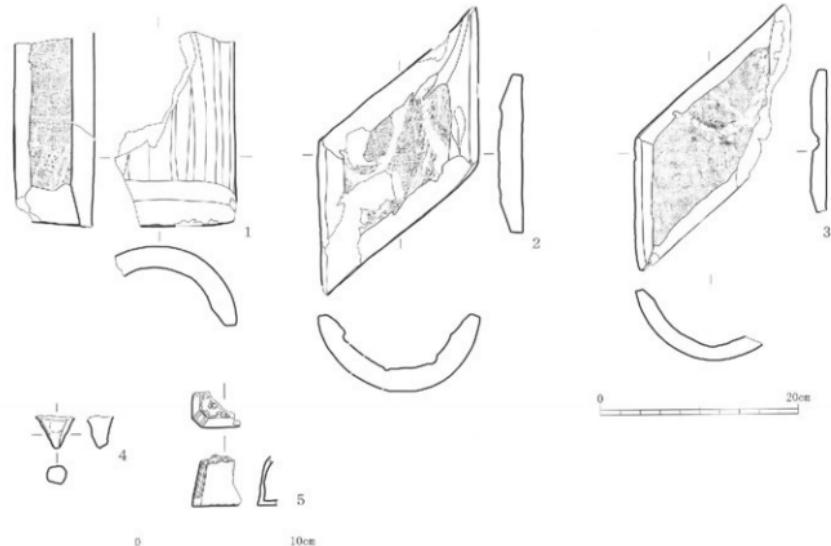
第76図 10号溝跡出土遺物（1）



发掘番号	登録番号	種類	造形・施紋	寸法 (cm)				重さ (G)	備考	分類	参考文献	
				高さ	幅	厚さ	内径 (cm)					
1	F46	丸底	SD19	24.7	18.3	2.8	9.2	5.4	2.37	凸面:ナガ・凹面:直。凹面:コビ今張・調正痕	1	47-4
2	F48	丸底	SD19	22.9	17.9	2.0	9.5	4.6	2.98	凸面:ナガ・凹面:コビ今張・直口・調正痕	1	47-5
3	F44	丸底	SD19	34.8	17.5	2.7	9.2	(4.8)	1.50	凸面:ナガ・凹面:コビ今張・直口・調正痕	1	47-6
4	F47	2.型	SD19	-	17.2	2.3	8.4	4.2	1.60	凸面:ナア。凹面:コビ今張・直口・調正痕	1	48-1

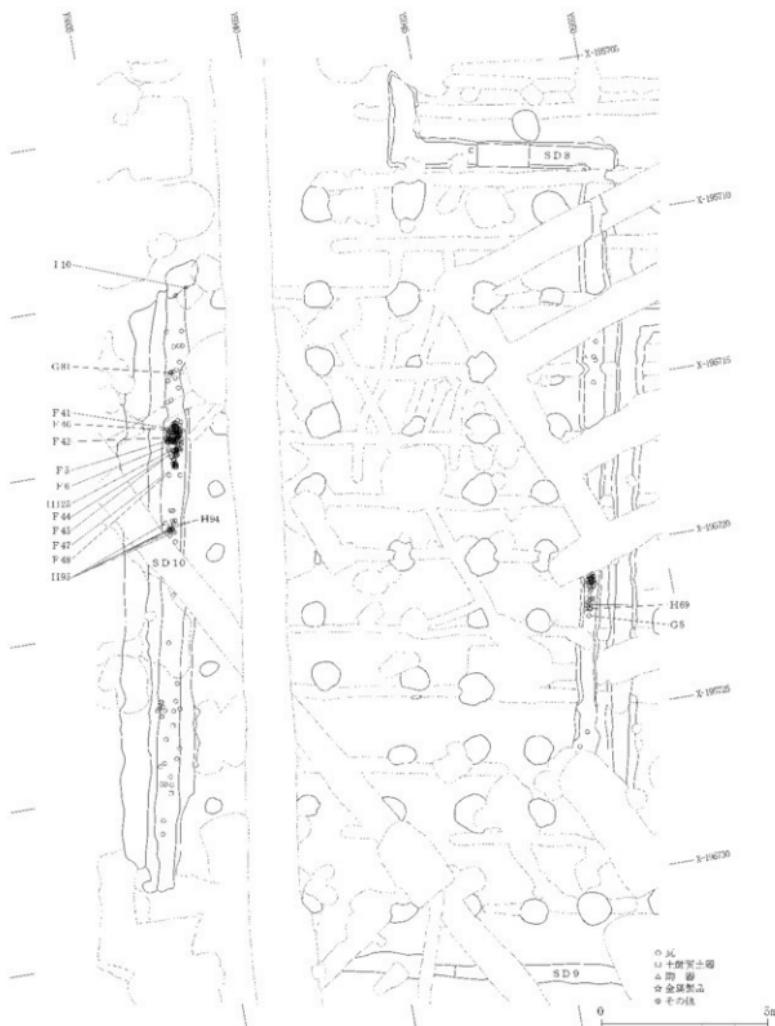
第77図 10号溝跡出土遺物（2）

出土遺物は、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、面瓦などの瓦片385点、陶器2点、土師質土器皿1点、焼塙壺1点、瓦質土器1点、土師器1点、鉄製品2点がある。F 5・6は軒丸瓦で、瓦当文様は珠文三巴文（左巻き）で、F 6の珠径は1.5cm、珠数は17個とみられる。F 6は全体の大きさのわかる唯一の資料で、玉縁付きの形状である。長さ37.2cm、幅19.1cmで、尻側に釘穴が認められる。F 41～48は丸瓦である。全体の長さのわかるものは4点で、33.9～35.5cmである。F 41の尻側には釘穴が認められる。F 43の凹面には棒状工具による押圧痕が認められる。H 94・95は溝切の面瓦で、丸瓦の両端部を約50度の角度で切断した形状である。凹面は両端部を幅広のケズりで面取りしている。H 125は鬼瓦の一部とみられる。I 10は大堀相馬の水滴で、型押しで平面長方形である。



登録番号	登録番号	種類	地質・部位	高さ	幅	厚さ	重さ(kg)	備考	分類	写真回数
1	F 45	丸瓦	SD10	—	2.2	8.7	0.76	凸面:ナグ。凹面:コピキ縁、右目、焼付痕	—	48-2
2	H 95	面瓦(溝切)	SD10	29.5	16.2	2.4	7.9	凸面:ナグ。凹面:コピキ縁、右目、焼付痕(約150°)	3	48-3
3	H 94	面瓦(溝切)	SD10	27.2	16.1	1.5	0.67	凸面:ナグ。凹面:コピキ縁、焼付痕、両端切削(約100°)	2	48-1
4	H 125	鬼瓦	SD10	—	—	—	0.02	—	—	48-6
登録番号	登録番号	種類	地質・部位	高さ	幅	厚さ	重さ(kg)	備考	分類	写真回数
5	I 10	荷物	小堀	SD10	—	—	—	大堀相馬 16C 滅半 型押し、内面削り	—	48-8

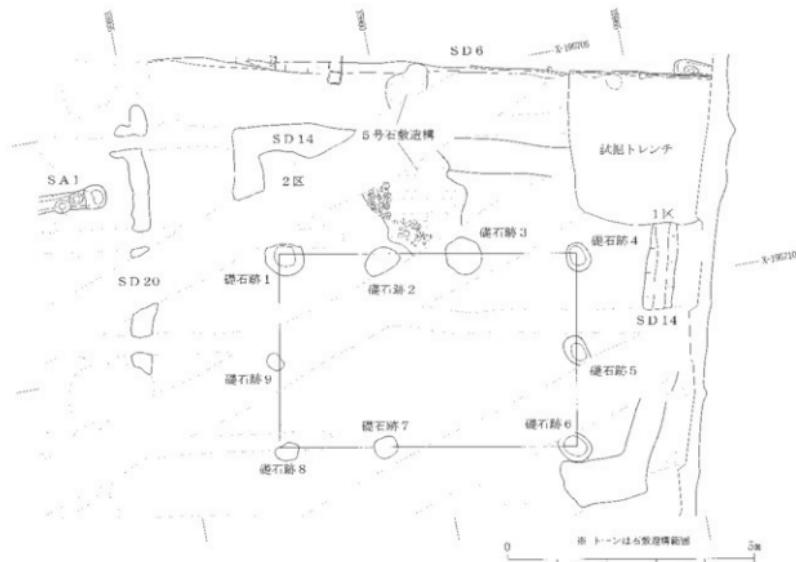
第78図 10号溝跡出土遺物（3）



第79図 3号礎石建物跡 遺物出土状況

4号礎石建物跡

【配置と形状】 S B 1と2の間で検出した東西方向で小型の礎石建物跡で、建物全体を検出した。今回検出した4棟の中では最も規模が小さい。礎石跡は4辺の側柱のみで内部には確認できない。東辺の南北柱筋はS B 2の北側張出し棟の東辺柱筋と描い、南北柱筋の全てがS B 2と揃うが、S B 1とは半間違っている。周囲にはSD14が他の溝とは接続せず並んでいるが、南と西辺では確認できない。また北側では5号石造造構と重複しており、右敷きは溝上に敷かれたものとみられる。さらに右敷きは北側の溝外にも延びており、確認した範囲も限定的なことから、



第80図 4号基礎建物跡・5号石敷構造

建物北側にある出入口から S B 1側に向かって敷かれた通路状の施設とも考えられる。建物西側には南北方向の堀跡の可能性がある S D 20が位置しており、相互の位置関係から、堀は西側から S B 4への見通しを遮断するための施設と推定される。

【規模】確認した建物規模は、東西5.9m（3間）、南北4m（2間）である。柱間は東西・南北とも2m程度の1間とみられるが、北側柱の基礎跡3がやや西側に寄る位置にあり、これが搅乱によるものか、あるいは当初より柱間に違いがあるのかは不明瞭である。建物の各側柱列と S D 14との距離は、北辺が2.1～2.4m、東辺が1.3～1.6mと溝自体が建物と双方の幅に差があり、また建物と並行しない部分もあり一定ではない。さらに西および南辺について溝の北西角と南東角の位置からみてかなり狭く、近接していたとみられ、北辺側での幅広さが目立っている。

【基礎跡】基礎跡とみられるものは9基確認した。いずれも側柱のみで建物内部には確認していない。規模は径0.6～0.8m程と小型で、形状も不整形のものが多い。南辺は搅乱により1基失われている。調査では基礎跡4の1基について掘り込みを行った。基礎跡に基礎自体は残されておらず、平面プランの観察によりリング状に2つに分けたものもあったが、残存状況が悪く、プラン内側は抜き取り穴ではなく、根固石を含んだ層とみられる。根固めは小型の円錐に加え、土や砂礫により構成されるものが殆どである。

基礎跡 4

建物北東角の基礎跡で、掘り込みを行った。他遺構との重複関係は無い。平面形状は不整円形で、掘り方径は東西0.49m、南北0.6mで、根固めは径3～6cm程の小振りな円錐を使用している。掘り方の深さは不明である。中央部に径0.5m程の不整円形のプランがあり、基礎の抜取り痕とみられる。掘り方埋土は黄褐色ブロック上を主体とするものである。

基礎跡 1

建物北西角の基礎跡で、小溝群2-12より古い。形状は円形で、掘り方径は0.76mである。中央部に径0.4m程

の不整円形のプランがあり、礎石の抜取り痕とみられる。根固めは掘り方に沿って礎がリング状に並んで敷かれ、径1~10cm程度の円縁を使用しているが、6~8cm程度の小振りのものが多い。掘り方埋土は黄褐色と暗褐色砂質土を主体とするもので、固く締まっている。

礎石跡2

建物北辺列の礎石跡で、他遺構との重複関係は無い。擾乱により南側が一部失われている。形状は不整楕円形で、掘り方径は東西0.7mである。掘り方埋土は黄褐色砂質土を主体とするものである。検出面では根固めは確認できないが、擾乱の断面において径5~8cm程度の円縁がみられる。

礎石跡3

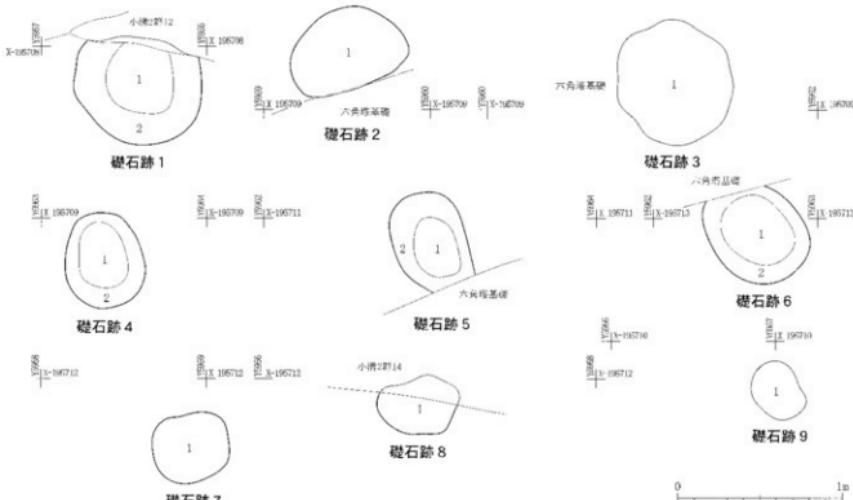
建物北辺列の礎石跡で、六角塔基礎内において検出したため上部が失われている。形状は不整円形で、掘り方径は0.7mである。中央部に僅かに根固めが残存しており、径3~6cm程度の小振りな円縁を使用している。掘り方埋土は暗褐色ブロック土を含み、固く締まっている。

礎石跡5

建物東辺列の礎石跡で、六角塔基礎により南側が一部失われている。形状は不整楕円形で、掘り方径は東西0.42mである。中央部には径0.25mほどの不整楕円形の礎石の抜取り痕らしきプランがあり、中には径2~10cm程度の円縁が幾つか認められる。外側のプラン内には礎は無く、埋土は黄褐色ブロック土と暗褐色砂質土を主体とし固く締まっていることから、この礎石跡は明瞭な根固めを持たないかあるいは抜き取りの際に失われている可能性もある。

礎石跡6

建物南東角の礎石跡で、六角塔基礎により北側が一部失われている。形状は不整円形で、掘り方径は0.6m、根



施	構	層位	土 色	二 構	特 極	施	構	層位	土 色	二 構	特 極
礎石跡1	1	10Y3/3	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土を主体（根固め）	礎石跡2	1	10Y3/3	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土に夾まれたブロックを含む（根固め）
	2	10Y4/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土上に圓錐形ブロックを含む（根方）		2	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土を主体、凹面を多点含む（根方）
礎石跡2	1	10Y4/3	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土を含む（根方）	礎石跡3	1	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土に夾まれたブロックを含む（根方）
	2	10Y4/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土を主体（根方）		2	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土に夾まれたブロックを含む（根方）
礎石跡3	1	10Y3/3	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土を主体（根方）	礎石跡5	1	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土に夾まれたブロックを含む（根方）
	2	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土を主体（根方）		2	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土に夾まれたブロックを含む（根方）
礎石跡4	1	10Y3/3	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土を主体（根方）	礎石跡6	1	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土に夾まれたブロックを含む（根方）
	2	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土を主体（根方）		2	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土に夾まれたブロックを含む（根方）
礎石跡5	1	10Y3/3	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土を主体（根方）	礎石跡7	1	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土に夾まれたブロックを含む（根方）
	2	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土を主体（根方）		2	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土に夾まれたブロックを含む（根方）
礎石跡6	1	10Y3/3	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土を主体（根方）	礎石跡8	1	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土に夾まれたブロックを含む（根方）
	2	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土を主体（根方）		2	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土に夾まれたブロックを含む（根方）
礎石跡7	1	10Y3/3	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土を主体（根方）	礎石跡9	1	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土に夾まれたブロックを含む（根方）
	2	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土を主体（根方）		2	10Y3/4	暗褐色	シルト	暗褐色砂質土に夾まれたブロックを含む（根方）

第81図 4号礎石建物跡 級石跡

固め径は0.4m程度である。根固めは径1~12cm程度の円錐を使用している。掘り方埋土は黄褐色ブロック上と暗褐色砂質土を主体とし、固く締まっている。

礎石跡7

建物南辺列の礎石跡で、他遺構との重複関係は無い。形状は不整円形で、掘り方径は0.46m、根固め径は0.3m程度である。根固めは径3~8cm程度の円錐を使用しており、径6cm前後のものが多い。掘り方埋土は黄褐色ブロック土と暗褐色砂質土を主体とし、固く締まっている。

礎石跡8

建物西南角の礎石跡で、小溝群2~14より古い。形状は不整円形で、掘り方径は0.48mで、掘り方中央部に径1~6cm程度の根固石とみられる小振りな円錐が10点ほど散在している。掘り方埋土は黄褐色ブロック土と暗褐色砂質土を主体とし、固く締まっている。

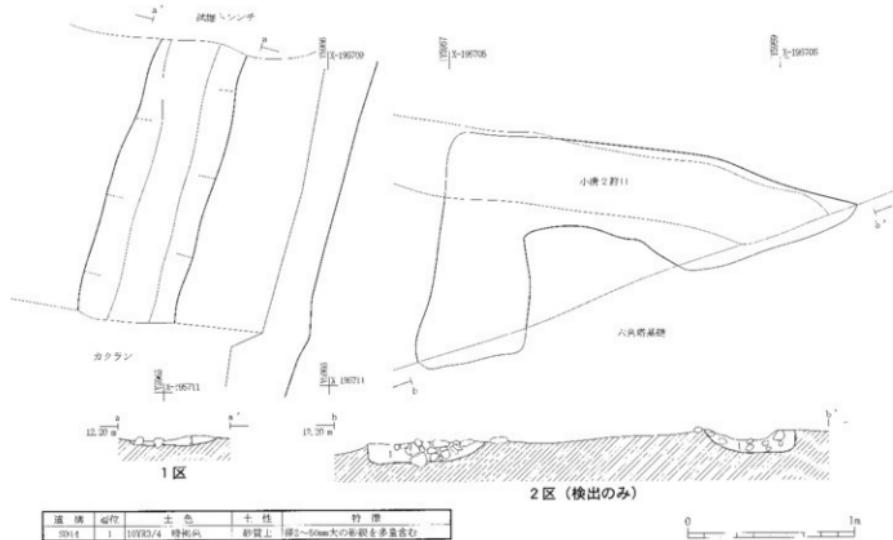
礎石跡9

建物西辺列の礎石跡で、六角塔基礎により上部が失われているため形状は不整円形で、掘り方径は東西0.3m、南北0.35mである。内部には径10cm程度の円錐が3石確認されるのみである。掘り方埋土は暗褐色ブロック土と褐色土がリング状の互層となっている。

【溝跡】掘り込みはSD14の東辺北側で行い、断面調査は北西側で行なった。

14号溝跡

建物周囲に巡っており、掘り方は認められず、溝幅は東辺で0.5~0.6mなのに対し、僅かにみられる南辺部分では0.9mと差がある。深さは東辺で0.1m程と浅い。西辺および南辺については、殆どの部分が削平により失われていると考えられる反面、この部分の溝は北辺や東辺に比べ建物と近接しており、何かしらの構造により当初から無かったと考えることもできる。東辺において掘り込み調査を行なった結果、溝内には径5cm程度の円錐が多く含まれていたが、底面に敷かれたものと判断するには至らなかった。また底面に割石による敷石はみられない。



第82図 14号溝跡

(2) 溝 跡

13号溝跡

S B 1 の北側に位置し、南北に延びる溝状造構である。北辺溝である S D 5 と接続関係は無いとみられる。確認長は3.5mである。南側において掘り込みを行ったが、底面は鉢鉢状に緩やかに立ち上がり、幅0.4m、深さ0.15mの浅いものであった。堆積土は2層に分層され、上面には瓦片を含んでいたが下層は褐色土を主体とした人為堆積である。底面にピットなどは確認できないが、塙などの簡易な遮蔽施設である可能性も考えられる。出土遺物は平瓦などが28点ある。

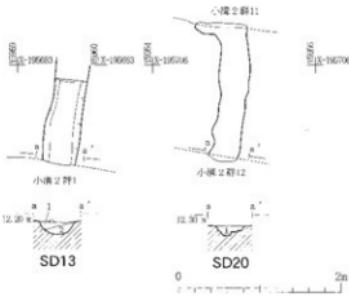
20号溝跡

Y31、X41~43グリッドで検出した南北の溝状造構で、小溝群2~10~12より古い。S B 1 と2の間で、S B 4 の西側に位置するが、擾乱により南側が失われている。平面形は東側に僅かに弧を描いており、確認長は5.5m、幅0.4m、主軸方向はN~11° -Eで周辺建物と接している。掘り込みは行っていないが、中央部の擾乱で断面を確認したところ、深さは20cm程で底面には起伏があり、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は単一層でプロック土を含み、人為的堆積とみられる。底面にピット状プランは確認できなかったが、小溝状造構とは方向や堆積土が異なり、単独で存在することから、西側に位置するS A 1 と直行して配置された塙などの遮蔽施設の可能性が考えられる。S B 4 西辺との距離は2.7m(9尺)で、S A 1 東端のピットと溝中心の距離は0.9m(3尺)程度あり、周辺施設との配置を考慮して造られている。出土遺物は丸瓦がある。

(3) 塙 跡

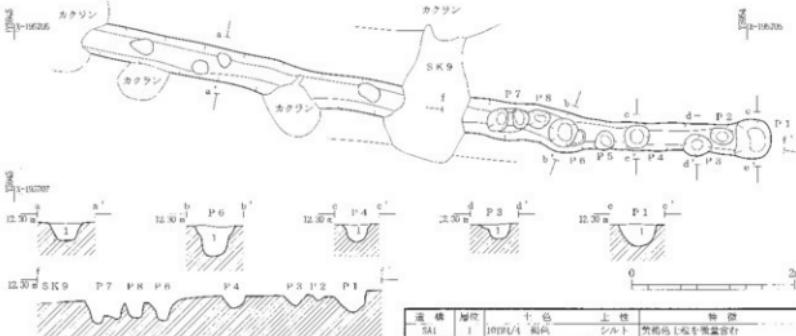
1号塙跡

Y30~31、X42グリッドで検出した東西の溝状造構で、S B 1 と3の間に位置する。擾乱により西側が失われているが、S D 8 より西側へは延びていない。S D 20 同様に平面形は緩やかに南に弧を描いており、確認長は8.5m、幅0.4m、溝部分底面までの深さは0.2mである。当初は小溝群2の一郎ともみられたが、溝底面で12基のピットが一列に並んでいるのを確認したことから塙跡などの遮蔽施設と判断した。東半部分のピットは掘り込みを行い、



第83図 13・20号溝跡

番 号	断面	土 色	上 性	特 徴
SD13	1	10YR6/6 暗色	シルト	黄褐色(灰土)を少含む
SD20	2	10YR6/4 暗色	シルト	-
	3	10YR6/6 暗色	シルト	炭化物を微量含む

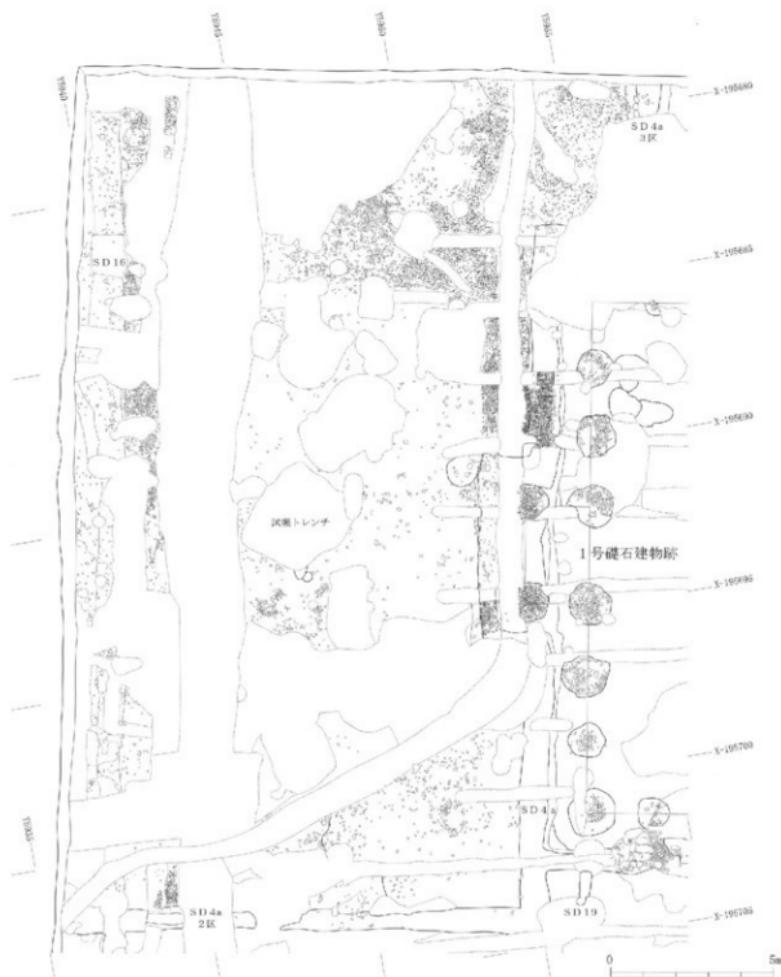


第84図 1号塙跡

西半部分のピットは検出に止まっている。ピットの径は0.3~0.5mで、深さ0.2~0.4m程とやや規模にはらつきがある。東端部にあるピットは径0.45m、深さ0.3mと他のものに比べやや大きい。ピット間の距離はP 3~4の0.7m以外は0.4m前後で、溝底面からの深さは20cm程度である。ピット中に柱痕跡は確認できなかった。位置からみて北側の石敷き造構側からS B 2・3側への見通しを遮断すると共に、これらの建物とS B 1を仕切るための施設と考えられる。

(4) 石敷造構

1号石敷遺構



第85図 1号石敷遺構 全体

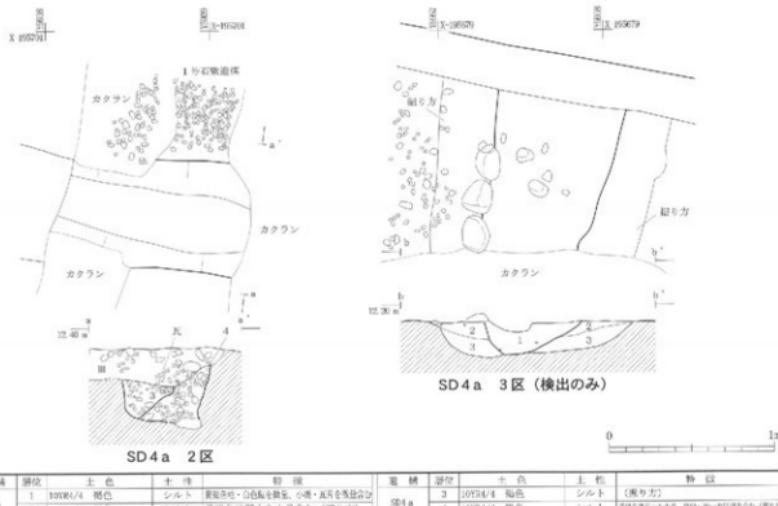


第86図 1号石敷造構 北東部分

S B 1 の西側全体に位置し、北側および西側は調査区外に広がっている。確認した範囲では南北25.5m以上、東西14m以上で、北東部で東側に3m程張出している。確認面積は約360m²である。耕作に伴う石敷円礫の散乱はⅢ層検出段階より認められ、当初はⅢ層面で確認すべき遺構として取り扱った。しかしⅢ層と混在する礫を除去していくと、部分的に石を敷いた状況が確認されると共に、周辺のⅣ層面で小溝状遺構群が確認されたことで、石敷きはⅢ層に覆われ、Ⅳ層面で確認すべき遺構であることが判明した。石敷上面には東端を中心に小溝群2が数条確認でき、耕作範囲は明らかでないが、石敷以外のⅣ層整地上のみならず、耕作が石敷上部にまで及んでいることがわかった。したがって本来あった石敷上部で耕作を始める際には、多くの客土が必要になったとみられる。調査では耕作により原位置を保っていないと判断した円礫を全て除去せず、遺構保存の観点から、ある程度礫の密度が高くなつた時点で除去作業を止めている。

石敷は後世、多くの搅乱を受けると共に、耕作が深く及ぶ場所では礫自体が残存せず、下部の整地上が露出する状況にあったが、北東・南東・北西部の一部において、礫が密に敷かれた残存状況を確認することができた。石敷は径3cm程の小円礫を敷き詰めており、最も残存が良好な北西部では厚さ10cm程で敷かれている。場所によっては、石敷の下部に径5cm程の円礫が敷かれる場所もあり、石敷の上下で礫の大きさを変えた構造であったことがわかる。また調査区西壁での観察では、石敷下の整地層の一部では、粘質土と砂質土を交互に敷くことにより版築状となつていて。この重層構造は建物下部や建物間などの場所においては一切確認しておらず、局部的な構造である可能性もあるが、何を意図して造成されたか不明である。この地区では擾乱と円礫の散乱のため、石敷上での別遺構の確認は無かつたが、基礎地盤を入念に行なう必要のある何かしらの施設が存在していた可能性も否定できない。

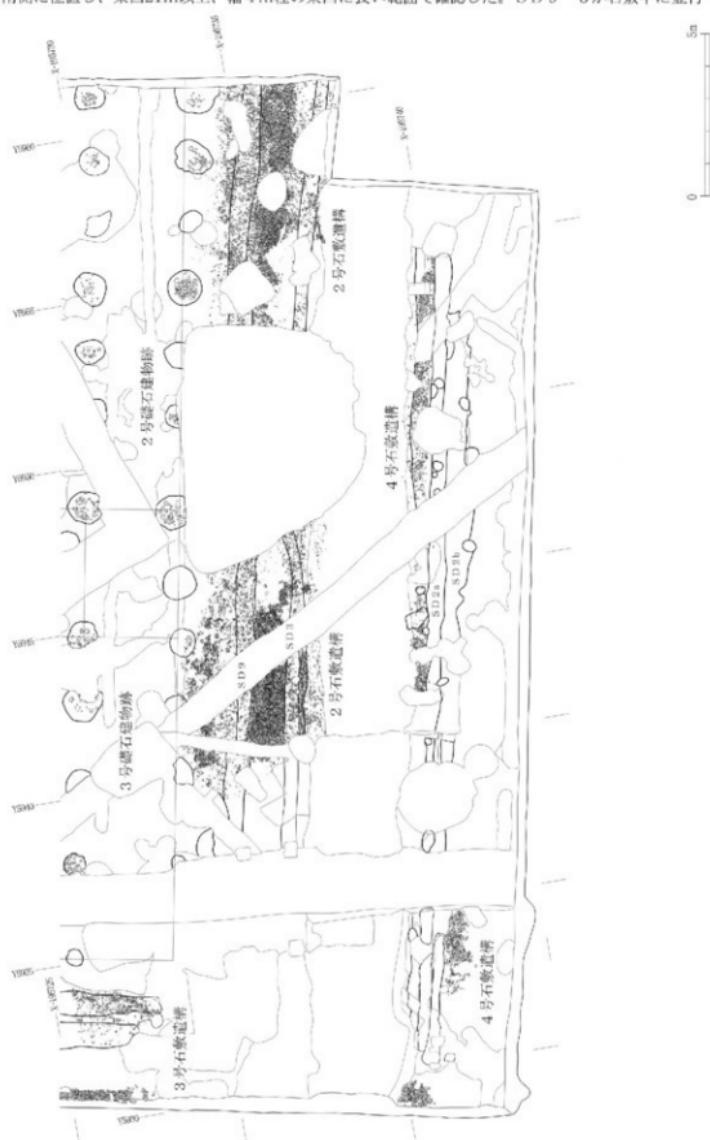
出土遺物は殆どが検出に伴うⅢ層中のものであるが、軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、樊斗瓦、輪違い、面戸瓦、隅切瓦などの瓦片830点の他、一部残した表土や搅乱土から棟瓦や煉瓦など近代の遺物がある。



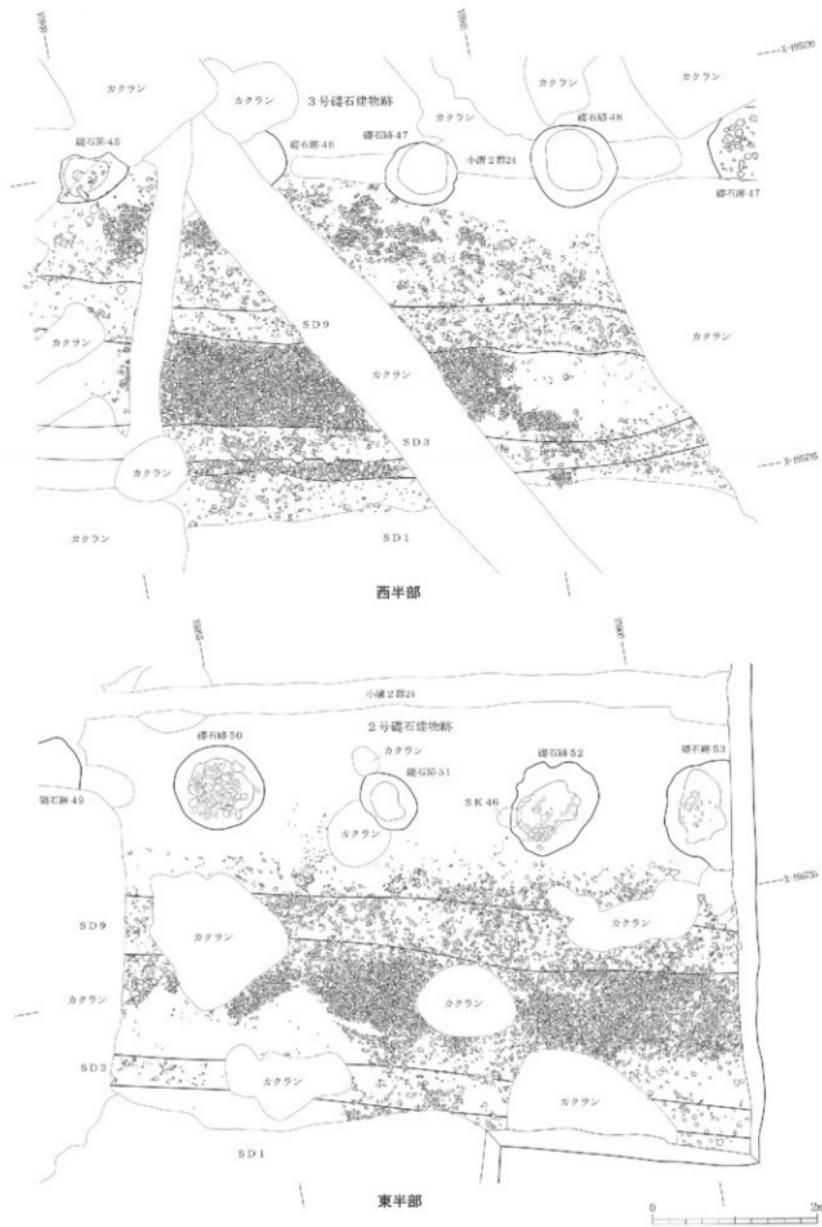
第87図 1号石敷遺構 側溝

2号石敷遺構

S B 2と3の南側に位置し、東西21m以上、幅4m程の東西に長い範囲で確認した。SD 9・3が石敷中に並行



第88図 2・4号石敷遺構



第89図 2号石敷造構

して走っているが、SD 3はSD 1に付属する跡と判断され、石敷を壊して構築している。礫はこれらの溝に挟まれた幅1.5m程の範囲に特に密集し、さらに南側に展開しており、SD 1を挟んだ南側の4号石敷造構とは一連の施設とみられる。石敷は建物の南辺溝であるSD 9より北側にある建物南辺の礫石跡列際まで延びているが、礫の在り方はSD 9の南側とは異なりまばらであるが、礫石跡掘り方までを被覆していた可能性もあり、これが耕作によるものかあるいは建物際での敷き方の違いを判断するのは難しい。SB 3側の南端をみると、石敷はSD 1bの掘り方により壊されており、このラインとSD 3との間の狭い範囲にも破壊を免れ残存した礫が密集する部分が認められる。石敷は大型の擾乱により東西に分断され、東側は調査区外に延び、西側は擾乱により失われているが、西側は3号石敷造構と連続する一連の施設となり、東側においてもSB 2建物に沿ってさらに東側へ広がるとみられることから、かなり広範囲にわたる石敷施設といえる。

礫は整地層上に直接敷かれており、1号石敷造構とは異なり、礫層の厚みは少なく、小型の円礫ではなく、径5cm程のやや偏平な円礫を密に貼る敷き方が確認できる。このことから、同じ石敷造構でも敷く礫の大きさや形状や敷く厚さも違えた構造であることがわかった。この地区においては石敷面上部に客土ともみられるVI層類似の黄褐色土が広範囲に被覆していた。耕作は主にこの層を搅拌することによりⅢ層が形成されることで石敷までは及ばなかったと推定され、構築時の姿を良好に残している可能性が高いといえる。

出土遺物は殆どが縦検出に伴うⅢ層の中のものとみられるが、平瓦、熨斗瓦、輪違などの瓦片28点がある。

3号石敷造構

SB 3の西側に位置し、南北19m以上、東西4m以上の南北に長い範囲で確認した。SD 10・11が石敷中に並行して走っているが、SD 11は石敷を壊して構築された廃城後の溝とみられ、層中には流入した礫が多数みられる。石敷はこれらの溝に挟まれた幅30~50cm程の狭い範囲とSD 10東側のSB 3寄りに密集しているが、この他にも調査区西壁際には極めて良好に残存している。北端と南端は大規模な擾乱で失われており、1号石敷造構との関係は不明であるが、おそらくはSD 4を境にこれと接していたものと考えられる。またSB 3北側の建物外には敷かれてなかったとみられる。

石敷が良好に残存する北半部は2号同様に径5cm程のやや偏平な円礫を直接整地層上に敷いており、ここもまた耕作により搅拌を免れた地区と考えられる。これに対し西壁際で確認した石敷は全体に厚く、礫の大きさにより明らかに上下2面に分けられ、間には黄褐色の砂質土層を挟んでいる。下半部にやや大きめで偏平気味の礫が使用される状況は3号石敷の他の場所や2号石敷に共通するが、上部に小型の礫を敷くことで明らかに別構造をもった石敷といえる。この特徴から、1号石敷造構もまた、この西壁際にみられる状況と同様の構造であった可能性がある。

出土遺物は殆どが縦検出に伴うⅢ層中のものであるが、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違などの瓦片21点がある。

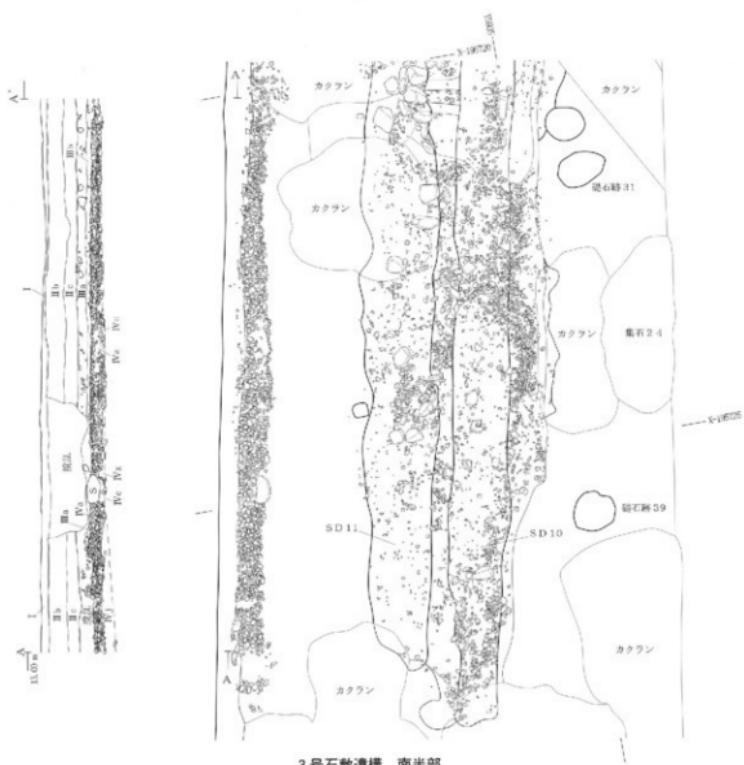
4号石敷造構

SB 3の南西側で確認し、擾乱などにより分断されるが、東側の2号石敷造構や北側の3号石敷造構とつながる一連の施設とみられる。径5cm程の円礫を直接整地層上に敷いており、北側の調査区西壁際で確認した状況とは異なる。

5号石敷造構

Y33、X42グリッドで検出し、SB 1とSB 4の間に位置する。東西2m、南北4mの範囲で確認し、南側はSB 4の北側柱列跡から北側はSB 1南辺溝のSD 6際まで敷かれている。他の石敷造構とは異なり径1~3cm程の小円礫をパラス状に敷いた上に、径5~8cmの円礫を無難作に敷いたものだが、耕作による搅拌も受けているものとみられる。擾乱断面から、SD 14の堆積土上に載っており、石敷はSD 14を跨ぐ形で敷かれた通路の可能性がある。

面的な広がりを持つ石敷造構以外に、建物間を結ぶこのような造構は他には確認していない。



3号石敷造構 南半部



第90図 3・4号石敷造構

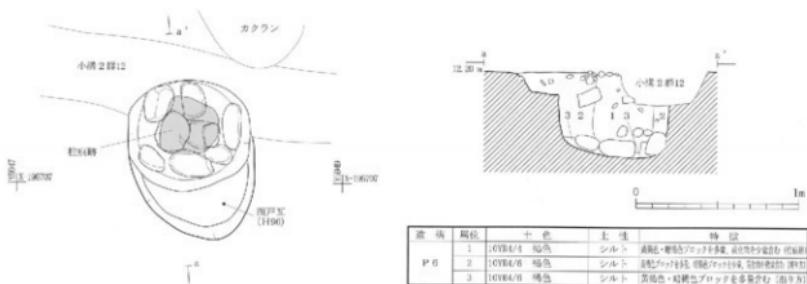
出土遺物は殆どが検出に伴うⅢ層中のものであるが、丸瓦、平瓦、熨斗瓦などの瓦片52点、土師器2点、鉄製品6点がある。

(5) ピット

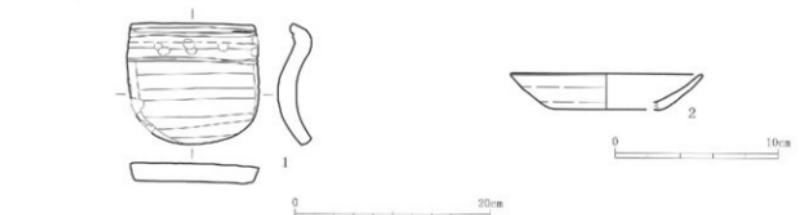
P 6

Y30、X42グリッドで検出し、S B 3北辺溝の外側に位置する。小溝群2-12より古い。形状は不整梢円形で、南北の径は1mあるが、南側は深さ14cm程で1段浅くなっている、北側は径0.7m、深さ0.5m程の比較的整った円形となる。底面はやや傾斜をもつが平坦で壁は直立する。確認段階ではわからなかったが、断面観察で柱痕跡を確認した。底面には径18~28cmのやや大きな円礫を8石敷き並べており、そのほぼ中央に1辺30cm程の不整形の柱痕跡を確認している。当初は北側にあるS A 1層の控柱の可能性も考えたが、壙本体の構造に比して構造が立派であり、1基のみの確認であることから、S B 3に関連し、単独で機能した施設の可能性もある。

出土遺物は丸瓦、平瓦、面戸瓦などの瓦片6点、土師質土器皿2点、鉄製品1点がある。H96は面戸瓦で、基部に引掛け部分を持つ蟹面戸に近い形状をしている。X14は土師質土器皿である。



第91図 P 6



試査番号	登録番号	種類	遺構・層位	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重さ(kg)	備考	分類	写真図版
1	EDG	面戸瓦	P6	12.4	3.4	1.9	3.5	6.42 凸面:ナザ・凹面:ナザ 底部:凹み状の沈没あり	3	図6
2	X14	土師質土器	皿	P6	(11.6)	(6.7)	2.2	在庫 17C初め ロクロ調査	10-18	写真図版

第92図 P 6 出土遺物

2 その他の遺構

(1) 小溝状遺構群

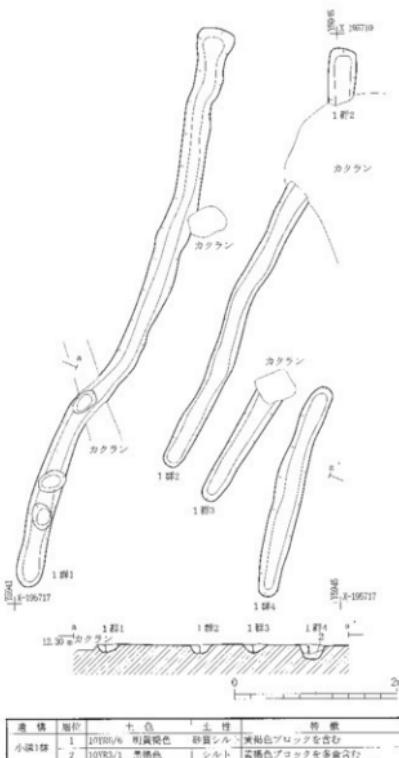
Ⅲ層を除去しⅣ層上面で遺構検出を行ったところ、SD 1以北の調査区ほぼ全域で畠底面の耕作痕跡である小溝状遺構群を多数検出した。Ⅲ層上面においては歟跡などの畠表面の遺構を検出することはできなかったが、小溝状遺構群の存在が確認されたことで、Ⅲ層の形成要因が畠耕作によるものであることが明らかとなつた。小溝状遺構群は2群あり、南北方向に走る1群と東西方向に走る2群とに大別されるが、重複関係からみて1群の方が新しい。

小溝状遺構群1群

調査区は中央のY29・30、X43・44グリッドに位置する。小溝状遺構群2群、SK34より新しい。南北方向に平行に延びる4条の小溝から構成されるが直線ではなく、緩やかに湾曲しており、溝の南及び北側端部は不規則である。長さは1号が7.3mと長く、3号が境況により北側が失われているものの、1.8m程と短く、長さには差がある。上幅は0.3~0.4m、深さ0.1~0.2m前後で、主軸方向はN-28°-E前後である。各溝の間隔は1~2号間が1.15m、2~3号間が0.55m、3~4号間が0.7m前後とやや不規則である。1号の底面ではピット状の浅い落ち込みが3か所で確認されており、4号は他のものに比べ掘り込みがやや深い傾向にある。堆積土は1~3号がⅥ層起因と考えられる黄褐色シルトの單一層で、4号のみブロック土の含有の違いで2層に分層した。出土遺物は1号より瓦片が1点ある。

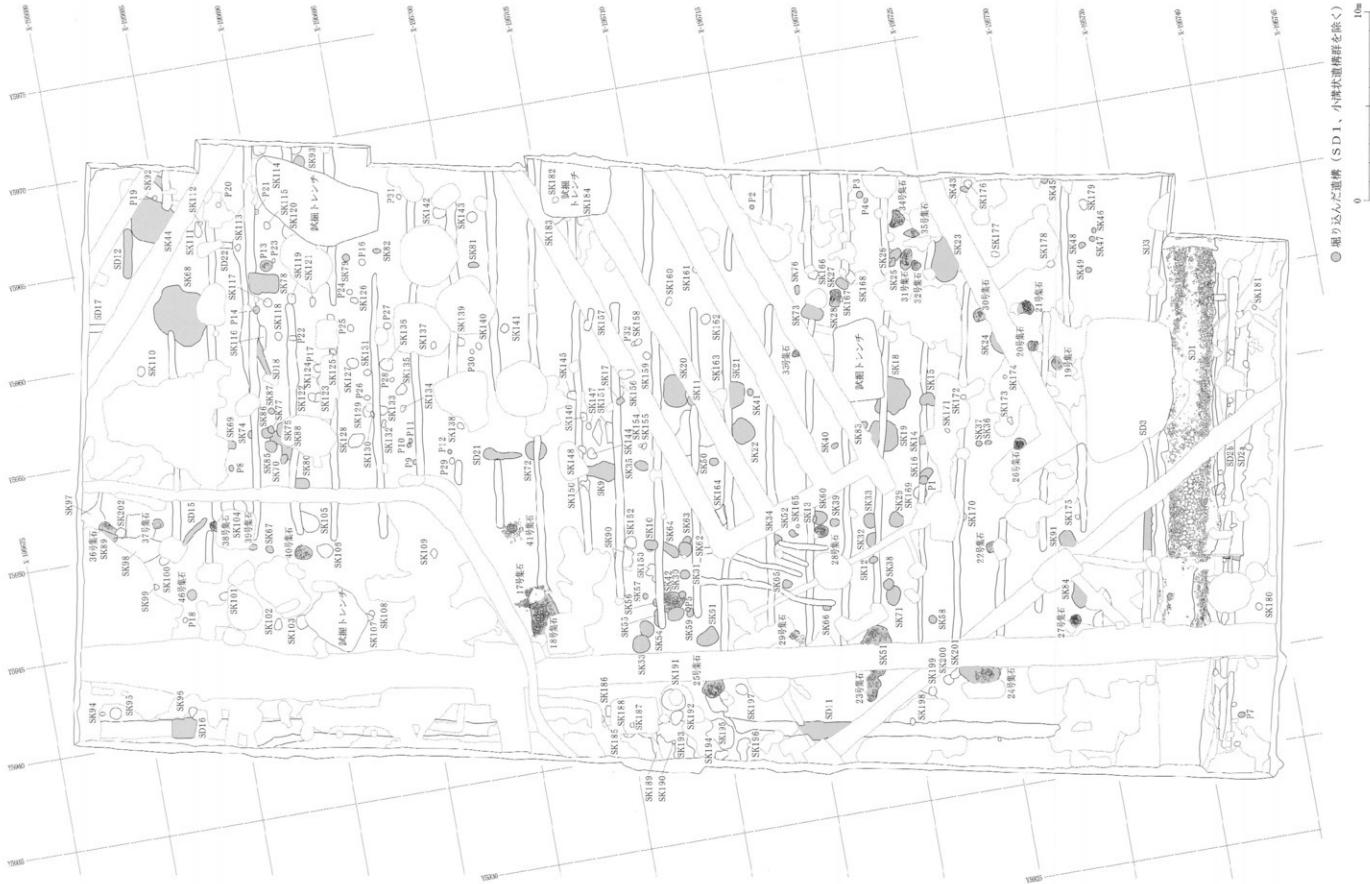
小溝状遺構群2群

SD 1以北の調査区ほぼ全域にわたり東西方向に検出した。若林城の遺構やⅣ層上面検出の一部の土坑・ピットなどより新しく、小溝群1群、SK10・14・15・16、P1などより古い。小溝は全部で24条確認されており、最大長は15m以上、上幅0.4m~0.5m、深さ0.1m前後で、主軸方向はN-80°-W前後で、各溝の間隔は0.7~1mである。東端は調査区外に延びているため範囲は不明確であるが、西端は調査区内で途切れる。また1~9号については1号石敷遺構上にのっているが、10~24号はSB3の西辺溝跡であるSD10や3号石敷遺構上にまでは及んでいない。この理由としては、畠の耕作範囲の端を示していると共に、残存の程度に起因している可能性もあるが詳細は不明である。なお3号が一部幅の広がる部分があるが、これは同溝内の重複の可能性が考えられる。全体での堆積土は2層に大別されるが、整地層の影響を受けて色調が異なるためさらに6層に細分される。上層はⅢ層に類似する比較的緻密な暗褐色土であり、下層はⅣ層起因の黄褐色ブロック土である。石敷遺構上においては上層に円錐を多量に含んでいる。出土遺物は瓦片や若干の陶磁器片があり、



第93図 小溝状遺構群1群

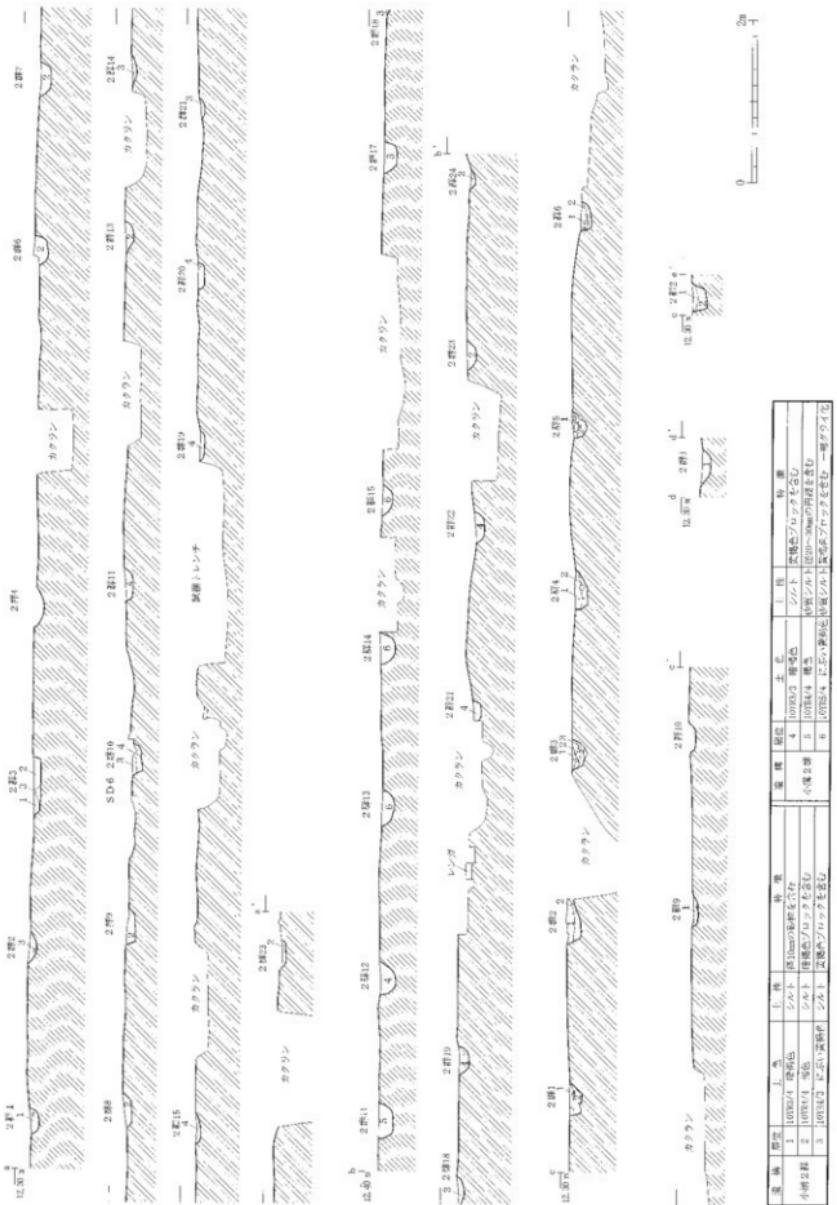
地 備	面積	土 性	特 性	施 繾
小溝1群	1 [0]100/6 例) 黄褐色	砂質シルト	黄褐色ブロックを含む	シルト
	2 [0]93/1 黑褐色			黄褐色ブロックを多量含む



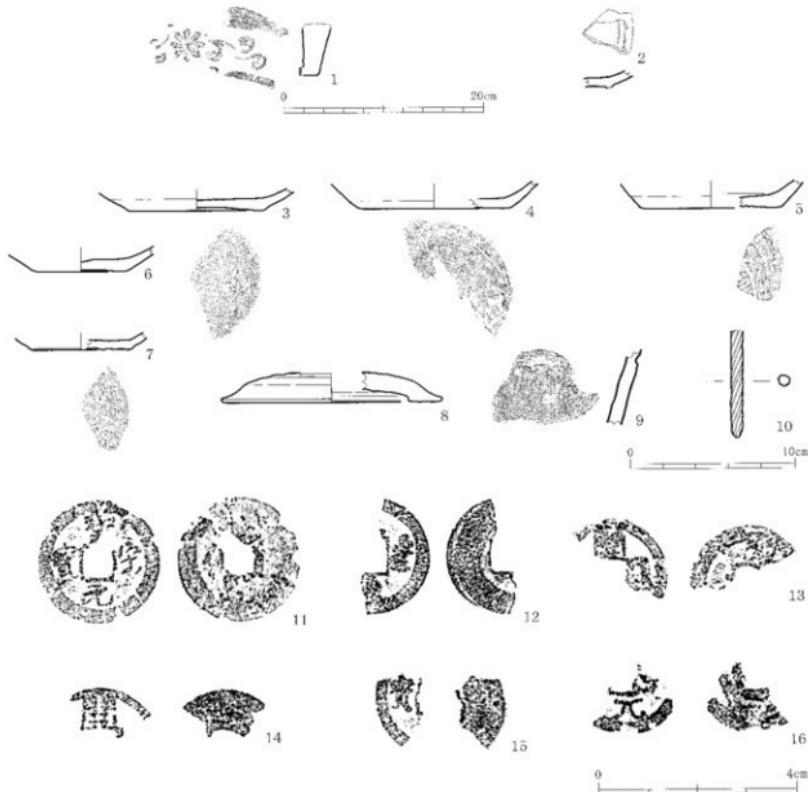
第94図 IV橋構構配図(若林城崩落橋を除く)

第95図 小溝状通構群1・2群





第96図 小溝状遺構群2群



遺物番号	登録番号	種類	遺構・層位	文様	長さ(cm)	幅 高さ 厚さ 内径 外径	重さ(kg)	備考	分類	等級
1	06	(小切瓦 小切2和11)	素面火焔草文	-	-	-	0.20	記入瓦	2A	48.7
2	118	漆器	直	直	小切3.014	1.05 (6.2)	0.20	漆器 17℃耐半腐耐		等級未定
3	327	土器	直	直	小切2.2斜10	-	0.20	17℃耐半腐耐 17℃耐 ロクロ調理、底脚系切りナガ		59.4
4	324	土器	直	直	小切2.2斜5	-	0.09	17℃耐 ロクロ調理、底脚系切り		59.11
5	325	土器	直	直	小切2.2斜2	-	0.09	17℃耐 ロクロ調理、底脚系切りナガ		59.7
6	326	土器	直	直	小切2.2斜2	-	0.22	17℃耐 ロクロ調理、底脚系切りナガ		60.8
7	226	土器	直	直	小切2.2斜6	-	0.09	17℃耐 ロクロ調理、底脚系切り、底脚内側に鋸付箋		60.9
8	16	漆器	直	直	小切2.2斜3 (6.7)	-	-	内面: ロクロ調理、可成ヘラケズリ、内蓋: ロクロ調理		60.27
9	31	漆器	直	直	白背景物 小切3.013	-	-	内: 銀ハラ、内: ナガ		61.2
10	158	ガラス島	直	直	小切2.2斜3	0.7 0.7	0.7 0.7	球状		等級未定
11	85	鏡裏山	直	直	小切2.2斜3	2.5	-	0.1 3	鏡宋系寶々、厚約0.6cm	62.3
12	92	漆器品	直	直	小切2.2斜3	-	-	2 3	漆器通寶?	62.3
13	86	漆器品	直	直	小切2.2斜3	-	-	3 1	鏡宋通寶?	62.4
14	84	漆器品	直	直	小切2.2斜3	-	-	1 1	漆器通寶?	62.6
15	57	漆器品	直	直	小切2.2斜3	-	-	3 不則	-	62.7
16	53	漆器品	直	直	小切2.2斜3	-	-	1 不明	-	62.7

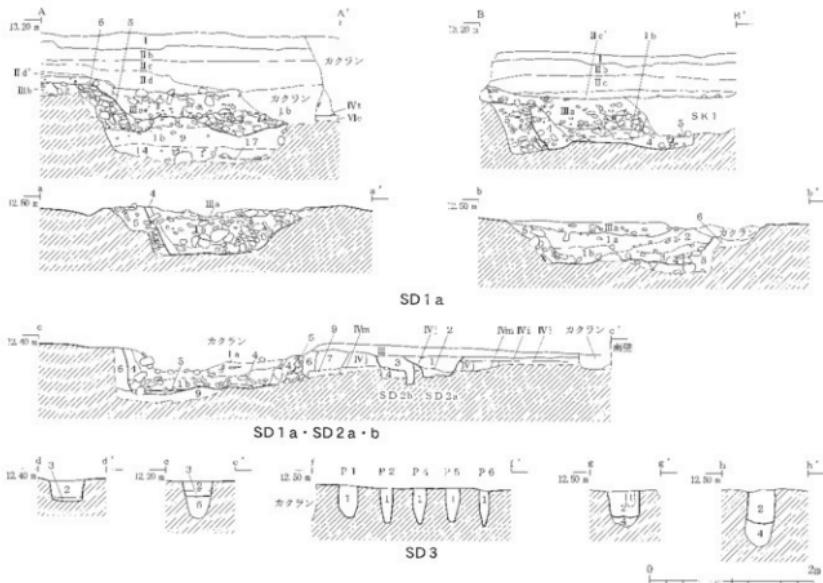
第97図 小溝状遺構群2群出土遺物

他には3号からはガラス製簪が1点、聖宋元寶1枚・元豐通寶1枚・開元通寶2枚・不明錢2枚がある。

(2) 溝 跡

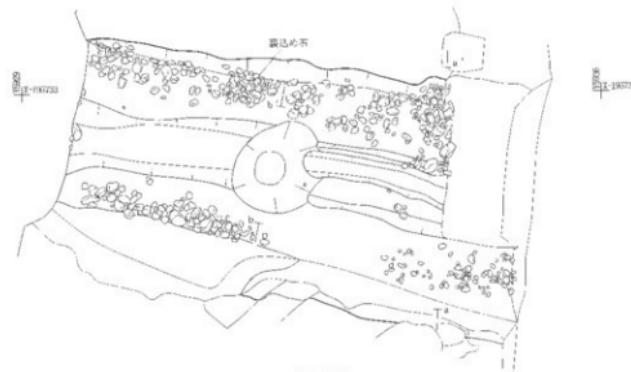
1a・1b号溝跡

調査区南側のY26~32・X47~48グリッドで検出した石組溝跡で、2・3号石敷造構を切るように構築される。Ⅲ層上面で近代の遺物を含むプランが確認されたため掘り込んだところ、新旧2時期にわたる石組溝を確認し、新しいものをSD 1a、古いものをSD 1bとした。溝跡は東西の調査区外にも延びており、確認長は30mである。SD 1aは掘り方幅2.4m、深さ0.6m程で、溝底面に径40cm程の円礫を3列程度敷き並べ、石敷としている。石敷の礫が失われた溝東側においては抜き取り痕跡多数が確認された。底面石敷の両側には大部分は崩落しているが、拳大程度の円礫が一部積み上げられた状況が確認でき、溝跡は本来、石組の壁を持ち、円礫は裏込めとして充填されたものと考えられる。底面石敷と礫との間には幅0.2m程の溝状の落ち込みがあり、この部分に数段組程度の石組が構築されていたと考えられる。残念ながら全ての石組は抜き取られているものの、推定される溝の開口部幅は0.8m程度であったものと考えられる。堆積上は5層に分層され、最上層には流入したⅣ層が堆積しており、その上部の僅かな底みからは近代の遺物が出土している。層中には崩落した裏込め礫や瓦片などが多く含まれている。



生 漕	層位	土 性	特 性	生 漕	層位	土 性	特 性
SD 1a	1a 10YR2/3 黄褐色	シルト	灰色シルト、10cm程の斜面接続物 壁27cm	SD 2a	1 10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質土	黄褐色～棕褐色の塊物を含む
	1b 10YR4/2 12.24-褐色	シルト	10cm厚厚壁するが裏込めない		2 10YR4/1 黄色	シルト	黄褐色シルトブロックを含む、黒色ブロックを含む
	2 7.5YR2/2 黄褐色	シルト	黄褐色ブロック、小内側を含む		3 10YR4/0 にぶい黄褐色	砂質土	黒色ブロックを含む
	3 10YR3/3 増内色	シルト	黄褐色、小内側を含む		4 10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	黄褐色、黒色ブロック、グレイ化の混合土
	4 10YR2/3 高黄色	シルト	後10-20cm付近に多量瓦片(瓦)、瓦片混入		5 10YR4/5 黄褐色	シルト	灰褐色厚土壁、青褐色ブロックを含む、瓦片混入
	5 10YR1/4 黄色	シルト	黄褐色、素面シルト地盤、瓦片混入(高黄色)		6 10YR4/6 黄色	シルト	黄褐色シルトブロックを含む
	6 10YR4/6 黄色	シルト	裏込めブロックを含む(掘り方)		7 10YR4/6 黄色	シルト	厚壁化土壁、青褐色シルト、瓦片混入(高黄色)
	7 10YR4/7 黄色	シルト	裏込めブロックを含む(掘り方)		8 10YR5/3 黄褐色	シルト	厚壁化シルトブロックを含む(掘り方)
	9 10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	黄褐色ブロックを含む(SD 1a 墓床下)		9 10YR5/3 黄褐色	シルト	厚壁化シルト、瓦片混入(掘り方)

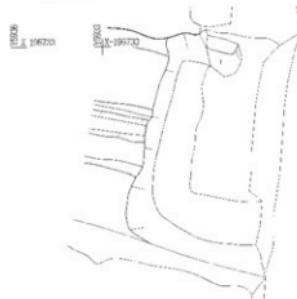
第98図 1a・2・3号溝跡 (1)



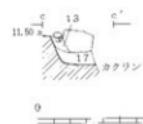
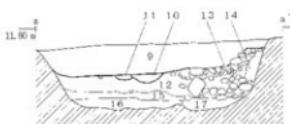
底面状況



底面落込み石組状況



底面落込み石組掘り方状況



11.60m 11.50m 2m

系 種	層位	上 部		特 様		底 様	層位	土 士		生 生		特 様
		上	下	種	特			上	下	種	特	
SD1b	10 10TB4/1	褐色	シルト	黄褐色ブロックを含む		11	7.078/3	砂	シルト	黄褐色シルト混・褐色土層を2cm(奥引)		
	11 10TB4/4	に赤い黄褐色	シルト	黄褐色ブロックを含む	グリ化	12	10TB5/1	赤い黄褐色	粘土質	変性粘土を含む(盛り方)		
	12 7.5TB5/2	黒褐色	シルト	黄褐色ブロック穴付	(盛り方)	13	2.0TB1/1	灰白色	粘土質	褐色・墨色アラカキ合み(盛り方)		
	13 10TB4/4	褐色	シルト	ワタガラシ付・褐色・無機物付	付(盛り方)	14	10TB4/4	褐色	シルト	褐色アラカキ付・褐色・無機物付	グリ化(盛り)	

第99図 1b号溝跡

SD 1bは1aの直下にはば位置と同じくして確認され、掘り方幅3.2m、深さ0.9m程で、SD 1aへの改修に際し、黄褐色ブロック上で埋め戻している。溝跡西端を掘り込んだところ、堆積土を除去すると径3~30cm程の円礫の裏込め礫が僅かながら認められることから、1b溝は上部同様に石組であったものと推定される。裏込め礫から推定される石組構造の開口部幅は1m前後とみられる。また礫は小礫のみが残されているような状況であり、SD 1aを構築する際には礫を選別して再利用している可能性もある。底面にSD 1aでみられた円礫を用いた石散や抜き取り痕跡は確認できなかったが、幅0.3m程の浅い溝状プランクや土坑状の落ち込みが確認され、堆積土の状況から流水の痕跡も確認された。しかしこれらがSD 1bの構造の一部か、あるいは改修時の一時的な施設なのかは判断が



第100図 1a・2・3号溝跡 (2)

つかない。また裏込め礫を除去したところ、東側の一部において深さ0.4m程の掘り込みプランが確認された。ほとんどが搅乱により失われていたが、中には径5~30cm程の円礫が密に詰め込まれており、径40cm程の安山岩質の割石もみられた。掘り込みの幅はSD 1bの掘り方とほぼ同じ2.6m程で、長さは6m程あると推定され、この部分の下層にはかつて石組を用いた何らかの構造体が存在したものと思われる。

なおSD 1を挟むように北側にはSD 3、南側にはSD 2が存在し、これらが隙跡となりSD 1に伴う可能性が強いことが明らかになっているが、新旧どちらの溝跡に伴う施設であるかは不明である。出土遺物は堆積土中より丸瓦、軒平瓦、平瓦、製斗瓦、輪造い、面戸瓦、角丸瓦などが575点、鉄製品6点があり、うち瓦19点、鉄製品4点を図示し、その他には繩文土器、古代とみられる瓦の各1点を図示した。また、検出面での凹地に近代の盛土層が堆積しており、ここからは棧瓦が21点出土している。F19~24は丸瓦で、全て玉縁が付くものである。全体形がわかるF24の長さは30.1cmである。G1は滴水瓦の瓦当面で、中心飾りは花菱文である。G207は谷唐草（左）で谷側に垂れが付き、凹面は面取りがされている。H1~3は熨斗瓦で、H1は焼成前に分割線を入れ、焼成後に分割されたもので、分割前の半瓦形状がわかる接合資料である。H2・3もまた焼成後分割である。H29~34は輪違いで、H30・33・34は尻部が直線的に窄まる形状で、H29・31・32は丸く窄まる形状である。H107は菊丸瓦である。G163は四面に布目がみられる。A1は繩文の深鉢であるが、付近に当該期の遺構や包含層の存在は確認されず、周辺からの流入によるものとみられる。N16~19は鉄製品で、N16~18は釘、N19は楔状のものとみられる。

2a号溝跡・2b号溝跡

Y28~33、X47~48グリッドで検出し、SD 1の南側にはば並行して存在する。4号石敷遺構を切るように構築されるが、新旧2時期に大別でき、新しいものをSD 2a、古いものをSD 2bとした。SD 2aはSD 2bの南側で完全に重複するわけではなく、SD 2bの南側立ち上がりと重複するように並走している。いずれも西側は搅乱により先端部が失われているが、搅乱より西に延びる様子はなく、東側についてもSD 2bは搅乱により不明確なもの、SD 2aは調査区外に延びる様子はみられない。のことからSD 2aは確認長が23.5m、幅0.3~0.4m、深さ0.4~0.7m程の溝跡とみられる。主軸方向はN-79°~Wである。SD 2bの北壁からSD 1aの掘り方南端までは0.8m、SD 1bの掘り方までは0.3~0.4mの位置にあり、SD 2bとSD 1との距離は2m前後、SD 3との距離は4m前後あり、それぞれが同時に規格性をもって構築されたことが窺える。

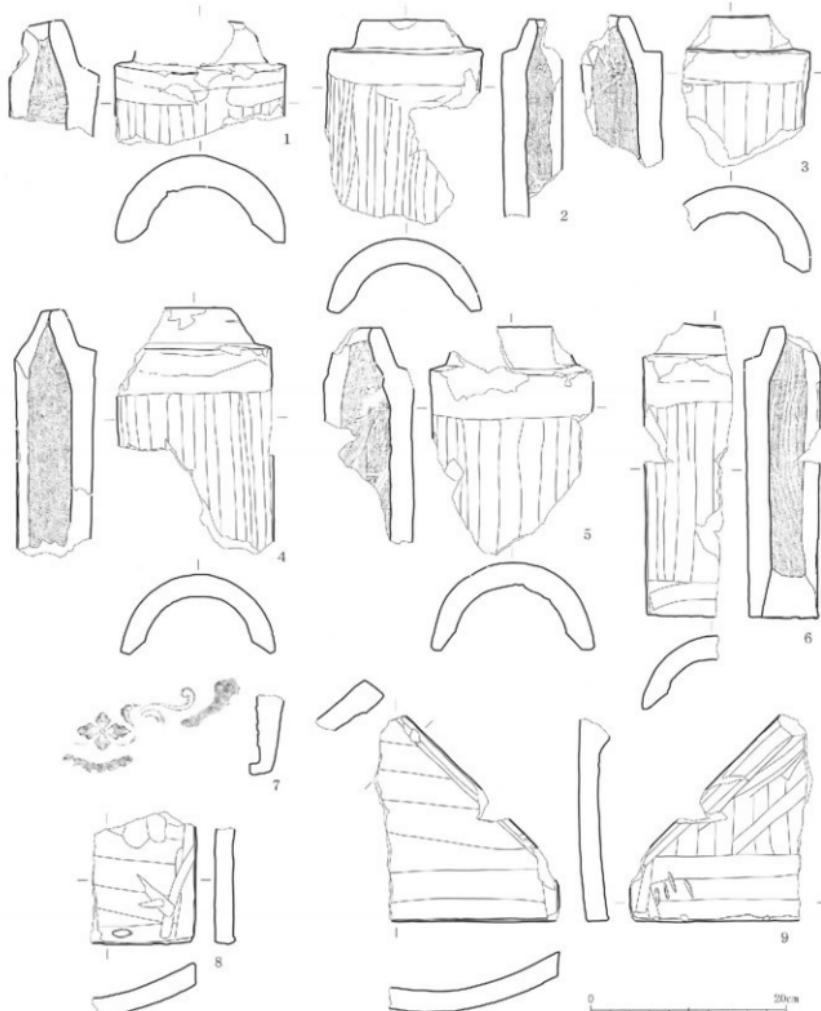
Y29、X48グリッドにおいて一部掘り込み調査を行ったところ、SD 2bの底面が数か所でピット状に落ち込み、木杭状の痕跡が確認され、また堆積土は黄褐色と黒色ブロック土の混合土で人為的に埋め戻していることがわかった。また検出面においてもピット状のプランが部分的に検出されたことから、SD 2は隙跡と考えられ、SD 3と対となりSD 1に伴った遺構と考えられる。

SD 2aの堆積土は2層に分層されたが、2bとは異なりブロック土をあまり含まず、掘り込み調査の範囲ではピット状の痕跡も検出されなかったため、人為的に抜き取られている可能性も考えられる。出土遺物は2aの1層より瀬戸美濃産陶器鉢（13）が1点ある。

3号溝跡

Y27~31、X48~49グリッドで検出し、SD 1の北側にはば並行して存在する。2号石敷遺構を切るように構築されており、西端は搅乱により不明であるが、調査区端まで延びる様子は無く、東端はSD 1に沿って調査区外まで延びるとみられる。以上のことからSD 3は確認長が23.5m、幅0.3~0.4m、深さ0.4~0.7m程で、主軸方向はN-79°~Wとみられる。SD 1aの掘り方からSD 3の北壁までは0.8m、SD 1bの掘り方からは0.2~0.5mの位置にある。SD 1とSD 3の距離は2m前後で、SD 2bとの距離は4m前後となり、それぞれが同時に規格性をもって構築されたことが窺える。

Y29、X47グリッドにおいて一部掘り込み調査を行ったところ、溝の南壁にかかり直線的に並んだピット6基を確

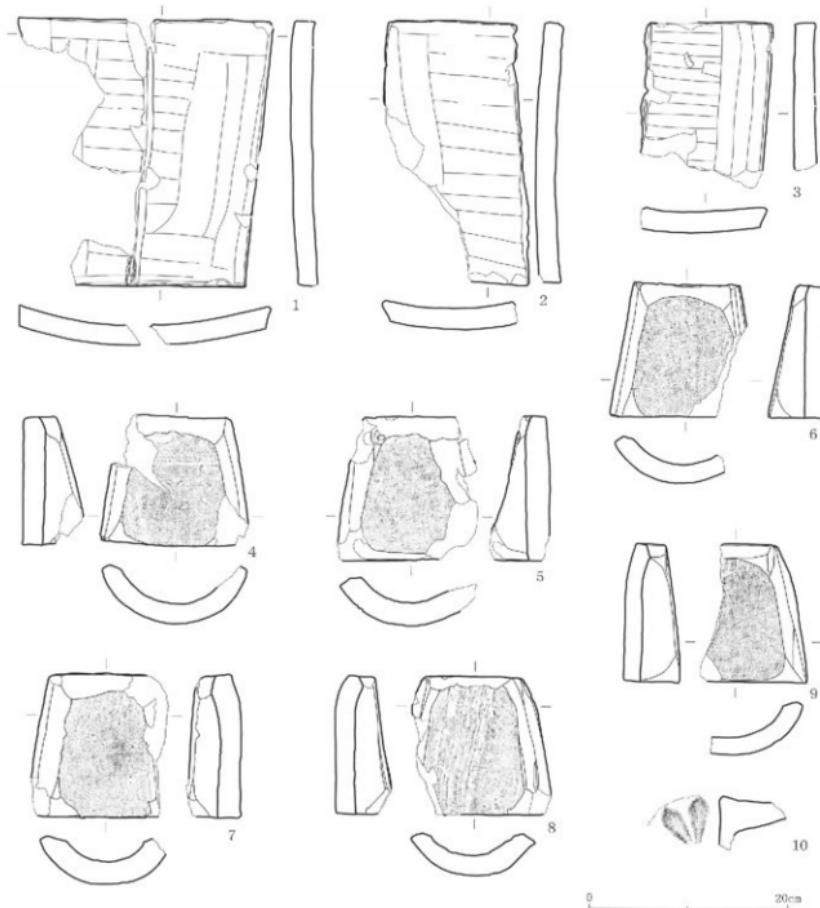


国版番号	登録番号	種類	遺物・部位	大きさ	厚さ	重さ(g)	重さ(kg)	備考	分類	参考文献
1	F19	丸瓦	SD1	-	17.9	6.6	6.30	0.82 西面：ナデ、西面：コビナ板、布付、隠三筋	1	48-8
2	F21	丸瓦	SD1	-	16.9	2.5	2.0	1.68 西面：ナデ、西面：コビナ板、布付	1	48-9
3	F22	丸瓦	SD1	-	2.7	6.8	-	0.73 西面：ナデ、西面：コビナ板、布付	1	48-10
4	F29	丸瓦	SD1	-	16.8	2.3	8.1	8.7 西面：ナデ、西面：コビナ板、布付	1	48-11
5	F23	丸瓦	SD1	-	16.8	2.3	9.0	4.4 西面：ナデ、西面：コビナ板、布付、隠三筋	1	48-12
6	F24	丸瓦	SD1	30.1	-	2.4	7.6	3.1 西面：ナデ、西面：コビナ板、布付	1	49-1

国版番号	登録番号	種類	遺物・部位	大きさ(cm)	厚さ	重さ(g)	重さ(kg)	備考	分類	参考文献
7	G1	軒瓦長	SE1	正參文・唐草文・子文	-	-	-	0.28 高木瓦	24	49-2

国版番号	登録番号	種類	遺物・部位	大きさ	厚さ	重さ(g)	重さ(kg)	備考	分類	参考文献
8	G33	平瓦	SD1	-	-	2.0	0.41 西面：ナデ、西面：ナデ	1	49-3	
9	G207	平瓦	SD1	-	-	0.89 高平瓦、西面：ナデ、隠筋、西面：ナデ	0.09 板脚面内所付に凸凹状のナギあり	3	49-4	

第101図 1号溝跡出土遺物（1）



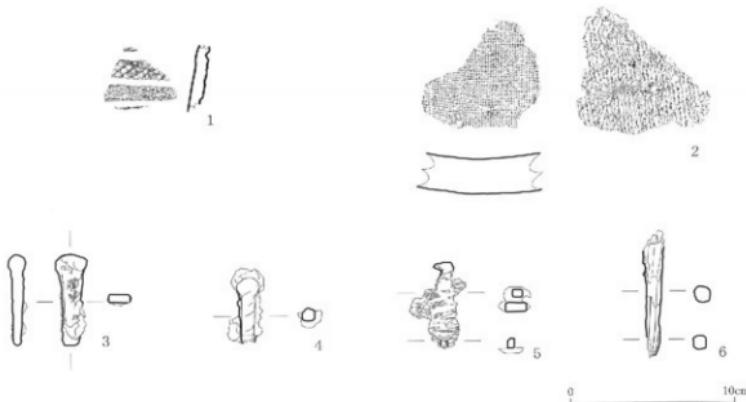
出発番号	整列番号	種類	造形・層位	量 (kg)			備考	分類	等級区分
				高さ	底面積	側面積			
1	91	脚付瓦	SD1	27.5	28.6	-	2.2	1.61	分断面で接着、凸面：ナデ、凹面：ナデ、両面：ナデ
2	92	脚付瓦	SD1	26.8	-	18.5	2.1	0.93	焼成前分離、凸面：ナデ、凹面：ナデ、両面：ナデ
3	93	脚付瓦	SD1	12.3	-	2.2	0.69		焼成後分離、凸面：ナデ、凹面：ナデ、両面：ナデ

0 20cm

出発番号	整列番号	種類	造形・層位	量 (kg)			備考	分類	等級区分
				高さ	底面積	側面積			
4	820	輪底付	SD1	13.5	(15.6)	-	0.60	凸面：ナデ、凹面：コビケ直・布目	1 ① 49-5
5	823	輪底付	SD1	14.8	-	-	0.61	凸面：ナデ、凹面：コビケ直・布目・穴あり	1 ② 49-9
6	824	輪底付	SD1	13.7	-	13.8	0.52	凸面：ナデ、凹面：コビケ直・布目	1 ③ 49-10
7	829	輪底付	SD1	14.8	-	-	0.76	凸面：ナデ、凹面：コビケ直・布目	2 ④ 49-11
8	831	輪底付	SD1	14.2	-	9.6	0.61	凸面：ナデ、凹面：コビケ直・布目	2 ⑤ 49-12
9	833	輪底付	SD1	14.2	-	11.8	0.39	凸面：ナデ、凹面：コビケ直	2 ⑥ 49-13

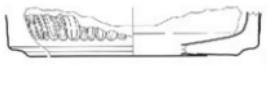
出発番号	整列番号	種類	造形・層位	量 (kg)			備考	分類	等級区分
				高さ	底面積	側面積			
10	E107	東丸瓦	SD1	-	-	0.3	0.12	(凸面：ナデ、凹面：ナデ、布目缺)	A 49-14

第102図 1号溝跡出土遺物（2）



図版番号	登録番号	種類	器種	造形・部位	直径	横幅	厚さ	重さ(g)	備考	写真実数
1	X41	鉄文十鉢	鉢	SD1	-	-	-	-	外面：撫定平行式筋一體文（L字）、内面：くがれ	60-18
2	G103	平底	SD1	-	-	2.2	0.18	-	凸出：撫定筋、ナギ、凹面：布目	60-24
3	X19	鐵製品	標?	SD1	5.6	1.4	0.7	11	木質行者	61-26
4	X18	鐵製品	釘	SD1	-	1.5	1.2	11	-	61-21
5	X16	鐵製品	釘	SD1	-	2.6	1.8	11	木質行者	61-22
6	S17	鐵製品	釘	SD1	1.6	1.6	1.2	12	木質行者	61-23

第103図 1号溝跡出土遺物（3）



図版番号	登録番号	種類	器種	造形・部位	直径	横幅	厚さ	重さ(g)	備考	写真実数
1	13	鉄器	体	SD2	-	12.6	-	-	17C初め 水神、銭文	60-2

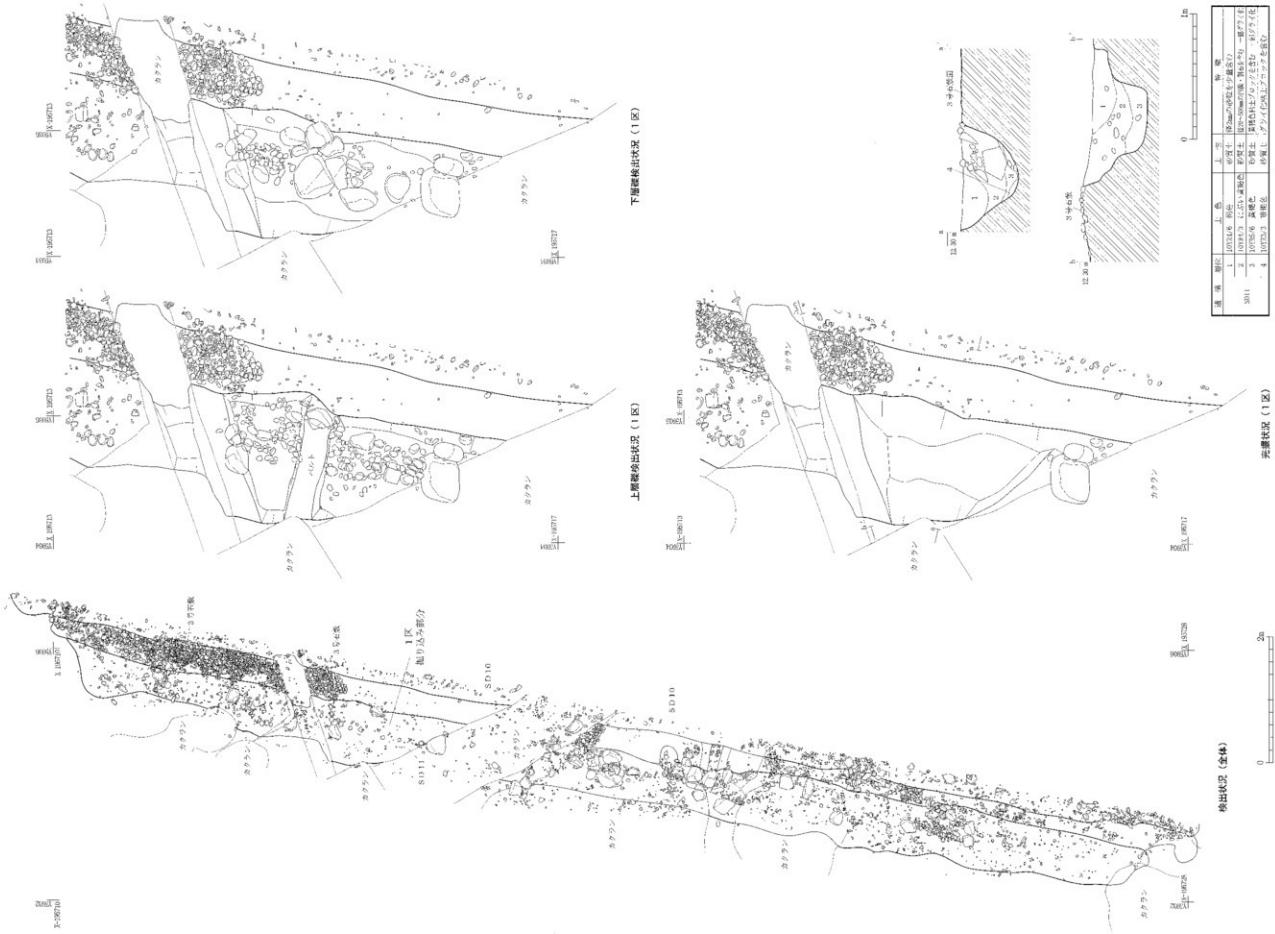
第104図 2号溝跡出土遺物

認した。ピットは0.4mのほぼ等間隔で並んでおり、底面は尖端状である。堆積土はブロック土を多量に含んでおり、人為的に埋め戻されたとみられ、溝として開口していた様子はない。SD3はSD2同様に堀跡とみられ、溝状に確認されたプランは布堀状の掘り方になり、ピットは杭の痕跡と考えられる。出土遺物は無い。

11号溝跡

Y27~28、X41~46グリッドで検出し、SB3の西辺溝跡であるSD10の西側にはほぼ並行して存在する。3号石敷遺構を切るように構築されており、南側は搅乱により端部は不明であるが、SD1以降にまで延びていない。北側は部分的に搅乱により失われ、Y28X43グリッドで一旦途切れるものの、SD4までは延びるが、交差部分が搅乱を受けているため重複関係は不明である。SD11の北側延長線上には1号石敷遺構を切るようにSD16が南北に延びており、SD11の延長部分とも考えられるが、掘り込みの結果、構造が大きく異なるため、別の遺構として扱っている。溝跡の確認長は25.1m、幅0.8~1m、深さ0.4~0.7m程で、主軸方向はN-11°~Wである。

第105図 11号溝跡



Y27・28、X43・44グリッドにおいて一部掘り込んだところ、堆積土は3層に分層され、2層を中心にして3号石敷造構に敷かれている円礫と共に一辺12~30cmの安山岩質の角礫が東側から流入する状況で検出されている。角礫は掘り込み部以外でも溝内に多く確認されている。溝底面近くでは径2~3cm程の円礫が確かに確認されているが、底面より浮いた状態であった。掘り方理士は確認できず、堆積土も自然堆積状況を示すことからSD11は素掘りの溝の可能性もある。出土遺物は礫と共に丸瓦、平瓦、輪違など19点がある。

12号溝跡

Y33・34、X37グリッドで検出し、他造構との重複関係はない。規模は全長2.6m、幅0.4m、深さ0.12mで、主軸方向はN=80°-Wである。底面は平坦で壁の立ち上がりは比較的急である。平面や断面形状に加え、主軸方向や配置状況から小溝群の溝跡に類似するが、堆積土が異なるため単独の溝跡として扱った。出土遺物は無い。

15号溝跡

Y31、X37グリッドで検出し、1号石敷造構より新しい。北側は搅乱により失われているため全体は不明であるが、確認長1.9m、幅0.25~0.3m、深さ0.17mの規模で、主軸方向はN=50°-Wである。平面形状は緩やかに湾曲し、底面は平坦で、壁の立ち上がりは比較的急である。小溝群2-1と2-2の間を斜めに横断する位置で検出されており、方向は異なるが小溝群に関連することも考えられる。出土遺物は丸瓦、平瓦、熨斗瓦が7点、上師質土器皿が1点ある。

16号溝跡

Y28・29、X36~40グリッドで検出し、1号石敷造構より新しい。北側と南側は搅乱により不明であるが、北側は調査区外に延びていく。南側延長部には同様の同軸方向をもつSD11が存在しているが、掘り込み調査の結果、SD11とは溝の構造が異なっており、別造構の可能性がある。溝跡の確認長は21m、幅0.8~1m、深さ0.2m程で、主軸方向はN=10°-Wである。Y29、X37グリッドにおいて一部掘り込んだところ、堆積土は5層に分層され、層中には1号石敷造構に伴う礫が多数流入している。掘り方は確認できず、石組を伴わない素掘りの溝と考えられる。出土遺物は軒丸瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、菊丸瓦など84点、鉄釘1点がある。H109は菊丸瓦で瓦当部のみの残存である。

18号溝跡

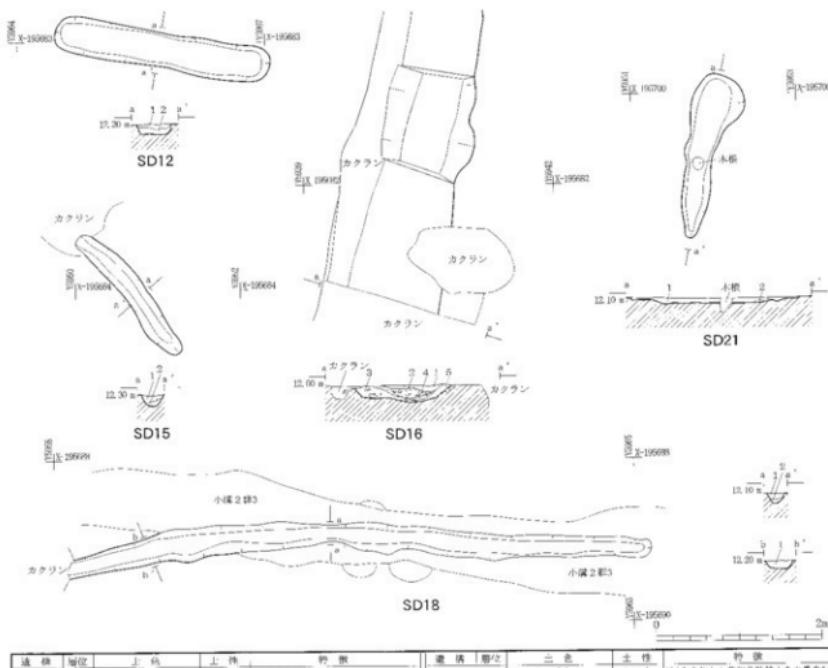
Y32~34、X38グリッドで検出し、小溝群2-3より古い。西側は搅乱により失われており、これより西側には延びない。確認長は7m、幅0.2~0.3m、深さ0.1~0.2mで、主軸方向はN=88°-Eである。平面形状は緩やかに湾曲しており、底面は半胆で壁の立ち上がりは比較的急である。小溝群2-3と重複するため、小溝群に関連する可能性も考えられるが、堆積土の状況が異なるため単独の溝跡として扱った。出土遺物は平瓦が2点ある。G83は厚さ3.1cmと通常よりも厚く、凸面に直線状の線刻が1条認められる。

21号溝跡

Y31、X40・41グリッドで検出し、SB2壁石跡15より新しい。小溝群2-9と直交する方向にあるが重複関係はない。平面形は南側に向かい幅を狭める形状となる。長さは2.04m、幅0.18~0.54m、深さは0.11mで、主軸方向はN=10°-Eである。底面は緩やかな起伏をもつが比較的水平で、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は2層に分層されるがⅢ層に類似しており、層中に炭化物粒を含んでいる。出土遺物は無い。

22号溝跡

Y34、X38グリッドで検出し、小溝群2-3より古い。北側は搅乱により失われている。検出のみで掘り込み調査は行なっていないが、堆積土はⅢ層に類似している。確認長は0.7m、幅0.3mで、主軸方向はN=11°-Eである。小溝群2-2と3との間に位置することから畑の底面耕作痕跡とみられる。出土遺物は無い。



第106図 溝跡

特徴										
遺構番号	場所	上・角	上・側	物・質	遺構番号	上・角	上・側	物・質	特徴	
SD12	1	10YR5/6	赤褐色	黄褐色砂岩を含む	SD16	4	10YR4/4	褐色	シルト	2mの土柱とし内側に砂質土を含む
	2	10YR4/1	褐色	シルト 黄褐色砂岩を含む		5	10YR4/6	褐色	シルト	1m以内に内部を含む、外側の黄土を含む
SD15	1	10YR4/3	にぶい・黄褐色	シルト 小礫を少含む	SD18	1	10YR4/3	にぶい・黄褐色	シルト	-
	2	10YR2/3	暗褐色	シルト 小礫を含む グライ化		2	10YR3/4	薄褐色	シルト	-
SD16	1	10YR4/3	にぶい・黄褐色	シルト	SD21	1	10YR4/4	褐色	シルト	炭化物を少含む
	2	10YR4/4	褐色	シルト 程10~50mmの円礫を多含む		2	10YR4/6	褐色	シルト	褐色色・暗褐色ブロックを多含む
	3	10YR4/1	褐色	シルト 程10~20mmの円礫を少含む						

第107図 溝跡出土遺物

(3) 土 坑

IV層上面において195基を確認した。掘り込み調査を行ったものはSK 8～92までの85基で、SK 93～202までの110基は検出までの調査としている。上坑の分布はSB 1周辺と調査区中央に大きくまとまりをもつが、配圖に規則性などは認められず、性格もほとんどが不明である。重複関係をみると土坑は建物跡の礎石跡より新しく、小溝状遺構群より古いものが多いことや、Ⅲ層に類似する堆積土をもつものもあることから、その多くは畠耕作に関わるものが多く、また本来はⅢ層中ないしⅢ層上面から掘り込まれたものも多数存在すると考えられる。

8号土坑

Y29、X42グリッドで検出し、SK 42より新しい。形状は楕円形で、規模は長軸0.95m、短軸0.67m、深さ0.26mで、主軸方向はN-17°-Wである。底面は中央部がやや盛る傾向にある。堆積土は2層に分層されるが、上面および底面に径3～16cmの円礎を多く含んでいる。出土遺物は無い。

9号土坑

Y30-31、X41-42グリッドで検出し、SA 1より新しく、小溝群2-12より古い。北側が擾乱により失われているが形状は不整形で、規模は長軸1.48m以上、短軸1.06m、深さ0.18mである。底面は比較的平坦で、壁の立ち上がりも緩やかである。堆積土は2層に分層される。出土遺物は平瓦片などが4点ある。

10号土坑

Y30、X42グリッドで検出し、小溝群2-13より新しい。形状は楕円形で、規模は長軸0.72m、短軸0.52m、深さ0.12mである。底面は比較的平坦であるが、東に向かい傾斜する。堆積土は単一層で炭化物粒を含んでいる。出土遺物は無い。

11号土坑

Y31、X43グリッドで検出し、小溝群2-14より新しい。南側半分程度を擾乱により失われているため形状は不明であるが、不整円形と思われる。規模は幅0.2m、深さ0.12mである。底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は単一層である。底面より径5～10cmの円礎が検出されたが土坑に伴うものではなく、IV層に含まれるものである。出土遺物は熨斗瓦片などが2点ある。

12号土坑

Y29、X44グリッドで検出し、小溝群2-19より新しい。形状は楕円形で、規模は長軸0.5m、短軸0.36m、深さ0.08mである。底面は擂鉢状に緩やかに立ち上がる。堆積土は単一層のブロック上である。出土遺物は無い。

13号土坑

Y30、X44グリッドで検出し、小溝群2-17より新しい。形状は長軸円形で、規模は長軸0.42m、短軸0.2m、深さ0.1mで、主軸方向はN-75°-Wである。底面は比較的平坦で壁の立ち上がりは急である。堆積土は単一層でⅢ層に類似する。出土遺物は無い。

14号土坑

Y30、X45グリッドで検出し、SB 2雨落ち溝のSD 7、小溝群2-20より新しい。南側は擾乱により一部失われ、形状は不整円形とみられる。規模は長軸0.5m、短軸0.2m以上、深さ0.1mで、主軸方向はN-8°-Eである。底面はピット状に一段深くなっている。堆積土は2層に分層され、径5cm程の円礎を含んでいる。出土遺物は無い。

15号土坑

Y31、X45グリッドで検出し、小溝群2-19より新しい。形状は不整円形で、規模は長軸0.79m、短軸0.6m、深さ0.1mで、南側は擾乱により一部失われている。底面は比較的平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分層された。出土遺物は平瓦片が3点ある。

16号土坑

Y30、X45グリッドで検出し、SB3雨落ち溝のSD8、小溝群2-20より新しく、P1より古い。形状は楕円形で、規模は長軸0.74m、短軸0.44m、深さ0.48mで、主軸方向はN-36°-Wである。底面には2か所の浅いピット状の掘り込みがあり、壁の立ち上がりは急である。堆積土は2層に分層でき、共にブロック土を多く含む人為堆積である。出土遺物は平瓦片が1点、磁器が2点ある。

17号土坑

Y31、X42グリッドで検出し、小溝群2-12より新しい。形状は長方形で、規模は長軸0.42m、短軸0.32m、深さ0.16mである。南側は搅乱により一部失われている。底面は平坦で、壁は急に立ち上がる。堆積土は単一層でブロック土を多く含む人為堆積である。出土遺物は無い。

18号土坑

Y30-31、X45グリッドで検出し、SB2礎石跡7より新しく、小溝群2-19より古い。形状は不整円形で、規模は長軸1.8m、短軸1.44m、深さ0.3mである。北側は試掘トレンチにより一部失われている。底面は起伏が著しく、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分層されるが1層には径3cm程の円礫や焼土粒・炭化物粒を含んでいる。植栽痕の可能性が考えられる。出土遺物は平瓦や丸瓦片が90点ある。

19号土坑

Y31、X45グリッドで検出し、SB2礎石跡7、SD7より新しく小溝群2-12より古い。形状は不整円形で、規模は長軸2.2m、短軸1.66m、深さ0.26mである。北側は搅乱により一部失われている。底面は比較的平坦であるが、西側に向かって傾斜をもち、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分層されるが、1層中には径2~6cm程の円礫を少量含んでいる。出土遺物は平瓦片を中心に46点ある。

20号土坑

Y31、X45グリッドで検出し、SD20より新しい。形状は開丸長方形で、規模は長軸1.7m、短軸1.18m、深さ0.1mで、主軸方向はN-80°-Wである。南側は搅乱により一部失われている。底面は平坦であるが浅いピット状の落ち込みが1か所あり、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は単一層で炭化物粒と2~5cm程の円礫を少量含んでいる。出土遺物は平瓦や丸瓦片が19点、鉄釘1点、鉄滓1点がある。

21号土坑

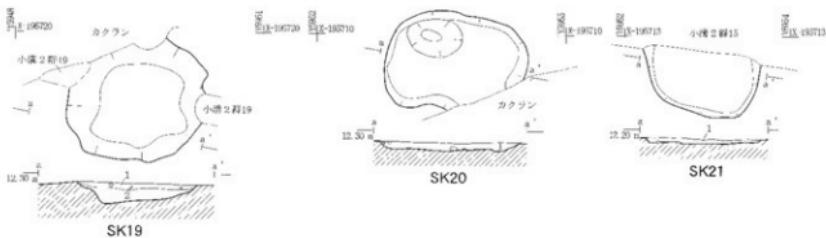
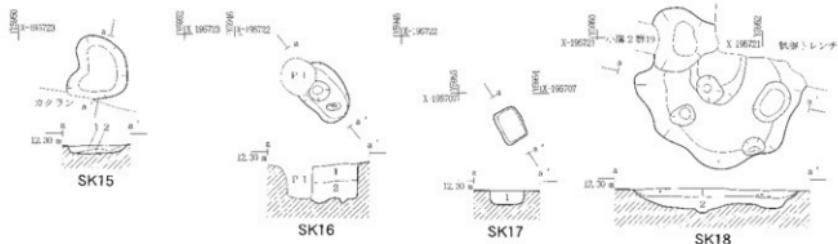
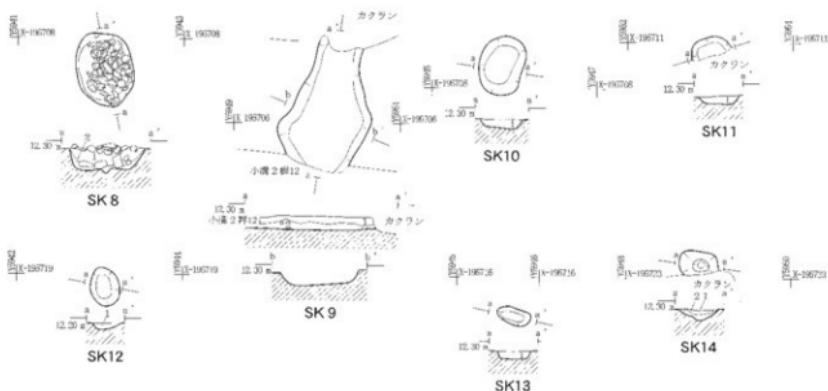
Y31、X43グリッドで検出し、SB2雨落ち溝SD7より新しく、小溝群2-15より古い。形状は楕円形で、規模は長軸1.44m、短軸0.72m、深さ0.6mである。底面は比較的平坦であり、SD7の敷石が露出している。壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は単一層で炭化物粒を含んでいる。出土遺物は平瓦片が1点ある。

22号土坑

Y31、X43グリッドで検出し、SB2雨落ち溝SD7より新しく、小溝群2-15より古い。形状は不整円形で、規模は長軸1.4m、短軸1.2m、深さは0.1mである。北側は搅乱により僅かに失われている。底面は浅い起伏が認められ、壁は緩やかに立ち上がる。また底面にはSD7の敷石が一部露出している。堆積土は2層に分層されるが、ブロック土を多く含んでおり人為堆積と考えられる。出土遺物は平瓦片が2点ある。

23号土坑

Y32、X46グリッドで検出し、SB2礎石跡33より新しく、小溝群2-20より古い。形状は不整円形で、規模は長軸2.12m、短軸1.34m、深さ0.1mである。北側と南側は搅乱により失われているため全体形は不明である。底面は中央部が高く、周辺部が溝状にやや深く巡っており、壁は緩やかに立ち上がる。底面には雨落ち溝SD7の敷石が一部露出している。堆積土は3層に分層されるが、ブロック土の混入程度による差である。出土遺物は瓦片が3点ある。底面の形状の特徴から植栽痕の可能性が考えられる。



0 2a

地 横	深 底	二 重	土 性	特 性	通 構	層 厚	土 重	土 性	特 性
SK8	1 10785/76	黄褐色	シルト	酸化鉄粉を微量、円柱を含む	SK5	2 10785/4	にふく黄褐色	シルト	白色土を含む
	2 10784/4	褐色	シルト	褐色系ブロックを少数含む、円柱を含む	SK15	1 10784/4	褐色	シルト	褐色系、褐色系ブロックを多量含む、褐色系
SK9	1 10784/2	にふく・黄褐色	シルト	黄色粘土塊、円柱を含む	SK16	2 10784/6	褐色	シルト	褐色系、褐色系ブロックを多量含む
	2 10784/4	褐色	シルト	褐色を多量含む	SK17	1 10785/4	にふく・黃褐色	シルト	褐色系、褐色系ブロックの割合土
SK10	1 10785/2	にふく・黄褐色	シルト	褐色を多量含む、一部グレイ化	SK18	2 10784/4	褐色	砂質シルト	褐色系、褐色系ブロックを少度含む
	2 10785/4	褐色	シルト	褐色系ブロックを含む	SK19	1 10784/1	褐色	砂質土	褐色系、褐色系ブロックを多量含む、褐色系
SK11	1 10784/1	灰白色	シルト	褐色系ブロックを介在	SK20	2 10784/6	褐色	砂質土	褐色系、褐色系ブロックを少度含む
	2 10784/3	にふく・黄褐色	シルト	やや褐色 山層に相当	SK21	1 10784/6	褐色	シルト	褐色系、褐色系ブロックを少度含む
SK12	1 10785/4	にふく・黄褐色	シルト	褐色系上ベース 内充和を含む					
	2 10784/4	褐色	シルト	褐色系ブロックを含む					
SK13	1 10785/4	にふく・黄褐色	シルト	褐色系上ベース 内充和を含む					
	2 10784/3	褐色	シルト	褐色系ブロックを含む					
SK14	1 10785/4	にふく・黄褐色	シルト	褐色系上ベース 内充和を含む					
	2 10784/4	褐色	シルト	褐色系上ベース 内充和を含む					
SK15	1 10785/4	にふく・黄褐色	シルト	褐色系上ベース 内充和を含む					
	2 10784/4	褐色	シルト	褐色系上ベース 内充和を含む					

第108図 土 坑 (1)

24号土坑

Y31、X46グリッドで検出し、S B 2 磐石跡37より新しい。形状は不整円形とみられるが、南側が搅乱により大きく失われている。規模は長軸1.28m程、深さは西側の最深部で0.25m、東側の浅い所で0.1mである。底面は起伏があり、壁は緩やかに立ち上がる。また底面には雨落ち溝S D 7 の敷石が一部露出している。堆積土は3層に分層される。出土遺物は無い。

25号土坑

Y32、X45グリッドで検出し、S K26より新しく、小溝群2-19より古い。形状は屈曲した不整形で、規模は長軸0.56m、短軸0.24m、深さ0.1mである。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分層される。出土遺物は無い。

26号土坑

Y32、X44-45グリッドで検出し、S B 2 磐石跡22より新しく、小溝群2-20、S K25より古い。形状は不整梢円形で、規模は長軸0.68m、短軸0.54m、深さは北側の最深部で0.24m、南側の浅い部分で0.1mである。底面は平坦であるが、北側がピット状に一段深くなっている。堆積土は2層に分層される。出土遺物は無い。

27号土坑

Y32、X44-45グリッドで検出し、S B 2 磐石跡15より新しい。形状は梢円形で、規模は長軸0.74m、短軸0.58m、深さ0.1mで、主軸方向はN~45°-Eである。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。また底面に径10cm程の円礫が検出されたが磐石跡15に伴うものである。堆積土は単一層で炭化物粒を含んでいる。出土遺物は無い。

28号土坑

Y32、X44グリッドで検出し、S B 2 磐石跡15より新しい。形状は隅丸長方形で、規模は長軸0.92m、短軸0.52m、深さ0.6mで、主軸方向はN-79°-Wである。底面は平坦で掘り込みは浅い。底面に径1~15cm程の円礫が多く検出されたが磐石跡15に伴うものである。堆積土は單一層である。出土遺物は無い。

29号土坑

Y29-30、X45グリッドで検出し、重複関係は無い。形状は不整円形で、規模は径0.86m、深さ0.2mである。底面は起伏が認められ、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は單一層である。出土遺物は無い。

30号土坑

Y29、X42グリッドで検出し、S K45より新しい。形状は不整円形で、規模は径0.36m、深さ0.16mである。底面は平坦で壁は急に立ち上がる。堆積土は3層に分層されるがブロック土の混入程度の差によるものである。出土遺物は無い。

31号土坑

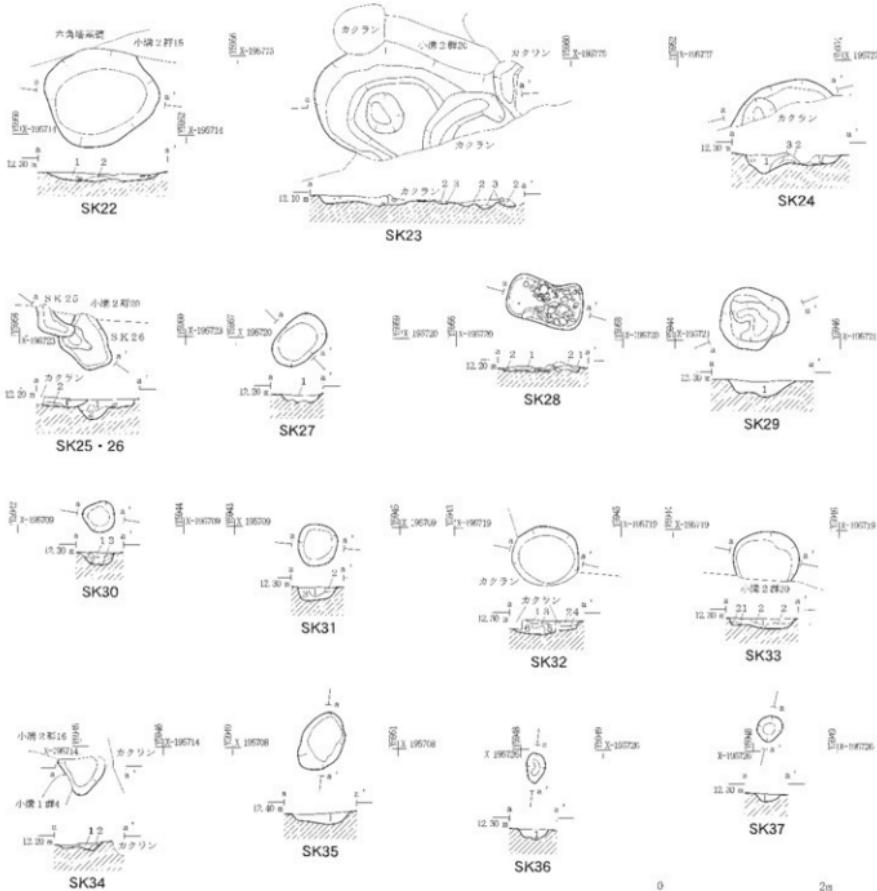
Y29、X42グリッドで検出し、S B 3 磐石跡2より新しい。形状は不整円形で、規模は長軸0.52m、短軸0.46m、深さ0.16mである。底面は平坦であるが西側に向かい傾斜する。堆積土は3層に分層されるがブロック土の混入程度の差によるものである。出土遺物は瓦片が2点ある。

32号土坑

Y29、X44グリッドで検出し、S B 3 磐石跡26より新しく、小溝群2-19より古い。形状は円形で、規模は径0.8m、深さ0.18mである。南側が搅乱により上部が失われている。底面は緩やかに傾斜し中央部が最も深い。壁の立ち上がりは急である。堆積土は5層に分層される。出土遺物は平瓦や輪造りの破片が3点ある。なお中央部に角杭の痕跡が確認されたがII層上より打ち込まれたもので土坑には関連しない。

33号土坑

Y29-30、X44グリッドで検出し、S B 3 磐石跡26より新しく、小溝群2-19より古い。形状は円形で、規模は長



層序	層位	上.色	下.作	特徴	層序	層位	上.色	下.作	特徴
SK22	1	10VB4/4	褐色	シルト	SK30	1	10VB4/6	褐色	シルト
	2	10TB4/4	褐色	シルト		2	10VB4/6	褐色	シルト
SK23	1	10TB4/4	褐色	シルト	SK31	2	10VB4/6	褐色	シルト
	2	10TB4/4	褐色	シルト		3	10VB4/6	褐色	シルト
SK24	3	10TB4/4	褐色	シルト	SK32	4	10VB4/6	褐色	シルト
	4	10TB4/4	褐色	シルト		5	10VB4/6	褐色	シルト
SK25	1	10TB4/4	褐色	シルト	SK33	6	10VB4/6	褐色	シルト
	2	10TB4/4	褐色	シルト		7	10VB4/6	褐色	シルト
SK26	3	10TB4/4	褐色	シルト	SK34	8	10VB4/6	褐色	シルト
	4	10TB4/4	褐色	シルト		9	10VB4/6	褐色	シルト
SK27	1	10TB4/4	褐色	シルト	SK35	10	10VB4/6	褐色	シルト
	2	10TB4/4	褐色	シルト		11	10VB4/6	褐色	シルト
SK28	3	10TB4/4	褐色	シルト	SK36	12	10VB4/6	褐色	シルト
	4	10TB4/4	褐色	シルト		13	10VB4/6	褐色	シルト
SK29	5	10TB4/4	褐色	シルト	SK37	14	10VB4/6	褐色	シルト
	6	10TB4/4	褐色	シルト		15	10VB4/6	褐色	シルト
SK30	7	10TB4/4	褐色	シルト	SK38	16	10VB4/6	褐色	シルト
	8	10TB4/4	褐色	シルト		17	10VB4/6	褐色	シルト
SK31	9	10TB4/4	褐色	シルト	SK39	18	10VB4/6	褐色	シルト
	10	10TB4/4	褐色	シルト		19	10VB4/6	褐色	シルト
SK32	11	10TB4/4	褐色	シルト	SK40	20	10VB4/6	褐色	シルト
	12	10TB4/4	褐色	シルト		21	10VB4/6	褐色	シルト
SK33	13	10TB4/4	褐色	シルト	SK41	22	10VB4/6	褐色	シルト
	14	10TB4/4	褐色	シルト		23	10VB4/6	褐色	シルト
SK34	15	10TB4/4	褐色	シルト	SK42	24	10VB4/6	褐色	シルト
	16	10TB4/4	褐色	シルト		25	10VB4/6	褐色	シルト
SK35	17	10TB4/4	褐色	シルト	SK43	26	10VB4/6	褐色	シルト
	18	10TB4/4	褐色	シルト		27	10VB4/6	褐色	シルト
SK36	19	10TB4/4	褐色	シルト	SK44	28	10VB4/6	褐色	シルト
	20	10TB4/4	褐色	シルト		29	10VB4/6	褐色	シルト
SK37	21	10TB4/4	褐色	シルト	SK45	30	10VB4/6	褐色	シルト
	22	10TB4/4	褐色	シルト		31	10VB4/6	褐色	シルト
SK38	23	10TB4/4	褐色	シルト	SK46	32	10VB4/6	褐色	シルト
	24	10TB4/4	褐色	シルト		33	10VB4/6	褐色	シルト
SK39	25	10TB4/4	褐色	シルト	SK47	34	10VB4/6	褐色	シルト
	26	10TB4/4	褐色	シルト		35	10VB4/6	褐色	シルト
SK40	27	10TB4/4	褐色	シルト	SK48	36	10VB4/6	褐色	シルト
	28	10TB4/4	褐色	シルト		37	10VB4/6	褐色	シルト
SK41	29	10TB4/4	褐色	シルト	SK49	38	10VB4/6	褐色	シルト
	30	10TB4/4	褐色	シルト		39	10VB4/6	褐色	シルト
SK42	31	10TB4/4	褐色	シルト	SK50	40	10VB4/6	褐色	シルト
	32	10TB4/4	褐色	シルト		41	10VB4/6	褐色	シルト
SK43	33	10TB4/4	褐色	シルト		42	10VB4/6	褐色	シルト
	34	10TB4/4	褐色	シルト		43	10VB4/6	褐色	シルト
SK44	35	10TB4/4	褐色	シルト		44	10VB4/6	褐色	シルト
	36	10TB4/4	褐色	シルト		45	10VB4/6	褐色	シルト
SK45	37	10TB4/4	褐色	シルト		46	10VB4/6	褐色	シルト
	38	10TB4/4	褐色	シルト		47	10VB4/6	褐色	シルト
SK46	39	10TB4/4	褐色	シルト		48	10VB4/6	褐色	シルト
	40	10TB4/4	褐色	シルト		49	10VB4/6	褐色	シルト
SK47	41	10TB4/4	褐色	シルト		50	10VB4/6	褐色	シルト
	42	10TB4/4	褐色	シルト		51	10VB4/6	褐色	シルト
SK48	43	10TB4/4	褐色	シルト		52	10VB4/6	褐色	シルト
	44	10TB4/4	褐色	シルト		53	10VB4/6	褐色	シルト
SK49	45	10TB4/4	褐色	シルト		54	10VB4/6	褐色	シルト
	46	10TB4/4	褐色	シルト		55	10VB4/6	褐色	シルト
SK50	47	10TB4/4	褐色	シルト		56	10VB4/6	褐色	シルト
	48	10TB4/4	褐色	シルト		57	10VB4/6	褐色	シルト

第109図 土坑(2)

幅0.8m、短軸0.56m、深さ0.12mである。底面は東側が緩やかに傾んでおり、壁の立ち上がりは比較的緩やかである。堆積土は2層に分層される。出土遺物は無い。

34号土坑

Y29・30、X43グリッドで検出し、SB3礎石跡12より新しく、小溝群1-4・2-16より古い。形状は不整形で、規模は径0.54m、深さ0.1m程度である。底面は起伏が多く、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は2層に分層される。出土遺物は無い。

35号土坑

Y30・31、X42グリッドで検出し、SB3雨落ち溝SD8より新しい。形状は不整梢円形で、規模は長軸0.76m、短軸0.5m、深さ0.14mで、主軸方向はN-25°-Wである。底面は緩やかな起伏があり、南側が最も深い。壁の立ち上がりは緩やかである。底面に円礎が検出されているがSD8に伴うものである。堆積土は単一層で炭化物粒を含む。出土遺物は平瓦片などが3点ある。

36号土坑

Y30、X46グリッドで検出し、SB2雨落ち溝SD7より新しい。形状は不整円形で、規模は長軸0.38m、短軸0.22m、深さ0.14mで、主軸方向はN-5°-Wである。底面には起伏があり、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は単一層である。出土遺物は無い。

37号土坑

Y30、X46グリッドで検出し、SB2雨落ち溝SD7より新しい。形状は円形で、規模は径0.32m、深さ0.1mである。底面は擂鉢状に窪み、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は単一層である。出土遺物は無い。

38号土坑

Y29、X44-45グリッドで検出し、SB3礎石跡25、SK71より新しい。形状は円形で、規模は長軸0.6m、短軸0.54m、深さ0.06mである。底面は平坦で掘り込みは浅い。堆積土は単一層である。出土遺物は無い。

39号土坑

Y30、X44グリッドで検出し、SB3礎石跡21に近接するが重複関係はない。形状は梢円形で、規模は長軸0.5m、短軸0.42m、深さ0.12mである。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は2層に分層されブロック土を多く含んでいる。出土遺物は無い。

40号土坑

Y30、X44グリッドで検出し、SB2雨落ち溝SD7より新しい。形状は梢円形で、規模は長軸0.38m、短軸0.26m、深さ0.08mで、主軸方向はN-25°-Wである。底面は平坦で壁の立ち上がりは比較的急である。堆積土は単一層でブロック土を多く含む。出土遺物は無い。

41号土坑

Y31、X43グリッドで検出し、SB2雨落ち溝SD7に近接するが重複関係はない。形状は円形で、規模は径0.4m、深さ0.08mである。底面は擂鉢状に窪み、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は単一層で、炭化物粒を含むⅢ層に類似した層である。出土遺物は無い。

42号土坑

Y29、X42グリッドで検出し、小溝群2-13、SK30、7号集石遺構より古い。形状は不整円形で、規模は長軸1.28m、短軸0.86m、深さ0.14mで、主軸方向はN-11°-Wである。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。底面に貼り付く状態で径3~20cmの円礎や瓦片が多く確認されたため、礎石跡の可能性も考えられたが、掘り力を持たないことや他造構との重複関係、堆積土の状況などから土坑と判断した。堆積土は2層に分層されたが、ブロック土の混入程度の差によるものである。出土遺物は軒丸瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、輪廻いが18点、鉄製品が1点ある。

F 7 は軒丸瓦の瓦当部で、瓦当文様は珠文三巴文（左巻き）である。

43号土坑

Y33、X46グリッドで検出し、S B 2 碇石跡35より新しい。形状は梢円形で、規模は長軸0.44m、短軸0.3m、深さ0.04mで、主軸方向はN-25°-Eである。底面は浅い起伏をもち、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は単一層で炭化物粒を含んでいる。出土遺物は無い。

44号土坑

Y34、X38グリッドで検出し、小溝群2-1より古い。形状は不整円形で、規模は短軸2.2m、深さは最も深い西側で0.17mである。底面は浅い起伏が認められ、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は3層に分層されたが、2層中には径1~10cm程の円礫と焼土粒・炭化物粒を含んでおり、畑耕作の底面痕跡の可能性を考えられる。出土遺物は無い。

45号土坑

Y33、X45グリッドで検出し、S B 2 碇石跡46より新しく、S K 7より古い。形状は円形とみられ、東側は調査区外にかかり不明である。規模は短軸0.46m、深さ0.11mで、主軸方向はN-10°-Eである。底面は平坦で壁の立ち上がりは比較的急である。堆積土は単一層で底面には鉄分が沈着する。出土遺物は無い。

46号土坑

Y32、X47グリッドで検出し、S B 2 碇石跡52より新しい。形状は円形で、規模は径0.28m、深さ0.08mである。底面は平坦で、壁の立ち上がりは南側が急で他は比較的緩やかである。堆積土は単一層で、径1cmの円礫を含む。出土遺物は無い。

47号土坑

Y32、X47グリッドで検出し、他造構との重複関係は無い。形状は不整円形で、規模は長軸0.3m、短軸0.26m、深さ0.06mで、主軸方向はN-40°-Wである。壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は単一層で、径1cmの円礫を含む。出土遺物は無い。

48号土坑

Y32、X47グリッドで検出し、他造構との重複関係は無い。形状は不整円形で、規模は長軸0.38m、短軸0.28m、深さ0.06mで、主軸方向はN-15°-Wである。底面は平坦で壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は単一層である。出土遺物は無い。

49号土坑

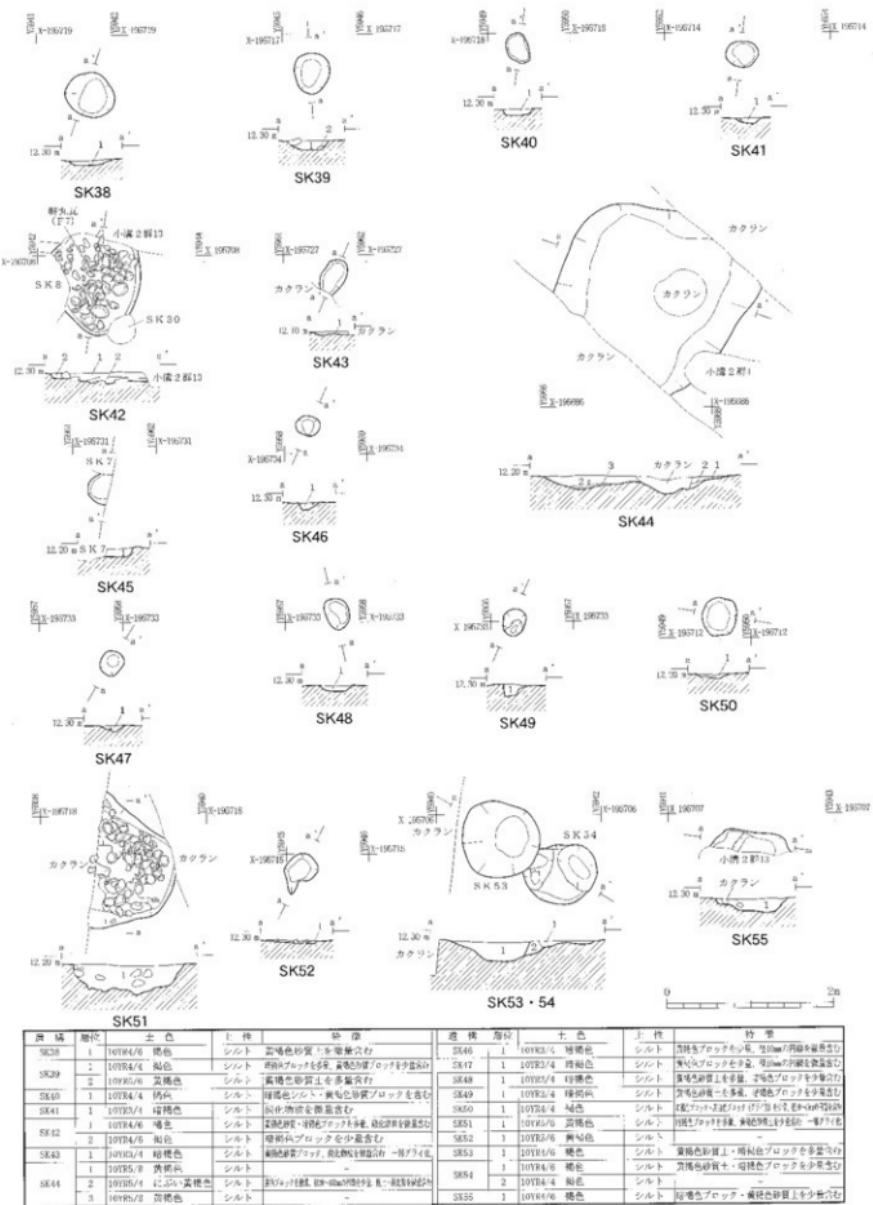
Y32、X47グリッドで検出し、他造構との重複関係は無い。形状は梢円形で、規模は長軸0.28m、短軸0.24m、深さ0.16mで、主軸方向はN-7°-Eである。南側はピット状に一段深くなり、壁の立ち上がりは急である。堆積土は単一層でⅢ層に類似する。出土遺物は無い。

50号土坑

Y30、X43グリッドで検出し、S B 3 雨落ち溝SD 8より新しい。形状は円形で、規模は径0.48m、深さ0.46mである。底面は浅い起伏をもち、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土中や底面に3~5cm程の円礫が確認されたがSD 8 に関連するものである。堆積土は単一層である。出土遺物は無い。

51号土坑

Y28、X44グリッドで検出し、S B 3 碇石跡24より新しい。形状は不整円形と見られるが、西側および東側が境乱により失われ不明である。規模は長軸1.68m以上、短軸0.96m、深さ0.36mで、主軸方向はN-5°-Eである。底面は不整形で起伏をもつが、中央部がやや高くなる傾向にある。壁の立ち上がりは比較的急である。堆積土は単一層でブロック七を多く含んでいる。堆積土中位に底面から15cm程浮いた状態で径3~20cm程の円礫が多く検出さ



第110図 土坑(3)

れたが、礎石跡24の根固石が流入した可能性がある。出土遺物は平瓦片が1点ある。

52号土坑

Y30、X44グリッドで検出し、S B 3礎石跡17より新しい。形状は不整形で、規模は長軸0.52m、短軸0.4m、深さ0.04mで、主軸方向はN-25°-Eである。底面は比較的平坦であるが、掘り込みは浅い。堆積土は單一層である。底面から径2~5cmの円礫が出土しているが、礎石跡17に関わるものである。出土遺物は無い。

53号土坑

Y29、X42グリッドで検出し、SK54より新しい。形状は円形で、規模は長軸0.98m、短軸0.94m、深さ0.24mである。底面は比較的平坦で、壁の立ち上がりは東側が急であるが他は緩やかである。堆積土は單一層でブロック土を多く含む。出土遺物は瓦片が2点ある。

54号土坑

Y29、X42グリッドで検出し、SK53より古い。形状は円形で、規模は長軸0.9m、短軸0.72m、西側の最深部で深さ0.16mである。底面は東西に2か所の落ち込みが認められるが、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は2層に分層される。出土遺物は無い。

55号土坑

Y29、X42グリッドで検出し、形状は不整形とみられるが、南側が小溝群2-13に切られ明らかではない。規模は長軸0.96m以上、短軸0.26m、深さ0.2mで、主軸方向はN-95°-Eである。底面は0.1m程の段をもち、壁の立ち上がりは比較的急である。堆積土は單一層で、径2~8cm程の円礫を含んでいる。出土遺物は無い。

56号土坑

Y29、X42グリッドで検出し、形状は円形とみられるが、小溝群2-13と重複し南側が失われている。規模は短軸0.44m、深さ0.18mで、主軸方向はN-88°-Wである。底面は平坦で壁の立ち上がりは急である。堆積土は單一層である。出土遺物は無い。

57号土坑

Y29、X42グリッドで検出し、他造構との重複関係は無い。形状は円形で、規模は長軸0.32m、短軸0.28m、東側の最深部で深さ0.18mである。底面は0.1m程の段をもち東側が低い。壁は急に立ち上がる。堆積土は單一層である。出土遺物は無い。

58号土坑

Y28、X45グリッドで検出し、他造構との重複関係は無い。形状は円形で、規模は長軸0.46m、短軸0.4m、深さ0.14mである。底面は比較的平坦であるが壁の立ち上がりも緩やかである。堆積土は單一層でグラウト化する。出土遺物は無い。

59号土坑

Y29、X42グリッドで検出し、P 5より古い。形状は不規則円形で、規模は長軸0.5m、短軸0.32m、深さ0.08mで、主軸方向はN-65°-Wである。底面は緩やかな起伏をもち、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は單一層である。出土遺物は無い。

60号土坑

Y30、X44グリッドで検出し、小溝群2-17、SK13より古い。形状は不整円形で、規模は径0.7m、深さ0.1mである。底面には起伏が認められ、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は單一層でグラウト化する。出土遺物は無い。

61号土坑

Y29、X42-43グリッドで検出し、他造構との重複関係は無い。形状は不規則円形で、規模は長軸1.22m、短軸0.8m、深さ0.22mで、主軸方向はN-38°-Wである。底面は比較的平坦であるが西側に深さ0.18m程の掘り込みが認めら

れ、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は単一層である。出土遺物は無い。

62号土坑

Y29・30、X42グリッドで検出し、SK63より新しい。形状は不整円形で、規模は径0.72m、深さ0.14mである。西側は擾乱により一部失われている。底面は比較的平坦で、壁の立ち上がりは急である。堆積土は2層に分層されるがグライ化する。出土遺物は平瓦片等が2点ある。

63号土坑

Y30、X42グリッドで検出し、SK62より古い。形状は不整円形で、規模は短軸0.56m、深さ0.18mである。底面は比較的平坦で、壁の立ち上がりは急である。堆積土は単一層である。出土遺物は無い。

64号土坑

Y30、X42グリッドで検出し、小溝群2-13より古い。形状は楕円形で、規模は長軸1.08m以上、短軸0.52m、深さ0.12mで、主軸方向はN-55°-Eである。底面は2か所の掘り込みをもち、北東側が0.05m、南西側が0.04m程深くなり、壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は3層に分層され、1層には炭化物粒が多く含まれている。出土遺物は瓦片が1点ある。

65号土坑

Y29、X42グリッドで検出し、他遺構との重複関係は無い。形状は不整円形で、規模は長軸0.54m、短軸0.44m、深さ0.16mで、主軸方向はN-3°-Eである。底面は北側へ緩やかな傾斜をもち、壁の立ち上がりは北側が比較的急で他は緩やかである。堆積土は2層に分層されるが、Ⅲ層に類似する。出土遺物は無い。

66号土坑

Y29、X44グリッドで検出し、小溝群1-1より新しい。形状は楕円形で、規模は長軸0.44m、短軸0.3m、深さ0.16mで、主軸方向はN-10°-Eである。底面は擂鉢状に畳み、壁の立ち上がりは比較的急である。南側底面は木根により擾乱されている。堆積土は2層に分層されるが人為堆積である。出土遺物は無い。

67号土坑

Y30、X38グリッドの1号石敷遺構上で検出し、これより新しい。形状は楕円形で、規模は長軸0.44m、短軸0.36m、深さ0.08mである。底面は緩やかな擂鉢状である。堆積土は単一層でグライ化する。出土遺物は無い。

68号土坑

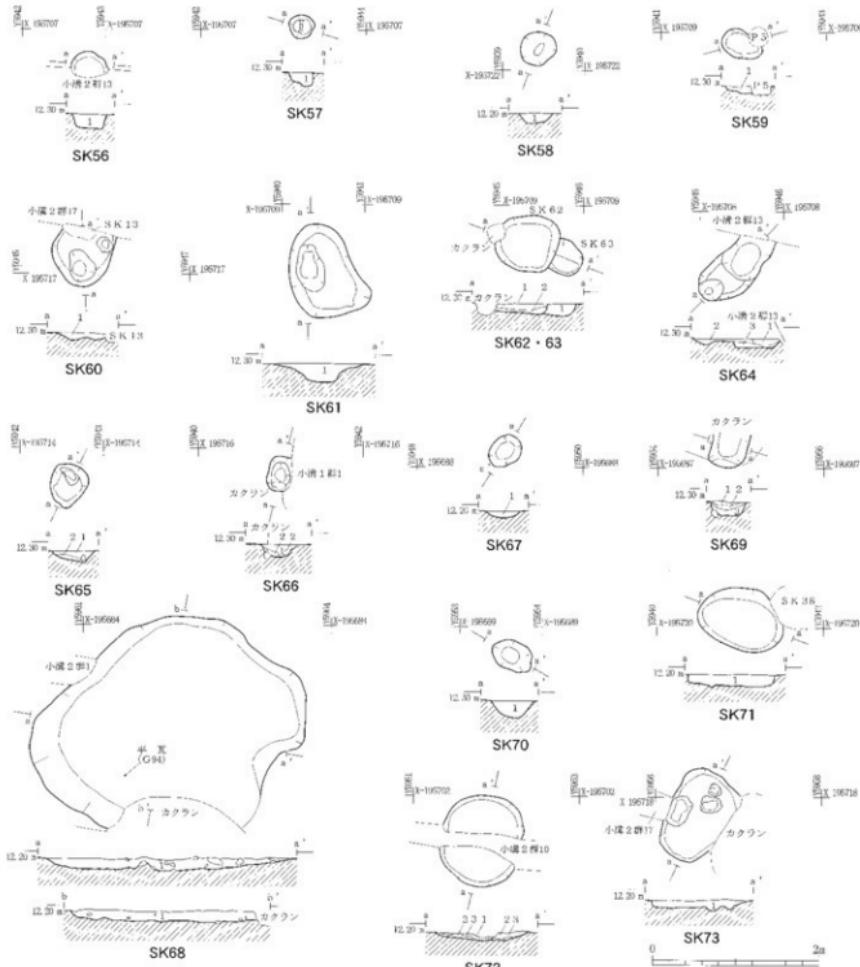
Y33、X37-38グリッドで検出し、SB1礎石跡3・4、南辺溝SD5より新しく、小溝群2-1より古い。形状は不整円形で、規模は長軸3.4m以上、短軸2.24m、深さ0.16mである。底面は緩やかな起伏が認められ、壁も緩やかに立ち上がる。堆積土は単一層でグライ化している。堆積土中に底面より浮いた状態で径3~25cmの円碟がみられる。出土遺物はSD5からの流入とみられるが、丸瓦、軒平瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違いが165点、土師質土器皿113点、焼塙壺1点、鉄製品2点、土師器5点がある。X16は焼塙壺で、体部中位でくびれ、下部に厚みがあるものである。SK44同様に近世の畑耕作の底面痕跡の可能性を考えられる。

69号土坑

Y31-32、X38グリッドで検出し、他遺構との重複関係は無い。北側の擾乱により失われており全体形は不明であるが、形状は不整形で、規模は短軸0.42m、深さ0.18mで、主軸方向はN-17°-Eである。底面は平坦で壁の立ち上がりは急である。堆積土は3層に分層された。出土遺物は無い。

70号土坑

Y31、X38グリッドで検出し、SK88より新しい。形状は不整楕円形で、規模は長軸0.54m、短軸0.36m、深さ0.2mで、主軸方向はN-59°-Wである。断面形状は擂鉢状である。堆積土は単一層で、径2~20cmの円碟を含む。出土遺物は無い。



第111図 土坑(4)

番号	層位	土色	土性	特徴
SK56	1 109R4/6 岩	シルト	固有色ブラック・黄褐色斑点土を含む	
SK57	1 109R5/6 黄褐色	砂質土	細粒砂土を含む	
SK58	1 109R5/6 底質褐色	シルト	黄褐色土と、褐色土と互に交わる	
SK59	1 109R4/6 棕褐色	シルト	黄褐色土と、褐色土と互に交わる	
SK60	1 109R5/6 黄褐色	シルト	黄褐色土と、褐色土と互に交わる	
SK61	1 109R5/6 棕褐色	シルト	黄褐色土と、褐色土と互に交わる	
SK62・63	1 109R5/6 棕褐色	カクラン	カクラン	
SK64	1 109R5/6 小窓2群13	シルト	小窓2群13を含む	
SK65	1 109R5/6 棕褐色	シルト	小窓2群13を含む	
SK66	1 109R5/6 棕褐色	カクラン	カクラン	
SK67	1 109R5/6 棕褐色	シルト	カクラン	
SK68	1 109R5/6 棕褐色	シルト	カクラン	
SK69	1 109R5/6 棕褐色	シルト	カクラン	
SK70	1 109R5/6 棕褐色	シルト	カクラン	
SK71	1 109R5/6 棕褐色	シルト	カクラン	
SK72	1 109R4/6 棕褐色	シルト	カクラン	
SK73	1 109R4/6 棕褐色	シルト	カクラン	

71号土坑

Y29、X44・45グリッドで検出し、SK38より新しい。形状は不整楕円形で、規模は長軸1.06m、短軸0.76m、深さ0.14mで、主軸方向はN-70°-Wである。底面は比較的平坦であるが若干の起伏が認められ、壁の立ち上がりは急である。堆積土は單一層で炭化物粒を含む。出土遺物は無い。

72号土坑

Y31、X41グリッドで検出し、SB1雨落ち溝SD6・SD19、小溝群2-10より新しい。形状は比較的整った円形で、規模は径1.12m、深さ0.11mである。底面は擂鉢状に緩やかに窪み、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は3層に分層され、径2cm程の円礫を含む。出土遺物は無い。

73号土坑

Y32、X44グリッドで検出し、小溝群2-17より新しい。東側は搅乱により失われている。形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.12m、短軸0.72m、深さ0.12mで、主軸方向はN-30°-Eである。底面は比較的平坦であるが、ビット状に深さ5cm程の落ち込みが3か所認められ、壁の立ち上がりは比較的急である。堆積土は單一層で黄褐色シルトを主体とした人為堆積である。部分的にグライ化する。出土遺物は無い。

74号土坑

Y32、X38グリッドで検出し、SB1内のSK203、小溝群2-3より新しい。形状は円形で、規模は径0.4m、深さ0.18mである。底面は北側に緩やかに傾斜するが、壁の立ち上がりは急で外側に開く。堆積土は單一層で焼土粒を含むがSK203からの混入とみられる。出土遺物は平瓦片が1点ある。

75号土坑

Y31・32、X38グリッドで検出し、SB1内のSK204・205・88より新しい。南側は搅乱により失われ、全体形は明らかでないが、形状は楕円形とみられ、規模は長軸0.76m程、深さ0.1mで、主軸方向はN-71°-Wである。底面は比較的平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は單一層で焼土粒を含むが、SK203・204からの混入とみられる。出土遺物は丸瓦片が1点、土師質土器皿が14点ある。

76号土坑

Y32、X44グリッドで検出し、SB2礎石跡10より新しい。形状は不整形で、規模は長軸0.48m、短軸0.26m、深さ0.06mで、主軸方向はN-89°-Eである。底面は平坦で壁の立ち上がりは急である。堆積土は單一層で、礎石跡10の円礫を含む黄褐色シルトを主体とした人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

77号土坑

Y32、X38グリッドで検出し、SB1内のSK204より新しい。形状は楕円形で、規模は径0.4m、深さ0.06mである。断面形状は擂鉢状となる。堆積土は單一層である。出土遺物は無い。

78号土坑

Y33、X38・39グリッドで検出し、小溝群2-3より新しい。形状は比較的整った隅丸長方形で、長軸1.56m以上、短軸1.1m、深さ0.3mで、主軸方向はN-12°-Eである。底面は浅い起伏が認められるが壁は急に立ち上がる。堆積土は3層に分層されるが1層中には焼土粒を含んでいる。出土遺物は土師質土器皿が23点ある。

79号土坑

Y33、X39グリッドで検出し、他遺構との重複関係は無い。形状は円形で、規模は長軸0.4m、短軸0.38m、深さ0.1mで、断面形状は擂鉢状となる。堆積土は單一層である。出土遺物は無い。

80号土坑

Y31、X38・39グリッドで検出し、SB1雨落ち溝SD4より新しく、小溝群2-4より古い。形状は隅丸長方形とみられるが、搅乱により全体形は不明である。規模は幅0.78m以上、深さ0.16mである。底面は擂鉢状に緩やかな

傾斜をもち、壁の立ち上がりも緩やかである。堆積土は2層に分層され、SD 4から混入した径1~5cmの円礫を含む。出土遺物は無い。

81号土坑

Y33、X41グリッドで検出し、他造構との重複関係は無い。形状は不整楕円形で、規模は長軸0.56m、短軸0.28m、深さ0.04mで、主軸方向はN-13°-Eである。掘り込みは浅く、底面は比較的平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は単一層である。出土遺物は無い。SB 1内に存在するが、堆積土の状況から建物に関連しない造構と判断した。

82号土坑

Y33、X40グリッドで検出し、他造構との重複関係は無い。形状は不整楕円形で、規模は長軸0.42m、短軸0.24m、深さ0.18mで、主軸方向はN-15°-Eである。底面は比較的平坦で、壁の立ち上がりは急である。堆積土は単一層で、径2~4cmの円礫を含んでいる。出土遺物は無い。SB 1内に存在するが、堆積土の状況から建物に関連しない造構と判断した。

83号土坑

Y30-31、X44-45グリッドで検出し、他造構との重複関係は無い。北側は六角塔基礎により失われており、全体形は不明である。形状は不整楕円形とみられ、規模は径0.44m、深さ0.12mである。底面は西側に向けて傾斜しており、壁の立ち上がりは比較的緩やかである。堆積土は3層に分層されるが、ブロック土を主体とした人為堆積とみられる。出土遺物は無い。

84号土坑

Y28-29、X46グリッドで検出し、他造構との重複関係は無い。南側は搅乱により失われており、全体形は不明である。形状は不整形とみられ、規模は長軸1.4m以上、短軸0.66m、深さ0.18mで、主軸方向はN-85°-Eである。底面は起伏が著しく、立ち上がりは比較的急である。堆積土は2層に分層されるが、1層には炭化物粒が含まれる。出土遺物は平瓦や丸瓦片が1点ある。

85号土坑

Y31、X38グリッドで検出し、SB 1内のSK204より新しい。形状は円形で、規模は長軸0.68m、短軸0.62m、深さ0.16mで、断面形状は掘鉢状に大きく開く。堆積土は4層に分層されるが、3層中には東側に寄って焼上ブロックがまとまって分布する場所がある。焼面は存在せず、焼上ブロックのみの混入と考えられる。出土遺物は軒丸瓦片が1点ある。

86号土坑

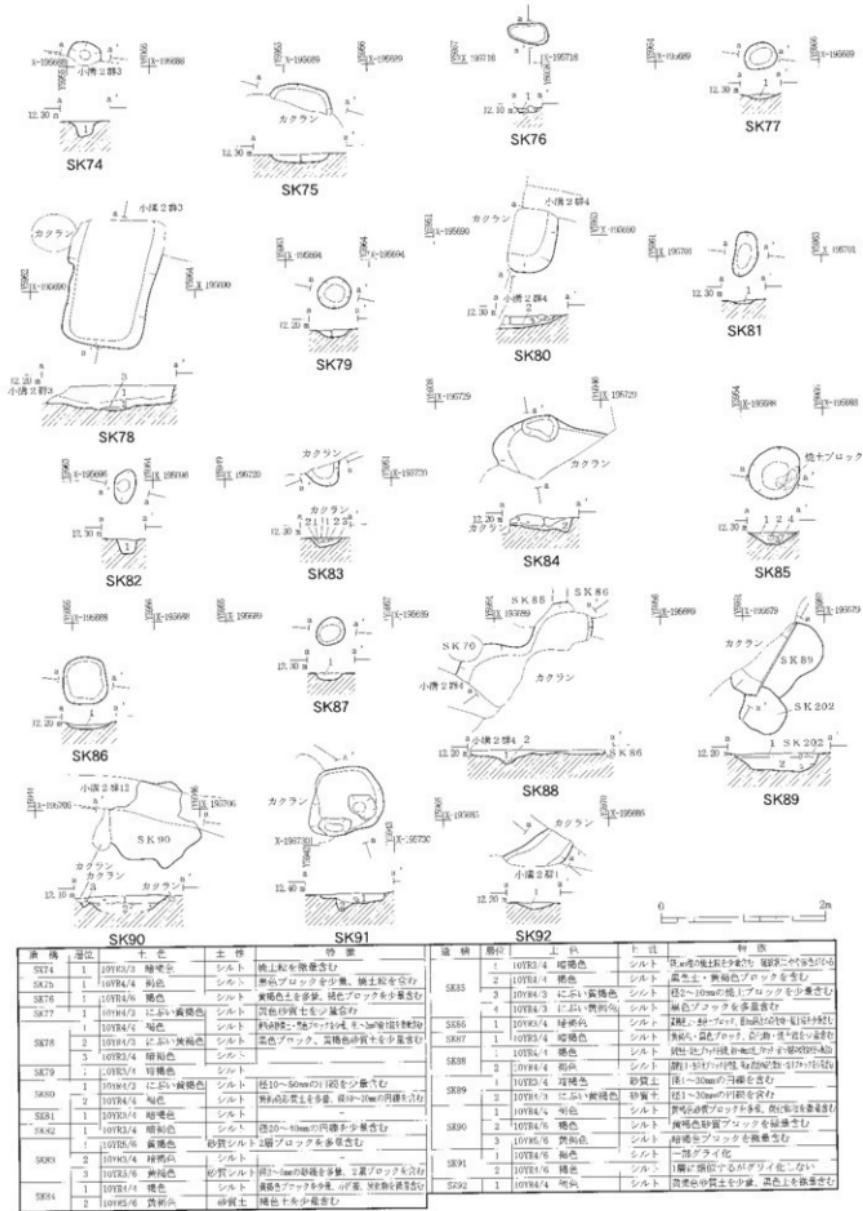
Y31-32、X38グリッドで検出し、SB 1内のSK204より新しい。形状は隅れ方形で、規模は長軸0.58m、短軸0.52m、深さ0.06mである。底面は緩やかに湾曲し、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は単一層で炭化物粒・焼土粒を含むが、これらはSK204からの流入とみられる。出土遺物は瓦片が1点ある。

87号土坑

Y32、X38グリッドで検出し、SB 1内のSK205より新しい。形状は円形で、規模は長軸0.38m、短軸0.32m、深さ0.08mである。底面は緩やかに湾曲し、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は単一層で炭化物粒・焼土粒を含むが、これらはSK205からの混入とみられる。出土遺物は無い。

88号土坑

Y31、X38-39グリッドで検出し、SB 1の確石跡22、SK204より新しく、SK70・75・85、小溝群2-4より古い。南側は搅乱により失われている。形状は中央部が屈曲する不整形で、規模は長軸1.38m以上、短軸0.66m、深さ0.18mで、主軸方向はN-53°-Eである。底面には起伏があり、南西側は深さ10cm程の落ち込みが認められる。立ち上



第112図 土坑（5）

りは緩やかである。堆積土は2層に分層され焼土粒を含むが、これらはSK204からの混入とみられる。出土遺物は無い。

89号土坑

Y31、X36-37グリッドの1号石敷遺構上で検出し、1号石敷遺構より新しく、36号集石遺構より古い。西側は搅乱により失われている。形状は不整形とみられ、規模は長軸1.32m、短軸0.52m以上、深さ0.24mで、主軸方向はN-47°-Eである。土坑上面で検出した36号集石遺構は検出に止めたため、搅乱断面を用いての部分調査を行ったのみである。底面は起伏が認められるものの比較的平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。堆積土は2層に分層されたが1号石敷遺構の円礫を含んでいる。出土遺物は無い。



第113図 土坑出土遺物

90号土坑

Y29・30、X42グリッドで検出し、小溝群2-12より古い。形状は不整形で、規模は長軸1.18m、短軸1m、深さ0.22mである。本遺構は平面検出と一部断面確認を行ったのみで掘り込んでいない。堆積土は2層に分層され、2層中には円礫がやまとまってみられる。出土遺物は無い。

91号土坑

Y32、X46グリッドで検出し、S B 3 磚石跡46より新しい。形状は不整円形で、規模は径0.98m、深さ0.22mである。底面は起伏が認められ、深さ10cm程の落ち込みがピット状に2か所認められる。立ち上がりは比較的急である。堆積土は3層に分層され、5~10cmの円礫を含んでいる。出土遺物は無い。

92号土坑

Y34、X38グリッドで検出し、小溝群2-1より古い。北側は六角塔基礎により失われたため全体形は不明である。形状は不整形とみられ、規模は短軸0.54m、深さ0.08mで、主軸方向はN=45°-Eである。断面形状は掘鉢状である。堆積土は單一層である。出土遺物は無い。

(4) 集石遺構

IV層上面において26基を確認した。検出面はIV層上面であるが、集石内に介在する堆積土はⅢ層に類似するものが多い。本来はⅢ層面で掘り込まれ、その後の耕作によりIV層面でしか確認できない状況になったものと推定される。集石遺構は拳大~人頭大程度の礫を含むものが主体であり、瓦片を含むものも少くない。下部には土坑状の掘り込みをもつものがほとんどである。礫は土坑底面より浮いて検出される傾向にあり、磚石跡の構造とは明らかに異なっている。配列上の規則性は無いが、小溝状遺構群の端部周辺に存在する傾向があり、これらの遺構の多くもまた、畑の耕作の際に障害となった礫や瓦片を集積廃棄したものと考えられる。なお検出段階で礫が確認できず、掘り込み段階で確認されたものについては土坑として取り扱っている。

17号集石遺構

Y29、X41グリッドの1号石敷遺構上で検出し、18号集積遺構より古い。長軸2.02m、短軸1.28mの不整長方形の範囲に径3~16cmの円礫と瓦片が分布する。中心部は搅乱により礫は失われ、掘り込み等は認められない。出土遺物は平瓦・丸瓦片が40点ある。

18号集石遺構

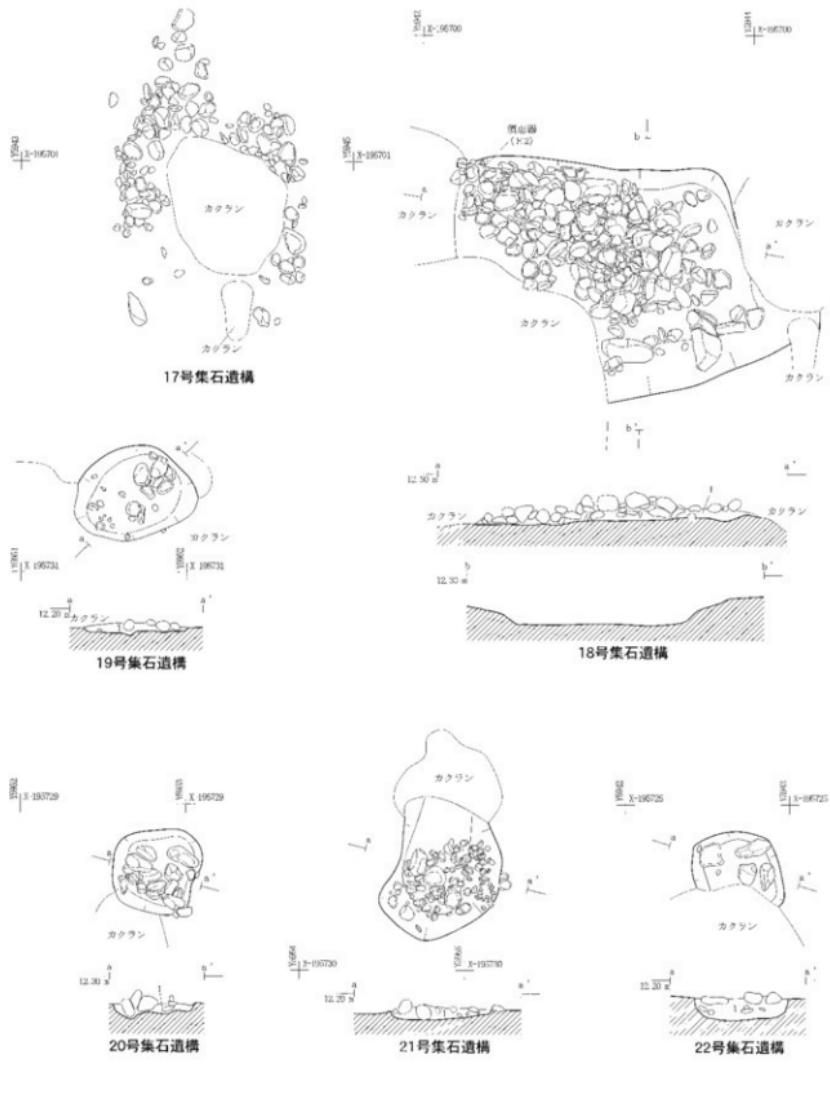
Y29、X41グリッドの1号石敷遺構上で検出し、1号石敷遺構、7号集積遺構より新しい。長軸2.38m、短軸1.56m、深さ0.08mで、N=63°-Wに主軸方向をもつ椭丸長方形の掘り込みの範囲に、径3~30cmの円礫と瓦片が分布している。東側および西側は搅乱により失われている。礫は掘り込み底面より3~5cm程浮いており、礫間にはⅢ層に類似する層が認められる。掘り込みの底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物は平瓦・丸瓦片が18点、須恵器が2点ある。

19号集石遺構

Y31、X47グリッドで検出し、他遺構との重複関係は無い。長軸0.66m、短軸0.56m、深さ0.08mの不整円形の掘り込みの範囲に、径1~14cmの円礫が散在的に分布する。掘り込み底面は緩やかに起伏をもち、壁の立ち上がりは緩やかである。南側は搅乱により上部が失われている。出土遺物は無い。

20号集石遺構

Y31、X46グリッドで検出し、他遺構との重複関係は無い。長軸0.6m、短軸0.58m、深さ0.1mの椭丸方形の掘り込みの範囲に、径1~21cmの円礫が分布する。掘り込み底面は起伏をもち、壁の立ち上がりは比較的急である。礫は掘り込み底面より僅かに浮いてみられる。出土遺物は無い。



第114図 集石遺構（1）

地質	地位	上色	土性	特徴	地質	地位	上色	土性	特徴
17号集石	-	-	-	透10~110cmの石塊を含む	20号集石	1	10%石	軽色	暗褐色シルトブロックを多産
18号集石	1	10TB3/4	暗褐色	シルト 灰褐色を多産含む 三層構成	21号集石	1	10%石/4	に占比 黄褐色	シルト 均等的砂上部と 灰褐色シルトを含む
19号集石	1	10TB4/4	褐色	褐色シルトブロックを含む 顯著に塑性	22号集石	1	10TB3/4	に占比 黄褐色	シルト 10cmの細粒砂ブロックを厚層含む

21号集石遺構

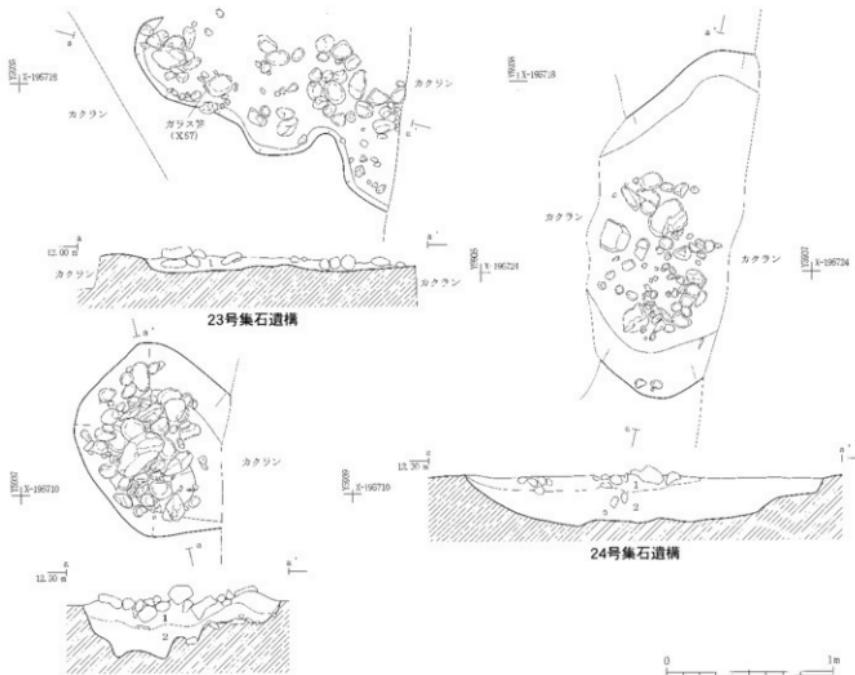
Y31・32、X46グリッドで検出し、S B 2 磚石跡43より新しい。長軸0.88m以上、短軸0.62mの不整橢円形の掘り込みの範囲に、径3~16cmの円礫が分布する。掘り込み底面は緩やかな傾斜をもち、壁の立ち上がりは緩やかである。北側は搅乱により失われている。出土遺物は無い。

22号集石遺構

Y29、X46グリッドで検出し、他遺構との重複関係は無い。一辺0.52m、深さ0.14mの隅丸方形の掘り込みの範囲に、径3~23cmの円礫が分布する。掘り込み底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは急である。上層には主に13~23cmの大型の円礫が、中層には3~6cmの小型の円礫がみられる。出土遺物は土師器片が1点ある。

23号集石遺構

Y29、X46グリッドで検出し、S B 3 磚石跡23より新しい。長軸1.66m、短軸0.94m以上、深さ0.12mの不整形の掘り込みの範囲に、径2~20cmの円礫が分布する。東側は搅乱のため失われているが、掘り込み底面は緩やかに起伏が認められ、壁の立ち上がりは緩やかである。礫は掘り込み底面より3cm程度浮いて検出された。なお底面より磚石跡23が検出されており、本集石の礫はこの礫が混入した可能性もある。出土遺物はガラス製笄の破片が1点ある。



第115図 集石遺構（2）

遺構	座標	形	色	土性	特徴	遺構	座標	土性	土性	特徴
23号集石	L 1 10TB9/4 1 10TB9/4	角	褐色	シルト	茶褐色砂質土を少含む、酸化鉄を含む	25号集石	1 10TB8/4 2 10TB4/6	褐色 褐色	シルト	褐色小塊石、灰白色砂質ブロックを含む
24号集石	2 10TB4/6	角	褐色	シルト	赤褐色砂質土を含む、褐色小塊石を含む					

24号集石遺構

Y28、X45グリッドで検出し、S K201より新しい。長軸2m程、短軸1.6m程、深さ0.34mの隅丸長方形の掘り込みの範囲に、径2～25cmの円礫や平瓦片が分布する。西側と東側が搅乱により失われているが、礫は掘り込みの西側に寄って検出された。堆積土は2層に分層されるが、礫は主に1層に集中して検出されている。出土遺物は平瓦片が7点ある。

25号集石遺構

Y28、X42・43グリッドで検出し、S B 3礫石跡5、西辺溝SD10より新しい。長軸1.2m、短軸0.94m、深さ0.34mの不整長方形の掘り込み範囲に径3～43cmの円礫や平瓦が密集して分布する。掘り込みの底面は起伏が著しく、西側は更に20cm程深くなっている。掘り込み部の堆積土は2層に分層されたが、礫は検出面に集中して分布している。掘り込み底面には径2～8cm程の円礫が密着して検出されたが、これらはSD10に関わるものとみられる。出土遺物は平瓦片等が17点ある。

26号集石遺構

Y30、X46グリッドで検出し、他遺構との重複関係は無い。径0.74m、深さ0.24mの不整円形の掘り込みの範囲に径2～15cmの円礫が分布する。西側は搅乱により失われているが、礫は堆積土中位より上層に集中し、径3～8cmのものを主体として上面で体が小さくなる傾向にある。掘り込み底面は緩やかな傾斜をもち、壁の立ち上がりも比較的緩やかである。堆積土は単一層である。出土遺物は無い。

27号集石遺構

Y28、X46グリッドで検出し、他遺構との重複関係は無い。長軸0.65m以上、短軸0.56m、深さ0.21mを測る不整円形の掘り込みの範囲に径2～15cmの円礫や平瓦が密集して分布する。北側は搅乱により失われており、掘り込みの底面は起伏が多く、壁の立ち上がりは急である。掘り込みの堆積土は単一層で、礫は上面を中心に底面付近まで分布している。出土遺物は平瓦片等が6点ある。

28号集石遺構

Y29・30、X44グリッドで検出し、他遺構との重複関係は無いが、小溝群2-17に近接して存在する。長軸0.68m、短軸0.64m、深さ0.12mで、主軸方向がN-45°-Eの楕円形の掘り込みの範囲に、径3～21cmの円礫が密集して分布する。礫は掘り込み底面にはば接してみられる。掘り込みの底面は平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。掘り込みの堆積土は単一層である。出土遺物は無い。

29号集石遺構

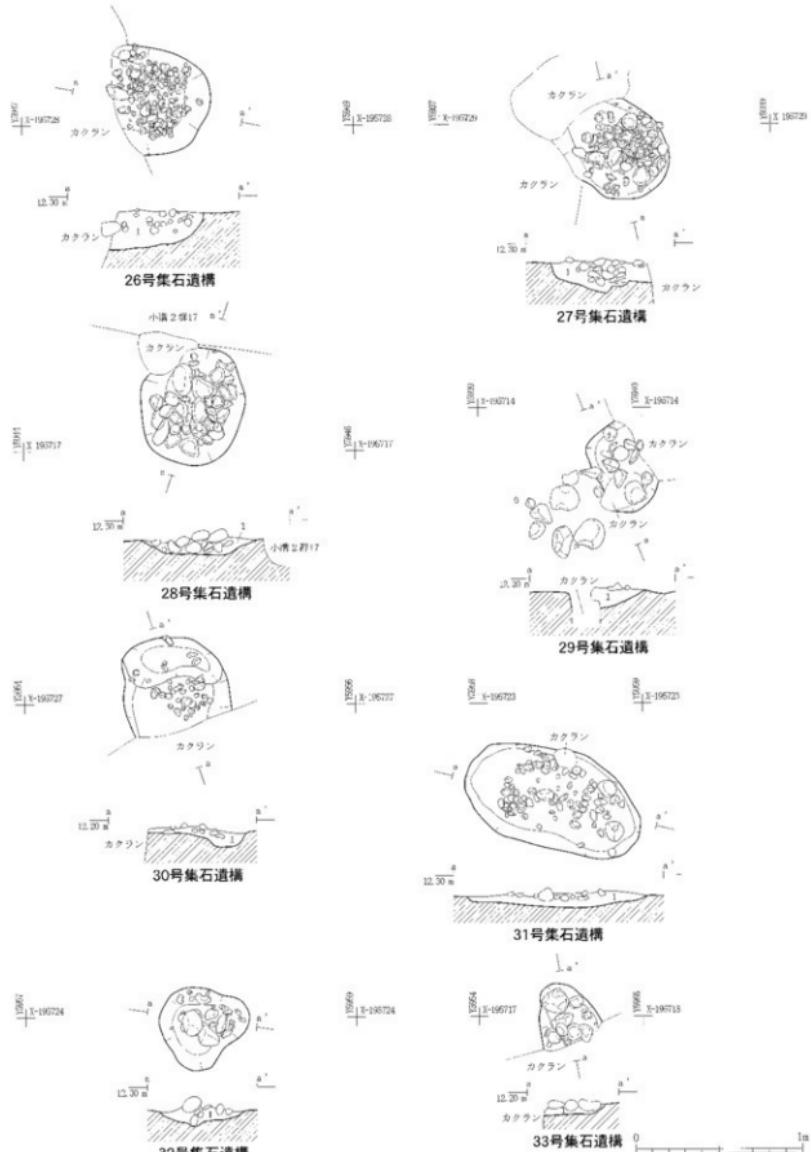
Y28・29、X43グリッドで検出し、他遺構との重複関係は無い。長軸0.9m以上、短軸0.56m、の範囲に径4～20cmの円礫の分布を確認し、礫を除去したところ、長軸0.55m、短軸0.35m以上、深さ0.12mで、主軸方向がN-29°-Wの隅丸長方形の土坑状の掘り込みを検出した。東側は搅乱により失われている。礫はこの土坑の堆積土上にのるが、土坑より集石の規模の方がやや広い。出土遺物は無い。

30号集石遺構

Y31・32、X46グリッドで検出し、他遺構との重複関係は無い。長軸0.58m、短軸0.52m、深さ0.1mで、主軸方向がN-70°-Wの楕円形の掘り込みの範囲に、径2～10cmの円礫が分布する。南側は搅乱により失われている。礫は掘り込み底面から2～5cm程浮いた状態で検出された。掘り込みの底面は緩やかに傾斜をもち、北側が0.12m程深く落ち込んでおり、壁の立ち上がりは緩やかである。出土遺物は無い。

31号集石遺構

Y32、X45グリッドで検出し、S B 2礫石跡28より新しい。長軸1.1m、短軸0.6m、深さ0.1mで、主軸方向がN-76°-Wの楕円形の掘り込みの範囲に、径1～12cmの円礫が分布する。堆積土は単一層でⅢ層に類似しており、礫は底面



位 置	土 色	土 性	特 徴	厚 さ	層 位	土 色	土 性	特 徴
26号集石 1	10794/4 褐色	シルト	褐色シルトコロナを多く含む、一部グライ化	30号集石	1 10795/5 黄褐色	シルト	褐色シルト・黄褐色シルトを多量含む	
27号集石 1	10795/6 黃褐色	シルト	黄褐色砂質土を多量含む	31号集石	1 10794/4 褐色	シルト	褐色シルト・黄褐色シルトを多量含む	
28号集石 4	1 10795/6 黃褐色	シルト	切端部ブロックを多量含む、一部グライ化	32号集石	1 10794/4 褐色	シルト	褐色シルト・黄褐色シルトを多量含む	
29号集石 1	1 10794/6 褐色	シルト	酸化状態微弱なびき、一部グライ化	33号集石	1 10795/5 褐色	シルト	褐色シルト・黄褐色シルトを多量含む	

第116図 集石遺構（3）

より5cm程浮き、検出面上で確認した。掘り込みの底面は緩やかに傾斜をもち、壁の立ち上がりも緩やかである。出土遺物は無い。

32号集石遺構

Y32、X45グリッドで検出し、S B 2 確石跡28より新しい。長軸0.54m、短軸0.5m、深さ0.16mの不整円形の掘り込みの範囲に径2～15cmの円礫が分布する。礫はほとんどが掘り込み底面から3～5cm程浮いた状態で検出された。掘り込みの断面形状は擂鉢状で、壁の立ち上がりも緩やかである。出土遺物は無い。

33号集石遺構

Y31、X44グリッドで検出し、他遺構との重複関係は無い。短軸0.34m、深さ0.06mで、主軸方向がN=23° -Wの不整楕円形の掘り込み範囲に、径1～16cmの円礫が分布する。南側は六角塔基礎により失われている。礫は掘り込み底面から2～5cm程浮いた状態で検出された。掘り込みの底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。出土遺物は無い。

34号集石遺構

Y33、X45グリッドで検出し、S B 2 確石跡23より新しい。長軸1.04m、短軸0.62m、深さ0.1mの不整形の掘り込みの範囲に径2～30cmの円礫が分布するが、主となるのは径2～5cm程の小型の礫である。礫は検出面から確認でき、掘り込み底面から5cm程浮いた位置で検出された。掘り込みの底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やかである。出土遺物は瓦片が1点出土した。

35号集石遺構

Y32・33、X45グリッドで検出し、他遺構との重複関係は無い。短軸0.86m、深さ0.48mで、主軸方向がN=25° -Eの不整形の掘り込み範囲に、径2～15cmの円礫が分布する。南側は搅乱により失われている。礫は掘り込みの南側にまとまっており、底面から僅かに浮いた状態で検出されたが、一部の礫は底面に密着している。掘り込みの底面は僅かに起伏を持ち、壁の立ち上がりは比較的緩やかである。出土遺物は無い。

36号集石遺構

Y31、X36グリッドで検出し、1号石敷遺構、SK89より新しい。径0.68m程の不整形の掘り込みの範囲に径1～11cmの円礫が分布する。礫は検出面上で確認されたが、検出を行ったのみで土坑部の掘り込みは行わなかった。出土遺物は無い。

37号集石遺構

Y31、X37グリッドの1号石敷遺構上で検出した。長軸0.34m、短軸0.24m、深さ0.12mの隅丸方形の掘り込みのほぼ中央に径30cmの大型の円礫と径10cm程の小型の円礫が底面に置かれていた。確石跡の可能性も考えられたが、他に組み合うものは無く、掘り込みの堆積土も人為的状況が認められなかったことから、集石遺構として取り扱つた。なお礫は外さず残し完掘までにはいたっていない。出土遺物は丸瓦片が3点ある。

38号集石遺構

Y31、X37・38グリッドの1号石敷遺構上で検出し、小溝群2-2より古い。0.74m×0.68mの不整円形とみられる範囲に径1～13cmの円礫が密集して分布する。南側は搅乱により失われている。礫の検出のみで掘り込んでいないが、径0.53mの不整円形の掘り込みプランを検出した。出土遺物は無い。

39号集石遺構

Y30、X38グリッドの1号石敷遺構上で検出した。長軸0.4m、短軸0.32m、深さ0.15mの円形の掘り込みの範囲に径2～12cmの円礫が分布する。北側の一部は搅乱により失われている。礫は掘り込みの中央にまとまっており、底面から4～10cm程浮いた状態で検出された。掘り込みの断面形状は擂鉢状である。出土遺物は無い。

40号集石遺構

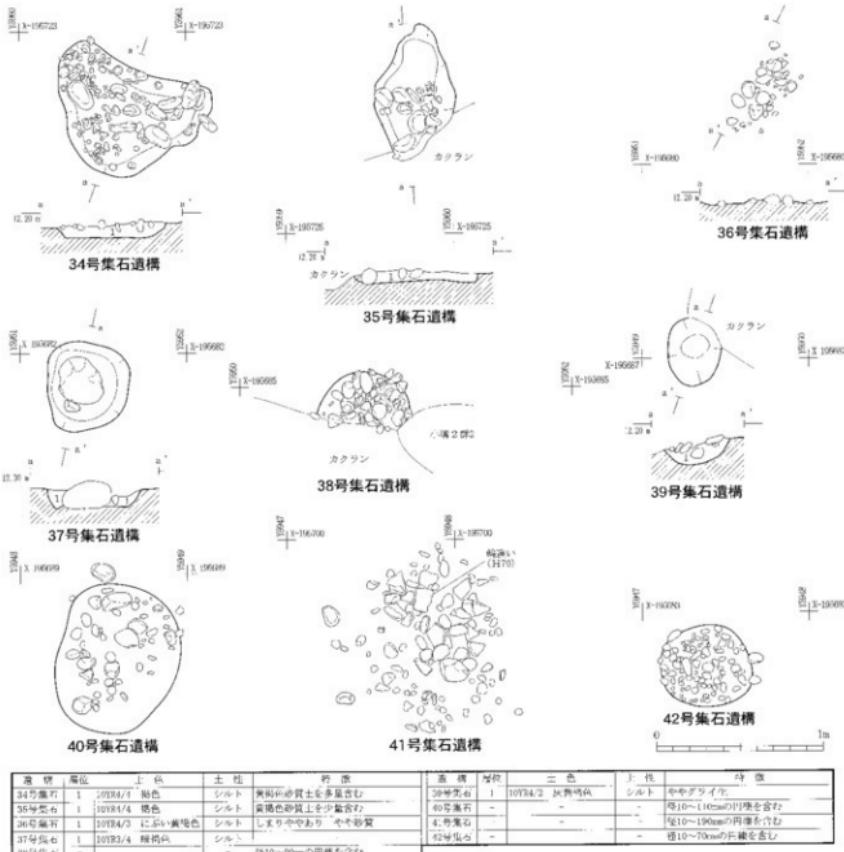
Y30、X38グリッドの1号石敷造構上で検出した。長軸0.94m、短軸0.74mの楕円形の範囲に径1~15cmの円礫が散乱して分布する。礫の検出のみで掘り込んでいないが、礫の分布範囲と重複するように長軸0.6m、短軸0.49mで、主軸方向がN~8°~Eの不整楕円形の掘り込みが検出されている。出土遺物は無い。

41号集石遺構

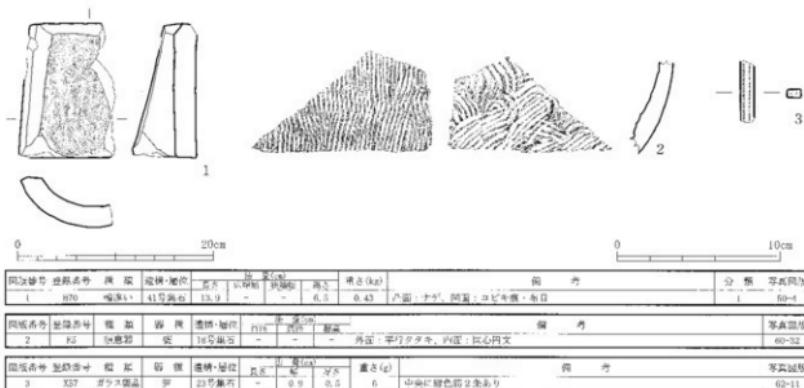
Y30、X41グリッドの1号石敷造構上で検出した。長軸1.36m、短軸1.16mの不整円形の範囲に径1~13cmの円礫や瓦片が散乱して分布する。特に北側には径5~13cmの比較的大型の円礫がまとまる傾向にある。掘り込み等は認められない。出土遺物は平瓦等が24点ある。

42号集石遺構

Y30、X37グリッドの1号石敷造構上で検出した。径0.56mの円形の範囲に径1~12cmの円礫が散乱して分布する。主体となるのは径1~3cmの小型の円礫である。礫の検出のみで掘り込んでないが、礫の分布範囲と重複するように径0.56mの不整円形の土坑状の掘り込みが検出されている。出土遺物は無い。



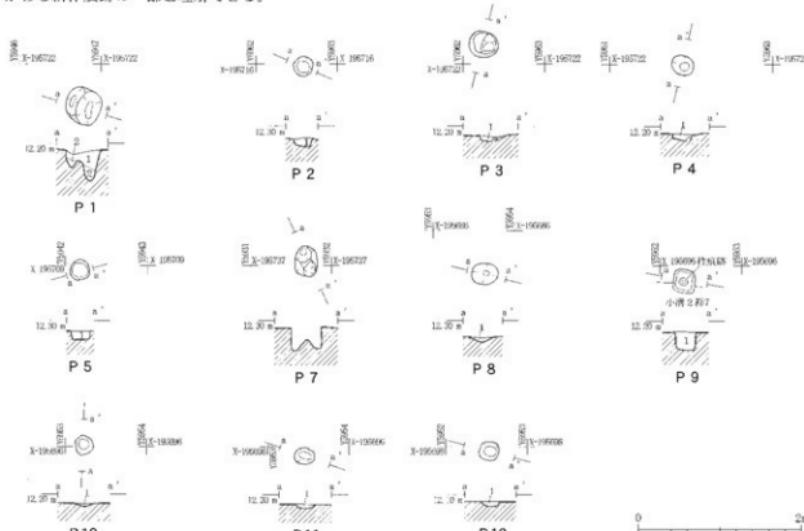
第117図 集石遺構(4)



第118図 集石遺構出土遺物

(5) ピット

IV層上面において33基を確認した。掘り込んだものはP 1～P 12までの12基で、P 15～P 33までの21基は検出に止め、掘り込んでいない。なおP 13とP 14については第4次調査時に掘り込んだものである。平面形状は円形または不整円形を主体とし、柱痕跡はP 9で確認されたのみであった。また建物跡などの存在を示すような規則性のある配列は認められず、その性格は不明である。堆積土はⅢ層に類似するものが多く、その多くは耕作にかかわる耕作痕跡の一部と理解できる。



底 構	番号	上 地	土 色	特 徴	底 構	番号	上 地	土 色	特 徴	
P1	1	10Y34/4	褐色	シルト	黒色ブロックの混じた	P7	1	-	-	透光なし
	2	10Y34/4	にぬ、青褐色	シント	黄褐色シルトのほほり跡	P8	1	10Y34/4	褐色	-
P7	1	10Y34/4	褐色	シルト	青褐色の質ブロックが少々含む	P9	1	10Y34/4	褐色	シルト、円錐を含むややグライ化
P4	1	10Y34/6	褐色	シルト	青褐色の質ブロックを多量含む	P10	1	10Y34/4	褐色	シルト
P6	1	10Y35/6	灰褐色	シルト	黄褐色の質土を多量含む	P11	1	10Y34/4	褐色	シルト、-
						P12	1	10Y34/4	褐色	シルト、-

第119図 ピット

遺構	棟北区画	平面形状	組合 (a)	柱頭部	出土遺物・底面塗装	遺構	棟北区画	平面形状	組合 (a)	柱頭部	出土遺物・底面塗装		
F1	Y30, X45	不規則形	0.48	0.43	0.45	美	小標記2-1-5K15を切る	2-8	Y31, X38	小標記2-1-5	0.32	0.27	0.03
F2	Y35, X44	不規則形	0.25	0.24	0.11	無	502を切る	2-9	Y31, X40	刀刃形	0.3	0.26	0.22
F3	Y30, X45	不規則形	0.37	0.32	0.12	無	507を切る	P10	Y31, X40	不規則形	0.53	0.61	0.06
F4	Y35, X46	不規則形	0.28	0.24	0.08	無	507を切る	F11	Y31, X40	不規則形	0.42	0.51	0.06
F5	Y29, X42	不規則形	0.25	0.21	0.11	無	5859を切る	P12	Y31, X40	不規則形	0.6	0.59	0.08
P7	Y27, X48	不規則形	0.37	0.27	0.27	無							

第4表 IV層上面検出ピット一覧表

遺構	棟北区画	平面形状	組合 (a)	底面	備考	遺構	棟北区画	平面形状	組合 (a)	底面	備考
S494	Y29, X36	不規則形	0.31	0.17		S5108	Y32, X42	不規則形	0.44	0.31	
S495	Y29, X36	円形	0.61			S5109	Y32, X45	不規則形	0.42	0.34	
S496	Y29, X37	不規則形	0.53	0.42	1号石斧より新	S5110	Y32, X43	不規則形	0.29	0.28	
S497	T21, X36	不規則形	-	1.07	1号石斧より新、5859より古	S5111	Y32, X43	不規則形	0.23		
S498	Y30, X41, 1B-1, 1B-2	不規則形	1.39	0.39	5859より古、SK02より古	S5112	Y32, X43	不規則形	0.54	0.49	
S499	Y30, X37	不規則形	0.29		1号石斧より新	S5113	Y31, X43	不規則形	0.31	0.27	小標記2-1より古
S500	Y30, X37	不規則形	-	0.47	1号石斧より新	S5114	Y32, X43	不規則形	0.87		SK03より古、1号石斧より古
S501	Y30, X37	円形	0.43		1号石斧より新	S5115	Y33, X43	不規則形	-	0.31	SB-2地磚17.2より新
S5102	Y29, X36, X38	不規則形	0.58		1号石斧より新	S5116	Y32, X43	不規則形	0.57		SB-2地磚10.2より古、小標記2-1より古
S5103	Y29, X36, X38	不規則形	0.68		1号石斧より新	S5117	Y32, X43	不規則形	0.66	0.60	SK02より古、SB-2地磚15より新
S5104	Y31, X37	八角形	0.68		1号石斧より新	S5118	Y32, X43	不規則形	0.78		小標記2-2より古、2連鏡より新
S5105	Y30, X37	八角形	0.65		1号石斧より新	S5119	Y30, X45	円形	0.65		小標記2-2より古、3連鏡より新
S5106	Y30, X37, 1B-1, 1B-2	不規則形	0.95		1号石斧より新	S5120	Y29, X38	不規則形	-		小標記2-2より古、1号石斧
S5107	Y30, X39	不規則形	0.84	0.74	1号石斧より新	S5121	Y30, X45	不規則形	0.28	0.18	
S5108	Y29, X39	不規則形	0.38		1号石斧より新	S5122	Y31, X43	不規則形	0.29	0.24	
S5109	Y29, X39	円形	0.30		SK02より古	S5123	Y30, X45	不規則形	0.41	0.22	
S5110	Y30, X40	不規則形	0.52	0.37	1号石斧より新	S5124	Y31, X45	円形	0.19		
S5111	Y24, X36	不規則形	0.83	0.45	501より古	S5125	Y29, X47	不規則形	0.25		
S5112	Y24, X38	不規則形	0.26	0.18	SK11より新	S5126	Y33, X45	不規則形	0.41	0.39	SK43より古、立壁跡より新
S5113	Y24-34, X38	不規則形	0.37	0.27	小標記2-2より古	S5127	Y29, X47	不規則形	0.43	0.27	SB-2地磚38.0より新
S5114	Y24-35, X39	不規則形	-	0.63		S5128	Y32, X47	不規則形	0.41	0.33	
S5115	Y34, X39	不規則形	0.39	0.32		S5129	Y27-32, X47	不規則形	0.56	0.41	
S5116	Y22-33, X38	不規則形	1.35	0.39	小標記2-3より古	S5130	Y26, X48	不規則形	0.37	0.33	
S5117	Y33, X38-39	圓形	0.46			S5131	Y21, X49	不規則形	0.24	0.20	
S5118	Y22-33, X39	圓形	0.47	0.37		S5132	Y33, X42	不規則形	-	0.30	SB-6より新
S5119	Y23, X38	不規則形	0.55	0.43		S5133	Y33, X42	不規則形	-		
S5120	Y23, X38	不規則形	-	-		S5134	Y33, X42	不規則形	-		
S5121	Y23, X39	不規則形	0.51	0.29		S5135	Y28, X41	不規則形	-		
S5122	Y23, X39	不規則形	-	0.46	SK123より古	S5136	Y28, X41	不規則形	-		
S5123	Y24, X39	不規則形	-	0.46	SK122より新	S5137	Y28, X41	不規則形	-		
S5124	Y24, X39	不規則形	-	0.47		S5138	Y28, X41	不規則形	-		
S5125	Y24, X39	不規則形	0.35	0.35		S5139	Y28, X41	不規則形	-		
S5126	Y23, X39	八角形	0.42	0.29		S5140	Y28, X41	不規則形	-		
S5127	Y23, X39	不規則形	0.61	0.54		S5141	Y28, X41	不規則形	1.28	1.10	
S5128	Y24, X39	不規則形	0.95	0.71		S5142	Y28, X42	不規則形	0.81	0.61	SK193より古
S5129	Y25, X39	不規則形	-	0.57	SK130より古	S5143	Y27-32, X47	八角形	1.45		SK190より古
S5130	Y21-32, X39	不規則形	0.34	0.27	SK129より新	S5144	Y27, X42	不規則形	0.69	-	
S5131	Y22, X39	不規則形	0.38	0.33		S5145	Y27, X42	不規則形	-		
S5132	Y31-39, 40	不規則形	0.41	0.15		S5146	Y27-37, X42	不規則形	1.60	1.45	
S5133	Y31, X39-40	不規則形	-	0.66	小標記2-4より上	S5147	Y27, X43	不規則形	-	0.55	
S5134	Y22, X40	不規則形	0.26	0.25		S5148	Y27-29, X42	不規則形	0.64	0.54	
S5135	Y22, X40	不規則形	0.37	0.29	SB-1地磚27より新	S5149	Y27, X44	不規則形	0.35	0.30	SPUより新
S5136	Y21, X40	不規則形	0.38	0.29		S5150	Y28, X45	不規則形	0.49	0.41	
S5137	Y21, X40	不規則形	0.65	0.64		S5151	Y28, X45	不規則形	-		
S5138	Y21, X40	不規則形	0.37	0.29		S5152	Y28, X45	不規則形	0.81	0.61	SK193より古
S5139	Y21, X40	不規則形	0.38	0.29		S5153	Y28, X45	不規則形	1.45		
S5140	Y21, X41	小標形	0.43		小標記2-8より古	S5154	Y27, X45	不規則形	0.69	-	
S5141	Y21, X41	八角形	0.46			S5155	Y27, X47	不規則形	-		
S5142	Y21, X41-42	不規則形	0.68	-	小標記2-8より古	S5156	Y27, X47	不規則形	0.66	-	
S5143	Y21, X41-42	不規則形	0.68	0.13	小標記2-11より古	S5157	Y27, X47	不規則形	0.26		
S5144	Y21, X41-42	不規則形	0.72	0.44	小標記2-11より古	S5158	Y27, X47	不規則形	0.26		
S5145	Y21, X41-42	不規則形	0.46	0.33	小標記2-11より古	S5159	Y27, X47	不規則形	0.26		
S5146	Y21, X41-42	不規則形	0.43	0.36	小標記2-11より古	S5160	Y27, X47	不規則形	0.26		
S5147	Y21, X42	不規則形	0.37	0.24		S5161	Y27, X47	不規則形	0.26		
S5148	Y21, X42	不規則形	0.40	0.31		S5162	Y27, X47	不規則形	0.26		
S5149	Y21, X42	不規則形	0.65	0.69	SD19.4より新	S5163	Y27, X47	不規則形	0.26		
S5150	Y29, X42	不規則形	0.90	-	小標記2-13より古	S5164	Y27, X47	不規則形	0.26		
S5151	Y31, X42	不規則形	0.23	0.18		S5165	Y27, X47	不規則形	0.26		
S5152	Y31, X42	不規則形	0.36	0.19		S5166	Y27, X47	不規則形	0.26		
S5153	Y31, X42	不規則形	-	-		S5167	Y27, X47	不規則形	0.26		
S5154	Y31, X42	不規則形	1.16	0.36	小標記2-12-5K17.2より古	S5168	Y27, X47	不規則形	0.26		

第5表 IV層上面検出土坑・ピット一覧表（未掘削）

第3節 VI層上面の遺構

VI層は若林城跡に伴う整地層であるIV層の下層で確認した洪水起源の基盤層である。調査区全体で安定的に確認されており、周辺遺跡における古代から近世にかけての遺構検出面でもある。今回の調査では整地層の掘削までは行なっていないため、VI層にかかる調査は搅乱などを利用した断面調査を部分的に実施することで幾つかの遺構を確認している。VI層面で確認した遺構は溝跡1条、土坑1基である。

(1) 溝 跡

26号溝跡

調査区南側のY31～33、X46グリッドのL字形搅乱で検出された溝跡で、VI層面から掘り込んでいる。搅乱部底面において一部溝の掘り込み調査を行った他は断面による確認である。溝跡の底面は起伏をもち、壁は溝底面から緩やかに立ち上がった後、さらに緩い傾斜で外側に立ち上がる。断面から見た溝幅は外側で8.5m以上、深さは1.2m程度である。堆積土は11層に分離され、いずれも自然堆積とみられる。

整地層下のため、溝跡の平面形を追うことは難しいが、IV層上面での空中写真を観察すると、溝跡の南北延長線上において、整地層が帯状に黒色化している範囲が確認された。これは整地時、溝内堆積土上部があまり大きく移動しない程度の造成による削平作業により、溝跡のプランが残存した結果によるものと推定され、これらから溝跡は調査区をほぼ南北方向に縱断すると推定される。ただし第4次調査1区における下層確認トレレンチにおいてはVI層が北側に向かって立ち上がる状況が確認されており、溝跡は北側で途切れるかあるいは屈曲する可能性もある。出土遺物は4層中より僅かに十師器片が2点あるのみである。また溝内には砂の流入が少なく、かつての河川跡の堆積状況とは異なり、同時に周辺地域にみられる城館等に伴う堀跡内や古墳の周溝内での状況とも異なることから、現時点ではこの溝跡の性格については不明と言わざるを得ない。

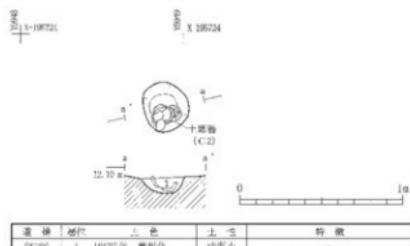
基本層V層と溝内堆積土9・10層についてはプラント・オパールおよび花粉分析を実施している。詳細は後に譲るが、9・10層は花粉密度が極めて低く堆積速度が遅い状況が想定される。7層から上層は有機質土と粘土層とが互層になっており、帶水状態と止水状態が交互に繰り返されたと考えられ、溝としての機能が失われたことを示唆している。また、最上層の基本層V層からもプラント・オパールが検出されており、溝周辺での稲作が推定されている。

なお、SD26西側の断面において土坑状の落ち込みを2か所で確認している。その一つは焼面は認められないものの、堆積土中には炭化物や焼上が多く混入しており、堅穴住居跡などの存在も考えられる。

(2) 土 坑

206号土坑

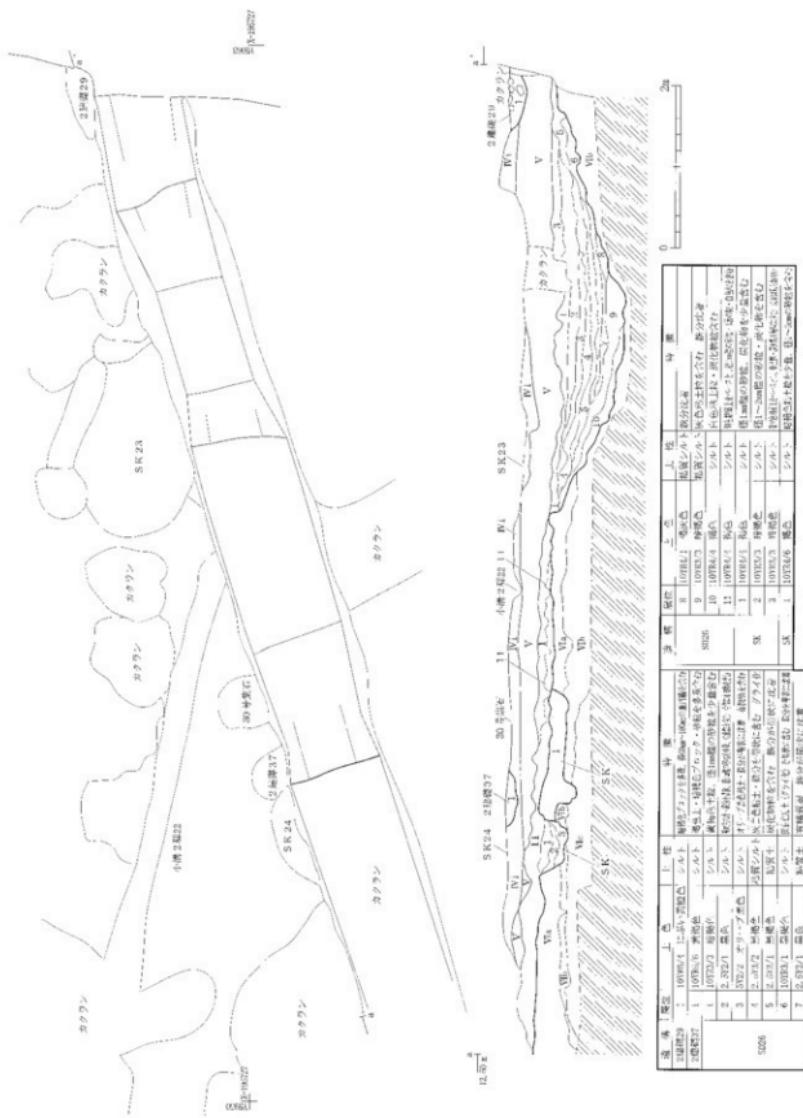
Y30、X45グリッドで検出され、他遺構との重複はない。搅乱内で検出されたため検出面は不明確であるが、出土した遺物からVI層上面に開通する遺構として判断した。形状は不規則形で、規模は長軸0.3m、短軸0.27m、深さ0.12mで、断面形状は擂鉢状である。底面の南側から小型の十師器甕(C2)が正位に据え置かれた状況で出土した。堆積土は單一層で黄褐色砂質土を主体とした人為堆積とみられる。堅穴住居跡の存在の可能性も考慮し周辺を精査したが土坑以外の施設等は確認できなかった。



第120図 206号土坑



第121図 VI層遺構配置図



第122図 26号溝跡（搅乱内検出）



第123図 206号土坑出土遺物

第4節 近代の遺構

(1) 刑務所関連遺構

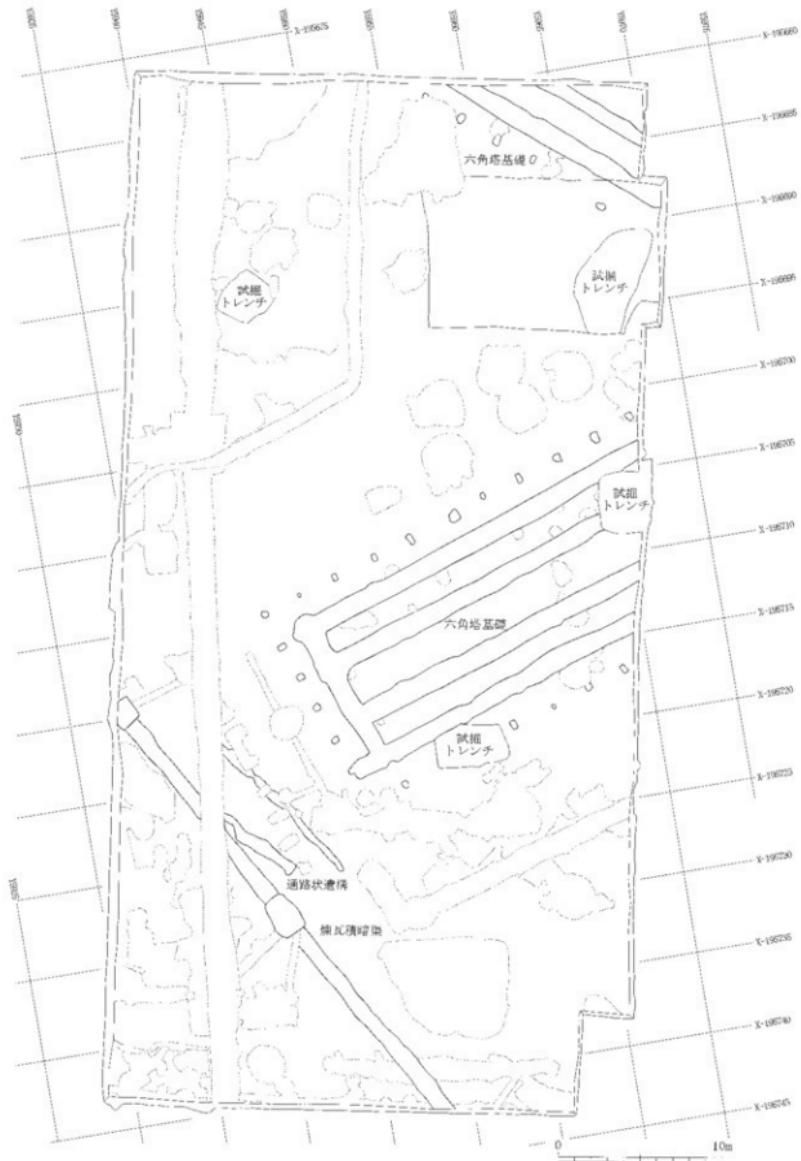
六角塔

近代の整地層であるⅡ層除去段階において、拳大以上の円礫が充填された大規模な布壠状の基礎構造を数条確認した。これは位置や構造から、明治12年に建築された宮城集治監に伴う六角放射監舍房（六角塔）の基礎であることが明らかとなった。基礎自体は第4次調査時にも確認されており、今回の調査区内にはその延長部分が確認された。

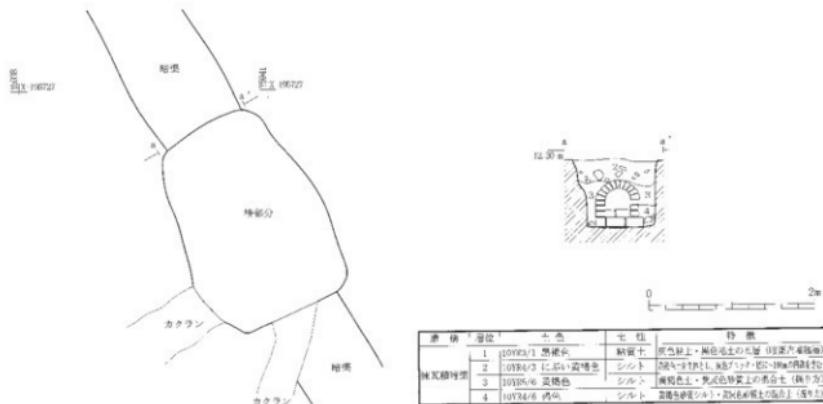
基礎の円礫については調査の都合上、重機により除去することとなったが、各所において遺構の記録と共に掘り方の断面や平面形の記録をとることとなった。今回確認した基礎による建物は六角塔の北東側と南西側に配置された「2号舍房」と「3号舍房」にあたる。2号舍房は2本の基礎が確認され調査区外にかかるが、3号舍房の基礎はほぼ全体形を確認することができた。基礎は建物の壁構造にあわせて幅10mのコ字状の布壠状基礎の中に更に2本の布壠状基礎が走る構造をとり、外壁側の布壠幅は1.3m程度であるが、部屋と廊下を仕切る内側の2本は1.1m程度とやや狭くなる。基礎内では10~30cm程度の円礫を充填した上に径50cm以上の巨礫を数段積み上げることにより建物上台を直接支える基礎としている。掘り方底面までの深さはⅡ層上面から0.7m程度であるが、調査区壁面の断面観察から、Ⅱ層は建物下とその周辺が厚く上盛りされた盛土であったとみられる。また布基礎の周間に長軸0.3m短軸0.2m程度の長方形のピットが2.6m程度の間隔で2号舍房側に5基、3号舍房側に21基確認しているが、これらは建物建築時の足場用のピットとみられる。

煉瓦積暗渠

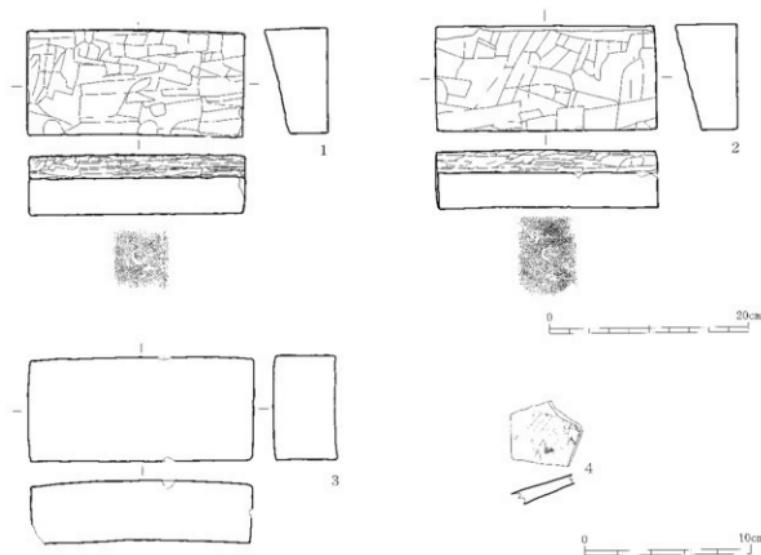
Ⅲ層上面で調査区の南西側を斜めに横切るように煉瓦積暗渠を検出した。確認長は32m程度あり、さらに調査区外に延びていく。幅1m・深さ0.85m程度の布壠状の掘り方の底面に「全形」と「半ます」の煉瓦を3列5目に焼き、その上に壁として瓦目の長手積みで3段積み上げ、さらにアーチ状に積み上げ天井としている。この天井を構成する煉瓦は「全形」の煉瓦の側面を打ち欠いて楔形に成形したものを使っている。暗渠の内寸は幅0.3m、高さ0.35mである。煉瓦の目地はいずれも砂目地である。煉瓦上部の掘り方内は黄褐色ブロック上により埋め戻している。この暗



第124図 近代の遺構配置図



第125図 煉瓦積暗渠



第126図 近代の遺構出土遺物

渠は排水路として用いられたようで、3か所で陶製排水管（土管）が接続されており、暗渠底面には厚さ10cm程の汚泥が堆積している。また北側と中央の2か所には同様の煉瓦積の沈殿枠が造られている。北側の枠はコンクリートにより後に補修されていたが、中央のものは暗渠部同様、「全形」の煉瓦を互目の長手積みで積み上げ壁としており、底面は煉瓦を敷かない浸透枠であったとみられる。枠の蓋には長さ3m、幅0.8m程の板石3枚を用いている。暗渠は撤去せずに埋め戻し、サンブルとして一部の煉瓦を探取した。煉瓦は「全形」の縦210cm×横100cm×厚さ60cmを標準とするもので、円形ないしはヘラによる刻印が認められるものもある。これらは宮城集治監内で作られた、いわゆる「囚人煉瓦」と考えられる。出土遺物は瓦が12点のほか、近代とみられる棟瓦片10点がある。サンブルとして採取した煉瓦3点を図示した。

通路状遺構

II層削削後のⅢ層面近くのY28・29、X44～46グリッドにおいて、煉瓦積暗渠の北側にはほぼ並行して径5～10cm程の円礫を幅2m程に敷き詰めた石敷のプランを検出した。石敷はⅢ層面に近く、近世遺構の可能性も考えられたためこれを精査したところ、石敷に沿って両側に幅0.6～0.8m程の溝を検出し、また石敷下面には硬化面を伴うことから通路状の遺構であることが明らかとなった。溝は側溝とみられ、溝内には径5～10cm程の円礫が貼り付けられており、路面と一体の構造を持っている。確認長は10m程で、路面幅は2～2.2mあり、北西および南西側は擾乱により失われている。路面および側溝内より近世の瓦片61点、近現代とみられる棟瓦片10点、磁器1点が出土した。J5は中国青花の皿で、見込み文様は草花文である。

第5節 基本層出土の遺物

表上除去や擾乱削削時、基本層Ⅲ層削削時などにおいて、遺構に帰属しない遺物が多く出土している。数的には若林城期の遺物が主体を占めるものの、繩文時代から近代にかけての多岐にわたる遺物が出土している。しかしこれらは全て本来の位置を保っているものではないとみられる。

[基本層I・II層出土遺物]

主に表上削削時に出土した遺物で、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、面戸瓦が259点のほか、土師器4点、陶器83点、磁器6点、土師質土器皿84点、土製品1点、鉄製品2点、近代とみられる棟瓦70点がある。

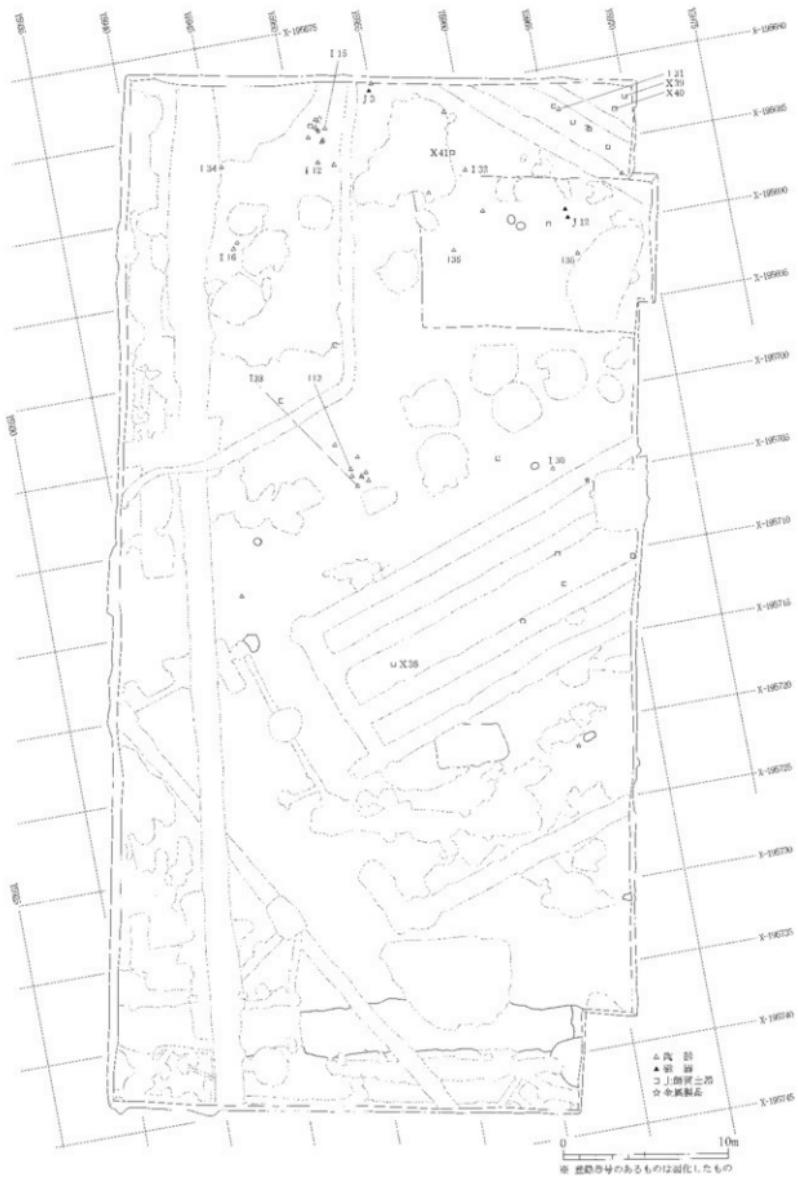
I21は京・信楽系色絵陶器小皿で草花文である。I25は江戸後期の灰釉の小甕ないし在地産の鉢とみられる。I24は「赤物」鉢の口縁部、I22は鉄袖鑄鉢の底部で、内面は粗い摺り目、底部は回転糸切りである。産地は不明である。J6は初期伊万里磁器染付筒型碗で、外面は梅花文、内面は櫛歯である。J7は磁器碗で昭和時代の工場食器と呼ばれるものである。内部には黄色塗料塊が付着する。クロム釉による圓線が2重に周り、高台内には統制記号「岐1044」がクロム印で押印している。

P1は埴堀の口縁部で、内面には光沢のある付着物が認められるが、何を溶解したかは不明である。

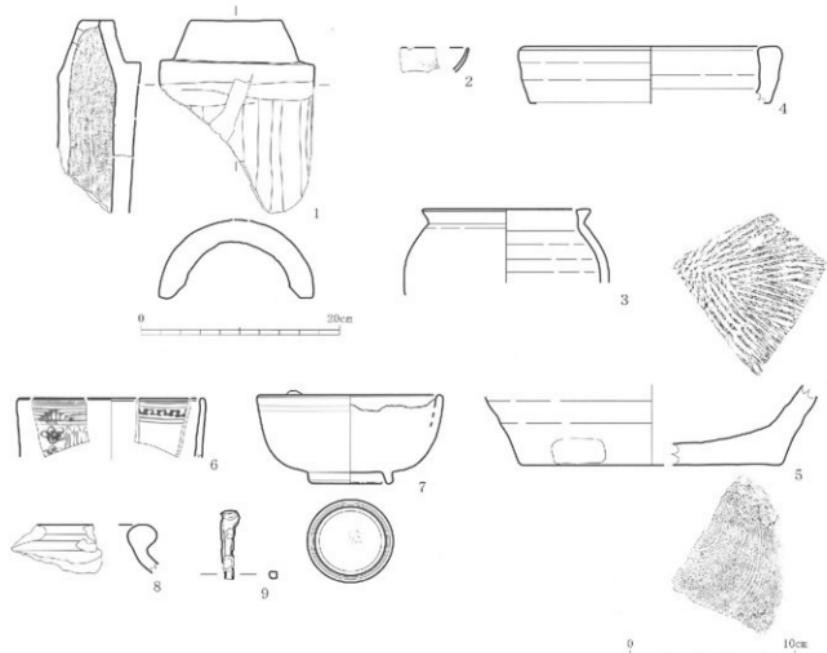
[基本層Ⅲ層出土遺物]

Ⅲ層中からは、軒丸瓦36点、丸瓦326点、軒平瓦24点、平瓦2,660点、熨斗瓦116点、輪違い347点、菊丸瓦6点、面戸瓦44点、鬼瓦1点など合計4928点が出土したほか、瓦以外の遺物では、土師器92点、須恵器9点、陶器71点、磁器14点、瓦質土器29点、土師質土器皿64点、焼塙壺2点、剥片石器1点、石製品3点、銅鏡1点、鉄製品32点、煉瓦4点がある。

F9・12・14は軒丸瓦の瓦当部で、瓦当文様はF12が珠文の無い三巴文（左巻き）、F9・14が珠文三巴文（左巻き）である。F14の剥落部には櫛状工具による接合痕が認められる。F18・53～57・59は丸瓦で、F18の凹面には櫛状工具による刺突痕が認められ、F53の凹面には棒状工具による刺突痕が認められる。またF57と59には釘穴が認められる。



第127図 Ⅲ層中遺物出土状況（瓦を除く）

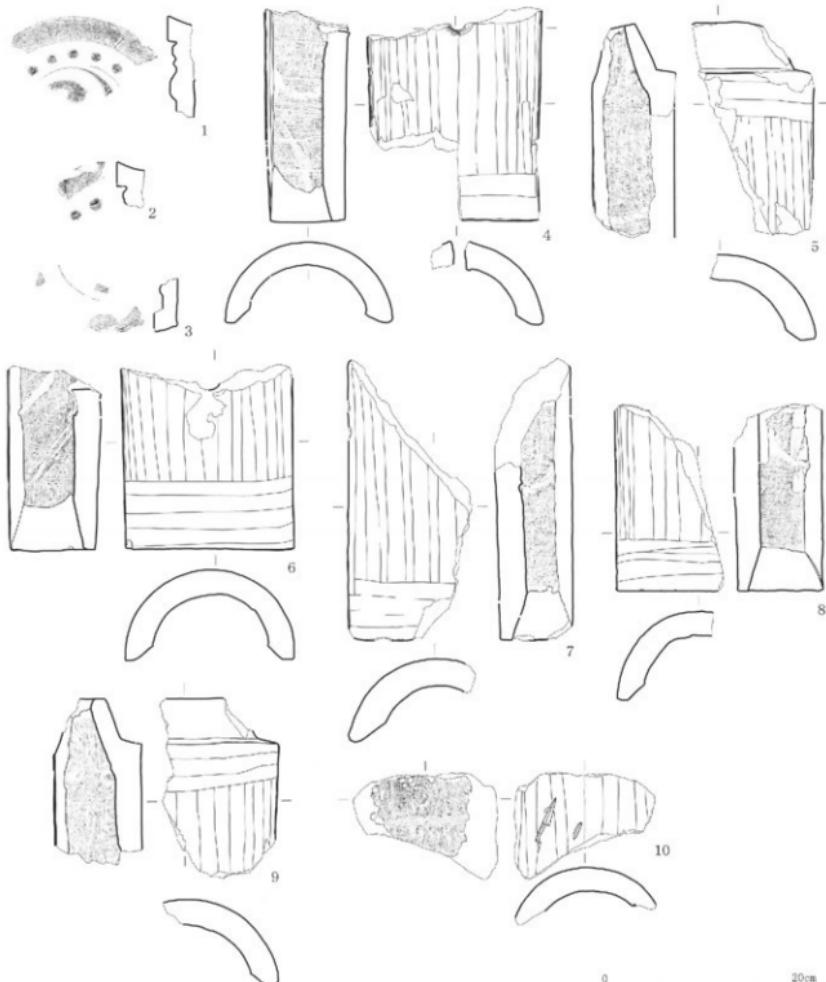


実物番号	形名番号	種類	形状・断面	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	高さ(cm)	重さ(g)	備考	分類	写真図版		
1	F80	瓦瓦	1・II層	-	11.7	2.3	0.80	4.3	0.84	凸面・ナデ・凹面	1	写真図版	
2	221	繩目	直?	1・II層	-	-	-	-	波打つ型文	56-11	写真図版		
3	115	繩目	直	1・II層	(16.2)	-	-	-	直付?	16C以前	56-14	写真	
4	124	繩目	直	1・II層	15.4	-	-	-	江戸	赤物、ナデ	56-15	写真	
5	122	繩目	切付	1・II層	-	(11.6)	-	-	不明	江戸	赤物、ロクタ繩目、施湯糸切り	56-16	写真
6	26	繩目	凸凹輪	1・II層	11.9	-	-	-	肥前	17C前半	55-25	写真	
7	27	繩目	輪	1・II層	10.3	6.7	0.5	-	美濃	土器食器、クロム飾り縁、薄白内	57-22	写真物付	
実物番号	形名番号	種類	形状	造形・断面	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	高さ(cm)	備考	分類	写真図版		
8	F1	一型品	短?	1・II層	-	-	-	-	光沢付素物	61-1	写真		
実物番号	形名番号	種類	形状	造形・断面	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	高さ(cm)	備考	分類	写真図版		
9	H31	新御品	直	1・II層	-	6.0	6.0	5	-	-	61-29	写真	

第128図 基本層I・II層出土遺物

G 8・15・16は軒平瓦で、中心飾りはG 15が菊花文、G 16が三葉文、G 8が唐草文の形状から三葉文とみられる。G 9~14・17は滴水瓦で、中心飾りは全て花菱文と推定される。G 130は平瓦で幅は29.4cmである。

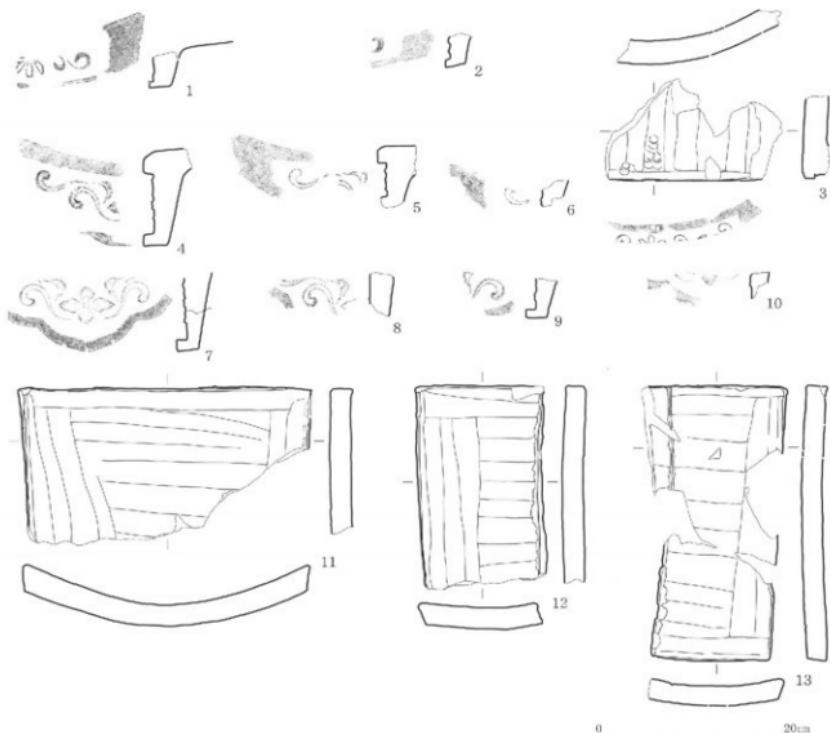
H22・23は焼成後分割の楕斗瓦で、H22は長さ28.1cmである。H27・73~76は輪邊いで、H27・74・75は直線的に窄まる形状である。これに対しH73・76は凹面には綱压痕が認められ、H73の凸面には縦方向の強いナデによる調整、H76は他のものよりも大型であるなど、丸瓦の形状や製作上の特徴を有している。このことから両者は丸瓦素材からの転用により作られたものである可能性が高い。H110~113は菊丸瓦で、H110は全体形状がわかるものである。H99~101は面戸瓦で長方形のものである。



0 20cm

遺物番号	登録番号	種類	造形・時代	文様	長さ(cm)	幅(cm)	内径(cm)	周径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	分類	写真記載
1	F14	骨尖端	直面	秋文二三巴文	-	-	2.0	6.9	0.27	瓦芸端; 巴左垂・周径1.4cm	丸	B0-6	
2	F9	骨尖端	直面	秋文三巴文	-	-	2.0	6.9	0.07	瓦芸端; 深径1.3cm	丸	B0-7	
3	F12	骨尖端	直面	三巴文	-	-	1.9	6.9	0.16	瓦芸端; 巴左垂	丸	B0-8	
4	F57	丸瓦	直面	-	17.3	2.4	8.5	-	1.33	凸面: ナギ、凹面: コビキ文模・布目・網状模、斜次あり	-	B0-9	
5	F54	丸瓦	直面	-	2.6	8.8	4.7	9.90	-	凸面: ナギ、凹面: コビキ文模・布目・網状模	1	B0-10	
6	F59	丸瓦	直面	-	17.1	2.6	9.3	-	1.61	凸面: ナギ、凹面: コビキ文模・斜次あり	-	B0-11	
7	F53	丸瓦	直面	-	2.7	8.4	-	1.24	凸面: ナギ、凹面: コビキ文模・斜次模	-	B0-12		
8	F56	丸瓦	直面	-	2.4	9.0	-	0.90	凸面: ナギ、凹面: コビキ文模・布目・拂拭工具による三筋	-	B0-13		
9	F55	丸瓦	直面	-	2.6	-	4.1	9.90	凸面: ナギ、凹面: コビキ文模・布目	1	B0-14		
10	F18	丸瓦	直面	-	7.4	(5.9)	-	0.46	凸面: ナギ、凹面: コビキ文模・布目・種状斜空模	-	B0-15		

第129図 基本層Ⅲ層出土遺物（1）



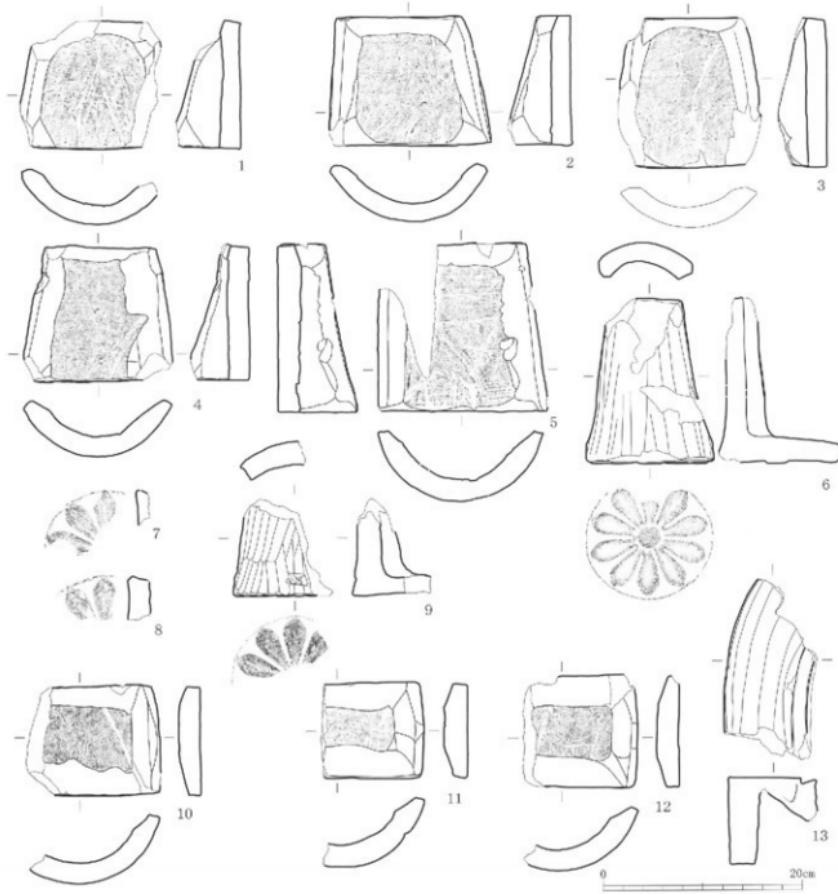
試験番号	登録番号	種類	遺構・部位	実 高	長さ(cm)	幅(横) (cm)	幅(縦) (cm)	厚さ(cm)	内寸(cm)	重さ(kg)	備 考	分 類	写 真 図 版	
1	G10	鉢平瓦	皿端	三葉文+唐草文	-	-	-	-	-	9.33	-	IA	51-1	
2	G8	鉢平瓦	皿端	(三葉文+)+唐草文	-	-	-	-	-	9.98	-	IA	51-2	
3	G15	鉢平瓦	皿端	唐草文+唐草文	-	-	-	-	-	9.47	凸面:ナデ、凹面:ナデ 三共形(F形)あり	IC	51-3	
4	G11	鉢平瓦	皿端	花葉文+唐草文+子葉	-	-	-	-	-	9.55	渋水瓦	2A	51-4	
5	G9	鉢平瓦	皿端	(花葉文+)+唐草文	-	-	-	-	-	9.31	渋水瓦	2A	51-5	
6	G14	鉢平瓦	皿端	(花葉文+)+唐草文	-	-	-	-	-	9.19	渋水瓦	2A	51-6	
7	G13	鉢平瓦	皿端	花葉文+唐草文+子葉	-	-	-	-	-	1.6	9.37	渋水瓦	2A	51-7
8	G12	鉢平瓦	皿端	花葉文+唐草文+子葉	-	-	-	-	-	9.11	渋水瓦	2A	51-8	
9	G17	鉢平瓦	皿端	(花葉文+)+唐草文	-	-	-	-	-	9.06	渋水瓦	2A	51-9	
10	G10	鉢平瓦	皿端	花葉文+唐草文	-	-	-	-	-	9.07	渋水瓦	2A	51-10	
0 20cm														

試験番号	登録番号	種類	遺構・部位	実 高	長さ(cm)	幅(横) (cm)	幅(縦) (cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	備 考	分 類	写 真 図 版
11	G126	平瓦	皿端	-	29.4	-	2.2	1.50	凸面:ナデ+渋炒、凹面:ナデ	-	I	51-11

試験番号	登録番号	種類	遺構・部位	実 高	長さ(cm)	幅(横) (cm)	幅(縦) (cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	備 考	分 類	写 真 図 版
12	E23	鉢平瓦	皿端	-	12.8	-	2.1	9.82	渋反覆分割、凸面:ナデ+渋炒、凹面:ナデ	-	1①	51-12
13	E22	鉢平瓦	皿端	28.1	14.9	11.9	2.0	1.00	渋反覆分割、凸面:ナデ、凹面:ナデ	-	1②	51-13

第130図 基本層III層出土遺物（2）

I 35は瀬戸美濃産の中世陶器の蓋で、外側が鉄輪である。I 5・17は越前の甕で、接合関係には無いが、同一個体である。他に破片が22点出土している。製作はねじたて成形で、外面には「ハガタナ」の痕跡が認められる。「鬼板」（＝酸化鉄）の塗布は認められない。I 29は志野鉄絵皿ないしは鉢の底部破片で、見込面に鉄絵文様が描かれる。I 30・32・36・37は織部鉄絵大平鉢の口縁部破片である。I 14は唐津産の灰釉皿の口縁部破片で内面に沈



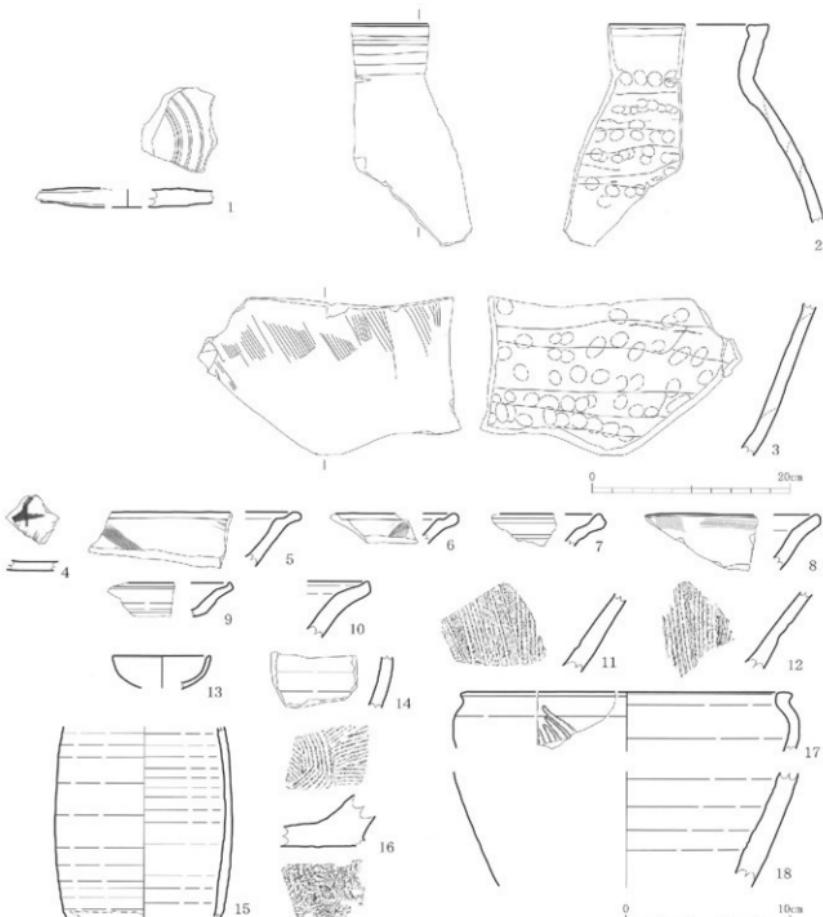
国宝番号	登録番号	種類	遺跡・場所	長さ(cm)	幅さ(cm)	高さ(cm)	重さ(kg)	備考	分類	可算測版	
1	827	輪窓	日向	15.2	-	-	0.54	凸面:アザ、凹面:コビケ痕・崩目	1	51-1	
2	875	輪窓	日向	15.3	(16.7)	12.2	6.6	凸面:アザ、凹面:コビケ痕・崩目	1	51-15	
3	874	輪窓	日向	15.4	-	(11.9)	0.51	凸面:アザ、凹面:コビケ痕・崩目	2	51-16	
4	873	輪窓	日向	14.1	-	11.1	6.6	0.61	凸面:アザ、凹面:コビケ痕・崩目、崩刃痕、丸太軸用テ	1	51-17
5	870	輪窓	日向	17.2	(17.9)	-	8.6	0.39	凸面:アザ、凹面:コビケ痕・崩目、崩刃痕、丸太軸用テ	1	51-18

国宝番号	登録番号	種類	遺跡・場所	長さ(cm)	幅さ(cm)	高さ(cm)	重さ(kg)	備考	分類	可算測版	
6	H110	菊丸	日向	17.0	12.9	-	0.2	0.97	凸面:ナデ、凹面:ナデ、花弁数10	A	51-19
7	H111	菊丸	日向	-	(13.0)	-	0.2	0.97	花弁数10	A	51-20
8	H113	菊丸	日向	-	-	0.2	0.98	花弁数10	A	51-21	
9	H112	菊丸	日向	-	-	0.2	0.30	凸面:ナデ、凹面:ナデ、花弁数10	A	51-22	

国宝番号	登録番号	種類	遺跡・場所	長さ(cm)	幅さ(cm)	高さ(cm)	重さ(kg)	備考	分類	可算測版	
10	E160	円戸瓦	那須	11.4	-	2.1	7.0	0.06	凸面:ナデ、凹面:コビケ痕・崩目	1	51-23
11	E169	圓戸瓦	那須	9.9	-	2.4	7.1	0.20	凸面:ナデ・刺穴空、凹面:コビケ痕	1	51-24
12	E101	圓戸瓦	那須	11.7	-	2.2	6.5	0.44	凸面:ナデ、凹面:コビケ痕	1	51-25

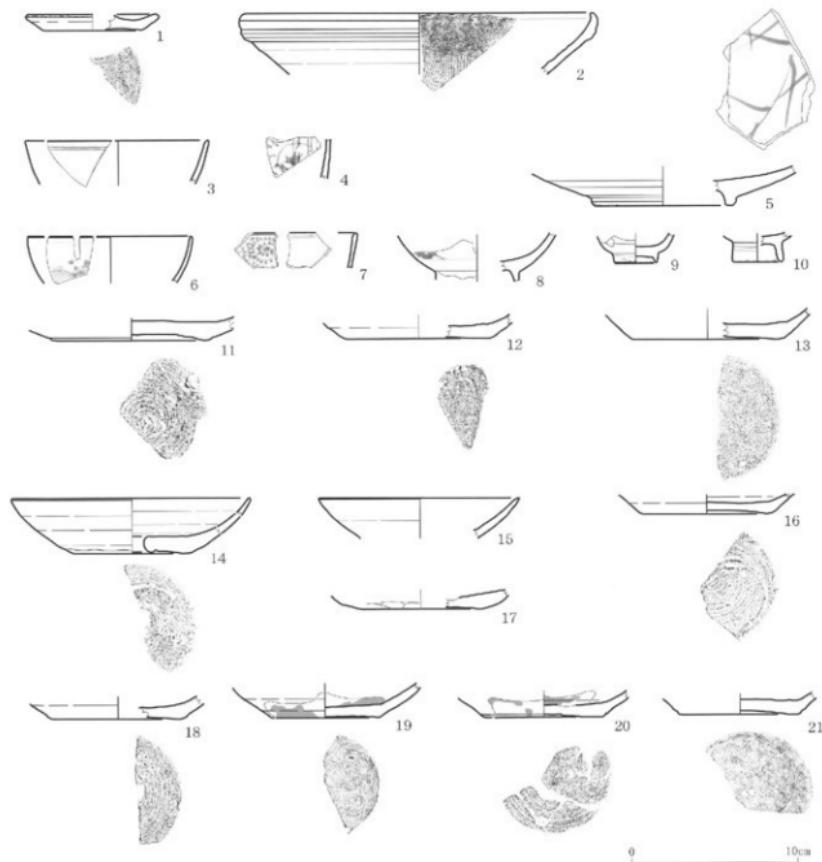
国宝番号	登録番号	種類	遺跡・場所	長さ(cm)	幅さ(cm)	高さ(cm)	重さ(kg)	備考	分類	可算測版
13	E126	温風	那須	-	-	-	0.74	津津井	-	51-26

第131図 基本層III層出土遺物（3）



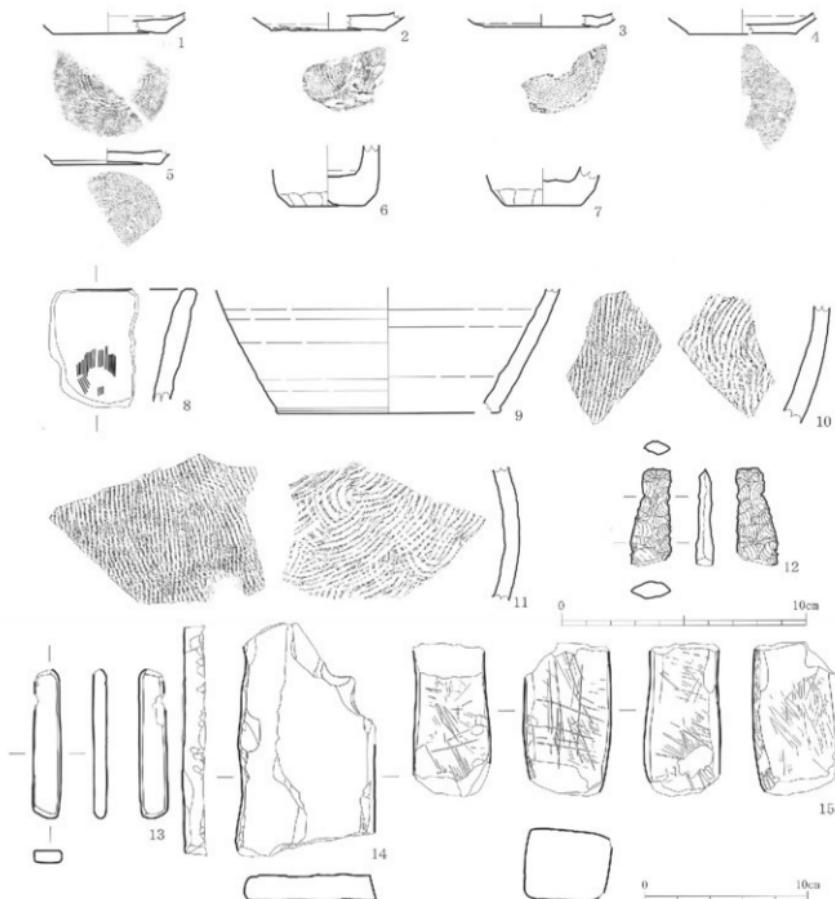
国際番号	種類	器種・部位	直径	高さ	厚さ(cm)	底面	縁	備考	参考文献
1	135	四角	?	重層	-	-	-	瓶口 中段？ 実心み 同心方状模造4面	55-1
2	117	筒形	?	重層	-	-	-	趙物 16C 外面：「ハガタナ」、内面：箱組玉底→ナゲ	55-3
3	15	筒形	?	重層	-	-	-	趙物 16C 外面：「ハガタナ」、内面：箱組玉底→ナゲ	55-4
4	126	筒形	直	重層	-	-	-	古井 16C-17世紀 京文	55-13
5	126	筒形	大平底	重層	-	-	-	大坂 17C 沖半 細縫	55-16
6	120	筒形	大平底	重層	-	-	-	鍾形 17C 沖半 青銅鏡・鉢	55-17
7	127	筒形	大平底	重層	-	-	-	奥窓 17C 沖半 沖縄	55-20
8	122	筒形	大平底	重層	-	-	-	奥窓 17C 沖半 細縫	55-18
9	114	筒形	直	重層	-	-	-	唐物 17C 沖半 沖縄	55-6
10	133	筒形	斜縫	重層	-	-	-	非鑄造 17C 沖半 細縫	55-11
11	131	筒形	斜縫	重層	-	-	-	丹波 17C 沖半 細縫複数個、前6本(20mm)	55-10
12	127	筒形	斜縫	重層	-	-	-	丹波 17C後半 細縫複数個、前6本(11mm)	55-6
13	134	筒形	小折?	直底	8.9	-	-	肥前 17C後半 細縫	55-1
14	126	筒形	直縫	直底	-	-	-	17C 細縫	55-2
15	111	筒形	直縫	直底	-	-	-	唐津 17C 細縫	55-3
16	113	筒形	直縫	直底	-	-	-	辰巳窓 17C 瓶底：凸彔り、横目各本(21mm)	55-7
17	128	筒形	直	直底	19.1	-	-	肥前系 18C 雪見文根	55-10
18	12	瓦片上部	斜	直縫	-	-	-	江戸 口クロ葉根	55-18

第132図 基本層III層出土遺物（4）



出採取番号	器物形態	断面	器種	造形・部位	寸法	目次番号	産地	時期	参考	等高線図
1	J112	脚部	盘	直腹	7.6	5.8	1.9	船	19C 烟舶	57-17
2	J116	脚部	盘体	直腹	21.0	-	-	小明	明治 砂利、塗瓦18枚(230g)	57-18
3	J19	胎体	胎	直腹	11.0	-	-	攸型	17C前半 芦花、漆頭	55-22
4	J28	胎體	小体	直腹	-	-	-	中型	17C前半 芦花、漆頭	55-23
5	J10	胎體	盆	直腹	-	(5.4)	-	肥前	17C前~18C 金村、草文	56-27
6	J3	胎體	盆	直腹	-	-	-	肥前	次野~8C 金村、花口に雲龍文	56-8
7	J2	胎體	盆口	直腹	-	-	-	肥前	18C 金村、草文	56-25
8	J11	胎體	碗	直腹	-	2.5	-	肥前	17C~18C 金村、草文	56-22
9	J12	胎體	小型碗	直腹	-	2.5	-	肥前	17C~18C 金村、草文	56-23
10	J1	胎體	小型盆	直腹	-	2.9	-	肥前	江戸 金村	56-24
11	J26	上肩質二層	盘	直腹	-	9.2	-	在地	17C後の カクロ画腹、施褐色汚り	58-16
12	J29	上肩質二層	盘	直腹	-	(8.4)	-	在地	17C後の カクロ画腹、施褐色汚り	59-2
13	J342	上肩質二層	盘	直腹	-	(8.6)	-	在地	17C後の カクロ画腹、武田系汚り	58-13
14	K30	下肩質二層	盘	直腹	(0.4)	17.0	3.4	在地	17C後の カクロ画腹、武田系汚り・施割成前穿孔	59-17
15	K32	下肩質二層	盘	直腹	-	(11.9)	-	在地	17C後の カクロ画腹	59-16
16	S33	下肩質二層	盘	直腹	-	(7.4)	-	在地	17C後の カクロ画腹、施褐色汚り	59-23
17	S41	下肩質二層	盘	直腹	-	(7.9)	-	17C後の カクロ画腹、施褐色汚り	59-21	
18	S2	下肩質二層	盘	直腹	-	(7.8)	-	17C後の カクロ画腹、施褐色汚り	59-20	
19	S31	下肩質二層	盘	直腹	-	(6.6)	-	在地	17C後の カクロ画腹、施褐色汚り・内外出筋部に様付有	60-2
20	K29	下肩質二層	盘	直腹	-	(7.2)	-	17C後の カクロ画腹、施褐色汚り	59-25	
21	X1	1.5mm厚の	盘	直腹	-	(7.9)	-	17C後の カクロ画腹、施褐色汚り→チヂ	59-27	

第133図 基本層III層出土遺物（5）

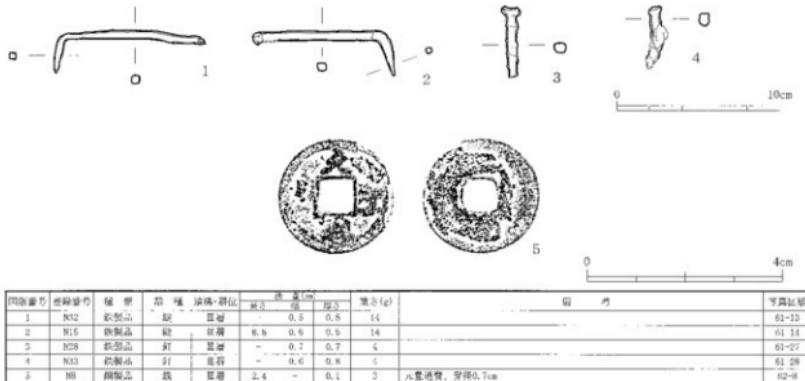


図版番号								基層番号	種類	形状	表面・底面	厚さ	直径(cm)	周長(cm)	高さ	地	特徴	参考	等高図段
1	3-3	上部骨上部	直	直縫	底面	底面	5.9	-	-	-	-	17C.初め	ロクロ削鉗、直縫骨切り	69-32					
2	3-30	上部骨上部	直	直縫	底面	(2.0)	-	-	-	-	17C.初め	ロクロ削鉗、直縫骨切り→ケズリ	69-30						
3	3-4	上部骨上部	直	直縫	底面	(2.0)	-	-	-	-	17C.初め	ロクロ削鉗、直縫骨切り、底部破壊付	69-29						
4	3-27	上部骨上部	直	直縫	底面	(6.6)	-	-	-	-	17C.初め	ロクロ削鉗、直縫骨切り	69-3						
5	3-11	上部骨上部	直	直縫	底面	(6.4)	-	-	-	-	17C.初め	ロクロ削鉗、直縫骨切り	69-5						
6	3-40	上部骨上部	直	直縫	底面	4.9	-	-	-	-	17C.初め	ロクロ削鉗、直縫骨切り→ケズリ	69-13						
7	3-29	上部骨上部	直	直縫	底面	6.5	-	-	-	-	17C.初め	ロクロ削鉗、直縫骨切り→ナメ、外縫骨下部に突出のケズリ	69-14						

図版番号								基層番号	種類	形状	表面・底面	厚さ	直径(cm)	周長(cm)	高さ	地	特徴	参考	等高図段
8	C-3	骨	直縫	直縫	直縫	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ削鉗	69-24	
9	C-3	骨	直縫	直縫	直縫	-	(13.6)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	ロクロ削鉗	69-30	
10	C-3	骨	直縫	直縫	直縫	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	手縫骨切り、内縫骨切り	69-31	
11	C-4	骨	直縫	直縫	直縫	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	手縫骨切り、内縫骨切り	69-33	

図版番号								基層番号	種類	形状	表面・底面	厚さ	直径(cm)	周長(cm)	高さ	地	特徴	参考	等高図段
12	3a1	側骨上部	石縫	直縫	直縫	3.0	1.7	0.7	4	-	-	-	-	-	-	金物に2次削鉗、先歯欠失	69-5		
12	3a1	側骨上部	石縫	不明	直縫	9.2	1.7	0.8	26	-	-	-	-	-	-	先歯剥離	69-6		
14	3a2	側骨上部	不明	直縫	直縫	-	9.5	1.5	300	-	-	-	-	-	-	上面骨頭、側面骨頭	69-7		
15	3a2	側骨上部	石縫	直縫	直縫	-	9.4	1.7	420	-	-	-	-	-	-	上面骨頭、側面骨頭	69-8		

第134図 基本層III層出土遺物（6）



第135図 基本層Ⅲ層出土遺物（7）

線が1条巡り釉はオリーブ色化している。I 10は岸窯系鉄釉鉢類口縁部破片である。I 27・31は丹波産の焼締めの播鉢で、I 31は6本一单位の荒い播頭である。I 34は肥前陶器小鉢で青緑釉である。I 11・26は唐津産陶器で、I 26は鉄釉瓶類の体部破片で黒釉が掛けられる。I 11は灰釉徳利とみられる。I 28は肥前系陶器の灰釉蓋付短頸壺で、外面上には陰刻模様が認められる。I 2は瓦質土器鉢類の体部下半の破片である。I 12・15は近代のもので、I 12は堤焼の黒釉蓋、I 15は産地不明の鉄釉播鉢である。

J 8・9は中国青花で、J 9は磁器染付碗で外面に2条の圓線が巡り漆繪ぎされる。J 8は磁器小鉢とみられ唐草文で縦にヒダがみられる。J 1～3・10～12は肥前産磁器染付である。J 10は皿で見込み文様は草花文で高台外面に砂が付着する。J 3は碗で花樹雪輪文、J 2は鉢ないしは猪口で蛸唐草文、J 11は丸碗で草花文、J 12は碗ないしは小鉢、J 1は碗ないしは小皿で高台部に3重の圓線が巡る。

X 1・2・27・30～44は土師質土器である。底径から径9cm前後の大型のものと径7cm前後の小型のものに大別でき、口クロ整形で底面は全て回転糸切りである。X 41は外面部下端をヘラ削り調整している。X 39・40は焼塙壺で外面部下端をヘラ削り調整している。

E 3・4は須恵器甕の破片で外面は平行タタキ、内面は同心円文の押えである。E 7は須恵器長頸瓶の底部破片で高台部が剥離している。K a 1は剥片石器で縦型の石匙とみられ、先端を欠損し、抉り部が明瞭でなく、石炭安山岩製である。K d 1は長方形の不明石製品で、先端部には磨面がみられる。K d 2は不明石製品で上面が大きく剥離している。側面には全体に磨面が認められ、側縁部は敲打されている。石材は片岩質である。K d 3は砥石で、全面に擦痕が顕著に認められる。N 8・15・28・32・33は金属製品で、N 8は銅錢で「元豊通寶」とみられ、N 28・33は鉄釘、N 15・32は鉈である。

【搅乱出土遺物】

搅乱には軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、焼斗瓦、輪違い、菊丸瓦、面戸瓦、鬼瓦などの瓦類のほか、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、磁器、土師質土器皿、焼塙壺、鐵製品、埴輪などや、棟瓦、煉瓦、天然スレート、ガラスといった刑務所に関わる近代の遺物が多数混入している。

F 15・16・17は軒丸瓦の瓦当部で、瓦当文様はF 15が三巴文（左巻き）、F 16・17が珠文三巴文（左巻き）である。F 61～64は丸瓦で、F 62の凹面には、通常見られるコビキ痕、布目その他に、離砂が顕著に認められる。F 63の中央部には釘穴が認められる。G 24は軒平瓦で、中心飾りは菊花文である。G 18～23・25・26は滴水瓦で、

中心飾りがわかるものはG21・22・25の3点のみであるが、唐草文からみて他の5点も花菱文とみられる。G22・25は唐草の葉脈が明瞭に確認できる。G133・135・151・153・154・157は平瓦である。G153は長さ34.0cm、広端幅30.0cmで、G154は長さ33.5cm、広端幅29.0cmで、この2点は出土した平瓦の中では大型で、滴水瓦とほぼ同じ大きさである。H24～26は熨斗瓦で、焼成後分割である。H24の長さは27.5cmで、凹面には他でみられる幅広ではなく、ヘラ状工具による鋭利な弧状の線刻が2条みられる。H77～85は輪進いで、H82・85は直線的に窄まる形状、H77～81・83・84は丸く窄まる形状のものである。H82の凹面狭端部側は面取りがされず、指押さえによる整形が認められる。H85は他と比較して大きな角度で聞くものである。H114～121は菊丸瓦で、長さを復元できるものもあり、全体の特徴として外腹全体に強いナデ調整が施されている。H136は瓦片を打ち欠き丸く整形したもので、凸凹状の剥落部分が残存することから水返しを持つ平瓦からの転用品と考えられる。用途は不明である。

H127～135は近世から近代の瓦とみられ、若林城期のものと判断するにはいたらず、中には宮城集治監から宮城刑務所建物に使用されていたものも含まれているとみられる。H133は角棟をもつ伏間瓦で、棟の接続部に釘穴がみられる。H134は平板状の平瓦に棟が取り付く形状とみられる。H129～131の小巴は珠文三巴文（左巻き、珠文数8）で、垂れは江戸式の組み合わせである。H130は廻頭瓦で、右羽は欠落している。H135は棟込瓦で、輪造いを模した連続輪違いである。

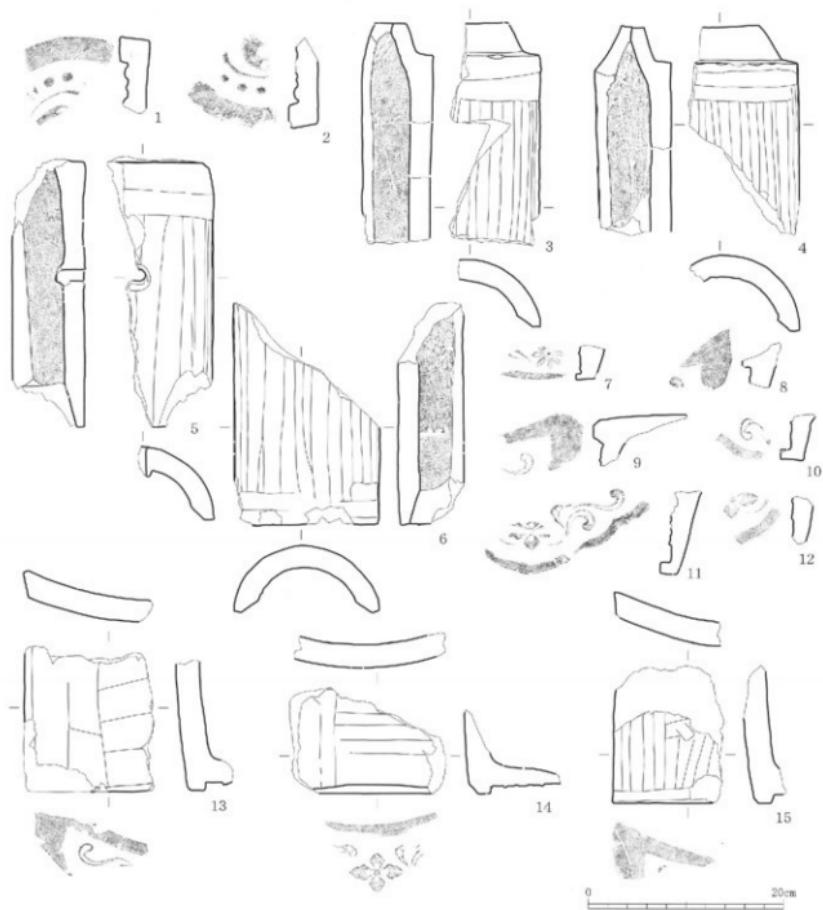
I51は信楽焼の蓋とみられる。I52は唐津産の灰釉皿で灯明皿に転用されており煤が付着している。I48・57・58は美濃産陶器で、I48は美濃産の型押しの輪文皿で御深片釉、I57は志野の皿、I58は灰釉皿である。I19は丹波産の焼締めの擂鉢で5本一単位の荒い擂目である。I49は瀬戸美濃産の鉄釉擂鉢で9本一単位の擂目である。

I20は青織部の大平鉢で鉄絵草文鋼緑釉流し。I50は产地不明で火口具の受皿部分と見られ鉛錫が施錫される。I42・43・45・46・59は大堀相馬産の土瓶で、I42が底部破片である以外は口縁部である。またI39・43・46は灰釉の上に白濁釉が掛けられる。I44は大堀相馬産の灰釉鍋類で底部外面に煤が付着する。I55は大堀相馬産の灰釉徳利の口縁部、I39は大堀相馬産の土瓶の蓋とみられるもので灰釉の上に白濁釉が掛けられる。I54は大堀相馬の色繪土瓶で山水文が描かれる。I40・56は堤焼の鉄釉擂鉢である。I11は瓦質土器鉢で手始の可能性もある。I41・47・53は近代の陶器である。I47は大堀相馬産の土瓶で型造。I41・53は产地不明で、I41は甕であるが焼成後に底部が穿孔され植木鉢に転用される。I53は綠釉の植木鉢で在地産と見られる。高台部に半円形の切り込みが認められる。

J21・32は初期伊万里である。J21は皿で見込内面は梅花文で吹墨技法である。J32は皿で外面に圓線を巡らせ、見込内面は草文である。J13・17・20・23・25・28・30・33は肥前系磁器で、J28は染付丸碗で外面は草文、J33は波佐見のくらわんか茶碗で外面は草花文、J25は腰折碗で外面に圓線が巡る。J28は丸碗で外面は草文で焼崩ぎがされている。J20は碗で外面は山水文で見込内面には鳥文、J17は皿で見込内面は草文で外面は唐草文、J30は見込内面唐草文で蛇の目釉ハギ。J22・29・31・34は瀬戸美濃産で、J22は端反碗で外面が草花文、J31は碗で外面が放射文、高台内には不明銘が認められる。J34は端反碗で外面よろけ鶴文。J29も端反碗とみられる。J19は产地不明で小瓶とみられ外面鎌文である。

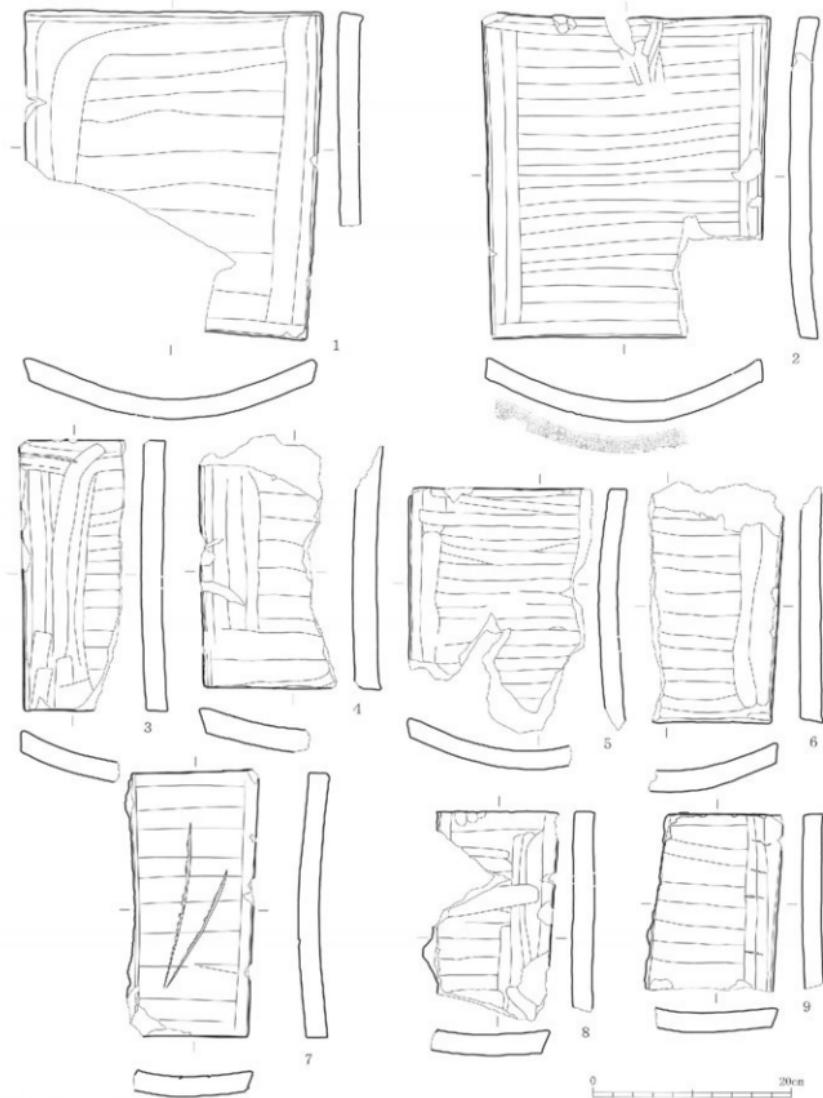
J14・15・16・18・24・26・27は近代以降の磁器で、明治から現在にかけて宮城集治監から宮城刑務所において使用されたものとみられる。J26は白磁碗で見込に「監」、高台内に「会津〇〇。（2字不明）」の銘が認められる。J24は碗で外面は飛鏑技法によるものである。J14・16・27はいわゆる統制食器で、J14は外面および内面見込みに唐草文、高台内に「瀬351」、J16は高台内に「岐983」の統制記号がクロム印で押印されている。

X45～50・52～56は上部質土器皿で、いずれもロクロ調整で底面は回転糸切りである。底径が9cm程度の大型のものと7cm程度の小型のものに大別できる。X45は内外面全体に煤が付着しており、灯明具として使用されたとみられる。X51は焼塗壺で外面底部下端が横方向にヘラ削り調整される。



図版番号	出土地番号	種類	遺物・部位	文様	長さ(cm)	高さ(cm)	幅さ(cm)	重さ(g)	備考	分類	写真別版
1	F16	軒丸瓦	板瓦	鶴丸文+三文	-	-	2.5	1.0	丸窓部：丸瓦表・板瓦1.3cm	A	82-1
2	F17	軒丸瓦	板瓦	鶴丸文+三文	-	-	2.5	0.9	丸窓部：丸瓦表・板瓦1.4cm	A	82-2
3	F61	丸瓦	丸瓦	-	2.2	6.8	3.1	0.77	白面：ナグ、周縁：コビキ文、面目：網状	I	82-3
4	F64	丸瓦	丸瓦	-	2.2	7.8	3.6	0.79	白面：ナグ、周縁：コビキ文、ナグ	I	82-4
5	F63	丸瓦	丸瓦	-	2.2	7.4	-	0.95	白面：コビキ文・鶴丸、斜穴あり	-	82-5
6	F62	丸瓦	丸瓦	-	15.0	2.3	6.9	0.97	白面：ナグ、周縁：コビキ文・鶴丸、網状	-	82-6
図版番号	出土地番号	種類	遺物・部位	文様	長さ(cm)	高さ(cm)	幅さ(cm)	重さ(g)	備考	分類	写真別版
7	G24	軒平瓦	板瓦	鶴丸文+唐草文	-	-	-	0.99	-	IC	82-7
8	G19	軒平瓦	板瓦	(花唐文?)・唐草文	-	-	-	0.15	西瓦瓦	2A	82-8
9	G18	軒平瓦	板瓦	(花唐文?)・唐草文	-	-	-	0.21	西瓦瓦、白面：ナグ、三山：ナグ	2A	82-9
10	G23	軒平瓦	板瓦	(花唐文?)・唐草文	-	-	-	0.97	西瓦瓦	2A	82-10
11	G25	軒平瓦	板瓦	花唐文+唐草文+千葉	-	-	-	0.23	西瓦瓦	2A	82-11
12	G21	軒平瓦	板瓦	唐草文+唐草文	-	-	-	0.99	西瓦瓦	2A	82-12
13	G20	軒平瓦	板瓦	(花唐文?)・唐草文	-	-	-	0.78	西瓦瓦、白面：ナグ、三山：ナグ	2A	82-13
14	G22	軒平瓦	板瓦	花唐文+唐草文+千葉	-	-	-	0.50	西瓦瓦	2A	82-14
15	G20	軒平瓦	板瓦	(花唐文?)・唐草文	-	-	-	0.62	西瓦瓦、白面：ナグ、三山：ナグ	2A	82-15

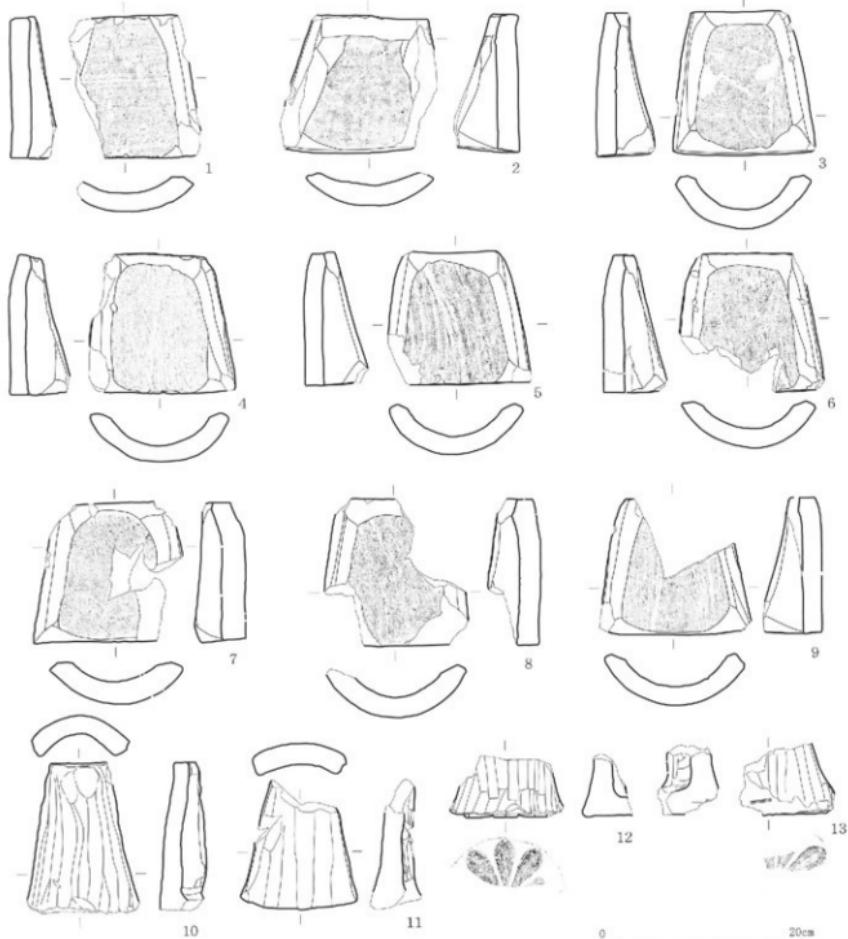
第136図 搅乱出土遺物（1）



因数番号	整理番号	種類	遺構・部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (kg)	備考	分類	学名群版
1	6133	平瓦	亂瓦	34.0	30.0	-	2.0	2.36 凸面:ナデ・薄砂、凹面:ナデ	1	52-16
2	6134	平瓦	亂瓦	33.8	(29.9)	(27.0)	2.1	2.82 凸面:ナデ・薄砂、凹面:ナデ	1	52-17
3	6135	平瓦	亂瓦	27.8	-	-	2.1	0.91 凸面:ナデ・三面:ナデ	1	53-1
4	6136	平瓦	亂瓦	-	-	-	2.4	1.95 凸面:ナデ・薄砂、凹面:ナデ	1	53-2
5	6137	平瓦	亂瓦	-	(18.1)	-	2.0	1.97 凸面:ナデ・薄砂、凹面:ナデ	1	53-3
6	6138	平瓦	亂瓦	-	-	-	2.2	1.95 凸面:ナデ・薄砂、凹面:ナデ	1	53-4

因数番号	整理番号	種類	遺構・部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (kg)	備考	分類	学名群版
7	801	貝介類	貝壳	27.5	(12.8)	(11.0)	2.1	1.20 後端壳分離、凸面:ナデ・薄砂、凹面:ナデ	1(D)	53-5
8	805	貝介類	貝壳	-	11.4	-	2.0	0.75 後端壳分離、凸面:ナデ・薄砂、凹面:ナデ	1(D)	53-6
9	806	貝介類	貝壳	-	18.0	-	2.1	0.71 後端壳分離、凸面:ナデ・薄砂、凹面:ナデ	1(D)	53-7

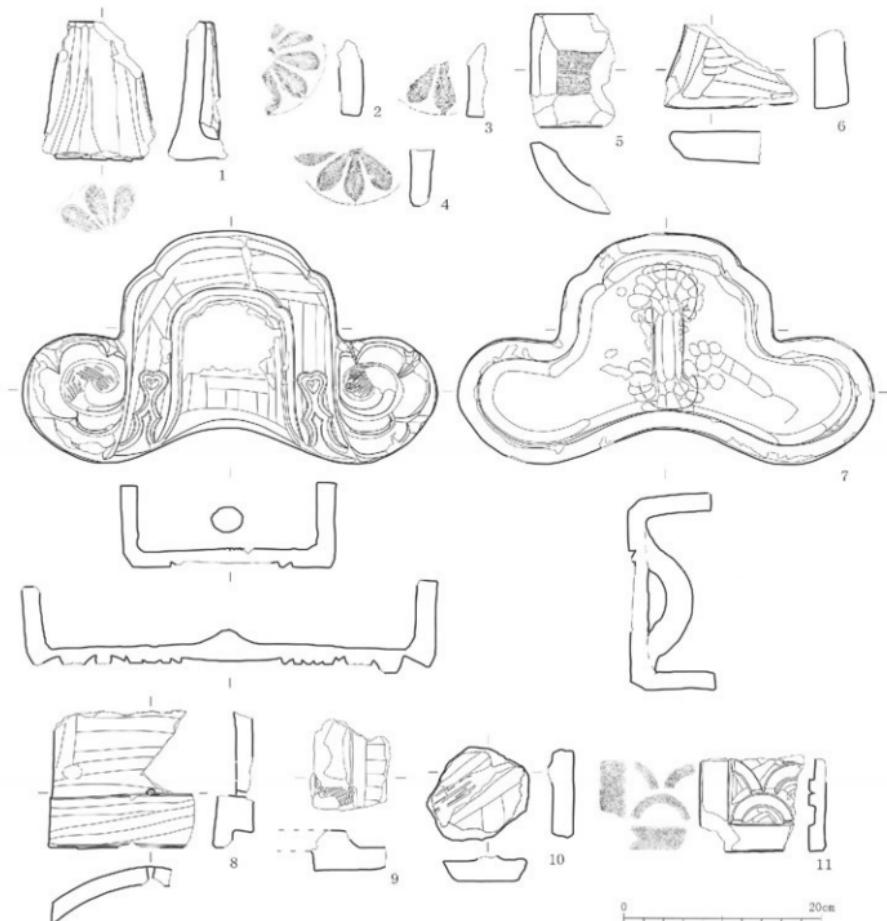
第137図 摂乱出土遺物（2）



図版番号	登錄番号	種類	遺物・基盤	高さ(cm)	幅(横幅)	厚さ(cm)	重さ(kg)	備考	分類	写真版
1	982	板窓	板瓦	14.8	-	-	0.08	片面:ナゲ・鋸歯縁、裏面:コギ瓦底・丸目・鋸歯底・狭幅溝面取り無し。	1	53-8
2	985	板窓	板瓦	14.3	-	11.2	0.7	片面:ナゲ・鋸歯縁、裏面:コギ瓦底・丸目	1	53-9
3	977	板窓	板瓦	14.8	14.2	9.9	0.64	片面:ナゲ・鋸歯縁、裏面:コギ瓦底・丸目	2	53-10
4	979	板窓	板瓦	15.1	(14.6)	(10.3)	0.62	片面:ナゲ・鋸歯縁、裏面:コギ瓦底・丸目	2	53-11
5	984	板窓	板瓦	13.7	-	9.0	0.61	片面:ナゲ・鋸歯縁、裏面:コギ瓦底・丸目	2	53-12
6	978	板窓	板瓦	14.3	-	(9.3)	(5.5)	片面:ナゲ・鋸歯縁、裏面:コギ瓦底・丸目	2	53-13
7	981	板窓	板瓦	14.4	-	8.2	0.55	片面:ナゲ・鋸歯縁、裏面:コギ瓦底・丸目	2	53-14
8	980	板窓	板瓦	15.2	-	-	0.69	片面:ナゲ・鋸歯縁、裏面:コギ瓦底・丸目	2	53-15
9	983	板窓	板瓦	(14.9)	(15.4)	6.0	0.48	片面:ナゲ・鋸歯縁、裏面:	3	53-16

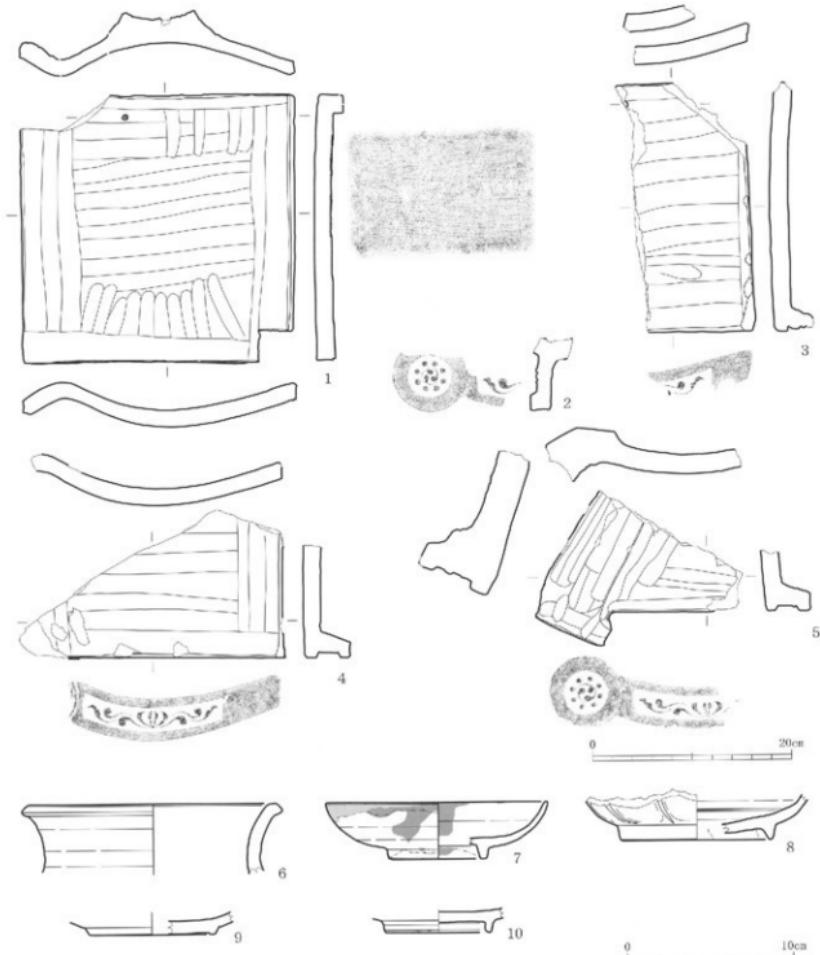
図版番号	登録番号	種類	遺物・基盤	高さ(cm)	実寸(横幅)	厚さ(cm)	重さ(kg)	備考	分類	写真版
10	9115	筒瓦	須瓦	-	5.6	-	0.45	片面:ナゲ・鋸歯縁、裏面:ナゲ	A	53-17
11	9114	筒瓦	須瓦	-	-	-	0.39	片面:ナゲ・開窓:ナゲ	A	53-18
12	9117	筒瓦	須瓦	-	-	0.3	0.23	片面:ナゲ・開窓:ナゲ・花弁飾10	A	53-19
13	9116	筒瓦	須瓦	-	-	0.3	0.24	片面:ナゲ・開窓:ナゲ・花弁飾10	A	53-20

第138図 損壊出土遺物 (3)



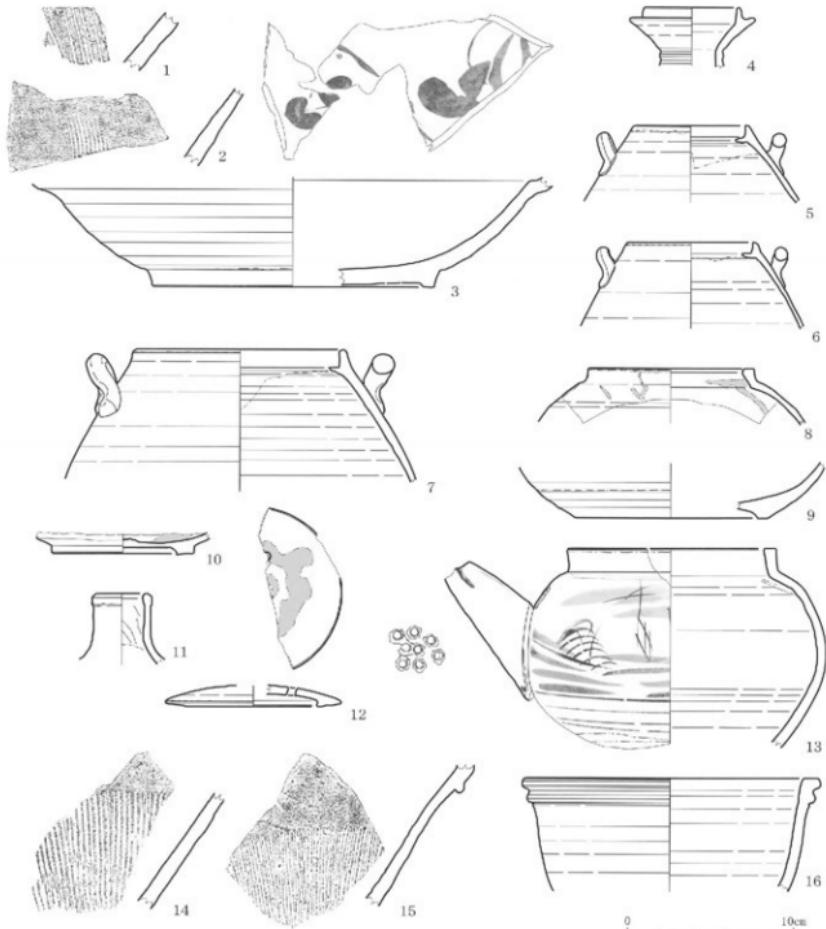
図版番号	種類	形状・部位	大きさ(cm)	重さ(g)	大当量(g)	小当量(g)	基盤(g)	備考	分類	写真実版
1	石斧	石斧	14.2 (16.0)	0.2 0.47	凸面:ナゲ、凹面:ナゲ、花弁形10	-	-	-	A	53-21
2	石斧	石斧	- (12.0)	0.2 0.17	-	-	-	-	A	54-1
3	石斧	石斧	- (12.0)	0.2 0.29	-	-	-	-	A	54-2
4	石斧	石斧	- (12.0)	0.2 0.16	-	-	-	-	A	54-3
5	石斧	石斧	- (11.0)	0.2 0.16	-	-	-	-	-	-
6	石斧	石斧	- (12.0)	0.2 0.16	-	-	-	-	-	-
7	石斧	石斧	- (13.0)	0.2 0.26	-	-	-	-	-	-
8	石斧	石斧	- (12.0)	0.2 0.26	-	-	-	-	-	-
9	石斧	石斧	- (12.0)	0.2 0.31	-	-	-	-	-	-
10	石斧	石斧	- (12.0)	0.2 0.25	-	-	-	-	-	-
11	石斧	石斧	- (12.0)	0.2 0.25	-	-	-	-	-	-

第139図 撹乱出土遺物 (4)



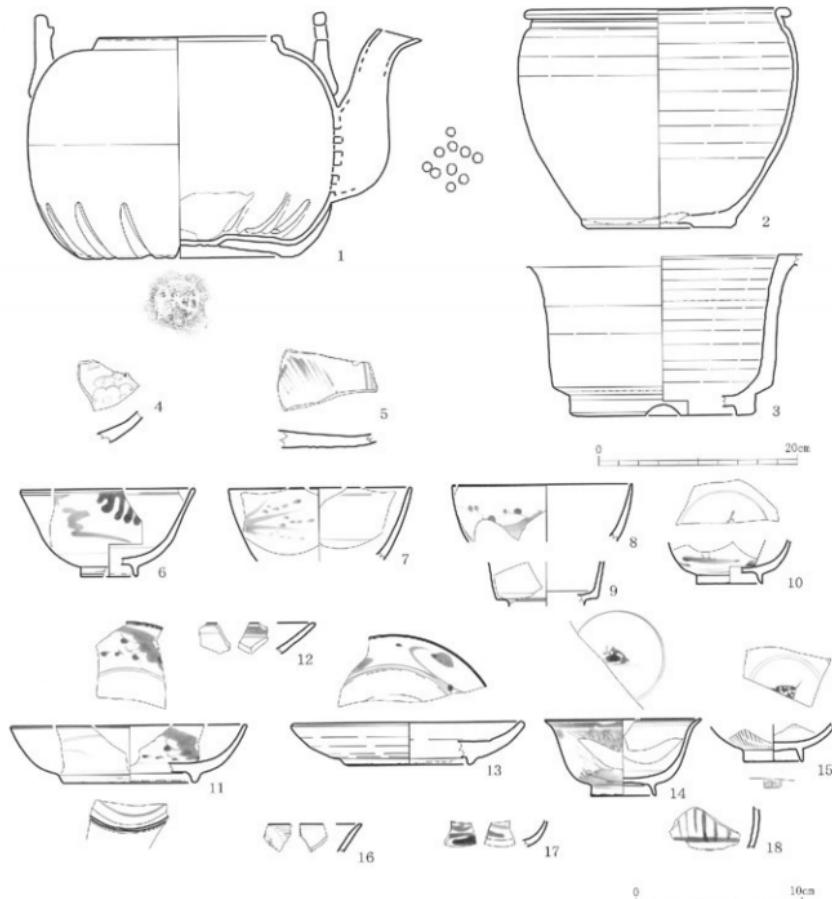
圆筒番号	形跡番号	種類	造形・部位	文様	長さ(cm)	幅(内径)(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	備考	分類	等級			
1	H128	桶瓦	桶瓦	波丸	27.5	97.6	1.7	4.7	2.14	凸出部:ナメ、横目状凹溝、側面:ナメ、引掛け目	1	B1-11		
2	H129	軒板瓦	板瓦	波丸	26.2	97.6	-	2.3	4.3	-	0.29	瓦当部:巴たる、溝端部:2cm幅凹溝	1A	B4-12
3	H132	軒板瓦	板瓦	(不詳)上唇雲文(江戸瓦)	25.6	-	-	-	1.7	-	0.95	凸出:ナメ、側面:ナメ	1	B4-13
4	H131	軒板瓦	板瓦	(不詳)上唇雲文(江戸瓦)	-	-	-	14.3	2.4	1.02	-	凸出:ナメ、側面:ナメ	1	B4-14
5	H130	軒板瓦	板瓦	波丸二重(主部雲文)(江戸瓦)	-	7.3	3.8	2.6	2.6	1.01	斜面:2重、側面:5mm幅、凸出:ナメ	2A	B4-15	
6	151	瓦	瓦	波丸	18.6	-	-	-	-	-	-	ロクロ酒窓	5B-2	
7	152	瓦	瓦	波丸	13.2	6.6	2.6	5.6	2.6	波唐	17C 9	瓦軒、口端浮凸縁、内外面縦溝、内外面高台状横付帯	5B-5	
8	148	瓦	輪瓦	波丸	-	9.6	-	-	-	美濃	17C 9	波唐弁脚、型ノリ	5B-16	
9	167	瓦	瓦	波丸	7.2	-	-	-	-	志野	16C-16D	-	5B-14	
10	158	瓦	瓦	波丸	(6.2)	-	-	-	-	美濃	17C	-	5B-6	

第140図 墳乱出土遺物（5）



図版番号	登録番号	種類	器種	断片・部位	寸法	高さ(cm)	幅	時 期	備 考
1	119	陶器	漆器	漆丸	-	-	-	月周: 17C前半 漆地附め、縁日本(20cm)	漆質表面 65-9
2	119	陶器	漆器	漆丸	-	-	-	漆丸・美濃	66-4
3	120	陶器	大平鉢	縫丸	(16.8)	-	-	縫丸 17C前半、青磁地、鉄錆付現れし、軟結構文	65-21
4	150	陶器	灯火丸	縫丸	7.2	-	-	小町 江戸 鉄錆、ロクロ調整	66-13
5	159	陶器	土瓶	縫丸	6.6	-	-	火炎相馬 19C 灰釉、ロクロ調整	67-1
6	145	陶器	土瓶	縫丸	7.6	-	-	火炎相馬 19C 灰釉、ロクロ調整	67-2
7	146	陶器	土瓶	縫丸	12.4	-	-	火炎相馬 19C 灰釉、ロクロ調整	67-5
8	143	陶器	土瓶	縫丸	10.0	-	-	火炎相馬 19C 灰釉・白釉地、ロクロ調整	67-3
9	142	陶器	鉢	縫丸	11.6	-	-	火炎相馬 19C 灰釉・白釉地、ロクロ調整	66-12
10	144	陶器	油桶	縫丸	-	8.4	-	火炎相馬 19C 灰釉・白釉地、ロクロ調整	67-6
11	155	陶器	油桶	縫丸	(3.0)	-	-	火炎相馬 18C～9C 灰釉、内面: 織り	57-7
12	129	陶器	土瓶	縫丸	-	-	(1.3)	大平相馬 19C 灰釉・白釉地、ロクロ調整	57-5
13	154	陶器	土瓶	縫丸	12.3	-	-	大平相馬 19C 色塗・山水文	57-9
14	140	陶器	油桶	縫丸	-	-	-	縫丸? 18C～19C ロクロ調整、縁日本(20cm)	57-10
15	156	陶器	油桶	縫丸	-	-	-	縫? 18C～19C ロクロ調整、縁日本(20cm)	57-11
16	11	瓦質土器	鉢	縫丸	(17.8)	-	-	不明 江戸?	ロクロ調整

第141図 撹乱出土遺物（6）



图版号	器物番号	種類	器種	遺跡・部位	径高	直徑	高さ	備考	写真回数
1	147	陶器	土瓶	深丸	11.0	12.5	12.6	大腹半周 背面：擦痕、内面：擦痕、型造、表面：中央直付耳（小形）	58-1
2	141	陶器	罐	深丸	25.1	15.5	22.6	小形 19C-20C 側面：擦痕、口部：ロクロ彫刻、底元：トシシ様、焼成後底丸（袖入鉢底同）	57-26
3	163	陶器	承木鉢	深丸	24.0	17.4	16.5	中形 19C 側面：ロクロ彫刻	57-19
4	211	陶器	臼	深丸	-	-	-	17C前半 側面：擦痕、底元：火照（火照）	56-26
5	132	陶器	臼	深丸	-	-	-	側面：擦痕、底元：火照	57-28
6	113	陶器	臼	深丸	10.4	3.4	5.5	18C後 側面：擦痕	56-19
7	129	陶器	碗	深丸	10.8	-	-	18C-19C 側村、草花文、燒繩等	56-20
8	133	陶器	碗	深丸	10.8	-	-	18C後半 側面：擦痕	56-28
9	125	陶器	深折鉢	深丸	-	-	-	側面：擦痕 側村、圓錐	57-12
10	120	陶器	碗	深丸	-	2.0	-	18C 側村、土手文	56-21
11	117	陶器	盆	深丸	14.2	8.2	5.8	18C 側村、草花文	56-27
12	123	陶器	盆	深丸	-	-	-	側面：擦痕 側村、圓錐	56-26
13	139	陶器	盆	深丸	13.7	7.2	2.6	側面：擦痕 側村、草花文、燒ノ目細ハザ	56-29
14	122	陶器	碗反碗	深丸	9.4	3.8	4.8	18C 側面：擦痕 側村、草花文、見込：半舟文	57-13
15	131	陶器	碗	深丸	-	3.9	-	18C 側村、平行文、高台内鉢（小形）、見込：半舟文	57-11
16	134	陶器	碗反碗	深丸	-	-	-	18C-19C 側面：擦痕 側村、平行文、見込：よろけ彫文	57-16
17	129	陶器	碗	深丸	-	-	-	18C 側村、平行文	57-15
18	119	陶器	小盆	深丸	-	-	-	18C 側村、平行文	56-30

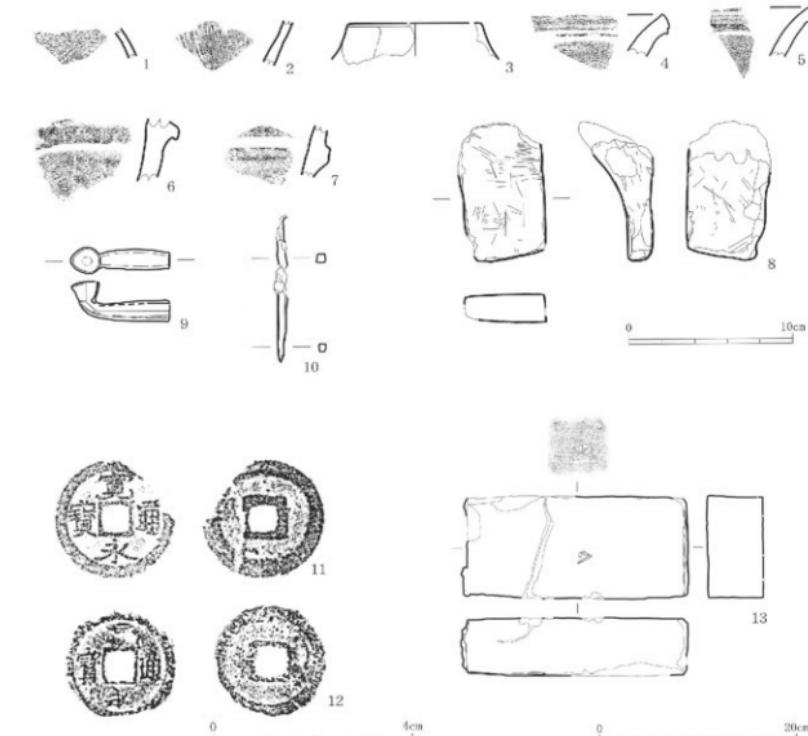
第142図 攪乱出土遺物（7）



開拓番号	無縫番号	様 類	性 別	発見場所	目 標	形 式	基準	周 長	底 面	厚 度	時 期	考	等 級
1	J26	漆器	婦人	塗瓦	深丸	11.6	6.5	8.9	合併本漆器	-	明治	漆付、見足:「盤」、高台門路(金舟)。(2寸不厚)	58-5
2	J16	漆器	并	塗瓦	深丸	14.8	6.3	8.3	高台	-	明治	漆付、塗瓦、高台門路(金舟)。(2寸不厚)	58-3
3	J14	漆器	并	塗瓦	深丸	15.0	6.0	8.4	高台	-	明治	漆付、塗瓦、高台門路(金舟)。(2寸不厚)	58-2
4	J24	漆器	小輪	塗瓦	深丸	7.0	3.3	4.3	高台・貴重品	-	明治	漆付、塗瓦、高台門路(金舟)。(2寸不厚)	57-21
5	J18	漆器	小輪	塗瓦	-	5.4	-	-	-	-	明治	漆付、塗瓦	58-6
6	J27	漆器	紅	塗瓦	深丸	15.2	5.5	4.4	高台・貴重品	粗巾	明治	漆付、塗瓦、クロム酸銀	58-4
7	J19	漆器	紅	塗瓦	深丸	13.3	5.6	2.8	高台・貴重品	-	明治	漆付、塗瓦、山火文	57-23
8	J15	土器灰土	日	塗瓦	深丸	14.0	(7.7)	3.4	高台	17C初め	ヨクヨク調懸、底部斜切りナグ、内曲下削に浅付槽	59-13	
9	J18	土器灰土	日	塗瓦	-	(6.6)	-	-	在地	17C初め	ヨクヨク調懸、底部斜切り	60-4	
10	J50	土器灰土	日	塗瓦	-	(6.2)	-	-	在地	17C初め	ヨクヨク調懸、底部斜切り	59-5	
11	J54	土器灰土	日	塗瓦	-	(6.0)	-	-	在地	17C初め	ヨクヨク調懸、底部斜切り	59-12	
12	J53	土器灰土	日	塗瓦	-	(7.2)	-	-	在地	17C初め	ヨクヨク調懸、底部斜切り	59-26	
13	J55	土器灰土	日	塗瓦	-	(7.4)	-	-	在地	17C初め	ヨクヨク調懸、底部斜切り	59-24	
14	J47	土器灰土	日	塗瓦	-	(6.0)	-	-	在地	17C初め	ヨクヨク調懸、底部斜切り、底部内面に底付槽、施成骨溝	59-8	
15	J56	土器灰土	日	塗瓦	-	(9.0)	-	-	在地	17C初め	ヨクヨク調懸、底部斜切り	60-12	
16	J49	土器灰土	日	塗瓦	-	(8.0)	-	-	在地	17C初め	ヨクヨク調懸、底部内面に底付槽	60-11	
17	J46	土器灰土	日	塗瓦	-	6.2	-	-	在地	17C初め	ヨクヨク調懸、底部斜切り、内外面に底付槽	60-6	
18	J52	土器灰土	日	塗瓦	-	(5.8)	-	-	在地	17C初め	ヨクヨク調懸	60-7	
19	J51	土器灰土	日	塗瓦	-	9.8	-	-	在地	17C初め	ヨクヨク調懸、底部斜切りナグ、外側体削下端に底付槽のケズリ	60-16	

第143図 挿乱出土遺物（8）

B 1～B 3は弥生土器である。B 1は壺の頸部で外面は燃え文に綾織文が施される。B 2は壺の体部、B 3は蓋である。E 8・9は須恵器壺の口縁部で、E 9は外面に波状弦線が施文される。K d 4は砥石で使用による反りが激しく、小口面や側面には敲打痕が認められる。N 13は銅製煙管の樋首部、N 34は鉄釘である。N 9・10は銅鏡で、N 10が古寛永、N 9が新寛永である。S 2・3は円筒埴輪で、突端部が残存するが全体に摩滅が著しい。X 62は硬質の煉瓦で中央部にヘラによる刻印が認められるが使用した構造物などは不明である。



図版番号	施設番号	種類	諸 特	遺物・部位	直 径 (cm)		重さ (g)	備 考	等級回復	
					外	内				
1	B1	弥生土器	直	底丸	1.88	0.85	直丸	外面：燃え文・綾織文、内面：ナゲ	60-9	
2	B2	弥生土器	直	底丸	-	-	-	外面：波状弦文、内面：ナゲ	60-10	
3	B3	弥生土器	直	底丸	(8.6)	-	-	ナゲ	60-21	
4	H9	須恵器	直	底丸	-	-	-	外沿：敲打き直丸文	60-29	
5	E8	須恵器	直	底丸	-	-	-	タコロ開脚	60-28	
6	S2	埴輪	円筒埴輪	底丸	-	-	-	外沿：突進頭ヨコナゲ、内面：ナゲ	61-3	
7	S3	埴輪	円筒埴輪	底丸	-	-	-	外沿：突進頭ヨコナゲ、内面：ナゲ	61-4	
国宝番号 施設番号 種類 諸 特 遺物・部位 直 径 (cm) 重さ (g) 備 考 等級回復										
8	Kd4	石削器	磨石	虎丸	8.2	4.5	150	会前に転用、先西先史	61-9	
9	N13	須恵器	燃焼	底丸	6.6	-	1.3	10	発掘し本がり、火薬所附近	61-11
10	N34	須恵器	直	底丸	9.1	0.9	0.5	9	61-29	
11	N10	須恵器	直	虎丸	2.0	-	0.1	1 寛永通宝(新寛永)、穿孔0.6cm	62-9	
12	N9	須恵器	直	底丸	2.3	-	0.1	2 寛永通宝(新寛永)、穿孔0.6cm	62-16	
13	M2	瓦	瓦	底丸	22.9	10.7	3.8	2135 全形、ヘラ剥離跡	62-16	

第144図 損乱出土遺物（9）

種別・品目	斜矢瓦	丸瓦	角平瓦	平瓦	契斗瓦	縁切瓦	南九瓦	南六瓦	西切瓦	丸瓦+縁切瓦	風瓦	棟瓦	その他	合計
S K 1	1				240	1			230	4	50	7		7
	43							1						565
S K 2							175							175
S K 7		3	1				1			1				7
		370	260				155			50				910
7号焼石	1	9	28	4	3	1	4		12			1	63	
	7	1790	4142	908	475	215	350		975			25	8997	
10号焼石		4	1	27	4		1	1	13			1	51	
		1320	70	3150	483		90	185	3925			5	4018	
12号焼石	1	2	19	1					10				32	
	350	435	3245	150					1365				3645	
14号焼石		1	9	2					7				20	
		290	855	485					985				2325	
1号瓦・頭	13	23	1	68	6	6		2	11			14	144	
	965	6405	269	5682	2518	1915		385	1565			109	2304	
S D 1 縦II		3							2				6	
		122							90				212	
S D 1 縦19	16	2	27	2			15		78			35	374	
	1543	95	11425	140			1903		2232			441	17779	
S B 1 縦20	6	48							6			6	64	
	605	3295							260			28	4228	
S B 1 縦23			1										1	
S B 1 縦28	2						130						4	
S B 2 縦6	425								222				647	
S B 2 縦6		1											1	
	90												90	
S B 2 縦11		1	2										3	
	87	325											822	
S B 2 縦17		8	1									3	12	
	176	146										12	349	
S B 2 縦24	1								1			2		
	36								69			104		
S B 2 縦25		2											2	
	191												151	
S B 2 縦27		45											45	
	2268												2288	
S H 2 縦30		1	1						1				3	
	560	100							12				673	
S H 2 縦40	2	2											4	
	59	21											80	
S H 2 縦50							596						1	
S B 3 縦17									1				1	
S B 3 縦38		1							80				90	
	50												50	
S D 4	8	48	6	364	23	20	2	12	4	69	3	14	873	
	1172	10613	1200	53220	5459	294	455	2640	425	5372	211	1517	88165	
S D 5		8	1	31					305				43	
	1650	9298	11871						309				16546	
S D 6	4	65		176	27	3	7	8	72		2	17	380	
	1116	17840	27516	3449	562		999	1145	3994		216	1966	62237	
1号6頭		7	30	2					11			2	52	
	2264		2869	249					727			96	6221	
S D 7	1	22	164	24	167				27			25	440	
	165	8396	20460	11164	28725				1043			46	70997	
S D 8	2	3	18	9	17				8			7	64	
	361	2454	2039	1198	2156				206			20	8828	
S D 9		25	2	12					4			1	44	
	1940	364	1763						178			129	3397	
S D 10	28	138	54	3	4	17		136				5	385	
	4277	21391	5877	1010	364	1662		2331				43	56976	
S D 13		26		1					2				28	
	3282								267				3549	
S D 19	1								1				2	
	34								107				191	
S D 20		5											5	
	234												234	
S A 1	4	24	3	1					1				33	
	125	432	150	65					10				762	
ノ6	2		1						2			3	6	
	235	95							68			420	925	
小清1群1		1											1	
		12											12	
小清2群1	1	3	38	2					6			2	62	
	25	225	1892	195					184			5	2226	
小清2群2		6	61	1					9				66	
	601	3823	21						463				4908	

第6表 出土遺物集計表 瓦(1)

※ 上部は点数、下部は重量 (g)

遺物・基本層	斜丸瓦	丸瓦	斜平瓦	平瓦	雲母瓦	輪窓瓦	束瓦	束瓦	束瓦	束瓦	屋根瓦	屋根瓦	瓦瓦か縫合	瓦瓦	瓦瓦	瓦瓦	その他	合計
小築2群3		1		13							1		4				6	25
		37		1072							99		249				15	1572
小築2群4		1		23		2							13				19	60
		49		2568		161							836				22	3636
小築2群5		7		45		2		2					14				4	74
		103		3640		433		79					1015				35	6376
小築2群6		2		35		2		6			2		11				1	55
		449		2670		112		825			225		474				1	4456
小築2群7				7		1							2					11
				218		21							149					387
小築2群8				4		1					1		3					9
				348		540					295		131					1315
小築2群9		7		51		1		6					1	13			14	92
		731		1950		70		455					105				87	3843
小築2群10		5		66		2		3					23				11	90
		790		3147		115		170					1361				116	5699
小築2群11		1		2		68		4			3		16					76
		145		198		2256		630			95		416					5251
小築2群12		2		15									1					18
		219		361									43					537
小築2群13		1		14				1					7				5	26
		33		174				4					185				10	453
小築2群14				6		3							2				2	13
				92				77					41				3	233
小築2群15		15		1		2							9					27
		278		6		158							328					770
小築2群16		2		26		7		3					6					44
		220		867		918		185					259					2449
小築2群17		1		26		4		1					12				79	63
		64		312		277		62					283				71	1261
小築2群18		2		16				9					6				6	39
		92		534				5					107				45	1809
小築2群19				3									4				1	15
				294				247					136				8	716
小築2群20				6				6					2				1	13
		438				662							46				1	1182
小築2群21		1		4														6
		139		360				135										634
小築2群22				7									2				1	10
				280									58				10	299
小築2群24		1		7		2											4	13
		505		490		65											44	1104
S D1		76	1	219	78	119	2	2	2	2	53		71	4	675			
		3898	125	26577	13016	17885	20	356					3450		1725		1070	82184
S D11		1		13									1					19
		70		1838		202							119					2229
S D15		1		3		1							2					7
		96		182		287							159					724
S D16		1	1	48	2		1						10				21	84
		94	580	3942	340		45						1104				169	6274
S D18				2														2
				663														563
S K 9				3														4
				205									20					225
S K 11				216									1					2
				3									85					300
S K 15				149														149
S K 16				1														1
				60														40
S K 18		1		26	1	2					1		22				38	90
		390		816		70		96					246		310		295	2515
S K 19		1		19									10				15	46
		62		997		230							277				81	1667
S K 29				8									4				7	19
				114									145				65	324
S K 21				1														1
				35														35
S K 22				2														20
				30														30
S K 23				2									1					3
				59									25					25
S K 31				1									1					2
				45									15					60
S K 32				1		1												1
				30		170											3	202
S K 35				2		1												3
				31		340												371
S K 42		1	2	8	1	2							4					18
		205	235	945	200	966							300					2230

第7表 出土遺物集計表 瓦（2）

単位は高さ、下限は底面

井筒・基本層	斜丸瓦	丸瓦	斜平瓦	平瓦	瓦ニ瓦	輪窓い	角丸瓦	田戸瓦	隅丸瓦	人字形輪窓い	鬼瓦	続瓦	その他	合計	
S K51				1										1	
				30										30	
S K53										1			1	2	
S K62				1						45			10	55	
				125									3	3	
S K64											1		14	139	
											30			30	
S K66	1	1	114	1	2			2		28			16	163	
	320	270	10877	60	190			300		2000			66	14483	
S K74				1										1	
				50										50	
S K75		1												1	
	310													310	
S K81		1	6							4				11	
	320		290							310				90	
S K83	1													1	
	7													7	
S K96											1			1	
											74			74	
17号墓石	3	20						1		7			9	40	
	590		1370					80		426			190	386	
18号墓石	1	8						1		8				16	
	75		475					60		350				900	
24号墓石		2												7	
	710													710	
25号墓石	10	6								3			1	17	
	745		755							95			20	1615	
27号墓石	6												1	6	
	390												9	399	
34号墓石													1	1	
		1											2	2	
37号墓石	280									3				3	
										220				480	
41号墓石	4	8	5	6						1				24	
	256		1096	665	1223					20				3865	
P 1					9									3	
					590									590	
近代漁情	5	48	2	11						7			20	93	
	716		3439	241	1613					367			1292	2800	
I・B第	41	96	14	15	1	1	1	1		18		70	2	259	
	2402		32952	2910	1844	62	285			1252		6378	806	33501	
皿器	36	226	24	246	116	347	6	55	5	696	1	34	631	4926	
	2933		83230	2563	20504	33609	32278	1315	3975	474	39403	737	3020	6024	36131
櫛孔	36	396	25	1750	115	175	22	27	3	309	4	745	22	3623	
	1501		70731	3918	197615	2320	2856	2856	3444	631	20170	3925	103232	2669	459964
合計	133	1259	69	7068	516	963	351	142	23	1846	8	891	989	13985	
	1587		236149	15460	664118	93715	1279113	60081	190371	3676	102125	4076	116966	15878	1421947

第8表 出土遺物集計表 瓦(3)

※上段は枚数、下段は量(㌘)

造形・基層	焼瓦	非生	土筋瓦	油渕瓦	輪窓	縦筋	瓦質二型	上端質二型	側邊質	ガラス	石筋	石製瓦	鉄筋	金属性系	土頭瓦	輪瓦
S K 5					1											
N K 9															1	
13号塗瓦				1											1	
1号瓦・頃	4		1	1	1			1							1	
S D 1 縞5															1	
S D 1 縞20					1											
S D 1 縞23																
S B 1 縞26	3															
S D 4	3		13				13	1					1	3		
S D 5			1													
S D 6	19	2				1	24	2					25			
S D 19							4									
I 端石縞	3						55		1				2			
S K 203	1						36									
S K 204	1						103						4			
S K 205	2		1				83						1			
S D 2 縞2	1															
S B 2 縞30							1									
S D 2 縞36	3															
S B 2 縞40							1									
S D 7		1	1	8			44						7			
S H 3 縞22														1		
S B 3 縞39							2									
P 6							2						1			

第9表 出土遺物集計表 瓦以外(1)

※枚数式表示

遺跡・墓番	調査	小口	土器部	漆器類	陶器	細器	瓦質土器	十種器+廢 品	セラフ	石器	石製品	鉄器	金銀製品	土製品	瓦	焼灰	
S D 8					3									1			
S D 10		1			4	1	1	3	1					2			
S A 1					1												
小窓2号1		1			1		4										
小窓2号2		3			2		2										
小窓2号3		7	3	6			45	1				12		2			
小窓2号4		1			2	1	1										
小窓2号5					1		1										
小窓2号6		3					1										
小窓2号7		2												1			
小窓2号8		1						2						4			
小窓2号9		5															
小窓2号10		1						5						1			
小窓2号11							1							1			
小窓2号12					1	1								4			
小窓2号13					1		2							1			
小窓2号14					1									3			
小窓2号15		1			1												
小窓2号16		1					3	2									
小窓2号17		1												15			
小窓2号18																	
小窓2号19																	
小窓2号20		17															
小窓2号21		1												5			
S D 1	1	3												6	1	10	
S D 2			1														
S D 15			1														
S D 16																	
S K 16					2												
S K 18																	
S K 19					1												
S K 20					1	1								2			
S K 22		1															
S K 23		1			1												
S K 25					1												
S K 28		1															
S K 61		1			1												
S K 62		1															
S K 68		5						13	1								
S K 74		2						37	1					2			
S K 75		1						14						1			
S K 76		2						23						2			
S K 79		1						4									
S K 82		2															
S K 85		1						5									
S K 86								5									
18号集石					2									7			
22号集石		1															
23号集石																	
25号集石		1			1	2								1			
27号集石														9			
41号集石								5						4			
S D 26		1															
S K 206		40															
近代漆器					1	1											
I-II層		4	83	6	1	64								2	1		
Ⅲ層		92	9	71	14	29	64	2		1	3	1		22		6	
Ⅳ層					4												
焼灰		3	S3	9	224	111	5	169	2			2	7	64	2	4	
合計		1	3	286	27	433	129	40	1002	11	3	1	7	21	226	1	25

第10表 出土遺物集計表 瓦以外（2）

※ 総量対点数

第6章 自然科学分析

若林城跡第5次調査における自然科学分析

株式会社古環境研究所

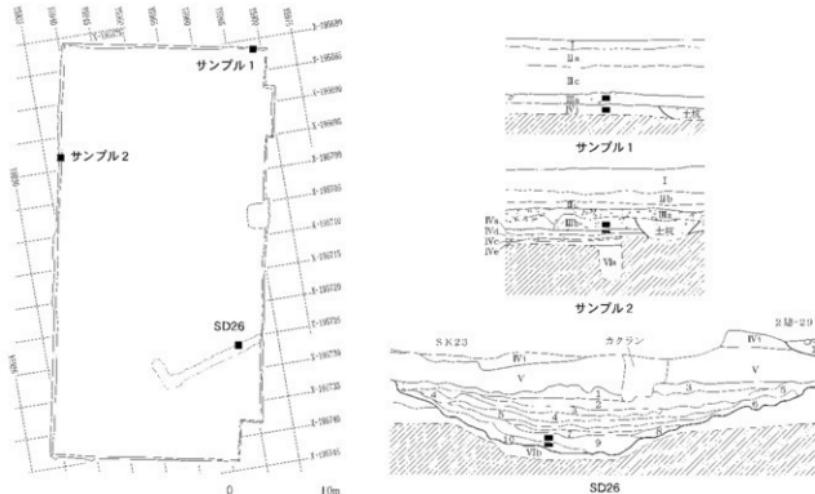
第1節 植物珪酸体（プラント・オパール）分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸 (SiO_2) が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壤などから検出して同定・定量する方法であり、イネを中心とするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山, 2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山, 1984）。

2. 試料

分析試料は、基本層土壤サンプル1のⅢa層とⅣj層、基本層土壤サンプル2のⅢb層とⅣa層、SD26土壤サンプルのV層（上・下）、9層、10層から採取された計8点である。このうち、V層は近世・若林城期以前、Ⅳa層とⅣb層は若林城期の終地層、Ⅲa層とⅢb層は近世・若林城期以降とされている。



第145図 土壤分析サンプル採取位置

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスピーズ法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105°Cで24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40μmのガラスピーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気炉灰化法（550°C・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレバラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の倍光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスピーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレバラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10~5g）をかけて、単位面積で厚層1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山、2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

4. 分析結果

（1）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を11表および146図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真（147図）を示す。

〔イネ科〕

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、ムギ類（穎の表皮細胞）、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族A（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等
〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等

〔樹木〕

はじめ絵パズル状（ブナ科ブナ属など）、その他

（2）植物珪酸体の検出状況

1) 基本層土壤サンプル1

下位のIV層では、ネザサ節型が比較的多く検出され、ウシクサ族A、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、および樹木（その他）なども認められた。上位のIIIa層では、イネ、キビ族型、ヨシ属が出現している。イネの密度は1,900個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを下回っている。

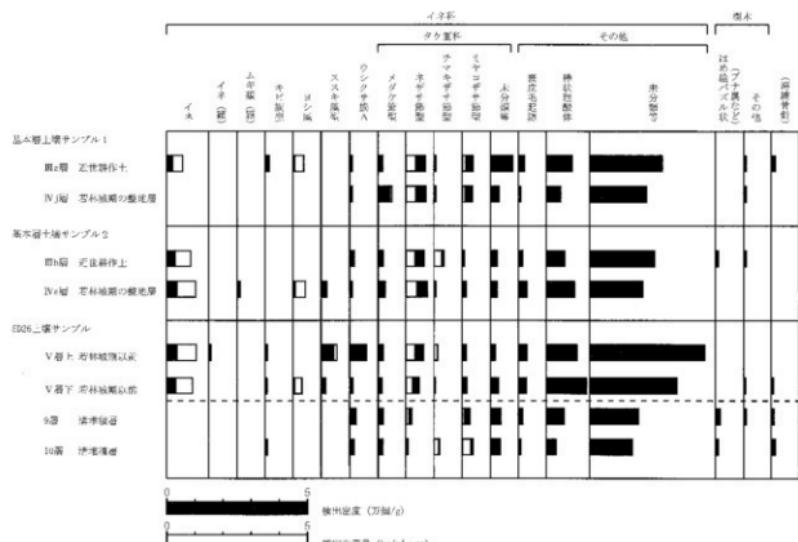
抽出実量(実量: ×100回/4)

分類群	学名	地点・調査	サンプル1		サンプル2		SDS-1液サンプル			
			III層	IV層	III層	IV層	V層ト	V層下	9層	10層
イネ科	Gramineae									
イネ	Oryza sativa		29		30	35	36	31		
メダガラス(葦の複数種)	Oryza sativa (Osek Phytolith)						7			
ムギ類(穀の複数種)	Bromus-Triticum (sek Phytolith)				7		7	6		7
キビ類型	Panicoid type		18							
ヨシ類	Phragmites		6			7		6		
ススキ類型	Miscanthoid type				14	43	10			
ワシタラソA	Andropogonoid A type		6	7	14	7	27	10	21	13
タケ属科	Bambusoideae									
メダガラス型	Pleistochloa sect. Nipponica annua		12	43	14	31	14	10	14	13
ネガサ類型	Pleistochloa sect. Nezasa		71	72	65	77	64	47	21	7
チャマザサ類型	Sasa sect. Sasa etc.		6	7	36	7	14	5		20
ミヤコザサ類型	Sasa sect. Crassiodia		39	36	7	14	14	16	27	39
木分類等	Others		77	29	23	21	14	26	34	23
その他イネ科	Others									
ヒヌロ起源	Husk hair origin		19	7	14	25	29	26	14	7
株状形態	Rod-shaped		90	50	65	98	107	142	62	33
未分類等	Others		257	200	230	188	407	309	172	151
細木松科	Athyriaceae									
はじめ砂イノモ(枝(片)など)	Juncus puzzle shaped (Fagus etc.)				7				14	7
その他	Others		6	7	7			5	7	13
(直譯等)	Sponges			13						
植物性液体試験	Total		624	458	510	523	814	650	385	326
計116分類群の推定生産量(単位: kg/ha·cm): 試料の假北米を1.0と仮定して算出										
イネ	Oryza sativa		6.17		6.84	1.62	1.65	0.92		
ヨシ科	Phragmites		0.41			0.41			0.33	
ススキ類型	Miscanthoid type					0.17	0.53	0.13		
メダガラス型	Pleistochloa sect. Kippelocalamus		0.16	0.50	0.17	0.54	0.17	0.12	0.16	0.15
ネガサ類型	Pleistochloa sect. Nezasa		0.34	0.34	0.31	0.37	0.31	0.23	0.10	0.03
チャマザサ類型	Sasa sect. Sasa etc.		0.06	0.05	0.07	0.05	0.11	0.04		0.19
ミヤコザサ類型	Sasa sect. Crassiodia		0.12	0.11	0.02	0.04	0.04	0.05	0.08	0.12

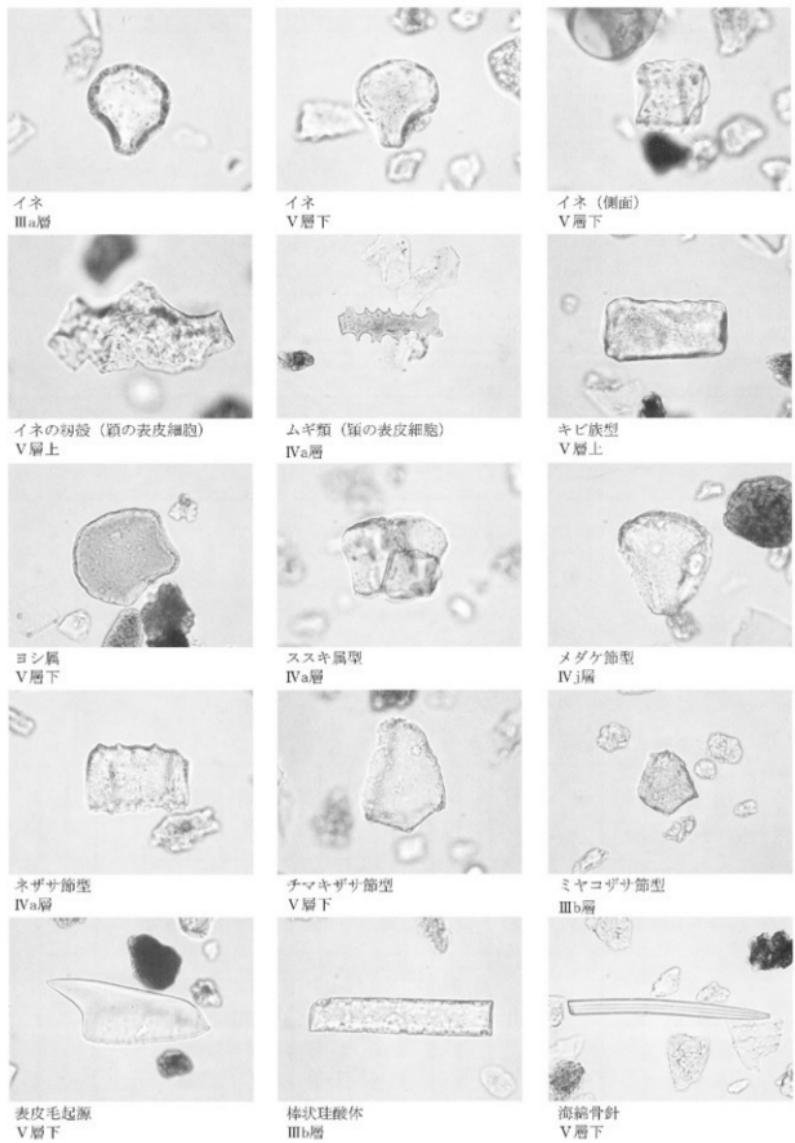
タケ科の比率(%)

メダク類型	Pleistochloa sect. Kippelocalamus	23	50	22	31	27	28	47	34
ネガサ類型	Pleistochloa sect. Nezasa	52	34	40	52	49	52	29	7
チャマザサ類型	Sasa sect. Sasa etc.	7	5	35	7	17	9		33
ミヤコザサ類型	Sasa sect. Crassiodia	15	11	3	6	7	11	24	26

第11表 植物珪酸体分析結果



第146図 植物珪酸体分析結果



第147図 若林城跡の植物珪酸体 (プラント・オパール)

2) 基本層土壤サンプル2

下位のIVa層では、イネやネザサ節型が比較的多く検出され、ムギ類（穂の表皮細胞）、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型なども認められた。イネの密度は3,500個/gと比較的高い値である。ムギ類（穂の表皮細胞）は700個/gと低い値であるが、穂（剥穂）が栽培地に残される確率は低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。上位のIIIb層でも、おむね同様の結果であるが、樹木（ブナ属など）が認められ、ムギ類（穂の表皮細胞）、ヨシ属、ススキ属型は検出されなかった。イネの密度は3,000個/gと比較的高い値である。

3) SD26上壤サンプル

溝底部の9層と10層では、ウシクサ族A、メダケ節型、ネザサ節型、ミヤコザサ節型、および樹木（ブナ属など）などが検出されたが、いずれも少量である。また、海綿骨針も少量検出された。上位のV層（上・下）では、イネやネザサ節型が比較的多く検出され、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族A、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型なども認められた。また、同層上部ではイネの粉殻（穂の表皮細胞）が検出された。イネの密度は3,100～3,600個/gと比較的高い値である。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

SD26遺構底部の9層と10層の堆積当時は、遺構周辺にネザサ節やミヤコザサ節などの竹苞類およびブナ属などの樹木が分布していたと推定されるが、植物珪酸体密度が低いことから、部分的に少量見られる程度であった可能性も考えられる。なお、湿地性のヨシ属などが認められないことから、遺構内は常時漏水するような状況ではなかった可能性が考えられる。

近世・若林城期以前とされるV層の堆積当時は、調査地点もしくはその近辺で稻作が行われていたと考えられ、周辺にはススキ属やチガヤ属、竹苞類などが分布していたと推定される。また、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと考えられる。

若林城期の整地層であるIVa層とIVb層では、植物珪酸体の検出状況がV層とおむね同様であり、IVa層ではイネに加えてムギ類（穂の表皮細胞）も認められた。これらのことから、若林城期の整地の際にはV層あるいは周辺の耕作地の土壤が利用された可能性が考えられる。

近世・若林城期以降とされるIIIa層とIIIb層の堆積当時は、調査地点もしくはその近辺で稻作が行われていたと考えられ、周辺には竹苞類およびブナ属などの樹木が分布していたと推定される。また、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと考えられる。

第2節 花粉分析

1. はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

2. 試料

分析試料は、若林城跡の基本層土壤サンプル1から採取されたIIIa層（灰褐色シルト）とIVb層（灰褐色シルト）、基本層土壤サンプル2から採取されたIIIb層（灰褐色シルト）とIVa層（灰褐色シルト）、SD26から採取された9層（灰褐色砂質シルト）と10層（灰褐色砂質シルト）の計6点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。これらは、植物珪酸体分析に用いられたものと同一試料である。

3. 方法

花粉の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 0.5% リン酸二ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で繊などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25% フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、冰酢酸によって脱水し、アセトトリシス処理（無水酢酸9：濃硫酸1のエルドマン氏液を加え1分間湯煎）を施す
- 5) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行う。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行う。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（-）で結んで示す。イネ属については、中村（1974, 1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とする。

4. 結果

（1）分類群

出現した分類群は、樹木花粉11、樹木花粉と草本花粉を含むもの2、草本花粉11、シダ植物胞子2形態の計26である。これらの学名と和名および粒数を12表に示し、花粉数が200個以上計数できた試料は、周辺の植生を復元するために花粉総数を基準とする花粉ダイアグラムを148図に示す。主要な分類群は顕微鏡写真（149図）に示す。また、寄生虫卵についても観察したが検出されない。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マツ属複雑管束亜属、スギ、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クルミ属、ハンノキ属、カバノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科-イラクサ科、ウコギ科

〔草木花粉〕

イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ソバ属、アカザ科-ヒュ科、アブラナ科、アリノトウグサ属-フサモ属、セリ亜科、タンボポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

單条溝胞子、三条溝胞子

（2）花粉群集の特徴

1) 基本層1（Ⅲa層、Ⅳ層）

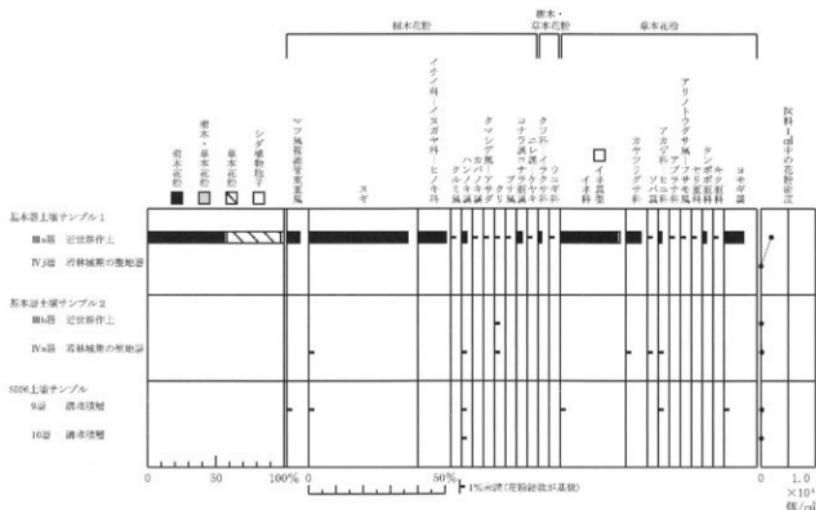
下位より、Ⅳ層では花粉密度が極めて低く、検出されない。

Ⅲa層では花粉密度は低いが、樹木花粉の占める割合が草本花粉よりやや高い。樹木花粉ではスギが高率に出現し、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、マツ属複雑管束亜属が続き、コナラ属コナラ亜属、ハンノキ属などが伴われる。草本花粉ではイネ属型を含むイネ科が比較的多く、ヨモギ属、カヤツリグサ科などが出現し、ソバ属などが伴われる。

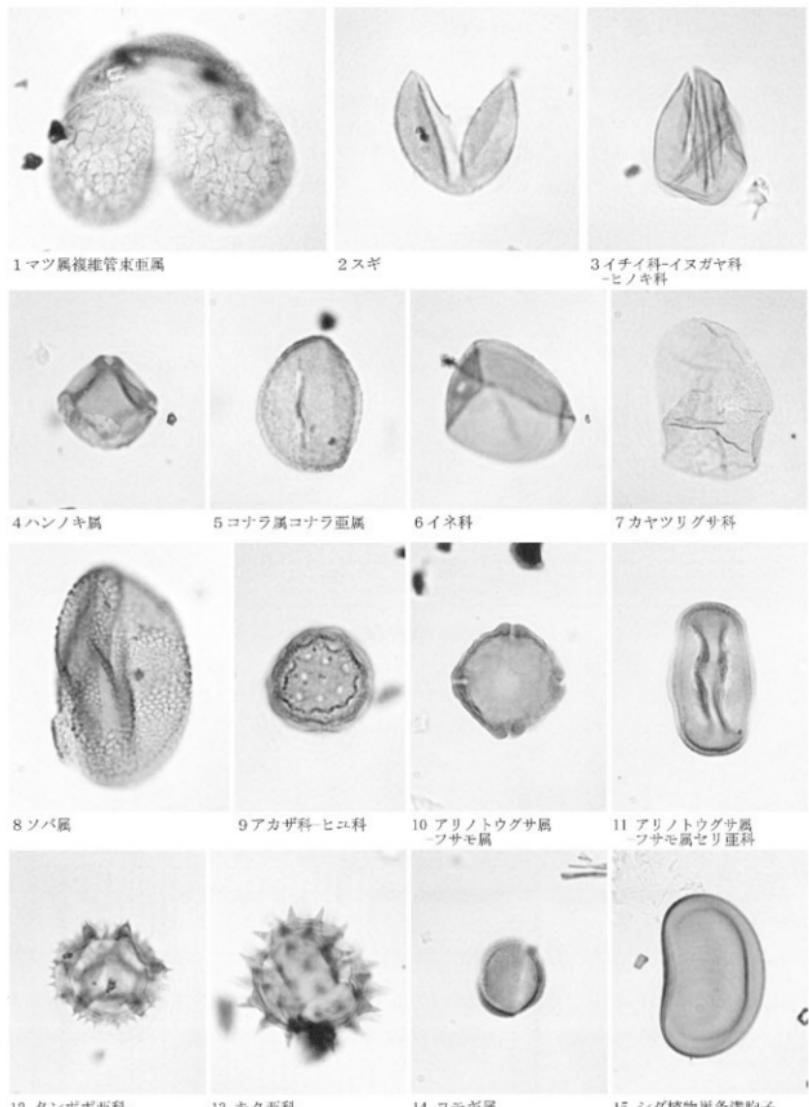
2) 基本層2（Ⅲb層、Ⅳa層）

学名	分類群	種名	花粉量1		花粉量2		SDS	
			IIIa期	IVa期	IIIb期	IVb期	9期	10期
<i>Arcular pollen</i>	草木花粉							
<i>Pinus sylvestris</i>	マツ油松油管束組成		15				1	
<i>Cryptomeria japonica</i>	スギ		115				1	1
<i>Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae</i>	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		33					
<i>Juglans</i>	クルミ属		1					
<i>Alnus</i>	ハンノキ属		6				1	5
<i>Betula</i>	カバノキ属		1					
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシダ属-アサガ		1					
<i>Castanea crenata</i>	クリ		2				17	
<i>Fagus</i>	ブナ属		1					
<i>Quercus subgen. Lepidobetula</i>	コナラ属コナラ組成		7					
<i>Ulmus-Zelkova serrata</i>	ニレノキ属		2					
<i>Magnolia-Mitchella</i> - <i>Polystachya</i>	木蘭科-胡椒属							
<i>Marcusia-Urticaceae</i>	クワ科-イクラサギ科		4					
<i>Araliaceae</i>	ウコギ科		1					
<i>Nothopollenites pollen</i>	草木花粉							
<i>Gramineae</i>	イネ科		67				7	
<i>Dryas type</i>	イネ科型		3					
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科		18				1	
<i>Fagopyrum</i>	ゾバ属		1				1	
<i>Chenopodiaceae-Amaranthaceae</i>	アカゼンヒキ科		4				1	
<i>Cucurbitaceae</i>	アブダラ科		3					
<i>Holopea-Myrsinophyllus</i>	ゾリトウタガ属-ツサモ属		2					
<i>Apodinae</i>	セリ科		3					
<i>Lactucales</i>	タンポポ科		5					
<i>Asteridae</i>	キク科		1					
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属		23				4	
<i>Polygonaceae</i>	シダ植物群							
<i>Ranunculaceae</i>	単子葉植物		7				8	
<i>Trilliaceae</i>	三葉草科		1				6	
<i>Arcular pollen</i>	草木花粉		184	0	5	19	7	6
<i>Arcular + Nothopollenites pollen</i>	草木+草木花粉		5	0	0	6	6	0
<i>Nothopollenites pollen</i>	草木花粉		139	0	0	3	12	6
Total pollen	花粉总数		319	0	5	22	19	6
Fallen frequencies of inf	花粉1ml中の花粉密度		1.9	0.0	5.6	1.5	1.5	5.6
	$\times 10^3$					$\times 10^3$	$\times 10^3$	$\times 10^3$
Unknown pollen	未同定花粉		7	0	2	6	2	2
Reinm. spore	シダ油松孢子		8	0	0	3	12	0
Reinm. eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Diatom remains	微小の淡水性藻類	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	炭酸灰分物	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)

第12表 花粉分析結果



第148図 花粉ダイアグラム



— 10 μ m

第149図 若林城跡の花粉・胞子

IVa層では花粉密度が極めて低く、わずかに樹木花粉のクリ、スギ、ハンノキ属、草本花粉のカヤツリグサ科、ソバ属、アカザ科ヒユ科が出現する。

IIIb層では花粉密度が極めて低く、樹木花粉のクリがわずかに出現する。

3) SD26 (9層、10層)

10層では花粉密度が極めて低く、樹木花粉のハンノキ属がわずかに出現する。

9層では花粉密度が極めて低く、わずかに樹木花粉のハンノキ属、マツ属複維管束亞属、スギ、草本花粉のイネ科、アカザ科ヒユ科、ヨモギ属が出現する。

5. 花粉分析から推定される植生と環境

1) 基本層1 (IIIa層、IVa層)

下位よりIVa層は、花粉が検出されず堆積速度が速かったからと考えられる。IIIa層では、やや樹木が多く、周辺地域にはスギ林が主に分布し、イチイ科一イスガヤ科ヒノキ科、マツ属複維管束亞属の針葉樹が伴われた。他にコナラ属コナラ亜属、ハンノキ属の落葉広葉樹が若干分布していた。周囲には草本が分布し、イネ属型を含むイネ科を主にヨモギ属、カヤツリグサ科などが生育し、またソバ属が伴われ、水田とソバなどの畑作の分布が推定される。

2) 基本層2 (IIIb層、IVa層)

IVa層では花粉密度が少ないが、クリ、スギ、ハンノキ属の樹木や、カヤツリグサ科、アカザ科ヒユ科の草本が分布要素であり、ソバ属の出現から畑作の分布が示唆される。IIIb層では花粉密度が極めて低く、堆積速度が速かった可能性が考えられる。

3) SD26 (9層、10層)

10層と9層では花粉密度が極めて低く、堆積速度が速かったか乾燥を繰り返す分解の著しい堆積環境が推定される。

6.まとめ

基本層では時期が2時期に分かれるが、若林城期の整地層である基本層1のIVa層と基本層2のIVa層では、花粉密度が極めて低く堆積速度が速かったとみなされた。なお、周辺でソバ栽培が行われていた可能性が示唆された。若林城期以降では、基本層1のIIIa層において周囲で水田やソバなどの畑作の分布が示唆され、周辺地域にスギ林の分布が推定された。SD26の溝底部の10層と9層は、花粉密度が極めて低く、堆積速度が速かったか乾燥を繰り返す分解の著しい堆積環境が推定された。

参考・引用文献

- 杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オパール). 考古学と植物学. 同成社, p.189-213.
- 藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(I)-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二 (1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)-プラント・オパール分析による水田址の探査-. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.
- 金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原. 新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法. 角川書店, p.248-262.
- 島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5集, 60p.
- 中村純 (1973) 花粉分析. 古今書院, p.82-110.
- 中村純 (1974) イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として. 第四紀研究, 13, p.187-193.
- 中村純 (1977) 稲作とイネ花粉. 考古学と自然科学, 第10号, p.21-30.
- 中村純 (1980) 日本産花粉の標識. 大阪自然史博物館収蔵目録第13集, 91p.

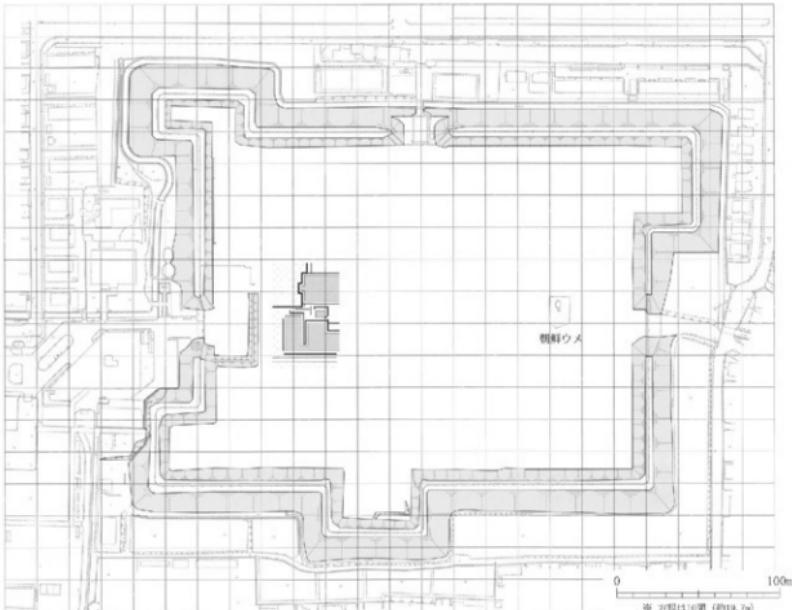
第7章 考 察

第1節 若林城の遺構について

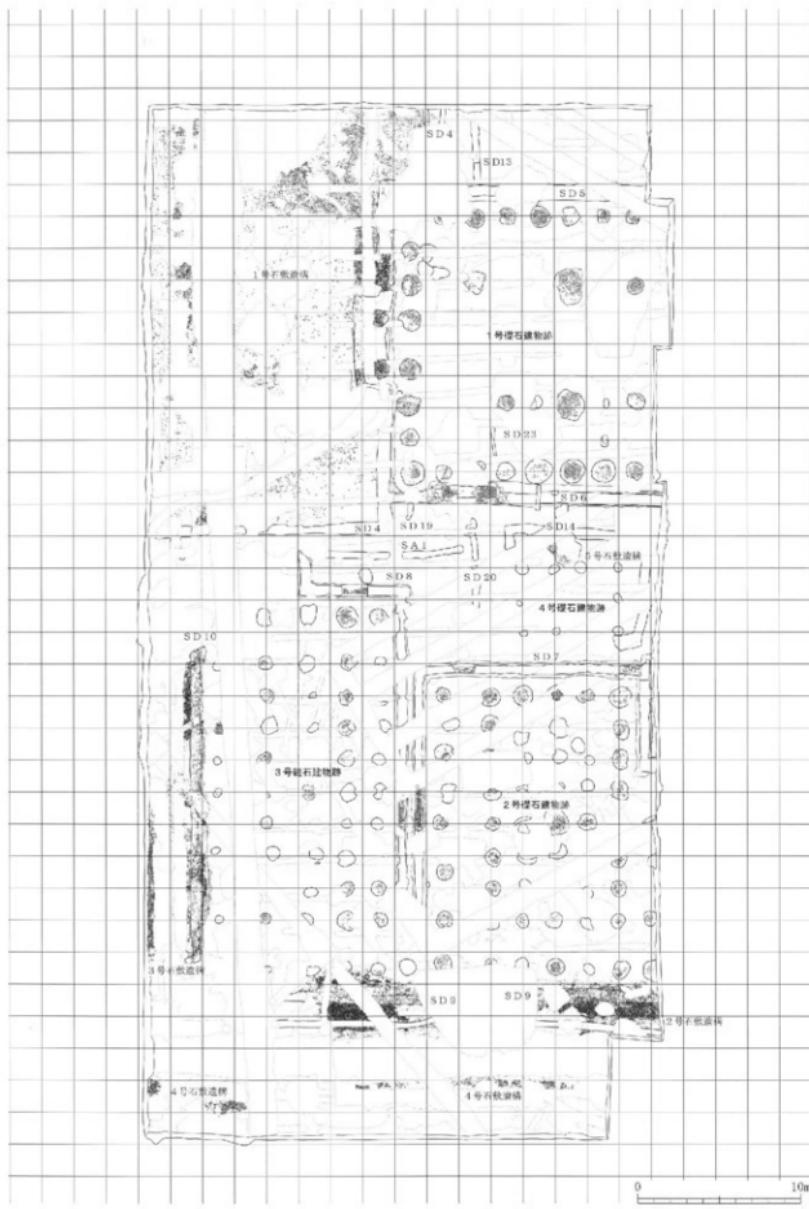
(1) 磁石建物跡の配置について

若林城での建物配置や規模、棟数などを記録した資料などは全く無く、その内容は仙台城二の丸に移築された建物名称を文献で知るのみである。今回の調査区は大手口とされる西側に設けられた枡形の東側に位置する。西側の内枡形土塁は長さ東西約27m、南北約45m、高さ2m程の遺存状況で、枡形部分には外郭土塁側に取付く外側の門の他に、土塁先端にも内門が存在していた可能性もある。しかし土塁の南北部分については、現在に至るまでの改変により本来の長さを保っていない可能性もあり、厳密には枡形を抜けてから初めの建物までの経路は定かではない。ただし今回確認した複数の建物は、大手口に面し近いことに加え、建物間にはあまりみられない石敷が建物西面を取囲み、中でも1号石敷連構は、その広さと構造面から、城内部へのエントランス的な性格を有していたものと推定されることで、この石敷に面するSB1やSB3は大手口に最も近い建物と考えられる。

建物の配置図に6尺5寸の方眼を合わせたものが151図である。建物は全て同じ方向性を持ち、各建物の構造からくる柱間の違いにより細部においては差異を見せるが、SB1の西辺柱筋がSB2と3の南北境ラインと合うことや、SB2と3の南北が同一ラインであること、SB2北側棟の東辺列がSB4東辺列と合うことがわかる。さらにSB1玄関部の西側への張出しがSB3の東辺ラインと合い、SB3の東西幅が内部の廊屋の柱間に違いを持つにもかかわらず、全体幅として5間に認められているなど、建物相互の配置に加え建物間隔においても造営当初からのかなり強い規格性により造られていることが読み取れる。これにより若林城の造営された寛永4年において



第150図 若林城建物位置図



第151図 第5次調査区遺構配置図

は、慶長年間に造られた仙台城本丸大広間と同様に、柱間1間が6尺5寸の基準をもって設計されていることがわかる。なおSB2の北辺ラインの位置は、城の東西の口を結んだ南北を分ける中軸ラインとほぼ一致しており、SB2の配置にあたっては、何らかの意図を持ってなされた可能性もある。

東側で実施した第8次調査や第4次調査2区での状況から、礎石建物跡は今回の調査区よりさらに東側の城中央部分に存在することが判明している。しかし南東部の第6次調査では建物跡や整地層は全く確認されておらず、その際検出した他遺構の残存状況からみて、この地区に建物が存在していた可能性は低いものとみられる。「若林古御城」や「若林御菴園」の2面の絵図には、城内南側の広い範囲に池とみられる大規模なプランが描かれ、第6次調査ではその一部とみられる西側へ下がる落ち込みを検出している。現時点ではこれが絵図の通り、御菴園に伴う施設の一部なのか、あるいは廃城後もその姿を留めていた若林城の遺構とみるのは確証を得ない。しかし東西長が100mもあるうかというこの池の規模や中島の存在を考慮すると、池は若林城の造営と共に造られた施設とみられ、今回確認した建物の中でもSB2は池にわりと近接した位置にあるといえる。

(2) 1号礎石建物跡について

[平面形状からみた特徴]

SB1は今回の調査で過半部分を確認したものの、東半部分については調査区外であったが、第8次調査で東側柱列と東辺溝を確認したこと、東西の桁行が12間(23.6m)と判明し、建物の全体形状をほぼ明らかにすることことができた。建物平面図に6尺5寸の方眼を重ねたものが152図で、建物寸法と形状を模式的に示したもののが154上図である。柱間寸法は東・南・北辺部の柱間が1.97mの6尺5寸に対し、西辺が2.1mの7尺となるが、これは西辺に幅10尺の玄関部を付すことにより全体を7間としたためである。建物への出入りは西側の妻側からとなる。建物内では東西の柱間が全て6尺5寸となるのに対し、南北の並びは西辺に揃って配置されている。また第8次調査で確認した東辺より1間内側の南北柱間は全て東側柱と並びを揃えており、両調査区の間には柱筋を違える所が存在するとみられる。

柱配置上の最大の特徴は、内部がSB2や3のような純柱状とならず、中央部に位置する礎石跡25と28の2つの礎石跡が際立って大きい点にある。後世の削平を考慮に入れなければならないが、SB1についてはその残状況が他建物と大差ないと判断されることから、建物内部は束柱を含め、柱を多用する構造ではなく、礎石跡の確認できない西半部分については本来床を持たない土間敷きであったと推定される。また大型の礎石跡はその構造からみて他の礎石跡より荷重のかかる部分に配置されたもので、柱もまた他より太い柱が使用されたとみられる。各側柱列から周辺溝までの距離は5尺~5尺5寸程あり、建物外部周囲に取付く縁などが付属していたかは柱跡などが未検出のため不明である。

[礎石跡からみた特徴]

礎石跡は他の建物と比較して掘り方格が大きい傾向にあり、根固め部分が検出段階から明瞭に確認できるものが多い。また根固石も明らかに大きめの円礫を使用している。特に礎石跡25と28は擾乱で上部を壊されている間にわらず、径は1.7m以上もあり、本来の規模は2mを超えるとみられる。またこの礎石跡25の北側に位置する4~6と、28の南側に位置する9~11は他に比べてやや大型の礎石跡となる傾向があり、礎石跡25と28に関連した配置と構造をもって造られている可能性もある。また礎石跡31~33は径0.7m以下の小型の礎石跡とみられ、根固石もみられないことから、束柱かあるいは補助的な柱と考えられる。第8次調査では、東側柱間の半間部分に小規模な礎石跡が3か所で確認されている。ここには「間柱」が存在していた可能性があり、この結果、建物が土壁(漆喰壁)であった可能性が指摘されている(注1)。

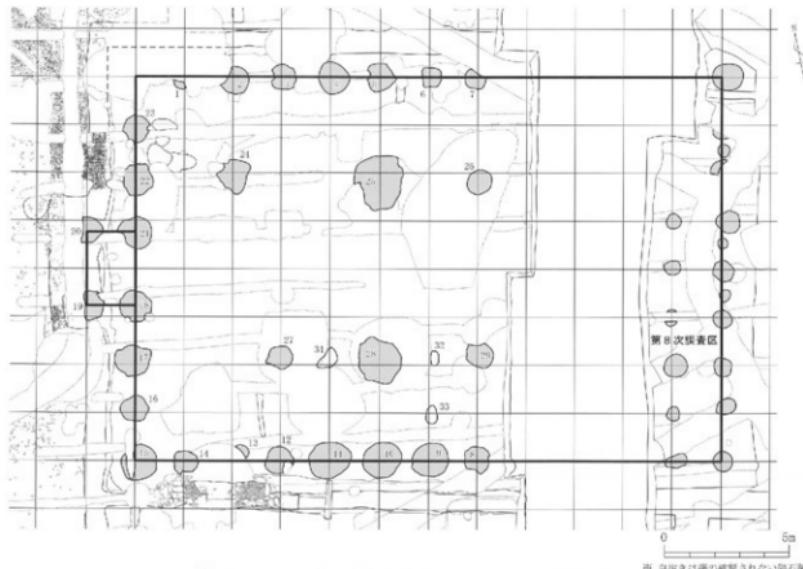
[付属溝からみた特徴]

溝跡は建物を取囲むように造っている。溝構造をみると、西辺のSD4aは掘り込んだ玄関北側部分のみの確認

であるが、底面に小円礫を敷き、建物側壁面にやや大きめの偏平礫を貼る構造なのに対し、SD 5とSD 6の1号石組遺構周辺は円礫や底面敷石を伴わない素掘り状のもの、SD 6東側は壁に側板を立てる構造であり、溝のみならず、同じ溝においても構造が異なっている。

構構造を考えるにあたっては、雨水やその排水を考える必要がある。SB 1の屋根東西方向に大棟をもつことでも南と北側に多くの雨水を落すことが想定されるが、これに対し西側は入母屋か切妻となることで雨水量は少なかつたと考えられる。西辺のSD 4aは底面が円礫敷きであり、雨水を流す排水というよりは浸透機能に重点を置いた構造とみられる。それは玄関張出し部分の西辺溝がより幅が狭いことからも窺える。これは北辺のSD 5についても同様で、水を流すという排水が主目的でないことから、壁面を保護する円礫や底面の敷石を必要とせず、素掘りという簡易な構造は、建物の面する方向の場所の性格にも関連することも考えられる。また南辺東側のSD 6は板貼り構造で、溝の開口幅は広い。雨水量によっては西側の1号石組遺構の側溝に流れた水は1号石組遺構を経由し、SD 6を流れ東方へ排水されたとみられる。またSD 6は溝底面に厚く土を敷く改修がされている可能性があり、この事はSD 6が単なる雨落ち溝ではなかったことを示しているものとみられる。

なお玄関部を南北に横断するSD 4bは、極めて浅く、小円礫も全く認められないことから、玄関の増設などの



第152図 1号基礎建物跡全体図（6尺5寸方眼入り）

※ 白抜きは塗の被覆されない礫石跡

礫石名	掘り方径(g)	礫石の徑(a)	位 置	礫石名	掘り方径(g)	礫石の徑(a)	位 置	礫石名	掘り方径(g)	礫石の徑(a)	位 置
礫石跡1	-	-	北辺	礫石跡12	1.2	-	北邊	礫石跡23	1.1	0.9	西辺
礫石跡2	1.1	0.95	北辺	礫石跡13	-	-	南邊	礫石跡24	1.5	-	建物内
礫石跡3	1.3	0.78	北辺	礫石跡14	0.98	-	南邊	礫石跡25	2.2	-	建物内中心
礫石跡4	1.3	1	北辺	礫石跡15	1.4	-	南東角	礫石跡26	1.7	-	建物内
礫石跡5	1.3	-	北辺	礫石跡16	1.1	0.99	西辺	礫石跡27	0.95	0.5	建物内
礫石跡6	0.8	0.65	北辺	礫石跡17	1.5	1.4	西辺	礫石跡28	1.9	1.15	建物内中心
礫石跡7	0.8	-	北辺	礫石跡18	1.3	-	西辺	礫石跡29	1.1	-	建物内
礫石跡8	1.1	0.8	南辺	礫石跡19	1.2	1.2	北東	礫石跡30	-	-	建物内中心助
礫石跡9	1.6	1.1	南辺	礫石跡20	1	1	北東	礫石跡31	0.6	-	建物内中心助
礫石跡10	1.6	1.1	南辺	礫石跡21	-	-	西辺	礫石跡32	0.6	-	建物内中心助
礫石跡11	1.7	-	南辺	礫石跡22	1.2	1.3	西辺	礫石跡33	0.75	-	建物内中心助

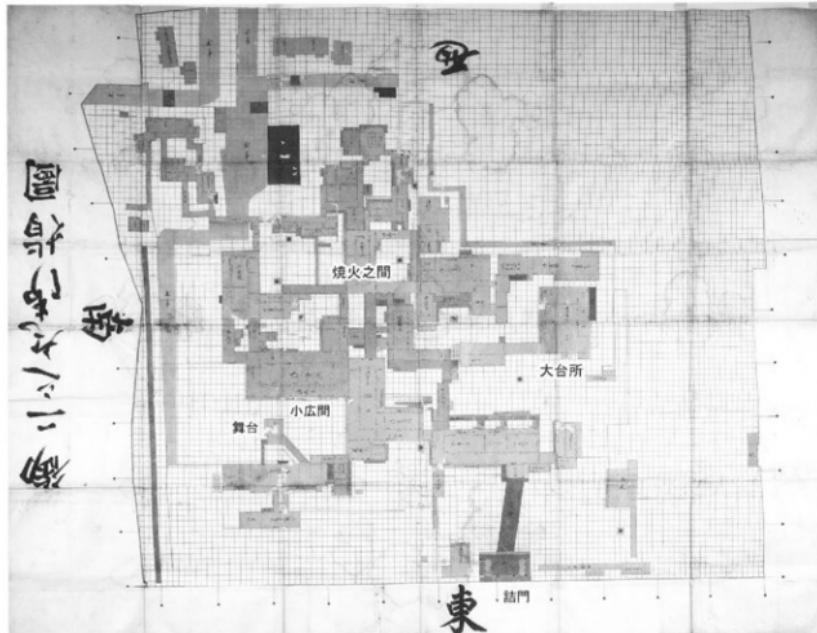
第13表 磚石跡法量表

建物改修に伴う古い溝跡ではなく、玄関土間に設置された何かしらの痕跡があるいは暗渠状の施設に伴う構造と考えられる。

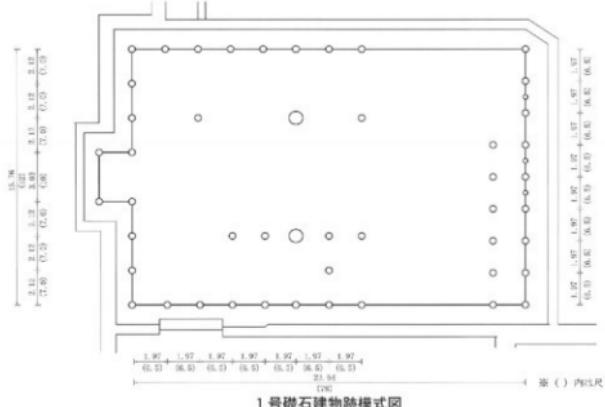
1号石組造構はSD 6に接続して造られた石組施設である。同様の構造を持った石組施設は第8次調査においても1基確認している。熊本県八代市に所在する麦島城は、天正16年（1588）頃に築城された城で、本丸跡より石灰岩の割石や大型円礫により積上げられた石組造構が検出されている。これには溝と接続するものや単独で存在するものがあり、前者については排水枡と想定されている。特に大台所と推定される大型瓦葺礎石建物跡脇に造られた石組造構からは魚骨などが出土しており、台所の排水枡と考えられている。また彦根城の表御殿においても石積み貯水槽として同様な造構があり、排水を一旦貯め、オーバーフローした上水を別の溝に排水する施設としている。これらの例から、今回検出された1号石組造構についてもSB 1に付随した排水枡で、ここには雨水も流入する構造であったものとみられる。

〔仙台城二の丸大台所との比較〕

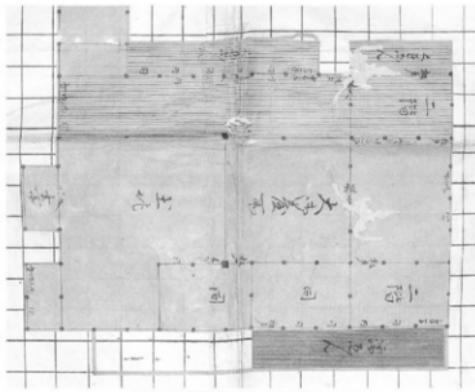
SB 1は礎石跡から推定される柱配置や全体規模などから、二代藩主伊達忠宗による仙台城二の丸の造営に伴い若林城から移築したとされる「大台所」の可能性が指摘されている（注2）。仙台城二の丸における最も古い段階での建物配置は『御二之丸御指図』（153図）にみる事ができる。この指図の製作年代は不明であるが、後の『青山公造制城郭木写之略図』（155図）などとの比較から、寛永15年（1638）の二の丸造営時をそう下らない初期段階の様子を描いたものとされている。指図は6尺5寸を1間とするとみられる方眼上に各建物が紙で貼られ、そこには部屋名称のほか、柱位置や道具などの種類など細部にいたるまで記されており、江戸時代初期の城御殿の建物配置や構造を知る上でも貴重な資料といえる。



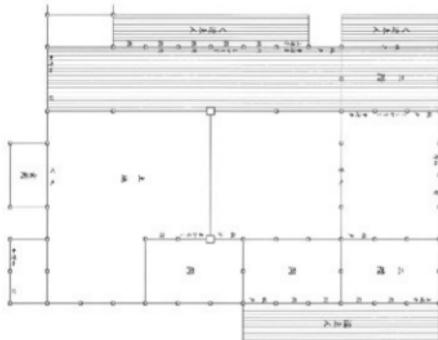
第153図 『御二之丸御指図』（宮城県図書館所蔵）



1号礎石建物跡模式図



『御二之丸御指図』（部分）大台所



仙台城二の丸大台所模式図

第154図 1号礎石建物跡と仙台城二の丸大台所との比較

大台所は二の丸殿舎群の北部にあり、中心殿舎である「小広間」とは反対側に位置し、玄関部を東に向かって東西棟の建物である。近世城郭における台所は御殿建物を構成する重要な施設とされ、建物規模は桁行12間（78尺）、梁間8間（52尺）と大型である。玄闇に入った部分はL字型の「土地」（土間）となり、西側には床を伴った板敷きか疊敷きの部屋が配置され、北側と南側には2階部分となる小屋裏部屋があったとみられる。建物規模はSB1と完全に一致しており、建物内部の柱配置を比較しても、ほぼ全ての柱がSB1と同じ位置に配置され、さらに特徴的だった2基の大型礎石跡もその位置に他の柱より太い角柱で表現されている。このような太柱の表記は指図中の他の建物には一切認められず、これは大台所という特殊な構造物に限った特徴と考えられる。

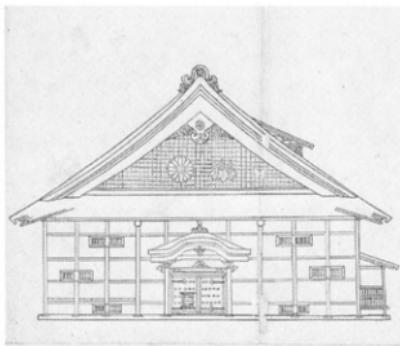
ただし異なる点もあり、玄闇幅はSB1が10尺で、左右の柱間が7尺なのに対し、大台所では幅2間の13尺と広くなり、これに伴い左右の柱間は6尺5寸と狭くなっている。また大台所には南東隅から南へ延びる廊下が取付くほか、北側には「くれえん」、北側東半には「瀧えん」などの縁や、玄闇右手には幅2間の中庭窓のある付属屋が設置されている。SB1の周辺溝の配置状況からみた場合、このような施設の存在は認められず、「くれえん」や「瀧えん」は主屋の外側に付けられた付属施設とみられる。したがって若林城の建物はそのままの状態で二の丸において移築使用されたのではなく、二の丸での周辺建物との新たな配置関係により、これらの施設は取外されたものと考えられる。指図にある大台所の廊下口中央や東辺南端の2か所に相当する位置で礎石跡が認められないのはこうした理由によるものと推察され、若林城ではSB1と周辺の建物とを繋ぐ廊下は建物北側や東側、あるいはSB4からはずれた南側東部に取付いていた可能性がある。またSB1内部の西壁際には焼面を伴った土坑が検出されているが、SB1が「台所」と推定されることで、これらの痕跡は土間に設置された竈などの火廻によるものと考えられるにいたった。大台所ではこの部分が板敷き部屋となっており、建物外部の改修のみならず、建物内部においても土間から板間への改修が成されたことが推定される。さらに玄闇部の幅の違いについては、指図の精度も考慮する必要があるが、移築後に玄闇幅を広げ、西辺を中心とした柱配置を大幅に変更することにより、建物内部における機能面での配置変更が行われた可能性がある。

『義山公治家記録』の寛永15年12月14日条には、「此日、二丸屋形焼火間・虎間・御納戸・茶道部屋・御隠間・上台所・御風呂屋・大台所・小姓間・御用間・肴部屋・御應部屋・算用屋、今日マテ段々上棟アリ、右御作事、若林ノ屋形ヲ解シ用イラルト云云、」とあり、若林城の廃城に伴い、多くの建物が解体され、二の丸で再び上棟され使用されたことがわかる。若林城におけるSB1は台所という構造上の特殊性ゆえに、移築後も大幅な改造を受けすことなく、再び大台所として使用されたと考えられる。

残念ながら指図からは大台所の上屋構造を窺い知ることはできないが、若林城と同じく伊達政宗が造営した仙台



第155図 『肯山公造制城郭木写之略図』
(宮城県図書館所蔵)



第156図 『御本九大御大所百歩一之図』
(千田家所蔵)

城本丸の建物や松島に所在する瑞巌寺の建物にそれを知る手がかりがある。『背山公造制城郭木写之略図』によれば、仙台城本丸大台所は遠侍棟の背後の西南の位置にあり、東西棟で西側に玄関をもつ。規模を明確に示す資料は無いが絵図から読み取ると、梁間が10間、桁行が15間から17間半程と推定され、S B 1よりもかなり規模の大きな建物であったことがわかる。建物西側には土間を伴っていたものと推測される。『仙台城及び宮戸上屋敷主要建物姿絵図』にある『御本丸大御台所百歩一之図』(156図)には大台所妻側の立面図がみられ、往時の姿を知ることができる。屋根は入母屋造り瓦葺で、煙出しを設け、妻部中央には軒唐破風付きの玄関が取付け、2枚の大戸が付く。妻には大懸魚を吊り、本連れ格子に本丸大広間の妻飾りと同様の菊と桐の彫刻を施している。壁は土壁(漆喰壁)とみられ、連子格子が三段に付いている。本丸大台所は大広間同様に若林城を遡る慶長期の壯麗かつ豪華な城郭建築の姿を示している。

瑞巌寺は平安期に創建された天台宗の延福寺が始まりとされ、慶長年間に伊達政宗により再興された名刹である。本堂である方丈は慶長14年(1609)の建立とされ、その北東に位置する台所である庫裏もまた本堂と共に造られたと考えられている。本堂と庫裏は国宝に指定されている。庫裏は元禄年間(1688~1704)や明治36年(1903)に改修されているが、昭和33年の解体修理の際には貞享4年(1687)の圖面を基にそれ以前の姿に復元されている。庫裏の規模は後世に付け加えられたとみられる北面の炊事場を除くと、桁行12間(23.6m)、梁間7間(13.8m)で、桁行はS B 1と同規模なのに対し、梁間が1間分小さい。屋根は切妻造木瓦葺で屋根上に櫓風の入母屋造の煙出しを載せている。妻飾りは梁と束で組み上げ、海老虹梁で身舎を繋ぎ、絵様肘木を束に載せている。妻壁上部の棟木は唐草彫刻の菱形をいれ装飾し、妻には懸魚を吊っている。東面には左寄りに屋根付の幅2間の玄関が取付け、壁は土壁である。玄関を入れると三間四方の土間となっており、その奥は板敷きの広間となっている。土間と広間との



正面（南東から）



側面（南から）



平面図

第157図 瑞巌寺庫裏

境には屋根を支える太い2本の柱があり、SB1や二の丸大台所の構造と酷似している。広間の周囲には廊下を廻らせ、南西側・北西側と北東側の一部には縁が取付いている。一方、建物周囲には溝が巡り、棟側の溝は幅広で深いのに対し、玄関側は浅く幅狭であり、構造を大きく異にしている。庫裏内部に加え馬込溝もまた後世の改修を受けているとみられるが、柱位置を含め全体構造自体はほぼ当初の姿を残しているものとみられる。

本丸大台所と瑞巖寺庫裡はそれぞれ城郭と寺院に付属する施設という点においては大きな違いがあり、それは規模や妻飾りなどの違いに表れている。しかし瑞巖寺の本堂は禅宗形式の中にもその規模もさることながら、押板床や連棚、帳台構を備えた上段間や付書院を備えた上々段間を設けるなど、政宗を迎えるための格式高い構えとなっていたり、その格式は付属する台所にも当たるるものと考えられる。SB1の上屋構造の詳細を知ることはできないが、若林城が本来、本城である仙台城以外の「屋敷」とはいえ、その規模や周辺に配される建物群の状況からみた場合、若林城における台所は本丸大台所にも匹敵する規模や格式を備えた建物であったと考えられる。これは若林城の建物群が移築された二の丸が、これ以後は本丸に代わり藩政の中心として機能していくことにも現れているといえる。

(3) 2号礎石建物跡について

[平面形状からみた特徴]

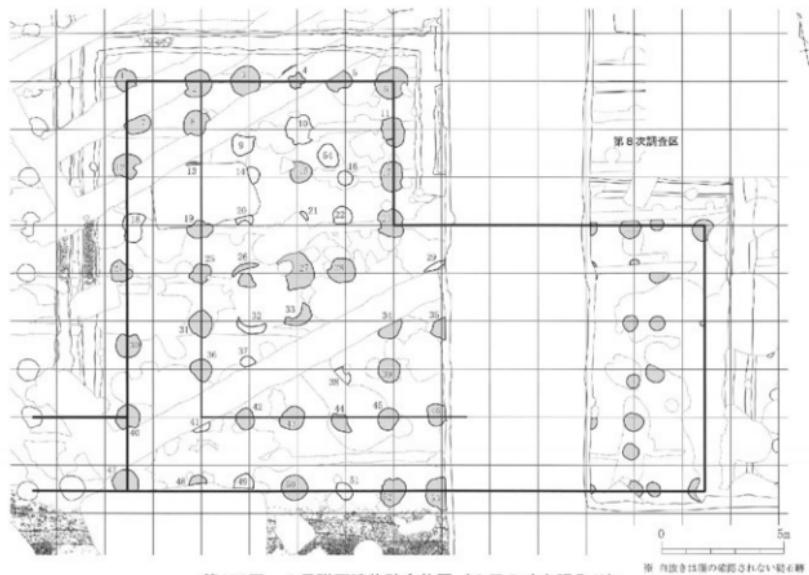
SB2は調査区の南東側で検出した礎石建物跡である。調査区内においては南北棟建物となるが、南半部が東側に鉤形(L字型)に曲がり、かつ礎石跡の配置が総柱状となるのがこの建物の最大の特徴といえる。建物東側部分については、第8次調査で東端の南北柱列を確認したことで建物全体の形状を明らかにすることができた。建物平面図に6尺5寸の方眼を重ねたものが158図で、建物寸法と形状を模式的に示したものが159図である。建物規模は南北8間(16.8m)、東西11間(23.6m)、であるが、建物東西側と南側に幅1間半の縁通りとみられる部分が確認できることで、実際は南北8間半、東西12間分の規模を有している。平面形状が鉤形となることから、建物は全体で三つのエリアに分けることができ、実際もこの区分けが部屋の配置となっているものと考えられる。

建物内の礎石跡をみると、まず二面の縁通りを除いた部屋部に、側柱を含めても最大の規模をもつ礎石跡27が位置している。東西に位置する26と28を除き、周囲に側柱相当規模の礎石跡は存在せず、構造的にも全て貧弱と言わざるをえない。このことから建物西側においては礎石跡27を南北の境として、北側に4間、南側に縁通りまでの3間の広さとなる南北を二つに分けた部屋の配置が想定される。また東の境については、建物北東角の礎石跡6から建物東辺ラインに沿い南へ延び、縁通り際にある45へと並ぶ南北のラインを想定することができる。このライン上にある礎石跡34と39は掘り方径は1mを超えるものである。また北側に位置する礎石跡9と54は柱筋が通らない位置にあるが、構造からみた場合、東柱とは異なり北側の部屋に存在した何かしらの施設に関係した構造とも考えられる。第8次調査では建物東端側で東西幅半間の「床間」の可能性のある部分を確認したが、鉤形建物においては何れかの端の格の高い部屋にこのような施設を備える例が多く、その配置は建物への進入経路と密接な関係を持っている。建物北側にそのような施設があった可能性は否定できないが、この事はあくまでもSB2のみの構造検討のみならず、周辺建物や諸施設の特徴の比較や配置関係により検討する必要がある。

建物側柱をみると、西辺の7と18や南辺の49・51・53は小規模なことに加え、掘り方の構造においても埋土に沈下防止のための填土を加えた様子があまり無く、両隣にある礎石跡とは異なる構造をみせる。この事は部屋部と縁通りを仕切る柱が1間間隔で配置されたと推定されるのに対し、建物外縁部分では簡易な礎石跡は束柱となり、柱は1間分を抜いた柱間約4mとなる間隔であった可能性を示すものといえる。この構造は建物外壁のほとんどが土壁と推定されるSB1とは異なり、建物外部と内部を板戸や襖・障子などで仕切る、いわば御殿と呼ぶに相応しい開放した建物であることを思わせる。西辺南半部の礎石跡24・30・40の間が3間2つ割の各々1間半となるのも同様の理由によるものとみられる。またこの部分が東側に位置する部屋幅と一致するのも何かしら関係しているも

のとみられる。このように縁通りを伴った建物においては同様の構造を有するものであることが、二の丸の中心殿舎である小広間や書院をはじめ、幾つかの建物に確認できる。

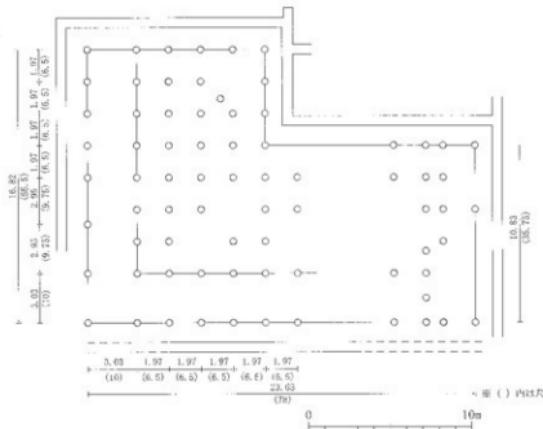
調査では縁通り内部に礎石跡やピット状の痕跡は確認できなかった。しかし縁通り幅は3m近くもあり、通常なら床下に東柱が必要とされる構造といえる。このことから部屋部分での東柱となる礎石跡に比べ、縁通りの東柱は小規模で浅く簡易なもので、これらは後の耕作により失われている可能性が高い。また二の丸や他の城郭建物の例から、縁通りは建物周囲全てに設けられることもあり、建物の北側にも幅1間の縁通りが存在した可能性もあるが、現時点ではそれを裏付ける資料は無い。さらに仙台城本丸大広間の広縁とよばれる縁通りの外側には落筋という幅が狭く、一段低くなる縁が建物周囲を巡っている。二の丸殿舎の小広間をはじめ、達侍棟や客の間など、主要な建物の表側には「きりえん」が配置されている。S B 2と各辺溝との間隔は5尺～5尺5寸と1間に満たないもの



第158図 2号礎石建物跡全体図（6尺5寸方眼入り）

礎石名	縦方向幅(m)	横置け長(m)	位 置	礎石名	縦方向幅(m)	横置け長(m)	位 置
礎石跡1	0.84	0.5	北西角	礎石跡10	1.03	0.66	建物内
礎石跡2	1.2	0.9	北辺	礎石跡20	0.7	-	建物内
礎石跡3	1.2	0.8	北辺	礎石跡21	-	-	建物内
礎石跡4	-	0.6	北辺	礎石跡22	1.2	-	建物内
礎石跡5	1	0.8	北辺	礎石跡23	1.1	-	東東角
礎石跡6	1.35	1	北東角	礎石跡24	-	-	西辺
礎石跡7	1.1	0.26	西辺	礎石跡25	0.96	-	建物内
礎石跡8	1.15	0.8	建物内	礎石跡26	-	-	建物内
礎石跡9	0.87	0.66	建物内	礎石跡27	1.6	1.1	建物内
礎石跡10	1.1	0.75	建物内	礎石跡28	1.2	-	建物内
礎石跡11	1.2	0.6	西辺	礎石跡29	-	-	建物内
礎石跡12	1.19	0.29	西辺	礎石跡30	1	0.7	西辺
礎石跡13	-	-	建物内	礎石跡31	1.1	0.8	建物内
礎石跡14	0.7	-	建物内	礎石跡32	1.2	-	建物内
礎石跡15	0.8	-	建物内	礎石跡33	1.3	-	建物内
礎石跡16	-	-	建物内	礎石跡34	1.1	0.6	建物内
礎石跡17	1.2	-	西辺	礎石跡35	0.9	0.4	建物内
礎石跡18	1.2	-	西辺	礎石跡36	0.9	-	建物内

第14表 磚石跡法量表



第159図 2号礎石建物跡模式図

の、一定の幅を保っている。調査では建物周間に礎石跡や柱痕跡は全く確認できなかったが、周囲にはこれらのようないずれかの跡が存在していた可能性もある。

〔礫石跡からみた特徴〕

礎石跡は検出段階で根固めに充填された円盤が明瞭に確認できるものと、ほとんど確認できないものとに二分される。しかしSB1側柱にみられる円盤の大きさや縦間にあまり砂礫が混入しない状況はSB2には認められず、建物内で大型といえる側柱でさえ根固石と共に多くの砂礫が入れられている。大型の27は礎石の抜取り穴の残存状況から見た場合、極端に上部が失われている状況では無いにもかかわらず、掘り方規模に比して砂礫の充填される割合が多いことから、SB2の礎石跡は本来的にSB1とは構造が異なったもので、構造上の弊害度合いが如何にあるにせよ、これらの違いは建物間での相違と理解できる。

礎石跡の掘り方の底面や壁面に接して黒褐色や暗褐色、黄褐色土が狭い縞状となり掘り方プランの外端をリング状に巡っているのが多く確認できる。この痕跡は本来掘り方内に入れられた整地土を掘削した各種ブロック土が変化したものとみられ、断面観察から壁面部分では横方向から、底面部分では上方向から強く填圧されることによりブロック土が変形し連續性の無い狭い縞状になったものと推察される。当初は建物の荷重により整地ブロック上の変形したものともみられたが、壁面に沿って縱方向の縞が形成されることから、先の考えにいたった。先述の通り、この特殊な構造は上部の柱と密接な関係を持っており、より荷重のかかる礎石跡に顕著にみられる傾向がある。したがって小規模かつ根固めが十分に入らないことに加え、この填圧痕跡が確認できないものについては、東柱的なものかあるいは補助的な柱である可能性が高いといえる。このような構造に類似した例は仙台城本丸大広間や二の丸の調査で確認した礎石建物においても僅かではあるが確認されている。

[付属溝からみた特徴]

溝跡は建物全体を取囲むように巡っている。東及び北辺の S D 7・南辺の S D 9 の構造は底面に板状の割石を敷き詰めるのに対し、西辺ではその上に小円礫を敷く手の込んだ構造という違いがある。北辺部では削平の影響も否認できないが、おそらくは東辺同様に本来円礫を伴わなかったとみられる。建物の上層構造については第8次調査の成果も踏まえ、今後詳細な検討が必要とされるが、S B 2 は基本的に東西棟建物であり、この方向に大棟があつ

た場合、西と東側に主たる姿部が配置されたと考えられることから、南と北側の溝がより多くの雨水を収容したものと想定される。SB 1 の例から、小円礫は溝の機能のみならず意匠面を考慮した構造とも考えられ、周囲の溝が単に雨落ち溝としてのみ機能していたのであれば上記のような構造の差は無かったものとみられる。このことから、西辺溝は SB 3 と近接することで建物外部からではなく、双方の建物からみた場合の「見栄え」的な観点に加え、雨水の収容と排水量の少なさからくる構造であるに対し、小円礫を敷かないその他の溝については、主として排水量の多さからくる機能面を重視した構造によるものとの考え方もある。相互の溝の配置状況からみて排水は建物東側に流したと推定される。また SD 7 は北東隅で北側に突出する構造を持っている。円礫や敷石は無いが仕切り方を伴っており、同様の配置は他の城郭建物や寺院にも幾つか認められるが、これが溝自体の機能かあるいは屋根形状に因るものかは明らかでない。

[想定される建物]

近世城郭における殿舎群の中でも台所は最大規模の建物とされるが、SB 2 はこの台所と同等の規模をもち、城内でも大型の建物であったとみられる。形状が鉤形となり、部屋が一列に並ぶことによりこれらが明確に区別され、そこには部屋による格式の違いがあったことを考えさせられる建物である。部屋間は壁ではなく襖や障子などで仕切られていたと推定されることで採光に配慮した配置形態をとっており、仕切りを外した場合の部屋面積はかなりの大きさになるとみられる。また周囲には幅 1 間半もの縁通りが二面にわたり配置され、床間の存在も考えられるなど、城郭における御殿建物を考えるに十分な要素や資質を有している。さらに周辺溝からはその性格上、瓦葺きであったとみられる SB 1 とは明確に異なり、棟込瓦である輪違いが多く出土している。このことから建物の屋根は大棟部分にのみ瓦を葺いた板葺きであった可能性があり、近世初期においては中心的な御殿建物は板葺きであったことからも、その格式の高さが窺える。

『御二之丸御指図』にはこの建物に照合できるものは現在のところ確認できない。鉤形という特徴から見た場合、小広間と達侍棟をつなぐ虎の間と客の間棟や、小広間の南西側に位置する書院などがあげられるが、規模や柱位置などで違いがある。建物の移築にあたり台所のような特殊な建物は大きく改変することなく建て直されたとみられるが、その他の建物についてはその限りでは無く、二の丸での新たな位置付けや使用形態により大幅に改修されている可能性もある。また何らかの理由で移築されなかったか、もしくは別の場所に移築された可能性も否定できず、今後はより広い視野での検討も必要かもしれない。

(4) 3 号礎石建物跡について

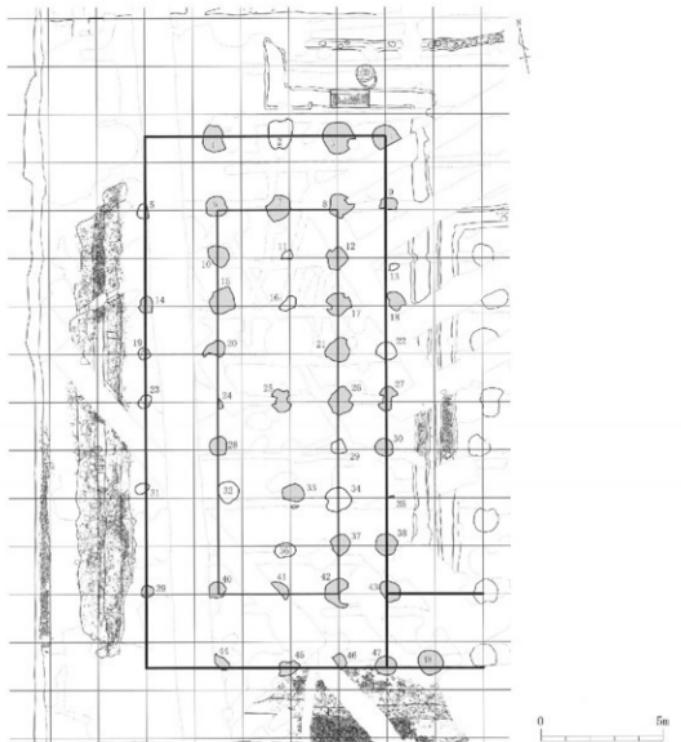
[平面形状からみた特徴]

調査区の南西側で検出した礎石建物跡で、建物全体を確認している。今回確認した建物の中では唯一の南北棟で、第 8 次調査を含めた中でも SB 3 のみの配置となり、これが最大の特徴といえる。建物平面図に 6 尺 5 寸の方眼を重ねたものが 160 図で、建物寸法と形状を模式的に示したものが 161 上図である。建物内部の特徴は SB 2 と同じく、内部の柱配置が総柱状になることで中央に部屋部を伴い、縁通りが西・南・北端の三辺に加え、東辺にも幅約 1 間の縁通りが付く可能性もあることである。また柱間は南北が縁通りを除き全て 6 尺 5 寸を基準とするのに対し、部屋部の東西柱間は、建物全体の 5 間のうち縁通りが 2 間半を占めた残りの 2 間半を二分するといった他に無い配置をみせている。部屋部は中央に位置する礎石跡 25 が残存することでここを境に部屋を南北に分ける可能性もあるが、確証は無い。

[礎石跡からみた特徴]

北辺列の礎石跡は掘り方径が 1 m を超えることを除けば、ほとんどの礎石跡は規模や構造に大きな特徴を持つものではなく、概して SB 2 と同様な状況をみせている。また掘り方の底面や壁面に接して黒褐色や暗褐色、黄褐色土が狭い縞状となり掘り方プランの外端をリング状に巡っているものが多くの礎石跡に確認できるが、これらの有

無により配置上の特徴を見出すことはできなかった。ただし内部の礎石跡25は上部を擾乱されながらも根固石が充填され、外端がリング状となるもので、ここが部屋境となる可能性があるが、この部分に関しては配置上、束柱であったとみられる。また西辺は検出レベルが他と大差無いにも関わらず、全ての規模が小さく、根固石が密に確認できるのも礎石14と39のみである。39は部屋部南辺の西側延長にあたる場所にあたることによるものとみられる

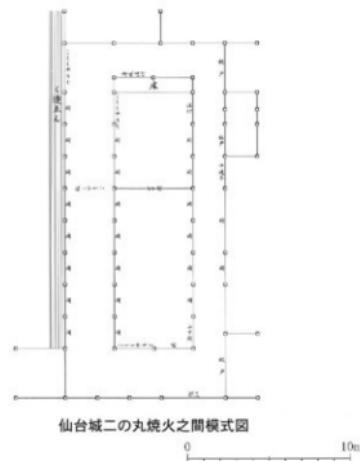
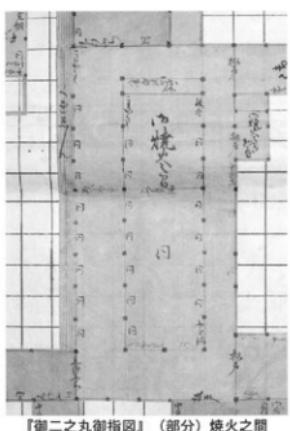
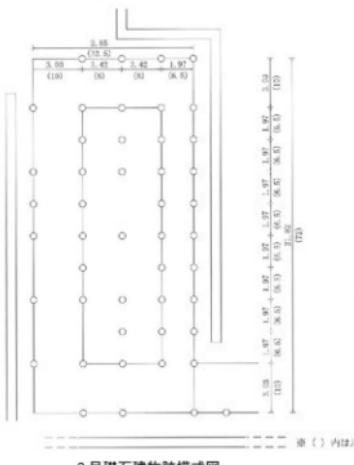


第160図 3号礎石建物跡全体図 (6尺5寸方眼入り)

※ 白抜きは繩の確認されない礎石跡

礎石名	掘り方後(a)	根固め後(b)	位置	礎石名	掘り方後(a)	根固め後(b)	位置	礎石名	掘り方後(a)	根固め後(b)	位置
礎石跡1	1.1	-	北辺	礎石跡17	1	0.8	見物内	礎石跡33	-	-	見物内
礎石跡2	1.38	-	北辺	礎石跡18	0.96	0.64	東辺	礎石跡34	1	-	見物内
礎石跡3	1.38	1	北辺	礎石跡19	0.47	0.3	西辺	礎石跡35	-	-	東辺
礎石跡4	1.	0.7	北東角	礎石跡20	0.96	0.56	見物内	礎石跡36	0.95	-	見物内
礎石跡5	0.46	-	西辺	礎石跡21	1	0.6	見物内	礎石跡37	0.9	0.6	見物内
礎石跡6	0.8	0.98	棟物内	礎石跡22	0.82	-	東方	礎石跡38	0.9	0.92	東方
礎石跡7	1.06	0.92	棟物内	礎石跡23	6.5	-	西方	礎石跡39	0.5	-	西辺
礎石跡8	1	0.7	棟物内	礎石跡24	-	-	棟物内	礎石跡40	-	0.65	棟物内
礎石跡9	0.7	0.5	東辺	礎石跡25	6.96	0.8	棟物内	礎石跡41	0.93	0.7	棟物内
礎石跡10	0.9	0.5	棟物内	礎石跡26	1.1	0.79	東辺	礎石跡42	1.2	0.6	棟物内
礎石跡11	-	-	棟物内	礎石跡27	6.98	0.62	東辺	礎石跡43	0.86	0.68	東辺
礎石跡12	9.92	0.7	棟物内	礎石跡28	6.8	0.46	棟物内	礎石跡44	-	-	西辺
礎石跡13	-	-	東辺	礎石跡29	0.68	-	棟物内	礎石跡45	-	-	西辺
礎石跡14	0.7	-	西辺	礎石跡30	6.78	-	東辺	礎石跡46	-	-	西辺
礎石跡15	1.3	-	棟物内	礎石跡31	0.6	-	西辺	礎石跡47	0.86	0.6	東角
礎石跡16	0.8	-	棟物内	礎石跡32	6.9	-	棟物内	礎石跡48	1	0.75	西下

第15表 磂石跡法量表



第161図 3号磁石建物跡と仙台城二の丸焼火之間との比較

が、多くの礎石跡は貧弱な感を受ける。東辺礎石跡に同様の構造は認められず、これが何に因るものか現時点では判断できない。

[付属溝からみた特徴]

溝跡は建物北西側を除き、建物を取囲むように巡っている。SD 8 は溝全体を通し底面には小円礎のみが敷かれた構造であり、また西辺の SD 10 も同様に小円礎が敷かれたものとみられる。これに対し南辺の SD 9 は SB 2 から続く一連の溝であるが、東側でみられた割石のみを敷いた構造ではなく、素振り構造となる可能性がある。SB

S 3は大棟を南北方向にもち、南と北側に妻部を持つと推定される建物である。したがって雨水量からすると西と東側の溝が収容する量は多いとみられ、東側では S D 8 により北側の石敷造構の側溝へと排水され、また西側では S D 10 が建物北辺の南で途切ることから、反対に南側の S D 9 へ排水されたとみられる。S B 3 では排水量の多い西や東側溝に底面に小円錐を伴う構造となり、S B 2 とは状況が異なっているが、この理由については、機能面以外に建物が面する方向の違いや建物間での格の違いに因るところもある。

建物の北側には S D 8 が屈曲することにより生じた空間がみられるが、この部分に礎石跡や柱痕跡などは検出されず、北側が石敷であることから、ここに北側へ通じる渡り廊下を想定することはできない。また建物のこの辺りに表玄関を想定することも可能であるが、妻側からの進入路を想定することは難しく、その場合 S D 10 が途切れる建物西面の北端部が玄闇等の存在が疑われる場所となるが、これもまた確証を得ない。

【仙台城二の丸焼火間との比較】

『御二之丸御指図』には S B 1 以外にもこの S B 3 と規模や件配置が極めて類似する建物が描かれている。小広間の西側のやや奥まった位置にある「焼火間」がそれにあたり、詳細な寸法は不明で S B 3 とは方向が異なるが、東西棟建物で、桁行10間、梁間4間と S B 3 と同規模である。周囲は東・西・南側が10尺、北側が6尺5寸とみられる縁通りが配置され、部屋部は桁行8間、梁間2間で、二部屋に分けられ、西側の部屋には部屋幅2間分に「床」が偏わっている。床は半間程度の奥行きで、その分西側の縁通りの幅が狭まっている。建物周囲は廊下により他の部屋とつながっており、南の表側には幅の狭い縁がみられる。

部屋間や縁通りとの間は「ふすま」や「こしきょうじ」で仕切られ、南側が障子なのに対し、北側が「中連子」とあることから、1間半幅の縁通りのある南側が開放され、視界が広がる表側であることが窺える。また S B 3 との相違点は部屋割りや床の存在以外にも、北と東側柱の柱間に違いがみられるが、これらは周囲に取付く廊下や物置などによるものと考えられる。焼火間は西側と東側の部屋の大きさに違いがみられる二間配置をとっている。これは二の丸の奥側でもある西側に配置された床のある部屋を上段側とする格の違いを示すもので、焼火間は同じような配置を持つ小広間、書院、伺候間、客間と共に、他の部屋に対しても比較的上位の部屋とされている。焼火間も若林城より移築された建物の一つに挙げられており、S B 3 もまた若林城から二の丸に移築した建物と考えられる。ただし S B 3 と焼火間とは建物自体の規模や構造に大きな改造が加えられなかったとはい、若林城や二の丸内の配置場所に大きな違いを見出すことができる。これは S B 3 が若林城とは異なった役割を担って二の丸に再生され、若林城での部屋名称もまた別なものであったことが推察せるものといえる。

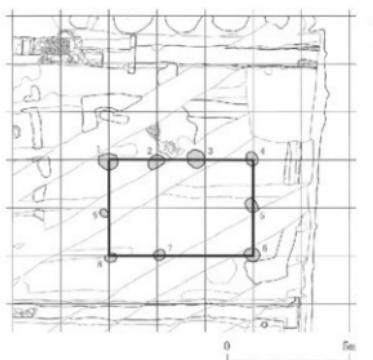
【想定される建物】

若林城内における S B 3 は西の大手側に最も近い西端部に位置している。この事実からすれば、S B 3 を城の「表向き」の建物とみることは可能である。S B 3 が焼火間同様に若林城においても二間に分かれ、床間をもつ格式のある建物だったかは不明であるが、焼火間として使用されたことはこの建物が本来的にも相応の格式を有していた建物であり、移築によりその建物としての格式や用途が変わったにしても、建物本来の機能が大きく変わることは無かったと推察される。S B 3 はあくまでもその位置が入城後の進入路にある場合、その配置的特徴から、表玄関を伴い御殿への最初の建物となる遠侍的な建物となる可能性もある。

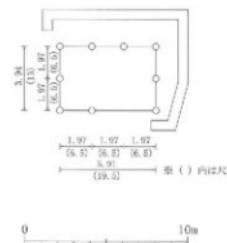
(5) 4号礎石建物跡について

【平面形状からみた特徴】

S B 1 と S B 2 に挟まれた位置で検出した小型の礎石建物跡で、建物全体を検出している。建物平面図に6尺5寸の方眼を重ねたものが162図で、建物寸法と形状を模式的に示したもののが163図である。柱筋は S B 2 と揃うが、北側の5号石敷の存在は S B 1 との関係を連想させるものである。この建物の特徴は側柱のみで内部に礎石跡が確認されない点にある。



第162図 4号礎石建物跡全体図（6尺5寸方眼入り）



第163図 4号礎石建物跡模式図

礎石名	掘り方縦(a)	掘固め横(a)	位	礎石名	掘り方縦(a)	掘固め横(a)	位
礎石跡1	0.25	-	北西角	礎石跡4	0.6	-	北東角
礎石跡2	0.7	-	北(上)	礎石跡5	0.42	-	東(上)
礎石跡3	0.7	-	東(下)	礎石跡6	0.6	0.4	南東角

第164表 磚石跡法量表

【付属溝からみた特徴】

溝跡は北西および南東について屈曲して止まっている。仮に溝が全周していたとしても南および西辺での建物と溝との幅の狭さは他に例が無く、建物周りでのスペースの必要性が無い構造が考えられる。溝内には円礫や削石を敷いた痕跡は無く、排水機能をあまり重視しない雨落ち溝としての簡易な構造であったと推定される。

【礎石跡からみた特徴】

礎石跡は他の礎石建物と比較して最も大きいものでも0.7m程と小規模であるが、根固めには砂礫が多く、ピット状のものもあるなど、規模相応の構造との理解もできる。

【想定される建物】

建物内部に束柱があったとしても既に失われており、建物が床敷きか土間敷きであったかを判断するのは難しい。SB4は周間に雨落ち溝が巡るのに加え、石敷構造の位置から北側に入口があったと推定されることから、SB1やSB2とは廊下でつながれず、建物の中でも様々な物品を必要としたであろう台所であるSB1に付属する物置的な建物であった可能性がある。

（6）建物に関わる溝跡について

溝跡はその構造からいくつかに分類することができる（164図）。I類は側石に安山岩質の角礫を組むもので、今回は確認できなかったが、第4次調査2区や第8次調査で確認されている。この場合底面に板状に割った石材や円礫を敷くものと敷かないものがある。II類は底面に角礫や小円礫を敷いたり、壁面の一部に円礫を列状に並べたりするもので、その種類と組み合わせによりさらに分類できる。III類は溝の壁面に側板を貼ったもので、底面には何も敷かれない。IV類は溝内に石材や板などを使用しない素掘りのもので、溝を掘っただけのものと掘り方内に土を敷き戻すものに分類できる。当初、底面にのみ角礫や小円礫が敷かれた溝跡については礎石同様に多くの側石が抜き取られたと考えられた。しかしその抜取り痕跡が全く確認できることに加え、掘り方幅が狭いことにより、今

類型	模式図	構造	例
I 壁面に角礫を組んだもの		溝の側面に挖えのある側石を組む。 第5次調査では未確認。	第4次調査2区第8次調査に例あり
II 底面や壁面に角礫や円礫を敷並べたもの	A 敷き底面角礫 	溝の底面に安山岩の板状の角礫を2列程度に敷詰める。	SD 7 SD 9
	B 敷き底面円礫 	溝の底面に小円礫を敷詰める。	SD 8 SD 10
III 壁面に板を貼ったもの	B' 円底面敷き業 + 小壁面円礫 	溝の底面に小円礫を敷詰めるのに加え、壁面に円礫を並べて貼り付ける。	SD 4a
	C 敷き底面小円礫 	溝の底面に角礫を敷詰めた上に小円礫を敷詰める。	SD 7
IV 石材や板を使用しないもの	D 並べ壁面円礫 	溝の壁面に円礫を並べる。	SD 4a
	A 土掘り方有り 	掘り方内に土を入れ底面と壁面とする。	SD 4a SD 5 SD 9
	B 掘り方無し 	掘り方自体を溝とする。	SD 14

第164図 溝の構造分類模式図

回の調査で確認した溝跡については殆どのものが本来側石を組まない構造であり、また底面の角礫や円礫についても石材の散逸は抜き取りによるものではなく、殆どは搅乱によるものであることが明らかとなってきた。溝跡の全体的な傾向としては、石材を伴う溝は掘り方幅に比べ開口部の幅が狭く、側板を伴うものは開口幅が広く深さもあるものとなる。また素振りのものは幅狭で浅い。このような構造の違いにより溝跡を平面図で表したのが165図である。

溝跡は建物の側柱と一定の間隔を持ち、それはほとんどが軒の出にあたる位置に配されることから、当初これらを雨落ち溝と呼び均してきた。しかし1号石敷造構の側溝が建物周囲の溝と兼用されること、SB1に付属する石組造構の存在、そしてこれら溝跡の規模や構造の多様性などから、溝跡が単に雨を受ける機能に止まらず、城内に降った多量の雨を排水するための機能を併せ持つものであり、城の造営と建物の建設にあたっては、建物の配置に応じた城内全体における綿密な排水計画のもとに造られていることが明らかになってきた。今回検出した溝跡の底面標高値をみると、溝は全体として北と東方向に流れるように計画されているとみられ、排水された水は最終的には城内の何れかの場所に溜めるか自然浸透するなどの処理をするか、あるいはこの地区的地形傾斜に沿い、東側より城外に排出されたことも考えられる。

(7) 建物群の年代と性格について

[建物群の年代]

調査で確認した建物群をはじめ、石敷造構や堀跡といった諸施設に関しては寛永4年からの若林城造営に伴うものであることは、『治家記録』や『御二之丸御指図』との照合により明らかといえる。建物跡や周辺施設をみてみると、重複関係をもつものは全て施城後に營まれた御園などに関わる遺構との間のもので、建物同士の重複は勿論のこと、個々の礎石跡や周辺溝跡の造り直しに伴う重複は一切認められない。また建物ほかの重複関係からみて、途中で建物を新たに増築するなどの状況も確認できず、現時点では1号建物南辺溝がかさ上げにより改修されている可能性があるが、これもほんの一例に過ぎない。このような傾向は周辺での第4・7次調査でも同様であるが、東側での第8次調査では建物に接した幹線水路において配置や構造を変えながら造り変えられていることがわかっている。しかしこれもまた耐用年数の長い建物とは異なり、あくまで付属施設での改修と理解できるものである。以上のことから、これまで確認した若林城の複数の建物や施設群に関しては、城造営当初の綿密な全体配置計画により造られ、途中、城の性格の変化などによる建替えや大規模な改修を受けることなく、ほぼその姿のままに政宗の死を経た寛永15年の二の丸移築に至るまで機能し続けたと推定される。

[建物群の性格]

現在、近世における城郭や屋敷の御殿建築や寺院の建築物は戦災などによりその多くが失われ、または改築や増築を繰り返すことにより建築当初の姿を留めるものは殆ど無いといえる。そのような中、若林城が機能した近世初



第165図 溝の構造分類

期の代表的な御殿建築としては二条城二の丸御殿や名古屋城本丸御殿などがあげられるが、その多くは絵図にみられるのみで、現存するのは二条城のみである。二条城二の丸御殿は慶長8年（1603）頃に完成し、寛永3（1626）年に大規模に改修されており、現在みられるのは寛永期の姿といわれている。御殿は中心施設である遠侍、式台、大広間、黒書院、白書院が鉤型に連続しながら後退する雁行型の配置をとり、それぞれの建物内部も帳台や四の間などの付属部分を除けば、上段の間・下段の間（黒書院・白書院では二の間）、三の間へと鉤型に連続した部屋配置をとっている。この配置は飛来第やそれに類似するとされる仙台城大広間など、慶長期の古い段階の配置に後続するものとされている。またこのような雁行型の配置は若林城後に造営された仙台城二の丸御殿の配置にも顕著にみることができる。

『肯山公造城郭木写之略図』により仙台城本丸での建物配置をみると、本丸への入口である詰の門を入ると大広間が最も前面に配置され、その南西側に徒の間や遠侍棟、後方の南東側には虎の間をはじめとする諸殿舎が不規則に建ち並ぶことで、大広間が他の建物に比べて中心的な建物であることを意識させる配置となっている。これに対し、『御二之丸御指図』にみられる初期段階の一の丸では、建物全体が整然と配置され、遠侍棟から複数の部屋を通り奥へ進んだ位置に小広間が配置されることで、本丸での大広間の在り方とは大きく異なっている。個々の建物をみると、慶長から寛永期造営の二条城や本丸、初期の一の丸においては隣接する建物間は主に廊下でつながることにより、個々の建物が概ね独立する配置をとっている。これに対し元禄期に大規模な改造を受けた後の二の丸建物群は、最も表側の建物群での配置に大きな変化は無いとされるが、享和2年（1802）の『享和二年之御家作御絵図写』をみると、建物間に新たな部屋や物置などの施設が多数設けられることで、指図にみられる建物個々の配置上の簡潔さはみられなくなる。また享保から天明にかけての伊達藩上屋敷の建物を描いた『伊達家芝上屋敷絵図』には、あまり廊下を介せず、部屋相互が接することで建物があたかも密集するような状況が見て取れる。このような配置は近世を通じ改修された多くの城郭や屋敷においてもみることができる。

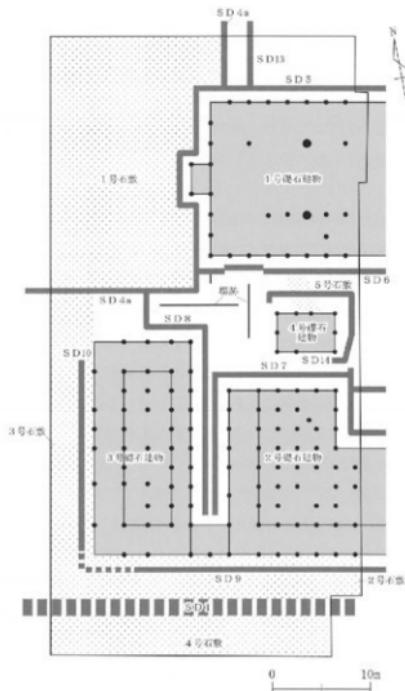
第5次調査と第8次調査で確認された主たる施設は5棟の大型建物であるが、これらは先述の通り、事前の綿密な配置計画により建物相互が整然と建ち並ぶ配置状況をみせている。調査上の限界もあり、建物間をつないでいたとみられる廊下の存在を全て明らかにすることはできないが、建物はみな完全に独立した分棟型の配置をとっている。これが若林城における建物配置の大きな特徴といえる。これに対し二の丸では諸建築の相互関係が重視され、小広間に客の間が取付く配置がなされるなど、建物単体ではなく組み合わせにより効果を出す配置が図られたとされている。以上の観点からみた場合、若林城の建物は二の丸よりも前出的で、建物個々の性格や役割がより明確に区分されていたものとの見方も可能である。

そのような中でも2号建物は鉤形に曲がることにより部屋が明確に仕切られ、1間半幅の縁通りという広縁の存在からみてスタイルが高く、城内の中心的建物の一つだったと考えられる。規模や構造は全く異なるが、本丸大広間は三列の複合的間取りをもち、主たる目的である儀式や接見において、部屋の組み合わせにより幾通りかの使用が可能となっている。これに対し二の丸小広間は規模が縮小されたのに加え、部屋は上段、次の間、三の間と鉤形に続き、間取りが単純化されることで大広間にに対し新形式の座敷構成をとるといわれている。現時点で2号建物内における部屋間の格式の違いを示すことは難しいが、建物形状に沿った単一の部屋の並びは、小広間やそれ以外の接客や対応を目的とした他の建物とも共通する配置といえる。以上のことから二の丸と若林城における建物配置には一定の共通点を見出すことは可能であるが、仙台城が一国を代表する城郭であるのに対し、若林城が藩主の居所であったとはいえ、政宗個人の私性格を有するものという違いが両者にはあり、これらを一概に比較することには自ずと限界があることを考慮しなければならない。

今回の調査区においては3棟の大型建物の西面と南面に広い石敷が配置されており、1号石敷構に面したこれらの建物は城の表側の中でも最も大手側からの入口に近いといった特徴をもっている。この石敷に正対するのが台

所である1号建物であるが、多くの城郭や大名屋敷をみた場合、台所が玄闇を伴う遠侍棟の奥側に隣接して配置される例は幾つかみられるが、入口側に最も近い位置に配置される例は殆ど無いといえる。2号建物の性格を考える上では、隣接する3号建物との関係が重要であり、仮にこの建物が本丸や二の丸の広間、次之間、中之間から成り最も前面に位置する遠侍的性格の建物と推定すると、現時点では3号建物とむづばれた2号建物が城表側の御殿建物群の中でも最も中心的建物の可能性も出てくる。この場合、建物の南側に広がる石敷部分はさらに南側園庭へと続く開けた空間となり、東側は幾つかの建物を経ながら奥側へと続くことも想定される。しかしながら第8次調査で確認した建物群にはこれら両建物とは異なる特殊な構造の建物が存在しており、明確な連続性は確認できない。以上のことから、今後、若林城における建物の配置や性格を考えるにあたっては、建物個々の構造からみた性格の解明に加え、広範囲にわたるさらなる建物等の確認作業が必要とされる。

(注1・2) 東北大学名誉教授 佐藤巧先生のご教示による。



第166図 若林城期遺構配置模式図

第2節 若林城廃城後の遺構

(1) 小溝状遺構群について

IV層上面において検出した小溝状遺構群はSD1の北側で、主に1号と3号石敷遺構の東側の範囲に分布してお

り、1号石敷造構上面においても確認できる。東隣の第8次調査区においても全域に確認したこと、畑耕作は城内のかなり広範囲にわたり行なわれていたことがわかる。小溝群の時期はその全てが若林城期の造構を切り、また上部に六角塔建設の際の盛上がりことで、廃城以降の近世の造構であることは明らかである。小溝群は南北方向の1群と東西方向の2群とに重複関係があり、2群は第7・8次調査でも広域的に確認されている。2群は城の主軸方向と合致することから、畑は関係する施設等との関係により、その配置や範囲、方向が定められたものと考えられる。

小溝群は通常より深く特定の場所を溝状に掘ることにより畑底面に残される痕跡であるが、畑土壤上面の鉢が作付けされる作物に応じてその形状が違うのに対し、小溝群は鉢立てに伴う造構との考え以外に、土壤の地力回復を目的とした掘削作業であることが主目的と考えられるため、小溝群の範囲や深さ等により畑の区画や耕作範囲、作物を特定することは難しいといえる。したがって今回確認した小溝群の範囲や方向がある時点での畑上面での状況を反映していない可能性がある。さらに主たる東西方向の小溝には同方向での重複関係が無く、ほぼ同時期か短期間のうちに掘削したとみられるが、耕作は短期間のものではなく、小溝の数と密度は耕作頻度や期間とは必ずしも一致しないことも考慮する必要がある。

これらの畑に関係する施設としては、廃城後の城内にあったとされる「御菜園」が想起される。御菜園は延宝8年（1680）の『脇山公治家記録』が初見であるが、開設時期は不明である。18世紀中頃の寛延から宝暦年間に瀬主が野獣や騎射の帰り、菜園に植えていた人参を見学したとの記事が散見する程度で、その施設の実態には不明な点が多い。

現在、菜園が確認できる絵図は幾つか存在する。『御修復帳』所収の「若林古 御城」（5図）は文化・文政頃のものとされ、少なくとも19世紀前半には「御菜園」は存続していたものとみられる。また製作年代は不明であるが『古御城絵図』には、他の絵図に建物や水路、道路などが描かれるのに加え、様々な様子が窺える。北西側に描かれる建物は1棟のみだが、東西8間と割合に規模が大きく、記録によると菜園には菜園・菜園守が詰めていたとのことから、建物は菜園を管理する役人の詰所とみられている。建物や水路・道路の周囲には堀や竹生垣、杉生垣が設けられ、管理施設としての体裁をみせている。また城内を流れる水路（六郷堀）は土壙幅と比較すると幅の広いものであったと推定され、堀には6か所に土橋などを架けることで、堀により二分された城内での移動を可能にしている。堀の南側には「此邊杉檜御植立之所」とあり、杉や桧が広く植えられていたことがわかるが、その他に菜草など、作付けされていたものの記載は認められない。

安政2年（1855）の『京權家文書』には古城の蔵に芻千俵を備えていたとの記録があり、これがもし城内の様子とすると、城内は菜園の姿を残しつつも別の役割も担った藩の施設として幕末まで機能していた可能性もある。確認した小溝状造構群が園内におけるどのような作物によるものかを判断することは難しいが、その範囲から推察した場合、ある一時期ではあっても城内の中心部に広範囲に及んでいることは、菜園を代表するような作物に関わるものと理解することもできる。

市内の遺跡からは古墳時代から近世に至るまでの幅広い時代の畑跡が確認されている。しかし中世から近世造構が数多く確認された南小泉遺跡においては、ここ数十年間の耕作時の天地返しにより中近世に形成された土壙は殆ど残存しない状況にある。これに対し若林城内においては明治初めから現代に至るまでの間、このような造構が逆に保存される形となり、そこには周辺遺跡でみられる畑のあり方に對し、特殊な統制下で営まれた畑の姿をみる事ができる貴重なものとなっている。

（2）1号溝跡について

調査区の南端で検出したSD1は、幅広の掘り方に控えのある石積みと裏込めを伴った東西方向の石組溝で、底面状況から水を束に流した水路と考えられる。またSD1は新旧の溝がほぼ同位置で上下に重複することで、改修

されている可能性が高く、古い 1 b 溝はひと回り幅広い掘り方を有し、底面位置が極端に低く、1 a 溝同様に石組であったと推定されるが、改修時に石組は取り外され、底面を埋めることで大幅にかさ上げしている。また溝の南北両側には埠などの施設が配置されていたとみられる。SD 1 はその掘り方が 2 号石敷造構を壊して構築し、石敷が掘り方に載らないことや、2・3 号建物に近接しすぎる状況から、調査時には城の造構群に後出する水路跡と判断した。

南東側の第 6 次調査 2 区で確認した SD 31 は、掘り方幅 3m 以上、開口幅 1.5m 程で 2 段の側石が残存する石組溝であり、出土遺物が乏しく石組の状況から時期の特定はできなかったが、SD 1 とほぼ同じ構造をもつものである。底面に敷石は無く、小さな溝が切られる状況は SD 1 b に類似している。SD 31 に途中改修された形跡は認められなかったが、6 次 1 区の東側を北に延びる流路が推定され、鉤形に折れながら SD 1 と接続する可能性がある。

SD 1 の西側には内耕形土堀が近接するため、水路は上墨手前で北側に折れるとみられる。絵図には六郷堀が西側の大手より城内に引き込まれ、この内耕形土堀の下を抜けた東側で北に折れる姿が描かれている。この位置関係から推察すると、SD 1 もやはり導水施設として城外からの取水に依っていたとみられ、北側で六郷堀と接続し、ここから分岐された水路の可能性が高い。六郷堀の開削時期は定かでなく、若林城造営時には既に存在していたとしてもその位置は明らかでないが、廃城後にあっては絵図の場所にあり、東の水田地帯への水の供給のみならず、城内に設けられた薬園などの施設での水の需用を貯う役割を担っていたものと考えられる。しかし絵図に SD 1 の姿は無く、この理由が絵図の描かれた頃には機能していないかったのか、あるいは描かれた施設は一部のものかななど不明な点が多い。

第 7・8 次調査では建物間の中庭的空間にある小規模な池跡に水を供給したとみられる極跡や、水に関わるとみられる敷石造構などを確認している。これらの施設が機能するためには調査区南側からの水の供給が必要であり、さらには城外とを結ぶ水路の存在が不可欠と考えられる。現時点では正にその場所に位置する SD 1 を若林城の造営に伴い造った水路と断定することは難しい。しかし一つの可能性として考えるならば、造営と同時かもしくはそれ以前に開削されていた可能性も指摘される六郷堀から、城内から城外の何れかで分岐した SD 1 を介し取水した可能性もある。この場合には改修前の 1 b 溝が建物群と共に配置された水路となり、廃城後は水路全体をかさ上げした上で底面に敷石を施すなどの大掛かりな改修を行なったとみることもできる。今回の調査区をはじめ今までの調査では城内に井戸は確認されていない。このことが確認された水路とどのような関わりを持つのかは今後の調査に負う所が大きい。

第 3 節 若林城跡出土の遺物について

(1) 瓦の検討

今回の調査では合計約 13,893 点 (1,421kg) の瓦資料を得ることが出来た。出土遺物には小破片も多く含まれるが、近代の棟瓦を除くほとんどが若林城に伴うものである。主な器種としては軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、菊丸瓦、面戸瓦などがある。多くの近世城郭の調査では、長期間にわたり幾度もの屋根改修が行なわれるのに伴い、調査では様々な時期の瓦が混在することで年代決定が難しい。しかし若林城において出土する瓦は寛永年間という極めて短い時期に限定されるため、本造跡のみならず、同様の瓦を出土する関連遺跡との造構や瓦の対比の上でも極めて貴重な資料となり得る。ただし留意しなければならないことは、城内の建物が移築されるにあたり、葺かれていた瓦は建物と共に殆どが持ち出され、二の丸において再び使用されたと考えられることである。したがって城内に残された瓦は、解体に際し破損したものや二の丸での使用見込みがなかったと推定されるものであり、それらが当時開口していた溝を中心とする施設内に廃棄されることで、調査における瓦の出土傾向は、使用されていた全ての瓦の量はもちろんのこと、種類も正確には示していない可能性も考慮しなければならない。

[瓦の分類方法]

瓦の分類については、若林城と類似する瓦を多く出土した仙台城本丸1次調査や二の丸・三の丸調査での分類を参考とし、以下のような基準で行った。

丸瓦系

瓦当部をもつもので、軒先を飾る軒丸瓦と大部分を占める丸瓦がある。

軒丸瓦：瓦当部や瓦当部の剥離した痕跡の認められるもので、形状から、1類、玉縁有り 2類、玉縁無しに分類される。さらに瓦当文様から、A. 珠文三巴文（左巻き）B. 三巴文（左巻き）に分類される。2類については今回出土していないが、第7次調査で確認している。

丸 瓦：瓦当部が認められない丸瓦で、形状から、1類、玉縁有り 2類、玉縁無し 3類、隅切に分類される。軒丸瓦同様に2類は今回出土していない。凸面は縦位の強いナデ、凹面はコビキ痕、布痕、繩圧痕、棒状工具痕などが認められる。

平瓦系

瓦当部をもつもので、軒先を飾る軒平瓦と大部分を占める平瓦がある。

軒平瓦：瓦当部や瓦当部の剥離した痕跡の認められるもので、形状から、1類、軒平瓦 2類。

滴水瓦：に分類される。さらに瓦当文様から軒平瓦は、A. 三葉文 B. 桔梗文 C. 菊花文に分類されるが、滴水瓦はA. 花菱文のみの出土である。

平 瓦：瓦当部が認められない平瓦で、形状から、1類、平瓦 2類、水返しのあるもの 3類、隅切に分類される。凹面は横位の後、端部のナデ調整、凸面は縦位のナデ調整で彫砂が認められる。

棟瓦系

棟部にのせる伏間瓦や熨斗瓦のほか、棟部にはめ込む輪違いや菊丸瓦、その他の棟込瓦のほか、棟部と屋根との隙間に詰める面戸瓦がある。

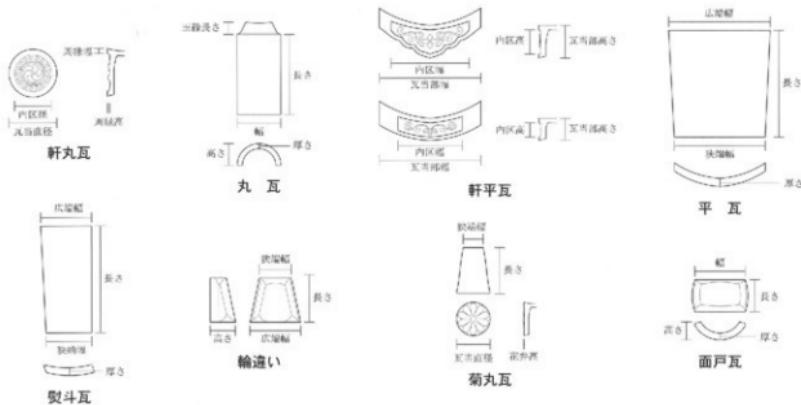
伏間瓦：形状により、1類、角棟伏間瓦 2類、棟止瓦（逆さ瓦）に分類される。棟止瓦の瓦当文様は菊花文である。

熨斗瓦：平瓦を縱半分に分割した形状で、製作工程上、1類、焼成後分割 2類、焼成前分割に分類される。1類は側面に割口と分割線が残存し、2類は分割面に簡単なケズリ調整をしている。また凹面には別の分割線が残存するものや、滑り止めのためのヘラ状工具による線刻が認められるものが多い。

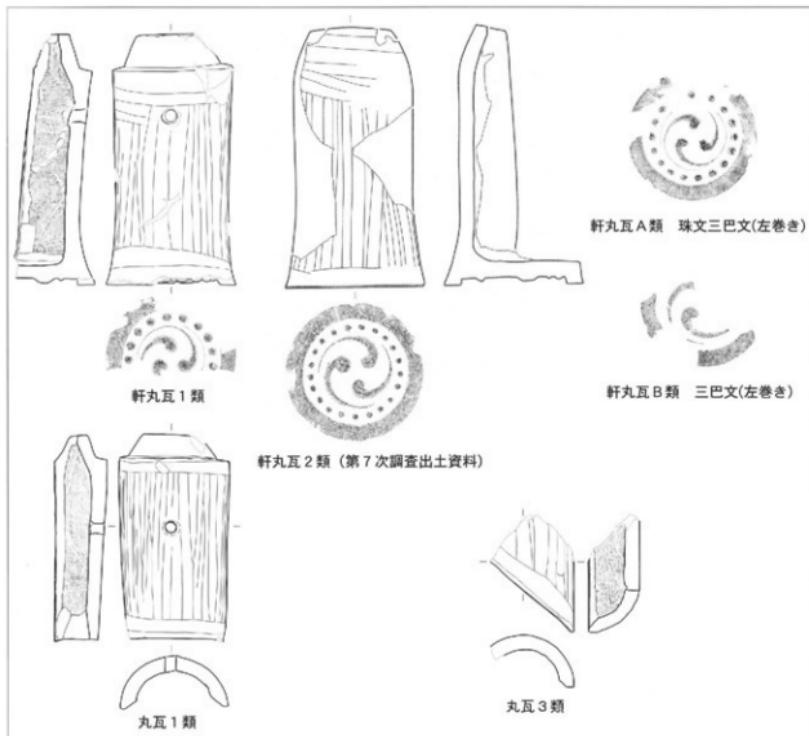
輪違い：丸瓦を横に分割した形状で、狭端部と広端部があり、狭端部側の形状から、1類、直線的に窄まるもの 2類、丸く窄まるもの 3類、丸瓦からの転用に分類される。凸面は縦位の弱いナデ調整で、凹面はコビキ痕、布痕が認められるが、3類を除き繩圧痕は認められない。

用途	種類	形狀	文様
丸瓦系	軒丸瓦	1類 玉縁有り 2類 玉縁無し	A類 珠文三巴文（左巻き） B類 三巴文（左巻き）
	丸 瓦	1類 玉縁有り 2類 玉縁無し 3類 隅切	
平瓦系	軒平瓦	1類 軒平瓦	A類 三葉文 B類 桔梗文 C類 菊花文
		2類 滴水瓦	
		3類 水返し付	
棟瓦系	伏間瓦	1類 角棟 2類 棟止瓦（逆さ瓦）	A類 菊花文
	熨斗瓦	1類 熨斗瓦	①類 焼成後分割 ②類 焼成前分割
		2類 大型 3類 丸瓦転用	
輪違い	丸瓦		A類 菊花文
	面戸瓦	1類 長方形 2類 隅切 3類 引掛け	
他の瓦	鬼 瓦		
	棟瓦系	1類 棟軒瓦 2類 燐隔	A類 珠文三巴文+江戸式
	棟 瓦	1類 引掛け	
その他の瓦	棟込瓦		
	不明瓦		

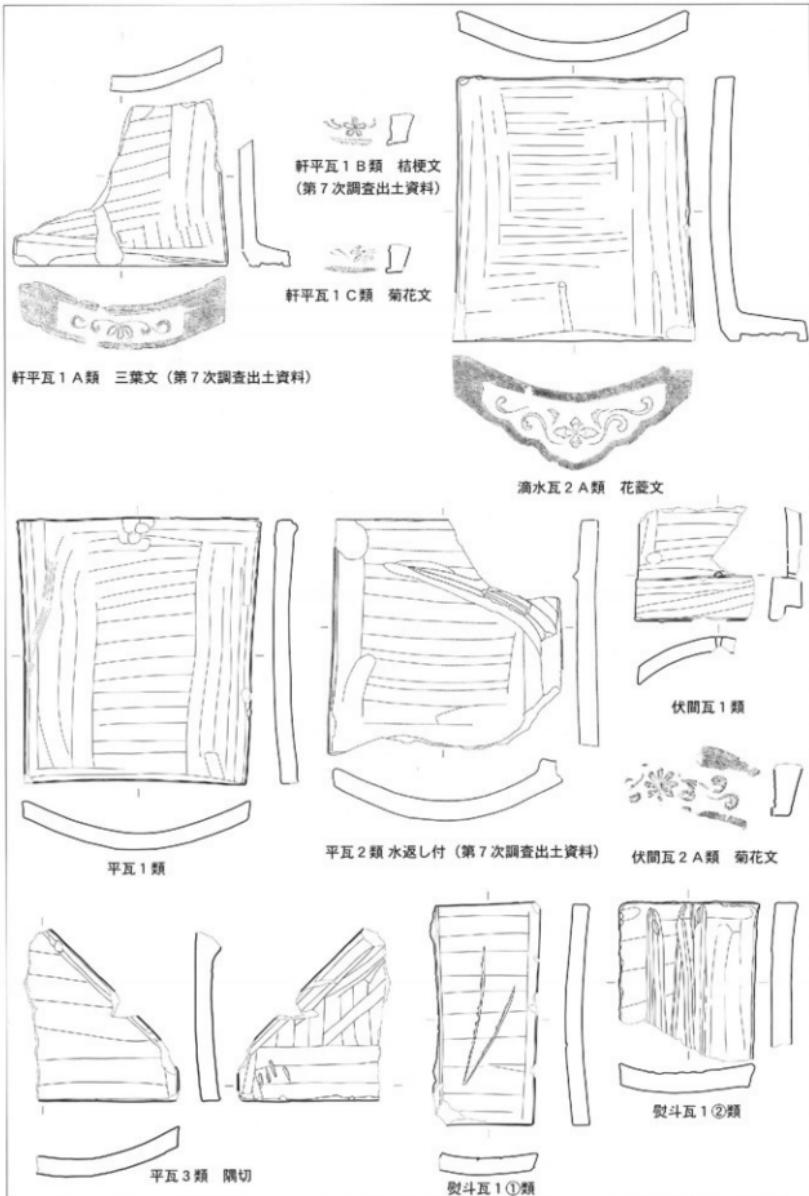
第17表 瓦分類表



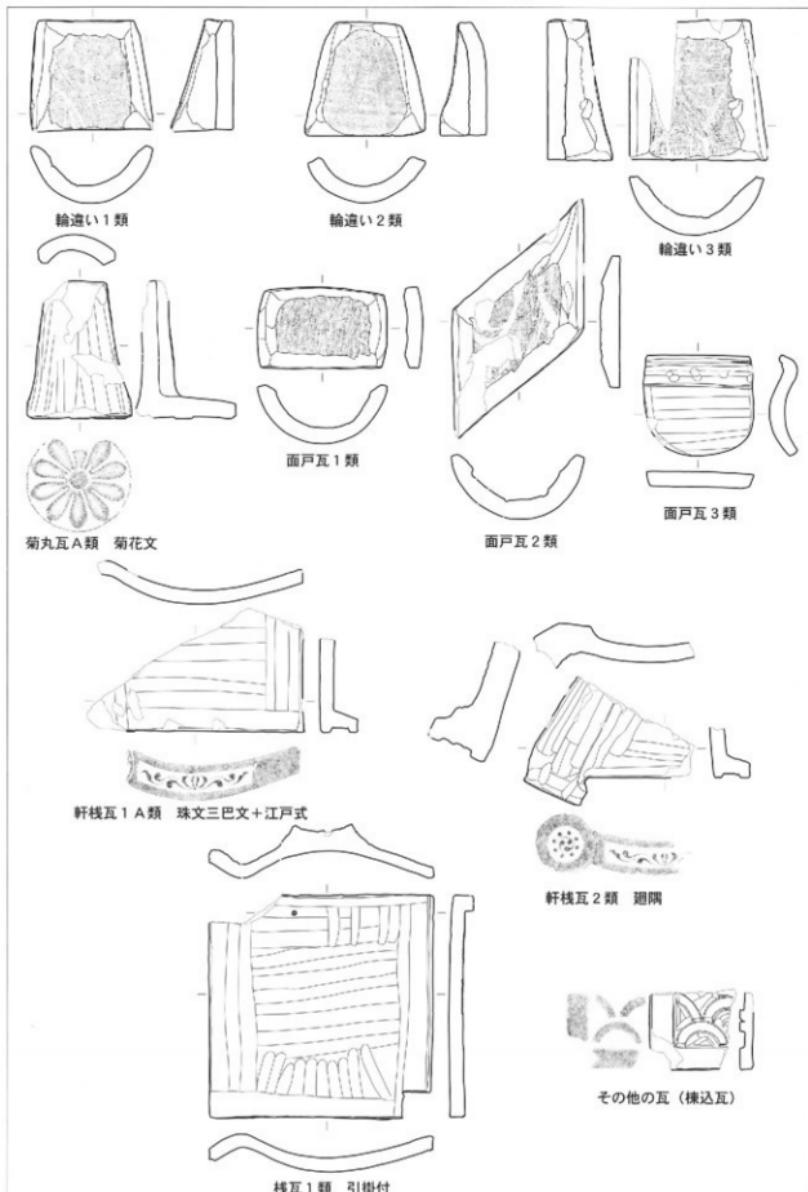
第167図 瓦計測部位模式図



第168図 瓦分類集成図（1）



第169図 瓦分類集成図（2）



第170図 瓦分類集成図（3）

菊丸瓦：菊花文の瓦当部が認められるもので、周縁を持たず、差込み部が短く幅狭で、先端が窄まる形状である。

差込み部の凸面はナデ調整、凹面はナデ調整とコビキ痕がみられ、布痕は認められない。

面戸瓦：主に丸瓦を横に分割した形状で、凹面の三辺がケズリにより面取りされている。形状から、1類、長方形のもの、2類、両端を切断したもの、3類、引掛け付きのものがある。1類と2類は腹部が弧状に面取りされ、凸面はナデ調整、凹面はコビキ痕と布痕が認められる。3類は全く別の形状で逆方向に反る引掛けをもっている。

棟込瓦：菊丸瓦や輪違い以外のもので、棟込瓦の特徴をもつものである。

飾瓦系

棟先などを飾る瓦で、鬼瓦とみられるものがある。

鬼 瓦：鬼瓦の特徴をもつもの。

棟瓦系

本瓦とは異なり、丸瓦と平瓦が一体化した瓦で、瓦当部をもち、軒先を飾る軒棟瓦と棟瓦がある。

軒棟瓦：瓦当部や瓦当部が剥離した痕跡の認められるもので、形状により、1類、軒棟瓦、2類、廻隅に分類される。1類と2類の瓦当文様は、A、珠文三巴文+江戸式がある。凹面・凸面とも全面ナデ調整である。

棟 瓦：瓦当部が認められないもので、凹面・凸面とも全面ナデ調整である。引掛けなどの特徴を有するもの以外でも、焼成が良好で、胎土が緻密で薄手な平瓦部破片を棟瓦とした。

その他

帰 瓦：形状が板状で、片側に棟や水返しが確認できるものである。

棟込瓦：近代以降の特徴を持つもの。

不明瓦：出土した瓦はなるべく分類するようにしたが、小破片や摩滅のため器種の判別がつかないものを不明瓦とした。

【若林城跡出土の瓦】

軒丸瓦 出土した軒丸瓦はほとんどが瓦当部の破片で、全体の大きさがわかるものはF6の1点のみである。F6は全長が37.2cm、瓦当径19.1cmと大型で玉縁が付き、尻側に釘穴が認められる。凸面は通常の丸瓦と比べてやや弱めのナデにより全体が丁寧に仕上げられている。凹面にはコビキ痕、布目、純平痕が認められる。また今回の調査では7次調査で出土したような尻部が丸く窄まる形状のもの（2類）は出土していない。文様のわかる16点のうち、F10・11・12・15の4点は左巻きの三巴文で、残りの12点は周囲に珠文を配した三巴文である。巴文は全て左巻きで、珠数のわかるものは、F8が17個で珠径が1.4cm、瓦当径が19.0cmである。破片が多いことから珠数のわかるものは殆ど無いが、珠径は1.3cm～1.5cm程度のものとなっている。瓦当部径は16.9cmが1点、19cm前後のものが5点あり、大きさに違いがみられる。

軒丸文様の特徴としては、珠文のある巴の尾が長く反対側近くまで伸び、巴や珠文は高く丸みをもつに対し、珠文の無い巴文は、頭部が偏平気味となる。

丸 瓦 出土した丸瓦で尻部の形状がわかるものには全て玉縁が付き（1類）、玉縁が付かず尻部が丸く窄まるもの（2類）は出土していない。全体の大きさがわかるものは23点あり、これらは軒丸瓦同様に大きさにより2種類に分かれる。このうち大型のものはF19・25・32・41～44・46～48・57・59の12点で、長さ33.9cm～35.5cm、幅17.0cm～18.3cm、高さ8.5cm～9.5cmである。玉縁を除いた胴の長さは1尺（30cm）程度である。小型のものはF20・21・24・27・34・35・50・52・60・62の10点で、長さ30.1cm～31.6cm、幅15.0cm～16.3cm、高さ6.9cm～8.1cmで、胴の長さは9寸である。また幅と高さの数値からみてその中間の大きさのものが1点ある。出土地別でみると、

SD10出土の丸瓦のはとんどが大型で、高さのみの数値ではあるがSD4と6にも同様の傾向がみられる。逆にSD7のものはほとんどが小型である。

製作上の特徴としては、凸面は縦位の強いナデの後、両端部を横位の弱いナデで仕上げている。凹面にみられるコビキ痕は、すべてがコビキBと呼ばれる鉄線切りのものである。その他には布目の他、半数程度に繩圧痕が認められるが、これは丸瓦の製作にあたり成形後に軸から外しやすいうように軸に袋状の布を被せ、布を引き抜くための繩を付けることによるものである。また少數ではあるがF28・39・43には棒状工具による圧痕が認められ、さらにF18には櫛状の刺突痕が認められるが、これは丸瓦を軸から外す際に使用した工具の跡とみられる。今回の調査では1点のみではあるがF62の凹面側に平瓦凸面のような離砂が認められるものがある。このことから丸瓦の製作においても離砂を使用した方法が存在する可能性があり、これが何の差によるものかを検討する必要性がある。

F33・F58の凸面中央には、「上」を篆書で表した精緻な刻印が認められる。数多い丸瓦の中でも僅かなものに刻印することは、それが単に上側を示すのみにとどまらないものとみられる。

軒平瓦 瓦当文様のわかるものは21点あり、これには通常の形態をもつ軒平瓦と滴水瓦がある。軒平瓦の出土量は極めて少なく、第4・7次調査で出土している桔梗文は今回確認できない。G16の中心飾りは三葉文で、G8は唐草のみの残存であるが、唐草の巻きや形状から三葉文とみられる。菊花文のものはG15と24の2点あり、若林城跡では初めての出土となったが、このような軒平瓦は仙台城本丸跡にもみられる。

このうち17点の瓦当部は下端にくびれを持つ逆三角形となり、通常の軒平瓦よりも高さがある滴水瓦と呼ばれる形態のものである。全体形がわかるものとしてはG4の1点のみで、長さ32.7cm、瓦当面幅29.7cm、高さ9.6cm、内区幅22.1cm、内区高7.3cmとなり、中心の飾りは花菱文が配され、唐草は下段内側が下巻き、上段外側が上巻きで、花菱の隣には子葉が付属する。瓦当部形状がわかるものとしてはG5があり、瓦当面幅28.5cm、高さ9.4cm、内区幅22.2cm、内区高7.5cmとなり、文様帶の大きさや特徴からみてG4とは同範によるもの可能性がある。他の15点は全て瓦当部の破片であるが、出土した滴水瓦は全てG4や5と同じ文様とみられる。全体的な印象としては瓦当面での離砂が顕著なものは文様全体がシャープさに欠ける感がある。

平瓦 平瓦は瓦全体の出土量の約半数を占める反面、全体形がわかる程度に復元されたものはG55・153・154の3点のみと少なく、その形状から破損しやすかったとみられる。他に長さのわかるものが9点、広端幅のわかるものが1点ある。平瓦も丸瓦同様に2種類の大きさに分けられ、大型のものはG49・55・63・130・153・154で、長さ32.5cm~34.0cm(1尺1寸)、広端幅29.0cm~30.0cm(1尺)、狭端幅が27.0cm~27.1cm(9寸)、小型のものはG73・74・76・77・78・133で、長さ26.3cm~28.5cm(9寸)となり、全体幅がわかるものは無い。丸瓦と同様に、大きさにより出土場所に偏りがみられ、小型のものは全てSD7からの出土である。長さ9寸というのは、SD7から出土した熨斗瓦の長さとほぼ同値である。平瓦の中には焼成時に破断したとみられるものが幾つかあることや、半分程度の幅のものが多く、これらの中には熨斗瓦に転用されたものが一定量含まれる可能性がある。またこれらはSD7から出土した小型の丸瓦と同じ長さであることから、両者の組み合わせで葺かれていた可能性がある。その他の瓦には、隅棟に使用されたとみられる隅平瓦(G207)や、谷部に使用されたとみられ谷唐草(G208)がある。

平瓦の調整の傾向としては、凹面がやや強い横位のナデの後、側面に沿って縦方向のナデを施し、最後に周囲に沿うように弱いナデで仕上げ、凸面が主に縦方向の粗いナデで調整され、多くに離砂が認められる。

平瓦の小口面には多くの種類の刻印が認められる。刻印の多くは竹箆を利用した円形を基本とする簡単なもので、一部に切れ込みを入れたものや、半裁したものを使用するなどのバリエーションがみられる。また長辺が1cm程度の長方形の棒を利用した刻印や、それを対角線で小割りにしたような三角形のもの、刻みを入れたものなどが確認できる。また今回の調査で水返しをもつ平瓦は出土していない。

伏間瓦 G 6は通常の軒平瓦とは異なり、平瓦部と直当部の上下を逆にした瓦で、棟の末端に葺かれた換止瓦とみられる（2類）。仙台城本丸跡では同様のものを「逆さ瓦」としており、出土数は少ない。瓦当文様は菊花文+唐草である。菊花文の花弁数は8枚で、唐草の配置からみてもⅢ層や搅乱で出土した軒平瓦にみられる瓦当文様と同意匠とみられる。H133は棟最上部に葺かれた角桟伏間瓦で（1類）、凸面、凹面ともにナデ調整され、角張った桟の付け根部分に釘穴が認められるものである。

熨斗瓦 平瓦を縦半分に分割したもので、その特徴から焼成後に分割した①類と、焼成前に分割した②類に分類される。①類は焼成前に凹面中央に予め入れられた線刻により分割したもので、熨斗瓦の殆どを占めている。分割した割口は整わず、②類と比べ難な仕上がりである。これに対し明らかに②類とみられるものはH 5のみで、分割面を簡単なケズリにより面取りした後に焼成している。H 2・18・21は①類同様に凹面側の分割線からほぼ割れているが、削面が焼成されていることから、焼成中に破断したものと考えられる。何れの熨斗瓦にしても分割した面の形状は割口が簡単な整形を施すもので、この不整形面を棟内側として重ねることで外見上の体裁を保っていたものとみられる。

H 1は①類の接合資料で、平瓦としては長さ27.5cm、広端幅25.6cmとなる。このような接合品は第7次調査でも出土している。熨斗瓦は長さ26.8cm～29.0cm、広端幅11.1cm～17.2cm、狭端幅10.5cm～12.5cmの大きさで、小型の平瓦とほぼ同値である。凹面には幅が狭くやや深めの分割線とは別に、積み重ねる熨斗瓦の滑りを防止するための線が數条刻まれるものがあり、線は浅く幅広のものと、幅狭で鋭いものがある。またH19には格子状に交差する鋭利な線刻が11本認められるが、これもまた同様の性格のものとみられる。遺構別にみるとSD 7からの出土が11点と最も多い。

輪違い 狹端部の形状が行基式丸瓦の尻部のような直線的な1類と丸く窄まる2類とに大きく分類できる。図示した全体形状がわかるものの59点のうち、1類は33点、2類は26点ある。1類は長さ13.2cm～15.4cm、広端幅13.7cm～16.3cm、狭端幅8.3cm～12.2cm、高さ5.7cm～7.6cmで、2類は長さ13.1cm～15.4cm、広端幅13.5cm～16.0cm、狭端幅6.5cm～11.1cm、高さ5.2cm～7.6cmとなり、両者とも全体にばらつきがあるが、1類の狹端面が極端に狹くなるもの以外には、法量の大きなまとまりはみられない。またH76は大型で、長さ17.3cm高さ8.0cmのものである。1類の凹面は広端部以外が面取りされ、凸面は弱いナデが施され、狹端部で僅かに反りあがるものもある。2類の凹面の面取りは1類と同様であるが、凸面は横方向の弱いナデがみられ、狹端部には指で整形したとみられる幅のある凹線が周っている。両者の凹面には布目や横模のコビキ痕に加え、2類の狭端部側には布目のよじれがみられるものが多い。

輪違いは全体に丸瓦より薄く作られている。しかし中には3類に分類されたH73やH76のように全体に厚手で、側の面取り形状が異なり、凹面には他に殆どみられない繩圧痕を残すものも僅かに認められることから、これらの特徴を有する輪違いは丸瓦素材からの分割により製作された可能性がある。これに対し1類と2類の輪違いの製作にあたっては、技法上は丸瓦とほぼ同じとみられるが、丸瓦と同様の型（軸）に布袋を被せ、この上に丸瓦よりやや薄い粘土板を巻きつけたとみられる。輪違いの狭端部側の布目のよじれは丸瓦凹面の玉縁部のくびれ部分と比べると弱く、専用の型（軸）を用いた可能性もある。さらに凹面には丸瓦にみられる繩状や棒状工具の圧痕が全くみられないことから、布についても専用のものを用い、型からの外し方も丸瓦とは異なる手法をとっていたものとみられる。また製作の際にはその形状や凹面の布目状況からみて、当初は1類が型の下部、2類が型の狭まる上部に巻かれた粘土板を上下に二分割したものとの可能性を考えた。しかし1類の上下端部が切りっ放しで全体に粗雑な感じを受けるのに対し、2類の尻部は丁寧に整形・調整されており、両者は同じ型ではなく、全く別な工程を経て製作されている可能性も否定できない。第7次調査出土のF 6は全体形状のわかる三巴文軒丸瓦だが、尻部には玉縁を伴わず、その形状は輪違い2類のよう丸く窄まる。この軒丸瓦は後続する丸瓦の必要性が無いことから、掛

瓦か甃瓦などに使用されたと考えられており、関連する遺物として興味深い。他のものにはH68・82のように狭端部側が面取りされていないものがあり、これらは狭端部側面に砂が付着した状態で焼成されている。

輪違いにおけるこの三つの種類については、製作技法上の違いに止まらず、使用された建物や使用場所の違いの有無などについて検討の必要がある。

菊丸瓦 全体のわかるものはH110の1点のみで、長さ17.0cm、瓦当部直径12.9cm、花弁数は10枚である。差込み部分の凸面はやや強めの縦位ナデで、凹面もナデ調整されコビキ痕などは認められない。これ以外の菊丸瓦は破片のみであるが、花弁数はみな10枚とみられる。菊丸瓦の多くは攪乱からの出土であるが、そのうち半数近くの6点がS B 3北西側のY28、X41グリッドからやまとまって出土している。

面戸瓦 面戸瓦には丸瓦の胴部を輪切りしたような長方形の1類と、丸瓦の胴部を斜めに切断したような調切の2類があり、1類が圧倒的に多い。1類は短軸の長さが9.4cm～12.2cmで、全体がわかるH91は長さ10.1cm、幅16.0cm、高さ7.2cmである。2類は長さ29.5cm、幅16.1cm～16.2cm、高さ7.5～7.9cmで、小型の丸瓦と同等の長さをもっている。両者とも凸面はナデ調整されるが、通常の丸瓦のような縦方向のナデは認められない。凹面は丸瓦同様にコビキ痕、布口、繩圧痕が認められ、凹辺を面取りされる。1類の隅は角が取られ、平瓦の凹面と合うように弧状に仕上げられている。また今回の調査で初めて出土した3類のH90・96は1類とは全く形状が異なり、蟹面戸に近いもので、長さ12.4cm、幅13.4cm～14.0cm、高さ3.0cm～3.4cmで、表裏面とも横位のナデ調整、端部は丁寧なケズリにより丸く仕上げている。基部には上向きの反りと刻み状の横位の沈線があることで棟部での引掛けとみられる。1類と3類は形状が全く異なり、同様の用途をもしながらも使用場所が異なっていたとみられる。

鬼瓦 鬼瓦とみられる破片は5点出土している。H124・126は海津型の側縫部破片である。H123は棟の固定に使用する龍頭部分、H125は瓦当部分の破片とみられる。またH127は近代の丸張型丸立鬼である。

棟瓦 攪乱の中からは近代とみられる棟瓦も多数出土している。H128は尻の部分に引掛け用の突起が付属し、釘穴が認められる。両面ともナデ調整で裏面に櫛目状痕が2列認められる。H129・131・132は軒棟瓦で、瓦当文様は江戸式で、小巴は珠文三巴文（左巻き）で珠文數は8個あり、垂れは唐草文の組み合わせである。H130の廻脚も瓦当文様は同じ組み合わせの江戸式である。これらの江戸式は唐草の頭部が球状で、巴の頭部も大きく明瞭となり、尾は短い。これらの特徴の棟瓦は19世紀前葉以降のものとされている。

その他の瓦 H134は塙瓦で、板状の瓦に棟が付属している。H105とH137は凸面が上向きになり、垂れが付き、両が斜めに切られる形状である。H105の上面に1か所、H137の側面に2か所の釘穴がある。形状からは箱型斗瓦の可能性が考えられ、垂れの長さが前後で違い、棟端で反りを出すために使用された可能性もある。H135は近代の棟込み瓦で、連續輪違いの文様をもつが差込み部は欠損している。

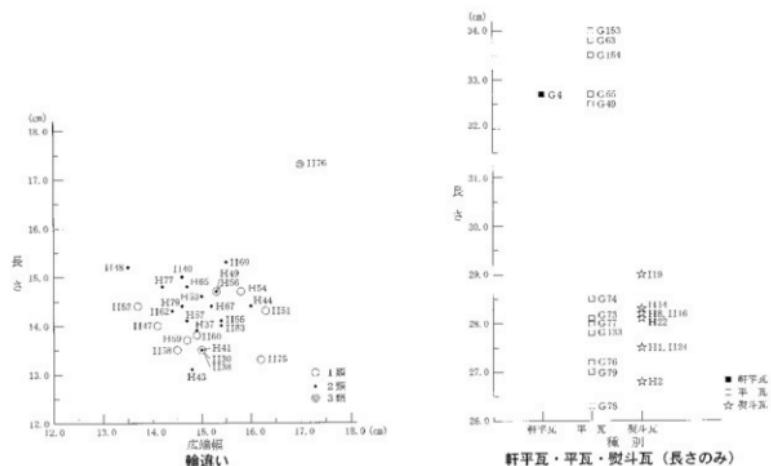
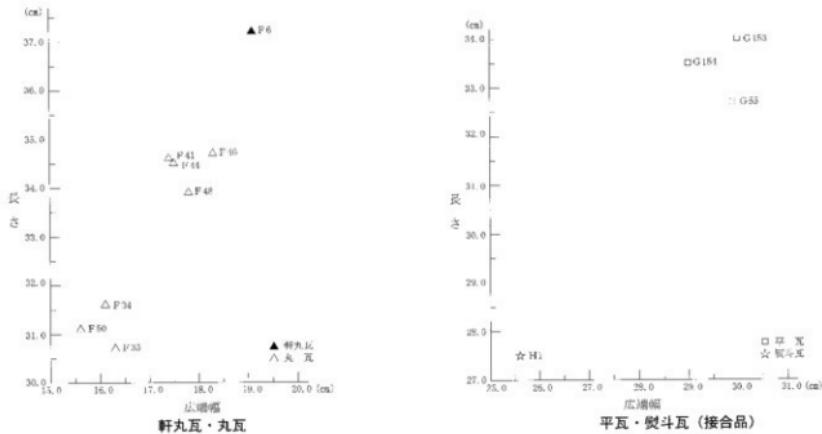
【瓦の法量別分布】

第7次調査の結果から、丸瓦、平瓦、熨斗瓦においてはその法量面で幾つかのまとまりのあることが指摘されており、今回出土した瓦においても同様の傾向を確認することができた。丸瓦や平瓦の大きさには規格性が認められ、概ね2つの大きさに分けられる。

丸瓦は1寸を約3cmとすると、大型のものが長さ1尺1寸～1尺2寸、幅6寸、玉縁の長さを除いた胴の長さが1尺程度となり、小型のものは長さ1尺～1尺1寸5分、幅5寸～5寸5分、胴の長さが9寸程度となる。前者はSD6とSD10に、後者はSD7に多い傾向がある。また軒丸瓦は全体形がわかる資料が少なく詳細は不明であるが、大きさで2種類に分けられ、丸瓦と同様の傾向を示すものとみられる。

平瓦も同様に2つに分けられ、大型のものが長さ1尺1寸、幅1尺となり、小型のものは長さ9寸～9寸5分で幅のわかるものは無い。前者はSB1周辺の溝跡や攪乱から、後者のほとんどはSD7から出土している。また大型のものは今回の調査で出土した滴水瓦と同じ大きさのものといえる。

熨斗瓦の長さは半瓦の小型のものとほぼ同じものが殆どで、大型の半瓦相当のものは確認できない。平瓦状に接合された熨斗瓦の大きさは長さ9寸、幅8寸5分である。これらはSD4・6やSD7からの出土が認められる。輪進いは大きさにかなり個体差があり、丸瓦や平瓦のような規格性はみられない。1類と2類ではその形状から、2類の狭端部が狭くなる傾向がある以外、それぞれの間にも法量的な特徴は見出せないが、丸瓦を転用したとみられる3類は突出して大きいといえる。3類は僅かな出土数で、その大きさから1・2類とは別な棟に使用されていた可能性もある。



第171図 瓦の法量分布

〔瓦の出土地別分布〕

調査は主に遺構確認を目的としたため、掘り込んだ遺構は少ない。そのため出土遺物の半数以上は後世の搅乱中か近世の畑耕作土であるⅢ層中からのものである。

全遺構内での出土量をみると、SB 1～3やその周辺溝であるSD 4～8・10からの出土が最も多く、全体の半数以上を占めている。またSD 1からも約15%の瓦が出土しているが、これらは廃城後の流入によるとみられる。

各建物（溝跡）の器種ごとの出土傾向をみると、丸瓦系が3つの建物周辺で出土しているのに対し、平瓦系はSB 1（SD 4・5・6）で半数以上が出土しており、SB 3では極端に少ない。熨斗瓦はSD 1からの出土が最も多いことを除けば、SB 1（SD 4・6）とSB 2（SD 7）が多く、SB 3周辺では平瓦と同様の極めて少ない傾向を示している。輪違いはSD 7で集中出土地点があったことから半数以上がSB 2で、SD 1以外には極めて少ない状況である。面戸瓦はSB 1（礎石跡・SD 4）からの出土が殆どで、SB 3（SD 10）からの出土はすべて隣接のものである。

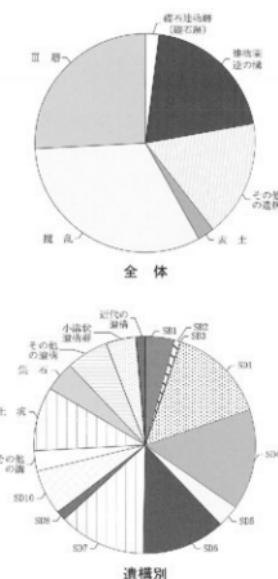
173・174図はⅢ層中出土瓦の重量分布である。遺構内出土瓦に対し、畑耕作土Ⅲ層中の瓦は、本来の層位を保っておらず、また城内での客土等により平面的にも瓦廃棄時の状況を示すものではない可能性があるが、概ねその当時の分布状況を示しているとみられる。全体的には3棟の建物周辺からの出土が多く、建物を取巻く石敷遺構周辺からの出土が少ないことがわかる。また建物の中心部分に比べ、周辺部で多い傾向が読み取れる。建物別ではSB 1周辺からが多く、溝跡出土瓦と同様の傾向を示している。これは瓦の廃棄が主に周辺の溝を中心に行なわれた結果、溝跡上半部が耕作により搅拌されることで平面位置をあまり変えずにⅢ層中に巻き上げられていることを示すものといえる。

SB 2とSB 3の南側に位置するSD 1からは82.2kgの瓦が出土しており、主な瓦の比率は平瓦31%、丸瓦23%、熨斗瓦16%、輪違い22%である。他にも滴水瓦や菊丸瓦、谷唐草などがある。この溝の機能した時期については不明な点があるが、溝の堆積土中から出土した瓦が廃城時の廃棄によるものかあるいは完全な後の流入なのかは判断できない。またSD 1の南北には跡跡が並走しており、建物のみならずこのような施設との関係も検討する必要がある。

〔推定される瓦葺きのあり方〕

調査で出土した若林城に関する瓦は建物の移築に際し、二の丸に持ち出された際に何らかの理由で残された瓦とみられる。溝跡を中心とする分布においては、概ねその溝が取巻む建物自体での瓦の使用実態を反映しているものと推察されるが、掘り込んだ面積が狭く、必ずしもそれが建物での瓦のあり方を正確に反映するものではないといえる。

SB 1 周辺溝であるSD 4・5・6では、合計で172.4kgの瓦が出土している。ここでは平瓦系の比率が高く、次いで丸瓦、熨斗瓦の順に高い。特にSD 4（64%）とSD 5（88%）の平瓦系の比率は、跡跡全体での比率（48%）と比べてもかなり高い比率といえる。また出土した全ての丸瓦系の38%、熨斗瓦の31%がこれらの溝内から出土し



第172図 瓦の出土割合



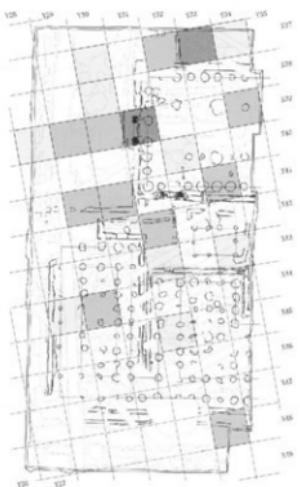
第173図 III層中出土瓦の重量分布図（1）



熨斗瓦
 □ 0 g ~ 100 g □ 101 g ~ 501 g □ 501 g ~
 ■ 1kg ~ 3kg ■ 3kg ~



輪邊
 □ 0 g ~ 100 g □ 101 g ~ 501 g □ 501 g ~
 ■ 1kg ~ 3kg ■ 3kg ~



面戸瓦
 □ 0 g ~ 100 g □ 101 g ~ 501 g □ 501 g ~
 ■ 1kg ~ 3kg ■ 3kg ~

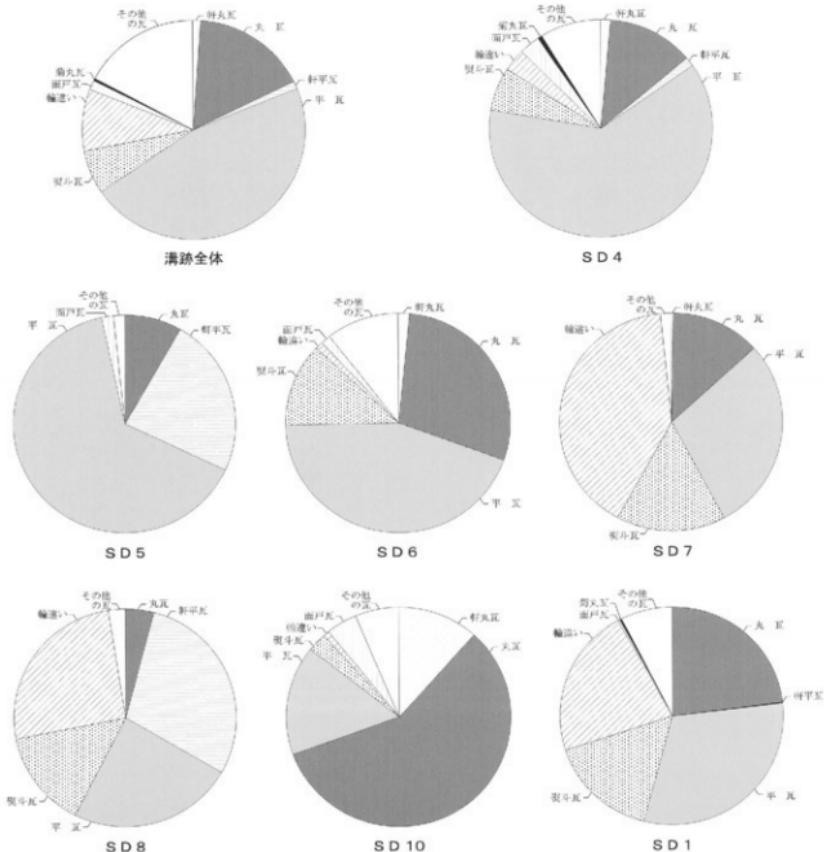


菊丸瓦
 □ 0 g ~ 100 g □ 101 g ~

第174図 三層中出土瓦の重量分布図（2）

ている。さらに面戸瓦は礎石跡からの出土を含めると、全体の70%がSB1周辺で出土したことになるが、一方同じ棟瓦である輪違いは遺構全体の8%しかなく、その数に大きな偏りがある。しかし全体的には平瓦、丸瓦、楕斗瓦といった本瓦葺屋根を構成する主要な瓦が一定量出土していることからみて、建物は棟部の形状は明らかでないにせよ、屋根全体が本瓦葺であった可能性が極めて高いといえる。また周辺より出土する瓦類は大型のものが多く、台所であるSB1には他より大型の瓦が使用されていた可能性がある。

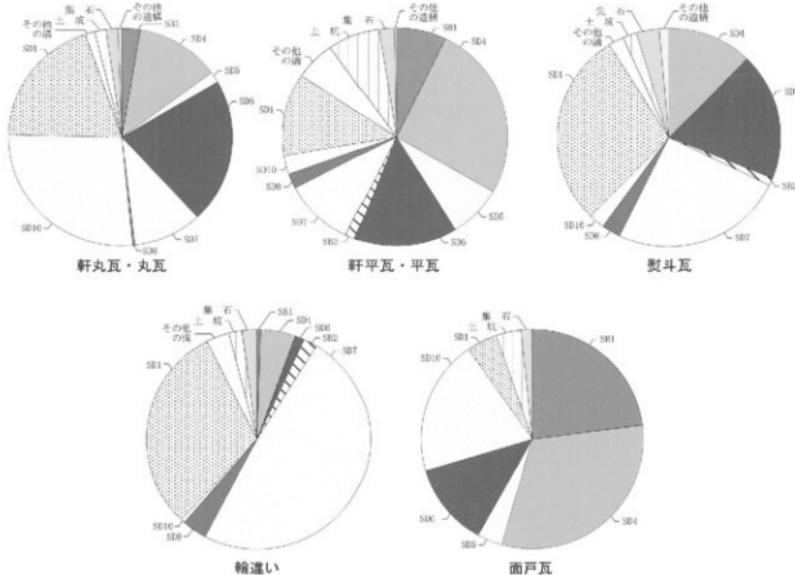
SB2 周辺溝であるSD7では70.9kgの瓦が出土している。出土比率としては輪違いが圧倒的に高く、重量の軽い輪違いがSD7出土遺物全体の40%を占め、次いで平瓦29%、楕斗瓦16%、丸瓦13%となっている。出土傾向の特徴は輪違いや楕斗瓦といった棟瓦の出土比率が高いことである。また出土した平瓦は楕斗瓦とほぼ同じ規格の小型のみで、幅も半分程度までの大きさとなっている。さらに焼成中に破損したとみられ、破断面が焼成されている平瓦も多く出土している。これらのことから一つの可能性として平瓦が楕斗瓦として転用されていたことも考えられる。以上のことからSB2はSB1とは異なり棟部分を中心とした瓦葺きとし、大屋根全体を板葺きとした建



第175図 溝跡別による出土割合

物であった可能性がある。ただしSD7からは量は少ないが棟部以外で使用される丸瓦も出土している。若林城跡ではこれまで棟の最上部に載る伏間瓦は殆ど出土しておらず、これを丸瓦の周辺からの移動とみるのか、あるいは丸瓦の代用として葺かれたのかまで判断するには至っていない。

S B 3 周辺溝であるSD8・10では、合計で45.3kgの瓦が出土している。中でもSD10からは36.8kgである。全体量が少なく分布傾向の正確さに欠けることも否定できないが、建物北・東辺のSD8が輪違いの比率が高いのに対し、西辺のSD10では丸瓦系の合計が70%で、熨斗瓦や輪違いの棟瓦はほとんど出土せず、地区により傾向の偏りがみられる。SD10の丸瓦は全て胴の長さが1尺程度の大型のものであるが、平瓦の大部分は破片で、全体形のわかるものは殆ど無い。また2点出土した面戸瓦も大型の隅切である。以上の状況から、瓦の出土量からすれば、この建物はS B 2同様に瓦が棟部などに限られた板葺きの可能性もあるが、仮に建物北側に玄関部を想定した場合、この周辺の建物の一部や付属施設等において瓦が使用されていたことも否定できない。北東側の搅乱中からは全体でも出土量の少ない菊丸瓦が多く出土しており、この状況と何かしら関係するかもしれない。



第176図 瓦の種別による出土割合

【軒平瓦の文様について】

ここでは最も瓦を特徴付ける軒瓦でも、瓦当文様により幾つかの種類に分けることができた軒平瓦についてみてみる。

軒平瓦の文様構成 若林城跡の第8次調査まで出土している軒平瓦の中心飾り文様は、三葉文・桔梗文・菊花文の3種類で、滴水瓦では花菱文の1種類のみである。また棟止瓦では菊花文が出土している。

全体の出土量自体は少ないが、最も多いのは三葉文で、他は僅かな出土である。

三葉文は今回2点出土しているが、第7次調査のSX8(池跡)からは7点の出土である。三葉が輪郭を凸線で表現するのに対し、唐草は凸帯状に浮き出しており、ボリューム感のあるものとなっている。同様のものは仙台城跡

各所で出土しているがやはり量的には少ない。

桔梗文は第4・7次調査で計3点出土している。中心飾りの花弁は5枚で、凸線により花弁先端がやや剣形に太く表現されるが、全体に偏平で立体感に欠けるものである。唐草の配置は不明で、わずかに残る部分では上下に2対確認できる。これも仙台城各所で出土しており、桔梗の形状により幾つかに細分されている。

菊花文は今回初めて出土した文様で2点ある。花弁数は8枚で、凸線状に表現され、唐草は左右3対が配置されている。また同様に初めての確認となった棟止瓦(逆さ瓦)の瓦当文様にも同意匠のものがみられる。本丸跡では菊花文のものがやはり軒平瓦と棟止瓦とに確認されており、両跡とも瓦の組み合わせをみると貴重な発見となった。三の丸跡でもほぼ同様の菊花文がみられるが、これには下向きの唐草が無い。

以上のような瓦類は三の丸跡の調査において17世紀初頭とみられる遺構群から出土している。また二の丸跡出土の三葉文のものも元禄期の盛土より下層から出土することで17世紀代のものとしている。このことから、これら三つの文様は桔梗文の様に細分されることからも一時的な文様ではなく、使用期間がある程度長期にわたると推定される。

若林城跡の調査においてこれら三つの文様間に時期差を見出すことはできない。また軒丸文様にもある三引両文や九曜文などのいわゆる家紋系瓦が全くみられない。二の丸地区においては軒丸瓦における巴文から家紋系文様への転換は寛永15年の二の丸造営が契機になったとされることから、若林城で家紋系文様が使用されることは無かつたとみられ、上記3つの文様は慶長年間の仙台城本丸造営当初かそれを多少下った時期に使用が開始された文様を受け継いだものと考えられる。



第177図 軒平瓦の瓦当文様

[滴水瓦について]

滴水瓦は通常の軒平瓦の瓦当部が垂下し逆三角形となり、下端にくびれを持つものである。俗に朝鮮瓦とも呼ばれるこの瓦は、文禄・慶長の役を直接の契機として広く伝播したものとされている。朝鮮での滴水瓦の特徴は、瓦当部の下端が逆三角形に拡大し、平瓦本体に対し120度程の角度を持つことである。国内で最も古い滴水瓦は山

口市乗福寺出土のものとされ、乗福寺は倭寇を封じるため朝鮮派兵を行っていた守護大名大内氏によって1312年に建立されたものであり、14世紀後葉のものとみられている（注1）。文禄の役以降の例としては姫路城や熊本城などにあり、いざれも文禄・慶長の役にかかわった池田輝政や加藤清正の築城によるものである。伊達政宗もまた文禄の役の際に渡海しており、仙台城本丸跡や瑞巖寺においても滴水瓦が確認されている。滴水瓦の瓦頭部と平瓦との角度は姫路城が109~117度、熊本城が107度と李朝瓦本来の特徴を色濃く残しているのに対し、当地域での角度は直角に近く、文様も花文と唐草が配置されるなど、形状や文様内容共に軒平瓦に類似しており、事実、同意匠の文様は軒平瓦にも確認できる。

瑞巖寺所蔵の滴水瓦のうち、「源五郎作」の刻印のあるものは慶長期の瑞巖寺創建に伴う瓦とされているが、若林城跡出土のものと形状や意匠面からみて同様のものである（注2）。文様構成をみると、中心飾りは上下左右に配した四葉の花菱で、唐草は上下に巻き込む2対があり、花菱の左右には子葉が配される。花菱や唐草は単純な凸線ではなく、縁を稜線状の凸線で描き、中央方向が徐々に肉薄になるよう立体的に描かれている。また子葉には葉脈が顯著に認められるなど、若林城出土品と比較し細部にいたるまで鮮明でシャープな印象を受けるものである。これに対し若林城跡出土のものは数点あるが、子葉の葉脈などは僅かに確認できる程度で、全体的に角が落ちたものとなっている。特に瓦当面に離砂が顯著に認められるものにはその傾向が強い。このことからも瑞巖寺の滴水瓦は若林城のものよりも時期的に遅る可能性がある。瑞巖寺の滴水瓦にはこの他にも大沢瓦窯跡から供給されたとみられる「太田市兵衛」の刻印が押されたものがあるが、中心飾りは劍花菱文で花菱は斜めに配され、頭高がやや低いものとなっている。この瓦は瑞巖寺の改修に伴う17世紀中頃のものとみられている。仙台城本丸跡や二の丸跡においても数は少ないが同種の滴水瓦が出土しており、またこれとは別に本丸跡では菊花文が旋回するような意匠の頭高の低い滴水瓦も出土しているが、同文様は軒桟瓦にもみられ、頭高の低さも考えた場合、退化形状とも理解できる。

第5次調査では出土した軒平瓦のうち滴水瓦の占める割合が極めて高く、その出土位置や平瓦・丸瓦との法量の比較から、台所と推定されるSB1で滴水瓦が使用されていた可能性は高いといえる。しかし全ての軒先を飾っていたかは不明で、量的に多くみられる三葉文軒平瓦についても滴水瓦と共に使用されていた可能性も否定できない。現時点では仙台城において滴水瓦を使用した建物がどのような性格のものだったかはわからない。現在の瑞巖寺本堂の屋根の軒先や脊棟を飾っているのは三巴文や九曜文軒丸瓦と共に劍花菱文の滴水瓦であり、庫裏には三巴文軒丸瓦に通常の軒平瓦が葺かれ、玄関部分は棟瓦葺きである。これらがいつの改修によるものかもまた定かでないが、滴水瓦が葺かれる条件がどのようなものであったのかを今後検討する必要がある。



第179図 滴水瓦の瓦当文様

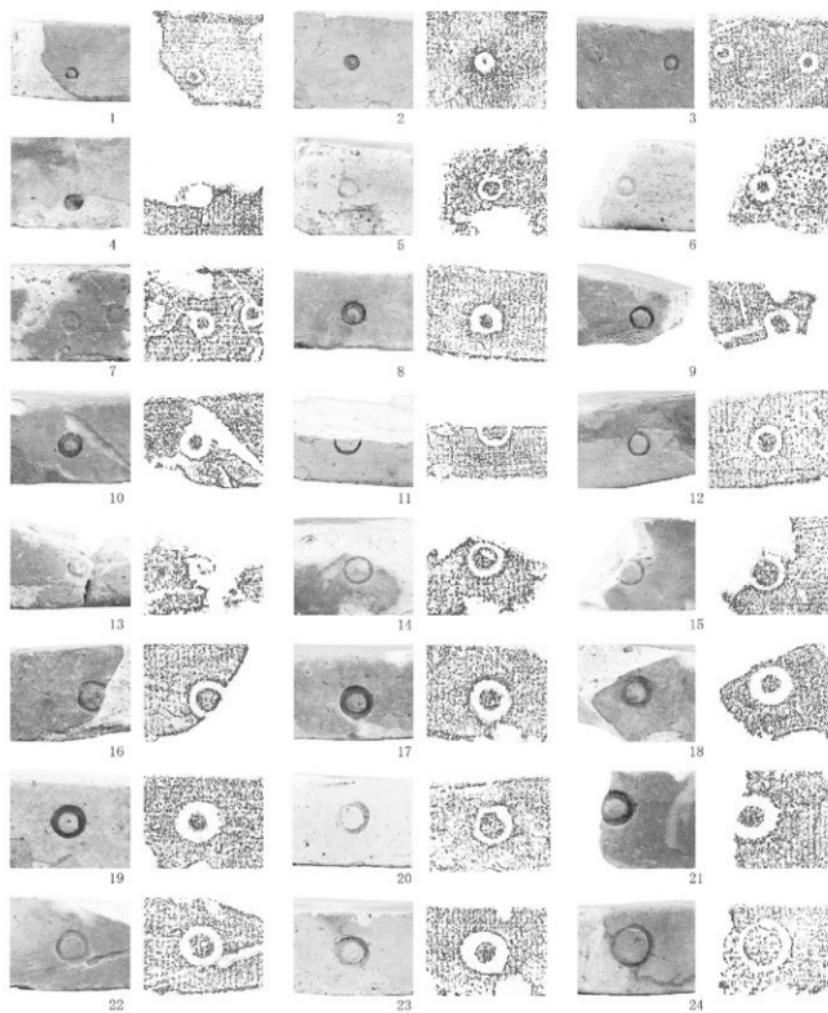
瑞巖寺：塙口 譲（1995）
仙台城二の丸：東北大学地質文化財調査研究
センター（1998）

[刻印瓦について]

平瓦の小口面に小さな刻印を多數確認した。刻印は全て狭端面側に押印され、竹管や棒状の道具による単純なも

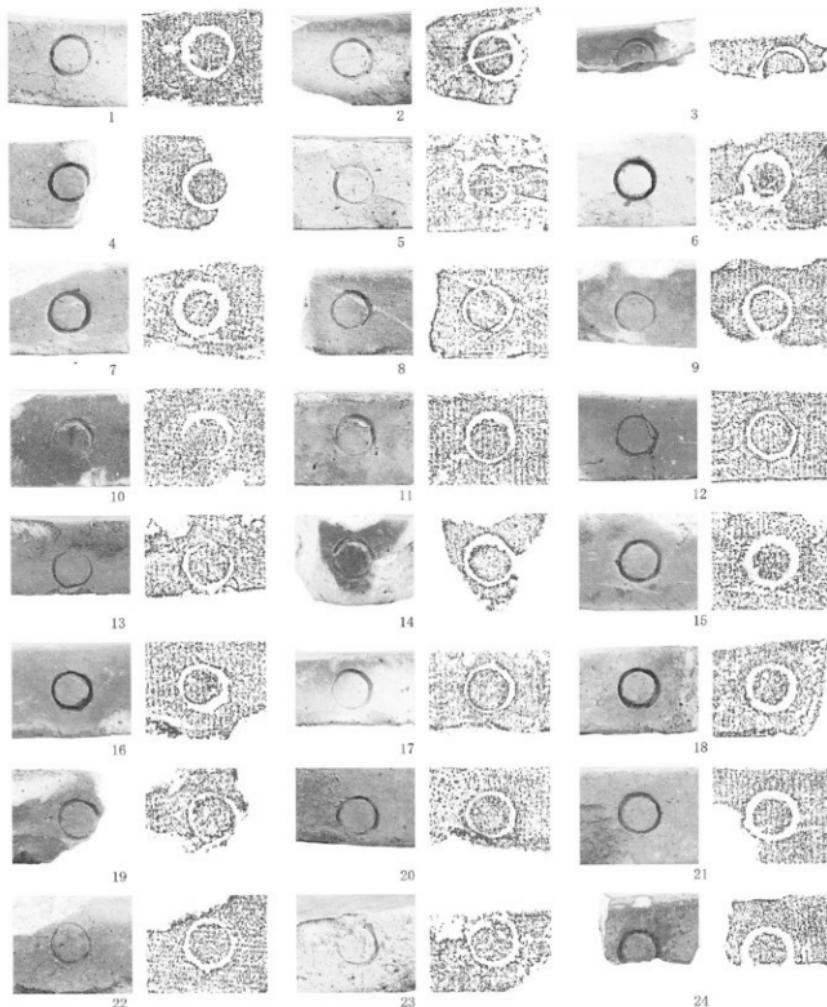
種類	分類	刻印形状	原体	備考
刻印	A	1		円形 径 4mm～12mm の竹管状工具
		2		円形 径 5mm～13mm の竹管状工具 円形が一部重なる
		3		径 8mm～9mm の竹管状工具に 2箇所切込みを入れたもの
		4		径 11mm～12mm の竹管状工具に十字形の切込みを入れたもの
		5		径 8mm～9mm の竹管状工具の一部を残したもの
		6		径 8mm～9mm の竹管状工具を 1/3 程度に割ったもの
		7		A6 の一部に切込みを入れたもの
印判	B	1		8mm～10mm 大の断面長方形の棒状工具を対角線に小割りしたもの
		2		8mm～10mm 大の断面長方形の棒状工具に三角形・長方形の切込みをいたしたもの
		3		8mm～10mm 大の断面長方形の棒状工具に切込みを入れたもの
印判	C1			「上」(篆書) 7mm 人の印判 丸瓦正面にのみ確認
压痕	D1			幅12mm大のヘラ状工具
	E1			径 5mm 程の紐
線刻	F1			10mm 長の線刻 尖った工具

第180図 刻印分類模式図



图版番号	登錄番号	種類	別刀判正度	密度・輪郭	分類	備考	図版番号	登録番号	種類	別刀判正度	密度・輪郭	分類	備考
1	G84	平凡	小口	單層	A1	細3mm	13	G191	平凡	小口	小塊2割5	A3	粗7mm
2	G28	平凡	小口	1号・破19	A1	細4mm	14	G195	平凡	小口	小塊2割11	A3	粗7mm
3	G156	平凡	小口	單層	A1	粗4mm	15	G58	平凡	小口	S06	A3	粗7mm
4	G103	平凡	小口	小西2層10	A1	粗5mm	16	G158	平凡	小口	複孔	A3	粗8mm
5	G132	平凡	小口	道次郎輪郭	A1	細5mm	17	G151	平凡	小口	複孔	A3	粗8mm
6	G81	平凡	小口	506	A1	細5mm	18	G59	平凡	小口	1号五層	A3	粗8mm
7	G152	平凡	小口	單層	A1	粗5mm	19	G75	平凡	小口	S07	A3	粗9mm
8	G27	平凡	小口	1號・破19	A1	粗5mm	20	G82	平凡	小口	S013	A3	粗9mm
9	G31	平凡	小口	單層	A1	細5mm	21	G192	平凡	小口	小塊2割1	A3	粗9mm
10	G70	平凡	小口	506	A1	細5mm	22	G118	平凡	小口	單層	A3	粗9mm
11	G98	平凡	小口	13号鑄石	A1	細5mm	23	G126	平凡	小口	單層	A3	粗9mm
12	H5	複斗牙	小口	506	A1	細5mm	24	G194	平凡	小口	小塊2割7	A3	粗10mm

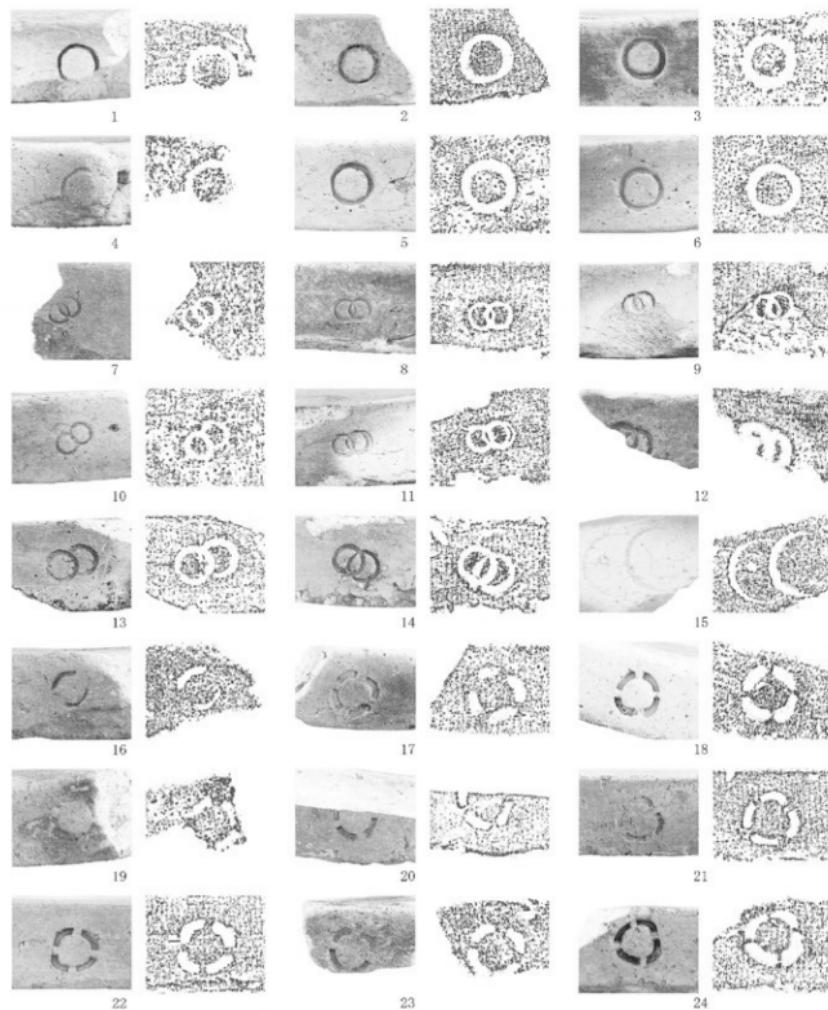
第181図 刻印集成図（1）



图版番号	登錄番号	種類	捺印位置	被体・調査	分類	備考
1	G112	平瓦	小口	繩目	A1	径10mm
2	G120	平瓦	小口	繩目	A1	径10mm
3	G122	平瓦	小口	繩目	A1	径10mm
4	G123	平瓦	小口	繩目	A1	径10mm
5	G124	平瓦	小口	繩目	A1	径10mm
6	G125	平瓦	小口	繩目	A1	径10mm
7	G134	平瓦	小口	繩目	A1	径10mm
8	G136	平瓦	小口	繩目	A1	径10mm
9	G138	平瓦	小口	繩目	A1	径10mm
10	G139	平瓦	小口	繩目	A1	径10mm
11	G143	平瓦	小口	繩目	A1	径10mm
12	G149	平瓦	小口	繩目	A1	径10mm

图版番号	登錄番号	種類	捺印位置	被体・調査	分類	備考
13	G155	平瓦	小口	繩目	A1	径10mm
14	G20	平瓦	小口	1縫・横19	A1	径10mm
15	G34	平瓦	小口	S01	A1	径10mm
16	G36	平瓦	小口	S01	A1	径10mm
17	G42	平瓦	小口	S04	A1	径10mm
18	G52	平瓦	小口	S01	A1	径10mm
19	G60	平瓦	小口	S05	A1	径10mm
20	G62	平瓦	小口	S05	A1	径10mm
21	G63	平瓦	小口	S06	A1	径10mm
22	G66	平瓦	小口	四點	A1	径10mm
23	G69	平瓦	小口	繩目	A1	径10mm
24	G92	平瓦	小口	S06B	A1	径10mm

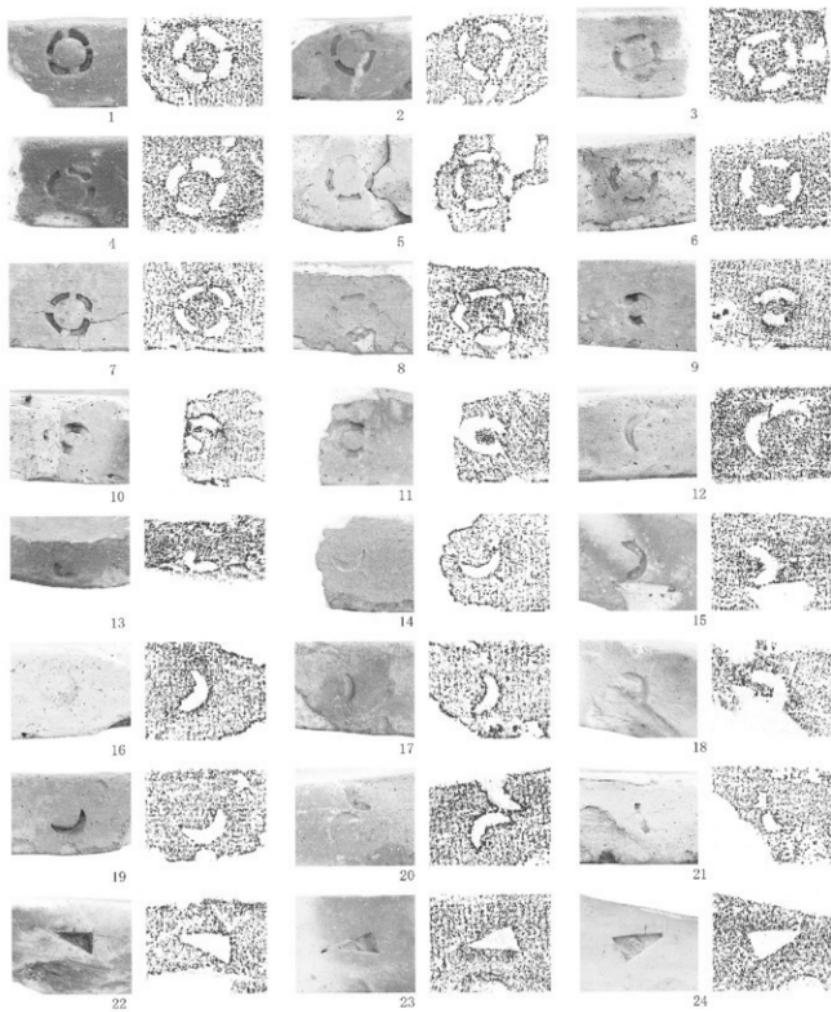
第182図 刻印集成図（2）



固形番号	母虫番号	種	性別	卵形態	被膜・柄状	分類	備考
1	697	平丸	小口	透明	無	A1	透明
2	G116	平丸	小口	透明	無	A1	透明
3	G111	平丸	小口	透明	無	A1	透明
4	G160	平丸	小口	透明	無	A1	透明
5	664	平丸	小口	透明	無	A1	透明
6	699	平丸	小口	1号丸	無	A1	透明
7	G108	平丸	小口	透明	無	A2	透明
8	G110	平丸	小口	透明	無	A2	透明
9	G114	平丸	小口	透明	無	A2	透明
10	G29	平丸	小口	1號+透明	無	A2	透明
11	G146	平丸	小口	透明	無	A2	透明
12	G106	平丸	小口	透明	無	A2	透明

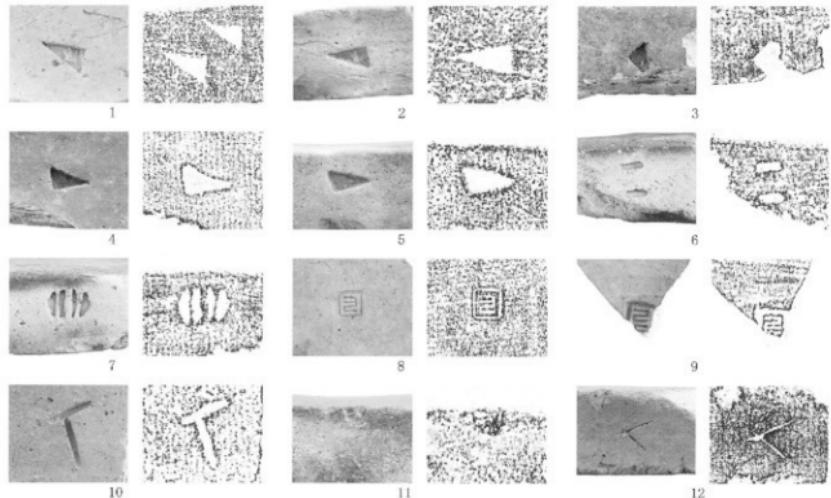
固形番号	母虫番号	種	性別	卵形態	被膜・柄状	分類	備考
13	G111	平丸	小口	透明	無	A2	透明
14	G144	平丸	小口	透明	無	A2	透明
15	G56	平丸	小口	透明	無	A2	透明
16	G96	平丸	小口	2号巢卵	無	A2	透明
17	G127	平丸	小口	透明	無	A2	透明
18	C154	平丸	小口	透明	無	A2	透明
19	G43	平丸	小口	透明	無	A2	透明
20	G69	平丸	小口	透明	無	A2	透明
21	G90	平丸	小口	透明	無	A2	透明
22	G95	平丸	小口	透明	無	A2	透明
23	G107	平丸	小口	透明	無	A2	透明
24	G113	平丸	小口	透明	無	A2	透明

第183図 刻印集成図(3)



识别号	整理标号	类别	刻印位置	底物·颗粒	分 带	特征	识别号	整理号	类别	刻印位置	底物·颗粒	分 带	特征
1	G115	平瓦	小口	陶质	A1	径12mm	13	1897	陶瓦	小口	10号龟右	A1	径3.7mm
2	G129	平瓦	小口	陶质	A1	径15mm	14	G115	平瓦	小口	三周	A1	长3.8mm
3	G148	平瓦	小口	陶质	A1	径15mm	15	G10	平瓦	小口	9B4	A1	长3.8mm
4	G150	平瓦	小口	陶质	A1	径12mm	16	G109	平瓦	小口	三周	A1	径3.9mm
5	G26	平瓦	小口	陶质	A1	径3mm	17	G109	平瓦	小口	圆孔	A1	径3.9mm
6	G58	平瓦	小口	陶质	A1	径3mm	18	G44	平瓦	小口	9B4	A1	径3.9mm
7	G66	平瓦	小口	陶质	A1	径3mm	19	G85	平瓦	小口	三周	A1	长3.9mm
8	G71	平瓦	小口	1号石质	A1	径3mm	20	G15	平瓦	小口	9B4	A1	长3.9mm
9	G128	平瓦	小口	陶质	A1	径9mm	21	G88	平瓦	小口	三周	A1	长3.9mm
10	G140	平瓦	小口	陶质	A1	径9mm	22	G141	平瓦	小口	深灰	B1	径10mm
11	G53	平瓦	小口	9B4	A1	径9mm	23	G162	平瓦	小口	浅灰	B1	径10mm
12	G87	平瓦	小口	9B4	A1	径9mm	24	G39	平瓦	小口	9B4	B1	径10mm

第184図 刻印集成図（4）



回数	施設番号	種類	刻印位置	裏面・顕微	分類	備考	回数	施設番号	種類	刻印位置	裏面・顕微	分類	備考
1	641	平瓦	小口	SB4	B1	幅10mm	7	G147	平瓦	小口	原品	B3	幅10mm
2	646	平瓦	小口	SB4	B1	幅10mm	8	F58	丸瓦	凸面	Ⅲ面	C1	長さ6mm
3	G117	平瓦	小口	面積	B1	幅10mm	9	F33	丸瓦	凸面	SB6	C1	幅12mm
4	G145	平瓦	小口	面積	B1	幅10mm	10	F49	丸瓦	面積	Ⅲ面	B1	幅12mm
5	G29	平瓦	小口	面積	B1	幅10mm	11	G106	平瓦	小口	1号瓦・面	B1	幅10mm
6	G142	平瓦	小口	複雑	B2	幅10mm	12	G137	平瓦	小口	複雑	F1	長さ18mm

第185図 刻印集成図（5）

のが多い。また刻印以外にも紐やヘラ状工具による圧痕や線刻が僅かではあるが確認されている。また丸瓦には玉縁際の凸面に篆書の「上」という文字が押印されるものが2点確認された。

最も多いものが竹管を利用したA類で、径4mm～12mmの単純な円形のもの（A 1）が最も多く、全体の半数近くを占める。A類には他に円を重ねて押したものや（A 2）、一部に切れ込みを入れたもの、竹管を半分に割ったものによるものなどがある。同様の刻印は仙台城本丸跡や二の丸跡調査においても多数確認されている。棒状の工具の小口面を利用したものがB類で、断面三角形に小割りしたもの（B 1）がB類の中では最も多い。他には断面長方形で複数の刻みを入れたもの（B 2）などもある。これらの刻印の他に、印判状のものをC類、ヘラ状の圧痕をD類、紐状の圧痕をE類、線刻をF類に分類している（180図）。

刻印などの性格としては、現時点では不明と言わざるを得ないが、仙台城石垣の石材の多くに様々な刻印が刻まれると同様に、これらは瓦を貰く場所の位置や製作に関わった者の違いなどにより付されたものとみられる。

（2）陶磁器・土師質土器の検討

【陶磁器の出土傾向について】

今回の調査では瓦と共に近世の陶磁器類や土師質土器が出土している。出土品は小破片ばかりで、近世陶器100点、近世磁器50点、近世の土師質土器1,011点である。その他には明治から昭和にかけての陶器333点、磁器89点があり、重量比率では陶器の60%、磁器の87%が明治時代以降のもので占めている。調査面積や検出した遺構からみた場合、かなり少ない出土数量と言わざるを得ないが、これは遺構の掘り込み調査が限られたこと

に加え、城としての存続期間が10年あまりと極めて短く、その殆どのものは二の丸への建物移築に伴い持ち出されたことによるものと理解できる。またこれまで調査地区が城の「表側」によることで、城内の廃棄行為が行なわれなかつたことによるものとの考え方もある。

ここでは出土陶器類の全てによる分類や集計を行なった。今回の資料の大半は遺構出土のものではなく、基本層Ⅲ層中や搅乱中からのものが中心であるが、遺跡の性格上、遺物の殆どが存続時期の明らかな若林城やそれ以後の施設との関わりの中で捉えることが可能といえる。

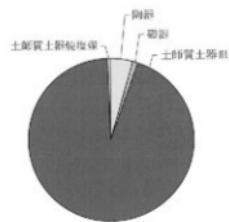
127図はⅢ層中からの陶磁器や土師質土器類の出土分布を示したものであるが、S B 1周辺に多く出土する傾向が見て取れる。Ⅲ層中での瓦の出土傾向にもみられるように、この傾向もまたS B 1周辺での陶器の使用傾向を示しているといえ、特に第7次調査を含め、丹波産ほかの擂鉢がこの建物周辺から多く出土する状況は、ここが台所と想定される事とも密接に関係しているとみられる。

陶器と磁器の出土比率は17世紀前半においては陶器86.4%に対し磁器13.6%、18~19世紀においては陶器84.4%に対し磁器15.6%と、近世を通じての組成比率にはあまり大きな変化はみられない。一方近代以降になると陶器45.5%に対し磁器54.5%と逆転し、ほぼ同比率となる。これは明治に入り宮城集治監が設置されることにより多量の食器類の使用により、瀬戸の新製染付などが大量に入ったことや、東北地方でも磁器生産が開始されたことによる結果とみることができる。

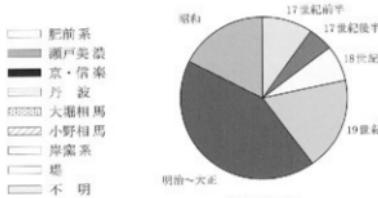
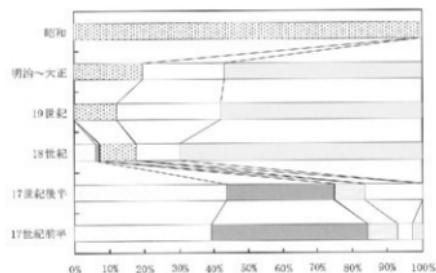
[陶器の産地別組成について]

陶器の産地別組成については187図に示した通りである。なお集計にあたっては個体破片数によるバラつきを避けるため重量比により行なった。

若林城が機能していた17世紀前半においては、肥前系と瀬戸・美濃系がそれぞれ40%程度の比率で拮抗し、僅かに丹波産、岸糸系が加わっている。肥前系の確実なものは唐津産で、瀬戸・美濃系は織部や志野を含んでいる。いずれも鉢類が目立つが、これが本来の組成かどうかは定かではない。丹波産は無釉擂鉢で、口縁部がないため詳



第186図 種類別比率（17世紀前半）



時期別比率

時期	肥前系	瀬戸・美濃系	京・信楽	丹波相馬	小野相馬	岸糸系	堀	不明
昭和	9	0	0	0	1530	0	0	13
明治～大正	9	3	0	0	727	0	0	869
19世紀	2	0	0	0	193	0	9	486
18世紀	39	6	2	0	61	1	9	78
17世紀後半	175	124	2	33	0	0	66	0
17世紀前半	336	300	0	72	0	9	36	0

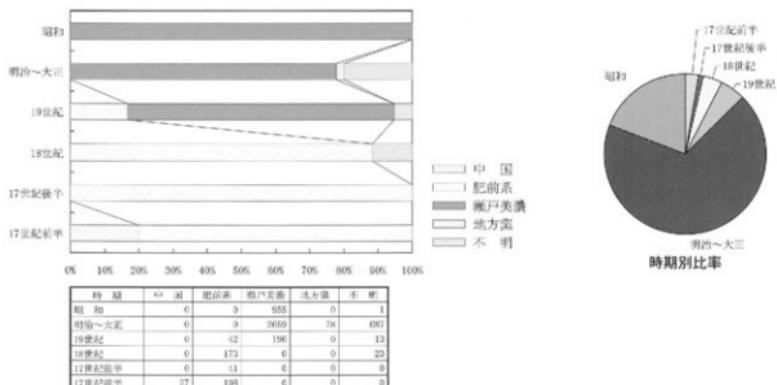
第187図 陶器の産地別比率

細な時期は明らかではないが、第7次調査出土遺物に類似することから17世紀前半を中心としたものとみられる。岸窯系のものは揃鉢とみられ、初期のものとみられる。なお組成には加えていないが、16世紀代とみられる信楽産の小型壺と越前窯の中型壺が出土しており、これらは伝世品の可能性が高いとみられる。越前窯の壺は口唇部の平坦化傾向に加え、口縁部内面の沈線表現がしっかりと残る段階のもので、「鬼板」塗布段階以前のものである。これは近世越前焼揃鉢編年のI-2後に比定されており、1550~1575年頃のもとされている。また越前産陶器は東北地方の太平洋側でも僅かな出土であり、仙台周辺では初めての資料である。同一個体とみられる破片がS B 1周辺でまとまって16点出土していることは揃鉢同様にこの建物の性格を物語っているといえる。

若林城虎城後の17世紀後半においても肥前系と瀬戸・美濃産がほぼ拮抗し、両者で70%を超え、残りは丹波産、岸窯系であることにもう変化は無く、これに加え僅かに京・信楽系が確認できる。18世紀に入るとこの状況は一変し、これまで主体的であった肥前系や瀬戸・美濃産は激減し10%以下となる。産地不明品が多量に存在するため実質比率はもう少し多くなると思われるが、これらと入れ替わるように大堀相馬産と堤産がほぼ同じ比率で加わってくる。大堀相馬焼は仙台藩の南に隣接する相馬藩領にあり、17世紀末に開窯したとみられ、小野相馬焼とともに相馬陶器として日常雑器が大量生産される。堤焼は四代藩主伊達綱村が元禄年間（1688~1704）に江戸の陶工を招き城下に窯を開いたのが始まりとされ、江戸時代には杉山焼と称されていたようである（注3）。19世紀になると僅かに残っていた肥前系はほぼ姿を消し、大堀相馬、堤にほぼ二分される状況となり、幕末期には堤産の比率が多くなる傾向にある。なお陶器の出土量は幕末期においては前代の3倍近くに増加している。明治に入っても大堀相馬と堤に二分される傾向は同様である。

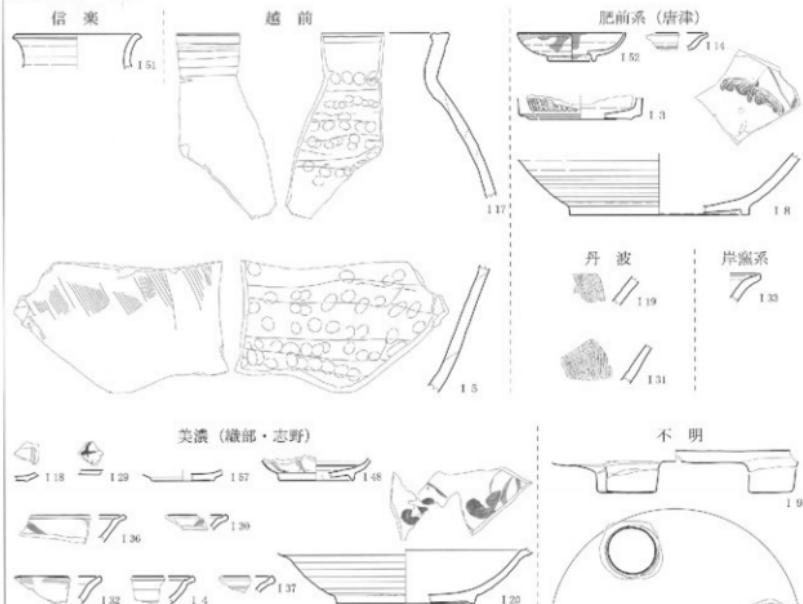
【磁器の産地別組成について】

磁器の産地別組成については188図に示した通りである。若林城が機能していた17世紀前半においては中国青花と初期伊万里とよばれる肥前磁器があり、後者が80%と高い比率を示している。中国青花は産地の同定まではできないが、漳州窯の粗製品は認められない。初期伊万里はいずれも優品であり、肥前磁器Ⅱ-1期に比定されるものである。市内では仙台城跡や当時の若林城下である南小泉遺跡から1630年代の初期伊万里が確かに出土しているが、今回出土したものは1610~1630年頃のこれらをやや選ぶものとみられ、初期伊万里の流通を考える上で貴重な発見といえる。J 6は外尾山窯出土品に、J 21は吹墨技法で天神森窯出土品にそれぞれ類例が確認される。若林城虎城後の17世紀後半においては中国青花が確認できず肥前系一色となる。確認できるのは丸碗である。18世紀におい

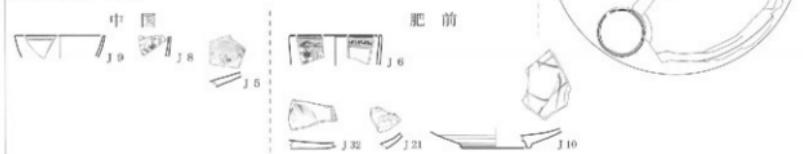


第188図 磁器の産地別比率

17世紀前半 陶器



17世紀前半 磁器



17世紀後半 陶器



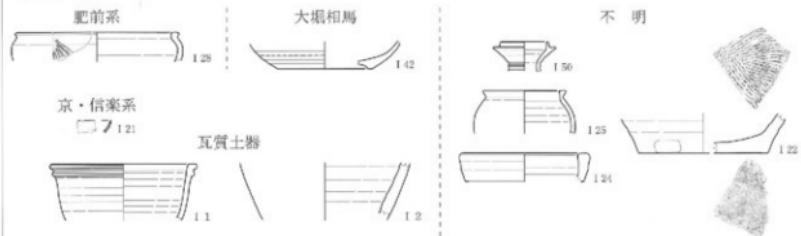
17世紀後半 磁器



0 20cm

第189図 17世紀前半から後半の陶磁器集成図

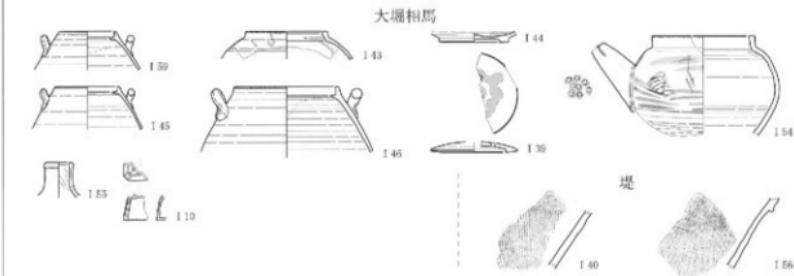
18世紀 陶器



18世紀 磁器



19世紀 陶器



19世紀 磁器



0 20cm

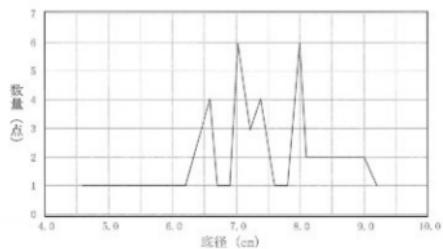
第190図 18世紀から19世紀の陶磁器集成図

ても17世紀後半同様若干の产地不明品を除くと肥前系が殆どを占め、器種は碗・皿を中心に波佐見産のくらわんか手が加わるなど、全国的な様相と同様である。19世紀に入ると瀬戸で磁器生産が開始されることにより、前代の状況は一変し、瀬戸・美濃産が全体の80%近くを占め、肥前系は20%とその数を減少させる。なお产地不明の中には19世紀前半に生産が始まった県北の切込焼や山形の平清水焼といった東北産の磁器が少なからず含まれているものと推察される。器種は端反碗を中心で皿を含んでいる。明治になると肥前系は払拭され、瀬戸・美濃産がほぼ80%を占め、東北産のものが一部含まれる状況となる。なお宮城集治監での使用食器として、見込部に「藍」字が入れられた井があり、「会津〇〇」の銘から会津本郷焼とみられる。また昭和の戦時統制下での統制食器も確認され、クロム釉により圓線のみが描かれた工場食器（国民食器）と呼ばれるものも認められる。高台内には「岐983」・「岐1015」・「岐1044」・「瀬351」などの統制番号の押印が認められる。

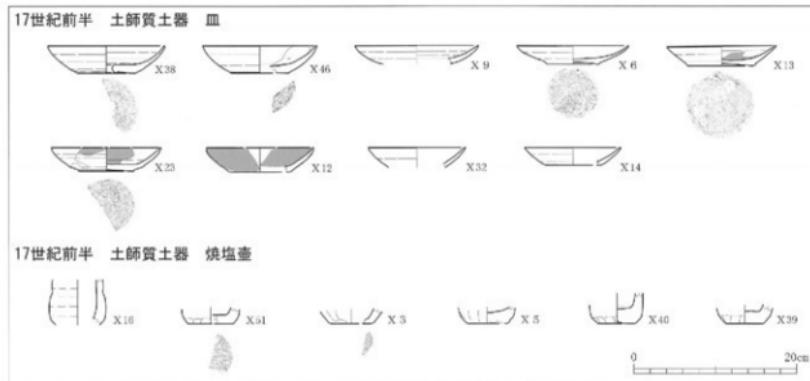
【土師質土器皿について】

陶磁器類を含めた組成比率において上師質土器皿（かわらけ）の占める割合は全体の94%と極めて高い。これは仙台城二の丸跡や三の丸跡などの状況と比較しても高い状況にある。これは陶磁器類が城外に持ち出されたとみられることに加え、上師質土器皿が一部を除き、その限りの消耗品であることによるものと思われる。ただし土師質土器の小破片は土師器との区別が難しく、分類されたものには双方が混入している可能性も否定できない。

出土品で全体を知ることができるのは少ないが、その中で底部破片が幾つか認められた。体部は内湾気味に緩やかに立上がり、調整は全てロクロで底部は回転糸切りである。X 8・41は体部外面をヘラ削りしており、焼塩壺の調整と類似している。形状が復元できたX 6・12・13・14・23・38・46の7点についてみてみると、口径は13.5～14.2cm程の大きいものと、11.6cm程の小さいものとに二分できる。前者は底径7cm前後と8cm前後の2種類が



第191図 土師質土器皿の底径分布



第192図 17世紀前半土師質土器集成図

あり、後者は6.7cm程となる。器高は口径が大きく底径7cm前後のものは高い傾向があり、底径8cm前後のものは低い傾向にある。X 6・9・13・14は偏平気味のもので、上師質土器皿全般の傾向としては新しくなるにつれ器高が低く偏平になる傾向が認められるとしている。また底径5cm前後の小型のものも僅かにみられる。

土師質土器皿の中には口縁部や底部に油煙が付着しているものが1/4程度あり、これらは灯明貝として使用されたものとみられる。底部破片が多いため付着割合と皿の大きさの関係は明確でない。これに対し第7次調査出土の皿は付着する割合が高いものとなっている。二の丸跡では付着割合が多いことは17世紀初頭から前葉の特徴と考えられており（注4）、今回の状況は若林城内での場所の違いによる用途に違いがあったことも推定される。

【焼塩壺について】

焼塩壺はこれまでの調査で出土したもの同様に小破片の底部資料が多く、全体形のわかるものは殆ど無い。全体の特徴としてはロクロ成形で、体部下端を縫ないしは横方向にケズリ調整を入れ、底部は糸切り痕やナデ調整がみられることである。X39は内面底部にロクロ成形による渦巻状のナデが認められるものである。X16はこれまで出土した中ではわりと残存が良いもので、体部中位で一旦内側に括れながら口縁部へ直立する形状となり、これまで出土した焼塩壺は全てこのような形状と推察される。また若林城跡では仙台城跡や藩の要職を務めた茂庭氏の店舗である上野館跡で確認されているような非ロクロ成形のものや、产地を示す刻印のあるもの、形状がコップ型で体部に格子叩き目をもつものは一切出土していない。

三の丸跡では寛永15年以前とみられるⅠ期の遺構群から若林城跡と同様の特徴をもった焼塩壺が出土しており、他には形状は類似するがロクロを使用しない搬入品とみられるものも出土している。またこれらに後続するものとして、二の丸跡ではコップ状で底部が厚く、格子叩き目のあるものが多く出土しており、これらはロクロ成形という従来の技法を用いながらも、他地域に以前からみられた叩き目などの特徴を有するものといえる。17世紀初めに関西地域で生産され全国に流通した焼塩壺は、粘土紐や粘土板から成形され、刻印を押すものも多いが、ロクロ成形による焼塩壺の出土は仙台や金沢などにある程度限られるとしている。これは地域での消費目的に生産された独自のものと考えられており、仙台における焼塩壺の特徴をもつものの出土は仙台城跡以外には仙台藩屋敷である東京の汐留遺跡などの仙台藩に関わる遺跡にはほぼ限られている。

【陶磁器ほかのあり方】

若林城は仙台城にも劣らない高い格式をもった居住空間であったにも関わらず、短い存続期間に加え、計画的に行なわれた廃城や移築により、残された陶磁器のみでその城内のあり方を知ることは難しいといえる。しかしそのような中にも瀬戸・美濃産陶器や丹波産描绘・初期伊万里や中国青花などに城内の生活が垣間見ることができ、さらに越前産陶器はその入手ルートを考える上で非常に興味深いものといえる。

仙台城二の丸跡では陶磁器の产地別分類が行なわれている。今回得られた結果は概ね二の丸での状況と一致しているが、18世紀以降のものに京・信楽系や肥前系などの高級陶器が殆ど含まれないことが大きく異なっている。これは二の丸が近世を通じ藩主の居館であったのにに対し、廃城後に若林城が迫った姿を考えた場合には必然的な結果といえる。そんな中でも幕末期において陶器量の増加が認められることで、この時期の城内に何かしらの動きがあったことを推察される。

（注1）高正龍（2006）

（注2）瑞巖寺宝物館 新野一浩氏のご好意により実見させていただいた。

（注3）関善内（1974）

（注4）東北大学埋蔵文化財調査研究センター『東北大学埋蔵文化財調査年報9』による。

第8章 まとめ

- 確認した基本層の性格は、I層：表土、II層：近現代の盛土層、III層：若林城廃城後の近世畑耕作土、IV層：若林城造営に伴う盤地上層、V層：若林城以前の旧表土、VI層：古墳時代から中世の遺構検出面となる洪水起源の自然堆積層となっている。今回の調査で確認した遺構はIII層上面およびIV層上面でのものである。
- 若林城の遺構は後世の搅乱によりすでに失われていると考えられてきたが、調査区の全域において多数確認することができた。今回の調査で確認した遺構は以下のとおりである。

遺構種別	III層面	IV層面	V層面	合計	備考
礎石建物跡 (SB)		4		4 基	
(1号建物礎石跡)		33		32 基	
(2号建物礎石跡)		54		54 基	
(3号建物礎石跡)		48		48 基	
(4号建物礎石跡)		9		9 基	
溝跡 (SD)		25	1	26 条	窓跡の可能性のあるものを含む
ピット (P)		33		33 基	
石塗造構		5		5 か所	
欄跡 (SA)		1		1 基	
土坑 (SK)	8	197	2	207 基	旗上杭3基を含む
集石造構	16	26		42 基	
瓦・礫集積造構		1		1 か所	
小溝状造構群		2		2 箇	28条

第18表 遺構数量表

- 確認した礎石建物跡は大型の建物3棟を含む4棟である。建物相互は強い規格性をもって整然と配置されており、これらは大手口とされる西側に近いことから、城の表側の御殿を構成していた建物群の一部と考えられる。各建物は当時の6尺5寸(1.97m)を1間とする柱間基準で造られている。
また建物や溝跡などの諸施設は増築や改修の痕跡がほとんどみられず、その姿は近世初期における城郭建築のあり方を知ることができる極めて貴重な例といえる。
- 1号建物跡は『御二之丸御指図』に描かれた「大台所」と規模や構造面での一致点が多く、『義山公治家記録』にある廃城後、仙台城二の丸に移築された建物であることが推定される。また3号建物跡も同様の理由から指図に描かれた「焼火間」として移築された建物である可能性が高いが、この建物の若林城における名称は不明である。2号建物跡は鉤形の形状をもち、内部の部屋間に格式の差を設けたとみられる配置をとった建物であり、建物位置からみても城の中心的建物の一つと考えられる。
- 各建物の屋根は周辺溝跡を中心に出土した瓦量からみて、台所である1号建物跡が瓦葺き、2号と3号建物跡が板葺きで、棟部などの一部に贅斗瓦や棟込瓦が使用していたと推定される。また建物周囲を巡る溝跡は雨落ち溝であると共に一部は水路機能を備えており、その構造は溝跡の機能や配置場所により多種にわたっている。
- 小溝状造構群は整地土であるIV層を搅拌することで形成されたIII層によるもので、調査区の全域で確認しており、さらに広範囲に広がっている。焼跡は廃城後にこの地に置かれた藩管理の菜園に関連するものと考えられる。
- 1号溝跡は城外より導水したとみられる幅の広い石組水路であり、廃城後に御菜園に関連して造られたと考えられる他、改修前の溝跡については城の施設の可能性もあるが、六郷堀との直接的な関係は不明である。
- 若林城の瓦はその多くが建物と共に城外に持ち出されたと考えられるが、出土したものには軒瓦類をはじめ多くの種類がある。軒丸瓦の瓦当文様は珠文三巴文と三巴文があり、軒平瓦は三葉文と菊花文がある。また花菱文の滴水瓦の出土数が多く、これらは瑞巌寺出土の慶長期のものと同種類である。

若林城の瓦はその使用が寛永4～13年（1627～1636）という極めて短い期間に特定されるものである。このような状況は様々な時期の瓦が混在することの多い近世城郭にあっては極めてまれで、仙台城跡をはじめ近世初めの瓦の時期を判断する上で貴重な資料である。

9. 若林城で使用された陶磁器の中には中国青花や初期伊万里などの当時としては貴重なものも確認できた。また仙台領内では今回初めて出土した越前焼に加え、丹波焼をはじめとする播鉢の出土量の多さは、その流通過程や台所である1号建物を考える上で重要である。

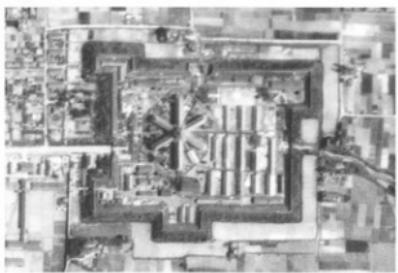
参考・引用文献

- 会津若松市『会津若松市史14 文化編①陶磁器 会津のやきもの』 2000
会津若松市観光公社『御蔵廻』 1993
朝日新聞社『運河開口百科 日本の国宝 097』 1999
出光美術館『越前古陶とその再現』－九衛門窯の記録 1994
井上新太郎『本瓦窯の技術』 1974
江戸遺跡研究会『図説 江戸考古学研究事典』柏書房 2001
追川吉生『江戸のミクロコスモス 加賀藩江戸屋敷』シリーズ歴史を学ぶ011 新泉社 2004
追川吉生『江戸城・大名屋敷』江戸のなりたち1 新泉社 2007
大橋康二『古伊万里の文様』理工学社 1994
小倉 強『実測図 仙臺及び近郊の古建築』北匠会 1973
学習研究社『仙台城』歴史群像 名城シリーズ13 1996
学習研究社『図説 城造りのすべて』歴史群像シリーズ 2006
加藤 徹『仙台市域における水利の現状』『市史せんらい』Vol.14 仙台市 2004
木村孝一郎『近世越前焼における福井の現状』『福井城跡IV』福井市文化財保護センター 2004
関西近世考古学研究会『関西考古学研究XI』 2003
関西近世考古学研究会『関西考古学研究15』「17世紀の陶磁器と社会」 2007
九州近世陶磁学会『九州陶磁の癡年』 2000
九州近世陶磁学会『国内出土の肥前陶磁』－東日本の流通をさぐる－ 2001
小林清治『仙台城と仙台領の城・要害』日本城郭史研究叢書第二巻 名著出版 1982
近藤真佐大『東北地方における城郭瓦の受容と展開』『森宏之君追悼城郭論集』識豊期城郭研究会 2005
近藤 豊『古建築の細部意匠』大河出版 1972
高 正龍『山口東福寺出土瓦の検討－韓國龍文端平瓦の福年と麗末鮮初の滴水瓦の様相－』『喜谷美宜先生古稀記念論集』喜谷美宜先生古稀記念論集刊行会 2006
財団法人岐阜県陶磁資料館『特別展 戦時の統制したやきもの』 2001
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター『江戸時代の关窯』 2003
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター『江戸時代の瀬戸・美濃窯』 2004
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター『江戸時代のやきもの』一生産と流通－ 2006
佐藤 理『昭和・平成の大復原全記録 桂離宮の建築』木耳社 1999
佐賀県立佐賀城本丸歴史館『佐賀城本丸歴史館展示案内』 2004
佐藤 浩『仙台市若林城跡の実像』『日本歴史 第706号』日本歴史学会 2007
佐藤 巧『近世武士住宅』叢文社 1976
佐藤 理『昭和・平成の大修復全記録 桂離宮の建築』木耳社 1999
白幡洋三郎『江戸の大名庭園 INAX ALBUM25』 1994
新人物往来社『日本城郭体系3』 1981
瑞巖寺『瑞巖寺の歴史』 1997
瑞巖寺『瑞巖寺』 2001
杉本 宏『桟瓦考』『考古学研究 第46卷第4号』考古学研究会 2000
鈴木嘉吉・「藤主章『不滅の建築11 二条城二の丸御殿』毎日新聞社 1989
関 善内『堀焼と陶工たち』万葉堂書店出版部 1974
仙台市『仙台市史 第1巻』 1955
仙台市教育委員会『仙台城』 1967
仙台市教育委員会『若林城跡』仙台市文化財調査報告書第83集 1985
仙台市教育委員会『仙台城二ノ丸跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第76集 1985
仙台市教育委員会『若林城跡』仙台市文化財調査報告書第90集 1986
仙台市教育委員会『南小泉遺跡第16~18次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第140集 1990

- 仙台市教育委員会『南小泉遺跡第22次・23次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第192集 1994
- 仙台市教育委員会『兼種園遺跡発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第214集 1997
- 仙台市教育委員会『若林城跡と兼種園遺跡』 2001
- 仙台市教育委員会『若林城跡第4次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第256集 2002
- 仙台市教育委員会『若林城跡第4次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第292集 2005
- 仙台市教育委員会『若林城跡第6次・第7次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第306集 2007
- 仙台市教育委員会『若林城跡発掘調査(第8次)現地説明会資料』 2007
- 仙台市教育委員会『若林城跡』『平成19年度 宮城県遺跡調査成果発表会 資料』宮城県考古学会 2007
- 仙台市教育委員会『仙台城跡1』仙台市文化財調査報告書第259集 2002
- 仙台市教育委員会『仙台城跡2』仙台市文化財調査報告書第264集 2003
- 仙台市教育委員会『仙台城跡3』仙台市文化財調査報告書第270集 2004
- 仙台市教育委員会『仙台城本丸跡1次調査 出土遺物編』仙台市文化財調査報告書第282集 2005
- 仙台市教育委員会『仙台城跡5』仙台市文化財調査報告書第285集 2005
- 仙台市教育委員会『仙台城跡7』仙台市文化財調査報告書第309集 2007
- 仙台市教育委員会『仙台城下絵図の魅力 杜の都のうつりかわり』 2001
- 仙台市教育委員会『仙台の遺跡(改訂版)』仙台市文化財パンフレット第55集 2005
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 資料編2 近世1 藩政』 1996
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 資料編13 伊達政宗文書4』 2007
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 通史編2 古代中世』 2000
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 通史編3 近世1』 2001
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 通史編5 近世3』 2004
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 特別編7 城館』 2006
- 仙台市博物館市史編さん室『市史通信 第18号』 2007
- 仙台市博物館『伊達政宗と家臣たち』特別展図録 1987
- 仙台市博物館『図説 伊達政宗』河出書房新社 1986
- 高槻市教育委員会『摂津 高槻城 本丸跡発掘調査報告書』高槻市文化財調査報告書第14冊 1984
- 田中昭三『大名庭園』小学館 1997
- 田中哲雄『日本の美術 No.429 発掘された庭園』至文堂 2002
- 地学団体研究会仙台支部『仙台の地学』東北教育図書株式会社 1968
- 坪井利弘『古建築の瓦屋根』理工学社 1981
- 坪井利弘『日本の瓦屋根』理工学社 1976
- 坪井利弘『瓦屋根の納め方』理工学社 1979
- 坪井利弘『図鑑瓦屋根』理工学社 1997
- 東北大埋蔵文化財調査委員会『仙台城二の丸跡』『東北大埋蔵文化財調査年報1』 1985
- 東北大埋蔵文化財調査委員会『仙台城二の丸跡』『東北大埋蔵文化財調査年報6』 1993
- 東北大埋蔵文化財調査委員会『仙台城二の丸跡』『東北大埋蔵文化財調査年報7』 1994
- 東北大埋蔵文化財調査研究センター『仙台城二の丸跡』『東北大埋蔵文化財調査年報8』 1997
- 東北大埋蔵文化財調査研究センター『仙台城二の丸跡』『東北大埋蔵文化財調査年報9』 1998
- 東北大埋蔵文化財調査研究センター『仙台城二の丸跡』『東北大埋蔵文化財調査年報13』 2000
- 東北中世考古学会『東北地方の在地土器・陶磁器 I』-11世紀から19世紀- 1997
- 東北歴史資料館『仙台・堤のやきもの』 1995
- 永井久美男『近世の出土銭II』兵庫埋蔵銭調査会 1998
- 西 和夫『図解 古建築入門』彰国社 1990
- 西 桂『日本の庭園文化』学芸出版社 2005
- 日本建築学会『日本建築史図集』彰国社 1980
- 彦根城博物館『特別史跡彦根城跡 表御殿発掘調査報告書』 1988
- 平井 型『城と書院』日本の美術13 平凡社 1965

- 平井 型『日本住宅の歴史』日本放送出版協会 1974
- 平井 聖『日本建築の鑑賞基礎知識』至文堂 1997
- 藤岡道大『原色日本の美術12 城と書院』小学館 1968
- 藤岡道夫『城と書院』ブックオブブックス日本の美術16 小学館 1971
- 藤原勉・渡辺宏『和瓦のはなし』鹿島出版会 1990
- 平凡社『宮城県の地名』日本歴史地名大系4 1987
- 毎日新聞社『国宝15 建造物Ⅲ』 1984
- 松本秀明・野中奈津子・久邇山寛子 「仙台平野中部、名取川流域に発達する旧河道群の形成年代と沖積平野における河成堆植物の散布状況」『日本地理学会発表要旨集』No.66 日本地理学会 2004
- 水野信太郎『日本煉瓦史の研究』法政大学出版局 1999
- 三原良吉『宮城刑務所と若林城跡』 1948
- 宮城県教育委員会『国宝・重要文化財 堀巖寺 修理工事報告書』 1958
- 宮城県教育委員会『観沢・大沢窟跡ほか』宮城県文化財調査報告書第116集 1987
- 宮城県教育委員会『上野館跡』宮城県文化財調査報告書第156集 1993
- 宮元健次『図説 日本庭園のみかた』学芸出版社 1998
- 最上義光歴史館『発掘された山形城二の丸』“埋蔵文化財”からみる城の歴史 2005
- 森 薫『日本庭園史話』日本放送出版協会 1981
- 梁川町教育委員会『遺跡 梁川城本丸・庭園発掘調査・復元整備報告書』梁川町文化財調査報告書第6集 1986
- 山内淳司『麥島城の発掘調査—九州における初期畿豊系城郭の構造—』『2003年滋賀大会資料集』日本考古学協会2003年
滋賀大会実行委員会 2003
- 大和 智『日本の美術 No.405 城と御殿』至文堂 2000
- 若林地域考古文化歴史編『シンポジウム もうひとつの城 若林城 講演記録集』 2004
- 渡辺 誠『口韓交流の民族考古学』名古屋大学出版会 1995
- 渡邊洋一「伊達政宗研究最前線」『歴史読本6』 2006

写 真 図 版



1. 若林城跡全景（昭和20年米軍撮影）



2. 若林城跡全景（昭和22年米軍撮影）



3. 若林城跡全景（昭和28年撮影・西から）



4. 若林城跡全景（昭和59年撮影・東から）



5. 若林城跡周辺（昭和22年米軍撮影）※ライン内が城下町推定範囲

宮城集治監正面圖



1. 宮城集治監（宮内庁所蔵・西から）

宮城集治監正面圖



2. 宮城集治監（宮内庁所蔵・東から）　※左手前にあるのは「朝鮮ウメ」



1. 城南側の土壘と堀跡（昭和30年頃・仙台市戦災復興記念館所蔵・南東から）※合成写真



2. 城南側の土壘と堀跡（西から）



3. 城東側の門跡と土橋跡（南東から）



4. 城西側の門跡と内柵形土壘（南東から）



5. 国指定天然記念物 「朝鮮ウメ」（臥竜梅）



6. 現在の六郷堀（北から）



7. 調査前状況（北東から）



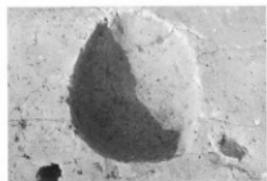
1. SK 1 掘り込み状況（北から）



2. SK 1 断面状況（西から）



3. SK 2 掘り込み状況（南から）



4. SK 5 掘り込み状況（南から）



5. SK 6 掘り込み状況（南から）



6. 1号集石造構検出状況（東から）



7. 2号集石造構検出状況（東から）



8. 7号集石造構検出状況（南から）



9. 7号集石造構断面状況（東から）



10. 10号集石造構検出状況（西から）



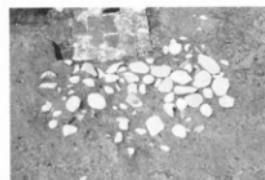
11. 10号集石造構断面状況（東から）



12. 11号集石造構検出状況（北から）



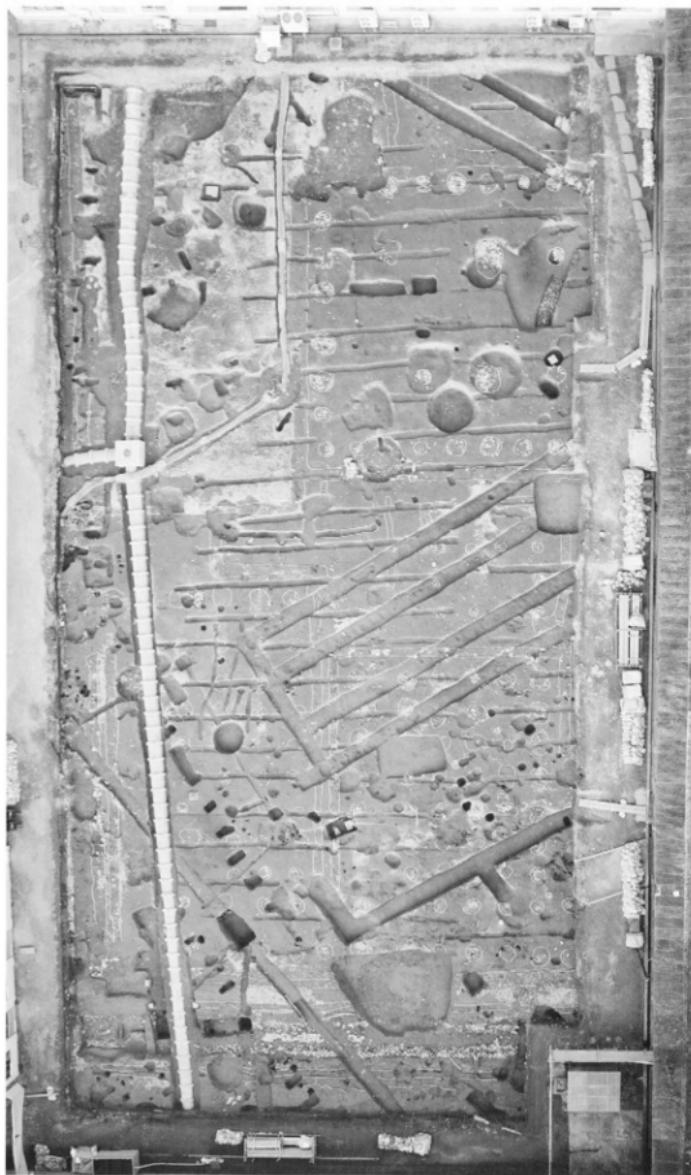
13. 13号集石造構検出状況（西から）



14. 14号集石造構検出状況（東から）



15. 1号瓦・礫集積溝検出状況（南東から）



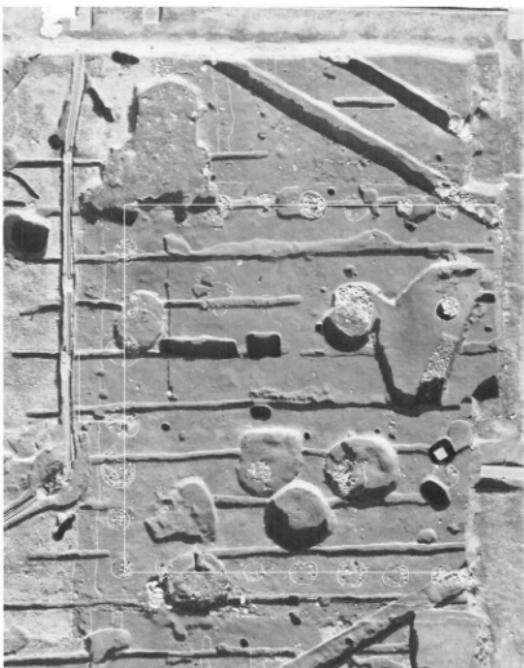
1. IV層上面遺構検出全景（上が北）



1. IV層上面南半部造構検出状況（南から）



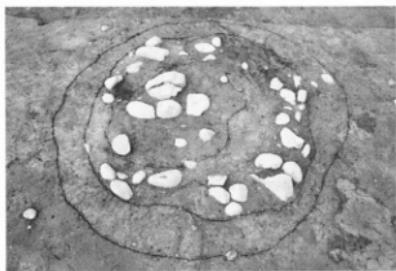
2. IV層上面北半部造構検出状況（西から）



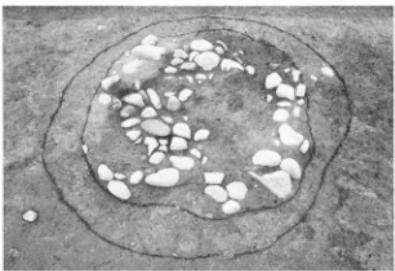
1. SB 1 検出全景（上が北）



2. SB 1 検出全量（北から）



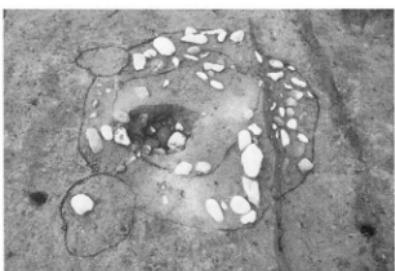
1. SB 1 磨石跡10検出状況（南から）



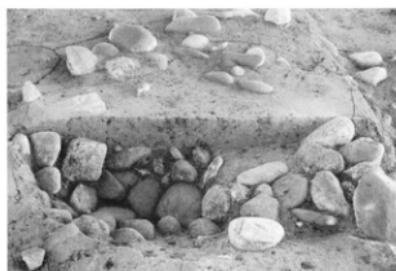
2. SB 1 磨石跡10抜取り痕掘削状況（南から）



3. SB 1 磨石跡10根固め状況（南から）



4. SB 1 磨石跡18検出状況（西から）



5. SB 1 磨石跡18断面状況（東から）



6. SB 1 磨石跡18根固め状況（東から）



7. SB 1 磨石跡19検出状況（東から）



8. SB 1 磨石跡19根固め状況（東から）



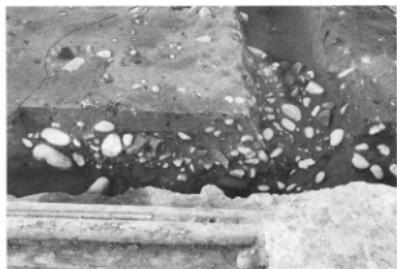
1. SB 1 磚石跡19根固め下部瓦出土状況（東から）



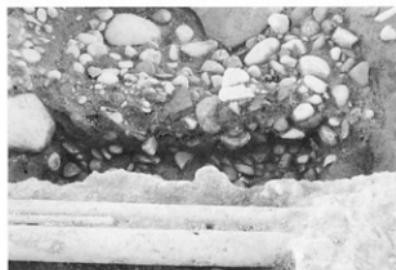
2. SB 1 磚石跡19根固め下部状況（東から）



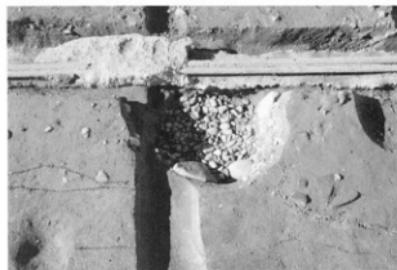
3. SB 1 磚石跡20検出状況（東から）



4. SB 1 磚石跡20断面状況（西から）



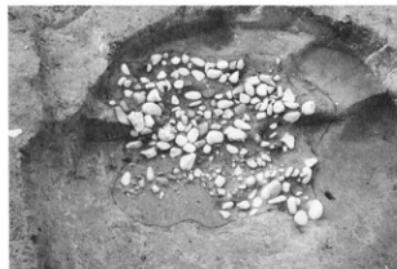
5. SB 1 磚石跡20根固め断面状況（西から）



6. SB 1 磚石跡20根固め下部状況（東から）



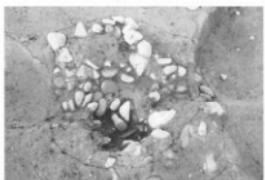
7. SB 1 磚石跡28断面状況（東から）



8. SB 1 磚石跡28根固め状況（東から）



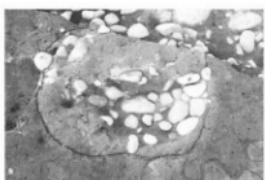
1. SB 1 磨石跡 1 検出状況（北から）



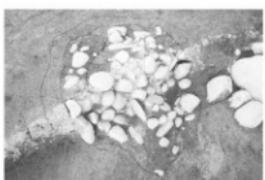
2. SB 1 磨石跡 3 検出状況（南から）



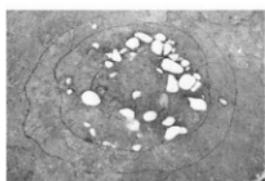
3. SB 1 磨石跡 5 検出状況（南から）

4. SB 1 磨石跡 5 横管 (N12)
出土状況（東から）

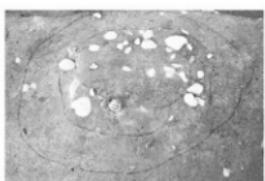
5. SB 1 磨石跡 7 検出状況（南から）



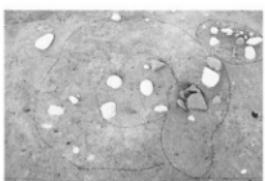
6. SB 1 磨石跡 8 検出状況（南から）



7. SB 1 磨石跡 9 検出状況（南から）



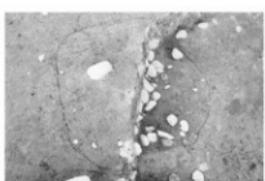
8. SB 1 磨石跡 11 検出状況（南から）



9. SB 1 磨石跡 12 検出状況（南から）



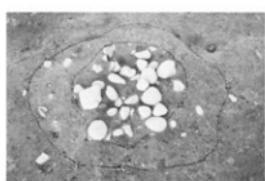
10. SB 1 磨石跡 13 検出状況（南西から）



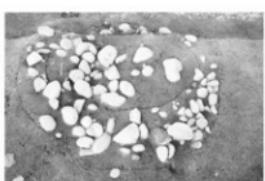
11. SB 1 磨石跡 14 検出状況（南から）



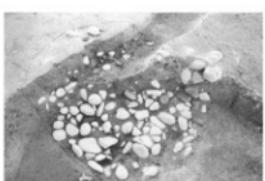
12. SB 1 磨石跡 15 検出状況（南から）



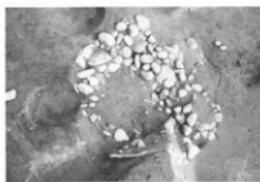
13. SB 1 磨石跡 16 検出状況（南から）



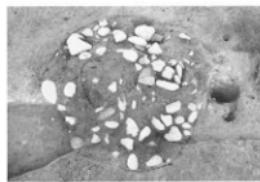
14. SB 1 磨石跡 17 検出状況（南から）



15. SB 1 磨石跡 21 検出状況（北から）



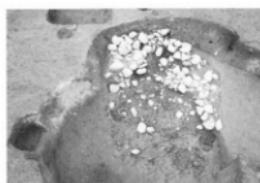
1. SB 1 磨石跡22検出状況（南東から）



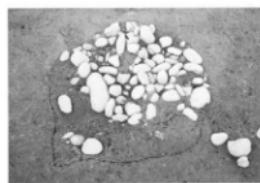
2. SB 1 磨石跡23検出状況（南から）



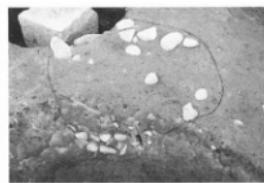
3. SB 1 磨石跡24検出状況（南から）



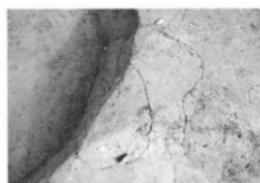
4. SB 1 磨石跡25検出状況（南から）



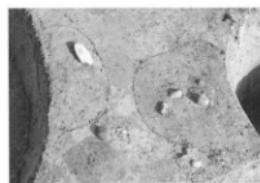
5. SB 1 磨石跡27検出状況（南から）



6. SB 1 磨石跡29検出状況（南から）



7. SB 1 磨石跡31検出状況（南から）



8. SB 1 磨石跡32検出状況（南西から）



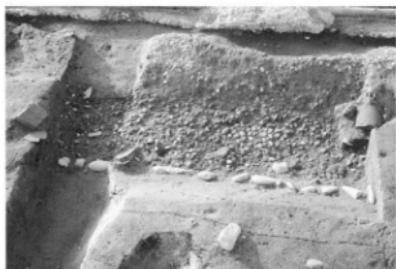
9. SB 1 磨石跡33検出状況（南西から）



10. SB 1 西辺玄関部検出状況（西から）



11. SB 1 西辺玄関部検出状況（南から）



1. SD 4 a 1区底面状況（東から）



2. SD 4 a 1区断面状況（北から）



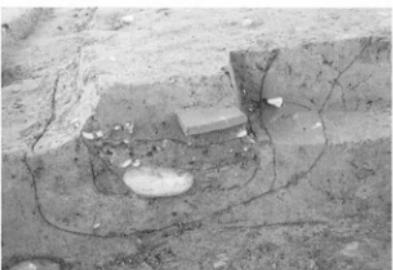
3. SD 4 a 3区検出状況（北から）



4. SD 4 a 3区断面状況（南から）



5. SD 5 2区瓦出土状況（南西から）



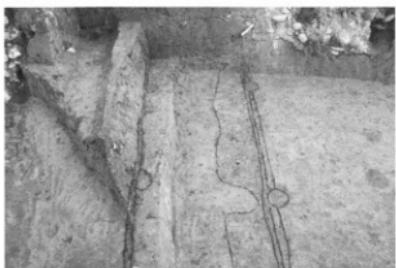
6. SD 5 1区断面状況（西から）



7. SD 6 1区瓦配置状況（東から）



8. SD 6 1区掘り込み状況（北から）



1. SD 6 2区検出状況（西から）



2. SD 6 2区側板断面状況（西から）



3. SD 6 2区掘り込み状況（西から）



4. 1号石組遺構検出状況（西から）



5. 1号石組遺構掘り込み状況（北から）



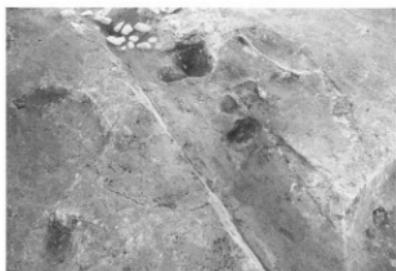
6. 1号石組遺構西側状況（南から）



7. 1号石組遺構東側底面・壁面状況（北西から）



8. 1号石組遺構掘り方底面状況（西から）



1. SK203掘り込み状況（南東から）



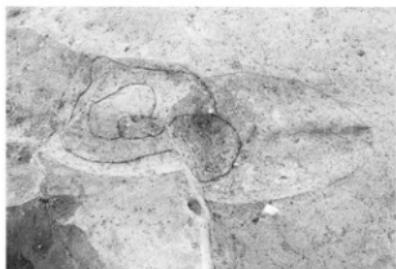
2. SK204断面状況（南から）



3. SK204焼面状況（南から）



4. SK204掘り方状況（南から）



5. SK205焼面状況（南から）



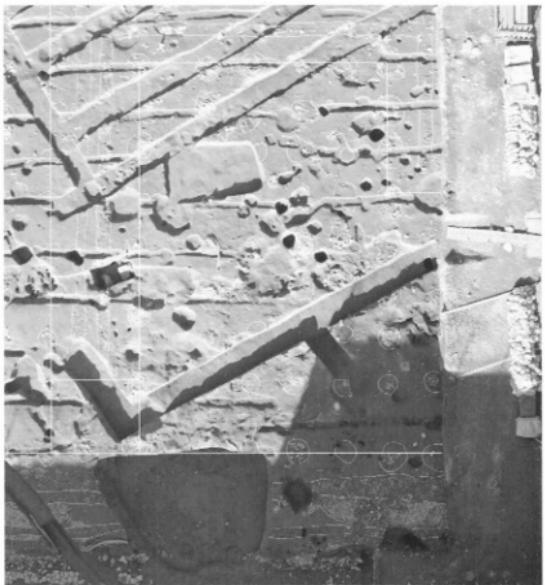
6. SK205断面状況（南から）



7. SD19掘り込み状況（東から）



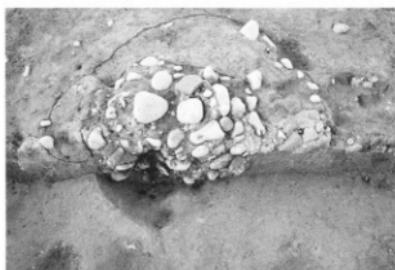
8. SD19内ピット断面状況（南から）



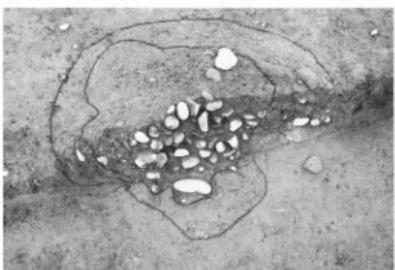
1. SB 2 検出全景（上が北）



2. SB 2 検出全景（南から）



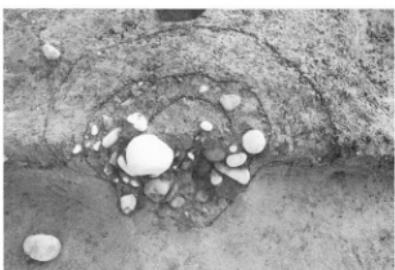
1. SB 2 磁石跡 8 挖り込み状況（南から）



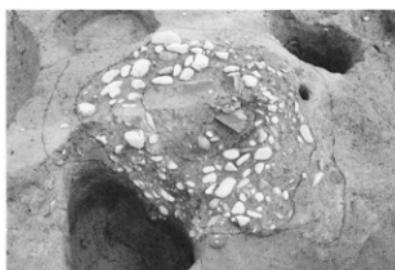
2. SB 2 磁石跡12検出状況（南から）



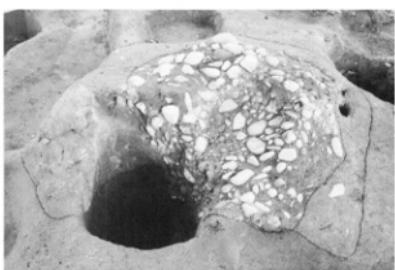
3. SB 2 磁石跡12断面状況（南から）



4. SB 2 磁石跡19検出状況（北から）



5. SB 2 磁石跡27検出状況（西から）



6. SB 2 磁石跡27根固め状況（南西から）



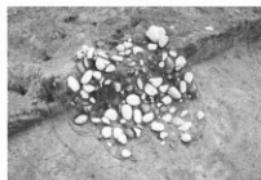
7. SB 2 磁石跡50検出状況（北から）



8. SB 2 磁石跡50根固め状況（西から）



1. SB 2 碓石跡 1 検出状況（南から）



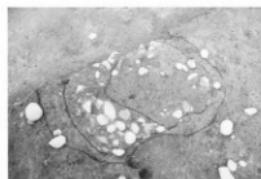
2. SB 2 碓石跡 2 検出状況（北から）



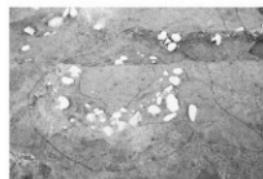
3. SB 2 碓石跡 3 検出状況（南から）



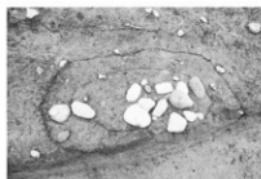
4. SB 2 碓石跡 4 検出状況（南から）



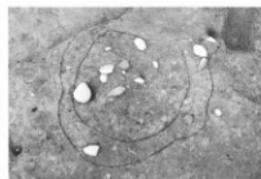
5. SB 2 碓石跡 5 検出状況（南から）



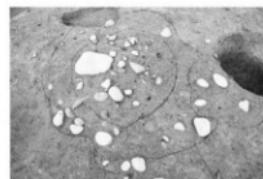
6. SB 2 碓石跡 6 検出状況（南から）



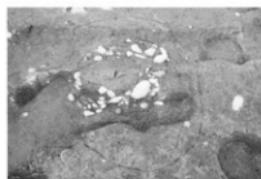
7. SB 2 碓石跡 7 検出状況（北から）



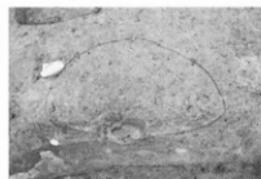
8. SB 2 碗石跡 9 検出状況（南から）



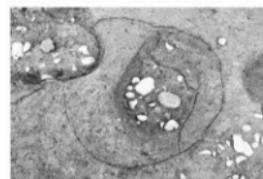
9. SB 2 碗石跡 10 検出状況（南から）



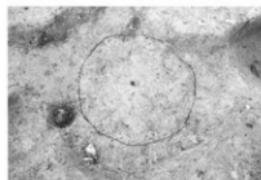
10. SB 2 碗石跡 11 検出状況（南から）



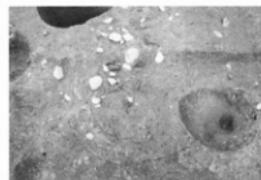
11. SB 2 碗石跡 14 検出状況（西から）



12. SB 2 碗石跡 15 検出状況（南から）



13. SB 2 碗石跡 16 検出状況（南から）



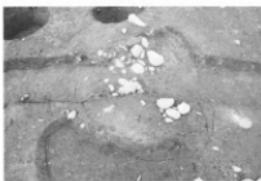
14. SB 2 碗石跡 17 検出状況（南から）



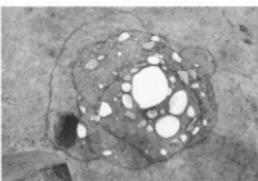
15. SB 2 碗石跡 18 検出状況（南から）



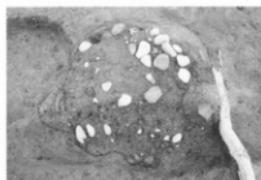
1. SB 2 磁石跡22検出状況（南から）



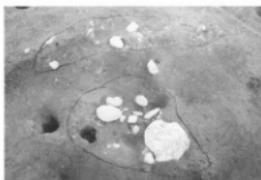
2. SB 2 磁石跡23検出状況（南から）



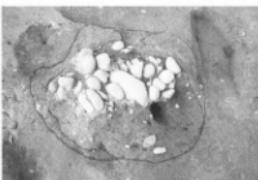
3. SB 2 磁石跡24検出状況（南から）



4. SB 2 磁石跡25検出状況（南から）



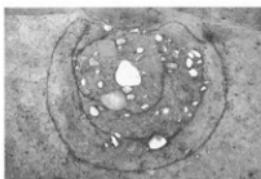
5. SB 2 磁石跡26検出状況（南から）



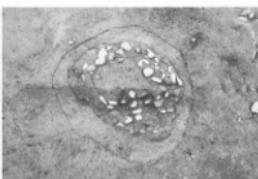
6. SB 2 磁石跡28検出状況（南から）



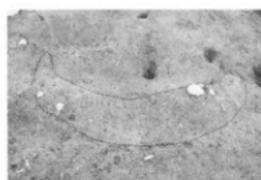
7. SB 2 磁石跡29検出状況（南から）



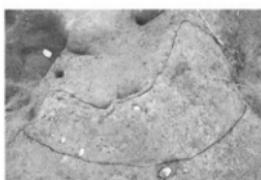
8. SB 2 磁石跡30検出状況（南から）



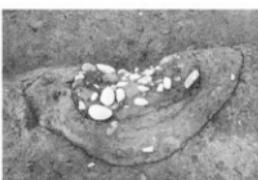
9. SB 2 磁石跡31検出状況（南から）



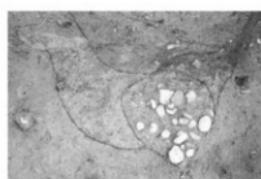
10. SB 2 磁石跡32検出状況（南から）



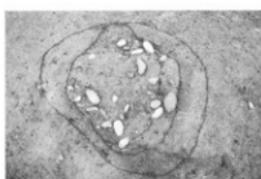
11. SB 2 磁石跡33検出状況（南から）



12. SB 2 磁石跡34検出状況（南から）



13. SB 2 磁石跡35検出状況（西から）



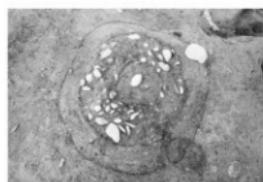
14. SB 2 磁石跡36検出状況（南から）



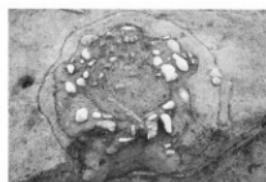
15. SB 2 磁石跡37検出状況（南から）



1. SB 2 磚石跡38検出状況（南西から）



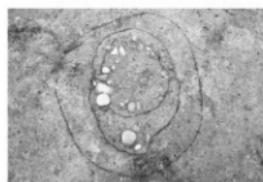
2. SB 2 磚石跡39検出状況（南から）



3. SB 2 磚石跡40検出状況（南から）



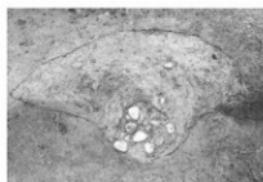
4. SB 2 磚石跡41検出状況（南から）



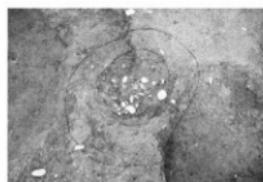
5. SB 2 磚石跡42検出状況（南から）



6. SB 2 磚石跡43検出状況（南から）



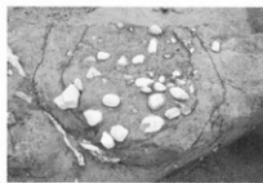
7. SB 2 磚石跡44検出状況（東から）



8. SB 2 磚石跡45検出状況（南から）



9. SB 2 磚石跡46検出状況（南から）



10. SB 2 磚石跡47検出状況（北から）



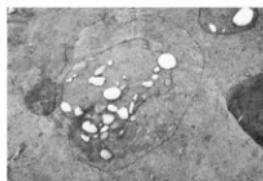
11. SB 2 磚石跡48検出状況（北から）



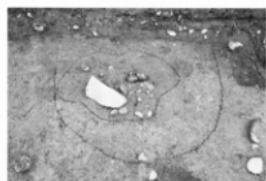
12. SB 2 磚石跡49検出状況（北から）



13. SB 2 磚石跡51検出状況（南から）



14. SB 2 磚石跡52検出状況（南から）



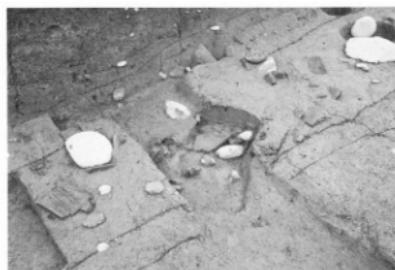
15. SB 2 磚石跡53検出状況（西から）



1. SD 7 1区底面状況（西から）



2. SD 7 1区北東隅掘り込み状況（北西から）



3. SD 7 東辺分岐部検出状況（西から）



4. SD 7 東辺南端部検出状況（北西から）



5. SD 7 2区瓦出土状況（西から）



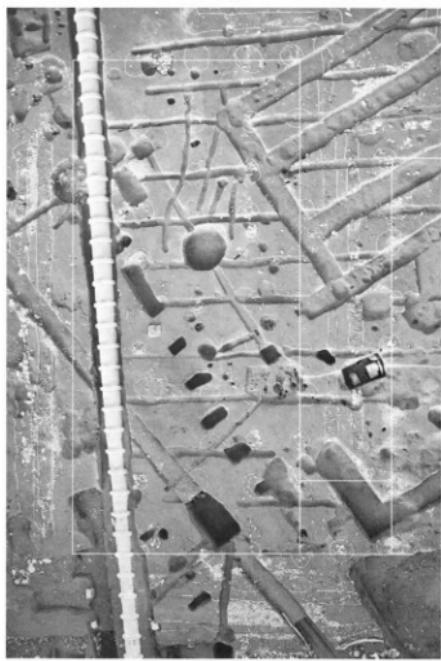
6. SD 7 2区底面状況（北から）



7. SD 7・8 2区底面状況（北西から）



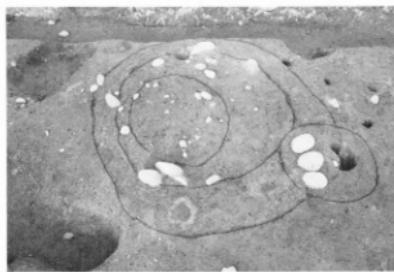
8. SD 7 3区底面状況（北から）



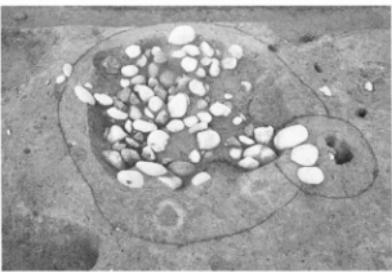
1. SB 3 検出全景（上が北）



2. SB 2・3 検出全景（南東から）



1. SB 3 磁石跡 3 検出状況（南から）



2. SB 3 磁石跡 3 根固め状況（南から）



3. SB 3 磁石跡 3 断面状況（南から）



4. SB 3 磁石跡 5 掘り込み状況（東から）



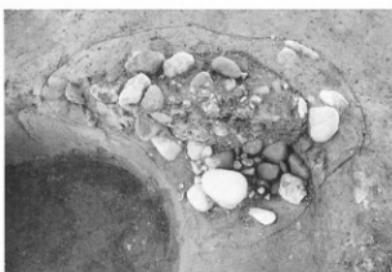
5. SB 3 磁石跡 14 断面状況（東から）



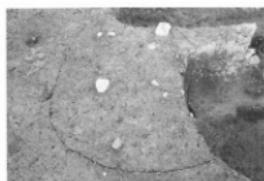
6. SB 3 磁石跡 14 根固め状況（東から）



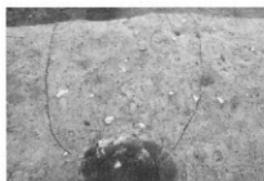
7. SB 3 磁石跡 14 掘り方状況（南から）



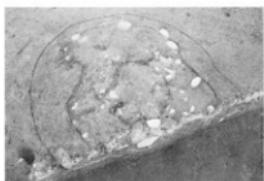
8. SB 3 磁石跡 20 掘り込み状況（南から）



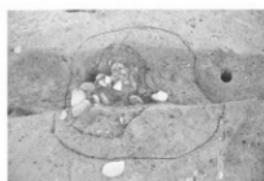
1. SB 3 磁石跡 1 検出状況（南から）



2. SB 3 磁石跡 2 検出状況（南から）



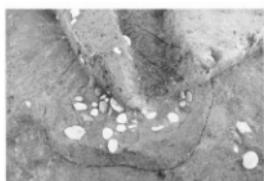
3. SB 3 磁石跡 4 検出状況（南から）



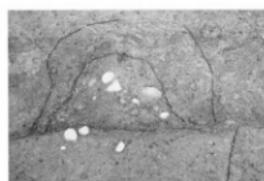
4. SB 3 磁石跡 6 検出状況（南から）



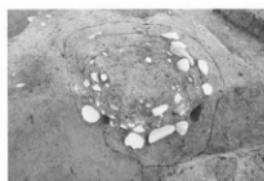
5. SB 3 磁石跡 7 検出状況（南から）



6. SB 3 磁石跡 8 検出状況（西から）



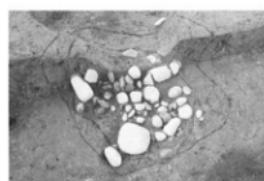
7. SB 3 磁石跡 9 検出状況（南から）



8. SB 3 磁石跡 10 検出状況（南から）



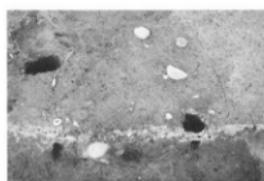
9. SB 3 磁石跡 11 検出状況（南から）



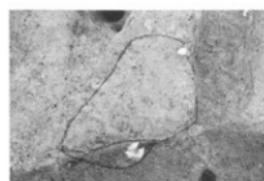
10. SB 3 磁石跡 12 検出状況（東から）



11. SB 3 磁石跡 13 検出状況（北から）



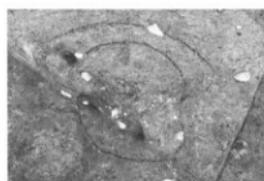
12. SB 3 磁石跡 15 検出状況（南から）



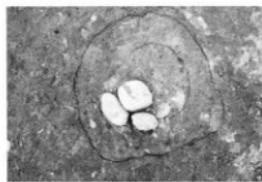
13. SB 3 磁石跡 16 検出状況（南から）



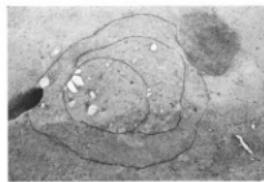
14. SB 3 磁石跡 17 検出状況（南から）



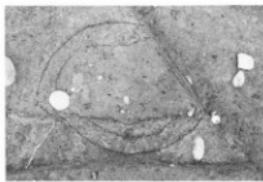
15. SB 3 磁石跡 18 検出状況（南西から）



1. SB 3 磨石跡19検出状況（南から）



2. SB 3 磨石跡21検出状況（南から）



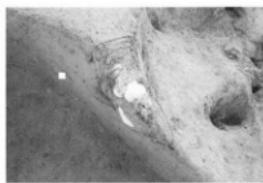
3. SB 3 磨石跡22検出状況（南から）



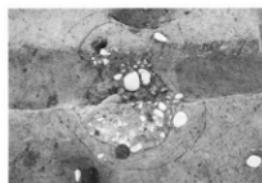
4. SB 3 磨石跡22銅製品（N11）
出土状況（東から）



5. SB 3 磨石跡23検出状況（南から）



6. SB 3 磨石跡24検出状況（北から）



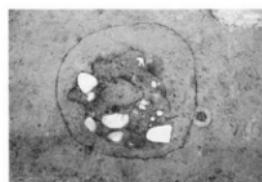
7. SB 3 磨石跡25検出状況（南から）



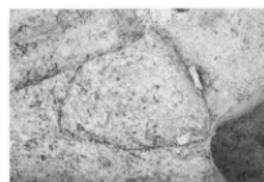
8. SB 3 磨石跡26検出状況（南から）



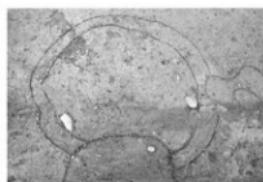
9. SB 3 磨石跡27検出状況（南から）



10. SB 3 磨石跡28検出状況（南から）



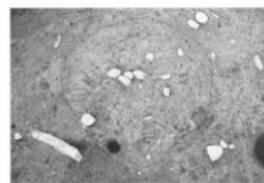
11. SB 3 磨石跡29検出状況（南から）



12. SB 3 磨石跡30検出状況（南から）



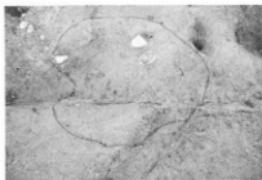
13. SB 3 磨石跡31検出状況（南から）



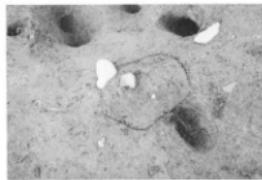
14. SB 3 磨石跡32検出状況（南から）



15. SB 3 磨石跡33検出状況（南から）



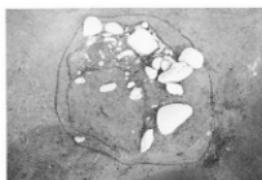
1. SB 3 磁石跡34検出状況（南から）



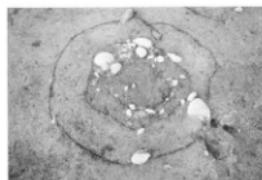
2. SB 3 磁石跡35検出状況（南から）



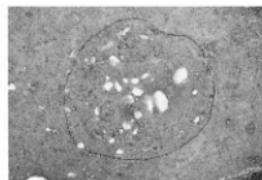
3. SB 3 磁石跡36検出状況（南から）



4. SB 3 磁石跡37検出状況（東から）



5. SB 3 磁石跡38検出状況（南から）



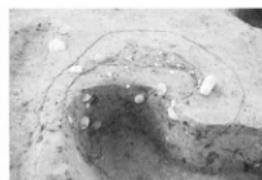
6. SB 3 磁石跡39検出状況（南から）



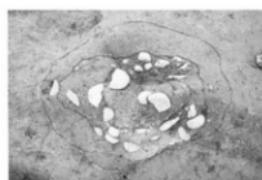
7. SB 3 磁石跡40検出状況（南から）



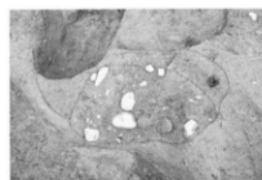
8. SB 3 磁石跡41検出状況（南西から）



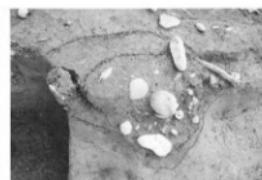
9. SB 3 磁石跡42検出状況（南西から）



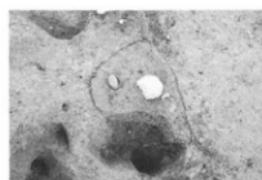
10. SB 3 磁石跡43検出状況（南西から）



11. SB 3 磁石跡44検出状況（南西から）



12. SB 3 磁石跡45検出状況（南西から）



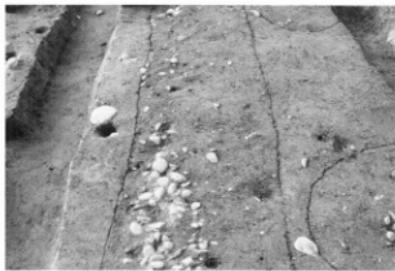
13. SB 3 磁石跡46検出状況（北西から）



14. SB 3 磁石跡47検出状況（北から）



15. SB 3 磁石跡48検出状況（北から）



1. SD 8 1区検出状況（東から）



2. SD 8 1区底面状況（東から）



3. SD 8 1区断面状況（東から）



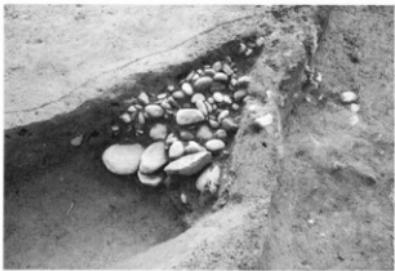
4. SD 8 2区瓦出土状況（北西から）



5. SD 8 2区滴水瓦（G 5）出土状況（南西から）



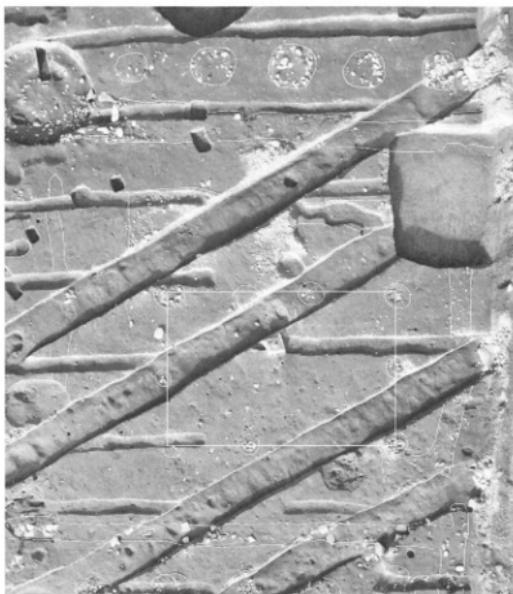
6. SD10 1区瓦出土状況（南西から）



7. SD10 1区南側底面様状況（北西から）



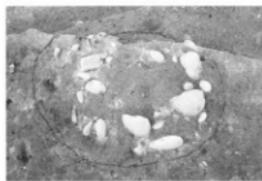
8. SD10・11 1区掘り込み状況（北から）



1. SB 4 検出全景（上が北）



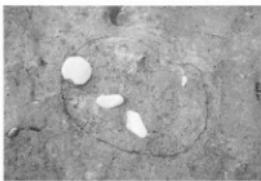
2. SB 4 検出全景（南から）



1. SB 4 磁石跡 1 検出状況（南から）



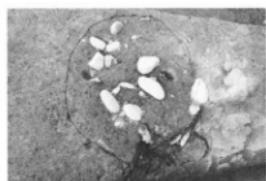
2. SB 4 磁石跡 2 検出状況（南から）



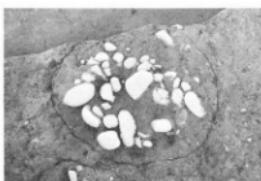
3. SB 4 磁石跡 3 植出状況（南から）



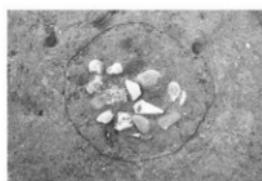
4. SB 4 磁石跡 4 植出状況（南から）



5. SB 4 磁石跡 5 植出状況（南から）



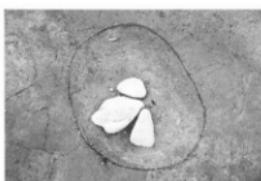
6. SB 4 磁石跡 6 植出状況（南から）



7. SB 4 磁石跡 7 植出状況（南から）



8. SB 4 磁石跡 8 植出状況（南から）



9. SB 4 磁石跡 9 植出状況（南から）



10. SD14北西隅検出状況（南西から）



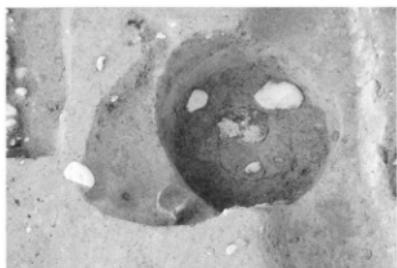
11. SD14南東隅検出状況（南西から）



1. SD13検出状況（南から）



2. SA 1 挖り込み状況（東から）



3. P 6 底面柱痕跡検出状況（西から）



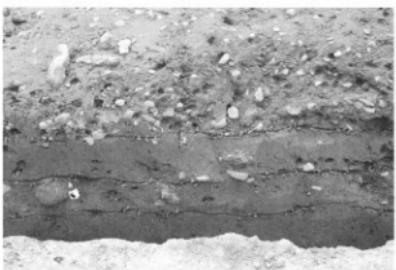
4. P 6 底面礫検出状況（西から）



5. 1号石敷遺構検出全景（南西から）



1. 1号石敷造構南東隅部検出状況（南西から）



2. 1号石敷造構断面状況（東から）



3. 1号石敷造構・SD4 2区断面状況（東から）



4. 2号石敷造構検出全景（西から）



5. 2号石敷造構東側検出状況（東から）



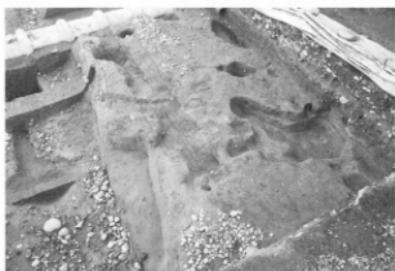
6. 3号石敷造構検出全景（南東から）



7. 3号石敷造構検出状況（北東から）



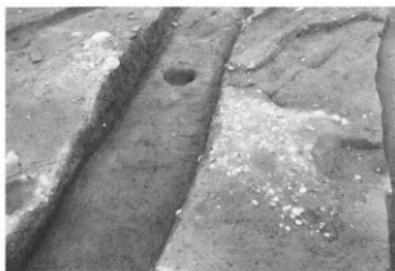
8. 3号石敷造構西壁際検出状況（南東から）



1. 4号石敷遺構西側検出状況（北西から）



2. 4号石敷遺構東側検出状況（南西から）



3. 5号石敷遺構検出状況（南西から）



4. 小溝状遺構群1群全景（南から）



5. 小溝状遺構群2群中央部全景（西から）



1. 小溝状遺構群2群北側全景（西から）



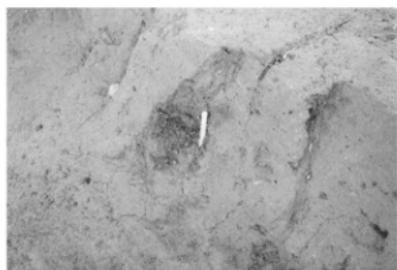
2. 小溝状遺構群2群西端部状況（南から）



3. 小溝状遺構群1-4断面状況（南から）



4. 小溝状遺構群2-15断面状況（西から）



5. 小溝状遺構群2-3管(X58)出土状況（南東から）



6. 小溝状遺構群2-3銅錢(N2-5)出土状況（南から）



7. SD 1検出状況（西から）



8. SD 1a掘り込み状況（西から）



1. SD 1 a Aベルト断面状況（西から）



2. SD 1 a 東端部礫崩落状況（南東から）



3. SD 1 a 底面状況（東から）



4. SD 1 a 裏込め礫状況（北東から）



5. SD 1 b 底面検出状況（東から）



6. SD 1 b 底面状況（東から）



7. SD 1 b 底面落ち込み断面状況（東から）



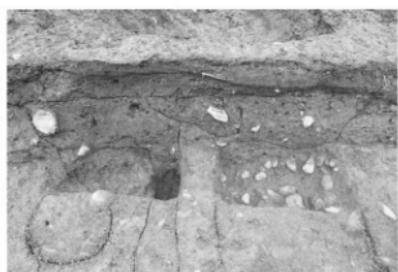
8. SD 1 b 底面落ち込み（東から）



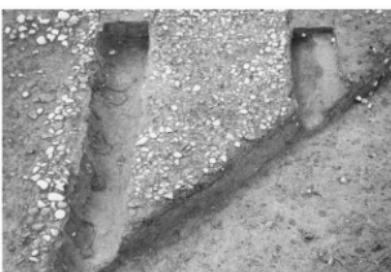
1. SD 1 b 底面落ち込み掘り方状況（南東から）



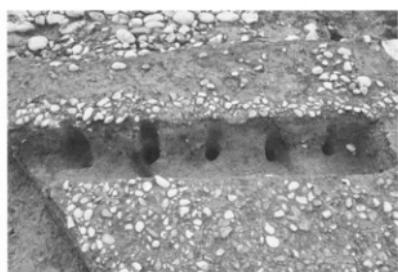
2. SD 2 a・b 検出状況（北西から）



3. SD 2 a・b 断面状況（西から）



4. SD 3・9 掘り込み状況（東から）



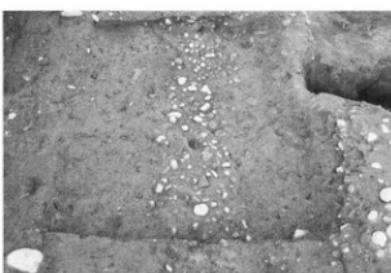
5. SD 3 ピット列（北から）



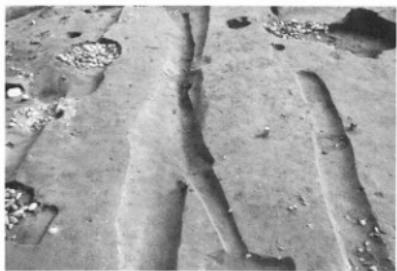
6. SD 10 大型礫検出状況（西から）



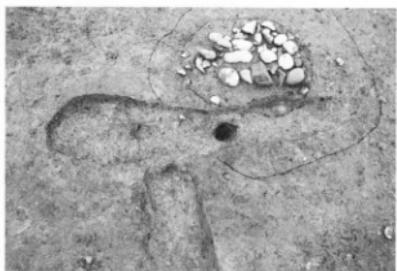
7. SD 12 掘り込み状況（北西から）



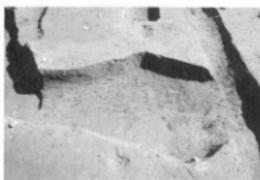
8. SD 16 磚検出状況（南から）



1. SD18掘り込み状況（西から）



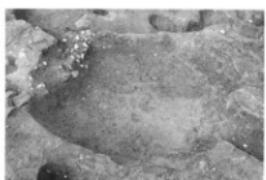
2. SD21掘り込み状況（西から）



3. SK 9 掘り込み状況（西から）



4. SK18掘り込み状況（南から）



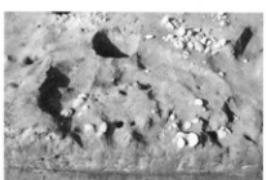
5. SK19掘り込み状況（南から）



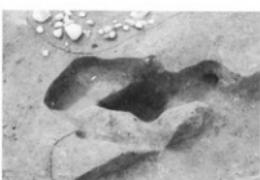
6. SK12掘り込み状況（南から）



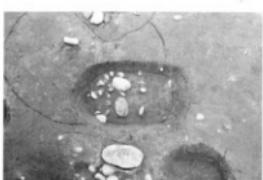
7. SK22掘り込み状況（南から）



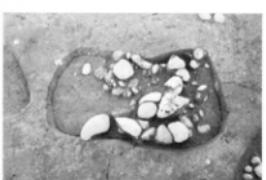
8. SK23掘り込み状況（南から）



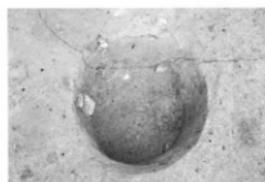
9. SK25・26掘り込み状況（北から）



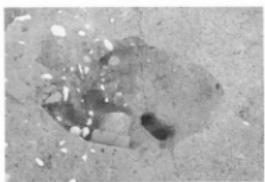
10. SK27掘り込み状況（南から）



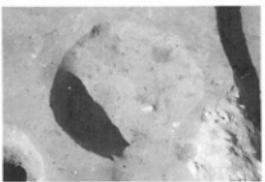
11. SK28掘り込み状況（南から）



1. SK31掘り込み状況（南から）



2. SK35掘り込み状況（南東から）



3. SK38掘り込み状況（東から）



4. SK42掘り込み状況（東から）



5. SK51礫検出状況（東から）



6. SK51掘り込み状況（東から）



7. SK53・54掘り込み状況（東から）



8. SK58掘り込み状況（東から）



9. SK62・63掘り込み状況（東から）



10. SK64掘り込み状況（東から）



11. SK69掘り込み状況（東から）



12. SK70掘り込み状況（南から）



13. SK71掘り込み状況（東から）



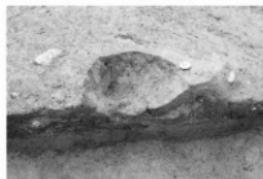
14. SK72掘り込み状況（西から）



15. SK75掘り込み状況（南から）



1. SK78掘り込み状況（西から）



2. SK83掘り込み状況（北から）



3. SK91掘り込み状況（東から）



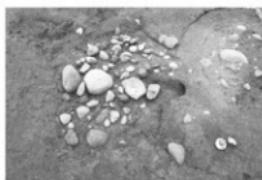
4. 18号集石造構検出状況
(西から)



5. 18号集石造構掘り込み状況
(東から)



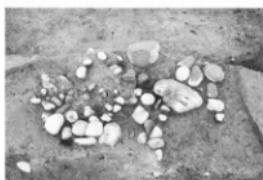
6. 20号集石造構掘り込み状況
(南から)



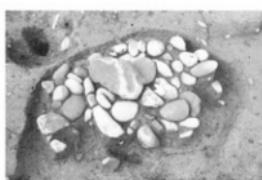
7. 21号集石造構検出状況
(南西から)



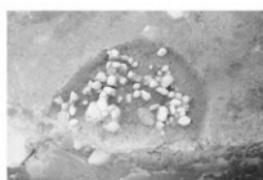
8. 23号集石造構検出状況
(南から)



9. 24号集石造構掘り込み状況
(東から)



10. 25号集石造構掘り込み状況
(東から)



11. 26号集石造構掘り込み状況
(東から)



12. 27号集石造構掘り込み状況
(東から)



13. 28号集石造構検出状況
(東から)



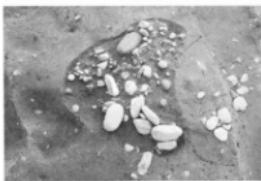
14. 29号集石造構検出状況
(東から)



15. 31号集石造構掘り込み状況
(南から)



1. 33号集石造構掘り込み状況
(東から)



2. 34号集石造構掘り込み状況
(東から)



3. 37号集石造構検出状況
(西から)



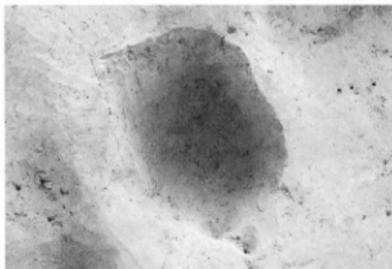
4. SD26掘り込み状況 (南西から)



5. SD26断面状況 (南東から)



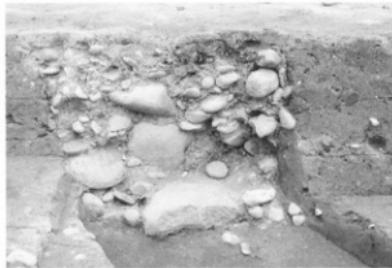
6. SK206遺物出土状況 (北から)



7. SK206掘り込み状況 (北から)



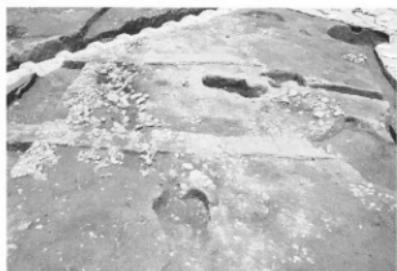
8. 六角塔基礎 (北東から)



9. 六角塔基礎断面状況 (西から)



1. 煉瓦積暗渠断面状況（南東から）



2. 通路状造構（南東から）



3. 作業風景（北から）



4. 不織布敷き込み状況（北東から）



5. 川砂による埋め戻し状況（北東から）



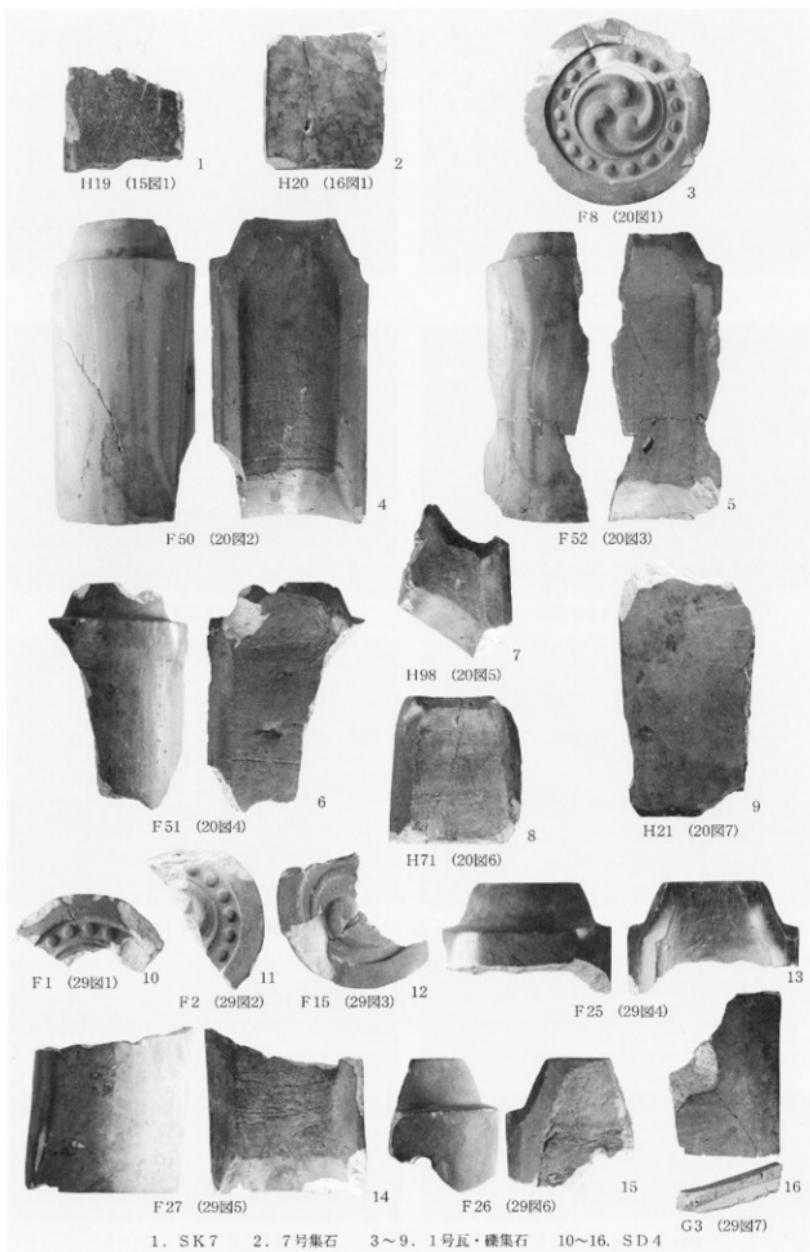
6. 埋め戻し完了状況（南西から）



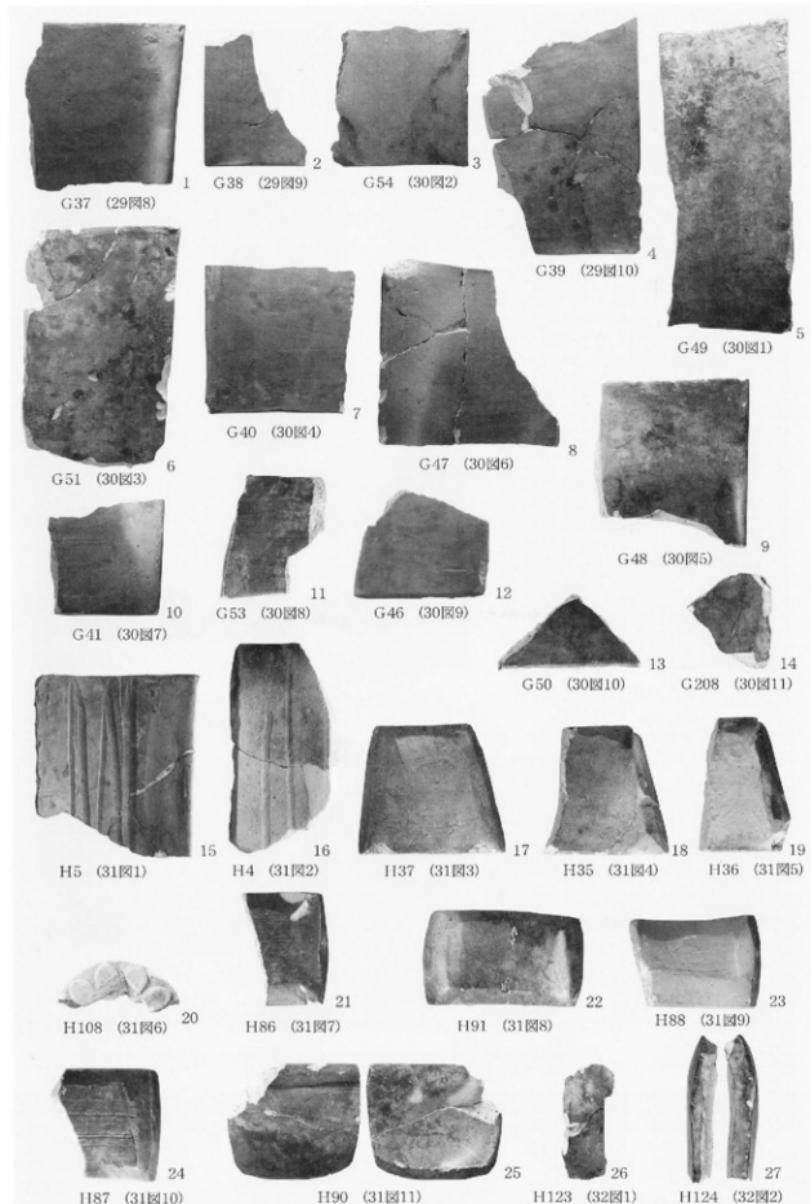
7. 鉄板敷設状況（北西から）



8. 基礎鉄筋組み状況（南東から）



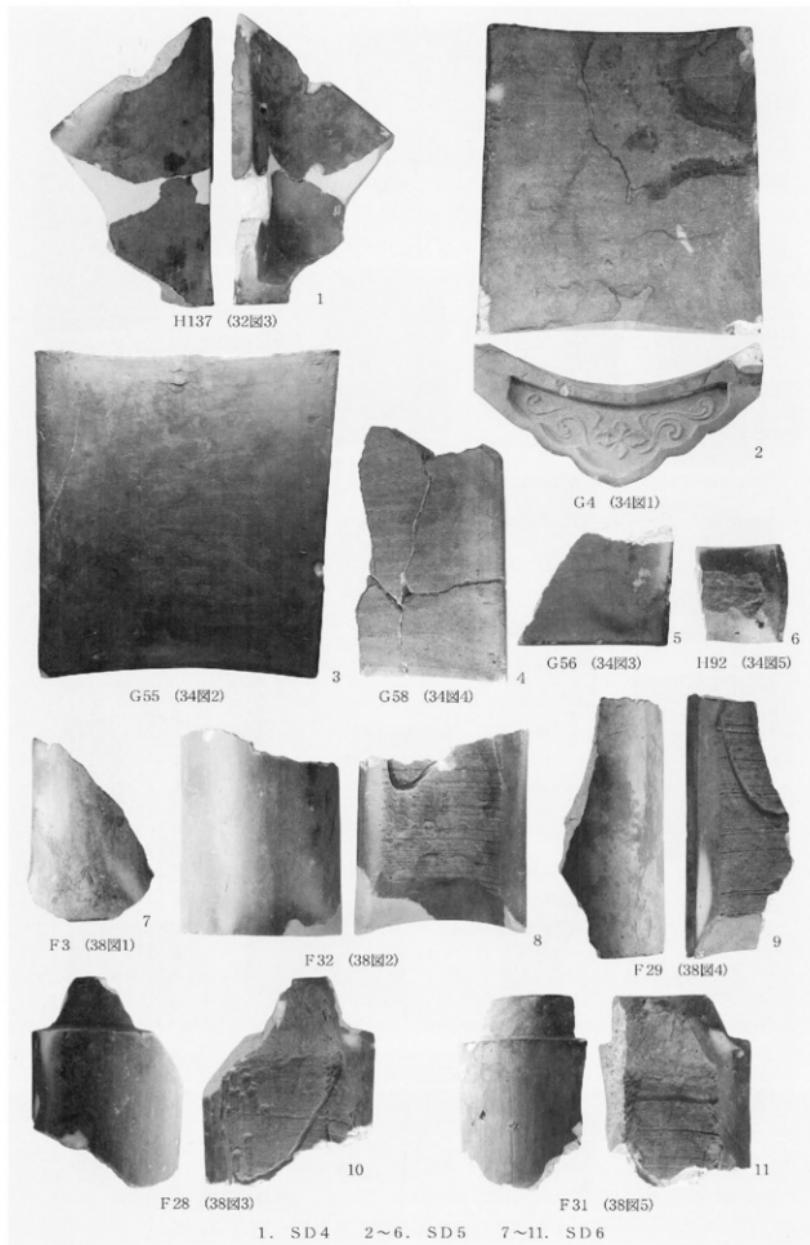
写真図版40 瓦 (1)



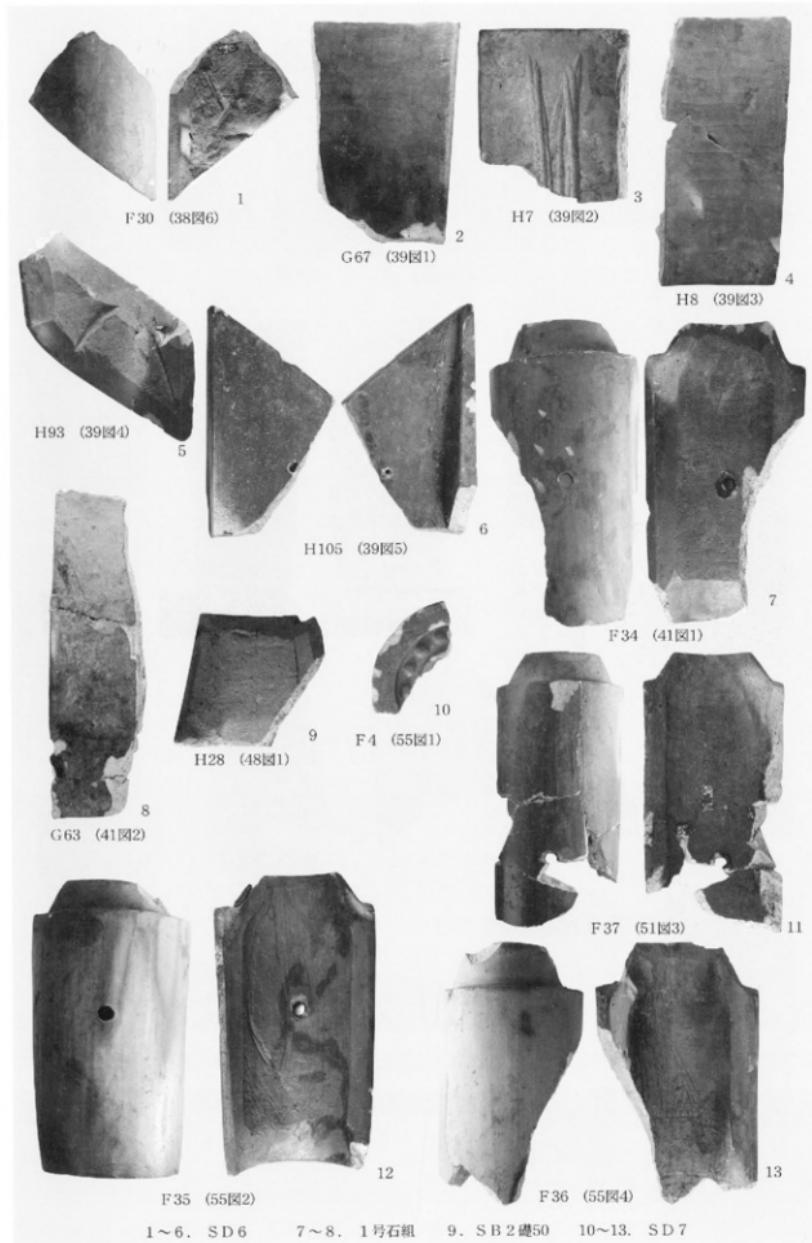
1~27. SD 4

S=約1/5

写真図版41 瓦 (2)

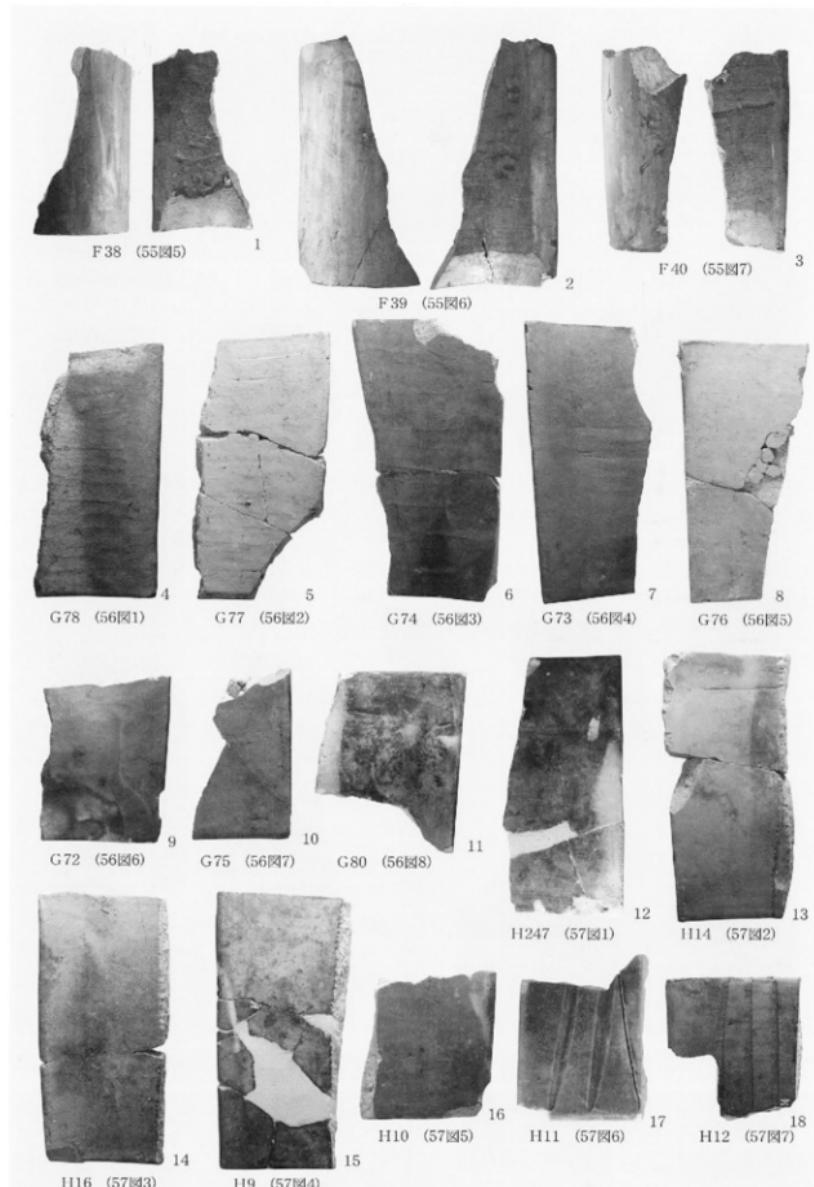


写真図版42 瓦 (3)



S=約1/5

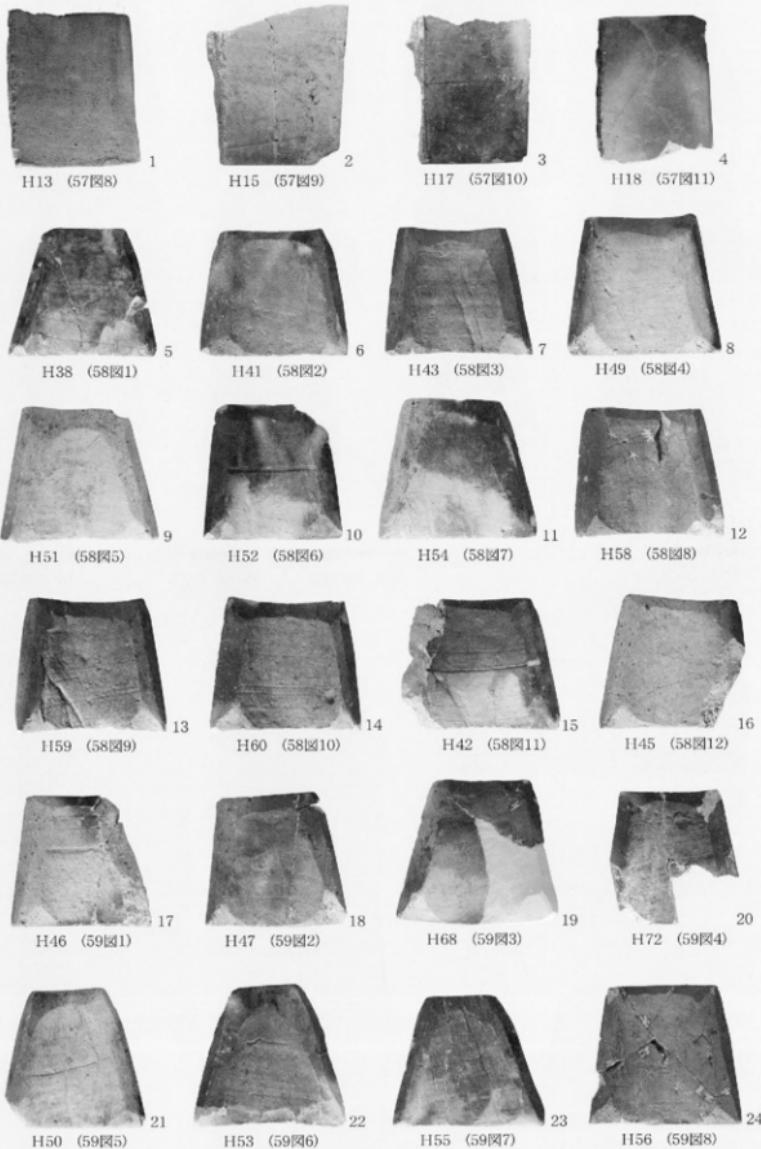
写真図版43 瓦 (4)



1~18. SD 7

S=約1/5

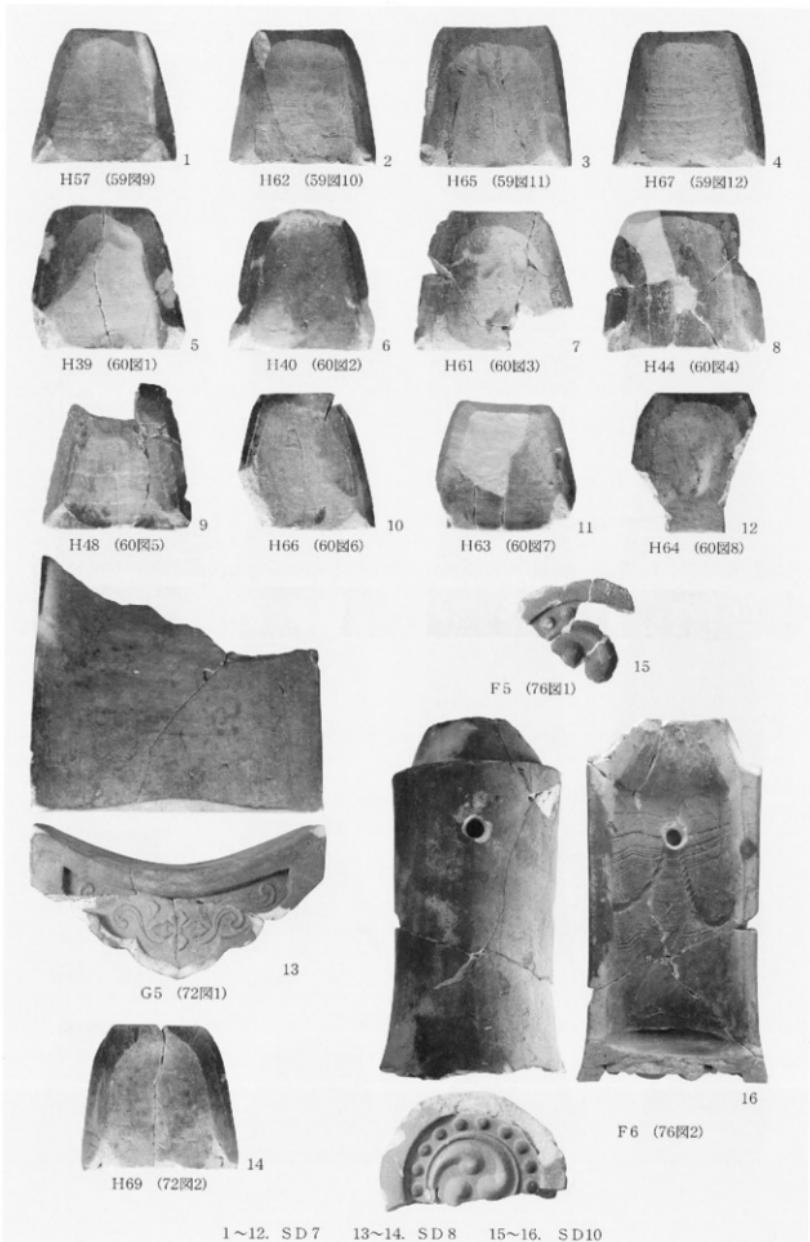
写真図版44 瓦 (5)



1~24. SD 7

S-約1/5

写真図版45 瓦 (6)



S=約1/5

写真図版46 瓦 (7)



F 42 (76図3)



1



F 41 (76図4)



2



F 43 (76図5)



3



F 46 (77図1)



4



F 48 (77図2)



5



F 44 (77図3)

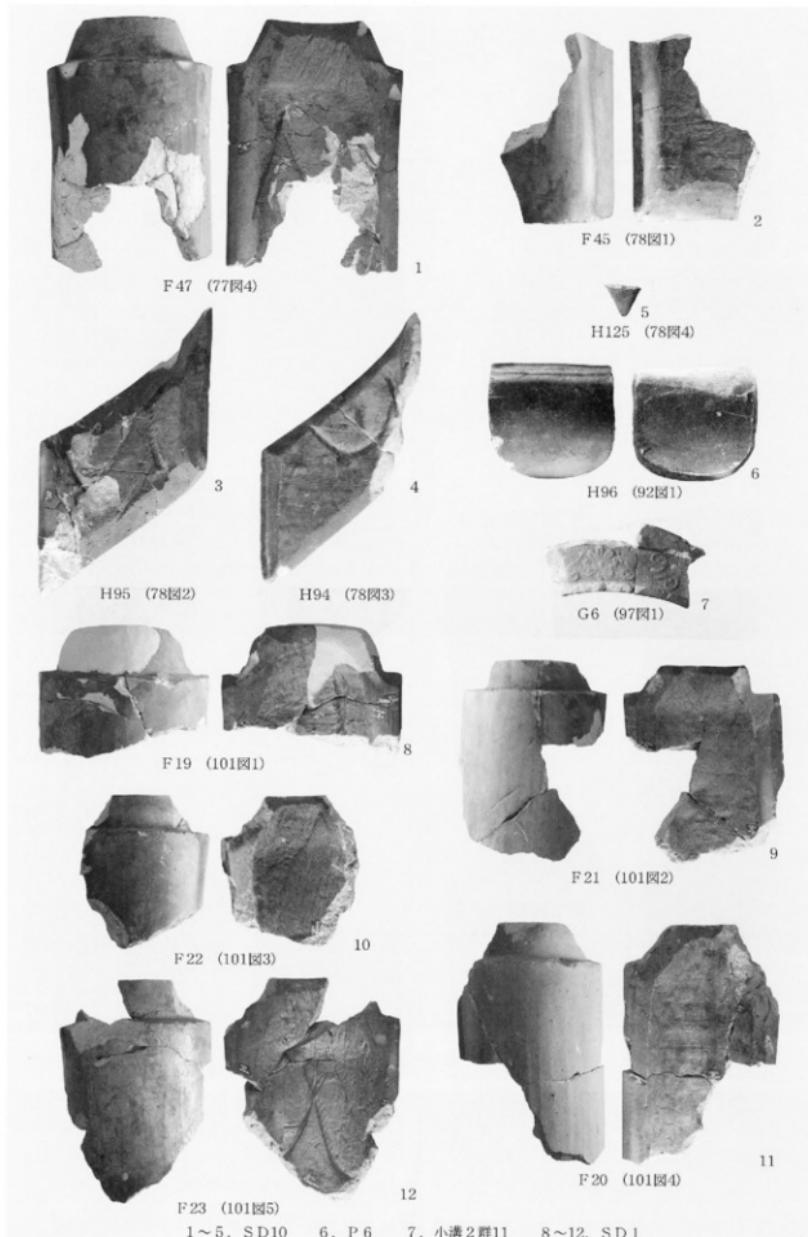
6

1 ~ 6 . SD10

S=約 1 / 5

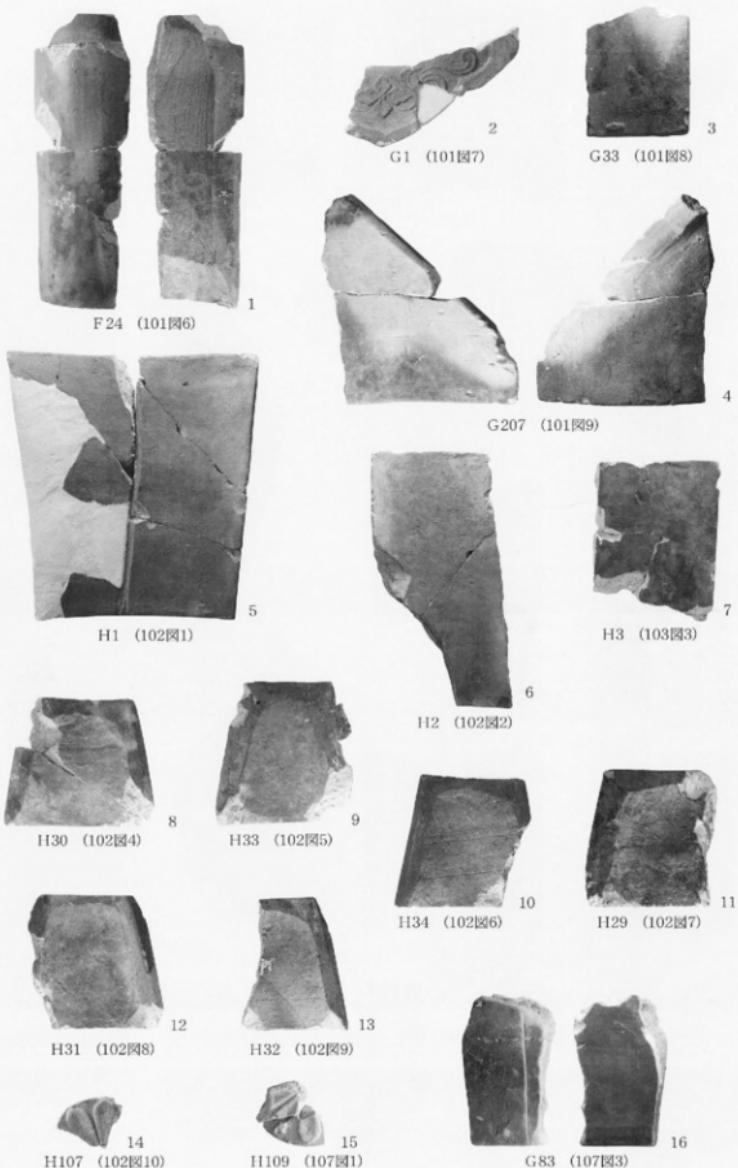
写真図版47 瓦 (8)

309



写真図版48 瓦 (9)

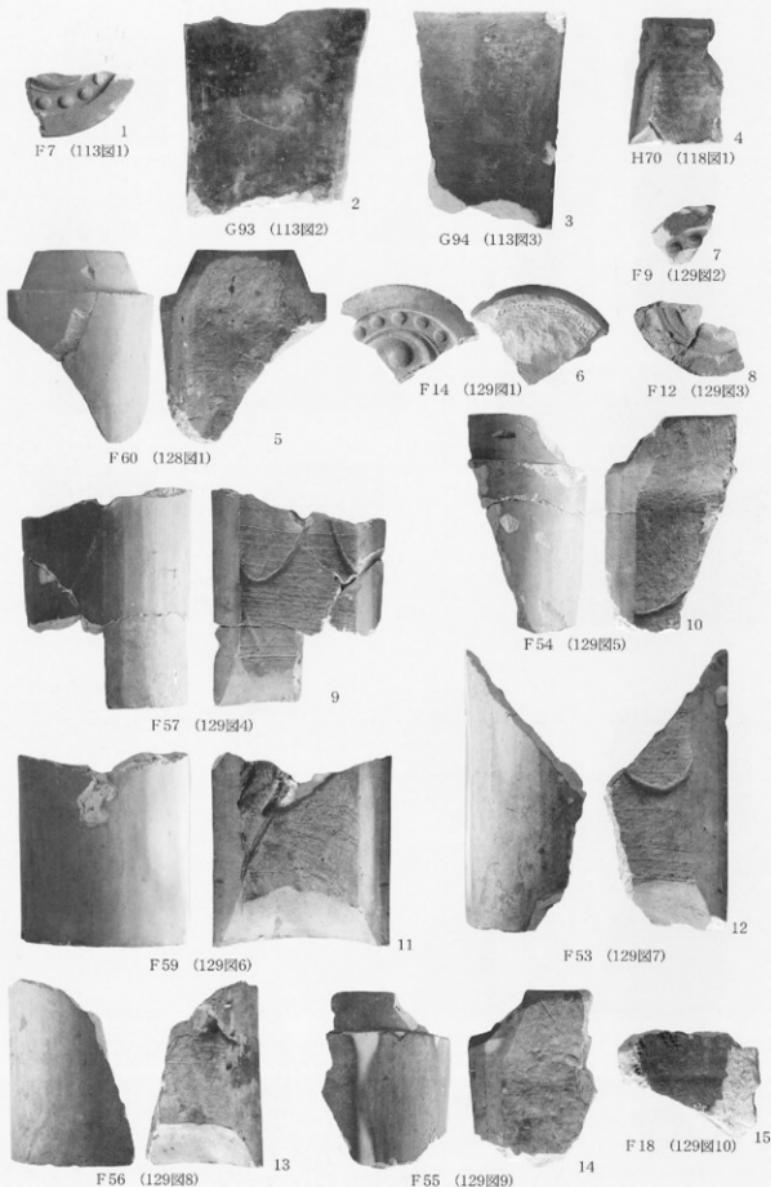
S=約1/5



1~14. SD 1 15. SD 16 16. SD 18

S-約1/5

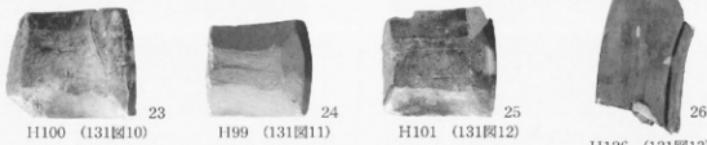
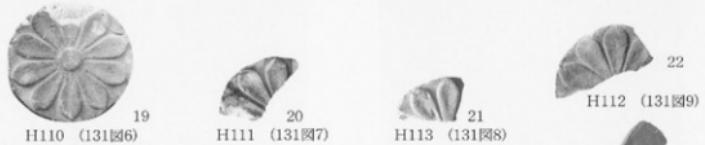
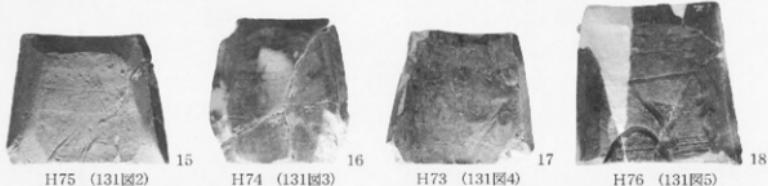
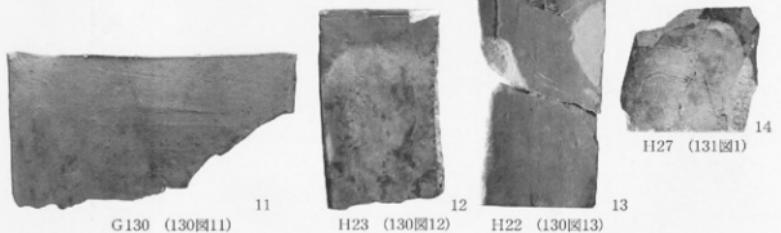
写真図版49 瓦 (10)



1. SK42 2~3. SK68 4. 41号集石 5. I・II層 6~15. III層

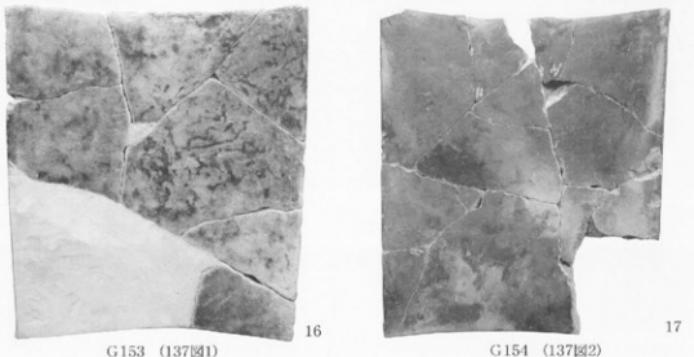
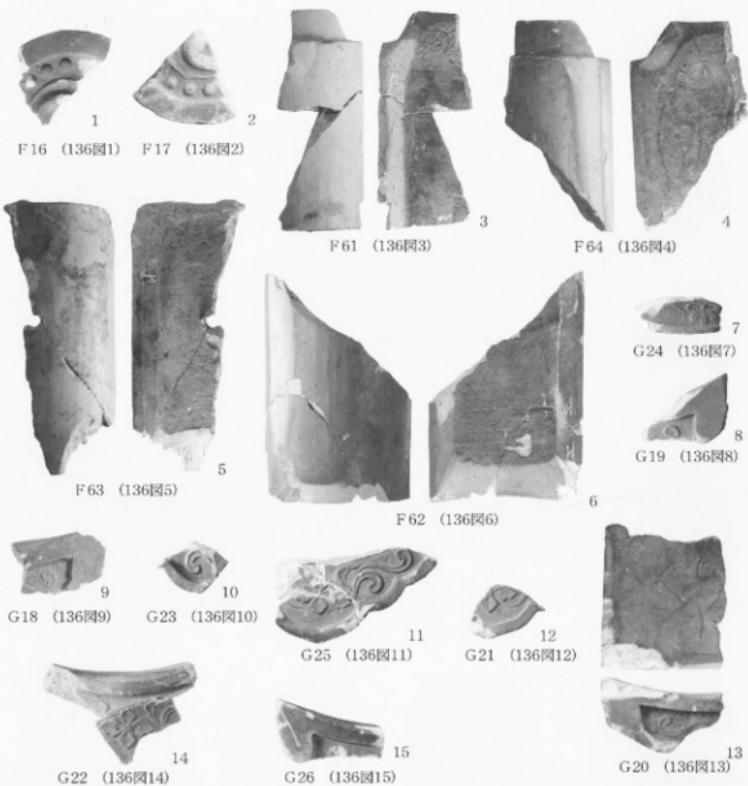
S=約1/5

写真図版50 瓦 (11)



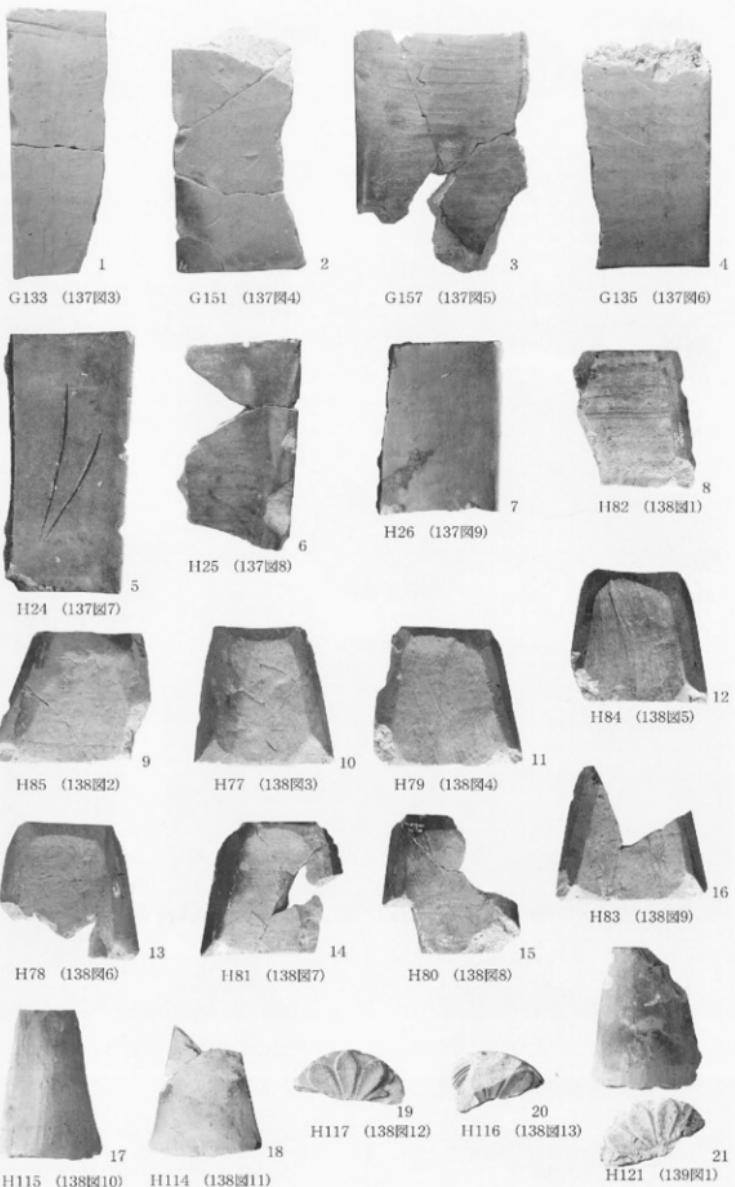
1~26. III層

S=約1/5



1~17. 摂乱

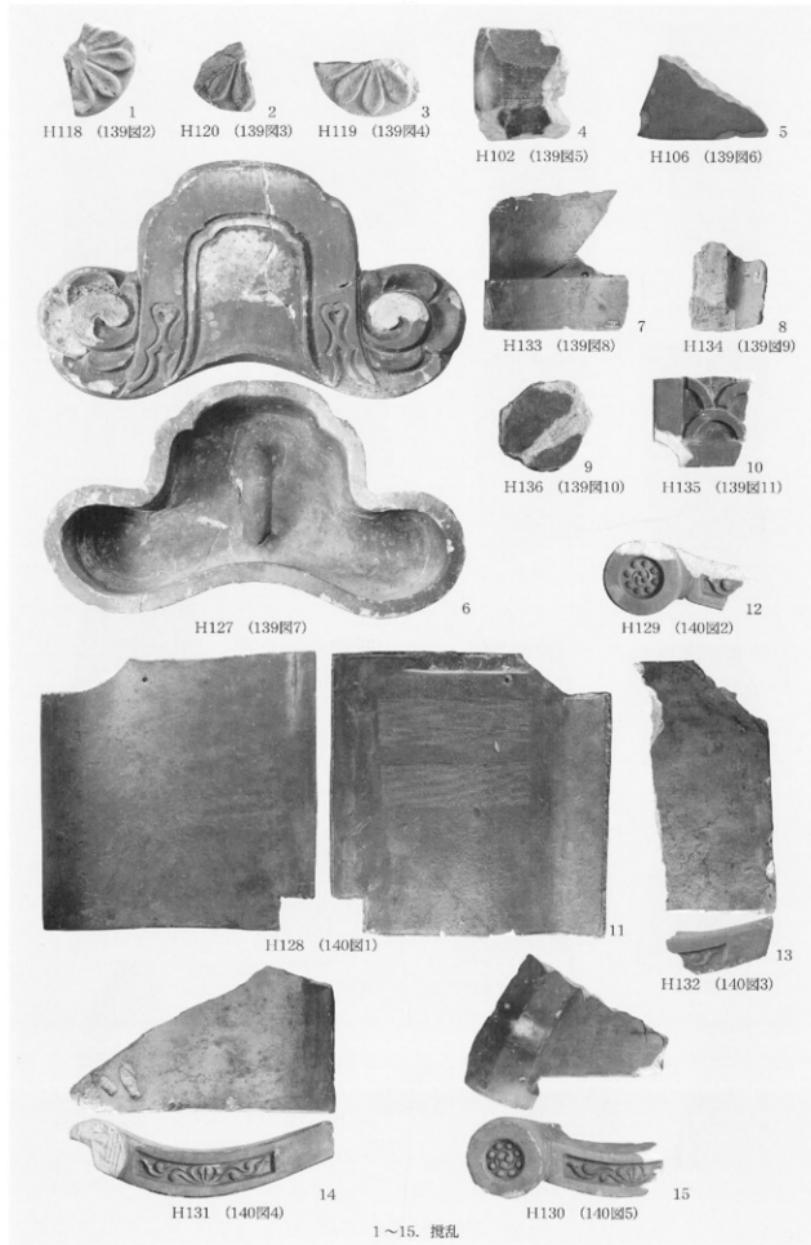
S=約1/5



1 ~ 21. 摂乱

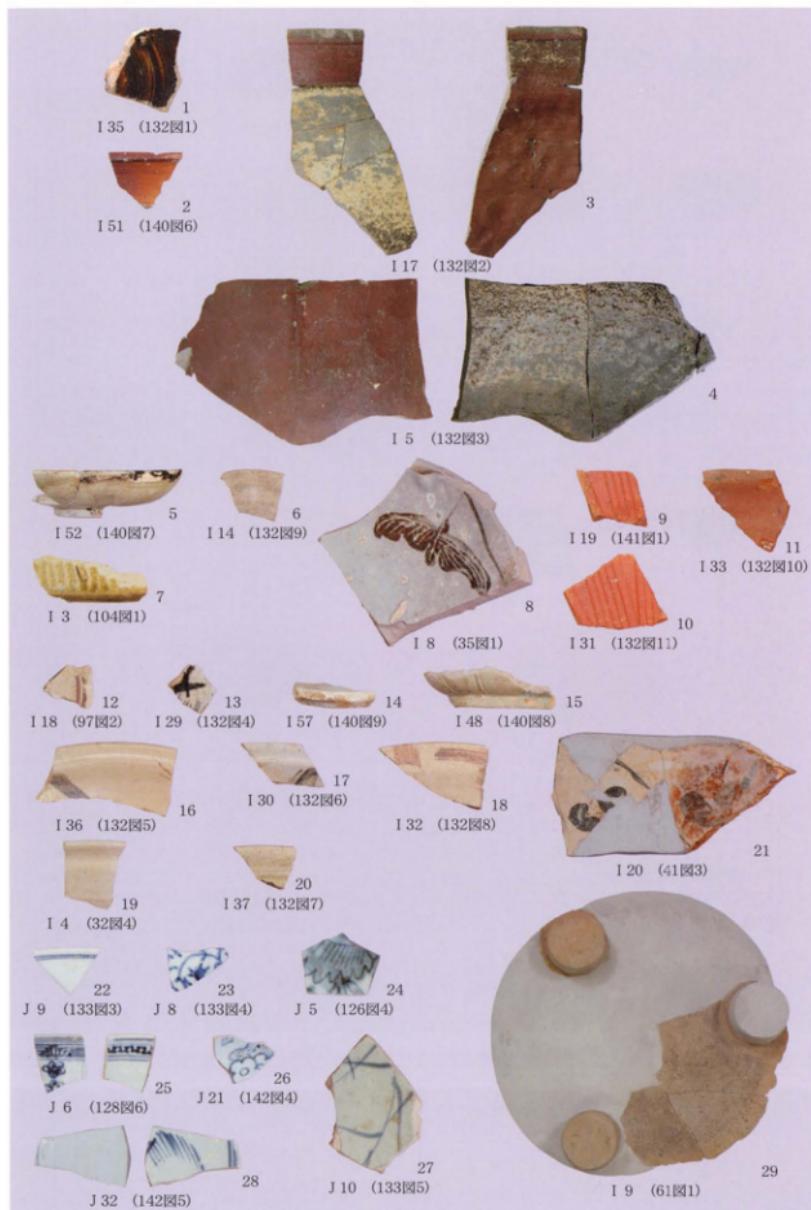
S=約1/5

写真図版53 瓦 (14)



写真図版54 瓦 (15)

S=約1/5



1・3・4・6・10・11・13・16～18・20・22・23・27. III層 2・5・9・14・15・21・26・28. 撥乱
7. SD 2 8. SD 5 12. 小溝 2群 14. 19. SD 4 24. 通路状遺構 25. I・II層 29. SD 7

S=3・4・29: 約1/5、1・2、5~28: 約1/3

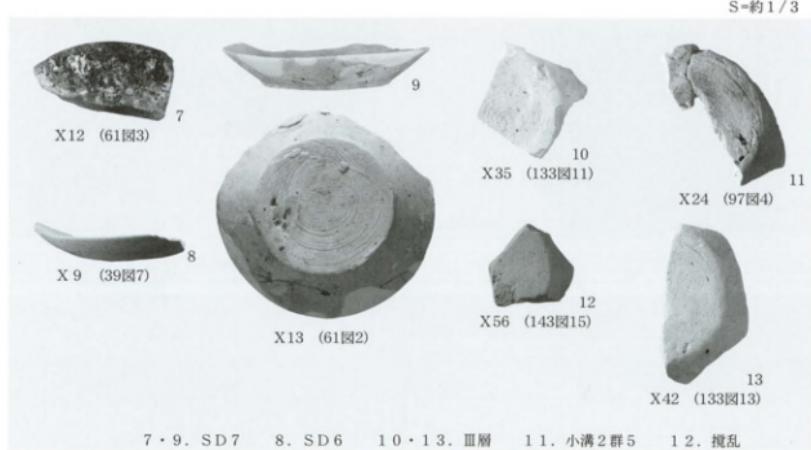
写真図版55 陶器・磁器 (17世紀前半)



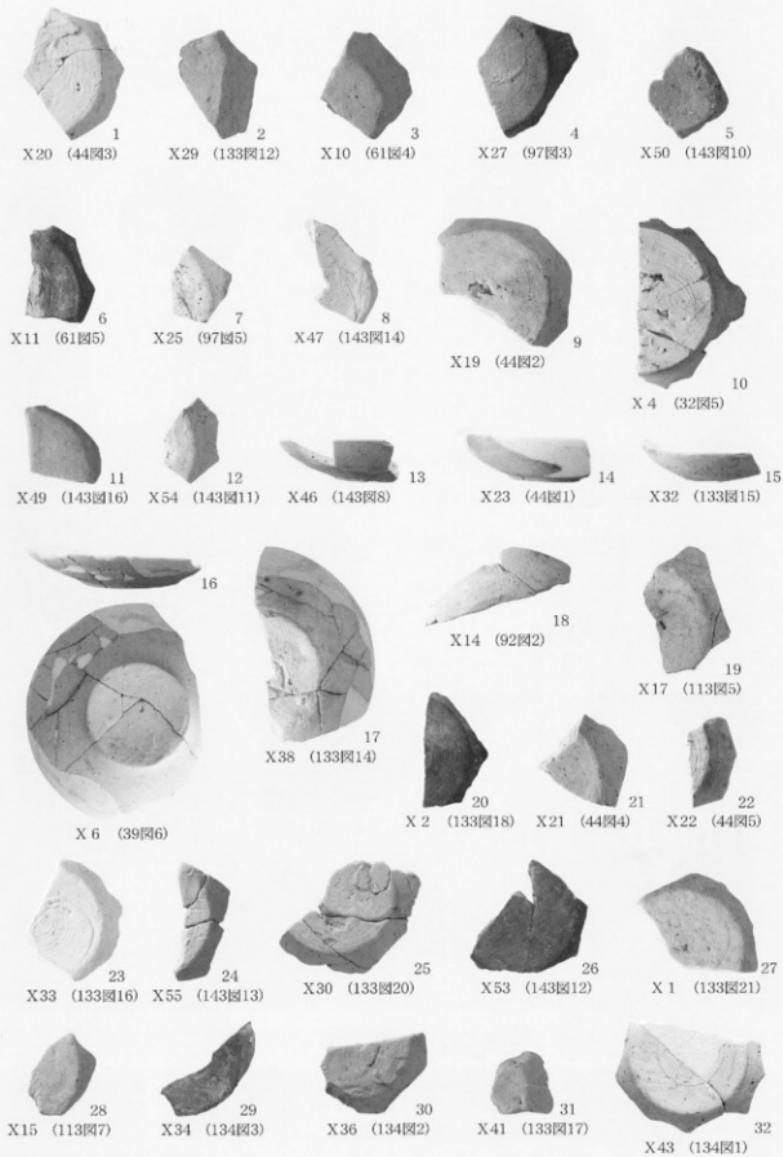
写真図版56 陶器・磁器・瓦質土器（17世紀後半・18世紀）



写真図版57 陶器・磁器（幕末・明治～昭和）

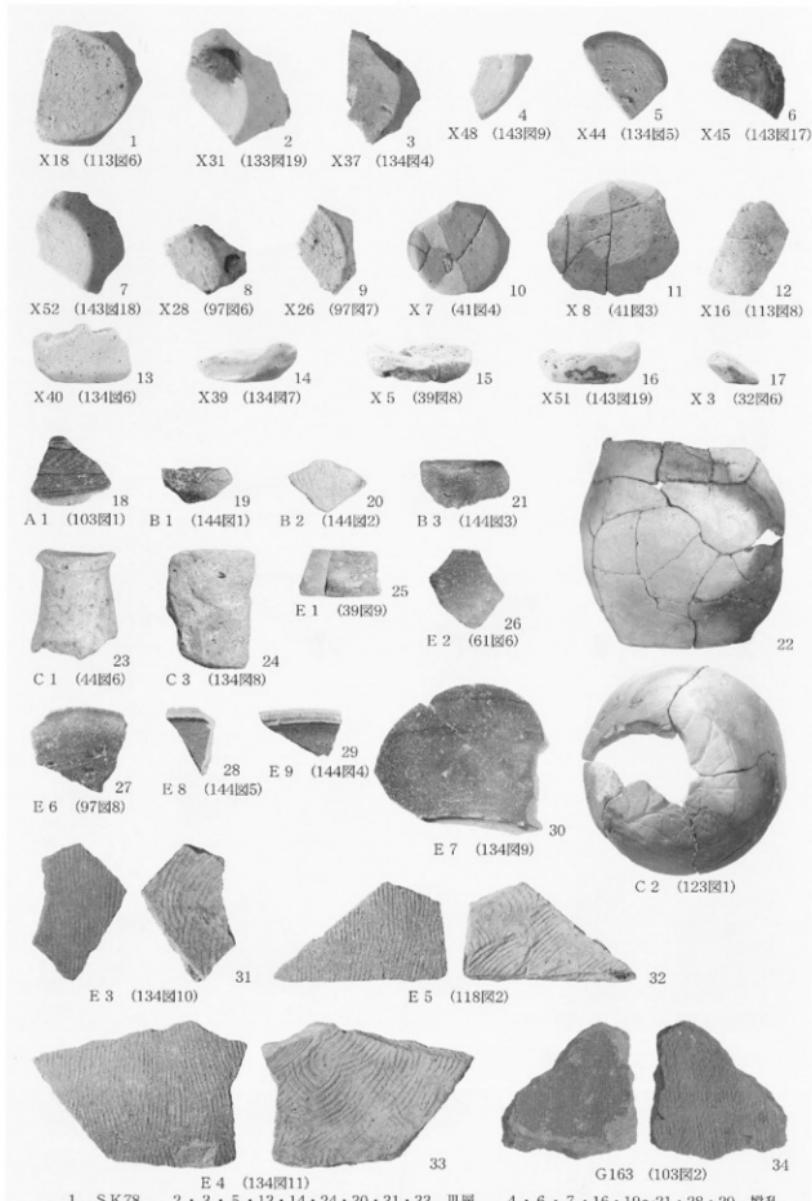


写真図版58 陶器・磁器（明治～昭和）、土師質土器



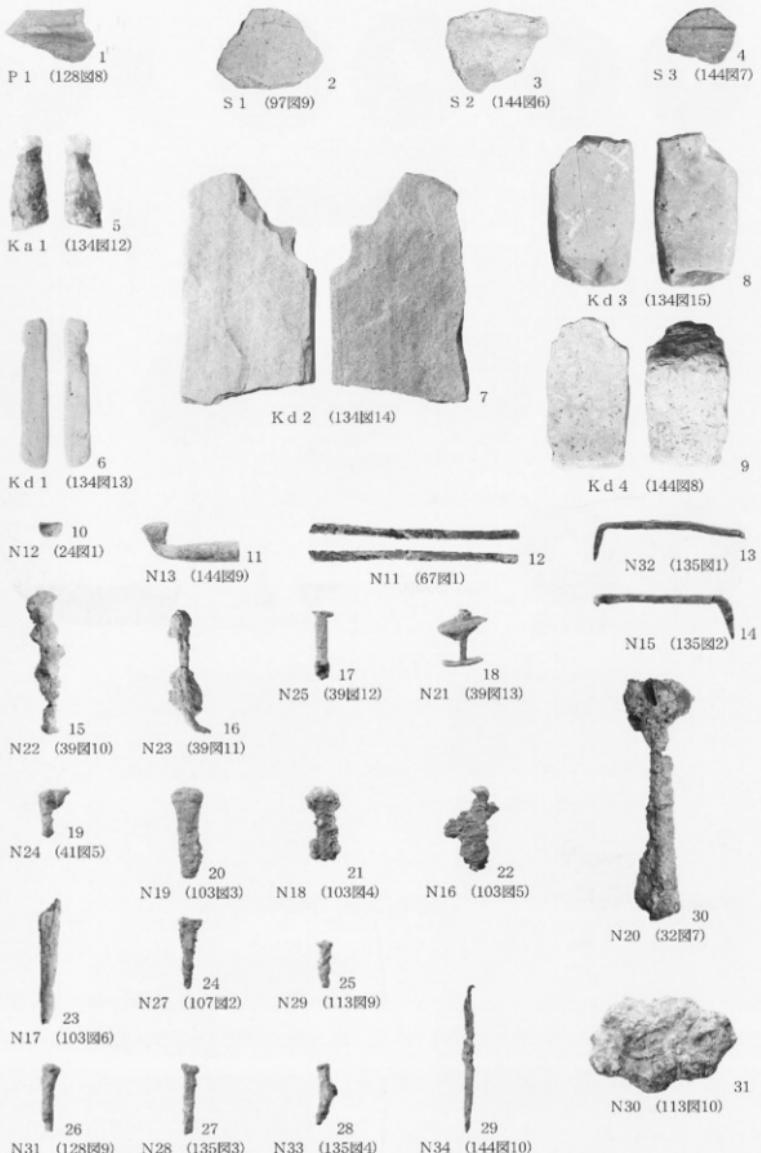
1・9. SK204 2・15・17・20・23・25・27・29～32. Ⅲ層
 5・8・11～13・24・26. 摂乱 7. 小溝2群2 10. SD4 14・21・22. SK205
 16. SD6 18. P6 19. SK75 28. SK68

S=約1/3



1. SK78 2・3・5・13・14・24・30・31・33. Ⅲ層 4・6・7・16・19～21・28・29. 撥乱
8. 小溝2群2 9. 小溝2群16 10・11. 1号石組 12. SK68 15・25. SD6 17. SD4
18・34. SD1 22. SK206 23. SK205 26. SD7 27. 小溝2群3 32. 18号集石

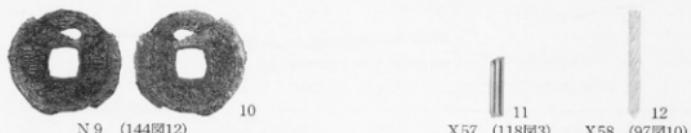
S=約1/3



1・26. I・II層
10. SB 1 磚5 2. 小溝2群13 3・4・9・11・29. 塗乱
12. SB 3 磚22 15~18. SD 6 19. 1号石組
24. SD 16 25・31. SK 20 20~23. SD 1
30. SD 4

S=1~4、6~31:約1/3、5:約1/2

写真図版61 土製品・埴輪・石器・金属製品



1. SD 4 2~7・12. 小溝2群3 8. Ⅲ層 9・10・16. 摘乱 11. 22号集石 13~15. 暗渠
S=13~16: 約1/5、11・12: 約1/3、1~10: 約1/1

写真図版62 金属製品・ガラス製品・煉瓦

報告書抄録

ふりがな	わかばやしじょうあと
書名	若林城跡
副書名	第5次発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第323集
編著者名	佐藤淳・佐藤好司・後藤太一・高梨雅幸
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671 仙台市青葉区国分町三丁目7番1号 TEL.022-214-8893~8894
発行年月日	2008年3月

所取遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	°			
若林城跡	宮城県仙台市若林区古城	04100	01030	38° 14'	140° 54' ~ 13" 04"	20050523 ~ 20060131	1990m ²	宮城刑務所改築

所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
若林城跡	城館跡 烟跡 集落跡 古墳	古墳～近世	礎石建物跡 石敷造構 烟跡 水路跡	瓦 陶磁器 土師質上器	城の表御殿となる礎石 建物群や石敷造構・水路跡 などを発見した。

仙台市文化財調査報告書第323集

若林城跡

-第5次発掘調査報告書-

2008年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町二丁目7番1号

文化課 TEL022(31)498894

印刷 株式会社玉川印刷

仙台市青葉区中央区清川二丁目18番11号

TEL022(53)11038

